

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第86集

おお わき じょう
大脇城遺跡

1999

愛知県埋蔵文化財センター

序

旧尾張国と三河国の国境を北から南へ流れる境川の右岸、豊明市栄町地内に所在する大脇城遺跡は、城館跡を中心とした戦国時代から江戸時代にかけての遺跡です。遺跡の中心となる大脇城跡は、地元では「梶川五左衛門屋敷跡」などと伝えられ、城主とされる梶川五左衛門（秀盛）は、水野信元・佐久間信盛・織田信雄・池田輝政といった戦国武将に仕えた人物です。かの「忠臣蔵」で著名な梶川与惣兵衛頼照はこの梶川一族の末裔にあたります。

発掘調査は、国道23号線（名四国道）栄交差点立体化事業および第二東海自動車道建設にともなう事前調査として、建設省ならびに日本道路公団から愛知県教育委員会をとおして委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）が平成8年度から9年度にかけておよそ十四ヶ月を費やして実施しました。

調査の結果、景観が変わり城跡の存在すら人々の記憶から消え去ろうとしていた大脇城跡が比較的良好な状態で検出され、大脇城の具体的様相・変遷が明らかになるとともに、天正四年銘の「護摩札」をはじめとする各種の遺物が出土するなど、当時の人々の生活・文化に関する貴重な知見を提供することとなりました。

ここにその調査成果をまとめ、報告書を作成しました。本書ならびに調査資料が、県民の皆様をはじめ、学術研究の場で広く活用されることを期待するとともに、発掘調査から報告書作成まで様々なご協力をいただきました関係機関・各位に対し、深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成11年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 久留宮 泰啓

例言

1. 本書は、愛知県豊明市栄町梶田・元屋敷地内に所在する大脇城遺跡の発掘調査報告書である。大脇城遺跡の『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』（愛知県教育委員会 1994年3月）における遺跡番号は、「12-068」である。
2. 発掘調査は、建設省名四国道工事事務所ならびに日本道路公団が建設を進めている国道23号線（名四国道）栄交差点立体化事業および第二東海自動車道建設にともなう事前調査として、建設省ならびに日本道路公団から愛知県教育委員会をとおして委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、平成7年7月末から平成8年8月までで、調査面積は、10,000m²である。
4. 現地調査は、下記の者が担当した。
平成8年度 坂倉澄夫（調査課主査 現高浜市立高浜中学校教諭）、藤井孝之、中野良法、北村和宏、秋田幸純（現愛知県立半田高等学校教諭） 以上 調査課調査研究員
平成9年度 藤井孝之（調査課主査 現一宮東部小学校教頭）、中野良法
5. 報告書の作成は、平成10年度に、北村が担当し、自然科学分析について鬼頭 剛（調査課調査研究員）の助力を得た。
6. 出土遺物の整理、報告書の作成に関わる作業において以下の方々の協力を得た。
富田智恵 花田良一 水野多栄 尾崎和美 川名詳子 妹尾美佐穂 近藤文子
小嶋そのみ 浜島奈保美 長谷川ゆかり 伊藤友子 伊藤 恵 阿辺山孔子 河合涼子
大西由香里 草野しず子
なお出土遺物の写真撮影には深川 進氏の手を煩わした。
7. 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - ・第1章 第2章 第3章 第4章 第5章 第7章 第8章 北村和宏
 - ・第6章第1節 鬼頭剛 堀木真美子 尾崎和美
 - ・第6章第2節 森勇一（愛知県立明和高等学校）
 - ・第6章第3節 新山雅広（パレオ・ラボ）
8. 本書で使用した遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
9. 今回の調査で使用した方位および座標の数値は、建設省告示に定められた国土座標（平面直角座標）第Ⅶ系に基づくものであり、海拔標高は、T. P.（東京湾平均海面高度）による。なお名古屋港工事事務局基本水準面（N. P.）は、T. P. -1.4119mである。
10. 本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
11. 発掘調査ならびに報告書の作成に際しては、次の関係各機関・各位の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課 愛知県埋蔵文化財調査センター 建設省名四国道工事事務所
日本道路公団 豊明市教育委員会 豊明市史編さん委員会 （財）瀬戸市埋蔵文化財センター
愛甲昇寛 青木修 井関弘太郎 伊藤秋男 海津正倫 江崎武 遠藤才文 岡本直久
尾野善裕 金子健一 北野信彦 柴垣勇夫 千田嘉博 橋敏夫 檜崎彰一 福岡猛志
藤澤良祐 古田功治 丸山竜平 渡辺誠（順不同・敬称略）
12. 出土遺物については、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管し、本調査に関する記録は、すべて愛知県埋蔵文化財センターで保管している。当センターにおける大脇城遺跡の略号は「ⅡTO」である。遺物登録番号については234頁に示した。
13. 本書の編集は北村和宏が行った。

目次

序

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 大脇城遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
第2節 遺跡をとりまく歴史的環境	3
第3節 大脇城の沿革	6
第3章 発掘調査の経過	17
第1節 調査の方法等	17
第2節 北調査区の調査経過	17
第3節 南調査区の調査経過	20
第4章 層序と遺構	23
第1節 層序	23
第2節 検出した遺構	23
1 北調査区の遺構	25
2 南調査区の遺構	38
第5章 出土遺物	65
第1節 土器・陶磁器類	65
第2節 木簡	105
第3節 瓦類	108
第4節 木製品	113
第5節 金属製品	160
第6節 銭貨	164
第7節 石製品	165
第8節 鍛冶・鑄造関連遺物	178
第9節 土製品	181
第10節 漆製品	184
第11節 その他の遺物	187
第6章 科学分析	189
第1節 微化石分析による大脇城の古環境解析	189
第2節 愛知県大脇城跡から産出した昆虫群集と古環境	203
第3節 大脇城跡から出土した大型植物化石	209
第7章 考察	215
第1節 遺構の時期区分と変遷	215
第2節 大脇城跡（「梶川五左衛門屋敷」）について	223
第3節 出土遺物に関する考察	226
1 97A区SE01・97A区SE02出土の土師器煮沸具の検討	226
2 「へら記号」を有する羽釜について	228
3 尾張地方におけるハウロクの出現に関する覚書	229
4 瓦の使用	230
5 石塔と石臼の石材の相違について	230

6 西三河式宝篋印塔の造塔年代について	231
第8章 結語	233
図版	235
写真図版	269

挿図目次

第1図 大脇城遺跡位置図	2	第28図 土師器器種分類図および羽釜分類図	67
第2図 大脇城遺跡周辺の旧地形図 (名四国道建設前)	4	第29図 常滑窯産陶器分類図	68
第3図 大脇城遺跡周辺の主要遺跡分布図	5	第30図 木簡実測図	107
第4図 土地整理前の地割と調査区位置図	9	第31図 瓦類実測図	111
第5図 調査区位置図	18	第32図 木製品実測図 (1)	133
第6図 グリッド配置および遺構全体図	22	第33図 木製品実測図 (2)	134
第7図 96A・B・C区SD01断面図	26	第34図 木製品実測図 (3)	135
第8図 96C・D区SD06断面図	28	第35図 木製品実測図 (4)	136
第9図 北調査区 溝・土坑断面図	30	第36図 木製品実測図 (5)	137
第10図 96D区SE01実測図	33	第37図 木製品実測図 (6)	138
第11図 96A区SB01実測図	35	第38図 木製品実測図 (7)	139
第12図 96A区SX01・同SX02 平面図	36	第39図 木製品実測図 (8)	140
第13図 96A区SX01・同SX02断面図	37	第40図 木製品実測図 (9)	141
第14図 97B区SD01断面図	40・41	第41図 木製品実測図 (10)	142
第15図 97B区SD01・同SD07 断面図	42	第42図 木製品実測図 (11)	143
第16図 南調査区 溝断面図	44・45	第43図 木製品実測図 (12)	144
第17図 96E区SE01実測図	50	第44図 木製品実測図 (13)	145
第18図 97B区SE07実測図	51	第45図 木製品実測図 (14)	146
第19図 97B区SE03・同SE05・同SE08 ・96E区SE08実測図	52	第46図 木製品実測図 (15)	147
第20図 96E区SE05・同SE03実測図	53	第47図 木製品実測図 (16)	148
第21図 97B区SE01実測図	55	第48図 木製品実測図 (17)	149
第22図 97A区SE01・同SE02・同SE04 97B区SE07実測図	56	第49図 木製品実測図 (18)	150
第23図 96E区SE02・97A区SE03・同SE05 実測図	57	第50図 木製品実測図 (19)	151
第24図 96E区SE04・同SE07・97B区SE04 ・同SE06実測図	58	第51図 木製品実測図 (20)	152
第25図 南調査区 土坑断面図 (1)	62	第52図 木製品実測図 (21)	153
第26図 南調査区 土坑断面図 (2)	63	第53図 木製品実測図 (22)	154
第27図 内耳鍋分類図	66	第54図 木製品実測図 (23)	155
		第55図 木製品実測図 (24)	156
		第56図 木製品実測図 (25)	157
		第57図 木製品実測図 (26)	158
		第58図 木製品実測図 (27)	159

第59図	木製品実測図 (28)	160	第72図	石鏃実測図	187
第60図	金属製品実測図	163	第73図	試料採取地点柱状図	190
第61図	煙管実測図	164	第74図	花粉分析結果 (その1)	196
第62図	石製品実測図 (茶臼・石臼)	166	第75図	花粉分析結果 (その2)	197
第63図	石製品実測図 (石臼)	167	第76図	珪藻分析結果 (その1)	198
第64図	西三河式宝篋印塔		第77図	珪藻分析結果 (その2)	199
	笠部の分類図	169	第78図	珪藻写真 (その1)	200
第65図	石製品実測図 (石塔)	170	第79図	珪藻写真 (その2)	201
第66図	石製品実測図 (砥石1)	172	第80図	花粉写真	202
第67図	石製品実測図 (砥石2)	173	第81図	昆虫化石の顕微鏡写真	208
第68図	石製品実測図 (砥石3)	174	第82図	大型植物遺体写真	214
第68図	石製品実測図 (硯)	177	第83図	第I期の主な遺構の配置	219
第70図	鍛冶・鑄造関連遺物実測図	179	第84図	第II期の主な遺構の配置	221
第71図	土製品実測図	182	第85図	第III期の主な遺構の配置	223

表目次

第1表	検出遺構数	24	第15表	漆製品一覧表	185~187
第2表	瓦類一覧表	112	第16表	石鏃一覧表	188
第3表	柱根一覧表	132	第17表	試料および分析者一覧	189
第4表	礎板一覧表	132	第18表	昆虫リスト	207
第5表	木製品の樹種	160	第19表	主な大型植物化石の出土状況	210
第6表	出土煙管一覧表	162	第20表	各試料から出土した 大型植物化石一覧	213
第7表	出土銭貨一覧表	164	第21表	瀬戸・美濃窯産陶器の出土状況等 からみた遺構の消長	216~218
第8表	種類別石塔一覧表	171	第22表	97A区SE01・同SE02出土品 (炭化物・土器層) 一覧表	227
第9表	出土地点別石塔一覧表	171	第23表	尾張平野における宝篋印塔の 年代別在銘資料	232
第10表	石材別砥石一覧表	177	第24表	遺物登録番号表	234
第11表	緑色凝灰岩製砥石一覧表	177			
第12表	鍛冶・鑄造関連遺物一覧表	180			
第13表	棒状土製品一覧表	183			
第14表	漆製品 調査区別出土点数一覧表	184			

図版目次

図版1	北調査区全域遺構実測図	図版5	北調査区遺構実測図 (2)
図版2	南調査区全域遺構実測図	図版6	北調査区遺構実測図 (3)
図版3	北調査区土層図	図版7	北調査区遺構実測図 (4)
図版4	北調査区遺構実測図 (1)	図版8	北調査区遺構実測図 (5)

- 図版9 南調査区土層図
 図版10 南調査区遺構実測図 (1)
 図版11 南調査区遺構実測図 (2)
 図版12 南調査区遺構実測図 (3)
 図版13 南調査区遺構実測図 (4)
 図版14 南調査区遺構実測図 (5)
 図版15 96A・B・C区SD01出土品 (1)
 図版16 96A・B・C区SD01出土品 (2)
 図版17 96C・D区SD06出土品 (1)
 図版18 96C・D区SD06出土品 (2)
 96A区SD21出土品
 図版19 96A区SD24・SD19・SD13
 ・SK02・SX01 96D区SE01
 ・SD05出土品
 図版20 97B区SD01第4層出土品 (1)
 図版21 97B区SD01第4層出土品 (2)
 図版22 97B区SD01第3層出土品 (1)
 図版23 97B区SD01第3層出土品 (2)
 図版24 97B区SD01第2層出土品
 図版25 97B区SD01出土常滑窯産陶器 (1)
 図版26 97B区SD01出土常滑窯産陶器 (2)
 図版27 97B区SD01出土常滑窯産陶器 (3)
 図版28 97B区SD07・96E区SD13出土品
 図版29 97A区SE01出土品
 図版30 97A区SE02出土品 (1)
 図版31 97A区SE02出土品 (2)
 図版32 97A区SE02出土品 (2)
 99E区SE01出土品
 図版33 97A区SE03・SK01・SK10・SK24
 ・SD02出土品

写真図版

- 写真図版1 北調査区全景
 写真図版2 南調査区全景
 写真図版3 96A区
 写真図版4 96B区
 写真図版5 96C区
 写真図版6 96D区
 写真図版7 96E区 (1)
 写真図版8 96E区 (2)
 写真図版9 96E区 (3)
 写真図版10 97A区 (1)
 写真図版11 97A区 (2)
 写真図版12 97A区 (3)
 写真図版13 97B区 (1)
 写真図版14 97B区 (2)
 写真図版15 97B区 (3)
 写真図版16 97B区 (4)
 写真図版17 97B区 (5)
 写真図版18 97B区 (6)
 写真図版19 97A区SE01・96E区SE01出土品
 写真図版20 97A区SE02出土品
 写真図版21 96C区SD01・97B区SD01
 ・96D区SD01出土品
 写真図版22 木簡 (1)・その他
 写真図版23 木簡 (2)

第1章 調査に至る経緯

大脇城遺跡は、愛知県豊明市栄町梶田およびその周辺に所在する戦国時代の城館跡を中心とする遺跡である。

この大脇城跡は、古くからその所在地は「狐藪」などとして地元では知られてきたが、昭和40年代に城跡の真上に国道23号線（名四国道）が建設され、相前後して周辺の耕地に対して耕地整理事業が行われるなどしてその景観は大きく一変した。そのためかその所在についての関心が次第に薄れていったようである。そのことは、1991年に愛知県教育委員会によって刊行された『愛知県中世城館跡調査報告 尾張地区』において、大脇城跡は、「位置が判明しないものの城館が所在した旧村名が現況地形図に残っている場合にはその地名を破線で囲む」という便宜的な措置が取られているということに如実にあらわれている。その後、平成5年度になって、愛知県教育委員会が市町村教育委員会の協力のもとに進めていた愛知県遺跡地図の改訂の際、豊明市教育委員会によって行われた市内遺跡の所在地の再検討の結果、従来の研究、絵図、地籍図をもとに大脇城跡の位置が推定され、1994年刊行の『愛知県遺跡地図（I）尾張地区』に大脇城跡は、周知の遺跡として記載される（遺跡番号12-068）に至ったのである。ところが推定された大脇城跡の位置は、いままさに建設省によっていわゆる伊勢湾岸道路の建設工事（国道23号線栄交差点立体化事業および第二東海自動車道建設）が展開している地点そのものであり、早急の対応が求められることとなった。そこで愛知県教育委員会と建設省との間で調整が行われ、その結果、工事着手直前の二箇所については、いわゆる「立ち会い調査」で対応するとともに、遺跡の広がり・性格などを把握するための範囲確認調査を実施した上で、再度今後の対応について協議することとなった。立ち会いおよび範囲確認調査は、愛知県教育委員会・豊明市教育委員会により下記の日程で行われた。

立ち会い調査	1994年9月16日・18日	地下道ボックス工事部分	2箇所	約1,000m ²
範囲確認調査	1994年9月6日・11月28～29日・12月13日	トレンチ	17箇所	約210m ²

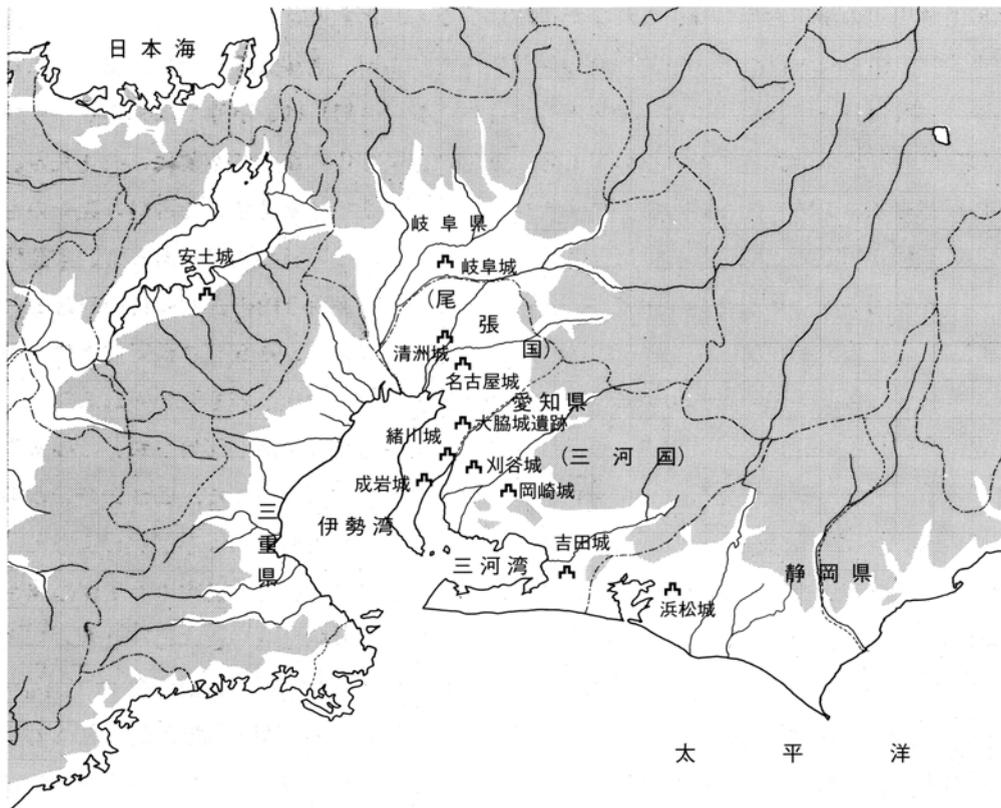
調査の結果、戦国時代を中心とする遺構が随所で確認され、遺跡は城跡周辺に広範囲に展開することが明らかになった。こうした調査所見をもとに、県教育委員会・豊明市教育委員会と建設省ならびに日本道路公団との間で遺跡の取り扱いについて再三協議がもたれた。その結果、伊勢湾岸道路関連の国道23号線（名四国道）栄交差点立体化事業および第二東海自動車道建設工事による滅失が避けられない10,000m²を調査対象地とし、記録保存を目的とした事前調査を実施することとなった。

発掘調査は、建設省ならびに日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、平成8年7月から平成9年8月にかけて行なった。調査面積は、10,000m²で、これを96A区～96E区、97A区・97B区の7つの調査区（第5図）に分けて実施した。

第2章 大脇城遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

大脇城遺跡は、愛知県の中央やや西寄りの愛知県豊明市栄町字梶田ほか（旧尾張国知多郡大脇村 北緯 $35^{\circ} 2' 13''$ 、東経 $137^{\circ} 0' 19''$ ）に所在する。この地は、旧尾張国と三河国の国境を北東から南西に向って流れる境川の一支流である正戸川右岸の平坦な沖積地で、西に知多丘陵、東から南に正戸川および境川の右岸堤防をのぞむ。現地表面の標高は3.50m前後で、周辺に小高い段丘面などが展開して入るのにもかかわらず、平坦な場所に存しているのが城館跡としての本遺跡の立地上の特色となっている。遺跡周辺は、ながらくのどかな水田地帯であって、大脇城跡（地元では、梶川五左衛門屋敷の跡）の一部は、竹や雑木が茂る「狐藪」として残されていたようであるが、昭和44年末に遺跡の真上に国道23号線（名四国道）が建設され、相前後してその周辺の耕地整理事業（昭和40～45年）がなされるなどした結果、これまでの景観が大きく一変し、この場所に大脇城跡が存したことを想起することすら困難な景観となり、現在に至っている。なお遺跡が所在する豊明市の気候は、冬の小雨と夏の高湿、台風期の多雨に特徴づけられる「東海型気候区」に属する。



第1図 大脇城遺跡位置図

第2節 遺跡をとりまく歴史的環境

遺跡の西方に展開する所謂知多丘陵は、酸性度の極めて高い粘土・シルト質を主体に礫等を多量に含む土層を表層としていて農業には不向きであり、丘陵部の多くが耕地化したのは昭和36年（1961）の愛知用水の完成によるものである。そのためか、丘陵上にある遺跡の殆どは古代・中世（8世紀後半～）の窯跡で、これに対して集落遺跡は、沖積地を臨む丘陵部の縁辺ないし谷底平野周辺に位置するという立地上の特色が認められる。

以下、遺跡をとりまく歴史的環境ということで、ここでは、豊明市域の遺跡を中心に、大脇城遺跡周辺の遺跡について年代順に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の北北東、約5.7Kmにナイフ形石器が剥片・石核とともに出土した若王子遺跡（後期旧石器時代）がある。旧石器時代の遺跡については衣ヶ浦湾沿岸から境川流域を含めてもまだ例数が少なく、今後の調査の進展を俟ちたい。縄文時代になると、大脇城遺跡の南方の衣ヶ浦湾沿岸から境川左岸の台地の縁辺に、入海貝塚・八ツ崎貝塚・元刈谷貝塚等々の縄文早期から晩期に至る数多くの遺跡が展開する。しかしながら、大脇城遺跡周辺の境川右岸には何故か、縄文時代の遺跡は少なく、しかも豊明市内においては、若王子遺跡・勅使池遺跡・濁池遺跡・切山遺跡といった遺跡で、縄文時代とみられる石鏃・石錐などの石器の出土が認められるに過ぎず、今日まで縄文土器の出土をみない。つづく弥生時代においても、大脇城遺跡周辺の境川右岸には、これまた遺跡は少なく、北北東約4.8Kmに坊主山遺跡（後期

山中式期）が、南南東約3.3Kmに惣作遺跡（大府市 中期 高蔵式併行期）が認められるに過ぎない。したがって、今回の調査で出土した弥生土器（中期）は、小片ではあるが、この地理的空白地帯を埋める資料となるものである。さらに古墳時代になっても前代に引き続き、本遺跡の周辺には、遺跡は少ない。ただ境川流域では、これまでに発見された古墳の数そのものが少ない（例えば豊明市域0基・大府市1基・刈谷市6基）といった状況があって、当該期における人々の活動が低調であった可能性が指摘されている。豊明市内の古墳時代の遺跡としては、上記若王子遺跡があげられるのみで、昭和49年の発掘調査により5～6世紀前半代を中心とする竪穴住居跡など検出されている。このほか7世紀前半代の須恵器も認められる。

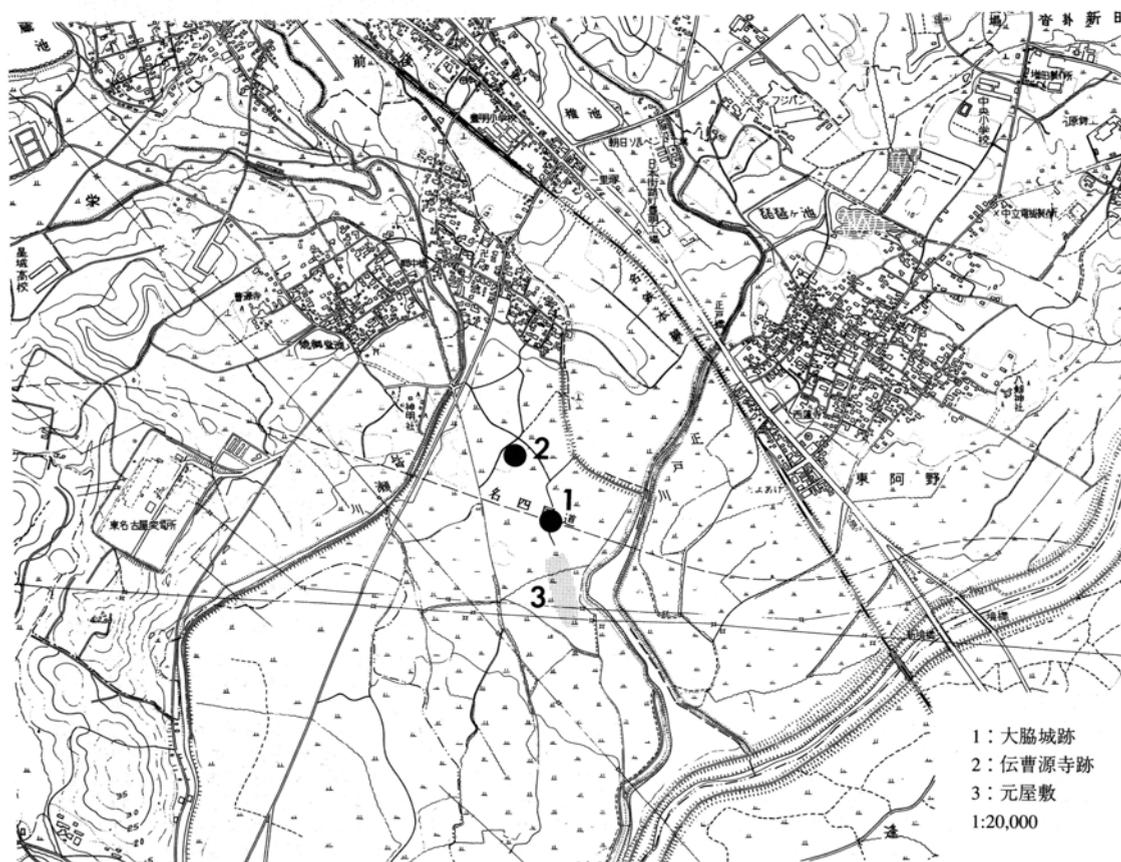
奈良時代の後半に入ると、豊明市内の丘陵部において須恵器の生産が開始され、この窯業生産は、平安～鎌倉時代（灰釉陶器～山茶椀生産）へと引き継がれていった。これまでに豊明市内では54基の窯跡が確認されている。これに対して、奈良・平安時代の集落遺跡は少なく、大脇城遺跡周辺では、たとえば上記若王子遺跡・惣作遺跡などで当該期の遺物の出土が確認されているにとどまる。鎌倉・室町時代の集落遺跡については賢聖院貝塚・惣作遺跡（ともに大府市）などが知られているに過ぎないが、たとえば「熊野参詣良尊法印引導之檀那之在所事」（応永16年 1409 熊野那智大社所蔵「米良文書」）に「沓懸郷」「高嶺郷」「横根郷」「村木郷」などが認められ、また多くの寺院・神社の縁起が、その創建をこの時代に求め、いくつかの寺院などにおいてその傍証史料が認められること等を勘案するならば、今後、各所で中世の遺跡が発見されるものと思われる。ちなみに「大脇」の史料上の初見は、天文19年（1550）の今川義

元の安堵状（後述）で、おそらくこの頃には一種の行政単位としての「大脇」が成立していたものと見なすことができる。

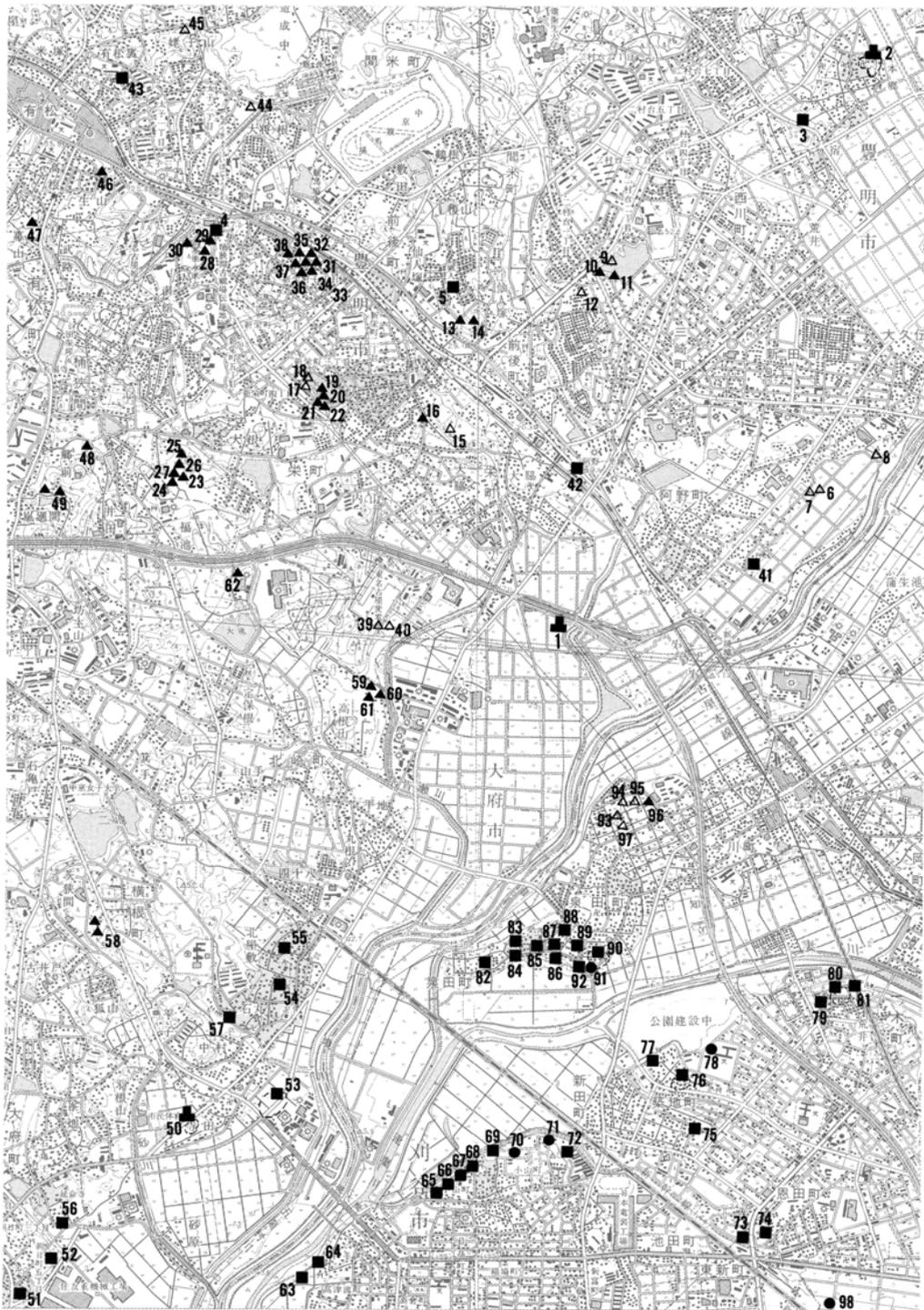
戦国時代に入ると、尾張と三河の国境に位置するということもあってか、数多くの城館が築かれた。境川右岸の尾張側には、南から緒川城、村木城、横根城、大脇城、沓掛城、諸輪城などが所在し、境川左岸の三河側には、刈谷城、絵下城、福谷城といった城がみられる。とくに戦国大名水野氏の居城である緒川城・刈谷城は、衣ヶ浦湾沿岸から境川河口地域のみならず三河・尾張地域における拠点的な城であり、市内の沓掛城も桶狭間の戦いの際に今川義元が在陣したことで著名な城である。なお、桶狭間の合戦場は、大脇城跡の北西約3 Kmの地点にあたる。

以上、周辺の遺跡について大雑把に概観した。大脇城遺跡の形成・展開はこうした遺跡群の動向とのかかわりの中で理解される必要がある。

参考文献 豊明市史編さん委員会 『豊明市史 本文編』1993年 愛知県豊明市役所
大府市誌編さん刊行委員会 『大府市誌 資料編考古』1991年 愛知県大府市
愛知県教育委員会 『愛知県遺跡地図（I）尾張地区』1994年 愛知県教育委員会



第2図 大脇城遺跡周辺の旧地形図（名四国道建設前）



第3図 大脇城遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/40,000)

■ 城館跡 ■ 集落跡・貝塚ほか ● 古墳 △ 須恵器・灰陶器窯 (含時期不明) ▲ 山茶碗窯

拠 愛知県教育委員会『愛知県遺跡地図(Ⅰ)』1994・『愛知県遺跡地図(Ⅱ)』1988、愛知県大府市『大府市誌 資料編考古』1991

1. 大脇城 2. 沓掛城 3. 十王堂遺跡 4. 桶狭間古戦場伝説地 5. 戦人塚 6. 苺山1号窯 7. 苺山2号窯 8. 森西1号窯 9. 池浦1号窯 10. 三崎池1号窯 11. 三崎池2号窯 12. ゆたか台1号窯 13. 仙人塚1号窯 14. 仙人塚2号窯 15. 姥子1号窯 16. 姥子2号窯 17. 九左山1号窯 18. 九左山2号窯 19～22. 大蔵池1号窯～4号窯 23～27. 大根1号窯～5号窯 28～30. 高德院1号窯～3号窯 31～38. 山ノ神1号窯～8号窯 39. 道山1号窯 40. 道山2号窯 41. 東阿野遺跡 42. 阿野一里塚 (以上豊明市) 43. 姥子山B地点 44. NA 201号窯 45. NA 202号窯 46. NA 303号窯 47. NA 308号窯 48. NA 319号窯 49. NA 320号窯 (以上名古屋市) 50. 横根城 51. おもしき井戸跡 52. 杖敷貝塚 53. 惣作遺跡 54. 石丸遺跡 55. 賢聖院貝塚 56. 延命寺貝塚 57. 「藤井宮」瓶子 出土地点 58. 名高山古窯 59～61. 高根山1号窯～3号窯 62. 福池古窯 (以上大府市) 63. 三田遺跡 64. 中手山貝塚 65. 西屋敷貝塚 66. 寺屋敷貝塚 67. 寺屋敷東貝塚 68. 天子神社貝塚 69. 佐太屋敷貝塚 70. ハッ崎第1号古墳 71. ハッ崎第2号古墳 72. ハッ崎東貝塚 73. 細目遺跡 74. 松雲院貝塚 75. 誓願寺遺跡 76. 築地貝塚 77. 御岳神社貝塚 78. 築地古墳 79. 上カス遺跡 80. 芋川遺跡 81. 膳棚遺跡 82. 半崎遺跡 83. 大西東貝塚 84. 大西貝塚 85. 大西南貝塚 86. 八王寺神社貝塚 87. 中西遺跡 88. 向畑貝塚 89. 大久屋貝塚 90. 宮東第1貝塚 91. 泉田古墳 92. 宮東第2号貝塚 93. IG-49号窯 94. IG-50号窯 95. IG-51号窯 96. IG-G-21号窯 97. IG-52号窯 (以上刈谷市) 98. 丸山古墳 (以上知立市)

第3節 大脇城の沿革

1 「大脇城」に関する文献史料

「大脇城」に関する文献史料は僅少で、しかも同時代史料はなく、何れも後世（17世紀）の編纂物に限られる。煩を厭わず関連史料を掲げる。

史料A 『寛文村々覚書』（寛文12～13年頃／1672～73年頃成立）

「元高五百八拾壹石貳升五合

一概高六百六拾貳石三斗六升五合 英比之庄 大脇村

（中略）

一 古城跡 先年梶川五左衛門居城之由 今ハ畑成」

管見の限りでは、大脇城に関する初見史料である。『寛文村々覚書』は、尾張藩によって寛文年間に藩撰された、尾張一国の村勢要覧的な地誌である。これにより大脇村に「先年梶川五左衛門居城之由」とされる「古城跡」があって、この時期、即ち寛文年間には「今ハ畑成」という状況にあったことが知られる。

史料B 『張州府志』（宝暦2年／1752年成立）

「【大脇城】在大脇村 梶川五左衛門居之 今為田圃 按梶川五左衛門者水野家人也」

『張州府志』は、尾張藩による最初の藩撰地誌（松平君平撰）で、その編集は元禄年間にはじまり約50年を費やしたとされる。「今為田圃」という表現が「今ハ畑成」とした史料Aと微妙に異なるほか、「按梶川五左衛門者水野家人也」撰者の見解が記されている。

史料C 『張州雑志』（寛政元年／1789年）

「大脇村 英比庄 自府内行程五里

（中略）

城跡 村民云元屋敷 古城志曰 知多郡大脇村梶川五左衛門城墟今為田圃」

『張州雑志』は、尾張藩士内藤正参の著述になる尾張藩領の地誌で、内藤が業なかばの天明8年に没したため寛政元年、赤村信定が目録を添え、合冊して100冊として完成させたものである。『古城志』なるものについては、特定できないが、内容的には、史料Bの『張州府志』と変わるところはない。「村民云元屋敷」と地元の住民の呼称を記している点に注目したい。というのは下記史料Fにもあるように、地元では、「大脇城」と呼ばずに「梶川五左衛門の屋敷跡」というニュアンスで呼称してきたからである。

史料D 『尾張旬行記』（文政5年／1822年）

「一 大脇城 府志古城志曰 在大脇村 梶川五左衛門居之 今為田圃 按梶川五左衛門者水野家人也 ○此城跡今村中ニアリ」

『尾張旬行記』は、尾張藩士樋口好古の著述になるものである。長い間の行政に当たった著者自身の調査・見聞に基づいて村々の現状と沿革を郡別・支配別に詳しく記していることで史料的に高い評価が与えられることが多いが、大脇城に関しては、残念ながら「○此城跡今村中ニ

アリ」と簡単に記すにとどまる。

史料 E 『尾張志』 (天保 14 年 / 1843 年)

「大脇城 大脇村にあり其跡今田圃となる 水野家の家士梶川五左衛門の居城也」

『尾張志』は、『張州府志』につづく尾張藩の第二次藩撰地誌である。『張州府志』を補訂するために藩の図書監深田正韶を総裁として十有余年の歳月を費やし完成したものである。『張州府志』では「按梶川五左衛門者水野家人也」とされた箇所が「水野家の家士梶川五左衛門」と断定的に記されている。

史料 F 豊明市大脇区所蔵の村絵図 (年未詳 江戸時代後期?)

「狐藪 往古梶川五左衛門ト申人ノ屋敷跡ト申伝候」

大脇村に代々伝えられてきた申し送り文書の一つで、何かの際に提出した絵図の控えではないかと推定されるものである。「大脇城跡」と表現していない点が注目される。

史料 G 『豊明村の伝説』 (稿本 石川清水 昭和 27 年 / 1952 年)

「2 大脇城 大字栄字屋下三十二番地の水田を言う 梶川五左衛門文勝 (関ヶ原の役従軍す) の居城址なりという」

大脇城の位置を地籍図上の地番で表記されている点が、旧状が失われてしまった今日となつては貴重である。この記述が大脇城の位置を確認する手掛かりになったことは、後述する。

史料 H 『豊明町誌』 (昭和 34 年 / 1959 年)

「大脇城跡は、豊明町大字栄字屋下の田圃中にある塚が、それである。明治三七、三八年頃即ち今より五〇年程前までは、この塚の周囲一帯は雑草木や竹藪が生い茂り、「狐やぶ」と称していた。その後開墾されて水田となり、今はその中心部が僅か四坪程残り、雑草木に蔽われているのみである。」

大脇城の明治 37・38 年ごろの様子が伺われて興味深い。「塚」という表記は、土塁の一部を想起させるが判然としない。

以上のように、大脇城に関する記述は僅少であるが、上記の史料から伺われることを列挙すると、

- 1 大脇城は、梶川五左衛門の居城とされること。
- 2 『寛文村々覚書』の成立時期すなわち 1670 年前後には、すでに「今ハ畑成」という状況にあったこと
- 3 地元では、大脇城とは呼ばずに「梶川五左衛門ト申人ノ屋敷跡」などと呼称していること
- 4 大脇城すなわち梶川五左衛門屋敷の一部は、昭和 27 年時点では愛知県愛知郡豊明村大字栄字家(屋)下 32 番地にあたること
- 5 明治 37・38 年頃までは、大脇城(梶川五左衛門屋敷)辺りは、雑草木や竹藪が生い茂り、「狐やぶ」と称していたこと
- 6 そしてその後「狐藪」は開墾されて、昭和 34 年頃にはその中心部が僅か四坪程残り、雑草木に蔽われているのみとなったこと
- 7 残念ながら、規模・構造に関連する記述は皆無であること

という具合に整理される。殊に2は、遺跡の廃絶の問題に関わってくることであり、この点は発掘調査における課題の一つとなった。また、4・5・6に関しては、後述のように今回の調査区の一部がいわゆる「狐藪」に掛かり、想定通りに大脇城（というよりは梶川五左衛門屋敷跡というべきか）が検出されるか否かが注目されるところとなった。

出典 『寛文村々覚書』 名古屋叢書 続編第3巻 名古屋市教育委員会 1966年

『張州府志』 愛知県郷土資料叢書 第19集 愛知県郷土資料刊行会 1974年

『張州雑誌』 名古屋市蓬左文庫蔵 愛知県郷土資料刊行会 1975年

『尾張句行記』 名古屋叢書 続編第8巻 名古屋市教育委員会 1969年

『尾張志』 歴史図書社 1969年

2 地籍図からみた大脇城

上記のように、文献史料には残念ながら大脇城の規模・構造に関する記述は皆無である。ただ、幸いなことに、当該地の土地整理前の地籍図に大脇城の構造などを知る手掛かりが残されていた。この地籍図（地割）の検討から城館の構造などを考えるという手法は、各地の城館研究で一定の成果をあげてきているものである。第4図は、前述史料Gで大脇城跡の所在地として指摘された旧豊明村大字栄字家（屋）下32番地周辺の地籍図（『愛知県豊明町土地宝典』1964年 日本市町村地図編纂会）である。32番地はL字型の地割り、あたかも方形居館の角部に相当するかのように見受けられる。そうみた場合、家下30～37番地が大脇城跡（梶川五左衛門屋敷）推定地ということになる。この想定が容認されるならば、大脇城は、一辺が約60m前後の方形の居館であった可能性が考えられる。そしてこうした検討から97B区において大脇城の遺構の所在を予見することとなった。また、このほかにも発掘調査対象地に関して云えば、同じく家下38～40・57～66番地も方形居館（屋敷地）の可能性をもつ地点として調査に際して遺構の検出が想定された箇所である。

3 梶川五左衛門について

既述のように、大脇城の城主についてはいずれの文献史料も「梶川五左衛門」としている。当該期の歴史動向からみて、梶川五左衛門の実名は、天正11年（1583）に延命寺（愛知県大府市）に寺領を寄進した「秀盛」と見るのがもっとも妥当と考える。

以下、史料は僅少ではあるが、梶川五左衛門秀盛とはいかなる人物なのか、関連事項もふくめて年代順にみたい。

1502年（永正2） 乾坤院（愛知県知多郡緒川町）開山、川僧和尚の法孫にして、西明寺（愛知県豊川市）三世実田以耕和尚、曹源寺（曹洞宗 清涼山 愛知県豊明市栄町）を開創す、と



第4図 土地整理前の地割と調査区位置図 (1/4,000)

1: 家下32番地 2: 北調査区 (96A ~ 96D区) 3: 南調査区 (96E ~ 97B区) 4: 伝曹源寺跡
 地割は、『愛知県豊明市土地宝典』(日本市町村地図編纂会 1964年)に拠る

云う。

(寺伝 省略)

曹源寺は大脇城の西北約250mの地点に存した寺院で、承応3(1654)年の火災を機にして現在地に移転した(後述)。なお、梶川五左衛門秀盛の父の平九郎某の法名が「宗玄」であり、法名と寺名の一致は、単なる偶然とは考えにくく、なんらかの関係があるのかもしれない。このように考えた場合、梶川氏は、15世紀末葉にはすでに城館を構えていた可能性が生じてくる。梶川氏と曹源寺の関係については、今後の課題としておきたい。

1550年(天文19)12月 今川義元、丹波隼人佐に、横根・大脇等を安堵する。

「沓懸 高大根 部田村之事

右 去六月福谷在城以来 別令馳走之間 令還附之畢 前々売地等之事 今度一変之上者 只今不及其沙汰 可令所務之 并近藤右京亮相拘名職 自然彼者雖属味方 為本地之条 令散田一円可取務之 横根 大脇之事 是又数年令知行之上者 領掌不可有相違 弥可抽奉公者也 仍如件

天文十九

十二月朔日

治部大輔(花押)

丹波隼人佐殿(里見忠三郎氏所藏手鑑)

西三河地方を制圧した今川義元の勢力は、この時期になると国境を越えて尾張国内に及ぶようになってきた。丹波隼人佐が如何なる人物であるのか、その詳細は定かではないが、この時期に何らかの事情で失った「沓懸 高大根 部田村」を「去六月福谷在城以来 別令馳走之間」ということで今川義元から「還附」されたこと等からみて、こうした地域を基盤とし、今川方に属した人物と推察される。問題の「大脇」については、「横根」とともに「是又数年令知行之上者」ということで「領掌不可有相違」と安堵されている。したがって、丹波隼人佐の横根・大脇の知行は文書による限りでは、1550年を「数年」遡る時点から始まったということになる。梶川氏との関わりの有無については判然としない。ちなみに管見の限りでは「大脇」という地名(一種の行政単位)の初見史料である。

1560年(永禄3)5月 桶狭間の戦い。この直後に刈谷城主水野下野守信元、松平元康(徳川家康)と刈谷の十八町(緒川の石ヶ瀬とする説あり)にて合戦す、と云う。この時、梶川五左衛門は、水野信元に属す。

「一其後かりやしぎ原と申所へ権現様御はたらき被成 つけ城を御取被成候 其城の跡今に御座候 権現様ハするか方 下野守ハ信長様かたにて おちをいのとり合さい、御座候 其時かりやの十八町と申道のさきに鉄砲かまへ少仕鑓御座候由承候 其時のやりハ矢田伝一郎其日の一番鑓 水野藤助 滝見弥平次此ものはやくかけつけ手あい申候 二のめの備にハ高木主水 水野藤次 同藤十郎 梶川五左衛門 清水権之助 丹羽彦右衛門 久米合左衛門 わにべさめの助 神谷新七 互に討つうたれつ仕候由承候 其外あまた御座候やうに申候へ共 それハ不存候 此もの共ハはたもとのそはに二の備に置申者と承候」

(「水野勝成覚書」寛永18年/1641年成立)

桶狭間の戦いの後、西三河における今川氏の勢力は後退を余儀なくされることとなる。おそ

らくは、上記丹羽隼人佐も当地域における勢力を失ったであろうことは想像に難くない。梶川五左衛門と大脇城との関連は定かではないが、この時期にかかわりができたか、あるいは既述したように15世紀末葉にすでに梶川氏と大脇とのかかわりはあったものが、一時期、丹波隼人佐にとって変わられたが桶狭間の戦いを機に梶川氏が復帰した等々が考えられる。

1575年(天正3)12月 刈谷城主水野信元、織田信長により誅殺される。

(史料省略)

下記の史料から見て、この後、梶川五左衛門は、水野信元の後に刈谷城主となった佐久間信盛に属することとなった、とみられる。

1580年(天正8)8月 織田信長、佐久間信盛父子を追放する。このとき梶川五左衛門、甥の梶川弥三郎とともに信長に召し出される。

「八月十二日 信長公 京より宇治の橋を御覧じ 御舟にて直ちに大坂へ御成り 爰にて 佐久間右衛門かたへ 御折檻の条子 御自筆にて仰せ遣はさるゝ趣

(中略)

如此御自筆を以て遊し 佐久間右衛門父子かたへ 楠木長安 宮内卿法印 中野又兵衛 三人を以て 遠国へ可退出趣 被仰出 取物も不取敢 高野山へ被上候 爰にも可叶之旨 御諚に付て高野を立出 紀州熊野之奥 足に任せて逐電也 然間譜代相伝之下人に見捨らる かはたしにて 己と草履を取計にて 見る目も哀成有様也 爰に梶川弥三郎 梶川五左衛門 嶋又左衛門尉兄弟 佐久間五平次被召出候所次第也」

(『信長記』池田家本 第十三)

この梶川五左衛門等の記述は、池田家本『信長記』に見られるものである。

1581年(天正9)2月 織田信長、禁裏東門外に馬場を構え、諸将らに騎乗させ馬揃えを興行する。正親町天皇、これを叡覧す。梶川五左衛門、織田信雄の馬乗三十騎の一員として騎乗する、と云う。

「二月二十八日 五畿内隣国の大名小名御家人を召し寄せられ 駿馬を天下に集め 御馬揃へ 聖王へ御叡覧に備へられ 訖んぬ 上京 内裏の東に 北より南へ八町に馬場をやり (中略)

下京本能寺を 信長 辰の刻に出でさせられ 一条を東へ 御馬場へ入るの次第 一番に (中略) 御連枝の御衆 中將信忠卿 馬乗八十騎 美濃尾張衆 北畠中將信雄 馬乗三十騎 伊勢衆 織田上野守信兼 馬乗十騎 同三七信孝 馬乗十騎 (下略)」

(『信長公記』)

「一 ここに天正辛巳二月 御府内公天子に備えるべく御叡覧御馬揃えの御催しこれあり候

(中略)

一 当日 北畠中將信忠卿の馬乗衆主なる人の覚え左の如し

一 木造左衛門尉

(中略)

一 梶川五左衛門

(中略)

一 津田勝左衛門

大方右の御仕立に候なり」

(『武功夜話 卷九』)

『信長公記』には、織田信雄の馬乗三十騎の交名は記されていないが、『武功夜話 卷九』に

交名がみられる。この『武功夜話』については「決して良質の史料とはいえない。」などその内容をめぐって様々な議論がみられる。ここでは、参考までに掲げたが、史実とするならば、この時期に梶川五左衛門は織田信雄の配下になっていたこととなる。

1582年(天正10)12月 織田信雄、美濃との国境強化のため、諸将を国境に配備する。梶川五左衛門、黒田渡し口(葉栗郡木曾川町)に配置される、と云う。

「一 春日井表の前野新蔵門在所へ越し候 此度の陣触れに付き 夜中駆け付け候なり (中略)
美濃 伊勢の境目を相固めるべく それがしどもの部署は 中島郡河内の内 加賀の井備えと相極まり候

一 河内加賀の井口備え

小坂孫兵衛

(中略)

一 同所起渡し口の備え

森甚之丞

(中略)

一 黒田備え渡し口

沢井左衛門尉

梶川五左衛門

林藤十郎

右の惣人数三百有余人

一 勢州亀山峰の城関地蔵

(中略)

」 (『武功夜話』卷十)

1583年(天正11)閏1月 織田信雄、安土城に赴き、織田信忠の遺児三法師の後見となる。この時、梶川五左衛門、信雄に随従する、と云う。

「一 此度羽柴筑前様は安土へ罷り越しなされ 御幼三法師君並びに 三法師君御伺候の北畠中将様に御拝謁、(中略) 切々と懇望候ところ 北畠中将卿もつともなる事と諾され 筑前様と共に御出馬なされ候 直ちに飛脚をもって南伊勢 本国尾州清須へ急度陣出しの御指図なされ候 安土において御伴の人数二千三百有余人これあり これは筑前様御旗本に加え入れ東海道土山宿へ罷り出で候

中将信雄卿に相随い申し安土御城に罷り在り候者の覚え

津田勝右衛門 小坂孫九郎 水野小右衛門 杉浦五左衛門 池尻平左衛門 祖父江五郎左衛門

森甚之丞 佐久間甚九郎 梶川五左衛門 岡部太郎左衛門

右の如く主なる人の覚えに候」

(『武功夜話』卷十)

1583年(天正11)11月 梶川五左衛門秀盛、延命寺(愛知県大府市横根)に寺領を寄進する。

「 以上

延命寺領為 寄進合田畠拾九貫四百七十八文目此内田方拾四貫五百七十文目畠方四貫九百八文目 並山壺ヶ所寺之後 不可有相違者也 田畠坪付之儀別紙在之候仍如件

梶川五左衛門尉

天正十一癸未九月七日 秀盛（花押）

延命寺

御坊中]

（延命寺所蔵文書）

管見の限りでは、梶川五左衛門秀盛の唯一の発給文書である。これより梶川五左衛門が延命寺周辺を領地の一部としていたことが窺われる。この延命寺の所在する旧横根村は、大脇城のある大脇村の南隣の村である。また横根村については、後述のように梶川五左衛門が横根城の築城をはじめたが、未完成のうちに成岩城（半田市）へ移っていったという『張州府志』の記述がある。

1584年（天正12）6月 梶川五左衛門、織田信雄の配下として、下市場城・蟹江城攻め（ともに海部郡蟹江町 蟹江合戦）に参戦する、と云う。

「去るほどに尾州蟹江表の急変の出来に付き 早々勢州浜田を罷り退き川内へ罷り帰り候ところ 大野の髯山口長二郎どのよりの注進相届き 蟹江城中に取り籠められ一命も危き娘志乃の身を案じ 御前に罷り出で髯長次郎儀 親妻子を捨て与十郎与せず義を立てたる天晴れなる進退 このまま見殺しも成らず何とぞ加勢の儀それがしに仰せ付けらるべく申し上げ候ところ 中将卿長次郎の進退神妙なりとて 直ちに懸け向うべく御上意あるにより 直ちに大野へ駆け向い滝川の勢川筋より漕ぎ寄せ陸へ上り 陣取り此処かしこ焔を揚げ 川筋へは軍船漕ぎ寄せ諸々の篝火天をつらぬき熾んなり 長島より駆け付け候小坂孫九郎 梶川五左衛門 森久三郎 森清十郎 林与五郎 毛利小形等その人数凡そ八百有余人 大野の山口長次郎一手と相成り 浜伝いに懸り来たる滝川の軍勢追い崩し討ち捕り陸地へ押し入り候者大方は海上へ逃げ去り候なり」

（『武功夜話』巻十四）

「一 下市場城責め遠三の責め衆

一 榊原小平太 この人数二千有余人

一 北畠衆 小坂孫九郎 祖父江五郎左衛門 梶川五左衛門 織田源五 山口長次郎

津田勝右衛門 この人数一千三百有余人

一 前田与平次の城 下市場責めの事

（中略）前田与平次の楯籠る蟹江の城は 五反ばかり手ぜまの小城に候も （中略）敵将前田与平次海東に聞え高き武者なれば 油断有間敷候えと髯殿申しければ 孫九郎 五左衛門厳重に申し付けられ候 （下略）」

（『武功夜話』巻十四）

この蟹江合戦は、かの「小牧・長久手の戦い」のなかで行なわれたものである。

1585～86年（天正13～14年） このころ『織田信雄分限帳』作成される。梶川五左衛門、1480貫文を知行する。

「一 千四百八拾貫文 目録別ニ有 梶川五左衛門」（『織田信雄分限帳』）

残念ながら、「目録」が所在不明なため、具体的な領地を明らかにすることはできない。1480貫文の知行は、分限帳のなかでは、比較的上位に格付けされる貫高である。

1590年（天正18）小田原の戦いがおこり、織田信雄、参陣する。その際、信雄、梶川五左衛門秀盛を「旗奉行」とす。

「秀吉相州小田原の城をせむるとき 信雄 秀盛を旗奉行とす」（『寛永諸家系図伝』平氏十九冊）

之内清盛流 寛永20年／1643年)

この小田原の戦いの後、織田信雄は、豊臣秀吉と対立し除封される。下記の史料からすると、このためか、こののち梶川五左衛門は岐阜城主の池田輝政に仕えることとなったとみられる。

1592～98年(文禄1年～慶長3年) 文禄・慶長の役、おこる。梶川五左衛門秀盛、池田輝政の配下として、朝鮮へ出陣し、陽川(現ソウル市近郊)にて戦死す、と云う。60歳、法名浄慶。「秀吉高麗を征する時 岐阜の城主羽柴宰相輝政にしたがひ 高麗陽川の城に至り彼国の賊徒城をかこむとき 秀盛城中より敵陣にすゝみ出 たゝかひ死す 六十歳 法名浄慶」

(『寛永諸家系図伝』平氏十九冊之内清盛流 寛永20年／1643年)

池田輝政は、朝鮮半島に出陣していないなど、記事の信憑性についてなお検討を要すが、仮に没年令60歳とするならば、出生は1530年代ということになる。

1620年(元和6年)尾張藩政の下、萩原善右衛門・桜木助右衛門、大脇村の給人となる。

「

知行分之事	萩原九兵衛
一 百六拾八石式斗三升九合	尾州知多郡 長草村内
一 八拾壹石式斗五合	同知多郡 大脇村内
一 七斗三升六合	同丹羽郡 東野村内
合式百五拾石	
右令扶助畢 全可領知者也	
元和六年九月朔日	義利御印
	萩原善右衛門とのへ

」

(「源敬様黒印控写」)

大脇村は、元和6年(1620)に萩原善右衛門と桜木助右衛門に知行地として宛行がわれた。史料は尾張藩主徳川義利から萩原善右衛門へ宛てた知行目録の控である。当時大脇村は331石ほどの石高で、両給人の相給地となった。以後、給人が替わることがあったが、大脇村は鳴海代官所の設置(天明元年ー1781年)まで給地(藩士の知行地)であった。

1670年代(寛文年間)『寛文村々覚書』、作成される。大脇城について「今ハ畑成」と記される。

「一 古城跡 先年梶川五左衛門居城之由 今ハ畑成」

この時期、すでに畑に開墾されていることが知られる。とともに城主として梶川五左衛門が記され、大脇城に対する当時の人々の認識が知れる。

1698年(元禄11) 横根村延命寺住職、梶川五左衛門について調査し、その結果を記す。

「横根村城主梶川五左衛門殿追々致吟味候処 高麗陣ヨリ御帰陣無之由ニ候 城跡横根村之内ニ有之 右之印松古木御座候 已後御吟味之節心得之ため印置候」

(『御公義並従本寺廻状写帳』寛文5年～／1665～ 延命寺所蔵文書)

残念ながら、大脇城についてはふれられるところがない。

以上、梶川五左衛門の来歴について、可能な限り史料に即してきてきた。遺憾ながら梶川五左衛門と大脇城を直接的に示すものは、『寛文村々覚書』を除いて見出し得なかった。ただ城主については、梶川五左衛門以外の人物について伝えられるところがない点は、注目されてよ

いかも知れない。

なお年代が判然としないが、梶川五左衛門に関連する史料が『張州府志』（宝暦2年／1752年）にあるので、以下に紹介する。

「大脇城 在大脇村 梶川五左衛門居之 今為田圃 按梶川五左衛門者水野家人也」

「横根城 在横根村 梶川五左衛門築之 未就 遷于成岩城 今為田」

「成岩城 在成岩村 其壘東西三十五間 南北二百三十間榎木了圓居此 今為田 伝云 緒川水野氏構砦攻之 城中有反側子 引水野軍入城 終拔之 梶川五左衛門守之」

という記載である。これよりすれば梶川五左衛門は横根城の築城に取り掛かったが、完成を見ずに成岩城に遷っていったことになる。興味深い記載であるが、こうした動向はいつのことなのか判然としない。既述のように1583年（天正11）11月に梶川五左衛門秀盛は、延命寺（愛知県大府市横根）に対し寺領の寄進を行なっており、横根城の築城は、或いはこの頃のことかも知れない。とするならば成岩城へ遷っていくのはその後のことと云うことになるが、確証はない。この点については今後の課題としたい。

また、このほかに既述の『豊明村の伝説』（稿本 石川清水 昭和27年／1952年）に「2大脇城 大字栄字屋下三十二番地の水田を言う 梶川五左衛門文勝（関ヶ原の役従軍す）の居城址なりという」という記述がある。この梶川五左衛門文勝は管見の限りでは系譜などで確認できない人物である。五左衛門秀盛の甥に「梶川平七郎分勝」なる人物がみられ「関ヶ原御陣にしたがいたてまつる」と云うが、「文勝」と「分勝」と似ているが、「五左衛門」と「平七郎」は大きく異なる。この点も今後の検討課題としておきたい。

出典	里見忠三郎氏所蔵手鑑	『静岡県史 資料編7 中世3』1994年
	「水野勝成覚書」	『刈谷市史 第六卷』1992年
	池田家本『信長記』	『信長記 第十三』福永書店 1975年
	『武功夜話 卷九 卷十 卷十四』	吉田蒼生雄訳註『武功夜話 第三卷』新人物往来社 1987年
	延命寺所蔵文書	『大府市誌 資料編宗教』1989年
	『織田信雄分限帳』	『新編一宮市史 資料編補遺二』1980年
	『寛永諸家系図伝』	『寛永諸家系図伝 第六』続群書類従刊行会 1983年
	「源敬様黒印控写」	『大府市誌』1986年

4 大脇村の移転

現在の豊明市栄町の大脇区、旧知多郡大脇村の集落には、江戸時代に水害の危険から逃れるために大脇城跡の南側の旧字「元屋敷」から今日集落が立地する高台へ移住してきた旨の伝承がある。このことについて、『豊明市史 資料編三』（豊明市市編纂委員会 1978年）では、「(前略) この水田の中央、神田田面の北に元屋敷の字名を持つ畑地は、東阿野村と同じく、境川や正土川の決壊の被害を度々受けたため、郷中の高台へ移住した名残りの地名である。資料編一、五三五の大脇文書(「元屋敷砂入起掃り高改帳」 筆者註)によると、元禄十一年(一六九八)にすでに元屋敷の名が書かれているから、移住はそれ以前の承応三年(一六五四)以降ではなかろうか。ここにあった曹源寺がこの年の三月、火災によって焼亡して、後現在地(現大脇区集落の西方の丘陵斜面 筆者註)へ移った。(曹源寺山門棟札)」と述べ、17世紀後半の移転を想定されている。こうした村の移転が、大脇城跡およびその周辺を調査対象とする今回の発掘調査により、考古学的に証明し得るか否かが、これまた調査課題となった。

第3章 発掘調査の経過

第1節 調査の方法等

調査対象地（10,000m²）は、国道23号線の北側と南側に分かれる。工事の進捗（迂回路撤去など）等の都合上、発掘調査は、北側4調査区、南側3調査区の7つの調査区に分けて二ケ年にわたって実施した。以下、北側の4調査区（96A～D区）を「北調査区」、南側の3調査区（96E区・97A～B区）を「南調査区」と呼称する。

立ち会い調査・範囲確認調査により、当遺跡は15世紀後半から17世紀代の遺跡であることが確認されていたが、発掘調査に先立つ大脇城に関する従来の知見および地籍図の検討（既述）から、南調査区97B区に大脇城跡（梶川五左衛門屋敷跡）との伝承をもつ「狐藪」の一部がかかり、地籍図の地割りから方形の城館（居館）跡の存在が予見され、発掘調査により所伝通りに城館跡が検出されるか否かを明らかにすることが調査課題の一つとなった。合せて地籍図では、この97B区の方形の城館跡の北側に方形居館跡とも取れる地割りが連続して北調査区の96D区に及んでいるように見受けられ、この点も注目された。また17世紀後半と推定される大脇村の移転が考古学的に証明し得るか否かも既述のように重要な調査課題であった。さらに立ち会い調査・範囲確認調査により採取された遺物のなかに、平安時代の灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗類の小片があり、当該期の遺構が認められるか否かも解決すべき課題の一つとなった。

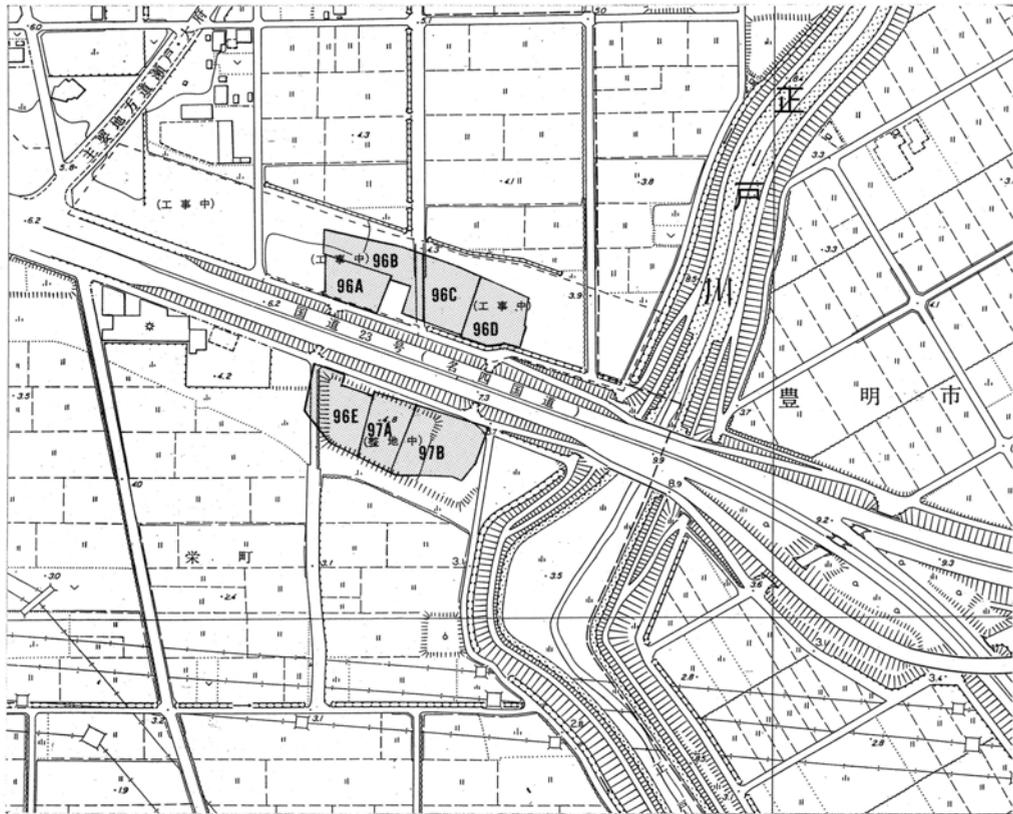
立ち会い調査・範囲確認調査の結果から、盛り土の下の耕作土・床土直下が遺構検出面で、所謂遺物包含層は、部分的に薄く遺存するのみである、ということが知られた。こうした所見にもとづき発掘調査は、工事に伴う盛り土および耕作土・床土を重機で除去したのち、グリッドの設定を行ない、あらかじめ土層を観察するためのトレンチを調査区の壁沿いに設定した上で、遺物包含層の掘削、遺構検出・掘削を行なうという手順で実施した。遺構の実測については、写真測量（朝日航洋株式会社に委託 縮尺50分の1の平面図を作成）を実施し、部分的に手測りで補足した。なお随所で検出された井戸の調査は、井戸掘形・井戸側の内径が小さくその掘り下げおよび実測は、困難と危険を伴った。そのため井戸については、調査区全体の撮影・実測を終えた後に、重機等を用いて安全のための足場を確保しつつ掘削・実測・解体を繰り返すという方法で行なった。

以下、各調査区ごとに、調査経過を略述する。

第2節 北調査区の経過

北調査区は、西より順に96A区・96B区・96C区・96D区の4つの調査区からなる。

96A区 1996年7月～9月 最初に調査を行なった96A区は、今回の調査対象地で、唯一盛土がなく、調査直前まで耕作が行なわれていたところである。このためか攪乱は少なかった。地



第5図 調査区位置図 (1:5,000)

籍図の検討からは、とくに際立った特徴をもつ地割りは見い出されない地区で、事前に遺構の展開を予見することはできなかつた。耕作土・床土を重機で除去したところ南東部において茶褐色土の遺物包含層がみられたほかは、遺物包含層はなく耕作土・床土直下が遺構検出面となる基盤層であった。基盤層の上面は、南西部において黒色の有機物層が展開したほかは、黄褐色もしくは赤黄褐色のを呈し、遺構埋土との区別は容易であった。ただこの基盤層は、非常に硬質で、一見すると洪積層ではないかと思われるものであった。これは遺跡は沖積地に立地するという調査前の予想を裏切るもので、この点については、遺構の調査が完了した後に、基盤層を深堀し検討することとした。なお当初、調査区の東側の地下道脇については、工事の進入路となっていたが、調査の途上で、調査可能となったため、調査区を地下道まで拡幅した。96A区東部に南北トレンチが入っているのはこのためである。

検出された遺構としては、溝・土坑・井戸・掘立柱建物等がある。これらの遺構は全て調査区の北部で検出したSD01の南側に展開したものである。このSD01は、幅2.0m前後・深さ1.5m前後の断面V字形の東西溝で、その規模・形状から城館に関連する遺構かと考えられた。埋土は大きく上下2層に分けられ、上層は地山ブロック土を多量に含む斑土で、あたかも人為的に埋められたかの様であった。このことに加え、出土した瀬戸・美濃窯産の陶器類の型式からその埋没年代として17世紀後葉が想定され、1670年代に成立したとされる『寛文村々覚書』にある「今ハ畑成」という記述との関連が注目された。なおこのSD01以北には殆ど遺構が認められず、南側に多く展開することからSD01は城館もしくは村を囲む外堀的な性格をもつものではないかと推測された。また検出された遺構の時期について、瀬戸・美濃窯の大窯期のものが出土

する遺構（15世紀後半～16世紀）、大窯期～連房式登窯前期のものが出土する遺構（15世紀後半～17世紀代）、連房式登窯前期のものが出土する遺構（17世紀代）、連房式登窯後期（18世紀後半～）のものが出土する遺構の4つに分けられることが明らかになった。このほかに、灰釉陶器・山茶碗類が16～17世紀代の遺構から出土したが、当該期の遺構は認められなかった。こうした灰釉陶器・山茶碗類の出土状況は各調査区とも同様で、灰釉陶器あるいは山茶碗類が釉着した状態のものや馬爪焼台など通常窯跡で出土するようなものの出土もあって、近隣に存した窯跡から持ち込まれた公算が高いものと推測する。このほかに縄文時代とみられる石鏃や弥生土器（中期）の小片が出土した。これまた遺構は認められないが、周辺には当該期の遺構は認められず注目された。遺構の調査が終了した段階で、基盤層の深堀を実施した。その結果、当初、洪積層の可能性も考えられたが、砂礫層の状況等から沖積層の可能性が高まった。そのため今後の調査に際して、地質学の専門の方を招き、現地での検討の機会を持つこととした。なお、基盤層中に見られた2条の黒色土層について、C¹⁴による年代測定を行なうこととし、資料の採取を行なった。

96B区 1996年10月～12月 96B区は、96A区の北側から地下道をはさんだ東側にかけての調査区で、96A区の調査終了後に実施した。明確な遺物包含層はなく耕作土・床土直下が遺構検出面となる基盤層であった。96A区で検出したSD01は、そのまま96B区に入っても一直線に伸び、96C区へと続いていくことが明らかとなった。このSD01は96B区へ入ってすぐに段差がついて深くなり、断面形は城館跡特有の明確な「葉研堀」を呈すこととなった。またこのSD01の北側にSD02が、南側にSD03がSD01に平行して走ることが判明した。SD03は、96A区では認められなかったものである。そしてSD01およびSD02以北においては、ほかに明確な遺構はほとんど認められないことも明確になった。

96C区 1996年11月～1997年1月 96B区の東側にあたる96C区は、地籍図の検討から、方形の居館跡が予見されたところである。96C区の調査は、96B区に少し遅れて着手した。遺構は、96B区同様にいずれも耕作土・床土の直下で検出された。96A区から96B区へとつづいたSD01は、ひきつづき約8mほど東方へ一直線に伸びたのち約70度の角度で南に折れ、約26mほど南下し、再び約80度ほど北東へ折れてそのまま直進し、96D区へとつづくことを確認した。北東へ折れる地点から以東をSD06と呼称する。このSD06は、下層においては（あるいは掘削の時期に前後があるかもしれないが）SD01と連続するものであるが、SD06の上層部分（第1層）は、18世紀後半代に水路として利用されており、こうしたことから、検出した当初、両溝は切り合い関係にあると看做された故である。このSD06部分が、地籍図の検討によるところの方形居館推定区画の西辺に相当するものである。さらに南辺に相当する地割りの下で、小規模な溝であるがSD09を検出した。SD06とSD09に囲まれた区画内の大半は隣の96D区内となるため、96D区の調査を俟たねばならないが、地籍図の判読から想定した方形の居館跡が検出される蓋然性がいよいよ高まった。96B区で検出されたSD01の北側を平走するSD02は、96C区に入ってもそのまま直進し、SD01が南折したのちも幾分北東方向へ方向をかえつつ直進し調査区北壁に消えていくことを確認した。これに対してSD01の南側を平走するSD03は、SD01とともに南折しSD06との交点の西側あたりで消滅する。SD01・SD06以北は相変わらず遺構が僅少

であることが知られた。

発掘調査が終了した時点で、兼ねてから問題となっていた基盤層についての地質学的検討の機会をもった。井関弘太郎（当センター理事）・海津正倫（当センター専門委員）両氏の立会いのもと、重機を用いて基盤層を深掘し、検討して頂いた。その結果、基盤層としていた土層の下に沖積平野基底礫層および碧海層が認められ、地山面は地点によっては硬質で洪積層様の状況を呈すものの、沖積層であることが確認された。

96D区 1996年11月～1997年1月 96D区は、96C区の東側の調査区で、96D区に少し遅れて着手した。国道23号線の迂回路がつけられた際に、仮設の地下道が設けられたこともあって、攪乱が著しく、盛り土の直下が遺構検出面という状況の部分が多く、遺構の遺存状態は良好とはいえない状態であった。96C区で検出されたSD06は、地籍図の検討から予見された通りに96D区に入ってすぐに約90度東南方向に折れて直進し、東壁に消えていくことが判明した。一方、この方形区画の南辺にあたるSD09は、96D区に入ってもそのまま直進し、調査区外へ消えていくことが明らかとなった。したがって、96C・D区にかけて当初予期した方形区画、溝で区画された居館跡が検出されたことになるわけである。ただこの方形区画内には、井戸1基（96D区SD01）、掘立柱建物1棟以上を検出したに過ぎず、しかも掘立柱建物は、井戸を埋めた上に構築されていた。後世の攪乱等で旧地表面が大きく削られてしまった可能性を考慮する必要もあろうが、区画の規模から見て内部の遺構の在り方の貧弱さは否めないところである。

第3節 南調査区の経過

南調査区は、西より順に96E区・97A区・97B区の3つの調査区からなる。

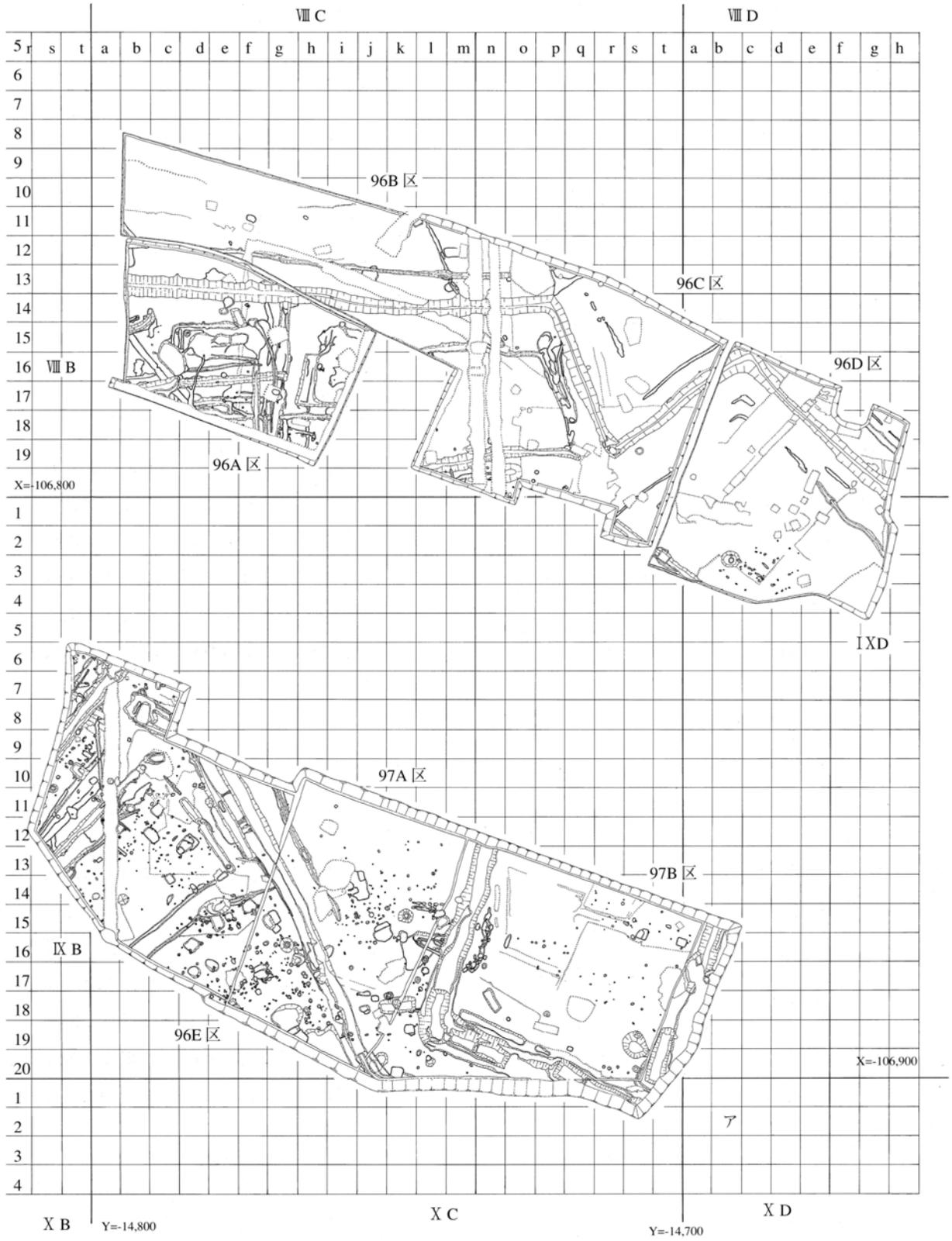
96E区 1997年1月～3月 南調査区の西端にあたる調査区である。盛り土の下の耕作土・床土直下が遺構検出面の基盤層（地山）で、遺物包含層は認められなかった。基盤層の上には黒色土層が広がっている箇所があって、遺構の検出に困難を伴った部分もあって、結果的に黒色土層を除去し黄褐色土層の面で遺構を確認したのも一部ある。検出した遺構としては、調査区を西北から東南に斜行する96E区SD02・03に直交する方向の中小の溝によって区切られた屋敷地と推定できる区画を中心に数多くの井戸・土坑・柱穴・溝がある。北調査区では16世紀代の井戸は、96D区において1基可能性をもつものが検出されたに過ぎないが、南調査区ではかなりの数が検出されることとなった。また柱根、礎板、根石をもつ柱穴とみられる土坑が東隣の97A区にかけて検出された。ただ柱通りが判然とせず、建物復元に課題を残した。なお区画溝の位置は、地籍図の地割りに一致するものが殆どであるが、地籍図の判読の段階では、特徴はなく屋敷地と推定・予見することはできなかった。

97B区 1997年4月～6月 工事等の兼ね合い等から97A区に先行して97B区の調査を実施した。ただ調査ヤードの確保など諸般の事情から、調査区の東端から南端の一部を後から調査することとした。この97B区は、大脇城跡（梶川五左衛門屋敷跡）とされた「狐藪」がかつて存

した場所にあたり、地籍図の検討からも方形居館跡が予見された。調査の結果、当初の予想通りに、調査区の北壁から南に延びほぼ直角に東に折れて調査区の南東隅に入っていく大形の溝(97B区SD01)が、地籍図によって推定された位置で検出された。溝の南辺の中央部は土橋状に高まっており、その部分の西と東で溝が若干のくいちがいを見せている。さらにその土橋の左右の溝底には、大形の土坑列が展開し、その底は海拔0m前後で、湧水層に達しており、畝掘ではないかと注目された。このように南辺の東西溝は幅広で手の込んだ造作がみられるのに対して、西辺の南北溝は浅く格別な造作は認められない、という相違があり、城館の正面と側面の違いではないかと推察された。出土遺物から見て遅くとも16世紀中葉までにはこの97B区SD01は掘削されており、17世紀後葉には埋没していたことが知られた。とくに埋土の上層には斑土の堆積が認められ人為的に埋められた可能性があり、その埋没年代など勘案するならば、1670年代に成立したとされる上記『寛文村々覚書』の「今ハ畑成」という記述と概ね整合性をもつこととなった。この97B区SD01に囲まれた区画内、すなわち城館内の遺構は希薄で、井戸4基のほか小規模な土坑、柱穴、溝を検出したにとどまる。また97B区SD01の内側に沿った位置に土塁或いは柵列などの施設の痕跡は確認できなかった。

ついで諸般の事情から、残っていた調査区の東側から南東側について調査を実施したところ、このSD01に西側と南側を囲まれた区画の内側を東西に区切る位置で、南北に一直線に並ぶ97B区SD12およびSD07を検出した。これらの溝は出土遺物から見て同時に存在したものとみられ、溝と溝の間(SD12とSD07間は約6.8m、SD07とSD01間は約3.0m)は、通路となっていた可能性が高いものと推察された。このSD07の溝底からは、天正4年銘をもつ所謂「護摩札」が出土し、数少ない紀年銘資料として注目された。また地籍図の検討から、調査区の東端あたりで地割りが旧河道様となり、遺跡の東側を流れる正戸川の旧流路が検出されるのではないかと予期されたが、調査の結果、想定通りに東端部で洪水性の堆積を示すNR01が検出された。このNR01により上記SD12・SD07は壊されていた。ただ、それはSD12・SD07が埋められた後のことであることが土層の断面観察によって確認できた。なお調査区の東部から南部さらに後述の97A区の南部にかけて耕作土直下もしくはさらに下の耕作土直下の洪水性の堆積土はこのNR01につながるものである。

97A区 1997年6月～8月 97A区は、96E区と97A区間の調査区である。上記の城館跡の西側が如何なる様相を呈するのか注目された。両調査区の調査所見および事前の地籍図の検討から、96E区SD02・03が調査区を北西から南東に斜行し、97A区SD02・03につづくことが予想され、実際に検出された。このSD02・03の北側すなわち城館の西側では、柱穴を含む土坑多数と甕を設置した土坑などが検出された。こうした遺構から見て建物群が存したことが想定できるが、どれとどの柱穴・土坑が組み合うのか具体的に指摘すること出来ず、課題として残った。SD02・03の南側では、96E区で検出された、このSD02・03に直交する方向の中小の溝によって区切られた屋敷地と推定できる区画のつづきを確認した。この屋敷地より先行するとみられる井戸のSE01・SE02からは、多量の土器・陶器類が出土した。これは一括性の高い遺物群として、16世紀代の土器の編年研究上、良好な資料となるものである。



第6図 グリッド配置および遺構全体図 (1/800)

第4章 層序と遺構

第1節 層序

調査地の基本層序は、調査対象地が国道23号線の北側の北調査区(96A～96D区)と南側の南調査区(96E区、96A・B区)に分かれるなど広範囲に及ぶことから、調査区によって若干の差異がみられる。遺構検出面の標高は、北調査区の北西部で3.70m、南調査区の南東部で1.70mと、北西から南西にかけて次第に低くなっている。

1 北調査区の基本層序

盛り土の有無を別として、北調査区的基本的な土層は、上から水田耕作土・床土、地山の順で、この地山面が遺構検出面である。96A区の東部において、薄い暗茶褐色土の遺物包含層が認められたほか、遺物包含層あるいは整地土層はなく、遺構掘削面を層位的に捉えることは不可能であった。また所々、水田耕作土・床土の下にさらに水田耕作土・床土が存する地点があった。土壌の状態からこれは、昭和40年代の耕地整理に起因するものと推定された。遺構検出面である地山面の標高は、北西部で3.70m、南東部で2.70mと、北西が高く南西にかけて次第に低くなっている(図版3)。

2 南調査区の基本層序

南調査区的基本的な土層は、盛り土の有無を別として、西半部と東半部とでは異なる。西半部は、上記北調査区の層序と同じで、上から水田耕作土・床土、地山の順で、この地山面が遺構検出面である。これに対して、東半部(97A区の南部から97B区にかけて)は、水田耕作土・床土、洪水性の堆積土層、地山の順で、この地山面が遺構検出面である。なおこの洪水性の堆積土層中に水田耕作土層と見られる土層が存することからみて何度か洪水に見舞われていることが窺える。いずれにしても北調査区同様に、整地土層等はなく、遺構掘削面を層位的に捉えることは不可能であった。遺構検出面である地山面の標高は、北西部で2.90m、南東部1.70mと、北西が高く南西にかけて次第に低くなっている。北調査区と比べると、全体的に約1.0mほど低くなっている(図版9)。

第2節 検出した遺構

今回の調査で検出した遺構は、溝(SD)82条、井戸(SE)29基、土坑(SK)927基、掘立柱建物(SB)3棟以上、その他性格不明の遺構(SX)3基および自然流路(NR)1条である。

検出遺構の総数

	SD	SE	SK	SX	NR	合計
北調査区	38	7	123	2	0	170
南調査区	44	22	804	1	1	872
小計	82条	29基	927基	3基	1条	1042
備考						

北調査区の検出遺構数

	96A区	96B区	96C区	96D区	
SD	1				38条
	17	3		2	
		3	8	4	
SE	2	0	3	2	7基
SK	46	10	20	47	123基
SX	2	0	0	0	2基

南調査区の検出遺構数

	96E区	97A区	97B区	小計
SD	1			44条
	4	1		
	25	3	10	
SE	9	2		22基
		3	8	
SK	1		3	804基
	327	332	141	
SX	1	0	0	1基
NR	0	0	1	1条

第1表 検出遺構数

これらは、その埋土中から出土した遺物の年代からみて15世紀中葉～17世紀後葉および18世紀後葉～19世紀中葉の時期のものともみなされる。遺構は、既述のようにいずれも基本的には同一面上、すなわち耕作土・床土の直下の地山面で検出されたものである。

遺構の報告は、国道23号線の北側の北調査区（96A区～96D区）と南側の南調査区（96E区・97A区・97B区）に分けて、主な遺構の個々についてその調査所見を記し、遺構の相互関係・時期区分など遺構の変遷については、第7章の第1節で述べることとする

なお遺構番号については、発掘調査に際して通番で付与することを考えたが、工程上、2つの調査区を同時に発掘調査することが避けられなくなったため、調査における便宜を考えて、調査区毎で付与することとした。その際複数の調査区にわたる遺構については、可能な限り同一番号をそれぞれの調査区で付けることにした。こうした事情をふまえ、報告にあたっては、遺構番号は、原則として発掘調査時に付した番号を用いて、96A区SD17などと遺構番号の前に調査区名を冠して表記することとした。そして調査区をまたがって検出された遺構については、些か表記が長くなるきらいがあるが、さいわい例数が少ないため、便宜的措置として、遺構番号が同じものについては、例えば96C・96D区SD06という具合に調査区名を併記し、遺構番号が相違する場合には、96C区SD09（96D区SD05）というように括弧内に併記する。

また、遺構の切り合い関係の記述で、特にふれない限りは出土陶器の編年観と切り合い関係が齟齬していないものとする。

1 北調査区の遺構

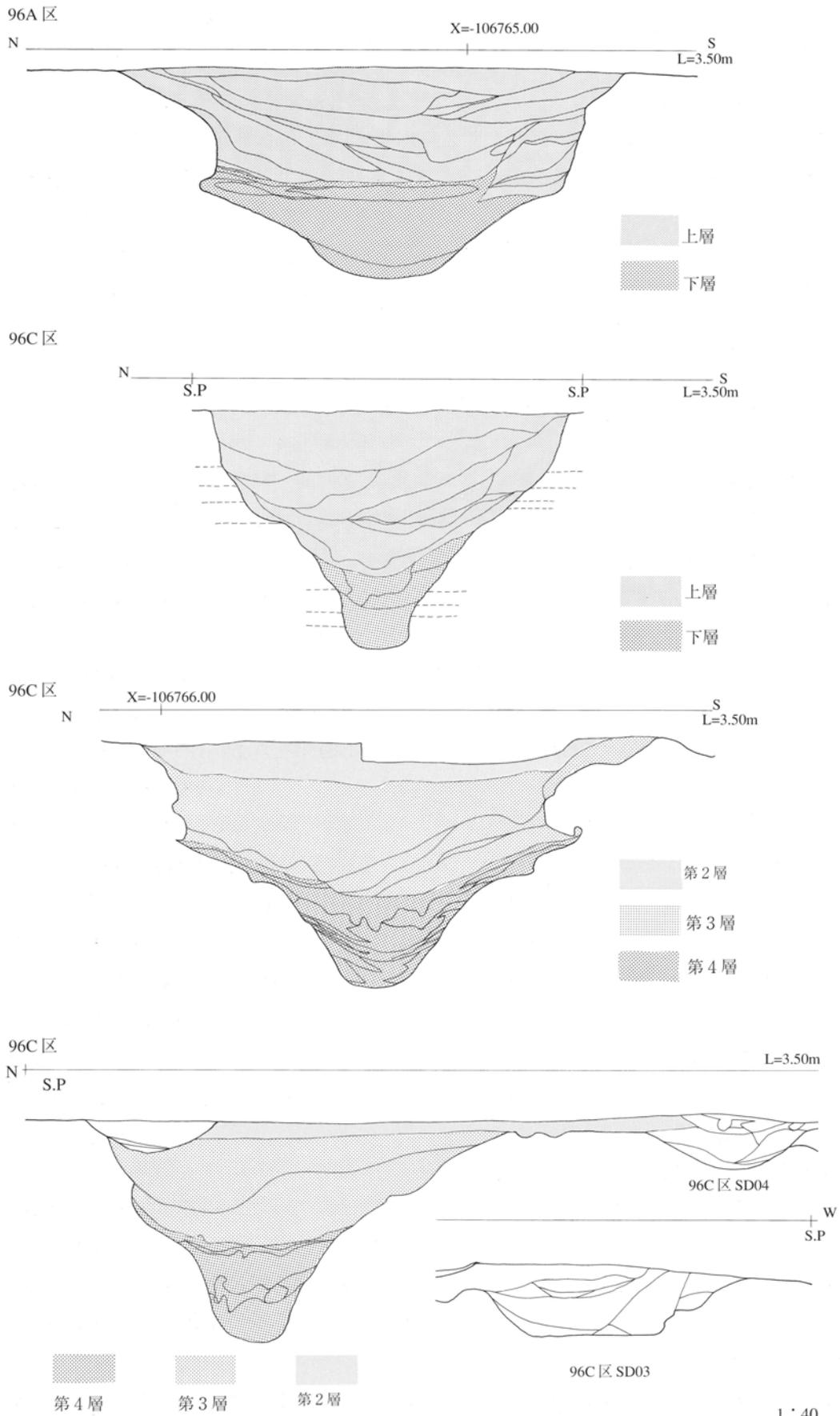
北調査区（96A区～96D区）で検出された遺構は、溝（SD）38条、井戸（SE）7基、土坑（SK）123基、その他（SX）2基で、このほかに柱穴とみられる土坑から2棟の掘立柱建物（SB）が推定される（図版4～8）。

以下、主な遺構について、溝、井戸、土坑、掘立柱建物、その他、の順で報告する。

溝（SD）

96A・B・C区SD01 この96A・B・C区SD01は、基本的には、北調査区の西壁中央から約60mほど一直線に東にむかって延び、96C区の中央で南に折れて約26m南進したのち、再び北東へ70度ほど屈折し96C区の北東隅へ向けて直進する、そして96D区の北西隅で南東方向に80度ほど三度目の屈折して直進して北調査区の東壁にぶつかり調査区外へ延びていく、という溝である。便宜的に二度目の屈折までの総検出長約86mを「96A・B・C区SD01」と呼称し、二度目の屈折以東を「96C・D区SD06」と呼称する。これは、下層（SD06の第2・3層）においては、埋土は連続するのであるが、SD06とする部分の上層（第1層）は、後世まで水路として利用されてた際の埋土であり、こうしたことから遺構の検出当初、両溝は切り合い関係にあるとみられた故である。ただ両溝の形状は若干異なることおよび交点には土手状の高まりが設けられ区別されていること等から存続期間を同じくするものの、掘削の時期に前後がある可能性もある。この96A・B・C区SD01は、検出長が長いいためか、地点ごとに溝の形状は若干ことなる。西からみていくと、96A区では概ね断面形が「V」字形で、溝幅3.2～3.8m・深さ1.4m前後であるが、96B区に入って間もなく溝底が段差をつけて0.3mほど深くなり、断面形が所謂「葉研掘」状を呈する。溝幅2.4～3.0m・深さ1.5～1.6m前後。96C区に入り南折する辺りから再び断面形が「V」字形を呈すようになり、96C・D区SD06の西端に至る。溝幅1.8～2.8m・深さ1.1～1.6m前後。96C・D区SD06との境は、幅1.0mほど土手状の高まりになっており、その部分の深さは0.8mである。溝の深さは、いうまでもなく検出面の高さに左右されるため、溝底の標高を記すと、96A区の西端で1.91m、96B区の深くなったところで1.61m、96C区の南折する辺りで1.60m、南端近くで1.84m、96C・D区SD06との境の土手状の低い高まりで1.96mである。埋土は、これまた地点のよって若干の相違はあるが、概ね斑土状のブロック土を基調とする堆積の上層と、粘質シルトを基調とする下層の二層に大きく分けられる。概して下層の上部には、植物遺体を多く含む土層がみられ、場所によっては、相当厚くみられる箇所もある。なお上層は、地点によって若干異なるが大形のブロック土がみられるなど、自然堆積とするにはいささか不自然な状況もあり、人為的に埋められたものと推察する。下層からは、古瀬戸後期第3小期～大窯第4段階および連房式登窯第1～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が、上層からは、大窯1～4段階および連房式登窯第1～2小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96C・D区SD06 上記96A・B・C区SD01の東端から北東に直進し、96D区の北西隅で90度ほど折れて南東方向に直進し、北調査区の東壁にぶつかり調査区外へ延びていく、という溝で



第7图 96A·B·C区 SD01 断面图

ある。溝幅2.0～3.6m、深さ1.1～1.2mと、溝幅にばらつきが認められる。溝底の標高は、西端で1.56m、96D区の屈折部近くで1.9～1.7m、調査区東壁近くで1.62mである。西端の96A・B・C区SD01との交点には、長径2.0m・短径1.2m、深さ0.3m（土手状の低い高まりからは深さ0.7m 底の標高1.27m）の不整形の円形の土坑状の凹みがみられる。当初別の遺構の可能性も考えられたが、埋土に変化はなく、溝底に設けられた土坑状の凹みと推察する。埋土は大きく三層（上から第1～3層）に分けられる。第3層は、粘質シルトを基調とするもので層状堆積を呈し、植物遺体を含む。96A・B・C区SD01の下層に相当する。第2層は、砂質・粘質シルトを基調としブロック土が多く混じる土層で、96A・B・C区SD01の上層に相当するが、地山ブロック土が少ないためかブロック土混入が少なく感じられる。第2層が堆積したのち、水路（排水路）として利用されたようで、第1層は、その埋土である。砂層・砂質シルトを基調とするもので、層状堆積を示す。96C区からD区にかけての南西～北東溝部分には、その北側肩部に土をつめた土俵を並べて杭を打ち込むなどして幅を狭めるなどの造作が認められる。第3層からは、古瀬戸後期第3小期～大窯第1段階・大窯第3段階および連房式登窯第1～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が、第2層からは、古瀬戸後期第4小期および大窯3段階～連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土し、第1層からは、大窯第3～4段階および連房式登窯第3～11小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A・B・C区SD02 北調査区の西端から中央にかけて検出された96A・B・C区SD01の北側5.0～3.0m（東に移るにつれて幅狭となる 溝の心々間距離は7.0～5.5m）のところを併走する東西溝である。96C区に入ってSD01は南に折れるが、SD02はそのまま東～やや北東方向に延びて調査区の北壁に入っている。幅0.5～1.0m・深さ0.2～0.3mで、断面形は逆半円形～上方が大きき開いた「U」字形を呈する。埋土は、粘質・砂質シルトを基調とするもので、層状堆積を示す。年代を特定し得る遺物の出土はない。96A・B・C区SD01とは、96B区SD04により僅かにつながるほか、その位置関係からみて同時存在したものと推定する。

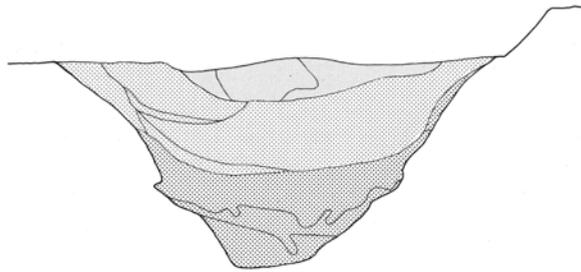
96B・C区SD03 北調査区の中央西寄り、96B区から96C区にかけて96A・B・C区SD01に沿う形で検出された溝である。SD01の南北部分では4.5～6.0mほど南側を、東西部分では、3.0～3.5mほど西側を併走し、SD01と96C・D区SD06の交点の西で終息する。96C区SD04によって切られる。幅は1.0～2.0m・深さ0.3～0.5mで、断面形は、浅い皿形～逆台形を呈す。埋土は、粘質・砂質シルトを基調としたもので、層状堆積を示す。埋土中から、古瀬戸後期第4小期および連房式登窯第1～3小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96B・C区SD05 北調査区の中央南寄り、96B区から96C区にかけて検出された東西溝である。溝の東端部は、上記の96A・B区SD03の南延長線上に相当し、溝の東延長線上、約4.2mの所が96A・B・C区SD01と96C・D区SD06の交点にあたる。遺存状態の良いところで幅2.2～2.5m・深さ0.7mで、断面形は、逆梯形を呈する。埋土は、シルト・粘土を基調とするもので、層状堆積を示す。埋土中から、古瀬戸後期および大窯第1段階～連房式登窯第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96D区SD04 北調査区の東部、96C・D区SD06の南側に沿うように、途切れ途切れに検出された溝である。SD06との間は、5.5mで、溝の心々間距離は北側で7.2m、西側で8.0mほどであ

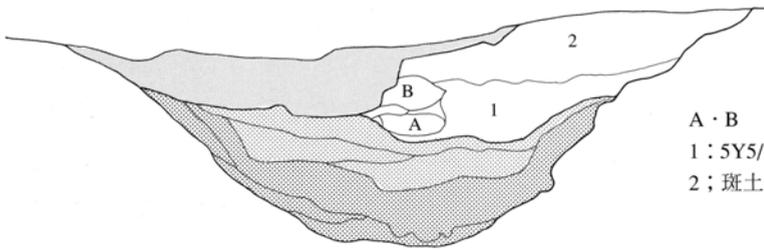
96C区

S ——— S.P ——— S.P ——— N
L=3.50m



96D区 (西)

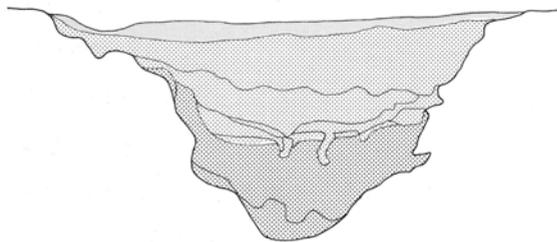
E ——— S.P ——— S.P ——— W
L=3.50m



A・B 土俵
1: 5Y5/1 砂質シルト
2: 斑土

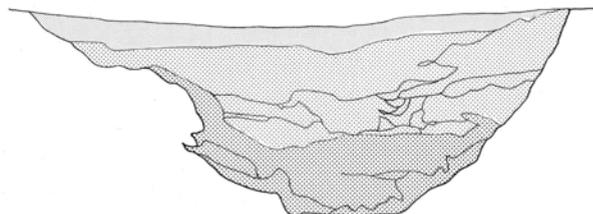
96D区 (中)

S ——— S.P ——— S.P ——— N
L=3.50m



96D区 (東)

S ——— S.P ——— S.P ——— N
L=3.50m



■ 第1層
■ 第2層
■ 第3層

第8図 96C・D区 SD06 断面図

1:40

る。幅0.6～0.8m・深さ0.1～0.3mで、断面形は浅い皿形を呈する。埋土は、砂質・粘質シルトを基調とするもので、層状堆積を示す。埋土中から、大窯第1～3段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。なおこのSD04の南西延長線上には、96C区SD08が位置し、埋土の状況などから同一の溝の可能性があるが、SD08が整然とした直線的である点で、若干相違するのではないかとの印象をもつ。

96C区SD09（96D区SD05） 北調査区の東部、96C区の南東隅から96D区の南西隅で検出された北西方向に伸びる溝である。上記96C区SD08に交差する直前で終息している。幅1.5m・深さ0.5mで、断面形が逆梯形を呈する。埋土は、粘質・砂質シルトを基調とするが、部分的に炭化物層がはいる。96D区の溝底に方形の土坑状の落ち込みがあるが、土坑の重複を見逃した可能性もある。埋土中から、古瀬戸後期第4小期および大窯第1～3段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。なお、この96C区SD09（96D区SD04）は、位置的にみて、96C・D区SD06によって西側と北側が画された区画の南側を区切る溝の可能性はある。

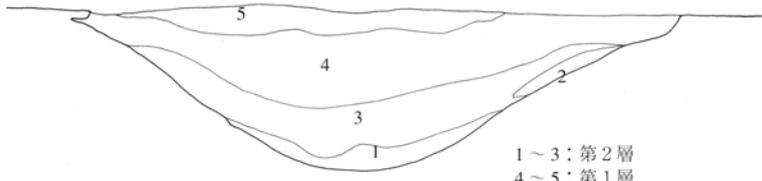
96A区SD10 北調査区の西部、96A区の南部を東西に走る溝である。幅1.0m・深さ0.6mで、断面形は逆台形～半円形を呈する。埋土は、粘質シルト・砂質シルトを基調とするもので層状堆積を示す。埋土中から、古瀬戸後期第4小期および大窯第1～2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。当初96A区SD22が取り付け、SD22が東へ延長された（SD21部分）のちはSD23とで接続する。また96A区SD16・同SD19・同SD11・同SD17に切られる。

96A区SD21（SD22） 北調査区の西部、上記96A区SD10の北側0.5m～1.5mのところを併走する溝である。96A区SX02の西側が溝の東端部で、南北溝のSD17によって切られ、溝底で検出された。切り合い関係からみて、上述のように当初は、SD10の北側を併走溝の（心々間距離は1.8m）したのち直角に南折しSD10に取り付いていたが、のちに東へ延長され（SD22部分）、SD10とはSD23でつながれることとなったものと推定される。SD10とSD22の溝の心々間距離は3.0～3.5mほどとなる。幅1.1m・深さ0.5mで、断面形は逆台形を呈す。埋土は、粘質シルト・砂質シルトを基調とするもので層状堆積を示す。また部分的に炭化物が多量に含まれる。埋土中からは、古瀬戸後期第4小期および大窯第1～2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土したが、特に東端部の底面で出土した土器群は、大窯第2段階の一括資料である。96A区SD16・同SD19・同SD11・同SD17・同SD02に切られる。

96A区SD15 北調査区の西部、上記96A区SD22（SD21）の北側2.0～2.5mを併走する直線的な東西溝である。溝の東端は、96A区SD22（SD21）の東端と揃っており、南北溝のSD17の溝底で検出された。SD22（SD21）との、溝の心々間距離は3.5～3.8mである。幅1.5m・深さ0.55m前後で、断面形は、大きく上方が開く「U」字形を呈す。溝の西端は、96A区SD24によって壊されている。また96A区SD16・同SD11・同SD02に切られる。埋土は、粘質シルトを基調とするもので、層状堆積を示す。より子細に見ると堆積物は、溝の南側から流れ込んだように看取され、上述SD22は北側から流れ込んだようにも見て取れる。これら溝間に何らかの構築物（路面など）があったのであろうか。埋土中からは、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A区SD24 北調査区の西部、96A区の南西部で検出した東西溝で、上記96A区SD15の西延

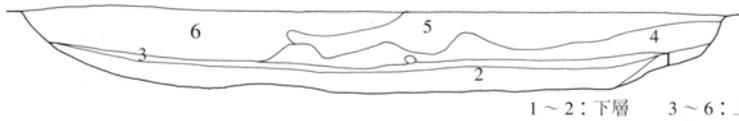
96C区 SK23



- 1: 斑土
- 2: 7.5YR6/1 中粒砂
- 3: 7.5YR2/1 シルト
- 4: 7.5YR3/4 粘質シルト
- 5: 7.5YR5/8 粘質シルト

1~3: 第2層
4~5: 第1層

96A区 SK02



- 1: 10BG4/1 砂質シルト
- 2: 10YR4/1 粘質シルト
- 3: 10YR3/1 粘質シルト (含植物遺体)
- 4: 2.5Y3/1 シルト
- 5: 10YR3/1 粘質シルト
- 6: 2.5Y6/1 砂質シルト

1~2: 下層 3~6: 上層

96A区 SD10・SD22



攪乱

96A区 SD15



96D区 SD05



96D区 SD04



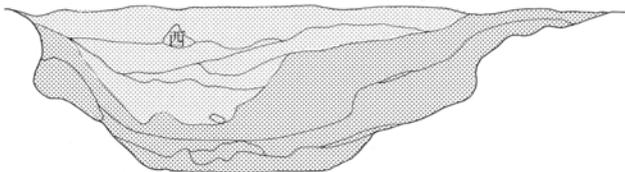
96B区 SD02



96B区 SD02

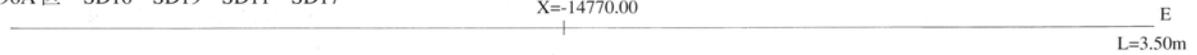


96A区 SD24



- 上層
- 下層

96A区 SD16・SD19・SD11・SD17



第9図 北調査区 溝・土坑断面図

1:40

長部に重複して掘削された溝である。幅2.3m・深さ0.85mで、断面形は逆台形を呈す。96A区SD07・同SD06を切り、同SK02および同SD15に切られる。埋土は、大きく上下2層に分けられ、下層は、砂質シルト・シルトを基調とし砂層が混じるもので、上層は粘質シルトを基調とする土層からなる。埋土中から、古瀬戸後期第3小期～大窯第2段階および大窯第4段階～連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A区SD13(SD16) 北調査区の西部、96A区の南壁中央から北へ12.0m延びたのち、西へ直角ぎみに折れて7.6mほど西進しSX01に取り付く溝で、調査の途中まで、南北溝部分を96A区SD16、東西溝部分を96A区SD13と便宜的に呼び分けていた。南北溝(SD16)は、幅1.4m・深さ0.40～0.30mで、北端近くの溝底が一段高くなっている。東西溝部分は幅0.7m・深さ0.30mで、断面形は逆台形～逆半円形を呈する。埋土は、粘質・砂質シルトを基調とするもので層状堆積を示す。埋土中からは、大窯第1～2段階および大窯第4段階～連房式登窯第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。96A区SD10・同SD21・同SD15を切っている。

96A区SD17(SD12) 北調査区の西部、96A区の中央東寄りで検出された南北溝である。上記SD13の南北溝部分の東側2.5mのところ(溝の心々間距離は3.4～4.0m)を併走し、北端は、96A・B・C区SD01に直交する形で取り付く。幅2.5～1.7m・深さ0.30mで、断面形は、東側斜面が急な逆半円形を呈する。96ASD10・SD21・SD5を切り、SD11に切られる。古瀬戸後期第4小期および連房式登窯第2～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A区SD19 上記SD17とSD13(SD16)間で検出された南北溝である。幅1.0m・深さ0.30～0.20mほどで南壁から約6.0mほど北進した地点で北端部は攪乱土坑により壊される。おそらくそのあたりで溝は終息するものと推定される。断面形は浅い皿形を呈する。埋土は、砂質シルトで、大窯第1～2段階および大窯第4段階～連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A区SD11 北調査区中央やや東側、上記SD17の西側2.3mほどを併走する南北溝で、北端部がSD15との交点付近から北は、幾分西に振り、SX01の北側肩あたりで終息する。幅0.7m・深さ0.5mほどで、断面形が「U」字形を呈する。96A区SD10・SD21・SD15といった南北溝、96A区SD17・SD20といった東西溝および96ASK11・同SX01を切っている。埋土は、粘質シルトを基調とするもので、連房式登窯第3～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A区SD02 北調査区の西部、96A区の中央西寄りで検出された不定形の南北溝である。幅0.3～0.7m・深さ0.1mほどで、断面形は、浅い皿形を呈する。溝の北端は、SX01に取り付く。96ASD14・SD15・SD22・SD10・SD07を切っている。大窯第3段階および連房式登窯第1～3小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96B区SD06 北調査区の中央南寄り、96B区の南東部で検出された東西溝である。溝の東端は、攪乱溝によって壊され、東延長線上に位置する96BSK23との関係は不明である。幅0.8m・深さ0.25mで、断面形が逆梯形を呈する。埋土は、粘質シルトで、大窯第1段階および大窯第4段階～連房式登窯第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

井戸(SE)

96A区SE01 北調査区の西部、96A区の中央北寄りの位置にある井戸。SD01の埋土を掘削してつくられている。掘形は径1.7mほどの略円形で、ほとんど垂直に掘削されている。木枠などの井戸側施設は認められなかったが、底面が地山の砂礫層へ達していることから井戸とした。埋土中より連房式登窯第8小期に編年される瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96A区SE02 北調査区の西部、96A区のほぼ中央で検出した井戸。攪乱坑の底面で検出されたため、周辺の遺構との切り合い関係は不明で、また埋土中から年代を特定し得る遺物の出土はなかった。木枠などの井戸側施設は認められなかったが、底面が地山の砂礫層へ達していることから井戸とした。略円形(1.25×0.90m)の掘形でほとんど垂直に掘削されている、というその形状および埋土が、上記96A区SE01に酷似することからみて、96A区SE01に相前後する時期のものであろうと推定する。

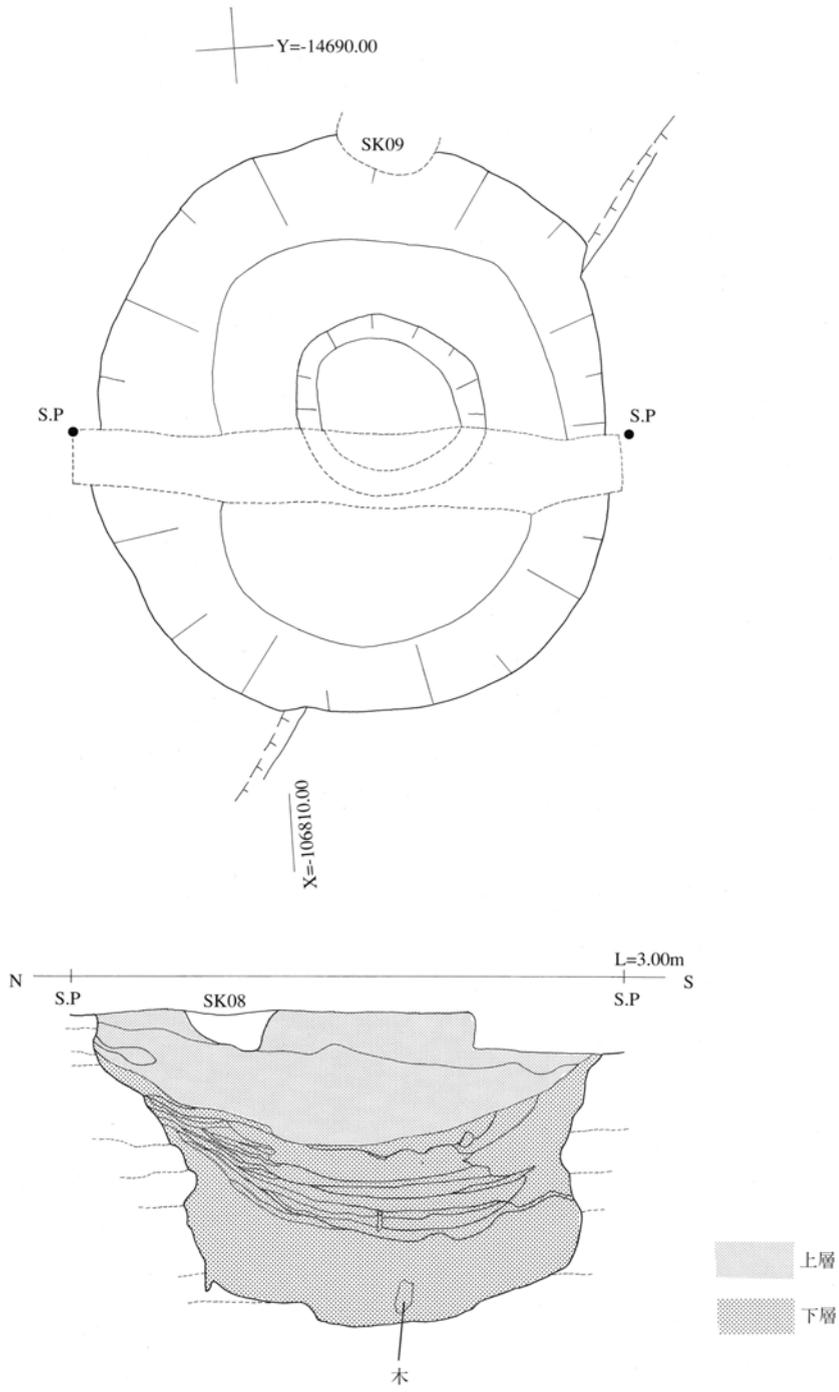
96C区SE03 北調査区の中央やや東寄り、96C区の東部で検出された井戸。径0.75mほどの円形の掘形で、ほぼ垂直に掘削されている。木枠などの井戸側施設は認められなかったが、底面が地山の砂礫層へ達していることから井戸と推定した。時期の判明する遺物の出土はなかったが、これまた上記96A区SE01および後述の96C区SE04に掘形の形状・埋土が酷似することから、これらに相前後してつくられたものと推定する。

96C区SE04 北調査区の中央やや東寄り、96C区のほぼ中央で検出された井戸。SD01の埋土を掘削してつくられている。径0.70mほどの略円形の掘形で、ほぼ垂直に掘削されている。井戸側等の施設は認められなかったが、底面が地山の砂礫層へ達していることから井戸と推定した。埋土中より、連房式登窯第8～11小期に編年される瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96C区SE05 北調査区の中央やや東寄り、96C区の北壁沿いで検出された井戸。径0.80mほどの略円形の掘形で、ほぼ垂直に掘削されている。井戸側等の施設は認められなかったが、底面が地山の砂礫層へ達していることから井戸と推定した。埋土中より、連房式登窯第8・9小期に編年される瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96D区SE01 北調査区の東部、96D区の南西部で検出された井戸。掘形は略円形(3.0×2.7m)で、深さは1.5mをはかる。井戸側施設は認められないが、底面の中央やや東寄りに径0.9m・深さ0.15mほどの円形の凹みがある。その位置、径からみて結桶を設置した痕跡である可能性が高く、結桶を積上げて井戸側としていた公算が大である。埋土の第1層は地山ブロック土で、井戸側の裏込め土と考えられる。ただ土層断面図を作成した面は、位置的にみて結桶などの抜き取り痕が看取されなければならないが、現場での調査の際にこれを見落とした可能性がある。抜き取りの際に裏込め土が内側に崩落して判別し難くなっていたのであろうか。第2～25層は層状堆積を示し、その上の第26層は地山ブロック混じり土で埋め立て土とみられる。第2～25層の堆積期間をどう考えるかであるが、井戸の廃棄後、井戸側が抜き取られたのちしばらく放置された期間が存したのち再び埋め立てられた可能性もある。埋土中からは大窯第2～5段階および、連房式登窯第1～5小期に編年される瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。造井年代については判然としないが、廃絶年代については、ひとまず連房式登窯第5小期ごろが想定できる。

96D区SE02 北調査区の中央やや東寄り、96D区西壁近くで検出された井戸。径0.70mほどの略円形の掘形で、ほぼ垂直に掘削されている。井戸側等の施設は認められなかったが、底面が



1:40

第10图 96D区 SE01 实测图

地山の砂礫層へ達していることから井戸と推定した。近接する上記96C区SE04などに掘形の形状・埋土が酷似することから、96C区SE04に掘形の形状・埋土が酷似することから、96C区SE04などに相前後してつくられたものと推定する。

土坑 (SK)

96C区SK23 北調査区の中央南寄り、96C区の南壁近くで検出された土坑である。96B・C区SD05の南側、96B・C区SD05の東延長線上に位置するが、土坑の西側が攪乱溝で壊されており、SD05との関係は不明である。現長2.8m・幅3.2m・深さ0.80mで、東西に長い推定楕円形を呈する。埋土は、大きく2層に分けられる。下層は、シルト・砂を基調とするもので、上層は、粘質シルトを基調とする。埋土中から、大窯第2～3段階および連房式登窯第1～3小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96A区SK02 北調査区の西部、96A区の南西部で検出された長6.4m・幅3.7m・深さ0.5mの楕円形の土坑である。96A区SD14・SD24・SX01を切っている。埋土は、植物遺体を多く含む薄い土層を境にして大きく上層・下層の2層に分けられる。下層は、砂質・粘質シルト層で、上層は砂質・粘質シルト層を基調とするブロック土混じり層である。埋土中からは、木製品・石製品など各種製品が出土した。瀬戸・美濃窯産の陶器は、古瀬戸後期第4小期、大窯第2・4段階および連房式登窯第1・3～6小期のものが出土した。

96A区SK01 北調査区の西部、96A区の中央南寄りで検出した径0.20m・深さ0.20mほどの円形の小土坑である。96A区SD24の埋土上に掘削されたもので、砂質シルトの斑土の埋土中から、銭貨が5枚（宣徳通宝・政和通宝・天聖通宝・鏽着のため銭文不詳2）鏽着して出土した。

掘立柱建物 (SB)

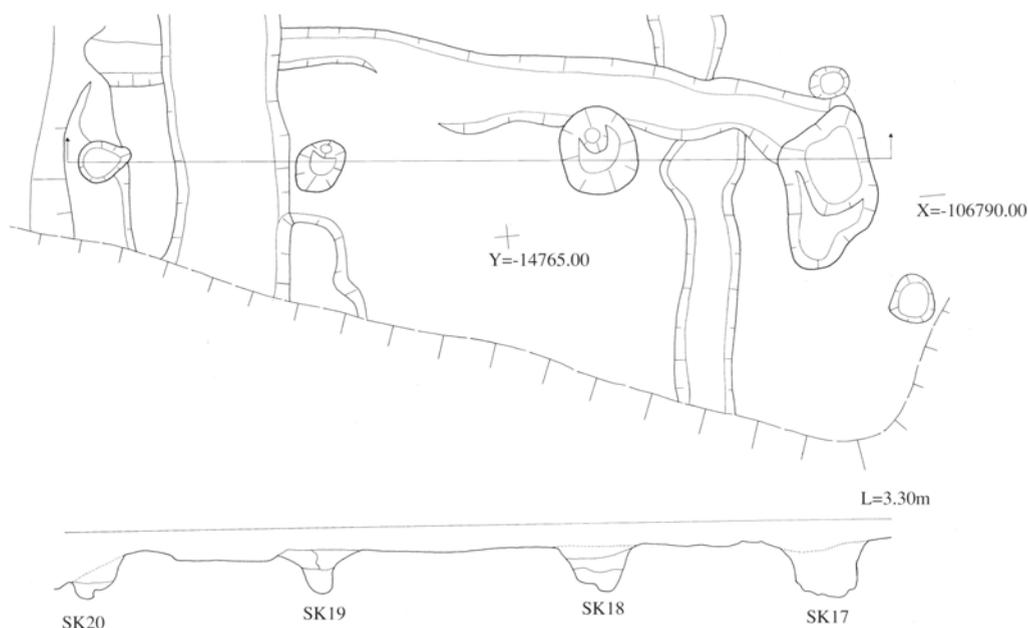
96A区SB01 北調査区の西部、96A区南東隅で検出した東西方向（幾分東南東に振れる 棟方位E-5.5°-S）に一直線に並ぶ96A区SK17～20について、いずれの土坑（柱穴）も他の遺構に切られており、形状等が若干異なるが、底面の標高は概ね2.70cm前後と整っており、SK18からは礎盤もしくは柱根の一部とみられる木片が出土したことなどから、掘立柱建物の一部と推定した。柱間は、西から1.8m・2.10m・1.90mで、真中の柱間の間隔が広い。建物は南側に展開し、遺存する柱列は北側の桁行三間分と推定する。時期については、埋土から年代を特定し得る遺物の出土はなく判然としないが、SK20が96A区SD17（古瀬戸後期第4小期および連房式登窯第2～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土）に切られることおよび柱列の方向が、北側5.0mにある東西溝96A区SD10（古瀬戸後期第4小期および大窯第1～2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土）とほぼ一致をみることからみて、96A区SD10と相前後する時期のものとするのが穏当な見方と考える。

96C区SB01 北調査区の東部、96E区の南西部で検出した掘立柱建物（棟方位N-52°-W）で、96C区SK01・02・04（03）・05と同SK08・09・11・12からなる桁行三間梁行一間の建物

一棟を想定する。前者の土坑列が南側の桁行、後者の土坑列が北側の桁行をなす。桁行5.4～5.6m・梁行3.3m。柱間は南側の桁行で、西から1.7m・1.8m・1.9m、北側の桁行で、西から1.8m・1.9m・1.9mでとなっておりやや歪な配置となっている。時期については、埋土から年代を特定し得る遺物の出土はなく判然としないが、96D区SE01（大窯第2段階～連房式登窯第5小期に編年される瀬戸・美濃窯産陶器が出土）の埋土にSK08は穿たれており、上限年代は、この井戸の廃絶以降の年代が想定される。ただし下限については、判断する材料を欠く。このほか96C区SB01の周辺には柱穴とみられる土坑がほかにも数多く展開しており、立て替えなどを含め複数の掘立柱建物が存したことは確実にみられる（この96C区SB01に関連する柱穴等が含まれる可能性もある）。

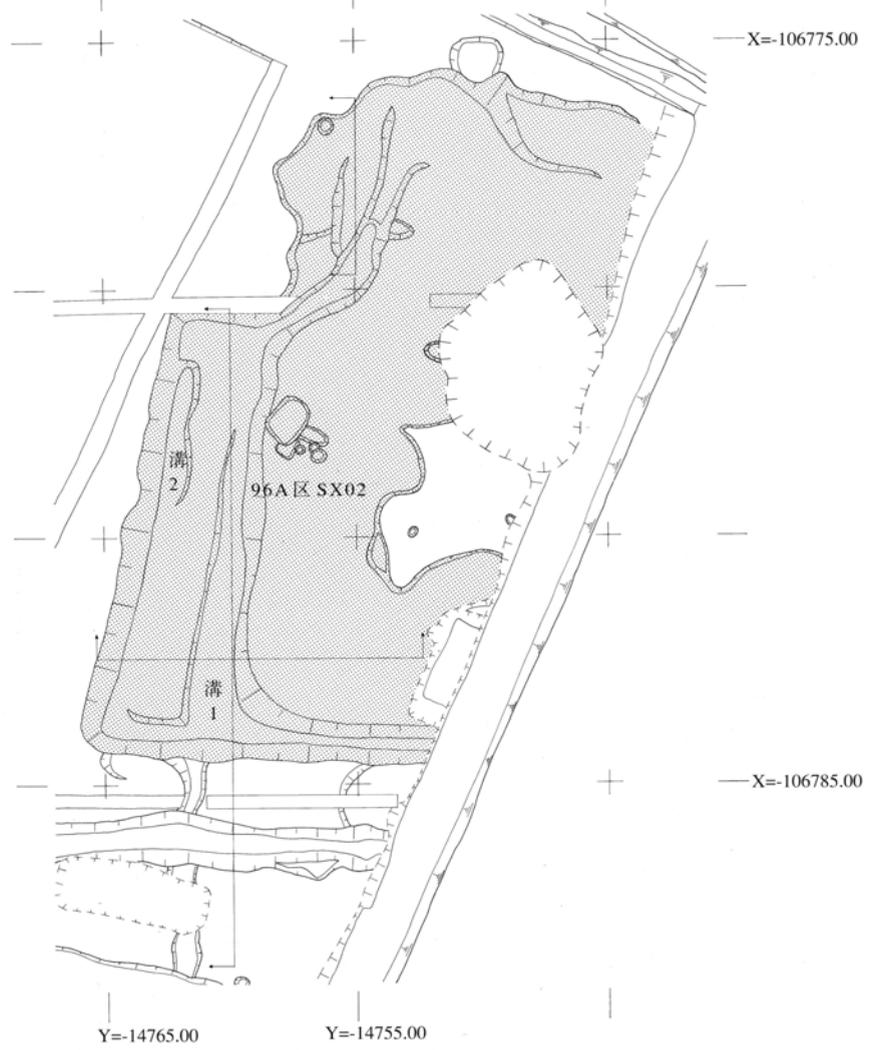
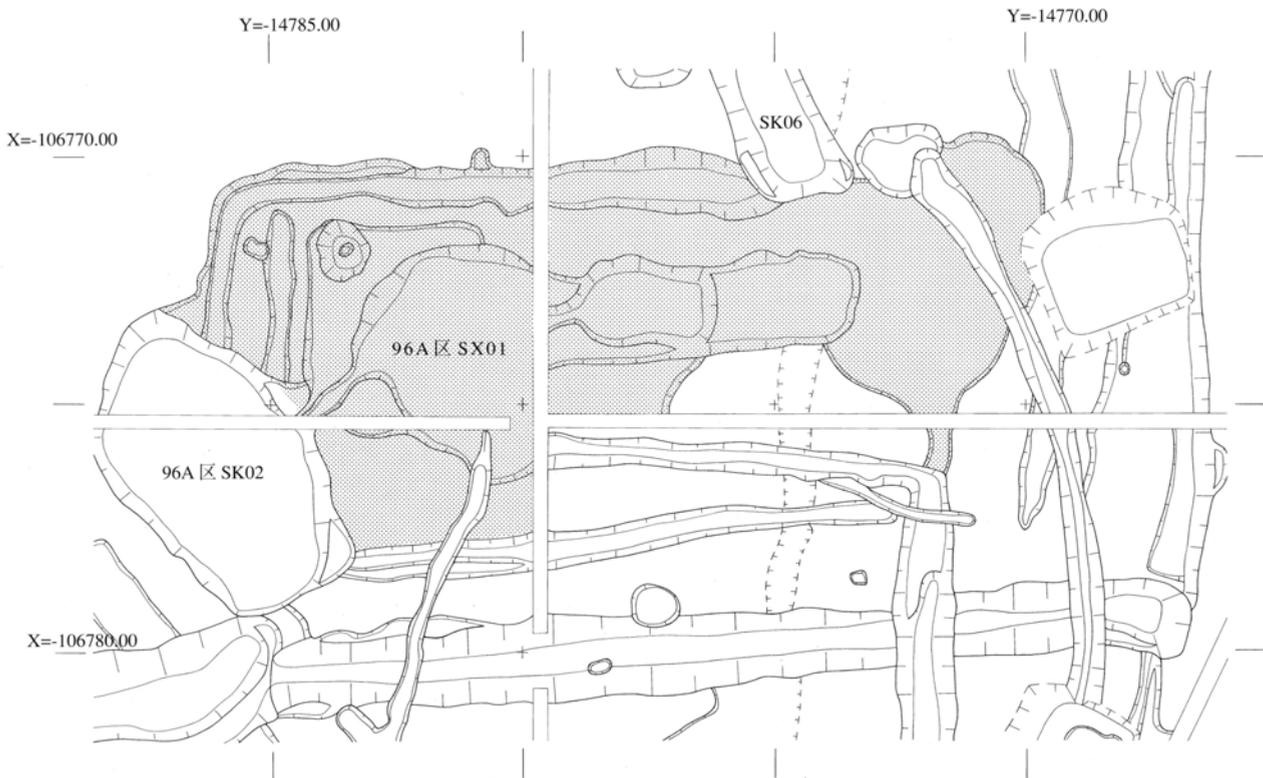
その他性格不明の遺構（SX）

96A区SX01 北調査区の西部、96A区のほぼ中央で検出されたものである。東西16.4m・南北6.5mほどの遺構で、西辺と北辺は直線的で、それぞれほぼ南北・東西にのびているのに対して南辺と東辺は不整形を呈する。西側および北側の掘形斜面は急で、壁沿いに溝（SD05）がめぐり、このSD05の南北溝部分の東側0.8mほど間隔をおいてSD06が併走する。これに対して南～東側の掘形は不明瞭で、傾斜も緩やかになっている。遺構の中央には不整形の凹凸がみられ、北西隅の上記SD06とSD05の内側に径1.1m・深さ0.4mほどの不整形の円形の土坑が位置する。中央の大形の凹みから幅狭な浅い溝が南西方向へ延びているが、96A区SK02によって壊されており取り付き先は不明となっている。埋土は大きく上層と下層の二層に分かれる。下層は、粘質シルトを基調とするもので、大窯第2・3段階および連房式登窯第2小期の瀬戸・美濃窯産

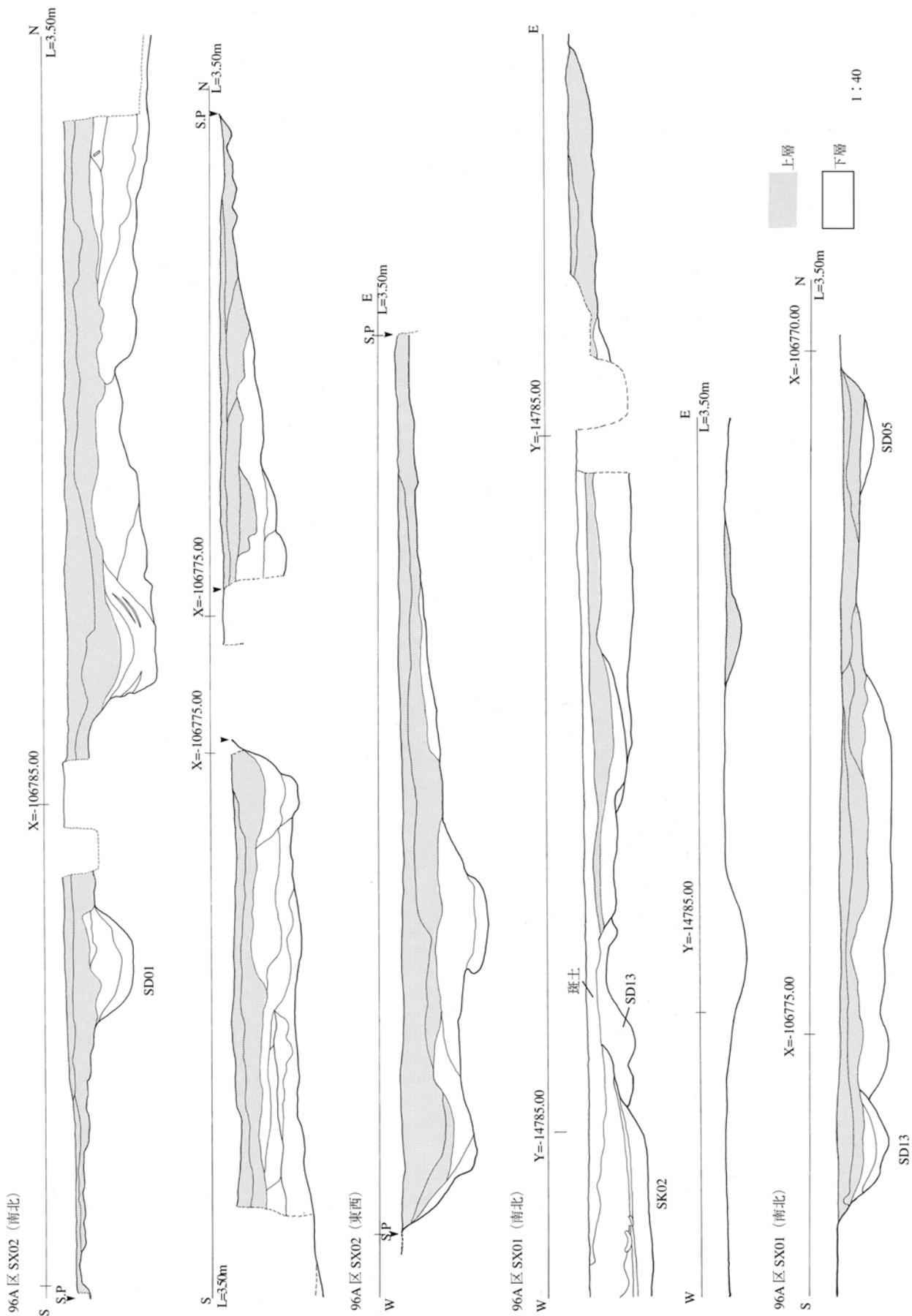


第11図 96A区SB01実測図

1:40



第12图 96A区SX01(上)·同SX02(下)平面图 1/150



第13图 96A区 SX01·同SX02断面图

の陶器が出土した。上層は砂質シルトを基調とするもので古瀬戸後期第4小期および連房式登窯第1～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。最上層には地山ブロックが多量に混じり、人為的な整地土の可能性もある。ちなみに96A区SD13は下層の堆積後に掘削された溝である。遺構の南西部は96A区SK02によって切られ、南辺部の一部をSD02が切っている。また北西部は96A区SK06・SK11・SD11によって切られている。現在のところその性格については判然としないが、遺構の軸方位を同じくすることから、96A・B・C区SD01と96A区SD15もしくは96A区SD17(SD12)を意識してその間に構築されたものとみられる。出土遺物の編年観からみて後者の可能性が大きいものとする。

96A区SX02 北調査区の西部、96A区の東部で検出されたものである。東西6.5m・南北14.3mほどの遺構で東側が攪乱で壊されている。南辺はほぼ東西に直線的に伸び、西辺の南から3分の2ほどは幾分北北東に振れて直線的にのび短く東に直線的に折れ曲がったのち不整形な円形にのびつつ北辺を構成していく。二辺が直線的になっているという形状は、96A区SX01と同様で、さらに南側および西側の掘形斜面は急で、壁沿いに溝がめぐるという点も類似している。この溝は調査時には面的に捉えることができなかったが、土層断面の検討から、当初、溝（便宜的に「溝1」とよぶ）は東から南壁沿いに4.5mほど西進したほぼ直角に北に折れて、約8.0m北進したのち北東方向に向きを変えて4.5mほど延びた後に浅くなり終息したようで、この時点では溝1の掘形がこの遺構の南～西側掘形となっていた公算が大である、ということが判明した。そしてそののち何らかの理由で、溝が西側に移されることとなったようで（これを「溝2」と呼ぶ）、溝1を南壁に沿ってさらに2.0mほど西に延ばした後、北北東に振れて直線的に延ばし、さらに短く東に直線的に折れ曲げさきの溝1とつないでいる。その際に溝1、および溝1と溝2の間は、一度掘削したのちに整地を行ない溝2を掘削している。埋土の下層からは、大窯第2段階および連房式登窯第2～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土し、上層からは、大窯第1～3段階および連房式登窯第1～2・3～6小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。なおこの溝2を覆う埋土は南側では、96A区SD10の埋土の上を覆っており、さらに2.0mほど南へ堆積している。こうしたことからみてこの96A区SX02は、SD10との併存・共存関係は確認し難いものとする。また西側にある東西溝の96A区SD17(SD12)とは、方位がややずれるものの概ね併走すると見ることもでき、出土遺物の編年観からみても両者は同時併存していた可能性が高いものとする。遺構の性格については、その構造が上記96A区SX01に類似しており、なにか一定の目的のもとで掘削されたものであることは確かではないかと考える。その究明については、今後の課題としておきたい。

2 南調査区の遺構

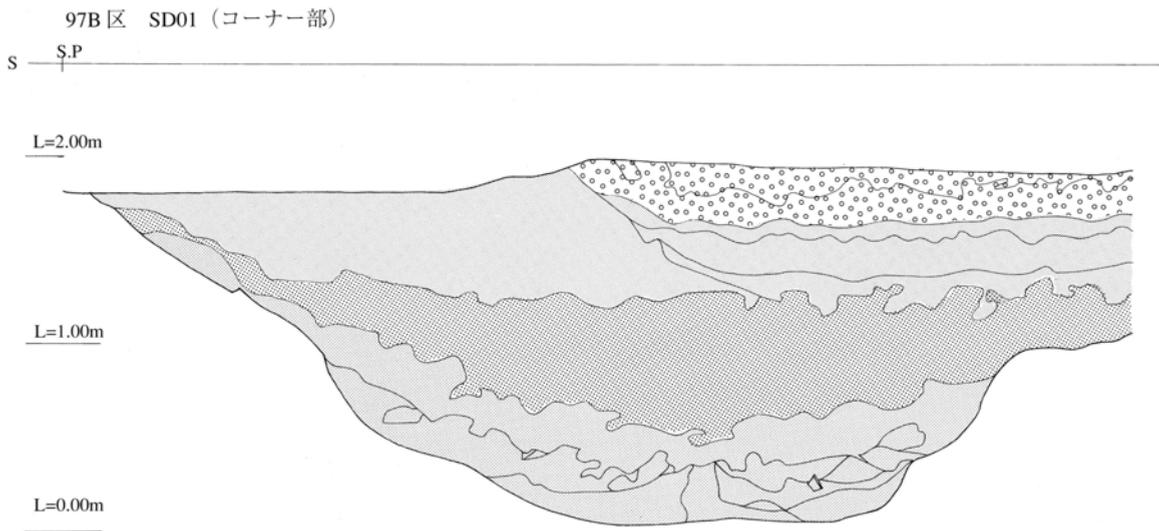
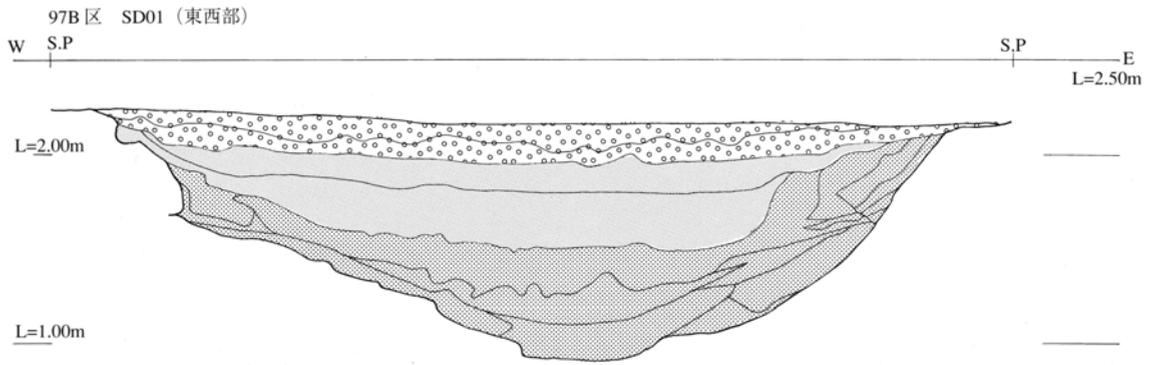
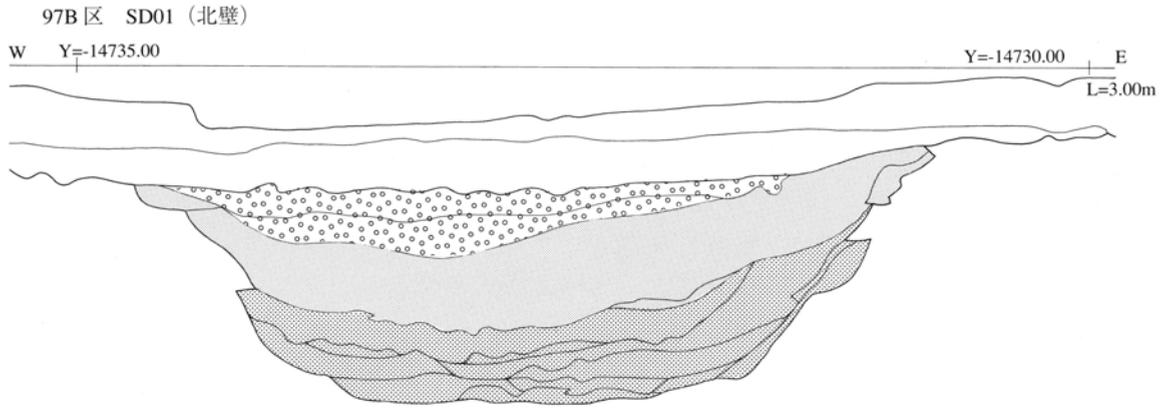
南調査区（96E区・97A区・97B区）で検出された遺構は、溝（SD）44条、井戸（SE）22基、土坑（SK）804基、その他（SX）1基、自然流路（NR）1条である。土坑の中には柱穴とみられるものが多数含まれ掘立柱建物（SB）が幾棟か存したことは確実であるが、柱穴の組合せが判然としないので、掘立柱建物の数については明らかにし得ない。なお、溝はいずれも素掘り

のものである（図版10～14）。

以下、主な遺構について、溝（SD）、井戸（SE）、土坑（SK）、掘立柱建物（SB）、その他（SX）、自然流路（NR）の順で報告する。

溝（SD）

97B区SD01 南調査区東部の97B区、調査前の地籍図等の検討から、大脇城跡（或いは梶川五左衛門の屋敷跡）とされてきた区画（城館）を囲む濠の存在が予見された位置で検出された溝である。97B区西端近くの北壁から南南西へ約33m延びたのち、直角に近い角度で屈折して南東方向へ36mほどすすみ南壁東端部辺りで調査区外へ延びていくもので、略「L」字形の平面形を呈する。南北溝部分では、溝幅は、3.7～5.0mで、南に移るにつれて幅広となる。溝底には凹凸がみられ、深さは南端近くを除けば1.4～0.9mで、溝底の標高は、0.8～1.0mである。東西溝部分では、溝幅は、5.0～6.7mほどで、東西溝より幅広となる。注目すべきは溝底の形状で、南北溝の南端部から東西溝にかけての溝底には大形の方形土坑が1列に並んでいる。具体的には、南北溝の南端部から屈折部にかけて南北8.2m、幅3.3m、北端部深さ0.6m・南東部の深さ0.4～0.9mの方形土坑が1基存し、東西溝底には西から、東西4.9m、幅2.9m、西端部深さ0.4～0.9m・東端部深さ0.3～0.5mの方形土坑と、東西5.5m、幅3.2m、西端部深さ0.3～0.5m・東端部深さ0.8の方形土坑の2基が1列に並び、7.6m（上端）ほど平坦部となったのち、東西5.1m、幅3.3m、西端部深さ0.7m・東端部深さ0.4mの方形土坑と、東西7.5m、幅1.3m以上、西端部深さ0.3m・東端部深さ0.4mの方形土坑および殆どが調査区外となる土坑の3基が1列に並んでいる。これら6基の土坑間は土手状に掘り残されている。その間隔は、底部で、西から順に1.5m、0.8m、9.4m、0.8m、0.7mとなっており、西から3基目と4基目の間は幅広であり、土橋が存していた箇所もしくは橋などが架けられていた可能性がある。ちなみにこの幅広の土手の西側の土坑列の主軸と東側の土坑列の主軸は3mほどの食い違いを見せている。各土坑の底面の標高は、西から-0.25m、0.04m、-0.03m、0.21m、0.24m、0.31mで、いずれも湧水層である砂層・砂礫層に達しており、この溝底の土坑列は、城館を囲む溝（というよりは濠）に、水を確保するための造作ではないかと推察する。溝内の堆積土は、上から第1～4層の3層に大別される。第1層は、粘質シルト・粗砂混じりの砂質粘土等で層状堆積を示す。第2層は斑土層で、人為的に埋めたのではないかと印象をもつものである。第3層は、粘土・シルトを基調とし部分的に砂層等が入る層状堆積土で、植物遺体・木製品・漆碗などが多量に出土した。第4層は、概ね東西溝部の上記土坑の埋土に相当するもので、粘土を基調とし、部分的に薄い斑土層が入るもので層状堆積を示す。遺物の出土量は多く、土器・陶磁器類以外に木製品・漆器・砥石類なども多量に出土した。最上層である第1層からは、古瀬戸後期第4小期～大窯期第2段階、連房式登窯第1～5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。量的には連房式登窯第3～5小期のものが多い。第2層からは古瀬戸後期第4小期～大窯期第3段階、連房式登窯第1～5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が、第3層からは、古瀬戸後期第4小期～連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土したが、連房式登窯第4～5小期のものは量的には少

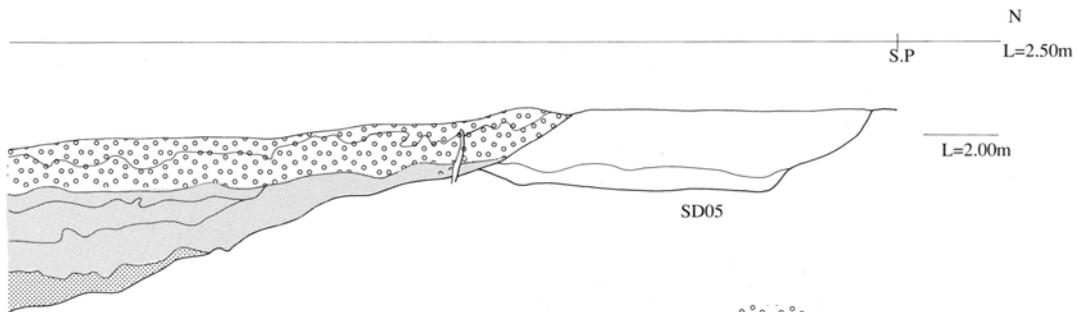
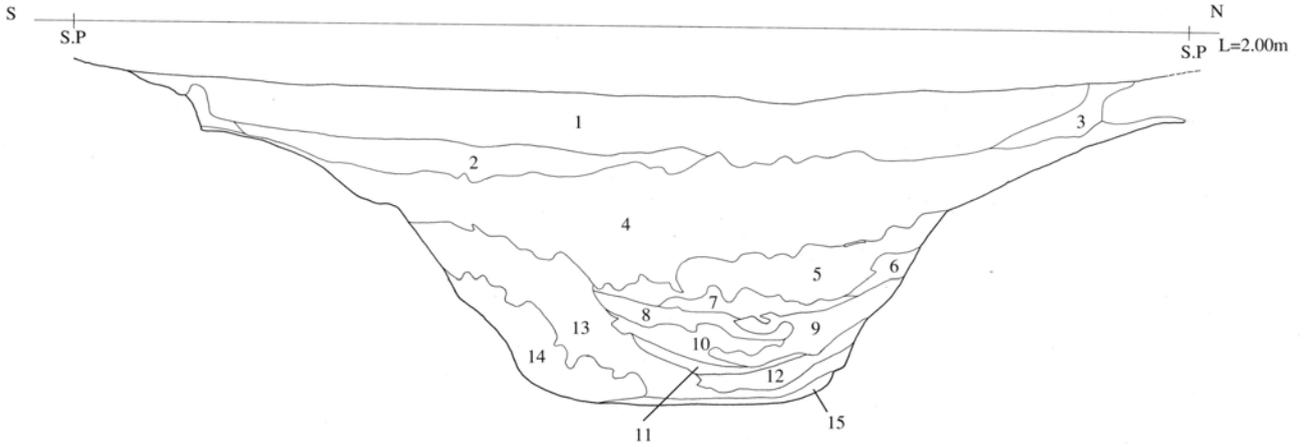


第14図 97B区SD01断面図

97B区 SD01 (東西部)

- 1 : 7.5YR3/1 砂質シルト
- 2 : 斑土
- 3 : 2.5Y4/2 砂質シルト
- 4 : 5Y4/2 粘土 (植物遺体混じり)
- 5 : 斑土
- 6 : 地山ブロック
- 7 : 5Y4/2 粘土 (植物遺体混じり)
- 8 : 5Y4/1 粘土
- 9 : 斑土
- 10 : 5Y4/2 粘土 (植物遺体混じり)
- 11 : 5Y4/1 粘土
- 12 : 斑土
- 13 : 斑土
- 14 : 10BG6/1 砂質粘土 (地山ブロック)

- 第1層 : 1
- 第2層 : 2~3
- 第3層 : 4
- 第4層 : 5~15



-  第1層
-  第2層
-  第3層
-  第4層

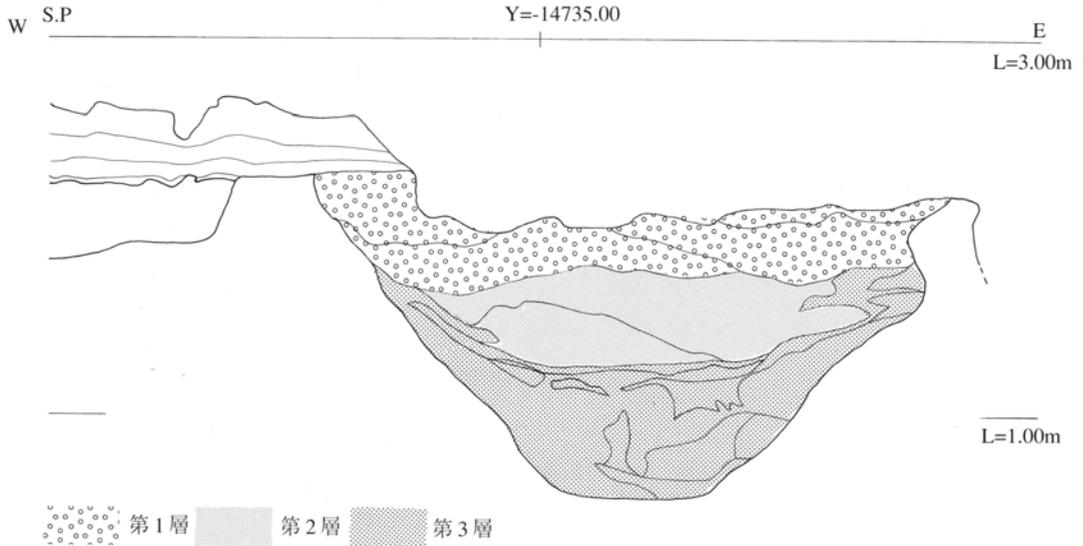
1 : 40

ない。最下層である第4層からは、古瀬戸後期第4小期～大窯期第3段階および連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。連房式登窯第5小期のものは極少量で、古瀬戸後期第4小期～大窯期第3段階のものが圧倒的に多い。連房式登窯第5小期のものは上層からの混入品の可能性がある。

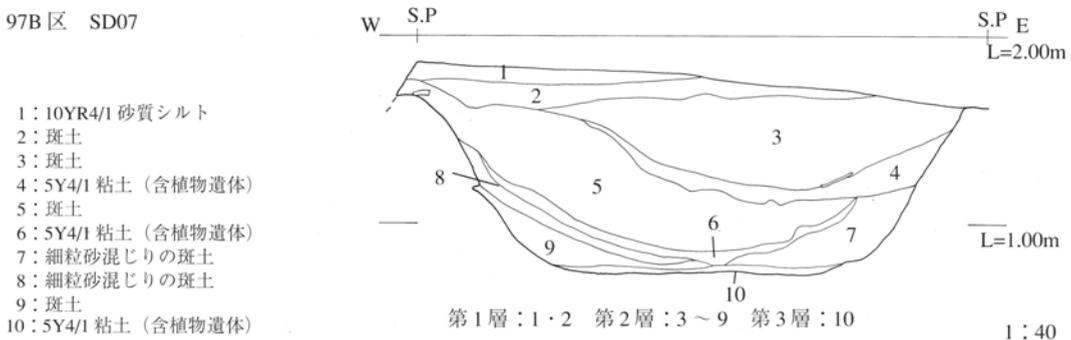
こうした溝の規模・形状・出土遺物の年代等および所伝との一致からみて大脇城跡（梶川五左衛門の屋敷跡）との伝承をもつ城館を囲む濠と推定して大過ないものと考え。

97B区 SD12 南調査区の東端部近く、97B区の北東部で検出されたもので、上記97B区SD01で区画された内側を東西に区切る南北溝の一つである。NR01（後述）により南端部のあたりが壊されているが、南端はかろうじて遺存する。検出長12.6m・幅3.5m・深さ1.7mほどで、南端部に移るにつれて浅く、幅狭になる。断面形は逆梯形を呈す。埋土は、大きく三層（上から第1～3層）に分けられる。第1層・第2層はともに斑土で、人為的に埋められたのではないかとの印象を強く抱くものである。第3層もブロック土を多く含む土層を基調とし、上部に植物遺体を多く含む粘土層、砂層が層状堆積している。下の第3層から大窯第2～3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が、上になる第2層からは、大窯第1～3段階および連房式登窯第1～2小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

97B区 SD012（北壁）



97B区 SD07



第15図 97B区SD12（上）・同SD07（下）断面図

97B区SD07 上記97B区SD12の南延長線状に位置し、SD12とともに97B区SD01で区画された内側を東西に区切る溝である。東側の掘形がNR01により一部壊されている。SD12の南端とこのSD07の北端の間隔は、6.8mで、SD07の南端と97B区SD01の東西溝部との間隔は3.0mである。なお南側の掘形が浅く広がりを見せているが、これは洪水性の堆積を示すNR01を形成されたときこのSD07の上を削った際に生じたものの可能性が高いと推察する。ちなみにこの部分からの間隔は1.5mとなる。長さ10.0m・現幅3.0～4.5m・深さ1.4mほどで、断面形は逆梯形を呈する。埋土は大きく3層（上から第1～3層の順）に分けられる。第1層は、砂質シルトおよび斑土層で、これはNR01の堆積土の一部と推測する。第2層は斑土層で、3層に細分でき、複数回に渡って埋め立てられたとの印象を与えられる堆積状況である。第3層は灰色粘土層で、この層から天正四年銘の護摩札が出土した。第1層からは、古瀬戸後期第4小期・大窯第2小期～連房式登窯第4小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。第2層からは、大窯第1～2小期・連房式登窯第1～5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。第3層からは、大窯期の播鉢片が1点出土したにとどまる。

97B区SD05 南調査区の東部、97B区の西部で検出された東西溝である。上記97B区SD01の東西溝の内側（北側）に位置し、SD01の第1層および第2層部分によって一部が切られる。長さ12.0m・幅1.6m・深さ0.4mで、断面形は逆梯形を呈す。埋土は、粘質・砂質シルトからなる。東端部の東1.9mのところ、96B区SK81（長2.8m・幅1.1m・深さ0.5m 大窯第1～2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土）が存するが、埋土・位置などからSD05との関連性が高いものと推察する。埋土中からは、古瀬戸窯後期第3小期～大窯第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

97B区SD06 南調査区の東部、97B区の西部で検出された南北溝である。上記97B区SD01の南北溝の内側（東側）に位置する。長10.2mほどの土坑が連続したような不定形の溝で、幅は0.5～1.8m・深さ0.2～0.6mとばらつきがある。埋土は、斑土で、連房式登窯第3～4小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E・97A・B区SD02・SD03 南調査区を、北東から南東に斜行する二条の溝である。SD03は、96E区の北壁から南東方向に約21mのびて終息する。これに対してSD02は96E区でSD03に併走し、SD03が終息した後もそのまま南東方向に直線的にのびて97A区の中央を斜行し、96B区の南壁にぶつかって調査区外となる。SD02の検出総長は60.0mである。両溝は約1.6（～2.0）mの間隔で併走しており、その間は平坦で、浅いSD03が溢れた場合にはSD02へ流れ込むようにSD29～31の3本の小溝が掘られている。この平坦面は、SD03の南側掘形の上端から0.5mほど下がっており、SD03が終息した後も、SD02の南側掘形のテラスとなってさらに32mほどのびて終息している。両溝の切り合い関係については、掘削の先後関係は不明であるが、ある時期併存した後、両溝はある程度まで埋まり（SD03第2層の堆積）、そののち再び掘削された後、先にSD03が埋まり、最終的にはSD02一条となって廃絶をむかえたものと推察される。埋土は、SD03の第2層下部（斑土層）を除き、シルト・粘土を基調とするもので、層状堆積を示す。

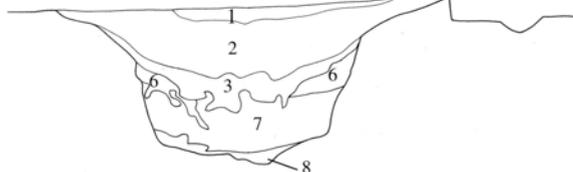
SD02の出土遺物については、96E区の第3層からは大窯第1段階および連房式登窯3～4小

96E区 SD04・SD07



1: 10YR2/1 シルト 2: 10YR5/1 粘質シルト

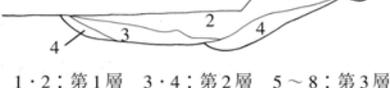
96E区 SD06 (1)



96E区 SD05

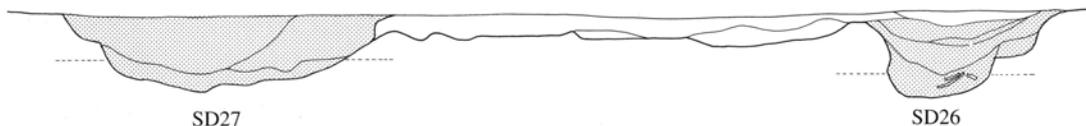


96E区 SD06 (2)

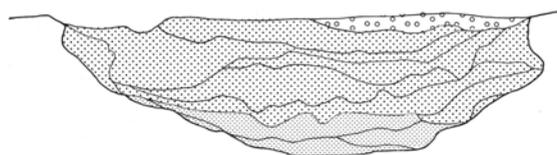


- 1: 7.5YR2/2 シルト (砂礫を含む)
- 2: 斑土
- 3: 10YR3/2 粘土
- 4: 斑土
- 5: 斑土
- 6: 10YR4/1 粘土 (砂礫混じり)
- 7: 斑土
- 8: 7.5YR3/1 粘土 (砂礫混じり)

96E区 SD26・SD27

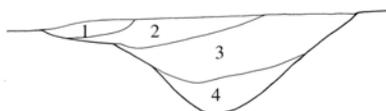


96E区 SD13

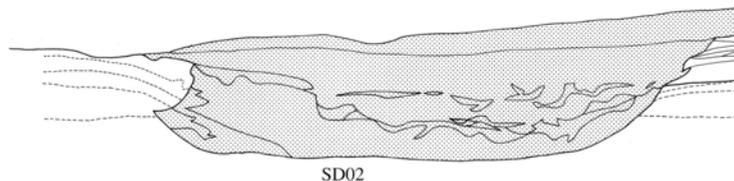
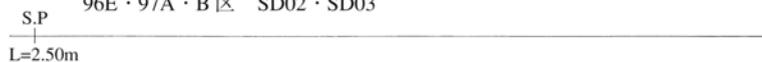


第1層 第2層 第3層

96E・97A区 SD01



96E・97A・B区 SD02・SD03



第16図 南調査区 溝断面図

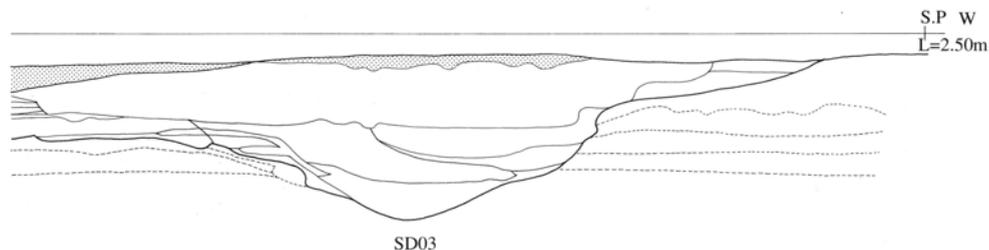
1:40

期のものが、第2層からは古瀬戸窯後期第3～4小期および連房式登窯2小期のものが、第1層からは古瀬戸窯後期第4小期～連房式登窯2小期および連房式登窯5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。また97A区の第2層からは、古瀬戸窯後期第4小期～連房式登窯5小期および連房式登窯第7小期のものが、第1層からは古瀬戸窯後期第3小期～連房式登窯5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

SD03の出土遺物については、96E区の第3層からは大窯第2段階および大窯第4段階のものが、第2層からは大窯第2～3段階および連房式登窯1～2・5小期のものが、第1層からは古瀬戸窯後期第3小期～大窯第2・4段階および連房式登窯2～5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。また97A区の第2層からは、古瀬戸窯後期第3小期、大窯第1～4段階および連房式登窯2～4小期のものが、上の第1層からは、古瀬戸窯後期第3小期～大窯第3段階および連房式登窯2～5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E区SD29～31 上記96E・97A・B区SD03の北側掘形と96E・97A・B区SD02の南側掘形とをつなぐ小溝である。すべて96E区で検出された。SD29とSD30は隣接し、SD31はSD30から北西に5.0mほど離れる。長さはいずれも1.5mほどで、幅・深さは、SD29から順に1.2m・0.2m、0.5m・0.3m、0.3m・0.1mである。埋土は、三条とも砂・砂質シルトを基調とするもので層状堆積を示す。植物遺体が含まれる層も散見される。SD30の埋土中から古瀬戸窯後期第3～4小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。いずれもSD03の第2層に覆われており、第3層堆積時にすでに存していたものと推定される。このことは、後に拡幅などの改変の有無はともかくとして第3層から新しい時期のもの（土層図の検討から第3層の上層は第2層とすべきであった可能性がある）が出土した96E・97A・B区SD02と96E・97A・B区SD03とが同時期に存していたことを示すものと考えられる。

96E・97A区SD01 南調査区の中央北寄り、96E区の北東隅から南東方向にのび、97A区中央部で浅くなって終息する溝である。幅1.5～1.2m・深さ0.4mで、断面形は上方が大きく開いた「V」字形を呈する。埋土は、大きく二層（上から第1～2層）にわけられ、ともに層状堆積を示す。第1層は、粘土を基調とするもので、第2層は斑土となっており細かな炭化物を含む。上層である第1層からは、古瀬戸窯後期第4小期～大窯第2段階および連房式登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が、下層の第2層からは、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。97A区SK02（大窯第2～3段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土）によって切られる。



96E区SD11・12 南調査区の北西部、96E区が北西に突出する位置で検出された溝である。SD12は、突出部の東壁から西方向へ7.0m延びた後、約90度ほど屈折し南へ2.0mのびて終息する溝である。幅1.5m・深さ0.4mで、埋土の上層は粘土層、下層は斑土層となっている。埋土中からは、大窯第1～2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。SD11は、SD12と同様に東壁（SD12の南側1.6m）から西方向へ直線的に8.0mのびる溝である。SD12の南端を壊して終息する。幅1.3m・深さ0.4mで、埋土はシルトを基調とするものである。ただ上層部分に、水田耕作土・床土が圧縮されて入り込むという不自然な堆積がみられる。これについては、工事に伴い何らかの過重が集中的にかかって生じたものである可能性がある。埋土中からは、古瀬戸窯後期第4小期および連房式登窯第2小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。このSD12は、96E区SK319（大窯第2～3段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土）およびSE05を切っており、SD11に切られている。またSD11は、SK11を切っている。SK11はSK319を切るが、SD12とは切り合い関係をもたない。

96E区SD23 南調査区の西部、96E区の西部を南北に走り東西に分断する攪乱溝（最近まで使われていた水路跡）の東側肩近くで検出された溝である。下記の96E区SD17（96E区SD26）と96E区SD16（96E区SD27）の間に位置する不定形の円弧状を呈する。埋土は粘質シルトで、時期を特定し得る遺物の出土はないが、東端がSD17（大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土）に切れ、北端近くの一部がSD16（古瀬戸後期第4小期～大窯第2段階、大窯第4段階～連房式登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した）に切られる。

96E区SD15 南調査区の西北隅、96E区の西北隅部で検出された長さ4.7m・幅0.2m・深さ0.05mほどの浅い小溝である。96E区SD14の東側（間隔0.5m）を併走する。埋土は粘質シルトで、大窯第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。西端部は96E区SE05（大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土）を切る。

96E区SD21 南調査区、96E区の西部を南北に走る攪乱溝の西側で検出された南北方向の溝である。長11.0m・幅0.6m・深さ0.3m前後のもので、周辺の溝群とは方向を異にして緩やかに蛇行する。埋土は砂質土を基調とするもので、埋土中からは、連房式登窯第2小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。96E区SD22・同SD24を切る。

96E区SD16（96E区SD27） 南調査区の西部、96E区の西寄りの南壁から北東方向にのびる溝である。検出長19.8m・幅1.2～1.9m・深さ0.2～0.5mで、北端部は96E区SK308によって壊されている。埋土は、大きく二層（上から第1層）に分けられる。第1層は粘質シルトで、部分的に砂質シルトとの互層をなす。第2層は粘質シルトを基調とする。第1層は、掘り直された後の堆積土であり、本来別の溝とすべきものかも知れない。下の第2層からは、古瀬戸窯後期第4小期～大窯第2段階および大窯第4段階～連房式登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が、上の第1層からは、大窯第1～3段階、連房式登窯第1小期および連房式登窯第3～4小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。なお、この96E区SD16（96E区SD27）は、96E区SD05・96E区SD06・96E区SD07と組み合せて、方形の区画、具体的に屋敷地を構成するものと推定する。

96E区SD05 南調査区の西部、96E区の中央北西寄りを北西から南東方向に走る溝である。幅0.5m・深さ1.0mで、幅に対して深い掘形となっている。現長は4.2mであるが、西端が大形の

攪乱により壊されており、SK308 近くまで延びていた可能性もある。埋土は、粘土もしくは粘質シルトを基調とするものであるが、合せて13層からなり、板築様で、人為的に埋め立てられたのではないかと印象をもつ。こうした点から、この溝は、土堀などの基礎をつくるための布掘ではないかと推考する。埋土中から大窯第1段階および連房式登窯第1～2小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E区SD06 南調査区の西部、96E区の中央北から東にかけて検出された南東方向に斜行する溝で、上記96E区SD05の東延長線上に位置する。長さ15.2mで、東端部は96E区SE07を壊している。この溝は、長さ4.2m・幅1.6m・深さ0.75mほどの溝（北東部 溝1と仮称）と長さ9.9m・幅1.4～1.7m・深さ0.2mほどの溝（南東部 溝2と仮称）とを長さ1.1m・幅0.6m・深さ0.2mほどの小溝でつないだ形状を呈する。埋土は大きく三層（上から第1層）に分けられるが、第3層が認められるのは溝1部分に限られる。いずれも斑土を基調とするもので、明瞭な層状堆積を示さない。下の第2層からは、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が、上の第1層からは、古瀬戸窯後期第4小期～大窯第1段階、大窯第3段階および連房式登窯第1～2・5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。溝の性格について、埋土中の遺物の編年観は堆積順と一致するが、上記96E区SD05ほど土層数は多くないものの、溝の形状・埋土の状況からみてSD05同様に通常の区画溝と見るよりは、土堀等の基礎をつくるための布掘の可能性を考えたい。

96E区SD07 南調査区の西部、96E区の中央東寄りで検出された幅0.6m・深さ0.2mの溝である。南壁から北東方向に22.0mほど延び、上記96E区SD06の東端に直交する手前2.4mのところで終息する。SD06との間には、96E区SK81（長2.0m・幅1.0m・深さ0.2m）が存する。埋土は、粘質シルトおよびシルトで層状堆積を示す。埋土中から、古瀬戸窯後期第4小期～大窯第2段階および大窯第4段階～連房式登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。また大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土したSK269を切っている。

96E区SD04 南調査区の中央西寄り、96E区の南東部で検出された溝である。96E区の南壁から北東方向に14mほど延びたのち、より東方へ向きをかえて12mほどのびて96E・97A・B区SD03へ取り付いている。幅0.5m・深さ0.25mほどで、埋土はシルトを基調とするもので層状堆積を示す。埋土中から、古瀬戸後期第4小期～連房式登窯第4小期および連房式登窯第8小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。96E区SE02（古瀬戸窯後期第3小期～連房式登窯第5小期までの瀬戸・美濃窯産陶器が出土）によって切られる。なおこの溝は、上記96E区SD07の東側を2.6mのところを併走しており、両溝の間にはほとんど遺構をみない。このことからSD07とSD04の間は「道」であった可能性がある。

96E区SD17（96E区SD26） 上記96E区SD16（96E区SD27）の東側を併走（間隔1.6～2.8m）する溝である。緩やかに蛇行するなど形状が一定しない不定形の溝で、幅0.7～1.5m・深さ0.2～0.3mをはかる。埋土は、シルトを基調とするもので層状堆積を示す。埋土中からは、古瀬戸窯後期第4小期および大窯第2～3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。96E区SD23（大窯第1～2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土）を切り、SK286（古瀬戸窯後期第4小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土）・SK305（大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土）に切られる。

96E区SD13 南調査区の北西端部、96E区の北西部で検出された溝である。調査区の西壁の中

央北寄りから北東方向へのびて、北壁近くで真北（～北北西）方向に向きを変えて調査区外に延びる。幅2.8～3.4m・深さ0.9mで、断面形は逆梯形を呈す。埋土は、大きく三層（上から第1～3層）に分けられる。第1層は、粗砂混じりの砂質シルトで、第2層は砂質・粘質シルトを基調とするもので、第3層は粘質土を基調とし、最下層に砂層が認められるものである。いずれも層状堆積を示し、第3層と第2層の間には炭化物層の広がりがある。第3層からは、古瀬戸窯後期第4小期～大窯第3段階および連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が、第2層からは、古瀬戸窯後期第4小期～大窯第3段階および連房式登窯第1～5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が、第1層からは、古瀬戸窯後期第3小期～連房式登窯第2小期および連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。第3層に、連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器がみられるが、量的に極少ないことからみて、第2層からの混入あるいは現場での取り上げの際の誤認の可能性がある。

96E区SD14 南調査区の北西隅で検出された、96E区の北西隅を南西から北東に斜行する溝である。一列に並ぶ長楕円形（幅0.7m・長さ2.3m・深さ0.35mほど）の土坑の間を幅0.25m・深さ0.1mほどの小溝で繋いだ形状を呈する。埋土は、粘質シルトと砂質シルトの互層となっている。溝の方向は、南側の上記96E区SD13と同じくするが、SD13が方向を幾分北に変えるため両溝はぶつかり合うが、北壁の土層断面を見る限りでは、両者の切り合い関係については判然としない。埋土中からは、時期を特定し得る遺物の出土はなかった。

96E区SD24 南調査区の西部、96E区の西部の上記96E区SD16（96E区SD27）の西側（間隔は2.7m）で検出された溝である。SD16と溝の方向を同じくする浅い溝（幅1.1m・深さ0.1m）で、南壁から北東方向に14mほど延び、96E区の西部を東西に分断する攪乱溝（最近まで使われていた水路跡）の西側で終息する。埋土は、砂質土を基調とするものである。埋土中からは、時期を特定し得る遺物の出土はなかった。96E区SD21（連房式登窯第2小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土）によって切られている。その位置関係からみて、96E区SD16（96E区SD27）と同時期ないしは相前後時期の可能性はある。

96E区SD22 上記96E区SD24の西側で検出された、96E区南西隅近くの南壁から北東に1延びる溝で、端部は攪乱溝に切られている。溝の方向は、SD24よりも幾分北に振っている。幅1.0～1.2m・深さ0.15m前後で、埋土は砂質シルトを基調とする。埋土中からは、時期を特定し得る遺物の出土はなかった。96E区SK312および同SD21（上記）によって切られる。

97A区SD08 南調査区の中央東寄り、97A区の東壁沿いで検出された溝である。幅0.4m・深さ0.3mで東壁から西へ1.8mほどが検出された。97A区SK25（97B区SK130）を切っている。当初、先に調査した97B区で検出されたSD03の西延長部分と判断したが、測図の結果位置的に南へ少しずれることが明らかとなり、接続する遺構がみられない。遺憾ながらこの点で問題が残る。埋土は、砂質シルトで、連房式登窯第2小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

井戸（SE）

96E区SE01 南調査区の西部、96E区の南西部で検出された井戸である。径1.68m×1.75mの

円形の掘形で、深さは1.80mある。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の形状、底が砂礫層に達していることから井戸と推定した。底から上に約0.4mほどのところで、ほぼ完形の常滑窯産の壺・鉢、土師器皿、円形曲物の側板が各1点が、あたかも置かれたごとき状態で出土した。何故にこれらが埋められた（あるいは沈められたか）のか判然としない。なおこれらの遺物より上方で第11型式のいわゆる山茶碗が出土した。

96E区SE02 南調査区の中央西寄り、96E区の東部で検出された井戸である。径5.70m×2.85mの長楕円形で、深さは1.29mある。最深部は北側に片寄り（土層断面図は、最深部の断面を示していない）。井戸側の痕跡は確認できず、規模・形状とも今回の調査では類例がなく、井戸とするには若干の疑問が残るが、底部が砂層に達していることから井戸と推定した。掘形は、96E区SD04・SK272等の一部を切っている。埋土中からは、古瀬戸窯後期第3小期～連房式登窯第5小期までの瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E区SE03 南調査区の西部、96E区の中央西寄りを南北に走る攪乱溝（現用水路跡）の壁および底部で検出された井戸である。遺存状態が悪く、その大半が失われている掘形は、東西径2.12m以上の推定円形で、深さは1.84mある。井戸側の痕跡は確認できないが、底部が砂層に達していることから井戸と推定した。96ESD16により掘形の東端部が壊されている。僅かに残る埋土中から、大窯第1段階～第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

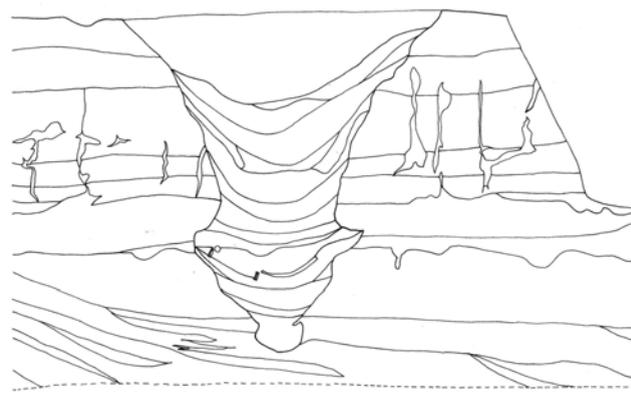
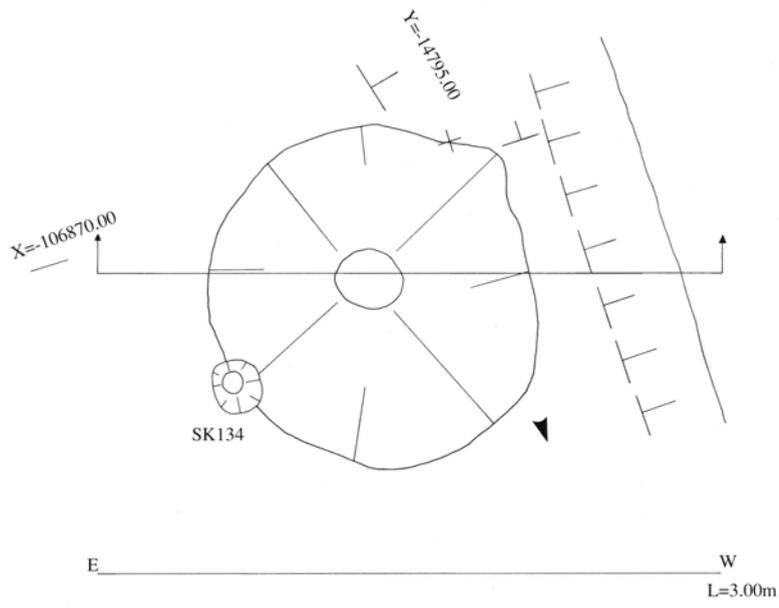
96E区SE04 南調査区の西部、96E区の中央北寄りの位置で検出された井戸である。北半部の上層部分は、SD03によって切られている。径1.60m×1.15mの円形の掘形で、深さは1.48mある。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の形状および底部が砂層に達していることから井戸と推定した。埋土中から、大窯第1段階～第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E区SE05 南調査区の西端、96E区の西壁沿いで検出された井戸である。掘形は、径1.72mほどの推定円形で、深さは2.00mある。掘形は、96E区SD15によって切られている。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の形状および底部が砂層に達していることから井戸と推定した。埋土中から、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

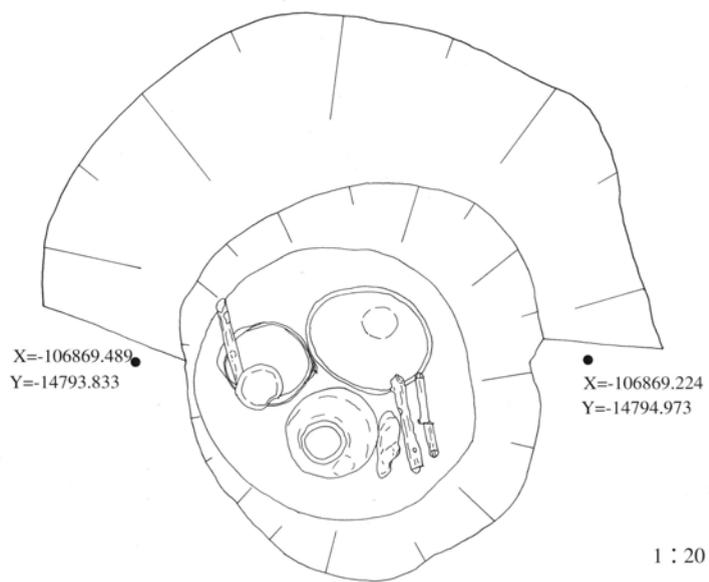
96E区SE06 南調査区の北西部、96E区の北西部で検出された井戸である。96E区SD11によって半分ほどが壊されている。掘形は、径1.65mほどの不整形な円形で、深さは1.35mある。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の形状および底部が砂層に達していることから井戸と推定した。埋土中からは、古瀬戸窯後期第4小期（新）の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E区SE07 南調査区の西部、96E区の中央東寄りの96E区SD06の東端部の底面で検出された井戸である。掘形は、径0.80mほどの円形で、深さは1.20mある。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の形状などから井戸と推定した。底から上方へ約0.40m～1.00mの間に、石など（茶臼、羽釜などの遺物を含む）が多量に投棄されている。瀬戸・美濃窯産陶器の陶器の出土はない。

96E区SE08 南調査区の北西隅、96E区の北西隅の壁沿いで検出された井戸である。掘形は、径1.96m×1.7mの不整形な楕円形で、深さは2.20mある。掘形の上方がロート状に開くが、その広がった部分の底部に丸太材が井桁状に組まれている。その目的を詳らかにし得ない。この部分については、別遺構ではないかとする案もある。埋土からは、古瀬戸窯後期、大窯第2段

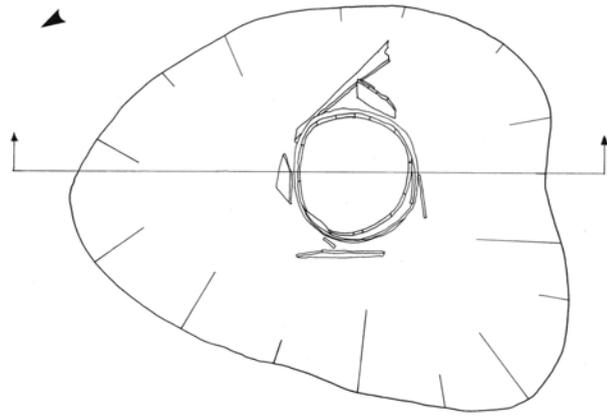


1 : 40

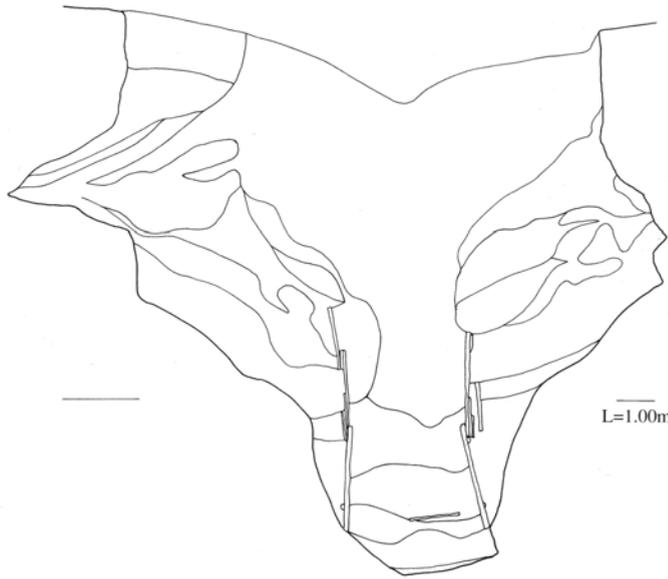


1 : 20

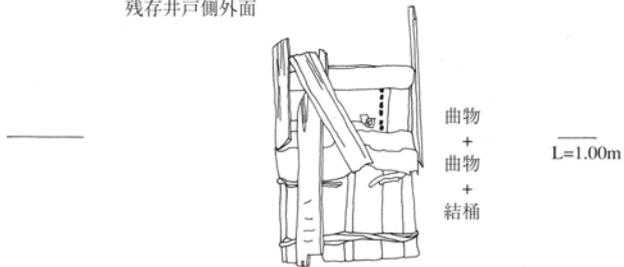
第17图 96E区SE01实测图



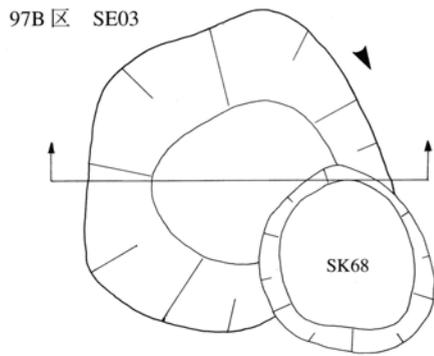
N ————— S
L=2.50m



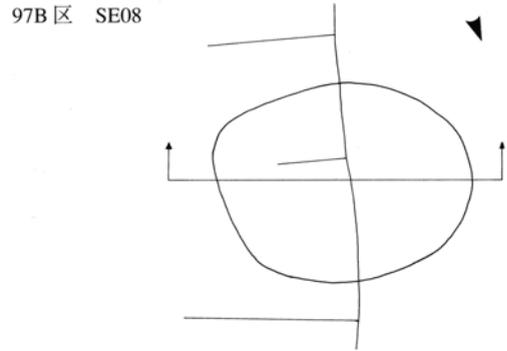
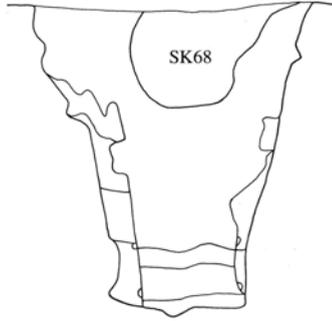
残存井戸側外面



第18図 97B区SE07実測図



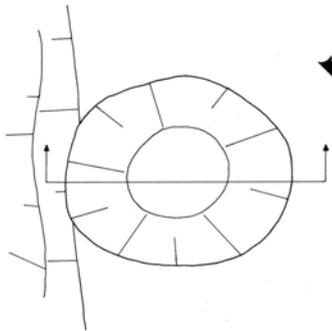
S N
L=200m



L=2.50m



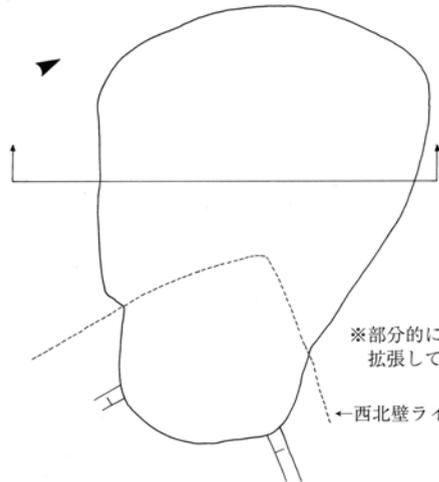
97B区 SE05



L=2.00m

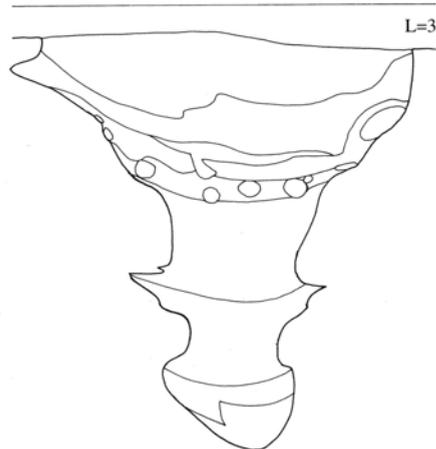


96E区 SE08



※部分的に
拡張して調査
←西北壁ライン

L=3.00m

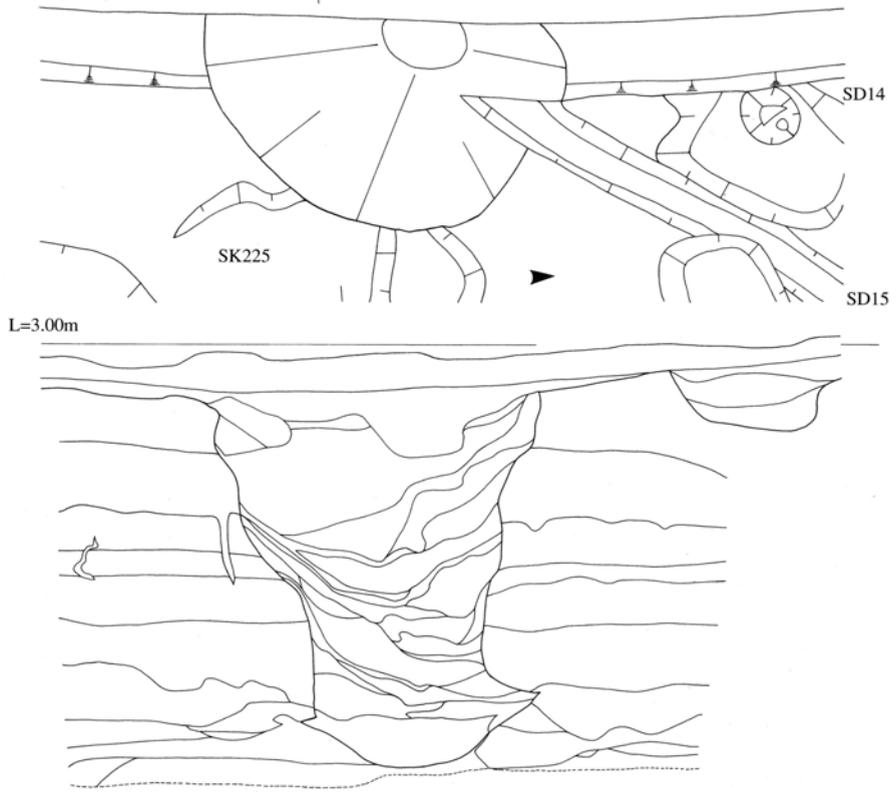


1 : 40

第19図 97B区SE03・同SE05・同SE08・96E区SE08実測図

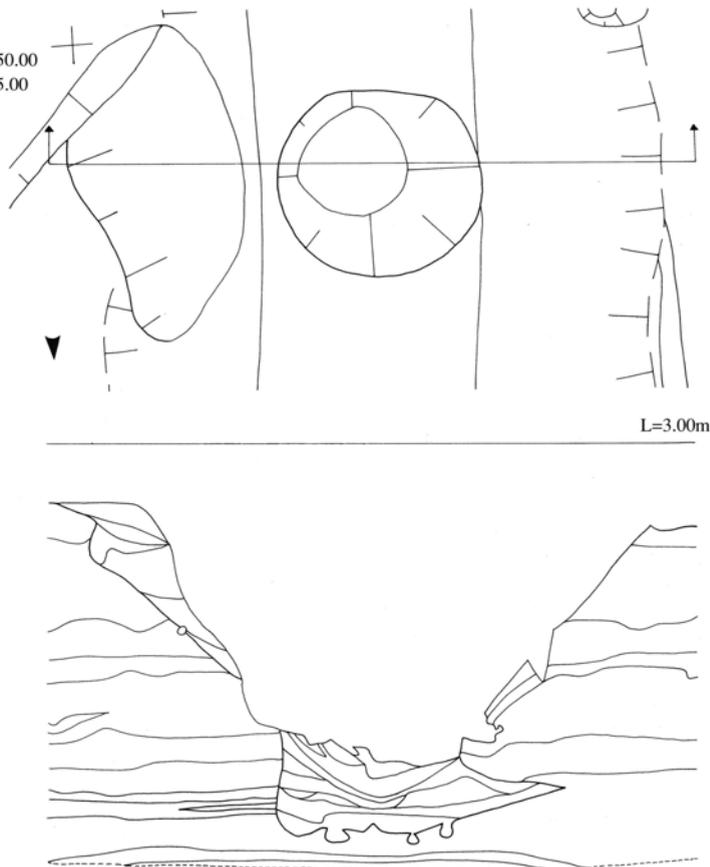
96E区 SE05

X=-106835.00



96E区 SE03

X=-106850.00
Y=-14795.00



1:40

第20图 96E区SE05·同SE03实测图

階および連房式登窯期（混入の可能性あり）の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

96E区SE09 南調査区の西部、96E区の中央西寄りの位置で検出された井戸である。掘形は、径1.30m×1.10mで、深さは約0.8mある。壁がほぼ垂直で深い円筒状の掘形および埋土の状況は、北調査区の96A区SE01などと酷似する。埋土中より、連房式登窯第11小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

97A区SE01 南調査区の中央南寄り、97A区の南部にあるSD03の南側に接する位置で検出した井戸である。掘形は、径2.05mほどの不整形の円形で、深さは0.94mある。井戸側施設などは確認できないが、底が砂層に達していることから井戸跡と推定した。炭化物を多量に含む埋土の第5層からは、多量の内耳鍋・羽釜類が、古瀬戸後期第4小期および大窯第1段階～第3段階（第2段階のものが多く、第3段階のものは少量）の瀬戸・美濃窯産陶器とともに出土した。

97A区SE02 上記97A区SE01の西北約1.0mの位置で検出した井戸である。掘形は、径2.50m×2.12mほどの略円形で、深さは、0.94cmある。掘形の下部は、径0.50m・深さ0.40mほどの筒状となっており、結桶あるいは円形曲物容器が、井戸側の最下段もしくは水溜として設置されていた公算が大である。掘形の上方が大きく広がるのは、廃絶の際に、井戸側などを抜き取った際に掘形が拡幅された為とみられる。炭化物を多量に含む埋土の第2層からは、多量の内耳鍋・羽釜類が、古瀬戸後期第3～4小期および大窯第1段階～第3段階（第3段階のものが多く、第1・2段階のものは少量）の瀬戸・美濃窯産陶器とともに出土した。

97A区SE03 南調査区の中央東寄り、97A区の中央東寄りで検出した井戸である。掘形は、径2.50mほどの円形で、深さは1.64mほどある。掘形の下半部は、径0.60m・深さ0.55mほどの筒状となっており、その壁面に結桶の箍が3段分付着しており、井戸側の最下段もしくは水溜として結桶が設置されていたことが知られる。掘形の上方が大きく広がるのは、井戸側などを抜き取った際に掘形が拡幅された為とみられる。埋土中からは、大窯第1段階～連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

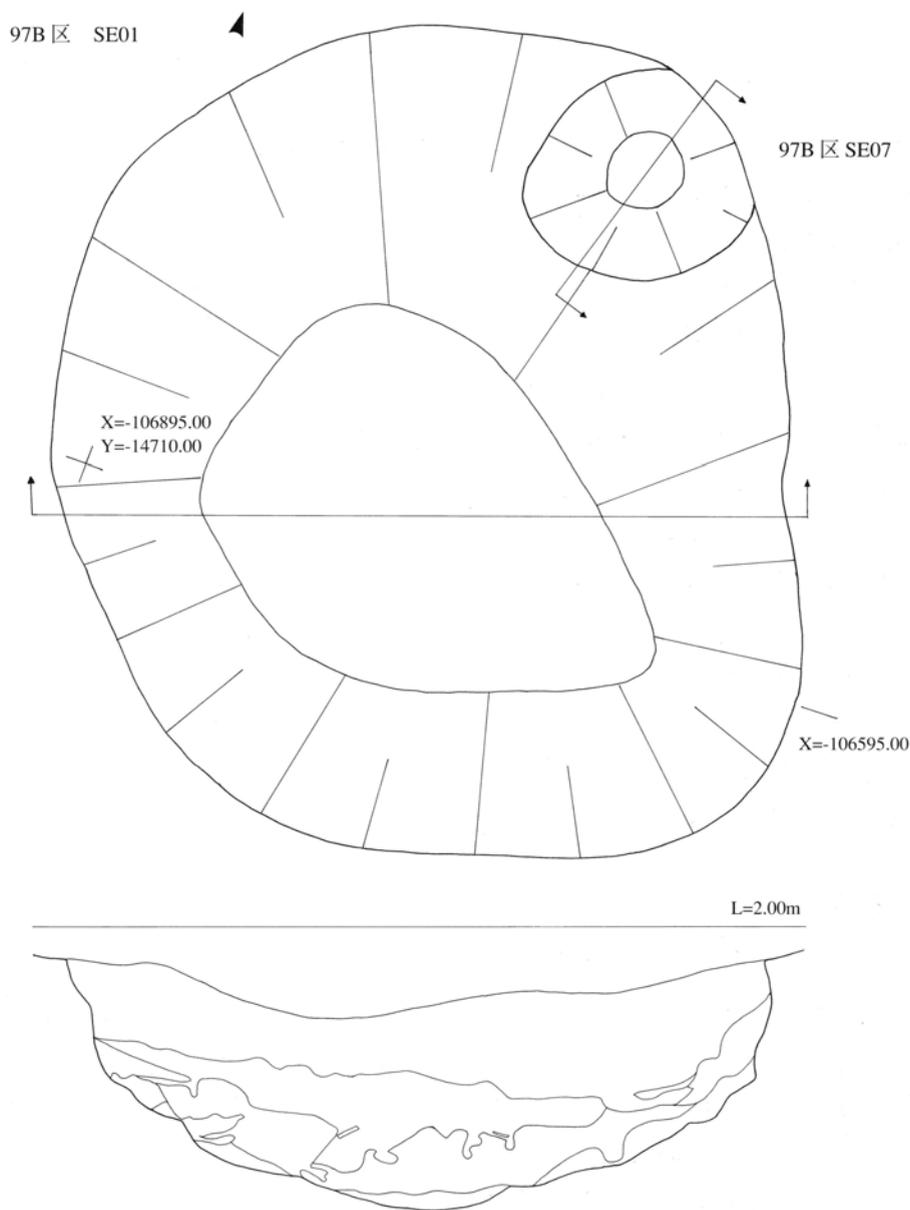
97A区SE04（97B区SE09） 南調査区の中央東寄りの97A区・97B区にまたがって検出された井戸である。97B区のSD01の南北溝部分の西側に位置する。97B区SK42を切り、97A区SK358（97B区SK39）に切られている。掘形は、径2.60m×2.0mの不整形の円形で、深さは1.4mある。壁面は垂直ちかくに掘削され、底面は平坦になっている。井戸側の痕跡は確認できないが、砂層に達しており、井戸跡と推定した。年代を特定し得る遺物の出土はない。

97A区SE05（97B区SE10） 南調査区の中央東寄りの97A区・97B区にまたがって検出された井戸である。97B区のSD01が南北から東西に屈折する部分の西側に位置する。97A区SK21（97B区SK117）の底面で検出された。掘形は、径2.65m×1.35mの楕円形で、深さは0.56mある。井戸側は確認できないが、掘形の形状・埋土および砂層に達していることから井戸跡と推定した。年代を特定し得る遺物の出土はないが、97A区SK21（97B区SK117）から古瀬戸窯後期第4小期～大窯第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、大窯第3段階以前のものと推定される。

97B区SE01 南調査区の東部、西側・南側を97B区SD01で囲まれた区画内を東西に区切る

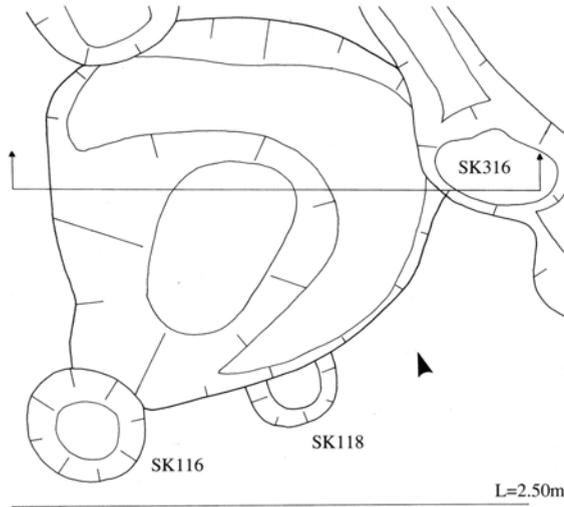
SD07の西側で検出した井戸である。97B区SE02の掘形を壊して掘削されている。掘形は、径4.50m×3.80mの円形で、深さは1.32mある。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の形状・埋土および砂層に達していることから井戸跡と推定した。埋土中からは、大塚第1段階～第5（・6）小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

97B区SE02 南調査区の東部、西側・南側を97B区SD01で囲まれた区画内を東西に区切るSD07の西側で検出した井戸である。上記97B区SE01により掘形の一部が壊されている。掘形は、径1.15mの円形で、深さは1.20mある。掘形内の中央に、井戸側（もしくは水溜）として転用された底板を抜いた結桶が正位で設置されており、土層断面からさらに結桶などが井戸側

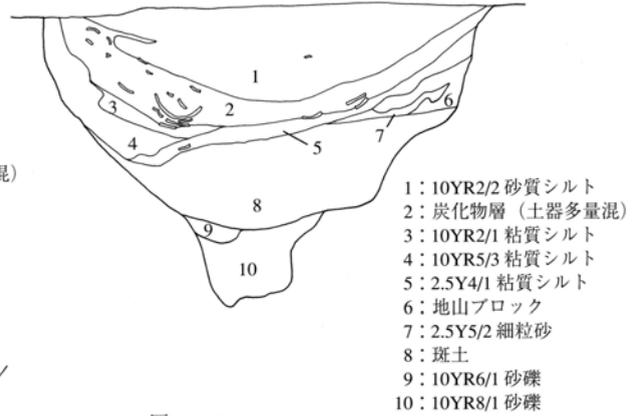
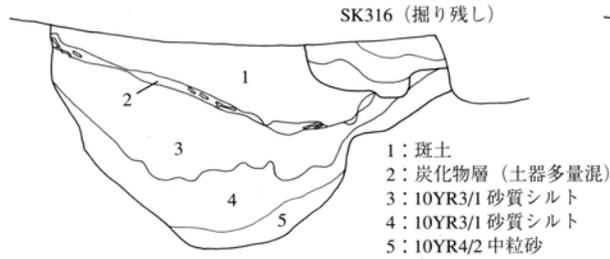
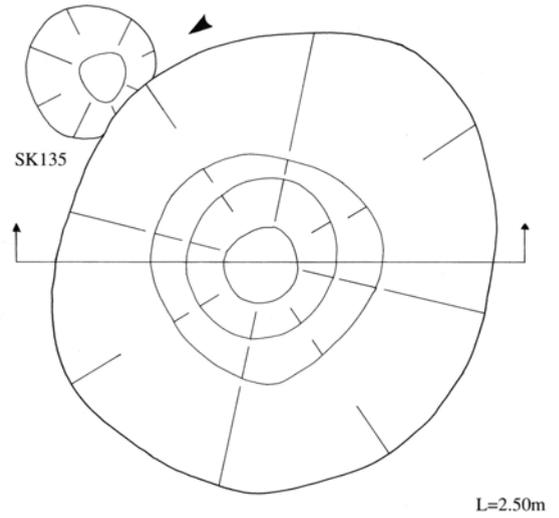


第21図 97B区SE01実測図

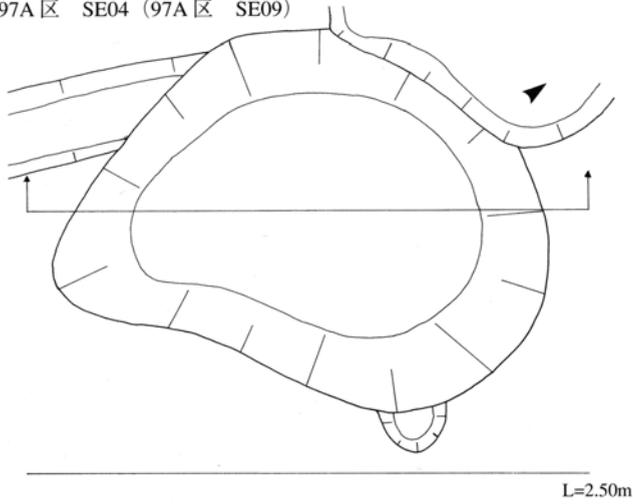
97A区 SE01



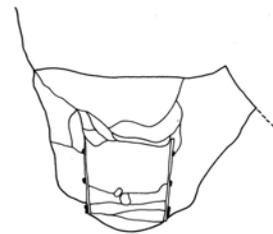
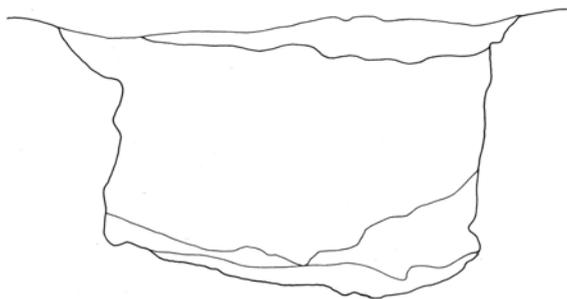
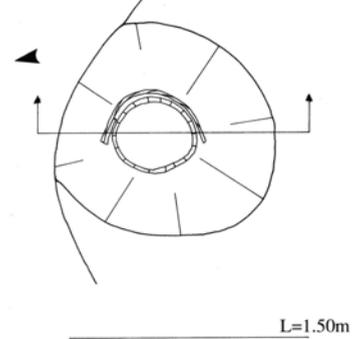
97A区 SE02



97A区 SE04 (97A区 SE09)



97B区 SE07

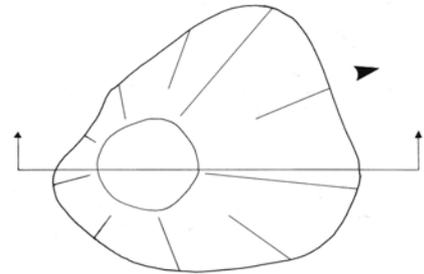
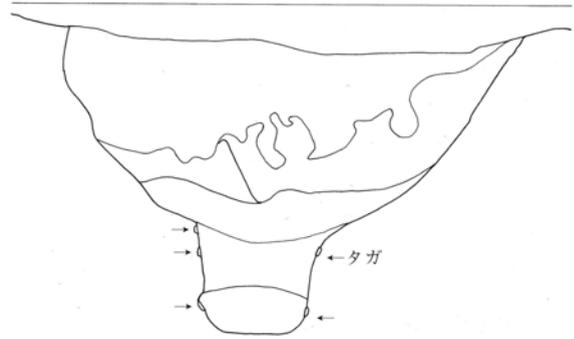
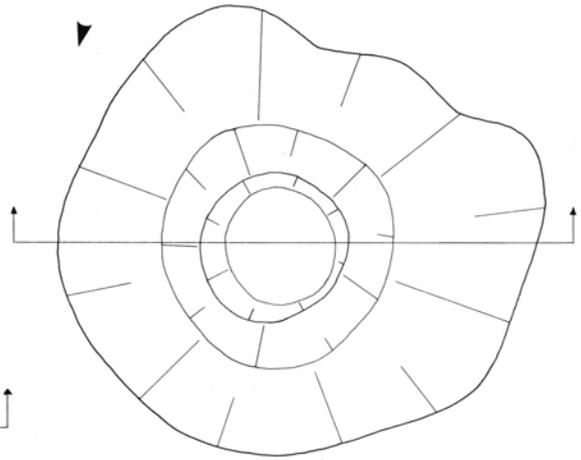
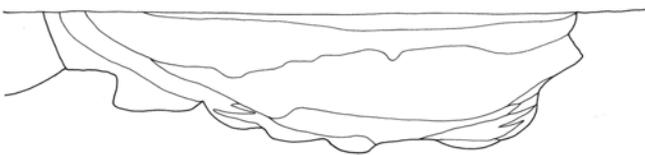
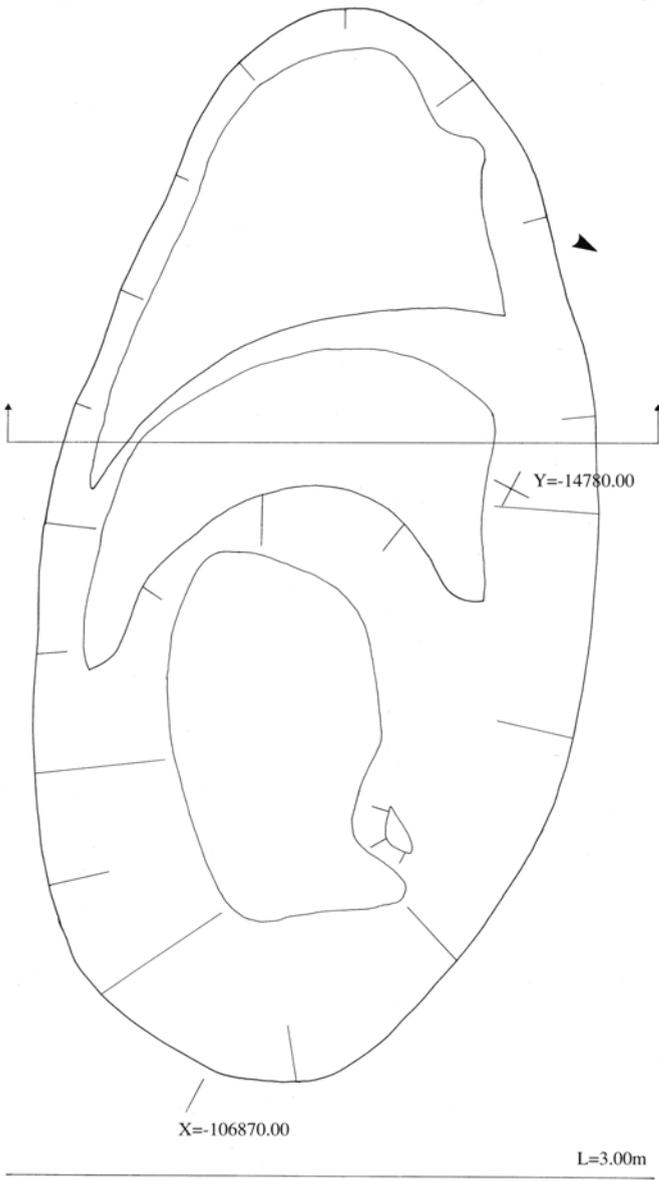


1:40

第22図 97A区SE01・同SE02・同SE04・97B区SE07実測図

96E区 SE02

97A区 SE03



L=2.50m

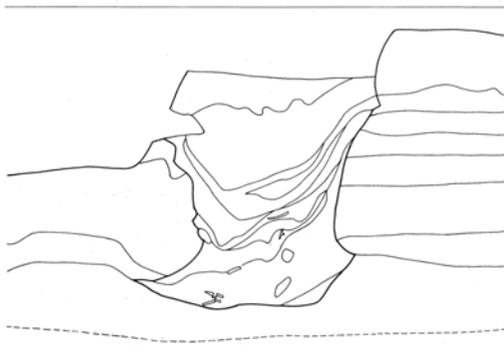
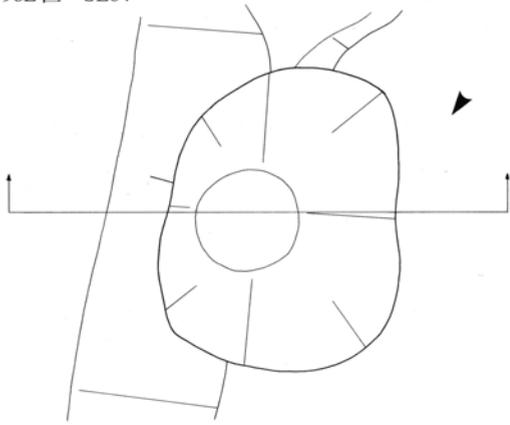


97A区 SE05

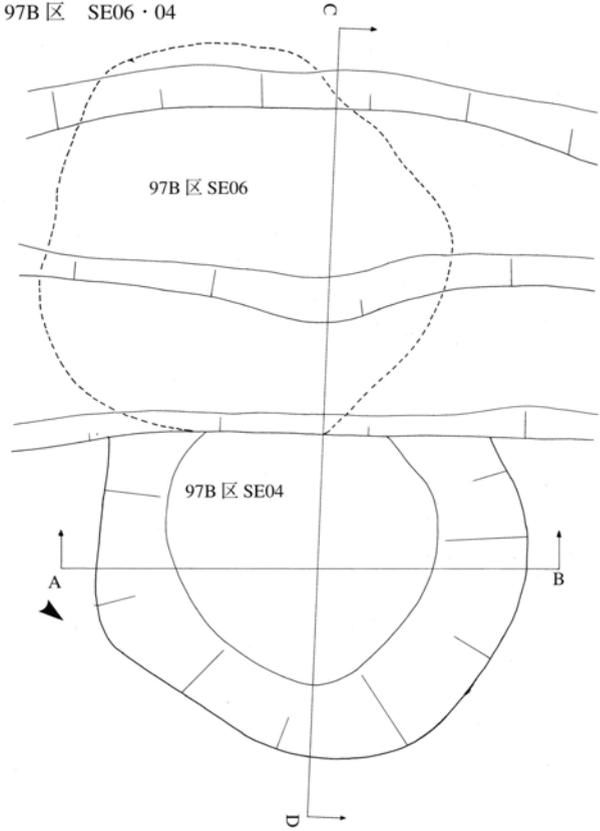
1:40

第23図 96E区SE02・97A区SE03・同SE05実測図

96E区 SE04

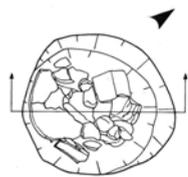


97B区 SE06・04

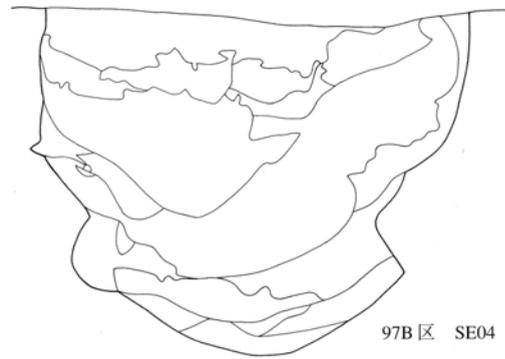


A B
L=2.50m

96E区 SE07



L=2.50m

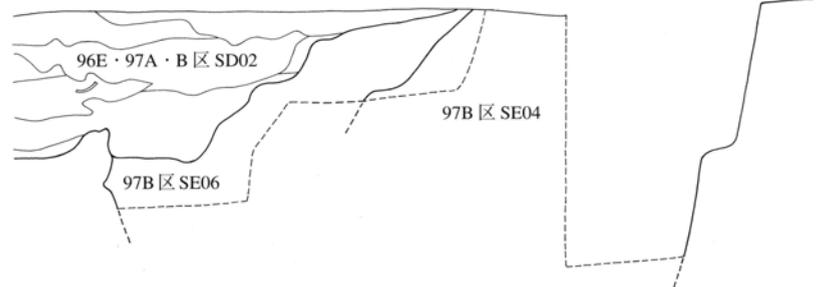


97B区 SE04

C

D

L=2.00m



1:40 (SE07のみ 1:20)

第24図 96E区 SE04・同 SE07・97B区 SE04・同 SE06 実測図

として積上げられていたことが窺われる。結桶内の埋土から大窯第4段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

97B区SE03 南調査区の東部、97B区のSD01が南北から東西に屈折する部分の南側に位置で検出された井戸である。掘形は、径1.44m×1.60mの円形で、深さは1.64mある。井戸側に結桶が転用されたものとみられ、箍が2段分裏込め土に密着して検出された。上段の箍から上の第2層は、斑土であり、井戸の廃絶に際して、井戸側である結桶が抜き取られたものとみられる。土層断面の第6～9層は、井戸側の裏込土で、さらに複数の結桶が積上げられて井戸側を構成したものと推測できる。埋土中から大窯第1段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。なお97B区SK68によって掘形の一部が壊されている。

97B区SE04 南調査区の東南部、97B区の南西隅で検出された井戸である。掘形は、径2.20mほどの円形で、深さは1.88mある。97B区SE06の掘形およびSD02によって上部は壊されている。井戸側施設は確認できないが、斑土が多いという埋土の堆積状況などから廃絶時に抜き取られたものと推測する。埋土中から古瀬戸窯後期第4小期（新）～大窯第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

97B区SE05 南調査区の東南部の97B区の東南隅、上記97B区SE01の南約1.3m、97B区SD07の西側の位置で検出された井戸である。掘形は、径1.20m×1.05mほどの円形で、深さは1.80mある。井戸側の痕跡は確認できないが、掘形の壁が垂直に近いことなどから、結桶を積み上げて井戸側とした可能性がある。埋土中から古瀬戸窯後期第4小期のものと連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。掘形の一部がSD07により切られていることから、連房式登窯第5小期のものについては、僅か1点で遺物の取り上げ時に誤認した可能性がある。

97B区SE07 南調査区東部、97B区SD01に囲まれた区画の中央南よりの位置で検出された井戸である。径1.0m×0.9mの円形の掘形で、深さは1.5mある。底面の中央に結桶が設置され、その上に、円形曲物容器が2段積上げられている。いずれも底板が抜かれており、井戸側（最下段の結桶は、正位に置かれていることから水溜の可能性もある）として転用されたものである。結桶と円形曲物容器の組み合わせは、あまり例をみないものである。土層断面からみると、第1層部分に結桶もしくは円形曲物がさらに積まれていた公算が大である。埋土中からは、年代を推定し得る手掛かりとなる遺物の出土はない。

97B区SE08 南調査区東部、97B区の西寄りで検出した井戸である。SD01の南北溝によって掘形の一部が切られている。掘形は、径1.8m×1.0mの楕円形で、深さは1.0mある。井戸側の痕跡は確認できないが、その形状・埋土等から井戸と推定した。埋土中より、古瀬戸窯後期第4小期（新）の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。

土坑（SK）

96E区SK36 南調査区の南部、96E区の中央で検出された長2.9m・幅2.0m・深さ0.20mほどの浅い不整形の隅丸方形の土坑である。埋土は、地山ブロックを含む斑土で、焼土塊・炭化物が混じる。埋土中からは、古瀬戸後期第3小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK173 南調査区の西部、96E区の南東部で検出された長2.2m・幅2.2m・深さ0.26mほどの浅い隅丸方形の土坑である。埋土は、地山ブロックを含む斑土である。埋土中からは、古瀬戸後期第3小期および連房式登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK57 南調査区の西部、96E区の中央西寄りで検出された土坑である。西～南側は攪乱溝で壊され、北側が96E区SD19によって切られるなどしているが、遺存する部分から長1.4m・幅0.7m・深さ0.55mほどの方形の土坑と推定される。埋土は、地山ブロックを含む斑土である。埋土中からは、古瀬戸後期第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK286 南調査区の西部、96E区の中央西寄りで検出された径1.4m・深さ0.5mほどの円形の土坑である。底部は平坦で、円筒状を呈す。埋土は、下から薄い炭化物層（第2層）、炭化物あるいはブロック土をふくむ粘土・粘質土層（第1層）となっており、第2層から、古瀬戸後期第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97B区SK90 南調査区の東部、97B区SD01によって西～南側を囲まれた区画内を東西に区切る南北溝の一つである97B区SD12の西側で検出された土坑である。長1.7m・幅1.4m・深さ0.10mほどの浅い方形を呈し、埋土は、灰黄色粘質土である。埋土中からは、古瀬戸後期第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97B区SK26 南調査区の東部、97B区SD01の南北溝部の東側で検出された長2.5m・幅1.3m・深さ0.28mほどの長楕円形の土坑である。長軸は、97B区SD01の南北溝部と方位を同じくする。埋土は、層状堆積をなす。埋土中から、大窯第1段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK185 南調査区の西部、96E区の南東隅部で検出された長2.5m・幅1.8m・深さ0.16mほどの浅い楕円形の土坑である。埋土は、地山ブロックを含む斑土である。96E区SK186・SK264によって一部が壊されている。埋土中からは、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK305 南調査区の西部、96E区の中央西北寄りで検出された径1.2m・深さ0.4mほどの円形の土坑で、96E区SD17を切っている。底部は平坦で、小土坑状の凹みがある。埋土は、大きく3層に分けられ、下2層は斑土となっている。埋土中から、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97A区SK02 南調査区の中央西寄り、97A区の西部で検出された長2.6m・幅1.3m・深さ1.0mほどの隅丸方形の土坑である。96E・97ASD01を切っている。埋土は、部分的に層状堆積をなすが、砂層は認められない。埋土中から大窯第2～3段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97A区SK21 (97BSK117) 南調査区の中央東寄り、97A・B区にまたがって検出された土坑で、長6.2m・幅2.8m・深さ0.85mほどの東西に長い長方形を呈す。横断面形は逆台形で、埋土は大きく3層（上から第1～3層）に分けられ、層状に水平堆積をなす。埋土中からは、古瀬戸後期第4小期～大窯第3段階および連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。連房式登窯第5小期のものは量的に少なく、混入の可能性はある。

96E区SK68～71 南調査区の西部、97A区の中央で検出された重複する土坑群である。いずれも浅い土坑で、SK69が不整形の方形をなすほかは、隅丸方形を呈する。切り合い関係から、SK70（長2.4m・幅2.1m・深さ0.14m）→SK68（現長2.5m・幅1.9m・深さ0.19m）→SK69（長

2.4m・幅2.0m・深さ0.21m) → SK71 (長1.2m・幅1.2m・深さ0.17m) の順に掘削されたことが知られる。埋土は、SK68とSK71が地山ブロックを含む斑土で、SK69・SK70もブロック土を多く含むものとなっている。SK70からは、古瀬戸後期第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土し、SK68およびSK69からは、大窯第1段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。遺物の編年観と切り合い関係は矛盾しない。

97A区SK08 南調査区の中央、97A区の中央で検出された現長5.3m・幅2.6m・深さ0.20mほどの不整形の浅い土坑である。埋土は、層状堆積をなし、最上層は斑土となっている。埋土中からは、大窯第2～3段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97A区SK18・SK24 南調査区の中央、97A区の中央南寄りで検出された土坑である。SK18は、現長1.4m・幅1.2m・深さ0.40mほど、SK24は、現長4.8m・幅1.6m・深さ0.54mほどのともに不整形の土坑で96E・97A・B区SD02および同SD03によって切られている。埋土は、ともに粘土・粘質シルト・砂質シルトを基調とするもので、上層には斑土層が存す。SK24の下部には炭化物層が認められる。SK18からは、古瀬戸後期第4小期～大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土し、SK24からは、大窯第2段階の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。2基の土坑としたが、形状等からみて一つの土坑が96E・97A・B区SD02によって分断されている可能性も否定できない。

97A区SK01 南調査区の中央東寄り、97A区の東部で検出された土坑である。長径0.84m・短径0.74m・深さ0.28mで、不整形の円形を呈す。内に常滑窯産の大甕が据えられており、下半部および落下した口縁部等が出土した。大甕の内面には特に付着物は認められず、水甕の可能性が高いものと推定する。

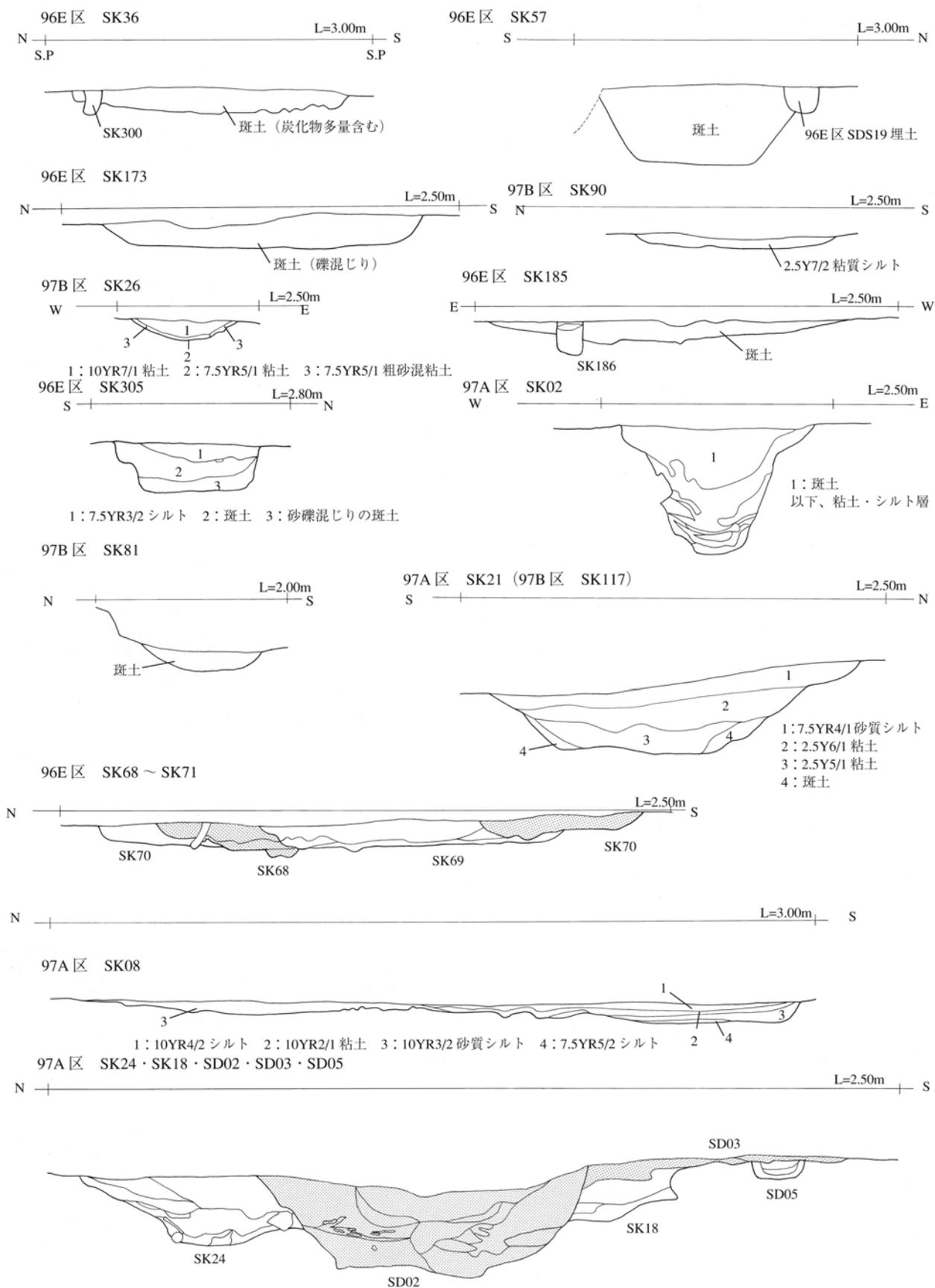
97B区SK61 南調査区の東部、97B区SD01の屈折部の西側で検出された長1.8m・幅1.5m・深さ0.10mほどの隅丸方形の土坑である。埋土は、斑土で、大窯第4段階・連房式登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK19 南調査区の北西部、96E区の中央北寄りにある大型の攪乱土坑の底面で検出した土坑である。96E区SD16の北東延長線上と同SD05の北西延長線上の直交点に位置する。長径3.50m・短径2.10m・深さ1.12mで、不整形の円形を呈する。埋土は、2層からなり、下層(第2層)は粗砂で、上層(第1層)は斑土となっている。埋土中から、連房式登窯第1～2小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97B区SK70 南調査区の中央東寄り、97B区の南西部の南壁沿いで検出した土坑である。長さ2.0m・幅1.9m・深さ0.12mの方形を呈する。97B区SK71を切り、96E・97A・B区SD02によって南肩の一部が切られている。埋土は、灰色粘質シルトで、古瀬戸後期第4小期および連房式登窯第2小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

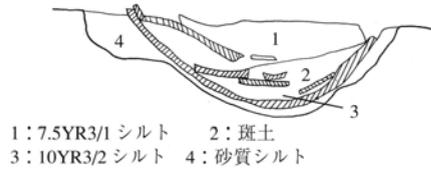
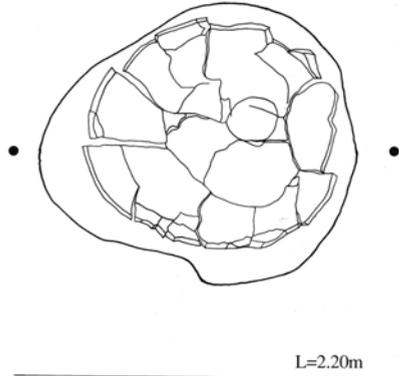
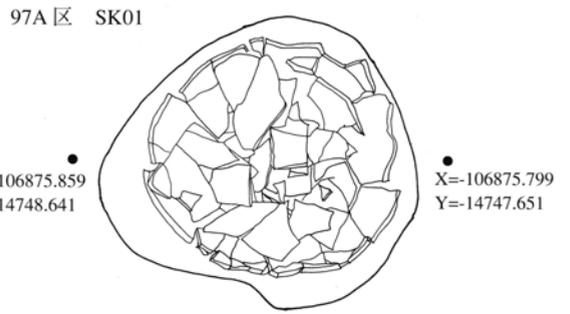
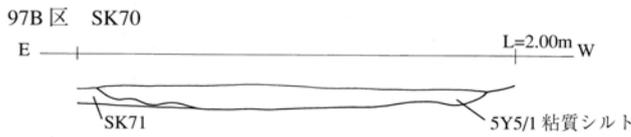
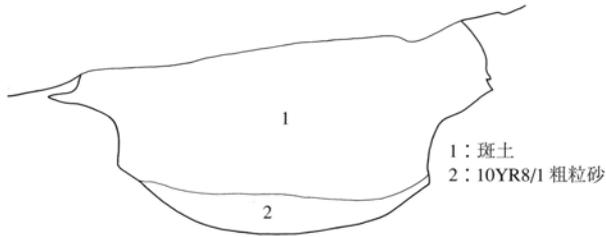
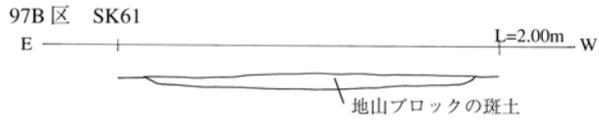
96E区SK150 南調査区の西部東寄り、96E区の東部で検出された土坑で、96E区SD04・SE02の東側に位置する。長さ1.5m・幅1.4m・深さ0.13mで、隅丸方形を呈する。埋土は、地山ブロック土を含む斑土で、埋土中から大窯第1～2段階、連房式登窯第1～4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97A区SK10 南調査区の中央東寄り、97A区の東部の南壁沿いで検出された土坑である。現長



第25図 南調査区 土坑断面図(1)

1: 40



1: 斑土 2: 5Y3/1 粘土 (混植物遺体) 3: 5Y3/1 シルト質粘土



1: 10YR4/1 砂質シルト 2: 10YR5/1 粘土 3: 7.5YR3/1 粘質シルト



7.5YR4/1 粘質シルト・10YR7/2 粘土・地山ブロックの斑土

1: 40 (97A区 SK144・SK01は 1: 20)

第26図 南調査区 土坑断面図(2)

8.0m・同幅5.2m・深さ0.50mで、不整形の方形を呈すと推定される。埋土は3層からなり、下2層はシルト質粘土・シルトを基調とし、上1層は斑土となっている。周辺の土坑との関係は、その切り合い関係から、SK16→SK10→SK03の順に掘削されたことが知られる。埋土中からは、古瀬戸後期第4小期および大窯第2段階～連房式登窯第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

97A区SK09 南調査区の中央、97A区の南壁近くで検出された土坑である。長径5.3m・短径4.4m・深さ0.5mで、不整形の円形を呈する。97A区SK16を切って掘削されている。土坑の内側の南側壁沿いと北側壁沿いに、それぞれ9本、2本の杭列が認められる。遺存する杭は、いずれも丸太材の一端を粗く削って尖らせたもので樹皮が残るものもある。埋土は、粘土・粘質シルト・シルトを基調とするもので層状堆積をなす。この土坑の性格については詳らかにし得ないが、杭列を設けるなど他の土坑にない造作が目される。埋土中からは、大窯第1段階～連房式登窯第5小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

96E区SK144 南調査区の中央西寄り、96E区の東壁近くで検出された不整形の土坑である。96E区SK266に切られる。長2.4m・幅2.2m・深さ0.2mで、埋土は斑土からなる。多量の遺物が出土したが、その多くは小片である。埋土中からは、古瀬戸中期・後期第3～4小期および大窯第2段階～連房式登窯第4小期の瀬戸・美濃窯産の陶器が出土した。

自然流路 (NR)

NR01 南調査区の東端部、すなわち97B区の東端で検出された自然流路の一部で、調査区の北東隅からあらわれ西へ幾分膨らんで南東隅へ入っていく。97B区SD12および97B区SD07の一部を壊している。埋土は、砂層を含む洪水性の堆積土で、その上層部分は、97B区の東～南部さらには97A区の南部の地山面（遺構検出面）上を覆っている。埋土中からは、時期を特定し得る遺物の出土はなかった。土量からみて相当規模の洪水が想定される。ただこの洪水性の土層は、遺構がほとんど埋まった後に堆積しており、この洪水が遺跡の廃絶の直接的原因になったとは考え難い。なお、検出された流路部分は、居館跡状の地割りが急に乱れる部分に相当し、事前の地籍図の検討から正戸川の旧流路、もしくは氾濫跡ではないかと予見されたところであり、これを裏付ける結果を得たことになる。

第5章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器・陶磁器類、木簡、瓦類、木製品、石製品、金属製品、鍛冶・鋳造関連遺物、漆製品および動植物遺体など各種のものがある。量的に最も多いのが土器・陶磁器類で、遺物用コンテナ170箱ほどである。これら遺物は、既述のように遺物包含層が殆ど遺存しなかったことから、溝、土坑、井戸など遺構内からの出土品で、とくに97B区SD01からは各種の遺物が多量に出土した。

以下、遺物について、出土量の多い土器・陶磁器類および木製品については原則として遺構毎に、木簡・瓦類・石製品等についてはそれぞれ一括して種類毎に報告する。なお動植物遺体については第6章科学分析の項でふれる。

第1節 土器・陶磁器類

土器・陶磁器類としては、内耳鍋・羽釜・皿などの土師器、瀬戸・美濃窯、常滑窯、備前窯(?)、志戸呂窯(?)など各窯産の陶器ならびに肥前系の陶磁器、および中国陶磁器等がある。このうち最も多量に出土したのが土師器の土鍋類で、ついで瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器の順で多く、備前窯、志戸呂窯産かと推定される陶器、肥前系の陶磁器、中国陶磁器はごく少量の出土である。

以下、報告にあたっては、時間的制約、紙幅の都合等で、実測図を多く掲載し、土器・陶磁器類の個々すべてを報告することは出来ないため、本報告では、遺物個々に関する実測図・記述の大半を割愛し、主要遺構の出土品および遺構出土の良好な一括遺物を重点的にとりあげ、そのほかの遺構出土品については表示など簡略化して報告することとする。その際、遺構毎の出土品目・数量を示すことに重点をおいた。とくに瀬戸・美濃窯産陶器に関しては、遺構出土品のすべてを可能な限り既往の編年研究の成果を取り入れて分類・表示し、陶器の生産と流通、伝世等の問題を扱う上での基礎データの作成に努めた。なお、数量は接合後の破片数を用い、()内に示した。

編年観、類別・用語・呼称等について

報告するにあたりあらかじめここで用いる遺物の編年観、類別・用語・呼称などについて示しておきたい。

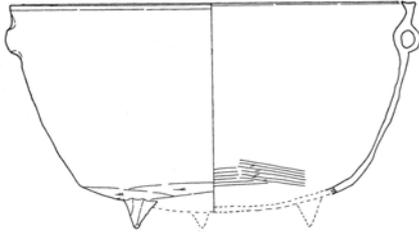
瀬戸・美濃窯産陶器 陶器のなかで出土量が最も多い瀬戸・美濃窯産陶器については、その類別・呼称および編年観について藤澤良祐氏(瀬戸市埋蔵文化財センター)の下記の研究に依拠し、かつ型式分類に際しては藤澤氏から全面的協力を得、直接教示を頂いている。

藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』 愛知県瀬戸市

藤澤良祐 1998 『瀬戸市史 陶磁史篇六』 愛知県瀬戸市

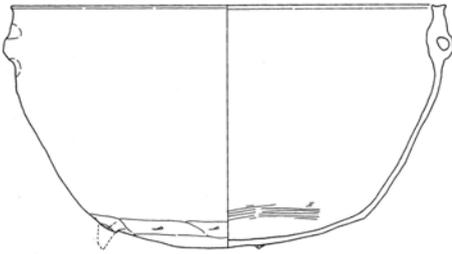
常滑窯産陶器 整理・報告にあたっては、赤羽一郎・中野晴久両氏の下記の研究成果をうけつ第29図に示す本遺跡の実情に即した独自の分類により報告する。16～17世紀代の編年研究は12～15世紀代に比べ細分化が立ち遅れており、なお研究の余地がある。こうしたことから

内耳鍋の分類



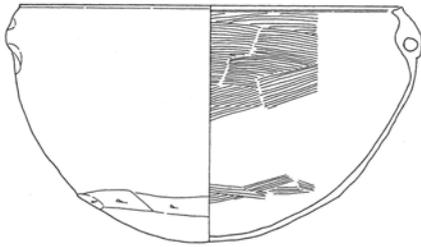
内耳鍋 a 類

平丸底の底部と緩く開きながら直線的にのびる体部からなるもので、底部と体部との境は稜をなす。



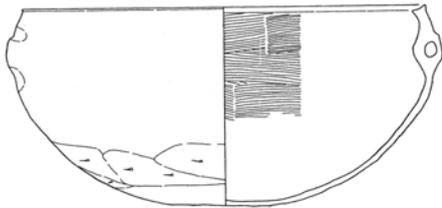
内耳鍋 b 類

a 類に比べ幾分丸みをもった平丸底の底部と、緩く開きながら直線的にのびたのち、口縁部近くで垂直気味に立ち上がる体部からなるもので、底部と体部との境は a 類同様に稜をなす。



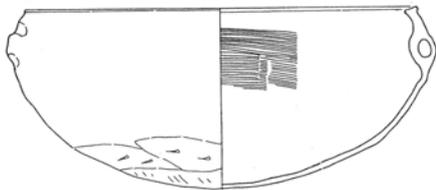
内耳鍋 c 類

丸底の底部と直線的にのびたのち口縁部付近で内弯する体部からなるもので、底部から口縁部に至るまでは単一曲線をなす。



内耳鍋 d 類

丸底（平丸底に近い）の底部と内弯する体部からなるもので、底部から口縁部に至るまで単一曲線をなす。c 類に比べ浅手である。ちなみにこの d 類の径高指数（器高／口径×100）は 50 前後であるのに対して、c 類の径高指数は、53～63 とばらつきがみられる。



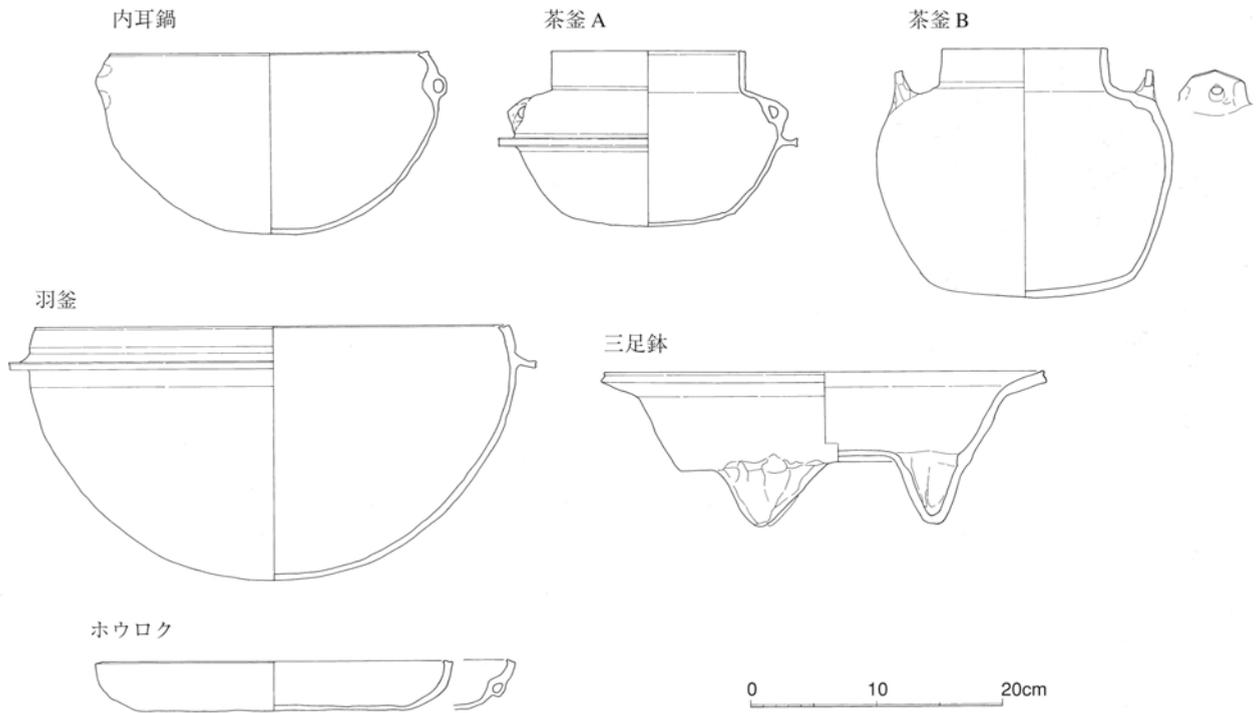
内耳鍋 e 類

内耳鍋 d 類がより扁平化した形態のもので、体部の内弯がよりきつい。径高指数は、45 前後である。

1:4

第 27 図 内耳鍋 分類図

土師器 器種分類



内耳鍋 半球形の形態で、口縁部内側に吊り手を装着するための「耳（内耳）」が一对つくもの。

羽釜 丸底の半球形（鉢形）の体部で、口縁部直下に短い羽（鐙）が回る形態のもの。

茶釜 A 鐙がついた扁球形ないし球形の体部に、直立する口縁部がつく器形のもので、肩部に吊り手を装着するための一对の「耳」がつく。

茶釜 B 腰および肩が張った球形の体部と、直立する口縁部からなるもので、肩部に吊り手を装着するための一对の「耳」がつく。

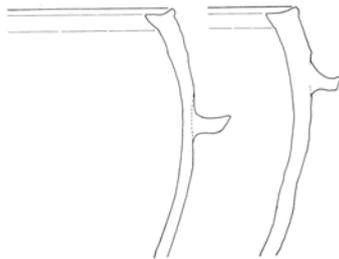
ホウロク 平丸底の浅い鉢（深皿）形の形態のもので、口縁部の内側に吊り手を装着するための一对の「耳」がつく。

三足鉢 浅鉢形の体部に屈折して開く幅広の口縁部がつくもので、底面に円孔をあけて中空の逆円錐状の足を三箇所取り付けしている。火鉢（手焙り）ではないかとの指摘がある。

* 茶釜 A B と表記するものは、口縁部片などで茶釜 A か茶釜 B かを明確に区別し得ないものの意である。

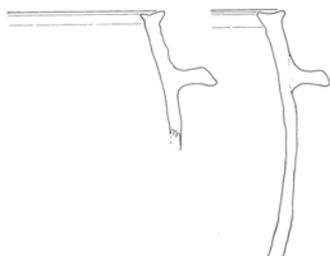
羽釜の分類

羽釜 I



羽の上面に親指、端面に人指し指、下面に中指を当てて整形したもので、おそらくは口縁部を上面にして作業したものと推察する。

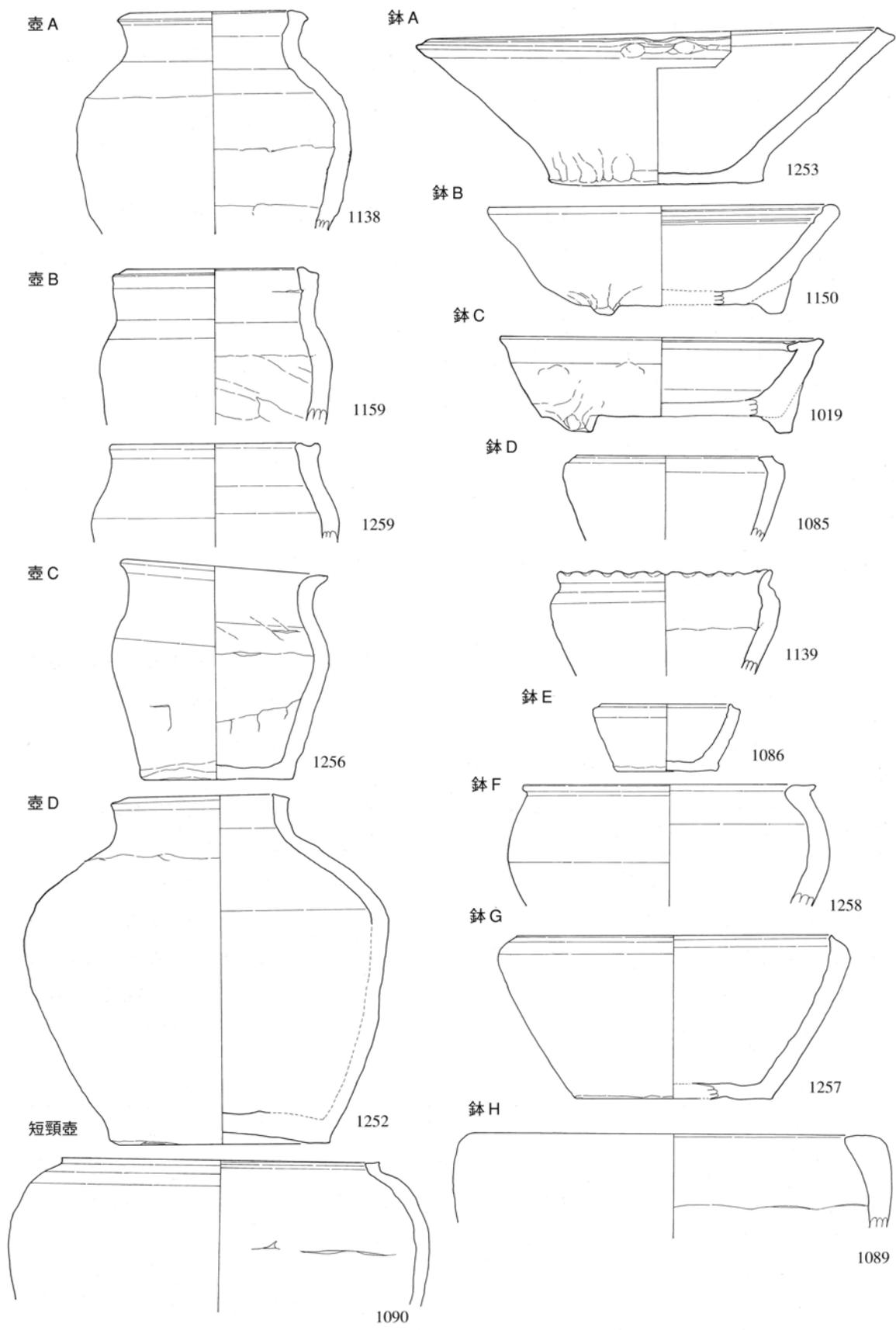
羽釜 II



羽の上面に中指、端面に人指し指、下面に親指を当てて整形したもので、おそらくは口縁部を下面にして（倒立させて）作業したものと推察する。

* 羽釜 I II と表記するものは、I なのか II なのか判別できないものの意である。

第 28 図 土師器器種分類図および羽釜分類図



第29図 常滑窯産陶器分類図

主要遺構以外の出土品の図化にもつとめた。

中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世窯業をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久 1996 「常滑窯の研究～近世赤物について～」『知多古文化研究 10』

土師器 煮沸具の器種の類別・呼称については原則として下記の研究によるが、一部実情にあわせて改変したものもある。とくに器種の細別については、良好な資料が得られたので本遺跡にあわせた新たな分類を試みた（第27・28図）。土師器皿については、糸切り底か否かを手掛かりに土師器皿A・B二種に分け、さらに土師器皿A・Bについては、体部から口縁部にかけてが、内湾するもの（a）と口縁部が外反するもの（b）および直線的に延びるもの（c）の三つに細分する。したがって土師器皿（以下、土師皿と略称する）A aとした場合は、糸切り底で、体部から口縁部にかけてが内湾するものを示す。

北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報 平成7年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

以下、北調査区から順に報告する。

1 北調査区

土器・陶磁器類の出土量は、南調査区に比べ量的には少ない。これは、検出遺構の少なさに加え、城館の周辺部に当たるといふ遺構の性格に起因するものと推測される。

96A・B・C区SD01出土品（図版15・16 写真図版21）

内耳鍋・羽釜・皿などの各種土師器、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産の陶器類および若干数の備前窯産・志戸呂窯産(?)の陶器、中国陶磁器類がある。検出長・規模のわりには総じて遺物量は少ない。志戸呂窯産?とした香炉は、鉄分を含んだ胎土・焼き上がり状況などから瀬戸・美濃窯産ではなく、これまでの知見からすると志戸呂窯（静岡県）の公算が大であると推察（静岡大学教授柴垣勇夫氏より教示をうける）したものである。また備前窯?としたものについては、暗青灰色の胎土で、器表面が赤紫色を呈するもので、美濃窯産ではないかとの見解もある。

調査時の遺物の取り上げ基準が若干異なるため、以下、調査区別に品目・数量を示す。

96A区SD01出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

下層			
古瀬戸窯後期第3・4小期	瓶類 (1)	連房式登窯期	播鉢 (3)
大窯第3段階	鉄釉水滴 (1) 德利 (1)		瓶類 (1)
中・下層			
大窯第3段階	天目茶碗 (1)	連房式登窯第1小期	志野釉碗 (1)
大窯期	天目茶碗 (1) 播鉢 (1)		播鉢 (1)
		連房式登窯第1・2小期	灰釉碗 (1)
		連房式登窯第2小期	黄瀬戸鉢 (1)
		連房式登窯第3・4小期	天目茶碗 (1)
中層			
		連房式登窯第4小期	天目茶碗 (1)
上層			
大窯第1・2段階	灰釉丸皿 (1)	連房式登窯第1・2小期	灰釉碗 (1)
		連房式登窯第2小期	播鉢 (1)
		時期不明（瀬戸・美濃窯産?）	軟陶の碗 (1)

層区分なし			
大窯第3段階	天目茶碗 (1)	連房式登窯第3・4小期	天目茶碗 (1)
		時期不明	搦鉢 (1)

常滑窯産陶器

下層	壺甕類 (1)
中・下層	鉢A (1) 壺甕類 (1)
上層	壺甕類 (1)
層区分なし	壺甕類 (5)

志戸呂窯産 香炉 (1)

備前窯?産 徳利 (2 同一個体?)

中国磁器 下層 青花端反碗 (2 明末清初)

土師器

	下層	中下層	上層	層位の記載なし
内耳鍋	2	3	3	2
茶釜A B			2	
胴部片	13	8	2	
土師皿	B c (1)	B a (1)	A (1)	

96B区SD01出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

下層			
大窯第3段階	天目茶碗 (1) 徳利 (1)	連房式登窯第2小期	灰釉鉢 (1)
大窯期	茶壺 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第3・4小期	鉄釉片口 (1)
	徳利 (1)	連房式登窯第4小期	天目茶碗 (1)
			尾呂茶碗 (1)
		連房式登窯期	搦鉢 (1)
		時期種類を特定し得ないもの (1)	

上層

古瀬戸窯後期第4小期	搦鉢 (1)		
大窯第4段階	志野鉄絵皿 (1)		
大窯期	天目茶碗 (1)		

常滑窯産陶器

下層	鉢A (1)	鉢C (1)	甕 (1)
上層	壺甕類 (1)		

土師器

	下層	上層
内耳鍋	6	3
羽釜I		1
胴部片	5	5
その他	1 (外反する頸部状のもの)	
土師皿	B a (2)	B a (1)

96C区SD01出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第4層	
古瀬戸窯後期第4小期	灰釉皿 (1)
大窯第1段階	天目茶碗 (1)
大窯第1・2段階	天目茶碗 (1) 灰釉皿 (1)
大窯第3段階	天目茶碗 (1)
大窯期	搦鉢 (1)
第3層	
大窯第1段階	灰釉丸碗 (連弁文あり) (1)
時期種類を特定し得ない小片等 (5)	
第2層からの出土はなし 第1層は96C区SD14に相当	

常滑窯産陶器

第4層	鉢A (1) 壺甕類 (1)
第3層	壺甕類 (1)
層区分なし	壺甕類 (1)

土師器

	第4層	第3層	第2層
内耳鍋	3	5	1
羽釜I	5		
三足鉢	2		
胴部片	36	15	1
土師皿	B (1) B a (1)	B a (1)	

96C・D区SD06出土品 (図版17・18 写真図版21)

内耳鍋・羽釜・皿などの各種土師器、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産の各種陶器類および若

千数の肥前系磁器がある。古瀬戸窯後期から連房式登窯第11小期に至までの遺物が出土しており、長期間にわたって掘り直しを繰り返しつつ使用されていたことが窺われる。以下、調査区毎に品目・数量を記す。

96C区 SD06 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

北部系山茶碗生田期 山茶碗 (1)	連房式登窯第2小期 志野丸皿 (1)
古瀬戸窯後期第4小期 腰折皿 (1)	連房式登窯第3小期 灰釉碗 (1)
大窯第3段階 天目茶碗 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第4小期 搦鉢 (1)
大窯期 瓶類 (1) 德利 (1)	連房式登窯第9小期 搦鉢 (1)
	連房式登窯期 天目茶碗 (1)
	時期種類を特定し得ない小片等 (2)

第1層

古瀬戸・大窯期 搦鉢 (1)	連房式登窯第3小期 瀬戸・段付白天目茶碗 (1)
大窯期 搦鉢 (1) 鉄釉甕 (1)	連房式登窯第8小期 瀬戸・梅文皿 (1)
	連房式登窯第8・9小期 瀬戸・腰錆 (1) 瀬戸・灰釉片口 (1) 搦鉢 (1)
	連房式登窯第10・11小期 瀬戸・陶胎広東碗 (1)
	連房式登窯期 搦鉢 (1)

第2層からの出土なし

常滑窯産陶器

第3層	鉢A (1) 壺甕類 (5)
第2層	壺甕類 (2)
第1層	鉢A (1) 甕 (5) 壺甕類 (7)

肥前系磁器 第1層 染付湯呑み (筒型) 碗 (1)

土師器

	第4層	第3層	第2層	第1層
内耳鍋	1	3		1
羽釜Ⅰ				3
羽釜Ⅱ				1
ホウロク				1
胴部片		17	1	15
土師皿		B a (1)		B a (1)

96D区 SD06 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

古瀬戸窯後期第3小期 天目茶碗 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野丸皿 (1)
古瀬戸窯後期第4小期新 天目茶碗 (1)	連房式登窯期 德利 (1)
古瀬戸窯期 搦鉢 (1)	時期を特定し得ない小片など 天目茶碗 (1)
古瀬戸・大窯期 搦鉢 (1)	時期種類を特定し得ない小片等 (3)

第2層

古瀬戸窯後期第2小期 天目茶碗 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野丸皿 (1)
古瀬戸窯後期第4小期新 搦鉢 (2)	連房式登窯第3小期 天目茶碗 (1) 志野丸皿 (1)
古瀬戸窯期 搦鉢 (1)	連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (1) 反り皿 (1)
大窯第3段階 天目茶碗 (1) 鉄釉大皿 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第5小期 搦鉢 (1) 鉄鉢 (1) 美濃・灰釉輪甕 (1)
大窯第3・4段階 鉄釉甕 (1)	連房式登窯第8~11小期 瀬戸・甕 (1)
大窯第4段階 搦鉢 (1)	連房式登窯期 搦鉢 (1)
大窯期 搦鉢 (5) 德利 (1) 鉄釉甕 (1) 器種不明 (1)	時期を特定し得ない小片など 天目茶碗 (1) 搦鉢 (1)
	時期種類を特定し得ない小片等 (4)

土のう積み護岸裏込土

	連房式登窯第3・4小期 美濃・灰釉丸皿 (1)
	連房式登窯第5小期 美濃・灰釉丸皿 (1)

第1層

大窯第1段階 搦鉢 (1)	連房式登窯第1~4小期 黄瀬戸鉢 (1)
大窯第4段階 志野鉄絵皿 (1)	連房式登窯第3・4小期 志野丸皿 (1)
大窯期 搦鉢 (1)	連房式登窯第5~7小期 美濃・灰釉丸碗 (1)
	連房式登窯第8小期 瀬戸・灰釉碗 (1) 瀬戸・上絵付け皿 (1)
	連房式登窯第8・9小期 瓶掛 (1) 瀬戸・筒形碗 (1) 瀬戸・灰釉碗 (1) 瀬戸・搦鉢 (1) 瀬戸・花瓶 (1) 美濃・小碗 (1)
	美濃・湯呑み (1) 美濃・鉄釉土瓶 (1)
	連房式登窯第10小期 美濃・陶器染付碗 (1)
	連房式登窯第8~11小期 陶胎広東碗 (1) 灰釉碗 (1)
	連房式登窯期 美濃・德利 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (6)
	時期を特定し得ないもの 搦鉢 (1) 磁器染付碗 (1) 鉄釉碗 (1)
	明治以降の瀬戸・磁器皿 (1)

下層	
大窯期 播鉢 (1)	
上層	
大窯期 瓶類 (1)	
肥前系磁器 染付箱形陶器 (1)	
常滑窯産陶器	
第3層	短頸壺 (1) 壺甕類 (14)
第2層	鉢B (1) 短頸壺 (2) 壺甕類 (17)
第1層	鉢A (1) 甕 (1) 壺甕類 (16)

土師器					
	第4層	第3層	第2層	第1層	上層
内耳鍋	6	17	7	1	1
羽釜 I			3		
羽釜 II		2	2	1	
羽釜 I II		2		1	
茶釜 A		3			
茶釜 B			1		
三足鉢		2			
胴部片	14	31	30	8	1
その他		2	2		
土師皿		A (1) B a (1)	B a (1)	? (1)	

その他 第3層 (2 器種不明) 第2層 (鉢の口縁? 1 器種不明 1)

96C区SD09・96D区SD05出土品 (図版19)

本遺構は、屋敷地の区画溝と考えられるもので、96D区SD05からは堆積土中から炭化物とともに多量の土師器の煮沸具類が出土した。大窯第3段階という時期、炭化物とともに集中して出土するという状況は、後述の97A区SE01、97B区SE02と酷似しており注目される。遺憾ながら紙幅の都合で土師器の煮沸具類の実測図を掲載しえなかったが、編年の基準資料になり得るものとする。以下、調査区毎に品目・数量を記す。

96C区SD09出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第1層		
古瀬戸・大窯期 茶壺 (1)		連房式登窯第4小期 美濃・反皿 (1)
大窯第2段階 鉄釉稜皿 (1) 播鉢 (1)		連房式登窯期 天目茶椀 (1)
大窯期 播鉢 (2)		

第2層からは遺物の出土なし

土師器

	第2層	第1層
内耳鍋	3	11
羽釜 I	2	10
羽釜 I II	2	
胴部片	47	139
その他	1	1
		土師皿 B a (1) ? (2)

その他 ともに「く」字状口縁鍋類

96D区SD06出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 德利 (1)	時期種類を特定し得ないもの (1)
古瀬戸窯期 茶壺 (3) 鉄釉甕 (1)	
大窯第1段階 天目茶椀 (1) 播鉢 (1)	
大窯第2段階 丸皿 II (1)	
大窯第3段階 天目茶椀 (2) 播鉢 (2)	
大窯期 天目茶椀 (1) 播鉢 (4) 鉄釉甕 (1)	
常滑窯産陶器 鉢A (2) 鉢E (1) 壺甕類 (5)	

土師器

内耳鍋 (78)	土師皿
羽釜 I (29)	A b (1)
羽釜 II (12)	A c (8)
羽釜 I II (13)	X A (3)
茶釜 A (13)	B a (1)
茶釜 B	B c (1)
茶釜 A B (4)	a (3)
ホウロク	? (11)

ホウロク 三足鉢 胴部片 (653) その他 蓋 (3) 片口部片 (1)	? (11)
--	--------

96A 区 SD21 出土品 (図版 18)

溝の東端部の底面で、土師器の煮沸具類および若干数の陶器類が一括廃棄された状態で出土したほか、堆積土中からの遺物の出土は少ない。溝出土品ではあるが、大窯第2段階の一括資料となり得るものと考え。注目されるのが羽釜で、下腹部に径2cm前後の穿孔(焼成後?)がみられるものが二例ほどある。あるいは同一個体かも知れないが管見の限りではほかに例をみないものである。今後の検討に期したい。以下、品目・数量を記す。

瀬戸・美濃窯産陶器

第10・11型式山茶椀 (1) 古瀬戸窯後期第4小期新 腰折皿 (1) 大窯第1段階 天目茶椀 (2) 灰釉端反皿 (3) 大窯第1・2段階 灰釉丸椀 (1) 大窯第2段階 天目茶椀 (1) 搦鉢 (2) 大窯期 甕 (1) 搦鉢 (2)	連房式登窯期 德利 (1) 混入か
--	-------------------

常滑窯産陶器 甕 (1)

土師器

内耳鍋 (25) 羽釜。(4) 羽釜Ⅱ (2) 胴部片 (299) その他 「く」字口縁鍋 (1) ? (1) 鉢形口縁 (1) 土師皿A (16) 土師皿Ba (4) 土師皿? (4)
--

96A 区 SD02 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第1層

大窯期 鉄釉甕 (1) 器種を特定し得ないもの (1)

層位の記載なし

大窯第3段階 天目茶椀 (1) 大窯期 德利 (1)	連房式登窯第1・2小期 段付灰釉椀 (1) 連房式登窯第2小期 志野丸皿 (3) 連房式登窯第3小期 志野丸皿 (2) 連房式登窯期 搦鉢 (1)
-------------------------------	--

常滑窯産陶器 層位の記載なし 鉢H (2) 甕 (16) 壺甕類 (36)

96A 区 SD03 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 有耳壺 (1)

96A 区 SD04 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 天目茶椀 (1)	連房式登窯第5小期 美濃・灰釉皿 (1)
-----------------	----------------------

常滑窯産陶器 短頸壺 (1) 壺甕類 (1)

土師器 羽釜ⅠⅡ (1) 胴部片 (2)

96A 区 SD05 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 鉄釉椀 (1)

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

土師器 胴部片 (3)

96A 区 SD09 出土品

本遺構出土の備前窯産の瓶類(1)は、体部片ではあるが、暗青灰色の胎土で黒色の小さな吹き出しが見られるなど備前窯産陶器の特徴をもつものである。

備前窯産 瓶類 (1)

土師器 内耳鍋 (1) 茶釜A B (1) 胴部片 (4)

96A区SD10出土品

本遺跡からは加工円盤の出土を見ない。本例が唯一、「加工円盤？」ではないかとされるものである。

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 緑釉皿 (1) 大窯第1段階 天目茶椀 (1) 灰釉丸皿。(1) 大窯第1・2段階 灰釉丸椀 (1) 大窯期 摺鉢 (1)	時期種類を特定し得ないもの (2 内1点は加工円盤?)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	
土師器	
内耳鍋 (18) 羽釜 I (3) 羽釜 II (2) 羽釜 I II (3) 茶釜 A (1) 茶釜 A B (4) 胴部片 (184)	土師皿 A b (5) A (14) B a (3) B (2) ? (10)

96A区SD11出土品

中国磁器の青磁三足香炉(盤?)は、釉調等から14・15世紀代のものと考えられるものであり、長期間にわたり伝世したものとみられる。

瀬戸・美濃窯産陶器	
	連房式登窯第3・4小期 鉄絵鉢(盤) (1) 連房式登窯第4小期 摺鉢 (1) 連房式登窯期 天目茶椀 (1) 摺鉢 (1) 時期種類を特定し得ないもの (2)
常滑窯産陶器 短頸壺 (1) 甕 (1) 壺甕類 (1)	
中国磁器 青磁三足香炉(盤?) (1)	
土師器 土鍋類胴部片 (10) 土師皿 (2)	

96A区SD12・17出土品

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 摺鉢 (1) 大窯期 摺鉢 (1) 壺・甕類 (1) 香炉 (1)	連房式登窯第2小期 黄瀬戸鉢(盤) (1) 連房式登窯第3・4小期 鉄釉椀 (1) 連房式登窯期 摺鉢 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	
中国磁器 青花端反小杯 (1) 青花皿 (1)	
土師器	
内耳鍋 (2) 羽釜 I (1) 羽釜 I II (1) 胴部片 (9)	土師皿 B a (3)

96A区SD14出土品

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 摺鉢 (1)

土師器 内耳鍋 (1) 土鍋類胴部片 (5)

96A 区 SD15 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

下層	
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1)	
層位の記載なし	
大窯第2段階 天目茶椀 (1) 灰釉丸皿Ⅰ (1) 灰釉削丸皿 (1) 大窯期 摺鉢 (2) 鉄釉甕 (1)	連房式登窯期 椀皿類 (2) ともに小片 時期を特定し得ないもの 天目茶椀 (1)
常滑窯産陶器 壺 (1) 甕 (3) 壺甕類 (7)	
土師器	
内耳鍋 (14) 羽釜Ⅰ (1) 羽釜Ⅱ (3) 羽釜ⅠⅡ (1) 土鍋類胴部片 (120) 器種を特定し得ないもの (1)	土師皿 A b (1) A (5) B a (5) B (14) ? (7)

96A 区 SD24 出土品 (図版 19 写真図版 22)

上層に大窯期のものが多く見られるなど、逆転現象を起こしている。瀬戸・美濃窯産陶器にくらべ土師器の煮沸具類の出土が少ない。織部鉢は、本遺跡では僅少である。

瀬戸・美濃窯産陶器

下層		
大窯期 搦鉢 (1) 徳利 (1) 桶 (1) 茶壺 (4)	連房式登窯第1小期 天目茶椀 (1) 連房式登窯第1・2小期 搦鉢 (1) 連房式登窯第2小期 灰釉丸皿 (1) 香炉 (1) 連房式登窯第3小期 天目茶椀 (1) 連房式登窯第3・4小期 連房式登窯第4小期 鉄絵鉢 (1) 連房式登窯第5小期 美濃・香炉 (1) 連房式登窯期 徳利 (4)	
上層		
古瀬戸窯後期 有耳壺 (1) 大窯第1・2段階 灰釉丸椀 (1) 大窯第4段階 搦鉢 (1) 大窯期 搦鉢 (5)	連房式登窯第1小期 天目茶椀 (1) 織部鉢 (1) 連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (1) 黄瀬戸鉢 (1) 連房式登窯第2小期 天目茶椀 (1) 志野鉄絵皿 (1) 連房式登窯第3・4小期 美濃・鉄絵鉢 (1) 連房式登窯期 天目茶椀 (2) 搦鉢 (1) 器種を特定し得ないもの (5)	
層位の記載なし		
時期種類を特定し得ないもの (1)		
常滑窯産陶器		
下層	鉢Ⅱ (風呂? 1) 短頸壺 (1) 甕 (4 内1点は上層出土品と接合)	
上層	風呂? (1) 短頸壺 (1) 甕 (1) 壺甕類 (23)	
中国磁器 青花椀皿類 (1)		
土師器		
	下層	上層
内耳鍋		8
羽釜Ⅰ		3
羽釜Ⅱ		1
羽釜ⅠⅡ		9
胴部片	1	40
土師皿	B a (1)	A (2) B (1) ? (1)

常滑窯産陶器 甕 (1) 壺甕類 (2)

土師器 内耳鍋 (2) 土鍋類胴部片 (5)

96D 区 SE01 出土品 (図版 19)

堆積土中からの出土品には、連房式登窯期のものが多いが、大窯期のものも少なからず出土している。本井戸は、大窯期から連房式登窯期にかけて長期間使用されたのかもしれない。なお、連房式登窯第8小期以降に位置付けられる陶器染付椀は、小片であり後(Ⅲ期)に混入した公算が大である。以下、品目・数量を記す。

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 鉄釉緑釉皿 (1) 大窯第2段階 摺鉢 (1) 大窯第3段階 鉄釉大皿 (1) 摺鉢 (2) 大窯第4段階 志野鉄絵皿 (1) 大窯期 天目茶碗 (1) 摺鉢 (1) 鉄釉甕 (3) 重圈皿 (1) 器種を特定し得ないもの (3)	連房式登窯第1小期 緑釉碗 (1) 連房式登窯第1・2小期 天目茶碗 (1) 片口 (1) 連房式登窯第2小期 灰釉段付天目茶碗 (1) 天目茶碗 (1) 志野皿 (2) 連房式登窯第3小期 天目茶碗 (1) 連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (1) 連房式登窯第4小期 段付天目茶碗 (1) 天目茶碗 (1) 連房式登窯第5小期 鉄釉碗 (灰流し 1) 美濃・丸皿 (1) 連房式登窯第8小期～ 陶器染付碗 (1 小片) 連房式登窯期 天目茶碗 (2) 皿 (1) 摺鉢 (1)
常滑窯産陶器 鉢A (2) 鉢D (1) 甕 (1)	壺甕類 (2)
土師器	
内耳鍋 (18) 羽釜 I II (2) ホウロク (1) 三足鉢 (3) 胴部片 (81) その他 (1 器種不明)	土師皿 B b (2)

以下の遺構出土品については、紙幅など諸般の都合で、遺構の年代推定の根拠となる瀬戸・美濃窯産陶器の品目・型式・数量を中心に常滑窯産陶器など出土陶器の種類を報告・表示するにとどめ、土師器類の実測図の掲載および記述は一部を除き割愛する。

96B・C区SD05出土陶器 (写真図版22)

連房式登窯第8・9小期の仏飼具 (1) については、攪乱近くでの出土であり、一つだけ年代的にも離れるため、混入の可能性はある。

96B区SD05出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

下層	
大窯第1・2段階 天目茶碗 (1) 大窯第2段階 灰釉 (丸) 皿 (1) 丸皿 II (1) 大窯期 摺鉢 (1)	連房式登窯第2小期 摺鉢 (1) 江戸時代後期 碗類 (1)
上層	
大窯第1段階 天目茶碗 (1) 大窯第2段階 天目茶碗 (2) 大窯期 摺鉢 (1) 徳利 (1) 茶壺 (1)	連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (2) 摺鉢 (1) 連房式登窯期 天目茶碗 (1) 摺鉢 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
層位の記載なし	
古瀬戸窯後期 有耳壺 (1) 器種を特定し得ないもの (1) 古瀬戸・大窯 器種を特定し得ないもの (3) 大窯第1段階 摺鉢 (1) 大窯第1・2段階 有耳壺 (1) 大窯第2段階 天目茶碗 (1) 丸皿 II (1) 大窯第4段階 灰釉折縁皿 (1) 灰志野皿類 (1) 大窯期 天目茶碗 (3) 摺鉢 (8) 鉄釉甕 (3) 器種を特定し得ないもの (1)	連房式登窯第1小期 天目茶碗 (1) 黄瀬戸鉢 (1) 志野反皿 (1) 摺鉢 (5) 連房式登窯第1・2小期 鉄釉碗 (灰流し) (1) 志野丸皿 (1) 黄瀬戸鉢 (1) 連房式登窯第2小期 天目茶碗 (3) 志野丸皿 (1) 志野皿 (2) 連房式登窯第3小期 摺鉢 (3) 連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (1) 鉄釉丸碗 (1) 志野皿 (1) 灰釉鉢 (1) 連房式登窯第4小期 天目茶碗 (1) 連房式登窯第8・9小期 仏飼具 (1) 連房式登窯期 天目茶碗 (2) 灰釉碗 (2) 鉄釉碗 (1) 茶壺 (2) 摺鉢 (3) 器種を特定し得ないもの (4) 時期を特定し得ないもの 天目茶碗 (2) 茶壺 (1)

常滑窯産陶器

下層	壺甕類 (1)
上層	壺甕類 (3)
層位の記載なし	壺B (1) 甕 (3) 壺甕類 (3)

中国磁器 青磁碗 (1)

96C区SD05出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層

大窯第1段階 天目茶碗 (1) 大窯第3段階 灰釉内壳皿 (1) 摺鉢 (1) 大窯第4段階 志野鉄絵向付 (2)	連房式登窯第2小期 志野丸皿 (1)
---	--------------------

第1層

大窯第4段階 摺鉢 (1) 大窯期 徳利 (1)	
-----------------------------	--

層位の記載なし	
大窯期 鉄釉片口 (1) 摺鉢 (4)	連房式登窯第1・2小期 志野丸皿 (3) 連房式登窯期 天目茶碗 (1)
常滑窯産陶器	
上層	鉢A (1)
層位の記載なし	
	壺甕類 (1)

96A区SD13 (SD16) 出土陶器 (図版19)

96A区SD13 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

下層

	連房式登窯第5小期 摺鉢 (1)
層位の記載なし	
大窯期 天目茶碗 (1)	

常滑窯産陶器 甕 (1) 壺甕類 (2)
土師器 内耳鍋 (2) 土鍋類胴部片 (5)

96A区SD16 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

下層

大窯期 德利 (1)	
層位の記載なし	
大窯第1段階 天目茶碗 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野丸皿 (3)
大窯第2段階 天目茶碗 (2)	連房式登窯第2小期 輪髡皿 (1) 摺鉢 (1)
大窯第4段階 志野鉄絵皿 (1)	連房式登窯第3小期 天目茶碗 (1)
大窯期 摺鉢 (1) 德利 (1) 器種を特定し得ないもの (1)	連房式登窯第4小期 鉄絵鉢 (1) 時期を特定し得ないもの 瓶類 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)

常滑窯産陶器 鉢A (1) 短頸壺 (1) 壺甕類 (4)

96A区SD18 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 天目茶碗 (1)	連房式登窯第2小期 天目茶碗 (1)
大窯第3段階 鉄釉丸皿Ⅱ (1)	連房式登窯第8・9小期 陶器染付碗 (1)

96A区SD19 出土陶器 (図版19)

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯期 器種を特定し得ないもの (1)	連房式登窯第3・4小期 志野皿 (1)
---------------------	---------------------

常滑窯産陶器 鉢A (1) 鉢H (1) 甕 (1) 器種を特定し得ないもの (1)

96A区SD22 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1・2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1)	時期種類を特定し得ないもの (1)
大窯第2段階 緑釉丸皿 (1)	
大窯期 瓶類 (1)	

常滑窯産陶器 鉢A (1)

96A区SD23 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

	時期種類を特定し得ないもの (1)
--	-------------------

瀬戸・美濃窯産陶器

	連房式登窯第8小期 練鉢 (1) 時期を特定し得ないもの 美濃・碗 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
--	---

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)
肥前系磁器 染付碗 (2) 染付皿 (1)

96A区SE01 出土陶器

肥前系磁器 染付碗 (1)

96A区SK02出土陶器（図版19）

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 桶（1）	連房式登窯第1小期 志野丸皿（2） 搦鉢（1）
大窯第2段階 搦鉢（1）	連房式登窯第3・4小期 美濃・鉄釉丸椀（1） 鉄絵鉢（1）
大窯第4段階 搦鉢（1）	連房式登窯第4小期 美濃・鉄釉丸椀（1） 美濃・鉄絵鉢（1）
大窯期 搦鉢（2） 鉄釉甕（1） 桶（1）	連房式登窯第5小期 天目茶椀（1） 漫瓶（5）
徳利（2） 茶壺（1）	連房式登窯第5・6小期 美濃・香炉（1）
	時期を特定し得ないもの 徳利（1）

常滑窯産陶器 鉢H（風呂 1） 甕（5） 壺甕類（10）

肥前系陶器 陶器椀（1）

中国陶磁器 褐釉瓶類（5） 青花皿（1）

96A区SK06出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第5小期 灯明具（1）

96A区SK08出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第2段階 鉄釉平椀（1）

96A区SK13出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第3段階 天目茶椀（1）

96A区SX01出土陶器（図版19）

瀬戸・美濃窯産陶器

最下層	
大窯期 搦鉢（1）	
下層	
大窯第2段階 天目茶椀（1）	連房式登窯期 天目茶椀（1） 黄瀬戸鉢（1）
時期種類を特定し得ないもの（1）	
上層	
古瀬戸窯後期第4小期 天目茶椀（1）	連房式登窯第1・2小期 天目茶椀（1） 志野鉄絵皿（1）
	連房式登窯第3小期 天目茶椀（1）
	連房式登窯第3・4小期 天目茶椀（1） 美濃・香炉（1）
層位の記載なし	
大窯第1段階 鉄釉仏具（1）	連房式登窯第1・2小期 黄瀬戸鉢（1）
大窯第2段階 天目茶椀（1）	連房式登窯第2小期 天目茶椀（1）
大窯期 皿類（1） 搦鉢（2） 茶壺（5） 花瓶（1）	連房式登窯第3・4小期 片口（1）

96A区SD13との交点

大窯第3段階 天目茶椀（1）	
常滑窯産陶器 最下層 短頸壺（1）	
備前窯？産 徳利（1）	
肥前系磁器 小椀（1）	
中国陶磁器 褐釉瓶類（6）	

96A区SX02出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

下層	
古瀬戸窯期 茶壺（4）	連房式登窯第1小期 天目茶椀（灰流し 1）
大窯第1段階 灰釉端反皿（1）	連房式登窯第2小期 天目茶椀（灰流し 1） 搦鉢（1）
大窯第3段階 灰釉丸皿。（1）	
大窯期 天目茶椀（1） 搦鉢（1） 鉄釉甕（1）	
上層	
大窯第1・2段階 丸椀（1） 灰釉丸皿。（2）	連房式登窯第1小期 鉄絵椀（2） 黄瀬戸鉢（1） 搦鉢（1）
大窯第2段階 搦鉢（1）	織部小瓶（1）
大窯第3段階 天目茶椀（1） 搦鉢（1）	連房式登窯第1・2小期 灰釉丸椀（1） 茶入（1）
大窯期 搦鉢（1） 茶入（1）	連房式登窯第2小期 天目茶椀（1）
	連房式登窯第3・4小期 美濃・灰釉椀（1）
	連房式登窯第4小期 天目茶椀（1）
	連房式登窯第5・6小期 灰釉徳利（1）
	連房式登窯期 器種を特定し得ないもの（2）
	時期種類を特定し得ないもの（4）
常滑窯産陶器	
下層	壺甕類（2）
上層	鉢A（1） 短頸壺（1） 壺甕類（3）

96A区SX03出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 花瓶（1） 徳利（1）

96B区SD02出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸・大窯期 茶壺（1）
大窯期 徳利（1） 鉄釉甕（1）
常滑窯産陶器 壺甕類（2）

96B区SD03出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢（2）
大窯期 搦鉢（5） 茶壺（2）

96B区SD06出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 はさみ皿（1）
大窯第4段階 志野小杯（1）
大窯期 天目茶椀（1） 搦鉢（2）

連房式登窯第1小期 椀（1） 志野丸皿（1） 反皿（2） 搦鉢（1）
連房式登窯第1・2小期 志野鉄絵皿（1）
連房式登窯第2小期 志野丸皿（1）
連房式登窯第3・4小期 天目茶椀（1） 志野丸皿（1）
連房式登窯期 天目茶椀（1） 搦鉢（1）
時期種類を特定し得ないもの（3）

常滑窯産陶器 壺甕類（1）

96B区SD07出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 徳利（1 96B区SD01下層出土品と接合）

96C区SD03出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯期 搦鉢（1） 鉄釉甕（2）

連房式登窯第1小期 志野鉄絵皿（1）
連房式登窯第2小期 搦鉢（1）
連房式登窯第3小期 天目茶椀（1）
時期種類を特定し得ないもの（2）

常滑窯産陶器 壺甕類（2）

96C区SD04出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 天目茶椀（1）

96C区SD07出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第3小期 天目茶椀（1）

96C区SD08出土陶器

常滑窯産陶器 鉢B?（1） 壺甕類（1）

96C区SD14出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期搦鉢（1）
大窯第3段階 天目茶椀（1）
大窯第4段階 搦鉢（1）

時期種類を特定し得ないもの（1）

土師器

内耳鍋（4）
羽釜Ⅰ（1）
羽釜Ⅱ（1）
胴部片（6）

土師皿 a（1）

※96C区SD14は、96A-BC区SD01の96C区SD01の第1層に相当する。したがって遺構の形成年代は、連房式登窯期に下るものと考えられる。

96C区SE03出土陶器

常滑窯産陶器 壺甕類（1）

96C区SE04出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

連房式登窯第8小期～ 腰錆 (1) 連房式登窯第11小期 瀬戸・梅文皿 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)

96C区SE05出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

連房式登窯第8・9小期 陶器染付椀 (1) 連房式登窯第11小期以降 行平 (1) 連房式登窯期 搦鉢 (1) 時期種類を特定し得ないもの (5) 磁器 (1 小片)

96C区SK21出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期を特定し得ないもの 搦鉢 (2)

96C区SK22出土陶器

常滑窯産陶器 甕 (1)

96C区SK23出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層

大窯第2段階 重圈皿 (1)
大窯期 搦鉢 (4)

連房式登窯第1小期 灰釉丸皿 (1) 搦鉢 (1) 連房式登窯第2小期 天目茶椀 (3) 連房式登窯第3小期 搦鉢 (1) 連房式登窯期 天目茶椀 (1) 搦鉢 (2) 時期を特定し得ないもの 徳利 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
--

第1層

大窯第3段階 搦鉢 (1)
大窯期 灰釉椀 (1) 有耳壺 (1) 茶壺 (1)

連房式登窯第1小期 志野鉄絵皿 (1) 連房式登窯第1・2小期 灰釉皿 (1) 連房式登窯第2小期 搦鉢 (1) 連房式登窯期 天目茶椀 (1) 志野皿 (1) 搦鉢 (5)
--

常滑窯産陶器 第1層 壺甕類 (1)

96C区SK25出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)

96D区SD04出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 天目茶椀 (1) 大窯第2段階 灰釉丸皿。(1) 搦鉢 (1) 大窯第3段階 丸皿 (1)
--

2 南調査区

城館跡が位置するためか、北調査区に比べ、遺物の出土量は圧倒的に多い。とくに城館を囲む濠(97B区SD01)からは多種・多量の遺物の出土をみた。ただ18世紀後半以降の遺物については、北調査区にくらべ少ない。

97B区SD01出土品(図版20～27 写真図版21・22)

大脇城(梶川五左衛門屋敷跡)の周囲をめぐる濠ということもあってか、遺物は種類・量とも充実している。とくに土師器の煮沸具類の出土量は際立って多いのに対して、土師皿の出土量は非常に少ない、という状況にある。しばしば、城館の中央部では、土師皿の多量の出土が

報じられているが、本遺跡では、他の遺構をみてもそうした傾向は看取されない。また煮沸具の内耳鍋について層位的にみていくと、おおむね内耳鍋 a・b 類が第 4 層・第 3 層に多く、内耳鍋 d・e 類が第 3 層・第 2 層から多く出土しているという傾向が認められる。このことについては、第 7 章の考察でふれることとする。遺物から推定される遺構の年代については、この 97B 区 SD01 の第 4 層からは概ね大窯第 3 段階までのものが多く出土していることから、遅くとも大窯第 3 段階には城館の濠として機能していたことは確実に、遺構の切り合い関係から大窯第 1 段階には開削されていたものと推定される。そして遺物の出土状況からみて連房式登窯第 5 小期には廃絶したものと見られる。つまり 16～17 世紀代という長期間にわたって濠として機能していたものと推定される。このように長期間にわたる本遺構からでも、ホウロクの出土が僅少であるという点は、ホウロクの当地方における普及を考える場合、注目に値するものと考える。このことについても第 7 章でふれることとする。なお、ここでは、土器・陶磁器の品目・数量を以下に記すが、本遺構からは土器・陶磁器以外にも数多くの遺物が出土している点にも留意する必要がある。例えば、陶磁器の椀類と補完関係にあったとされる漆椀は、本遺構からは 150 点を越える量の出土をみている。

瀬戸・美濃窯産陶器

第 5 層	
古瀬戸窯後期第 4 小期 摺鉢 (1)	
第 4 層	
北部系山茶椀 生田期 (1)	連房式登窯第 1・2 小期 天目茶椀 (1)
古瀬戸窯後期第 3 小期 天目茶椀 (1)	連房式登窯第 3・4 小期 天目茶椀 (1) 鉄釉丸椀 (2)
古瀬戸窯後期第 3・4 小期 鉄釉花瓶 (1)	志野丸皿 (2)
古瀬戸窯後期第 4 小期 天目茶椀 (1)	連房式登窯期 摺鉢 (1)
鉄釉腰折皿 (1) 鉄釉緑釉小皿 (1) 摺鉢 (3)	時期を特定し得ないもの 鉄釉椀類 (4) 天目茶椀 (2)
古瀬戸窯後期第 4 小期・大窯第 1 段階 天目茶椀 (1)	時期種類を特定し得ないもの (4)
古瀬戸窯後期 摺鉢 (1)	
大窯第 1 段階 天目茶椀 (7) 鉄釉皿 (1) 摺鉢 (3)	
鉄釉有耳壺 (1)	
大窯第 1・2 段階 灰釉端反・丸皿 (4) 鉄釉甕 (2)	
大窯第 2 段階 鉄釉稜皿 (1) 摺鉢 (1)	
大窯第 2・3 段階 鉄釉德利 (4)	
大窯第 3 段階 天目茶椀 (1) 灰釉丸皿 I (1)	
鉄釉丸皿 (1) 鉄釉稜皿 (1) 鉄釉丸皿 II (1)	
摺鉢 (3) 鉄釉甕 (1) 茶入 (1)	
大窯第 3・4 段階 灰釉折縁皿 (1)	
大窯第 4 段階 摺鉢 (1)	
大窯期 摺鉢 (11) 鉄釉甕 (2)	
第 3 層	
北部系山茶椀 生田期 (1)	連房式登窯第 1 小期 天目茶椀 (2) 志野丸椀 (1) 志野小椀 (1)
12 型式山茶椀 (1)	志野小杯 (1) 志野丸皿 (3) 志野反皿 (1) 摺鉢 (5)
古瀬戸窯後期第 3 小期 天目茶椀 (1)	連房式登窯第 1・2 小期 天目茶椀 (8) 志野丸皿 (18) 摺鉢 (1)
古瀬戸窯後期第 3・4 小期 燭台? (2) 鉄釉水滴 (1) 鉄釉梅瓶 (1)	連房式登窯第 2 小期 美濃・段付天目茶椀 (1) 摺鉢 (2)
古瀬戸窯後期第 4 小期 灰釉腰折皿 (1) 灰釉緑釉小皿 (2) 灰釉皿 (1) 摺鉢 (5) 桶 (1)	連房式登窯第 3 小期 天目茶椀 (6) 志野丸皿 (1) 美濃・反皿 (1) 美濃・鉄絵鉢 (1) 摺鉢 (2)
古瀬戸窯後期 鉄釉甕 (1)	連房式登窯第 3・4 小期 天目茶椀 (1) 鉄釉丸椀類 (2)
古瀬戸窯期 灰釉緑釉小皿 (2) 摺鉢 (2) 茶壺 (1)	志野丸皿 (3) 香炉 (1)
古瀬戸～大窯期 摺鉢 (2)	連房式登窯第 4 小期 天目茶椀 (3) 尾呂茶椀 (1)
大窯第 1 段階 天目茶椀 (9) 灰釉端反皿 (2)	連房式登窯第 4・5 小期 鉄釉端反椀 (1) 鉄釉丸椀 (7)
緑釉皿 (2) 摺鉢 (2) 皿 (1) 有耳壺 (2)	連房式登窯第 5 小期 鉄釉椀 (灰流し) (1) 美濃・丸皿 (1)
大窯第 1・2 段階 鉄釉丸椀 (1) 灰釉端反・丸皿 (1) 重圓皿 (1)	連房式登窯期 鉄釉椀類 (2) 志野皿類 (2) 摺鉢 (10)
大窯第 2 段階 天目茶椀 (8) 灰釉丸皿 I (5)	有耳壺蓋 (1) 壺・瓶類 (5)
灰釉端反・丸皿 (5) 鉄釉稜皿 (1) 摺鉢 (4)	時期を特定し得ないもの 鉄釉椀類 (7) 天目茶椀? (1)
大窯第 2・3 段階 鉄釉稜皿 (1) 鉄釉皿類 (1)	摺鉢 (1) 德利類 (2)
大窯第 3 段階 天目茶椀 (11) 灰釉丸椀 (1)	時期種類を特定し得ないもの (21)
灰釉丸皿 I (2) 灰釉内禿皿 (5) 鉄釉丸皿 II (3)	
鉄釉稜皿 (4) 鉄釉丸皿 (1) 丸皿 (2)	
鉄釉香炉 (1) 灰釉折縁皿 (1) 摺鉢 (11)	
大窯第 4 段階 天目茶椀 (1) 黄瀬戸小鉢 (1)	
志野丸皿 (3) 摺鉢 (1)	

大窯期 鉄釉椀類 (2) 灰釉端反・丸皿 (1) 皿類 (4) 摺鉢 (68) 壺・瓶類 (3) 茶壺 (1) 鉄釉甕 (2) 大窯期? 摺鉢 (2)	
第2層	
古瀬戸窯後期第1・2小期 灰釉片口 (1) 古瀬戸窯後期第3小期 灰釉香炉 (1) 古瀬戸窯後期第3・4小期 灰釉皿 (1) 鉄釉緑釉 小皿 (1) 有耳壺? (1) 古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗 (4) 灰釉皿 (3) 腰折皿 (1) 摺鉢 (9) 鉄釉香炉 (1) 鉄釉仏具 (1) 桶 (7) 古瀬戸窯後期 摺鉢 (1) 鉄釉甕 (2) 古瀬戸窯 器種不明 (1) 古瀬戸窯・大窯期 摺鉢 (1) 茶壺 (2) 大窯第1段階 天目茶碗 (1) 緑釉皿 (1) 灰釉端反皿 (4) 鉄釉端反皿 (1) 摺鉢 (11) 有耳壺 (1) 大窯第1・2段階 灰釉端反・丸皿 (10) 灰釉皿類 (3) 大窯第2段階 天目茶碗 (9) 灰釉丸皿Ⅰ (3) 灰釉端反・丸皿 (6) 鉄釉丸皿Ⅱ (2) 鉄釉丸皿類 (3) 鉄釉稜皿 (2) 摺鉢 (7) 大窯第2・3段階 灰釉端反・丸皿 (1) 德利 (1) 大窯第3段階 天目茶碗 (8) 灰釉内禿皿 (2) 灰釉丸皿Ⅰ (2) 丸皿Ⅰ (1) 丸皿 (2) 灰釉折縁皿 (1) 灰釉端反・丸皿 (1) 鉄釉稜皿 (2) 鉄釉皿 (1) 鉄釉丸皿Ⅱ (1) 鉄釉片口 (1) 摺鉢 (5) 焼締大皿 (1) 鉄釉甕 (1) 有耳壺 (1) 大窯第4段階 志野丸皿 (1) 大窯期 天目茶碗 (1) 鉄釉椀類 (8) 摺鉢 (78) 德利 (5) 皿類 (1) 甕類 (3) 壺・瓶類 (5) 片口? (2)	連房式登窯第1小期 天目茶碗 (3) 志野丸椀 (1) 志野鉄絵皿 (1) 志野丸皿 (1) 志野菊皿 (1) 摺鉢 (3) 連房式登窯第1・2小期 天目茶碗 (11) 灰釉丸椀 (1) 灰釉椀類 (3) 灰釉反皿 (2) 志野丸皿 (8) 志野鉄絵皿 (1) 鉄釉片口 (1) 摺鉢 (2) 連房式登窯第2小期 段付天目茶碗 (1) 天目茶碗 (2) 志野丸椀 (1) 鉄釉椀 (灰流し) (2) 志野丸皿 (2) 摺鉢 (3) 御深井? 瓶類 (1) 連房式登窯第3小期 天目茶碗 (10) 美濃・志野反皿 (3) 志野反皿 (1) 志野丸皿 (2) 連房式登窯第3・4小期 鉄釉端反椀 (3) 鉄釉丸椀類 (11) 美濃・鉄釉丸椀 (1) 志野丸皿 (5) 瀬戸・志野丸皿 (1) 美濃・反皿 (1) 美濃・御深井皿 (1) 美濃・皿類 (1) 鉄釉片口 (1) 鉄絵鉢 (1) 摺鉢 (2) 連房式登窯第4小期 天目茶碗 (1) 灰釉丸椀 (1) 鉄釉端反椀 (2) 瀬戸・鉄釉端反椀 (4) 鉄釉香炉類 (1) 志野丸皿 (1) 摺鉢 (8) 連房式登窯第4・5小期 美濃・皿 (1) 鉄釉片口 (1) 煙硝摺 (1) 小壺 (5 同一個体か) 連房式登窯第5小期 天目茶碗 (4) 灰釉丸椀 (1) 美濃・灰釉丸椀 (1) 尾呂茶碗 (2) 美濃・尾呂茶碗 (8) 鉄釉端反椀 (1) 灰釉菊皿 (2) 瀬戸・輪禿皿 (2) 美濃・丸皿 (1) 瀬戸・煙硝摺 (1) ピンダライ (1) 連房式登窯期 天目茶碗 (5) 皿類 (6) 志野皿類 (8) 摺鉢 (27) 壺・瓶類 (6) 時期を特定し得ないもの 鉄釉椀類 (40 小片多い) 德利類 (3) 加工円盤? (1) 皿類 (1) 時期種類を特定し得ないもの (40)
第1層	
古瀬戸窯後期第4小期 灰釉緑釉皿 (1) 摺鉢 (1) 鉄釉花瓶 (1) 古瀬戸窯 灰釉盤類 (1) 鉄釉甕 (1) 大窯第1・2段階 灰釉端反・丸皿 (1) 大窯第2段階 灰釉丸皿 (1) 鉄釉丸皿Ⅰ (1) 灰釉端反・丸皿 (1) 大窯第3段階 天目茶碗 (1) 鉄釉丸皿Ⅰ (1) 大窯第3・4段階 天目茶碗 (1) 大窯期 鉄釉椀類 (5) 茶入 (1) 壺・瓶類 (2) 鉄釉水注 (1) 摺鉢 (16)	連房式登窯第1小期 摺鉢 (2) 連房式登窯第1・2小期 天目茶碗 (1) 志野丸皿 (1) 連房式登窯第2小期 摺鉢 (2) 連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (1) 志野丸皿 (6) 連房式登窯第4・5小期 輪禿皿 (1) 連房式登窯第4小期 摺鉢 (1) 連房式登窯第5小期 鉄釉端反椀 (5) 瀬戸・輪禿皿 (2) 德利 (1) 連房式登窯期 鉄釉椀類 (3) 志野皿類 (3) 皿類 (1) 壺・瓶類 (1) 摺鉢 (9) 時期を特定し得ないもの 鉄釉椀類 (1) 時期種類を特定し得ないもの (6)
層位記載なし	
北部系山茶碗 生田期 (1) 古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗 (1) 摺鉢 (2) 大窯第1段階 天目茶碗 (1) 灰釉緑釉皿 (1) 摺鉢 (2) 大窯第2段階 灰釉端反・丸皿 (1) 摺鉢 (2) 大窯第3段階 灰釉折縁皿 (1) 大窯第4段階 天目茶碗 (1) 大窯期 摺鉢 (6)	連房式登窯第1小期 摺鉢 (1) 連房式登窯第1・2小期 天目茶碗 (1) 反皿 (1) 連房式登窯第3小期 天目茶碗 (1) 連房式登窯第3・4小期 椀類 (2) 反皿 (1) 連房式登窯第4小期 天目茶碗 (1) 連房式登窯期 鉄釉椀類 (2) 鉄釉水指 (1) 時期を特定し得ないもの 鉄釉椀類 (1) 摺鉢 (10 小片) 時期種類を特定し得ないもの (4)
常滑窯産陶器	
第5層	壺A (1) 壺甕類 (2)
第4層	甕 (1) 壺甕類 (9)
第3層	鉢A (9) 鉢B (3 1点は第2層出土品と接合) 鉢D (2) 壺A (1) 壺 (1) 甕 (10) 壺甕類 (66)
第2層	鉢A (9) 鉢B (3 内1点97A区SD02第3層出土品と接合) 鉢D (1) 壺A (1) 壺B (1) 壺D (1) 壺 (4) 甕 (16) 壺甕類 (153)
第1層	鉢A (2) 鉢B (3) 壺 (1) 甕 (4) 壺甕類 (40)
層位の記載なし	甕 (1) 壺甕類 (4)
肥前系磁器	
第3層	染付椀 (4 内3点は草花文)
第2層	染付椀 (2 内1点は一重網目文) 小杯 (1 薄手) 白磁小杯 (1 型押?) 白磁杯 (1 高台無袖)
第1層	染付椀類 (1)
中国磁器	
第3層	青花ゴケ底皿 (1) 第2層 青花椀 (1) 青磁皿類 (1)

土師器

	第4層	第3層	第2層	第1層	層位の記載
内耳鍋	420	712	491	80	なし
羽釜 I		123	63	9	6
羽釜 II	96 (*第5層(1))	9	8	3	
羽釜 I II		22	49	12	3
茶釜 A	19	38	30	4	3
茶釜 B		4	6		1
茶釜 A B	7	38	27	3	2
ホウロク		3			
三足鉢		3	8	2	
胴部片	1950	4363	2567	469	187
その他		2	2		
土師皿 A		4			
土師皿 B a		2	8		
土師皿 B b		1			
土師皿 B		3	3		2
土師皿 a		2	6		
土師皿 b			1		
土師皿?		6	17		1

その他 第3層(器種不明2) 第2層(碗?1 器種不明1)

97B区SD07出土品(図版28)

本遺構は、天正4年銘の護摩札が出土した溝である。護摩札は、最下層(便宜的に第4層)で、溝底にほとんど接する状況で出土したもので、遺物としては最も下位からの出土である。このため紀年銘資料の出土であるが、護摩札が廃棄・埋没する過程について様々な解釈の余地があるため、残念ながら遺物の実年代を推定する手掛かりにはなりにくいものであった。古瀬戸窯後期から連房式登窯第5小期にいたる瀬戸・美濃窯産陶器が出土している。

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

大窯期(第2・3段階?) 搦鉢(1)

第2層

大窯第1段階 天目茶碗(1)	連房式登窯第1・2小期 志野皿(1) 黄瀬戸鉢(1) 搦鉢(1)
大窯第2段階 天目茶碗(1) 灰釉丸皿(1)	連房式登窯第2小期 天目茶碗(灰流し 1) 鉄釉端反碗(1)
灰釉(丸)皿(1)	連房式登窯第3小期 天目茶碗(1)
大窯期 天目茶碗(1) 搦鉢(1)	連房式登窯第3・4小期 天目茶碗(1)
	連房式登窯第5小期 片口(1)
	連房式登窯期 天目茶碗(1) 搦鉢(1)
	時期種類を特定し得ないもの(1)

第1層

古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢(1)	連房式登窯第1小期 瀬戸・袴腰香炉(1)
古瀬戸窯後期 灰釉盤(1) 壺・瓶類(2)	連房式登窯第1・2小期 天目茶碗(1) 志野丸皿(1)
古瀬戸・大窯期 搦鉢(1)	連房式登窯第3・4小期 天目茶碗(2)
大窯第2段階 天目茶碗(2)	連房式登窯第4小期 天目茶碗(1) 搦鉢(1)
大窯第3段階 搦鉢(1)	時期を特定し得ないもの 瓶類(1)
大窯第4段階 志野丸皿(1)	時期種類を特定し得ないもの(4)
大窯期 搦鉢(1)	
層位記載なし	
古瀬戸窯後期第4小期 灰釉腰折皿(1)	連房式登窯第1・2小期 天目茶碗(1) 志野丸皿(1)
古瀬戸窯後期 茶壺(1)	連房式登窯第2小期 搦鉢(1)
大窯第3段階 灰釉小杯(1)	連房式登窯第3小期 鉄釉丸碗(1 97B S K 106出土品と接合)
	時期種類を特定し得ないもの(3)

土師器

	第3層	第2層	第1層	層位の記載なし
内耳鍋	2	15	7	
羽釜 I		3		
羽釜 I II		2		
茶釜 A B		4 同一個体?		
胴部片	3	47	35	12
土師皿 A b		1		
土師皿 A c		1		
土師皿 A		1		1
土師皿 B a	1	2	1	
土師皿 b				1

常滑窯産陶器

第2層	壺甕類 (2)
第1層	壺甕類 (4)

97A区 SE01 出土品 (図版 29 写真図版 19)

本遺構からは、土師器の煮沸具類が多量に出土した。これらは廃絶後に井戸側等が抜き取られたのち多量の土器と少量の陶磁器類が炭化物とともに一括投棄されたものと推定されるもので、共伴の瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第1・2・3段階の各時期のものがみられ大窯第3段階の遺構として捉えられるものである。土師器の煮沸具としては、「炭化物・土器層」に限って見た場合、内耳鍋 (205片)、羽釜 I (49片)、羽釜 II (2片)、羽釜 I II (26片)、茶釜 A (6片)がある。ただ羽釜の I、II、I II の区別は、羽の接合手法の相違に基づくものであり、したがって器種としては内耳鍋、羽釜、茶釜 A の3種ということになる。これに対して土師器皿は、土師皿 A (4片)、同 B (7片)と僅少である。こうした在り方が、この時期の器種組成の一つの在り方か否かについては、調査例の蓄積をまつ必要がある。ちなみに隣接する 97A区 SE02でも幾分土師器皿の比率が高いものの同様な在り方を示す。内耳鍋の中型品については、本遺跡出土品について形態状の相違から大きく内耳鍋 a 類～内耳鍋 e 類の5種の細分したが、本遺構からの出土品で形態が判別できるものについていえば、ほとんどが平丸底の底部外面のヘラ削り調整部と体部のナデ調整部との境が稜をもち、体部が緩く内弯気味にのびたのち、口縁部近くで垂直気味に立ち上がるという特徴をもつ、この分類案の内耳鍋 b 類が大半で、一部内耳鍋 a 類も含まれる。羽釜は、全形を復元し得るものが僅少であり、十分に型式上の特徴をつかみきれないが、羽の接合位置周辺が垂直気味に立ち上がっており、羽の接合部を境に口縁部が緩く内傾する形状のもの (最大径の部位に羽が接合される) が殆どであるという特徴が認められる。茶釜 A は、これまた全形をうかがい知ることができる資料が少ないが、体部における鏝 (羽) の位置は中央やや上にある。なお、瀬戸・美濃窯産陶器は、天目茶碗 (2片)、皿類 (7片)、播鉢 (1片) および茶入 (1片) が出土している。

瀬戸・美濃窯産陶器

炭化物・土器層

大窯第1段階	天目茶碗 (1)	はさみ皿 (1)	
大窯第2段階	灰釉丸皿 I (1)	鉄釉丸皿 II (1)	
大窯第3段階	灰釉内禿皿 (1)	鉄釉丸皿 II (2)	
大窯期	天目茶碗 (1)	播鉢 (1)	鉄釉皿 (1)
			時期を特定し得ないもの 茶入 (1)
炭化物・土器層より上の層			
大窯第2段階	播鉢 (1)		
層位記載なし			
古瀬戸窯後期第4小期	灰釉皿 (1)		
大窯第2段階	播鉢 (1)		時期を特定し得ないもの 天目茶碗 (1)

土師器

炭化物・土器層

内耳鍋	205	土師皿 A	4
羽釜 I	49	土師皿 B a	6
羽釜 II	2	土師皿 B	1
羽釜 I II	26	土師皿 ?	2
茶釜 A	6		
胴部片	1850		
その他※	1		

※ 口縁が水平方向にのびる浅鉢 (皿) (1)

97A区 SE02 出土品 (図版 30～32 写真図版 20)

本遺構からは、土師器の煮沸具類が多量に出土した。これらは廃絶後に井戸側等が抜き取られたのち多量の土器と少量の陶磁器類が炭化物とともに一括投棄されたものと推定されるもので、共伴の瀬戸・美濃窯産陶器には古瀬戸窯後期・大窯第1・2・3段階の各時期のものとみられ遺構の年代としては、大窯第3段階のものとして捉えられるものである。土師器の煮沸具としては、「炭化物・土器層」に限ってみた場合、内耳鍋(120片)、羽釜Ⅰ(16片)、羽釜ⅠⅡ(10片)、茶釜A(16片)、茶釜B(1片)、茶釜AB(5)、ホウロク(4)、三足鉢(1)がある。ただ羽釜のⅠ、Ⅱ、ⅠⅡの区別は、羽の接手法の相違に基づくものであり、茶釜ABは、茶釜A・茶釜Bのどちらに帰属するのか判然としないものの意である。また三足鉢は、火鉢(手あぶり)の可能性が指摘されるものである。したがって煮沸具の器種としては内耳鍋、羽釜、茶釜A、茶釜B、ホウロクの5種が、火鉢(手あぶり)として三足鉢がみられるということになる。これに対して土師器皿は、土師皿A(4片)、同B(13片)と僅少である。こうした在り方が、この時期の器種組成の一つの在り方か否かについては、既述のように調査例の蓄積をまつ必要がある。内耳鍋の中型品については、本遺跡出土品について形態状の相違から大きく内耳鍋a類～内耳鍋e類の5種の細分したが、本遺構からの出土品で形態が判別できるものについていえば、より丸みをもった底部外面のヘラ削り調整部と体部のナデ調整部との境に稜はなく、底部から口縁部に至るまで単一曲線をなすもので、口縁部近くが内弯(内傾)するという特徴をもつ、この分類案の内耳鍋c類である。羽釜は、全形を復元し得るものが僅少であり、十分に型式上の特徴をつかみきれないが、羽の接合位置より幾分下方から内傾し、羽の接合部を境に口縁部がより内傾する形状をなすもの(羽の接合部のやや下方に体部の最大径がくる)が多くみられる、という特徴が認められる。茶釜Aは、これまた全形をうかがい知ることができる資料が少ないが、体部における鏝(羽)の位置は中央やや上にある。ホウロクは、いずれも扁平な底部に浅く内弯して立ち上がる体部から口縁部が付く、浅い皿形のものである。口縁部内側に内耳鍋様の吊り手の装着のための「耳」がつく。「耳」の数は左右一箇所づつと考えるが確証はない。なお、瀬戸・美濃窯産陶器は、天目茶椀(3片)、椀類(1片)、皿類(22片)、搦鉢(3片)および壺・瓶類(2片)が出土している。

瀬戸・美濃窯産陶器

炭化物・土器層より下の層	
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ(1)	時期種類を特定し得ないもの(2)
炭化物・土器層	
古瀬戸窯後期第3・4小期 口広有耳壺(1)	時期種類を特定し得ないもの(1)
大窯第1段階 搦鉢(1)	
大窯第1・2段階 灰釉(丸)皿(1)	
大窯第2段階 天目茶椀(2) 緑釉丸皿(1)	
鉄釉稜皿(3) 鉄釉丸皿Ⅱ(1) 搦鉢(1)	
大窯第3段階 鉄釉丸皿Ⅱ(1) 鉄釉丸皿Ⅰ(2)	
灰釉丸皿Ⅰ(3) 鉄釉稜皿(2) 灰釉皿(1)	
灰釉(丸)皿(4) 搦鉢(1) 鉄釉内禿皿(1)	
鉄釉内禿ヒダ皿(1) 鉄釉折縁皿(1)	
大窯期 天目茶椀(1) 鉄釉椀類(1) 瓶類(1)	
中層	
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ(1)	
第1層	
大窯第3段階 皿(1)	
大窯期? 器種を特定し得ないもの(3)	
常滑窯産陶器	
炭化物・土器層	甕(Ⅱ型式)(1) 壺甕類(1)
第1層	壺甕類(2)

土師器

炭化物・土器層

内耳鍋	120	土師皿A c	2	羽釜 I	16
土師皿A	2	羽釜 I II	10	土師皿B a	10
茶釜A	16	土師皿B	3		
茶釜B	1	土師皿b	1		
茶釜AB	5				
土師皿?	1				
ホウロク	4				
三足鉢	1				
胴部片	829				
その他	6				

その他 (6 2個体?)

96E区 SE01 出土品 (図版32 写真図版19)

遺構の項で記したように山茶碗を除く、常滑窯産壺類などは井戸の底部近くで、あたかも並べ置かれたような状況で出土したものである。常滑窯産壺Dは、肩が幾分張った、太めな体部で、垂直に短くのびる頸部の上端を斜めに切り落とし撫でて口縁部としている。肩部に白濁釉がかかる。なお、内部には木製の柄杓の身が何故か入っていた。常滑窯産鉢Aは、扁平な底部から僅かに立ち上がったのち大きく外側に直線的に開く体部のつくもので、口縁端部は体部に対して垂直に面を取ったのち撫で調整が加えられ、両端が僅かに上下に突出している。上方の縁帯様の突出部には、重ね焼きの際に上のものと一部接着してしまった痕跡が認められる。片口は痕跡的につけられている。以下、品目・数量を記す。

瀬戸・美濃窯産陶器 山茶碗第11型式(1) 大窯期 鉄釉碗類(3)

常滑窯産陶器 鉢A(1) 壺D(1)

土師器 土師皿A b(1)

97A区 SK01 出土品 (図版33)

穴を掘り、底部を安定させて設置されていた所謂「埋甕」の一種である。内部には特に付着物は認められない。水甕として用いられていたものであろうか。常滑窯産の大甕で、焼成は甘い。口縁部の折返しは殆ど痕跡的で、口縁部上端の内側が僅かに水平方向に短く突出している。常滑窯産陶器 甕(1)

96E区 SD26・SD17 出土品

屋敷地の区画溝で、比較的まとまって土師器の煮沸具・皿が出土した。遺憾ながら諸般の事情で土師器の煮沸具類の実測図を掲載しえなかったが、編年の基準資料になり得るものと考えられる。以下、調査区毎に品目・数量を記す。

96E区 SD26 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗(1) 灰釉腰折皿(1)

大窯第2段階 播鉢(1)

大窯第3段階 鉄釉丸皿II(1)

大窯期 播鉢(4) 鉄釉甕(1)

常滑窯産陶器 壺甕類(1)

土師器

内耳鍋	59	土師皿A a	1	羽釜 I	34
土師皿A c	10	羽釜 I II	15	土師皿A	5
茶釜A	8	土師皿B a	5	茶釜AB	2
土師皿a	3	胴部片	563	土師皿b	1
その他	1	土師皿?	14		

その他 「く」字口縁鍋類(1)

96E区SD17出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 鉄釉丸皿(1)	時期を特定し得ないもの 搦鉢(1)
大窯期 搦鉢(3)	時期種類を特定し得ないもの(2)

土師器
(省略)

96E区SD27(SD16)出土品

屋敷地の区画溝で、比較的まとまって土師器の煮沸具が出土した。以下、調査区毎に品目・数量を記す。

96E区SD16出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第1層	
古瀬戸窯後期 灰釉盤(1)	大窯期 搦鉢(5)
大窯第1段階 天目茶椀(1)	連房式登窯第1小期 天目茶椀(1)
大窯第2段階 灰釉丸皿(1)	連房式登窯第3・4小期 黄瀬戸鉢(1)
大窯第3段階 天目茶椀(2) 茶入(1)	時期を特定し得ないもの 搦鉢(1)
常滑窯産陶器 第1層 壺甕類(1)	

土師器

	第2層	第1層
内耳鍋	10	11
羽釜Ⅰ	4	6
羽釜ⅠⅡ	3	4
胴部片	64	125
その他	1	1
土師皿 a	1	1
土師皿 c	3	

その他 第2層(1 器種を特定し得ないもの) 第1層(1 器種を特定し得ないもの)

96E区SD27出土品

瀬戸・美濃窯産陶器

第2・3層	
大窯期 天目茶椀(1) 皿類(1)	
第2層	
古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢(1)	連房式登窯第1小期 搦鉢(1)
大窯第1段階 搦鉢(1)	連房式登窯期 志野皿(1)
大窯第1・2段階 灰釉(丸)皿(1)	時期を特定し得ないもの 搦鉢(1)
大窯第4段階 志野皿(1)	時期種類を特定し得ないもの(2)
大窯期 搦鉢(1) 鉄釉甕(1)	
第1層	
大窯期 搦鉢(1) 鉄釉甕(1)	連房式登窯期 志野皿(1)
常滑窯産陶器	
第2層	壺甕類(2)
第1層	壺A(1) 甕(1) 壺甕類(4)
土師器(割愛)	

97B区NR01出土品

洪水性の堆積土で、遺物は殆ど出土しない。

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢(1)

以下の遺構出土品については、紙幅など諸般の都合で、遺構の年代推定の根拠となる瀬戸・美濃窯産陶器の品目・型式・数量を中心に常滑窯産陶器など出土陶器について報告・表示するにとどめ、土師器類・実測図の掲載および記述は一部を除き割愛する。

96E・97A・B区SD02出土陶器(図版33)

96E区SD02出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層	
大窯第1段階 天目茶椀(1)	連房式登窯第3小期 志野丸皿(1)
大窯第3・4段階 天目茶椀(1)	連房式登窯第3・4小期 鉄釉丸椀(1)
	連房式登窯期 灰釉丸椀(2) 鉄絵鉢(1) 壺・瓶類(1)

第2層	
古瀬戸窯後期第3・4小期 有耳壺 (1) 古瀬戸窯 壺・瓶類 (1) 大窯期 天目茶碗 (1) 摺鉢 (2) 鉄釉甕 (2)	連房式登窯第2小期 摺鉢 (1) 黄瀬戸鉢 (1)
第1層	
古瀬戸窯後期第4小期 摺鉢 (1) 大窯第1・2段階 天目茶碗 (1) 大窯第3段階 摺鉢 (2) 大窯第4段階 灰釉折縁皿 (1) 灰釉ソギ皿 (1) 大窯期 皿 (2) 灰釉皿 (1) 摺鉢 (1) 茶壺 (1) 徳利 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1) 連房式登窯第5小期 灰釉丸碗 (1) 連房式登窯期 灰釉丸碗 (2) 摺鉢 (1) 黄瀬戸鉢 (1) 志野皿 (1) 鉄釉碗類 (1) 時期を特定し得ないもの 摺鉢 (2) 時期種類を特定し得ないもの (3)
常滑窯産陶器	
第3層	短頸壺 (1)
第2層	壺甕類 (4)
第1層	鉢A (1) 甕 (1) 壺甕類 (4)
中国磁器 第2層 青磁稜碗 (1)	

97A区SD02出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層	
古瀬戸窯後期第4小期 緑釉小皿 (1) 摺鉢 (1) 花瓶 (1) 大窯第1段階 灰釉丸碗 (1) 摺鉢 (1) 大窯第2段階 天目茶碗 (1) 灰釉丸皿 I (1) 鉄釉丸皿 II (1) 鉄釉稜皿 (3) 緑釉瓶類 (徳利?) (1) 大窯第3段階 天目茶碗 (2) 黄天目茶碗 (1) 灰釉内禿皿 (3) 灰釉小杯 (1) 摺鉢 (1) 大窯第4段階 志野丸皿 (3) 志野皿 (1) 志野向付鉢 (1) 摺鉢 (1) 大窯期 天目茶碗 (2) 摺鉢 (24) 徳利 (1) 水滴 (1) 鉄釉甕 (1) 瓶類 (4)	連房式登窯第1小期 天目茶碗 (3) 鉄釉丸碗 (1) 灰釉反り皿 (1) 志野反り皿 (1) 志野丸皿 (1) 摺鉢 (1) 連房式登窯第1・2小期 志野丸皿 (5) 志野皿 (1) 反り皿 (1) 黄瀬戸鉢 (1) 連房式登窯第2小期 天目茶碗 (3) 白天目茶碗 (1) 鉄釉端反碗 (1) 黄瀬戸鉢 (2) 摺鉢 (1) 連房式登窯第3小期 天目茶碗 (2) 灰釉丸碗 (1) 鉄釉端反碗 (1) 志野丸皿 (1) 摺鉢 (2) 連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (1) 鉄釉碗類 (1) 志野皿 (2) 反り皿 (2) 美濃・反り皿 (1) 黄瀬戸鉢 (2) 片口 (2) 摺鉢 (1) 美濃・鉄釉小瓶 (1) 連房式登窯第4小期 天目茶碗 (6) 鉄釉碗 (尾呂茶碗?) (2) 美濃・反り皿 (1) 輪禿皿 (1) 美濃・黄瀬戸鉢 (1) 瀬戸・香炉 (1) 摺鉢 (3) 連房式登窯第5小期 鉛釉碗 (1) 灰釉丸皿 (1) 香炉 (1) 花瓶 (1) 連房式登窯第7小期 天目茶碗 (2) 連房式登窯期 灰釉碗類 (1) 鉄釉碗類 (12) 摺鉢 (19) 鉄釉小壺類 (1) 壺・瓶類 (8) 瓶類 (3) 時期を特定し得ないもの 摺鉢 (2) 瓶類 (2) 時期種類を特定し得ないもの (7)
第1層	
古瀬戸窯後期第3・4小期 茶壺 (3) 古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗 (3) 古瀬戸窯後期 瓶類 (1) 大窯第1段階 天目茶碗 (4) 灰釉端反り皿 (2) 摺鉢 (3) 大窯第1・2段階 天目茶碗 (2) 灰釉端反り・丸皿 (3) 黄瀬戸鉢 (1) 大窯第2段階 天目茶碗 (灰流し) (1) 灰釉丸皿 (2) 鉄釉稜皿 (1) 鉄釉丸皿 II (3) 黄瀬戸鉢 (1) 摺鉢 (2) 大窯第3段階 天目茶碗 (8) 鉄釉稜皿 (2) 摺鉢 (3) 大窯第4段階 天目茶碗 (1) 摺鉢 (3) 大窯期 天目茶碗 (1) 灰釉丸碗 (2) 鉄釉碗 (1) 鉄釉皿 (1) 茶壺 (2) 摺鉢 (18) 徳利 (1) 鉄釉甕 (5) 壺・瓶類 (2) 大窯第4段階～連房式登窯第1小期 志野丸皿 (1)	連房式登窯第1小期 志野皿 (2) 志野丸皿 (1) 連房式登窯第1・2小期 灰釉丸碗 (1) 鉄絵碗 (1) 鉄釉碗 (1) 反り皿 (3) 志野皿 (2) 志野丸皿 (4) 連房式登窯第2小期 白天目茶碗 (1) 志野丸皿 (2) 連房式登窯第3小期 天目茶碗 (4) 灰釉丸碗 (1) 灰釉碗 (1) 鉄釉丸碗 (1) 反り皿 (1) 連房式登窯第3・4小期 天目茶碗 (4) 碗類 (1) 鉄釉碗 (3) 志野丸皿 (1) 輪禿皿 (1) 反り皿 (4) 鉄絵鉢 (1) 黄瀬戸鉢 (1) 連房式登窯第4小期 天目茶碗 (1) 灰釉丸碗 (1) 鉄釉端反り碗 (1) 鉄釉丸碗 (1) 鉄絵鉢 (1) 摺鉢 (2) 連房式登窯第5小期 灰釉碗 (1) 反り皿 (1) 連房式登窯期 天目茶碗 (3) 灰釉碗類 (3) 鉄釉碗類 (8) 掛分碗 (1) 志野皿 (5) 美濃・反り皿 (1) 片口 (1) 摺鉢 (29) 徳利 (2) 有耳壺 (2) 茶壺 (1) 壺・瓶類 (4) 時期を特定し得ないもの 摺鉢 (2) 瓶類 (5) 時期種類を特定し得ないもの (27)
層位の記載なし	
古瀬戸窯後期第4小期 灰釉腰折皿 (2) 大窯第1段階 灰釉丸皿 I (2) 大窯第3段階 天目茶碗 (1) 大窯期 天目茶碗 (1) 摺鉢 (2)	連房式登窯第1小期 天目茶碗 (1) 志野丸皿 (1) 連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1) 連房式登窯第4小期 天目茶碗 (1) 鉄釉丸碗 (1) 摺鉢 (1) 連房式登窯第5小期 黄瀬戸鉢 (1) 連房式登窯期 摺鉢 (2) 片口 (3) 時期種類を特定し得ないもの (3)
常滑窯産陶器	
第2層	鉢A (4) 鉢B (2) 甕 (9) 壺甕類 (38)
第1層	鉢A (6) 鉢B (5) 鉢G (1) 壺A (2) 壺B (1) 壺 (2) 甕 (11) 壺甕類 (47)
層位の記載なし	壺 (1) 壺甕類 (5)
肥前系磁器 染付碗 (1) 染付鉢類? (1)	
中国磁器 青花皿 (1)	

97B区SD02出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

古瀬戸窯期 瓶類 (1) 器種を特定し得ないもの (2)	連房式登窯第1小期 志野椀 (1) 摺鉢 (1)
大窯第2段階 天目茶椀 (2) 摺鉢 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野丸皿 (2) 志野反り皿 (1)
大窯第3段階 天目茶椀 (3)	連房式登窯第2小期 天目茶椀 (1) 志野丸椀 (1)
大窯期 摺鉢 (3) 鉄釉甕 (1) 瓶類 (2)	連房式登窯第3小期 志野丸皿 (1) 美濃・反り皿 (1)
	連房式登窯第3・4小期 鉄釉椀 (1) 黄瀬戸鉢 (1)
	連房式登窯第4小期 天目茶椀 (1) 香炉 (1)
	連房式登窯期 天目茶椀 (2) 鉄釉丸椀 (1) 瓶類 (2)
	摺鉢 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (2)

第2層

古瀬戸窯後期第4小期 灰釉緑釉小皿 (1)	連房式登窯第1小期 摺鉢 (1)
摺鉢 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1)
大窯第3段階 摺鉢 (1)	連房式登窯第5小期 天目茶椀 (2)
大窯期 徳利 (2) 摺鉢 (2)	時期種類を特定し得ないもの (4)

第1層

古瀬戸窯後期第4小期 腰折皿 (1) 摺鉢 (1)	連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (1)
大窯期 摺鉢 (3) 瓶類 (1)	連房式登窯第3・4小期 鉄釉椀 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (3) 京焼? (1)

層位の記載なし

連房式登窯第2小期 鉄釉端反椀 (1)

常滑窯産陶器

第3層	鉢A (2) 甕 (2) 壺甕類 (3)
第2層	甕 (3)
第1層	鉢B (1) 甕 (1) 壺甕類 (1)

肥前系磁器 染付鉢類 (1) 染付小杯 (1) 染付皿 (1) ゴケ底)

96E・97A・B区SD03出土陶器

96E区SD03出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

大窯第2段階 灰釉丸皿 I (1)
大窯第4段階 志野鉄絵皿 (1)
連房式登窯期 灰釉丸椀 (1)

第2層

古瀬戸窯後期第4小期 摺鉢 (2)	連房式登窯第1・2小期 鉄釉椀類 (1) 黄瀬戸鉢 (2)
大窯第2段階 摺鉢 (1)	連房式登窯第5小期 灰釉丸皿 (1)
大窯第3段階 鉄釉丸椀 (1) 摺鉢 (1)	連房式登窯期 鉄釉椀類 (2) 摺鉢 (2) 片口 (1)
大窯期 摺鉢 (2)	壺・瓶類 (1)
	時期を特定し得ないもの 茶壺 (1) 摺鉢 (2)
	時期種類を特定し得ないもの (4)

第1層

古瀬戸窯後期 灰釉腰折皿 (1) 灰釉折縁小皿 (1)	連房式登窯第2小期 御深井皿 (1)
灰釉皿 (1) 摺鉢 (1) 口広有耳壺 (1)	連房式登窯第3小期 鉄絵鉢 (1)
大窯第1段階 灰釉丸皿 I (2) 仏飼具 (1)	連房式登窯第3・4小期 徳利 (1)
大窯第1・2段階 灰釉 (丸) 皿 (1)	連房式登窯第5小期 鉄釉丸椀 (1)
大窯第2段階 摺鉢 (1)	連房式登窯期 鉄釉椀類 (1) 灰釉椀類 (4) 徳利 (1)
大窯第4段階 天目茶椀 (1)	壺・瓶類 (2)
大窯期 摺鉢 (4) 片口 (1) 鉄釉甕 (3)	時期を特定し得ないもの 摺鉢 (3)
	時期種類を特定し得ないもの (6)

常滑窯産陶器

第3層	壺甕類 (1)
第2層	鉢B (2) 壺甕類 (5)
第1層	鉢B (2) 甕 (1) 壺甕類 (6)

97A区SD03出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層

古瀬戸窯後期第3小期 鉄釉緑釉小皿 (1)	連房式登窯第2小期 志野鉄絵皿 (1) 志野丸皿 (1)
大窯第1段階 天目茶椀 (1) 摺鉢 (1)	連房式登窯第3小期 天目茶椀 (1) 灰釉丸椀 (1)
大窯第2段階 天目茶椀 (1) 摺鉢 (1)	連房式登窯第3・4小期 志野丸皿 (6) 灰釉皿 (1) 志野皿 (2)
大窯第3段階 天目茶椀 (2) 摺鉢 (1)	連房式登窯期 鉄釉椀類 (3) 志野皿 (7) 摺鉢 (1)
大窯第4段階 天目茶椀 (1) 摺鉢 (1)	片口 (1) 壺・瓶類 (2)
大窯期 灰釉丸椀 (1) 鉄釉椀類 (2)	時期を特定し得ないもの 摺鉢 (3)
鉄釉皿類 (1) 摺鉢 (9)	時期種類を特定し得ないもの (9)

97B 区 SD03 出土陶器

第1層	
古瀬戸窯後期第3・4小期 花瓶(1) 有耳壺(1)	連房式登窯第1小期 志野丸皿(1) 連房式登窯第1・2小期 志野皿(1) 連房式登窯第2小期 摺鉢(1) 連房式登窯第3小期 志野折縁鉄絵皿(1) 志野丸皿(1) 連房式登窯第3・4小期 灰釉丸椀(1) 連房式登窯第4小期 鉄釉端反椀(1) 灰釉輪禿皿(1) 摺鉢(3) 連房式登窯第5小期 美濃・皿(1) 摺鉢(1) 連房式登窯期 鉄釉椀類(1) 鉄釉水注(1) 摺鉢(7) 時期種類を特定し得ないもの(7)
常滑窯産陶器	
第2層	鉢A(1) 鉢(1) 甕(3) 壺甕類(1)
第1層	鉢B(1) 壺(1) 甕(5) 内1点は97A区SD02第2層・同SK05・同SK28出土品と接合) 壺甕類(9)

96E・97A 区 SD01 出土陶器

96E区SD01出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
第2層	大窯期 鉄釉甕(1)
第1層	大窯第4段階 志野丸皿(1)
常滑窯産陶器 壺甕類(1)	

97A区SD01出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
第2層	大窯第2段階 灰釉(丸)皿(1) 連房式登窯第1小期 天目茶椀(1)
第1層	古瀬戸窯後期第4小期 腰折皿(1) 連房式登窯第1小期 天目茶椀(1) 大窯第2段階 灰釉丸皿I(1) 摺鉢(1) 連房式登窯期 瓶類(1) 大窯期 摺鉢(2)
常滑窯産陶器	
第2層	鉢A(1)
第1層	鉢D(1) 甕(1)

97B 区 SD05・SK70 出土陶器

97B区SD05出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第3小期 灰釉緑釉皿(1) 古瀬戸窯後期第4小期 灰釉(腰折)皿(1) 摺鉢(1) 古瀬戸窯後期 摺鉢(1) 器種を特定し得ないもの(1) 大窯第1段階 摺鉢(3) 大窯期 摺鉢(5) 常滑窯産陶器 壺A(1) 甕(1)	時期種類を特定し得ないもの(4)

97B区SK70出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 灰釉皿(1) 大窯第1段階 天目茶椀(1) 大窯第2段階 灰釉丸皿。(1) 大窯第3段階 片口(1) 大窯期 摺鉢(2) 瓶類(1) 常滑窯産陶器 壺甕類?(1)	連房式登窯第2小期 天目茶椀(1) 黄瀬戸鉢(2) 連房式登窯期 瓶類(1)

97B 区 SD06 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第3・4小期 天目茶椀(1)

97B区 SD08 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

	連房式登窯第3小期 鉄釉輪禿皿 (1) 連房式登窯期 鉄釉椀類 (2) 摺鉢 (2)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

97B区 SD09 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97B区 SD11 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第3段階 天目茶椀 (1)	
大窯第4段階 灰釉折縁皿 (1)	
常滑窯産陶器 壺甕類 (2)	

97B区 SD12 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層	
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1)	
大窯第3段階 灰釉内禿皿 (1)	
第2層	
古瀬戸窯期 茶壺 (1)	連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (1)
大窯第1・2段階 灰釉皿 (1)	連房式登窯期 摺鉢 (1)
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1) 摺鉢 (1)	
大窯第3段階 天目茶椀 (2) 灰釉皿 (1)	
大窯期 天目茶椀 (1) 鉄釉甕 (1) 壺類 (1)	
層位記載なし	
大窯第3段階 建水 (1)	
大窯期 天目茶椀 (1) 摺鉢 (1)	
常滑窯産陶器	
第4層	鉢A (1)
第2層	壺甕類 (3)
第1層	壺甕類 (1)
層位記載なし	短頸壺 (1)

97B区 SE01 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 仏銅具 (1)	連房式登窯第1小期 摺鉢 (1)
大窯第1段階 はさみ皿 (1)	連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (1) 志野丸椀 (2)
大窯第4段階 志野向付鉢 (1)	志野椀 (1) 志野皿 (1) 灰釉皿 (2) 反皿 (1)
大窯期 摺鉢 (6)	美濃・反皿 (1) 摺鉢 (2)
	連房式登窯第2小期 段付白天目茶椀 (1) 摺鉢 (2)
	連房式登窯第3小期 天目茶椀 (2) 鉄釉丸椀 (1)
	鉄釉輪禿皿 (2) 黄瀬戸鉢 (1)
	連房式登窯第3・4小期 天目茶椀 (1) 鉄釉端反椀 (1)
	鉄釉丸椀 (2) 鉄釉椀類 (1) 美濃・丸皿 (1) 德利 (1)
	連房式登窯第4小期 天目茶椀 (2) 美濃・宮形 (1)
	美濃・皿 (1)
	連房式登窯第5小期 美濃・丸皿 (1) 片口 (1) 摺鉢 (1)
	灯明具 (1)
	連房式登窯第5・6小期 鉛釉椀類 (1)
	連房式登窯期 天目茶椀 (2) 鉄釉椀類 (6) 摺鉢 (7)
	時期種類を特定し得ないもの (2)
常滑窯産陶器 壺A (1) 鉢B (1) 甕 (4)	壺甕類 (9)
肥前系磁器 染付椀 (1) 草花文?	

97B区 SE02 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第4段階 摺鉢 (2)

97B区 SE03 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1段階 山茶椀 (1)

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

97B区 SE04 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 腰折皿 (1)	
大窯第1段階 灰釉端反皿 (1)	
大窯第2段階 摺鉢 (1)	
大窯第3段階 鉄釉稜皿 (1)	
大窯期 摺鉢 (1) 徳利 (1) 茶壺 (1)	

97B区 SE05 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 灰釉腰折皿 (1)	連房式登窯第9小期 美濃・徳利 (1)
連房式登窯第9小期の美濃・徳利は、上を覆う97B区NR01にともなうもの推定する。	

97B区 SE06 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 摺鉢 (1)	連房式登窯期 志野皿 (1小片)
大窯期 徳利 (1)	

97B区 SE08 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸窯後期第4小期 摺鉢 (1)

97B区 SK49 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 器種を特定し得ないもの (2)
常滑窯産陶器 甕 (3)

97B区 SK13 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1～3段階 灰釉豆皿 (1)

97B区 SK54 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1段階 灰釉緑釉はさみ皿 (1)

97B区 SK26 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1段階 灰釉皿 (1)

97B区 SK61 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯第4段階 天目茶碗 (1)	連房式登窯第1小期 摺鉢 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (1)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

97B区 SK70 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯期 摺鉢 (2) 瓶類 (1)	連房式登窯第2小期 天目茶碗 (1) 黄瀬戸鉢 (2)
	連房式登窯期 灰釉皿 (1) 瓶類 (1)

97B区 SK81 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯第1段階 天目茶碗 (1)	
大窯期 摺鉢 (1) 鉄釉甕 (1)	時期種類を特定し得ないもの (1)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

97B区 SK82 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97B区 SK141 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97B区 SK90 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗 (1)

97B区 SK151 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第5小期 灯明具 (1)

97B区 SK107 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97B区 SD08 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯期 茶壺 (1) 徳利 (1)	連房式登窯第2小期 天目茶碗 (1)
	連房式登窯期 摺鉢 (1)

97A区SD09（97B区SD04）出土陶器

97A区SD09出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 壺・瓶類（1）
常滑窯産陶器 壺甕類（1）

97B区SD04出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第8・9小期 鉄釉（丸）椀（1）

97A区SE03出土陶器（図版33）

瀬戸・美濃窯産陶器

天窯第1段階 壺（1）	連房式登窯第1・2小期 片口（1）
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ（2）	連房式登窯第2小期 天目茶椀（2）
大窯第2・3段階 緑釉小壺（1）	連房式登窯第3・4小期 志野丸皿（2）
大窯第3段階 天目茶椀（1） 鉄釉丸皿。（1）	連房式登窯第5小期 灰釉丸椀（1）
大窯第4段階 搦鉢（1）	連房式登窯期 天目茶椀（1） 搦鉢（4） 徳利（1）
大窯期 搦鉢（4） 器種を特定し得ないもの（1）	鉄釉椀（1） 器種を特定し得ないもの（3）
常滑窯産陶器 鉢B（1） 鉢F（1） 甕（3）	壺甕類（2）

97A区SK02出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層	連房式登窯期 片口（1）
第1層	
大窯第2段階 天目茶椀（1）	
大窯第3段階 搦鉢（1）	
大窯期 搦鉢（1）	
常滑窯産陶器 壺甕類（2）	

97A区SK03出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層	連房式登窯第2小期 天目茶椀（1） 連房式登窯期 搦鉢（1） 鉄釉椀類（1） 江戸時代後期 徳利（1）
第1層	連房式登窯第1小期 志野丸皿（1） 時期種類を特定し得ないもの（1）

97A区SK04出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第3段階 小天目茶椀（1） 大窯期 天目茶椀（1） 茶壺（1）	連房式登窯第1・2小期 志野皿（1） 連房式登窯第3小期 天目茶椀（1） 志野丸皿（1） 連房式登窯第4小期 美濃・鉄釉丸椀（1） 連房式登窯第5小期 美濃反皿（1） 連房式登窯期 志野丸皿（1） 灰釉丸椀類（4） 鉄釉椀類（1） 片口（1） 瓶類（1）
常滑窯産陶器	
第2層	壺甕類（4）
第1層	壺甕類（1）
常滑窯産陶器 鉢A（1） 甕（1） 壺甕類（5）	

97A区SK05出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 灰釉端反皿（2）	連房式登窯第1小期 志野鉄絵椀（2）
大窯第1・2段階 鉄釉稜皿（1） 灰釉皿（1）	連房式登窯第1・2小期 天目茶椀（1） 志野皿（1） 黄瀬戸鉢（1）
大窯第2・3段階 天目茶椀（1） 鉄釉丸皿Ⅱ（1）	連房式登窯第3小期 天目茶椀（1）
大窯第3段階 灰釉椀（1）	連房式登窯第3・4小期 黄瀬戸鉢（1）
大窯第4段階 志野丸皿（1） 志野皿（1）	連房式登窯第4小期 美濃・鉄絵鉢（2） 美濃・反皿（1）
大窯期 鉄釉椀類（3） 搦鉢（2）	連房式登窯第5小期 天目茶椀（2） 美濃・（丸）皿（1） 連房式登窯期 鉢類（1） 片口（1） 壺類（1） 徳利（1） 鉄釉椀類（1） 時期種類を特定し得ないもの（1）
常滑窯産陶器 鉢A（1） 甕（1） 壺甕類（8）	

97A区SK06出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢(1)

97A区SK07出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1段階 天目茶碗(1)

97A区SK08出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸～大窯期 茶壺(1)
大窯第2・3段階 稜皿(1)
大窯第3段階 天目茶碗(1)
常滑窯産陶器 壺甕類(2)

時期種類を特定し得ないもの(3)

97A区SK09出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 搦鉢(1)
大窯第2段階 灰釉(丸)皿(1)
大窯第3段階 内壳皿(1) 搦鉢(1)
鉄釉花瓶(1)
大窯期 鉄釉皿類(3) 鉄釉碗類(1)
搦鉢(9)連房式登窯第1小期 志野鉄絵皿(1) 志野丸皿(1)
連房式登窯第1・2小期 志野丸皿(3) 黄瀬戸鉢(1)
連房式登窯第2小期 天目茶碗(1) 志野丸皿(3)
連房式登窯第3・4小期 鉄釉丸碗(2) 美濃・灰釉杯(1)
志野丸皿(1) 美濃・反皿(1)
連房式登窯第3～5小期 美濃・鉄絵鉢(1)
連房式登窯第5小期 天目茶碗(1) 飴釉碗類(1)
美濃・(丸)皿(1)
連房式登窯期 鉄釉碗類(1) 皿類(4) 搦鉢(3)
德利(1) 瓶類(1)
時期種類を特定し得ないもの(11)

常滑窯産陶器 壺(1) 甕(9) 壺甕類(4)

97A区SK10出土陶器(図版33)

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

大窯第3段階 灰釉内壳皿(1)

連房式登窯期 搦鉢(1)

第2層

古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗(1)

連房式登窯第1小期 志野鉄絵皿(1) 志野丸皿(3)

鉄釉花瓶(1)

黄瀬戸鉢(1)

古瀬戸窯後期 茶壺(1)

連房式登窯第1・2小期 志野反皿(1) 志野丸皿(1)

古瀬戸～大窯期 壺類(1)

連房式登窯第2小期 美濃・灰釉丸碗(1) 志野丸皿(3)

大窯第2段階 搦鉢(1)

連房式登窯第3小期 志野丸皿(1)

大窯第2・3段階 稜皿(1)

連房式登窯第3・4小期 天目茶碗(2) 皿(2)

大窯第3段階 天目茶碗(2)

連房式登窯第4小期 鉄釉丸碗(1)

大窯第3・4段階 片口(1)

連房式登窯期 天目茶碗(2) 志野丸碗(1) 志野皿(4)

大窯第4段階 志野丸皿(1)

鉄釉碗(3) 搦鉢(2) 壺・瓶類(3)

大窯期 天目茶碗(1) 搦鉢(2) 甕類(1)

時期種類を特定し得ないもの(5)

第1層

大窯期 搦鉢(1) 德利(1)

連房式登窯第1小期 反皿(1)

連房式登窯期 鉄釉碗(1) 志野皿(1)

常滑窯産陶器

第3層

壺C(1 第2・1層出土品と接合) 甕(1)

第2層

鉢A(1) 鉢B(1) 壺(1) 壺A(1) 壺甕類(4)

第1層

壺甕類(3)

97A区SK11出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第4段階 天目茶碗(1)

連房式登窯第3小期 搦鉢(1)

大窯期 搦鉢(1)

連房式登窯期 鉄釉碗(1) 搦鉢(1)

常滑窯産陶器 壺甕類(1)

97A区SK12出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第4段階 灰釉折縁皿(1)

連房式登窯第1小期 志野丸皿(4)

時期種類を特定し得ないもの(1)

97A区SK13出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯期 天目茶碗 (1)	連房式登窯第1・2小期 徳利 (1) 連房式登窯第3小期 折縁鉄絵皿 (1) 連房式登窯第4小期 美濃・反皿 (1) 連房式登窯第5小期 美濃・汁次 (1) 連房式登窯期 鉄釉蓋 (1)
常滑窯産陶器 甕 (1)	

97A区SK14出土品

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯第4段階 灰釉中皿 (1) 大窯期 搦鉢 (2)	連房式登窯第1小期 灰釉皿 (1) 連房式登窯第3・4小期 志野丸皿 (1) 連房式登窯第5小期 天目茶碗 (1) 連房式登窯期 搦鉢 (1)
常滑窯産陶器 鉢A (1)	

97A区SK15出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第3段階 天目茶碗 (1)
常滑窯産陶器 壺 (1)

97A区SK16出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯第3段階 天目茶碗 (2) 大窯第4段階 黄瀬戸鉢 (1)	
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

97A区SK18出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 腰折皿 (1) 大窯第1段階 端反皿 (1) 大窯第1・2段階 灰釉(丸)皿 (2)	
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

97A区SK19出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97A区SK20出土陶器

常滑窯産陶器 甕 (1) 壺甕類 (2)

97A区SK21 (97B区SK117) 出土陶器

97A区SK21出土陶器	
瀬戸・美濃窯産陶器	
第3層	
大窯第2段階 灰釉丸皿。(1) 鉄釉稜皿 (1) 大窯期 搦鉢 (4)	時期を特定し得ないもの 瓶類 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
第2層	
古瀬戸窯後期第4小期 腰折皿 (1) 大窯第1段階 搦鉢 (1) 大窯第1・2段階 灰釉(丸)皿 (1) 大窯第3段階 天目茶碗 (1) 鉄釉稜皿 (1) 大窯期 搦鉢 (2)	連房式登窯第5小期 鉛釉徳利 (1)
第1層	
大窯期 壺・瓶類 (1)	時期種類を特定し得ないもの (4)
層位の記載なし	
大窯期 搦鉢 (1)	
常滑窯産陶器	
第3層	甕 (2) 壺甕類 (2)
第2層	壺甕類 (2)

97B区SK117出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層		
大窯第1段階 灰釉端反皿 (1)		連房式登窯第5小期 徳利 (1)
大窯期 皿 (1) 摺鉢 (1)		時期種類を特定し得ないもの (1)
第2層		
古瀬戸窯後期第4小期 緑釉小皿 (1)		連房式登窯期 徳利 (1)
大窯第1段階 山茶椀 (1) 摺鉢 (1)		
大窯第2段階 天目茶椀 (1)		
大窯期 天目茶椀 (1) 摺鉢 (1) 鉄釉甕 (1)		
第1層		
古瀬戸窯後期第4小期 天目茶椀 (1)		
鉄釉緑釉皿 (1) 摺鉢 (1)		
古瀬戸窯後期		
大窯第1段階 灰釉端反皿 (1) 摺鉢 (1)		
大窯第1・2段階 灰釉皿 (2)		
大窯期 天目茶椀 (2) 灰釉皿 (1) 摺鉢 (2)		
器種を特定し得ないもの (4)		
常滑窯産陶器		
第3層	鉢? (1) 甕 (1)	
第2層	壺甕類 (1)	
第1層	壺甕類 (1)	

97A区SK23出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期を特定し得ないもの 甕 (1)

97A区SK24出土品 (図版33)

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 天目茶椀 (1)	
大窯期 搦鉢 (1)	
常滑窯産陶器 鉢A (1) 鉢G (1) 甕 (1)	

97A区SE25 (97B区SK132) 出土陶器

97A区SK25出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層		
大窯第1段階 灰釉端反皿 (2)		連房式登窯第1小期 志野小椀 (1)
大窯第2段階 天目茶椀 (1) 鉄釉稜皿 (1)		連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (2)
大窯第2・3段階 鉄釉稜皿 (1)		連房式登窯第3小期 志野丸皿 (1)
大窯第3段階 鉄釉小杯 (2)		連房式登窯第3・4小期 美濃・反皿 (1)
大窯期 搦鉢 (3) 徳利 (1)		連房式登窯期 天目茶椀 (1) 搦鉢 (1)
第1層		
大窯第2段階 搦鉢 (1)		連房式登窯第2小期 搦鉢 (1)
大窯第2・3段階 灰釉皿 (1)		連房式登窯第3・4小期 天目茶椀 (1) 美濃・反皿 (1)
大窯第3段階 天目茶椀 (1) 灰釉皿 (1)		連房式登窯第4小期 鉄釉丸椀 (1)
大窯期 鉄釉椀類 (1) 搦鉢 (3) 瓶類 (3)		連房式登窯期 徳利 (1) 壺・瓶類 (2)
		時期種類を特定し得ないもの (1)
常滑窯産陶器		
第2層	鉢A (1) 壺 (1) 壺甕類 (9)	
第1層	壺甕類 (4)	

97B区SK132出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1・2段階 灰釉 (丸) 皿 (1)	
大窯第3段階 摺鉢 (1)	時期種類を特定し得ないもの (1)

97A区SK27出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 天目茶椀 (1)

97A 区 SK28 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第4段階 搦鉢 (1) 大窯期 茶壺 (1)	
常滑窯産陶器	壺甕類 (2)

97A 区 SK31 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第3小期 鉄釉端反椀 (1)

97A 区 SK33 出土陶器

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

97A 区 SK96 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器
大窯第3段階 灰釉皿 (1)
大窯期 天目茶椀? (1) 搦鉢 (1)

7A 区 SK34 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第3小期 天目茶椀 (1)

97A 区 SK109 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器
大窯期 搦鉢 (1)
連房式登窯第2小期 志野皿 (1)

97A 区 SK36 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 鉄釉皿 (1)

97A 区 SK116 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第3段階 灰釉丸皿Ⅱ (1)

97A 区 SK39 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 鉄釉椀類 (1)

97A 区 SK68 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 搦鉢 (1)

97A 区 SK1127 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器
大窯期 搦鉢 (1)
連房式登窯期 志野皿 (1)

97A 区 SK72 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97A 区 SK130 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 搦鉢 (1)

97A 区 SK76 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第3・4小期 志野丸皿 (1)

97A 区 SK135 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸~大窯期 搦鉢 (1)	連房式登窯第1小期 織部鉢 (1)
-----------------------------	-------------------

97A 区 SK139 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第2段階 天目茶椀 (1) 灰釉皿 (1) 大窯第3段階 天目茶椀 (1) 大窯期 搦鉢 (2)	連房式登窯期 鉄釉椀 (1) 徳利 (1) 時期種類を特定し得ないもの (2)
常滑窯産陶器	壺甕類 (1)

97A 区 SK153 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第5小期 搦鉢 (1)

97A 区 SK168 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢 (1)

97A 区 SK173 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 鉄釉椀 (1) 播鉢 (1)

97A 区 SK174 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 徳利 (1)

97A 区 SK185 出土陶器

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

97A 区 SK187 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 磁器椀 (現代?) (1)

97A 区 SK189 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 播鉢 (1)

連房式登窯期 天目茶椀 (1)

97A 区 SK199 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯期 天目茶椀 (1)

時期種類を特定し得ないもの (1)

97A 区 SK202 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 瓶類 (1)

97A 区 SK235 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (2)

97A 区 SK247 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

97A 区 SK322 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 徳利 (1)

97A 区 SK324 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

連房式登窯第3・4小期 鉄釉丸椀 (1)

連房式登窯第5小期 天目茶椀 (2)

97A 区 SK344 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 鉄釉椀類 (1) 播鉢 (2)

97A 区 SK345 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第3段階 灰釉丸皿 (1)

大窯第3・4段階 天目茶椀 (1)

連房式登窯第3・4小期 志野皿 (1)

連房式登窯期 播鉢 (1)

97A 区 SK376 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 壺・瓶類 (1)

96E 区 SD04 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯中期第3・4小期 丸皿 (1)	連房式登窯第1小期 志野反皿 (1)
古瀬戸窯期 灰釉緑釉皿 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野丸椀 (1)
大窯第1段階 皿 (1)	連房式登窯第2小期 段付白天目茶椀 (1) 搦鉢 (1)
大窯第2段階 天目茶椀 (2)	連房式登窯第3小期 搦鉢 (1)
大窯第4段階 天目茶椀 (1) 灰釉折縁皿 (1)	連房式登窯第3・4小期 志野皿 (1)
鉄釉折縁皿 (ソギ 1)	連房式登窯第4小期 鉄釉丸椀 (1)
大窯期 搦鉢 (2) 徳利 (1)	連房式登窯第8小期～ 椀類 (1)
	連房式登窯期 天目茶椀 (1) 志野皿 (1) 搦鉢 (1) 瓶類 (2)
	時期を特定し得ないもの 天目茶椀 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (3)

常滑窯産陶器 壺甕類 (4)

96E 区 SD05 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 はさみ皿? (1) 花瓶 (1)	
大窯期 搦鉢 (1)	

常滑窯産陶器 甕 (1)

96E 区 SD06 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層	
大窯第2段階 天目茶椀 (1)	
第1層	
古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢 (1)	連房式登窯期 鉄釉椀類 (1)
古瀬戸窯後期 盤 (1)	
大窯期 搦鉢 (1)	
層位の記載なし	
大窯第2段階 灰釉 (丸) 皿 (1)	連房式登窯第3・4小期 天目茶椀 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (2)
常滑窯産陶器	
第2層	壺 (1) 壺甕類 (1)
第1層	鉢A (1) 壺甕類 (2)

96E 区 SD07 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢 (1)	連房式登窯第1小期
大窯第1段階 皿 (1) はさみ皿 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第1・2小期 鉄釉丸椀 (2)
大窯第3段階 天目茶椀 (1) 鉄釉丸皿 (1)	連房式登窯第2小期 搦鉢 (1)
鉄釉稜皿 (1)	連房式登窯第3小期
大窯期 皿類 (1) 搦鉢 (3) 鉄釉甕 (2)	連房式登窯第3・4小期
	連房式登窯第4小期
	連房式登窯第5小期 尾呂茶椀 (1)
	連房式登窯期 灰釉丸椀 (1) 陶器染付椀 (1) 鉄釉椀類 (1)
	搦鉢 (4)
	時期を特定し得ないもの 天目茶椀 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (4)

常滑窯産陶器 壺甕類 (4)

中国磁器 白磁椀 (1) 割高台

96E 区 SD10 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢 (1)

96E 区 SD11 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 鉄釉緑釉小皿 (1)	連房式登窯第2小期 搦鉢 (1)
仏銅具 (1)	

96E区 SD12 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢 (1)
大窯第1・2段階 天目茶碗 (1)

96E区 SD13 出土陶器 (図版28 写真図版22)

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

古瀬戸窯後期第3・4小期 鉄釉皿 (1) 古瀬戸窯後期第4小期 鉄釉縁釉小皿 (1) 大窯第1段階 天目茶碗 (1) 仏飼具 (1) 大窯第2段階 搦鉢 (1) 大窯第3段階 鉄釉丸皿Ⅱ (1) 大窯期 茶壺 (1) 鉄釉甕 (1)	連房式登窯第5小期 徳利 (1)
---	------------------

第2層

古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗 (1) 古瀬戸窯後期 甕類 (1) 大窯第1段階 天目茶碗 (1) 大窯第1・2段階 灰釉端反・丸皿 (1) 大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1) 搦鉢 (2) 大窯第3段階 搦鉢 (1) 鉄釉稜皿 (1) 大窯期 搦鉢 (2)	連房式登窯第1小期 搦鉢 (1) 連房式登窯第1・2小期 連房式登窯第3小期 搦鉢 (1) 連房式登窯第3・4小期 連房式登窯第5小期 鉄釉丸椀 (1) 連房式登窯期 志野皿 (1) 搦鉢 (4) 時期を特定し得ないもの 搦鉢 (2) 甕 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
--	--

第1層

古瀬戸窯後期第3・4小期 皿 (1) 古瀬戸窯後期第4小期 天目茶碗 (1) 縁釉皿 (1) 大窯第1段階 搦鉢 (1) 大窯第2段階 搦鉢 (1) 大窯第3段階 搦鉢 (3) 大窯第4段階 志野皿 (2) 大窯期 搦鉢 (2) 鉄釉甕 (3)	連房式登窯第1小期 志野丸皿 (1) 鉄釉丸皿 (1) 連房式登窯第1・2小期 鉄釉丸椀 (1) 志野小椀 (1) 志野丸皿 (1) 志野皿 (2) 黄瀬戸鉢 (1) 連房式登窯第2小期 志野丸皿 (2) 連房式登窯第5小期 鉄釉椀 (1) 連房式登窯期 志野皿 (2) 搦鉢 (9) 徳利 (1) 時期種類を特定し得ないもの (5)
--	---

常滑窯産陶器

第3層	壺甕類 (1)
第2層	甕 (1) 壺甕類 (7)
第1層	鉢A (1) 鉢 (1) 壺甕類 (7)

志戸呂窯産陶器 古瀬戸窯後期第4小期併行期 縁釉皿 (1) 鉄釉

96E区 SD14 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期 壺・瓶類 (2)
大窯期 皿類 (1)

96E区 SD15 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第3段階 天目茶碗 (1)

96E区 SD21 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯期 茶壺 (1) 連房式登窯第2小期 盤 (1)

96E区 SD22 出土陶器

常滑窯産陶器

短頸壺 (1)

96E区 SD23 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1・2段階 灰釉 (丸) 皿 (1)

96E区 SD24 出土陶器

常滑窯産陶器

壺甕類 (1)

96E 区 SD30 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸窯後期第3・4小期 瓶類 (1)

96E 区 SE02 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第2層

大窯第1・2段階 灰釉皿 (1)	連房式登窯第1・2小期 反皿 (2)
大窯第2段階 天目茶椀 (1) 灰釉丸皿Ⅰ (1)	連房式登窯第2小期 鉄釉丸椀 (1)
灰釉(丸)皿 (1) 鉄釉稜皿 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第3小期 搦鉢 (1)
大窯第3段階 鉄釉丸皿Ⅱ (1) 鉄釉稜皿 (1)	連房式登窯第3・4小期 鉄釉端反椀 (1)
搦鉢 (1)	連房式登窯第4小期 反皿 (1)
大窯期 搦鉢 (4)	連房式登窯期 鉄釉椀類 (1) 灰釉椀類 (1) 志野皿 (1)
	搦鉢 (2) 徳利 (3) 壺・瓶類 (1)
	時期を特定し得ないもの 壺・瓶類 (1)

第1層

古瀬戸窯後期第4小期 天目茶椀 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第1小期 志野皿 (2)
古瀬戸窯後期 灰釉皿 (1) 茶壺 (1)	連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (1) 志野丸皿 (1)
古瀬戸窯期 茶壺 (1)	反皿 (1)
大窯第1段階 天目茶椀 (1) 搦鉢 (1)	連房式登窯第3小期 天目茶椀 (2) 搦鉢 (1)
大窯第1・2段階 灰釉(丸)皿 (2)	連房式登窯第3・4小期 反皿 (1) 皿 (1)
大窯第2段階 鉄釉稜皿 (1) 灰釉稜皿 (2)	連房式登窯第4小期 灰釉輪壳皿 (1)
大窯第2・3段階 鉄釉稜皿 (1)	連房式登窯第5小期 鉄釉端反椀 (1) 丸皿 (1)
大窯第3段階 天目茶椀 (3) 半筒茶椀 (1)	連房式登窯期 天目茶椀? (1) 志野皿 (4) 搦鉢 (3)
鉄釉丸皿Ⅰ (1) 搦鉢 (1)	徳利 (1) 壺・瓶類 (1)
大窯第4段階 天目茶椀 (1) 折縁皿 (1)	時期種類を特定し得ないもの (5)
志野丸皿 (1)	明治以降の磁器 (1)
大窯期 灰釉皿 (1) 搦鉢 (17) 鉄釉甕 (3)	江戸後期 壺・瓶類 (1)

常滑窯産陶器

第2層

壺甕類 (4)

第1層

鉢A (1) 壺甕類 (10)

96E 区 SE03 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

第3層

大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1)	連房式登窯第2小期 鉄釉椀 (1)
大窯第3段階 搦鉢 (1)	時期種類を特定し得ないもの (1)
層位の記載なし	
大窯第1・2段階 皿 (1)	

96E 区 SE04 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階

天目茶椀 (2)

大窯第2段階 天目茶椀 (1) 鉄釉丸皿Ⅰ (1)

大窯第3段階 搦鉢 (1)

常滑窯産陶器 壺甕類 (3)

96E 区 SE05 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 搦鉢 (1)

大窯期 搦鉢 (1)

96E 区 SE06 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢 (1)

大窯期 片口 (1)

96E 区 SE07 出土陶器

常滑窯産陶器

甕 (1)

96E 区 SE08 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期 天目茶碗 (1) 大窯第2段階 灰釉皿 (1)	連房式登窯期 鉄釉椀皿類 (1)

96E 区 SE09 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
	連房式登窯第11小期 広東椀 (1) 連房式登窯期 鉄釉椀 (1) 近・現代 搦鉢 (1)
肥前系磁器 染付椀 (1 内面輪禿)	

96E 区 SE11 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢 (1)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

96E 区 SE19 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
	連房式登窯第1小期 搦鉢 (1) 連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1) 連房式登窯期 志野皿 (1) 搦鉢 (1) 時期種類を特定し得ないもの (1)
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

96E 区 SK36 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期 はさみ皿? (1)	連房式登窯期 器種を特定し得ない (2)

96E 区 SK57 出土品

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸窯後期第4小期 搦鉢 (1)

96E 区 SK68 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期 搦鉢 (1) 大窯第1段階 搦鉢 (1)	時期種類を特定し得ないもの (1)

96E 区 SK69 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1段階 鉄釉緑釉皿 (1)

96E 区 SK70 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 灰釉緑釉皿 (1) 古瀬戸窯後期 皿 (1)	

96E 区 SK79 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯期 搦鉢 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1)

96E 区 SK83 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第3・4小期 鉄釉緑釉皿 (1) 大窯第2段階 鉄釉椀皿 (1) 常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

96E 区 SK87 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸窯後期第4小期 天目茶椀 (1)

96E 区 SK134 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第3段階 天目茶椀 (1)

96E 区 SK144 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯中期第2小期 折縁盤 (1)	連房式登窯第1小期 志野皿 (1)
古瀬戸窯後期第3・4小期 緑釉皿 (1)	連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1)
大窯第2段階 鉄釉稜皿 (1)	連房式登窯第3・4小期 反皿 (2)
大窯第3段階 搦鉢 (3)	連房式登窯期 灰釉椀類 (1) 黄瀬戸鉢 (1)
大窯第4段階 鉄釉折縁皿 (ソギ 1)	時期種類を特定し得ないもの (2)
大窯期 搦鉢 (4)	
常滑窯産陶器 甕 (1) 壺甕類 (1)	

96E 区 SK150 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 搦鉢 (1)	連房式登窯第1・2小期 鉄釉椀 (1)
大窯第1・2段階 天目茶椀 (1)	連房式登窯第3・4小期 鉄釉端反椀 (1)
大窯期 德利 (2)	連房式登窯期 天目茶椀 (1)
	時期種類を特定し得ないもの (1)

96E 区 SK151 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第1・2段階 灰釉皿 (1)

96E 区 SK153 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 時期種類を特定し得ないもの (1)

96E 区 SK162 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯第3小期 志野丸皿 (1)

96E 区 SK173 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

古瀬戸窯後期第3小期 皿 (1)	
古瀬戸窯後期第4小期 天目茶椀 (1)	

96E 区 SK185 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 灰釉皿 (1)	
時期種類を特定し得ないもの (1)	

96E 区 SK187 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 器種を特定し得ないもの (1)

96E 区 SK190 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第3段階 搦鉢 (1)

96E 区 SK203 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯期 搦鉢 (1)	
常滑窯産陶器 壺甕類 (1)	

96E 区 SK264 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

連房式登窯第1・2小期 志野皿 (1)
連房式登窯第3・4小期 天目茶椀 (1)
連房式登窯期 鉄釉椀類 (1)

96E 区 SK266 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢 (1)

96E 区 SK267 出土陶器

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

96E 区 SK268 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 連房式登窯期 鉄釉椀類 (1)

96E 区 SK269 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯第2段階 天目茶椀 (1)

96E 区 SK272 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第1段階 天目茶椀 (1)
大窯第3段階 搦鉢 (1)
大窯期 天目茶椀 (2) 皿 (1)

連房式登窯第1・2小期 天目茶椀 (1)
連房式登窯第2小期 天目茶椀 (1)
連房式登窯第3小期 天目茶椀 (1) 志野丸皿 (1)
連房式登窯期 搦鉢 (1) 器種を特定し得ないもの (1)
時期種類を特定し得ないもの (1)

中国磁器 青花小杯 (1) 草花文 清)

96E 区 SK281 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 搦鉢 (1)
大窯第3段階 搦鉢 (1)
大窯期 搦鉢 (4) 鉄釉甕 (1)

連房式登窯第1小期 鉄釉丸椀 (1)
連房式登窯期 皿 (1)

96E 区 SK286 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 古瀬戸窯後期第4小期 灰釉皿 (1)

96E 区 SK305 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 天目茶椀 (1) 搦鉢 (1)

時期を特定し得ないもの 盤類 (1)
時期種類を特定し得ないもの (1)

常滑窯産陶器 鉢D (1) 壺甕類 (1)

96E 区 SK306 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器 大窯期 搦鉢 (1)

96E 区 SK309 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器

大窯第2段階 天目茶椀 (1)
大窯期 搦鉢 (1)

96E 区 SK318 出土陶器

常滑窯産陶器 壺甕類 (1)

96E区 SK319 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
大窯第1段階 はさみ皿 (1)	連房式登窯期 蓋 (1)
大窯第1・2段階 天目茶椀 (1)	
大窯期 搦鉢 (1) 器種を特定し得ないもの (1)	

96E区 SK340 出土陶器

常滑窯産陶器 鉢A (1) 壺甕類 (1)

96E区 SX01 出土陶器

瀬戸・美濃窯産陶器	
古瀬戸窯後期第4小期 天目茶椀 (1)	時期を特定し得ないもの 壺・瓶類 (1)
大窯第1段階 灰釉緑釉皿 (1)	

第2節 木簡

木簡は、97B区SD07から1点、97B区SD01から7点、96E区SD02から1点、総計9点が出土した。いずれも南調査区からの出土である。このうち97B区SD07出土の木簡は、所謂「護摩札」で、天正4（1576）年の年紀をもつものとして注目されるものである。以下、釈文の記載形式などについては『木簡研究』（木簡学会）の凡例にならい報告する。なお、遺構の時期については、土器・陶磁器の項で詳述することとし、ここでは推定される年代についてふれるにとどめる。

97B区SD07出土木簡（第30図 写真図版22）

97B区SD07は、97B区で検出された大型の方形居館（「梶川五左衛門ト申ス人ノ屋敷跡」とされる）内を南北に区切る溝の1つである。溝内の堆積土は大きく4層（上から第1～4層）に分けられるが、天正4（1576）年銘の木簡1が出土したのは、最下層である第4層中からで、溝底面直上において、文字面を下に向けた状態で出土した。残念ながら、伴出遺物は少なく、その上の第3層からも陶器片は、大窯期の瀬戸・美濃窯産の搦鉢片が出土したにとどまる。第2層からは、大窯第2段階（15世紀中葉）および登窯第1小期～第4小期（17世紀前葉～後葉）の瀬戸・美濃窯産陶器片が出土している。天正4（1576）年は、瀬戸・美濃窯産陶器編年では、大窯第3段階の相当し、開放状態にあり様々な遺物の入り方が想定される溝という遺構の性格を考えた場合、上記の遺物の出土状況は従来の年代観と特に矛盾をきたすものではない。

木簡1（第30図2001）

「金剛蔵王 天正四年 尾州 智多 大御堂寺
カーマン（種字） 奉修大峯柴燈護摩供武軍長久所
胎蔵権現 八月廿四日 野間 常楽坊」

所謂「護摩札」である。長さ51.0cm・幅9.4cm・厚さ0.8cmの短冊形（011型式）のもので、上端が緩い圭頭形をなす。ほぼ完形で、下端部にわずかな欠損がみられる。表裏面とも損傷は少ないが、長らく風雨に曝されていたためか、墨痕は殆ど消失している。文字部と他との風化

の違いによる凹凸により文字が判読できる。「金剛藏王」については、朱筆の可能性はある。判読上で問題となったのが「天正四年」の「四」である。「く」が認められたことから四の異体字である「く」と判読したが、これには異論があるかも知れない。また「武軍長久」の「軍」については、「じ」は認められず、文字そのものは「運」ではない。「尾州智多」「野間」の「大御堂寺」「常楽坊」は、現愛知県知多郡美浜町大字野間に所在する大御堂寺（真言宗 野間大坊とよばれる 源義朝の廟所として著名）のことと考えられる。大御堂寺にはかつて「常楽坊」が塔頭寺院の一つとして存したことが知られている。

97B区SD01出土木簡（第30図 写真図版23）

97B区SD01は、97B区で検出された大型の方形居館（「梶川五左衛門ト申ス人ノ屋敷跡」とされる）を囲む溝である。溝内堆積土は大きく4層（上から第1～4層）に分けられるが、木簡は、第2層から5点（木簡2・木簡5～8）、第3層から1点（木簡3）、第4層から1点（木簡4）の総計7点が出土した。これら木簡の年代については、第4層から概ね古瀬戸後期第4小期～大窯第3段階（15世紀後半～16世紀後葉）の瀬戸・美濃窯産陶器が、第2層および第3層からはともに古瀬戸後期第4小期～登窯第5小期（15世紀後半～17世紀末）の瀬戸・美濃窯産陶器片が出土しており、これらの伴出遺物の示す年代幅のなかで理解すべきものとする。

木簡2（第30図2002）

(升)
×□ □□□□

長さ（9.2）cm・幅2.0cm・厚さ（0.3）cm。短冊形のものであるが、上部は欠損し、下端は方頭をなす（019型式）。墨痕が僅かに認められるのみで、判読し得ない。第2層出土。

木簡3（第30図2003）

・「山神□ [

・「□□□×

長さ（6.5）cm・幅1.6cm・厚さ0.2cm。方頭の短冊形のもので、下部が欠損している（019型式）。裂傷等が入るなど遺存状態は悪い。表面の墨跡は比較的明瞭であるが、明確に判読し得ない。「山」「神」については異論があるかも知れない。「神」は「榊」の可能性もある。裏面の墨痕は不明瞭で、これまた判読し得ない。第3層出土。

木簡4（第30図2004）

「二斗 よこ×

長さ（10.6cm）・幅2.3cm・厚さ0.2～0.3cm。短冊形のもので、下部が欠損している（019型式）。「二斗」は米の単位を示すものであろうか。文意は判然としない。第4層出土。

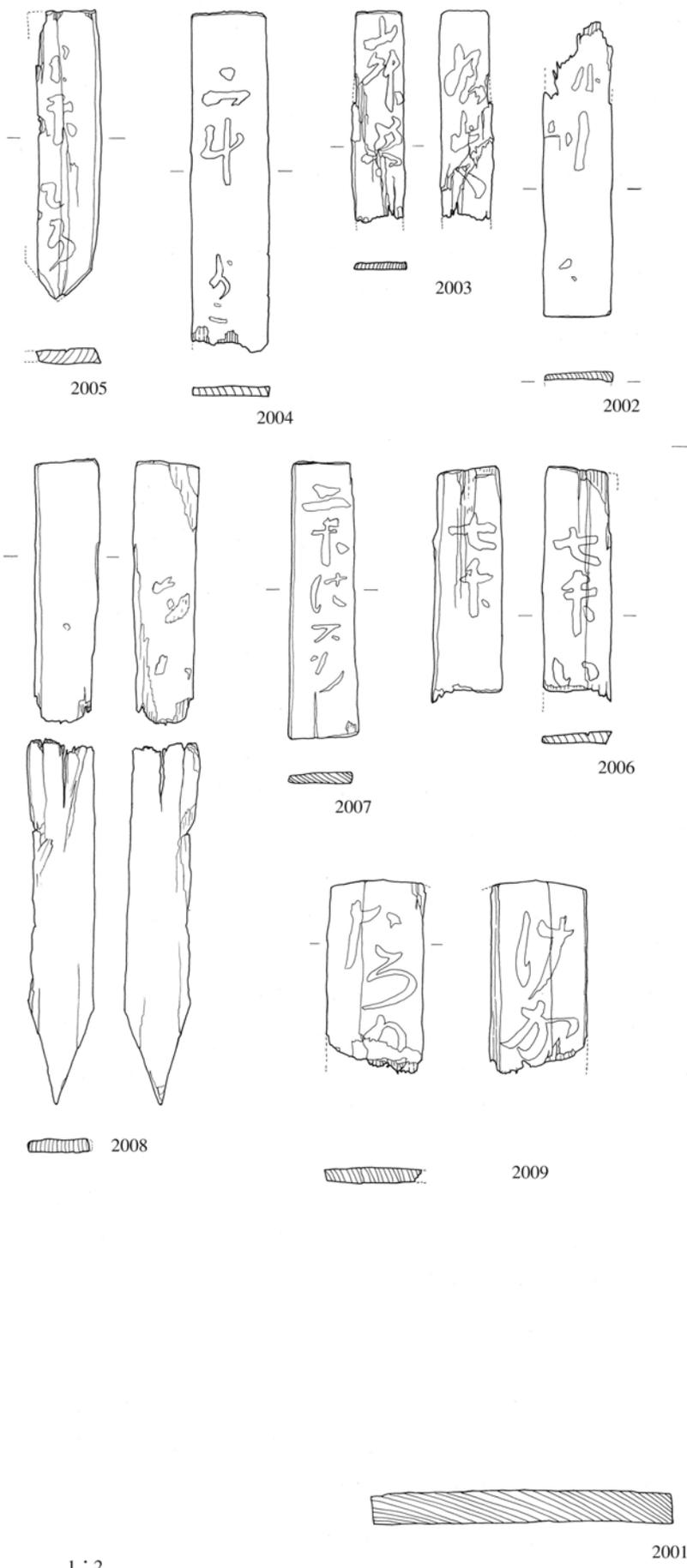
木簡5（第30図2005）

「□升 □□

長さ9.0cm・幅（2.0）cm・厚さ0.5cm。短冊型のもので、下端が尖る（051型式）。左辺が欠損するが、略全形が伺われる。下端部が、幾分薄作りとなっているのは何かに突き刺すためかと推察される。下の2文字は、「□衛門」と3文字で判読すべきかもしれない。第2層出土。

木簡6（第30図2006）

・「七升 い×



金剛麓玉
 天正二年
 尾州智多大塚堂寺
 常樂軒
 胎声十五親
 八月廿一日
 野間
 家奉俊大塚堂燈護摩供並軍長久所

1:2

第30図 木簡実測図

・「七升 ×

長さ(7.3) cm・幅(1.1) cm・厚さ0.2～0.4cm。短冊形のもので、下部および右辺の一部を欠損する(019型式)。墨跡は明瞭で、上記のように判読したが、文意は判然としない。「七升」は米の単位を示すものか。第2層出土。

木簡7(第30図2007)

(清左衛門)
「二升□□□□」

長さ8.6cm・幅2.2cm・厚さ0.2～0.3cm。短冊形のもので、右辺のごく一部が欠損しているほか、ほぼ完形である(011型式)。裏面には明瞭な削痕がある。下の4文字は「清左衛門」と判読できるのではないかと考えるが、もし仮にそうであるならば、上記木簡2・4～6も、冒頭に「○升」とあるので、その下は人名が記されていた(換言すれば、同じ目的で作成された木簡)という可能性が生じることになろうか。第2層出土。

木簡8(第30図2008)

「 □ □ 」

長さ(19.5) cm・幅2.0cm・厚さ0.4cm。上端部は方頭で、下端部は尖る(051型式)。二つになっており、接合しないが、同一個体とみて相違ないものと推察する。微かに墨痕が看取されるにとどまる。第2層出土。

96E・97A・B区SD02出土木簡(第30図 写真図版23)

96E区SD02は、南調査区を北西から南西に斜めに横断する溝で、溝内の堆積土は大きく3層(上から第1～3層)に分けられる。木簡は、第3層から1点出土した。この第3層からは大窯第1段階、第3・4段階および登窯2～4小期の瀬戸・美濃窯産陶器片が出土しており、木簡9の年代については、最大限、大窯第1段階～登窯4小期(15世紀後葉～17世紀後葉)の時期幅のなかで理解されるものとする。

木簡9(第30図2009)

・「たつ [

・「けか×

長さ(6.0) cm・幅(3.0) cm・厚さ0.4cm。上端部が僅かに圭頭をなす短冊形のもので、右辺および下半部は欠損している(019型式)。表裏面とも墨跡は明瞭で、上記のように判読したが、文意は判然としない。第3層出土。

第3節 瓦類

瓦類は量的には少ないが、土坑、井戸、溝などの遺構から軒丸瓦2点、軒平瓦1点、丸瓦16点、平瓦29点、棧瓦1点の総計49点(接合後の点数)が出土した。北調査区からの出土は少なく、多くは南調査区からの出土である。個々の瓦の年代については、詳らかにし得ないが、共伴の遺物から見て15世紀中葉～17世紀後葉(古瀬戸窯後期第、小期～連房式登窯第5小期)

の年代幅で捉えられるものと、18世紀後半～19世紀代（連房式登窯第8～11小期）のものがある。

これらの瓦類は、主として焼成状況によってI群～III群の3群に大別できる。I群は、外表面が明（赤）灰色を呈し、胎が赤黄褐色～黄褐色をなすものである。II群は、外表面が概ね灰色を呈し、胎が灰色ないし褐色をなすもので、I群と区別しにくいものも散見される。III群は、外表面が黒灰色ないし暗灰色（黒灰銀色）を呈し、胎が灰色もしくは灰白色をなすものである。III群は完全な「燻し瓦」と見ることができがI・II群については、「燻し焼き」が不良・不完全な失敗品なのか、技術的に安定していない時期のものなのか判然としない。

以下、瓦類について、個々の細かな出土地点・種類等については第2表で示すこととして、ここでは種類毎に主なものについて報告する。

軒丸瓦（第31図3007・3008）

2点出土した。ともに瓦当部片で、II群に属する。3007は、瓦当の上部片で、復元推定外縁径15.0cm・内縁径9.7cm・外縁高0.9cmをはかる。瓦当文様は、左巻き三巴文で、周りに珠文（推定12個）がめぐる。圏線はない。丸瓦部と瓦当部の接合は、丸瓦部が剥がれた痕跡の観察から、瓦当部裏面の丸瓦部接合位置に縦位に短くて深い刻みを入れた後、横方向（円弧）に「カキ目」を入れて接着の安定をはかっていることが窺われる。97B区SD02第3層出土。3008は、瓦当の頸部も小片である。復元推定外縁径15.2cm・内縁径10.2cm・外縁高0.7cmで、1とほぼ同大である。瓦当文様は、1と同様に左巻き三巴文で、周りに珠文（推定12個）がめぐる。圏線はない。同沓の確認はないが、紋様構成は1と酷似する。外縁部には、離れ砂の跡とみられる細かな凹凸が認められる。裏面の端部は、円周に沿って強くナデられ凹んでいる。96E区SD13第2層出土。

丸瓦（第31図3001～3006）

総計で16点出土した。全形を窺い知り得るものは2点で、その他は破片である。確認できるものはすべて玉縁式のものである。広端部以外の破片については、軒丸瓦の可能性もある。

3001は、玉縁式の丸瓦で、広端部から胴部側縁の一部が欠損するが、略完存品である。全長34.5cm、胴部長30.0cm、玉縁長4.5cm、胴部幅16.5cm、胴部高8.4cmで、丸瓦湾曲比（胴部高／胴部幅）は0.51となる。胴部の凸面には、縦方向のナデ調整が施されている。胴部凸面の狭端縁には、幅0.2～0.3cmほどの面取りがみられる。玉縁部側縁の凸面側の面取りは、胴部狭端に及ばない。凹面には布目および板状工具の側縁（棒状工具）による叩き痕が認められるほか、長軸に対して垂直方向の横筋が認められる。この横筋から粘土塊から粘土板を切り離す方法として「コビキ法」がとられたものと推察する。広端縁凹面の面取り幅は、3.0cm前後である。III群に属する。97B区SD02第3層出土。3002は、玉縁式の丸瓦の狭端部側の破片である。遺存長16.6cm、玉縁長4.3cm、胴部幅14.5cm、胴部高7.5cmで、丸瓦湾曲比（胴部高／胴部幅）は0.52となる。胴部の凸面には、縦方向のナデ調整（ヘラを用いた？）が施されており、狭端縁には、幅0.2cmほどの面取りがみられる。玉縁部側縁の凸面側の面取りは、胴部狭端に及ぶ。凹面には布目が認められるほか、粘土塊から粘土板を切り離す方法を推察する手がかりは認められない。内外面に漆喰？状の白色の付着物がみられる。II群に属する。97B区SD01第4層出土。

3003は、玉縁式の丸瓦片で、かろうじて広端部から玉縁端までが遺存する。全長34.3cm、胴部長29.8cm、玉縁長4.5cmで、胴部幅は推定で19.4cm、胴部高も推定で10.6cmとなり、丸瓦湾曲比（胴部高／胴部幅）は推定0.55となる。胴部の凸面は、縦方向のナデ調整がみられ、胴部凸面の狭端縁には、幅0.2cmほどの面取りがみられる。玉縁部側縁の凸面側の面取りは、幅狭であるが胴部狭端に及んでいる。凹面には布目および板状工具の側縁（棒状工具）による叩き痕が認められるほか、3001と同様に長軸に対して垂直方向の横筋が認められる。この横筋から粘土塊から粘土板を切り離す方法として「コビキ法」がとられたものと推察する。広端縁凹面の面取り幅は、4.0cm前後である。焼成・胎土はⅢ群に属する。なお胴部側縁から広端部にかけての破面は、その表面が「焦し焼」されており、焼成時に破損もしくは亀裂が入ったものと推定される。97B区SD02第3層（1点）および第2層（2点）出土品が接合したものである。3004は、丸瓦の胴部片である。内外面に漆喰？状の白色の付着物がみられる。凸面は縦方向のナデ調整がみられる。凹面には布目および板状工具の側縁（棒状工具）による叩き痕が認められる。粘土塊から粘土板を切り離す方法を推察する手がかりは認められない。Ⅱ群に属する。97B区SD01第3層出土。白色の付着物、胎土・焼成、形状から2と同一個体の可能性がある。3005・3006は、ともに丸瓦の胴部広端部片である。凸面は、縦方向のナデ調整が施されている。凹面には布目および斜め方向の筋がみられる。この斜め方向の筋から粘土塊から粘土板を切り離す方法として「糸切り法」がとられたものと推察する。広端縁凹面の面取り幅は、ともに6.0cm前後ある。ともにⅡ群に属し、97B区SD01第2層出土。

軒平瓦

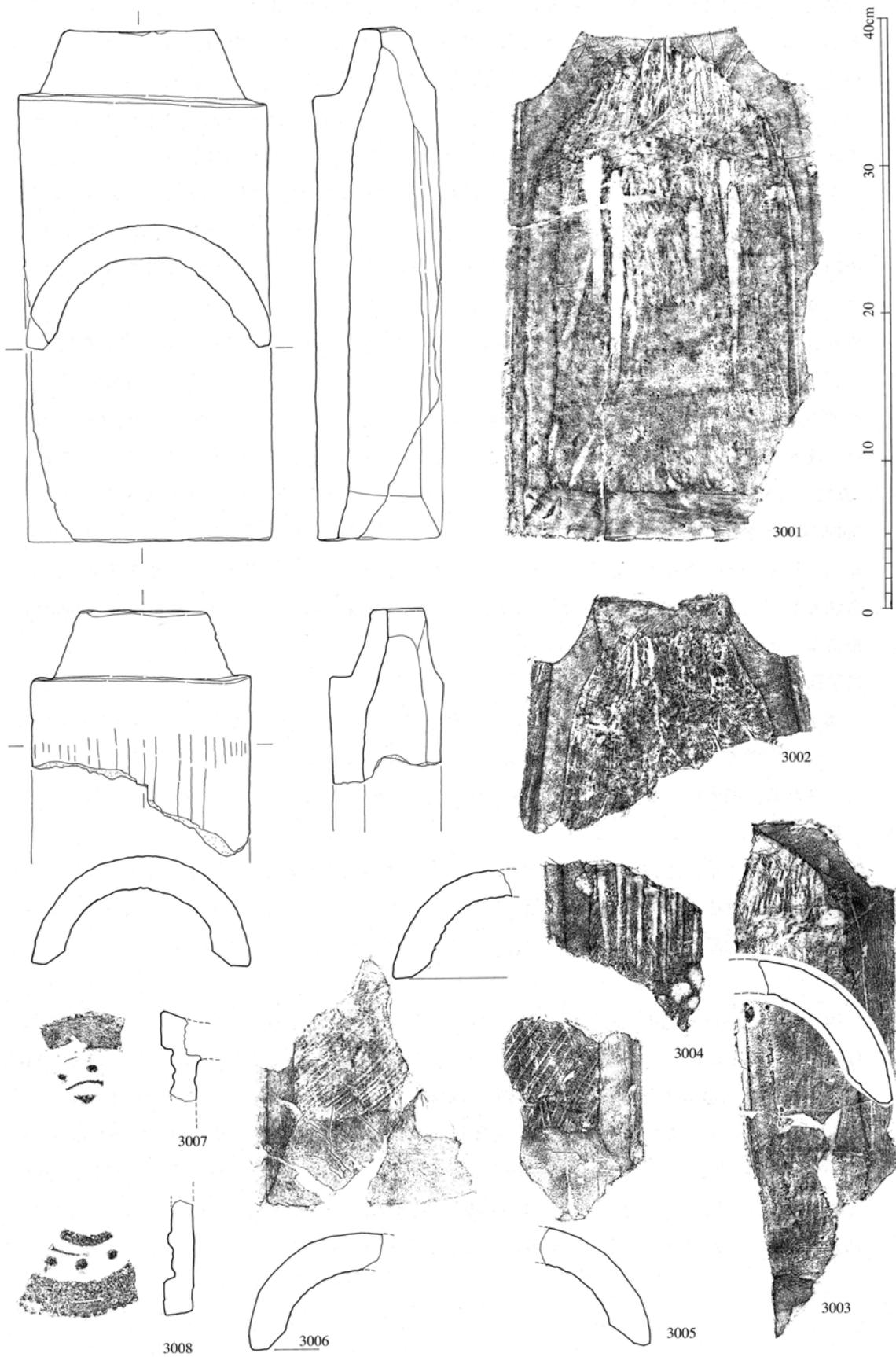
図示し得ないが、瓦当部の下顎隅部の小片が1点出土した。下端部幅2.0cm・同厚2.5cmで、瓦当面に文様の一部が僅かに認められる。右下から左上にはねあがるもので、唐草文の一部と推察される。焼成は、Ⅱ群に属する。96E区の遺構検出時に出土。

平瓦

図示しなかったが、29点出土。小片が多く、全形を窺い知るものはない。Ⅰ群のものは認められず、Ⅱ群・Ⅲ群に限られる。要因は定かではないが、この点で丸瓦の様相とは異なる。総じてⅡ群の平瓦は厚手で、Ⅲ群のものは薄手である、という傾向が看取される。

棧瓦

図示し得ないが、湾曲状況から棧瓦片とみられるものが96C区SE05から1点出土した。これはⅢ群に属するが、胎土が他のものに比べ緻密な点で若干異なる。このSE05からは18世紀後半～19世紀代（連房式登窯第8～11小期）の遺物が出土しており、年代的には明らかに新しく位置付けられるものである。このほか平瓦としたなかに6点ほど同様な胎土のものがある。96D区SD06第1層出土品（3点）および96A区SE01出土品（3点）で、これらの遺構は96C区SE05と同様に出土遺物から18世紀後半～19世紀代（連房式登窯第8～11小期）とみられるものであり、平瓦としたが棧瓦の小片の可能性のあるものと考えられる。



第31图 瓦類実測図

1:4

軒丸瓦・軒平瓦

番号	実測図番号	調査区	グリッド	遺構	層位等	種類	文様	焼成	備考	
1	第31図3008 第31図3007	南調査区	96E	IXB 11 s	検出	軒平瓦	唐草文?	II	下顎隅部片	
2				IXB 8 t	SD13	第2層	軒丸瓦	左卷三巴文 珠文(12)あり		II
3				IXC 20 j	SD02	第3層	軒丸瓦	左卷三巴文 珠文(12)あり		II

丸瓦

番号	実測図番号	調査区	グリッド	遺構	層位等	種類	焼成	粘土板の切断法	備考	
1		南調査区	96E	IXC 17 e	SK207	丸瓦 (瓦縁式)	II	コビキ	胴部に釘孔(焼成前)	
2				IXC 11 e	SE04	丸瓦	I	糸切り?		
3				IXC 12 a	SD26	丸瓦 (瓦縁式)	I	?		
4				IXC 7 a	SD13	第2層	丸瓦	I		?
5				IXC 7 a	SD13	第2層	丸瓦	I		?
6				IXC 11d	SK315	丸瓦	I	?		
7			97A	IXC 19 i	SD02	第2層	丸瓦	III	?	
8				IXC 20 i	SK10	第2層	丸瓦	I ?	?	
9				トレンチ03		丸瓦	I	?		
10				IXC 19g	SK09	丸瓦	II・III	?		
11	第31図3003		97B	IXC 16・17m・181	SD01	第2・3層	丸瓦 (瓦縁式)	III	コビキ	
12	第31図3006			IXC 17・181	SD01	第2層	丸瓦	II	糸切り	
13	第31図3005			IXC 16 l	SD02	第2層	丸瓦	II	糸切り	
14	第31図3001			IXC 20 j	SD02	第3層	丸瓦 (瓦縁式)	III	コビキ	
15				IXC 19 l	SD01	第2・4層	丸瓦 (瓦縁式)	I	?	
16	第31図3002			IXC 19 l	SD01	第4層	丸瓦 (瓦縁式)	I	糸切り	
17	第31図3004			IXC 19m	SD01	第3層	丸瓦 (瓦縁式)	I	糸切り	

平瓦・棧瓦

番号	調査区	グリッド	遺構	層位等	種類	焼成	厚さ	備考	
1	北調査区	96A	VII C 14 e	SE01	平瓦 (棧瓦?)	III	1.5cm		
2			VII C 14 e	SE01	平瓦 (棧瓦?)	III	1.6cm		
3			VII C 14 e	SE01	平瓦 (棧瓦?)	III	1.6cm		
4		96C	VII C 16 p	SD03	平瓦	III	1.7cm		
5			VII C 13 r	SE05	棧瓦	III	1.6cm		
6			VII D 16 a・b	SD06	第1層	平瓦 (棧瓦?)	III		1.3cm
7			VII D 16 a・b	SD06	第1層	平瓦 (棧瓦?)	III		1.8cm
8			VII D 16 a・b	SD06	第1層	平瓦 (棧瓦?)	III		1.5cm
9		96D	VII D 16 b	SD06	第1層	平瓦 (棧瓦?)	III		1.8cm
10	南調査区	97B	IXC 20 j	SD02	第3層	平瓦	II	2.4cm	
11			IXC 20 j	SD02	第1層	平瓦	III	1.7cm	
12			IXD 17 a	SD12	第2層	平瓦	III	1.7cm	
13			IXD 16 l	SD01	第3層	平瓦	II (II)	1.8cm	
14			IXC 18 l	SD01	第2層	平瓦	III	1.6cm	
15			97A		トレンチ03	平瓦	II	2.5cm	
16				トレンチ03	平瓦	II	2.6cm		
17		IXC 15 k		SE03	平瓦	III	—		
18		IXC 15 h		SD02	第1層	平瓦	III	1.9cm	
19		IXC 19 i		SD02	第1層	平瓦	III	1.6cm	
20		IXC 19 i		SD02	第1層	平瓦	III	1.6cm	
21		IXC 17 i		SD02	第2層	平瓦	(II) III	2.0cm	
22		IXC 16 h		SD02	第2層	平瓦	III	1.8cm	
23		IXC 19・20 i	SD02	第2層	平瓦	II (III)	1.8cm		
24	IXC 19 i	SK10	第2層	平瓦	III	1.8cm			
25	IXC 20 i	SK10	第2層	平瓦	III	—			
26	96E	IXC 11 d	SD06	第1層	平瓦	II	1.9cm		
27		IXC 12 e	SD03	第2層	平瓦	II	2.1cm		
28		IXC 12 f	SD03	第2層	平瓦	(I) II	2.3cm		
29		IXC 15 e	SK272	平瓦	(I) II	2.6cm			

第2表 瓦類一覧表

第4節 木製品

木製品は、溝、井戸、土坑等より多数出土した。種類としては、曲物容器・結桶・箱物・合子などの容器類、杓子形木器・杓子・俎・箸などの食事具類、独楽などの遊技具類、下駄・櫛などの服飾具類、糸巻などの紡織具、建築部材などがある。しかしながら大多数は、材料・未製品・製品の選別も難しい、部位・用途不明の板状・棒状の断片である。

以下、これら木製品の主なものについて出土遺構ごとに報告するが、柱根および礎板については最後に一括した。なお用材については、その一部を樹種同定したにとどまる（第5表）。また木製品の年代については、現状ではそれ自身の型式によって年代を特定し得ないので、伴出遺物（遺構の年代）を参照されたい。

1 北調査区出土の木製品

96A・96B・96C区SD01出土品

SD01は、96A・96B・96C区の3調査区にわたって検出された溝である。溝の埋土の上半分ほどは、人為的に搬入されたとみられるブロック土を多量に含む土層（上層）で、木製品は、このブロック土層より下の土層（中・下層）から出土した。木製品には、俎・蓋？・扉の軸受け・杭などのほかに多数の部位・用途不明の板状・棒状の断片がある。

俎（第32図4001） 1点出土した。厚い長方形の板（46.1×19.9×3.6cm）のもので、脚がつく。上面の全面および下面の脚間に刃物傷がついている。脚は、両短辺のやや内側に長軸に対して直交して取り付けられたもので、板にはめ込まれた上端部分が残るのみである。脚の下半は、下面を俎として利用した際に、切り落とされた可能性がある。脚の取り付けは、板の下面に溝を穿ち、脚の上端全体をはめ込む方式がとられている。そして脚をはめ込む溝は奥を幅広とし、加えて左右のズレを防止するため木釘を打つなどの固定のための細工がみられる。なおここでは俎としたが、脚が取り付けることなどから腰掛け等の俎への転用を考えるべきかも知れない。この点を課題としておきたい。

扉の軸受け（第32図4002） 1点出土。遺存状態は良好ではないが、禅宗系寺院の棧唐戸の軸受けである藁座に良く似た形状をなすことから扉の軸受けとした。遺存長21.8cm・厚さ5.1cmで、軸孔径は4.2cm。

蓋？（第32図4003） 1点出土。四隅を切り落とした長方形の板で、中央に径2mmほどの孔があいている。この孔に摘みとしての紐を通して蓋としたものではないか考えたが、断定できない。長さ7.8cm・幅6.8cm・厚さ0.4cm。

用途不明の板状木製品（第32図4004） 図示したのは1点であるが、このほかにも多数出土している。4は幅10.4cm・厚さ0.5cm・遺存長57.0cmの細長の板で、原形を保つ小口には切れ込みがあるが、木釘を打ちつけた痕跡は認められない。

96C・96D区SD06出土品

このSD06の埋土は、既述のように大きく3層（上より順に第1～3層）に分けられる。木製品が出土したのは、このうちの第3層で、円形曲物容器の底板・蓋・柄杓・下駄・杭・用途不明品がある。

円形曲物容器（第32図4005・4006） 円形曲物容器の底板が2点ある。ともに柾目材で、側面に側板を固定するための木釘留痕は認められない。4005は、径7.4cm・厚さ0.5cm。4006は、径7.1cm・厚さ0.7cmで、柿渋様の黒色塗料が塗布されている。

蓋（第32図4007） 4007は、板目材を用いた円板状のもので、周囲は斜めに削り落とされている。形状から、容器の落とし蓋と推定した。径13.0cm・厚さ1.3cm。

柄杓（第33図4008・4013） 4008は、円形曲物を身にして棒状の柄を取り付ける柄杓（いわゆる曲物柄杓）の柄と柄の先端を円形曲物内で固定するための部品である。柄は、角を丸めた角材の先端を尖らせたもので、先端から15.0cmのところ柄が身から抜けるのを防ぐための木釘を差し込むための孔がある。孔は柄に対して斜めに穿たれている。これは木釘を円形曲物の側板に沿わせるためとみられる。なお柄は上記の孔の辺りで折損しており、握部は失われている。また柄の先端部近くに樺皮紐が付着していたが、これは差し込んだ後さらに樺皮紐で固定したものとみられる。柄の先端部を曲物内で固定する部品は、縦11.6cm・幅2.8cm・厚さ1.6cmの角材で、中央やや下寄りに斜めに柄の先端部を受けの孔を穿ち、孔のやや上から上端にかけての身の内側を斜めに切り落としている。底面には曲物の底板に差し込んで固定するための長さ0.9cmの突起がある。また上端から2cmのところ側板に固定した樺皮紐が遺存する。柄杓の身の大きさ（内法）は、径13.5cm、高さ11.0cm以上で、身に対する柄の装着角度は約27.5度ほどと推定できる。4013は、角を丸めた角材の先端を尖らせたもので、先端から8.0cmほどのところに柄が身から抜けるのを防ぐための木釘を差し込むための孔がある。先端部に焦げ目がついている。なお、孔から後端部までが7.0cmとあまりに短すぎることから、これは何かへの転用品あるいは再加工品で、握り部の一部が切り落とされているなど原形が失われている可能性もある。長さ15.2cm・幅2.3cm・厚さ1.0cm。

下駄（第33図4010・4011） 4010は、台と歯を一木からつくり出した連歯下駄で、板目材の木裏を上面にする。平面形は小判形を呈す。鼻緒孔は、前歯が前歯の前で台の中央に、後歯は後歯の前にある。歯は磨耗が著しく、前歯には補修・補強のための木釘孔とみられる孔が大小3つある。長さ15.8cm、幅7.4cm、高さ1.2cm。4011は、遺存状態が悪い連歯下駄の後歯部分片である。板目材の木裏を上面に用いている。歯の下辺幅は、台の幅よりも広い。歯の下辺幅11.1cm、台幅9.6cm、高さ5.1cm。

用途不明品（第33図4009・4012） 4009は、長さ23.6cm、幅2.0～2.4cm、厚さ0.8cmほどの細身の板材で、両端のやや内側の側面を中心に幅2cmにわたり僅かに抉りを入れたものである。一端には孔を穿ち木釘を打ち込んでいる。用途については判然としないが、把手類の可能性もある。4012は、長さ15.1cm・幅5.7cm・厚さ0.3cmほどの板である。両小口面は、斜めに切り落とされており、側面の一辺には木釘が1本打ち込まれている。また板面の隅には小さな孔が穿たれている。箱物類もしくは折敷類の部材かとも思われるが判然としない。

96A 区 SD03 出土品

第3層から用途不明の部材が1点出土している。

用途不明品 (第34図4017) 角を丸くした細身の角材で、両端とも折損している。中央に径0.4cmの穿孔がある。遺存長29.2cm、幅3.5cm、厚さは1.5～2.0cmで図の上端方向にかけて薄くなる。

96B 区 SD05 出土品

下駄が1点出土している。

下駄 (第33図4014) 4014は、隅丸長方形の平面形をした連歯下駄で、後半部は欠失している。遺存する前歯は使用による磨耗が著しい。鼻緒孔は前壺が僅かに遺存するのみで、前壺は台の中央、前歯の前に位置する。板目材の木裏を上面にしている。遺存長14.8cm、幅8.8cm、高さ0.8cm。

96C 区 SE05 出土品

用途不明品が1点出土している。

用途不明品 (第33図4015) 半裁した丸太材の一側面を少し垂直に切り落とし、小口の一端を出ホゾ様としたものである。建築部材の切れ端かも知れない。長さ9.6cm、幅5.1cm、厚さ2.8cm。

96A 区 SE01 出土品

櫛のほかに、図示し得なかったが用途不明の部材が2点出土している。

櫛 (第33図4016) 4016は、横長の板材の一側面から細い歯を鋸で挽き出し、表面を研磨した横櫛である。肩部は緩い円弧をなし、平面形は一方の肩が張った半円形を呈す。歯数は50本で、切り通し線はむねの上縁に平行し曲線をなす。遺存幅12.1cm (復元推定12.5cm)、高さ2.9cm、厚さ0.8cm。

96D 区 SE01 出土品

上層から、用途不明の部材(4020)が、下層から、円形曲物容器の底板(4018・4019)が出土した。

円形曲物容器 (第34図4018・4019) とともに円形曲物容器の底板である。4018の内外面には、柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。片面には、木目に直交する4本の直線風の傷?がつく。側面には、側板を固定するための木釘を打ちつけた痕とみられる孔が1箇所認められる。径7.5cm、厚さ0.7cm。4019は、径7.4cm・厚さ0.7cmで、18とほぼ同大のものであるが、柿渋様の黒色塗料の塗布や側面の木釘留痕は認められない。

用途不明品 (第34図4020) 4020は、長さ23.4cm、幅12.8cm・厚さ2.9cmの厚手の板材で、上下面および短側面は丁寧に削り整形されている。小口の一端は鋸挽きで垂直に切り落とされ、もう一端の小口は、斜めに削り落されている。建築部材の切れ端の可能性はある。

96A 区 SK02 出土品

非常に薄い三方の脚が出土した。

三方 (第34図4021) 4021は、三方の脚台で、非常に薄い板材を用いている。実測図は裏面を

上面に図化している。三面が遺存しており、中央の面は綴じ合せ面で、薄い板材を綴じ合せた2孔一対の孔が6組確認できる。その左右の隅部は、その内側に折り曲げるための5本一単位のケビキを約2cmほど離して2箇所づつ入れ、隅部に面をつくりあげている。綴じ面の両側の面には格狭間の透かしを入れている。復元推定で幅約15.0cm四方の脚台となる。高さについては21.0cmを大きく上回らないものと推定する。

2 南調査区出土の木製品

96E・97A・97B区SD02出土品

3つの調査区にわたって検出された96E・97A・97B区SD02からは、多量の木製品が出土した。その多くは、人為的な加工痕が認められるものの何に用いられたものなのか判然としない用途不明の部材である。ここでは、ある程度形が明らかなものを取り上げ種類毎に報告する。なお、この溝内の堆積土は、上から第1～3層の3つに大別され、それぞれから木製品は出土した。個々の出土層位については、そのつと記す。

円形曲物容器（第35図4022～4028） 4022～4028は、いずれも円形曲物容器の底板である。4022は径15.8cm・厚さ0.5～0.6cmの底板で、外周から少し内側のところに樺皮紐が差し込まれている。側面には側板を固定する木釘留痕は認められないが、欠損部分が多く断定は出来ない。97A区、第2層出土。4023は、径11.0cm・厚さ0.6cmの底板で、外周から少し内側にかけて樺皮紐が差し込まれているところが一箇所ある。この樺皮紐が何を留めたのか、側板なのかあるいは柄杓の柄先なのか等、その目的は判然としない。側面には側板と固定したとみられる木釘孔が2箇所認められる。また中央やや外周寄りに小孔が1つ認められるほか貫通していない小孔状のものが2つある。97A区、第2層出土。4024は、径11.2cm・厚さ0.6cmの底板で、側面に小孔が1つ認められるが、木釘孔としては方向が不自然であり、植物の根が認められた底板上面の孔同様に植物の根による傷の可能性がある。97A区、第2層出土。4025は、径8.2cm・厚さ0.8cmの底板で、全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。側面に木釘留痕は認められないが、欠損部分が多く断定は出来ない。97A区、第2層出土。4026は、径7.4cm・厚さ0.6cmの底板で、全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。側面には木釘孔が2つある。97A区、第2層出土。4027は、径7.4cm・厚さ0.5cmの底板で、柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。木釘孔は認められないが、欠損部分が多く断定は出来ない。97A区、第3層出土。4028は、径7.6cm・厚さ0.6cmの底板で、柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。木釘孔は認められないが、欠損部分が多く断定は出来ない。97A区、第2層出土。

柄杓（第35図4031・4032） とともに円形曲物容器を身とする所謂曲物柄杓の柄である。4031は、角を丸めた角材の先端を尖らせたもので、先端から10.0cmおよび12.0cmほどのところの2箇所に柄が身から抜けるのを防ぐための木釘を差し込むための孔がある。孔が2箇所認められる事自体が、再加工されたことを物語るが、孔から後端部までが14～12cmほどと短すぎることも、さらに何かに転用するために、握り部の一部が切り落としている可能性を示唆する。長さ

24.0cm・幅 1.6cm・厚さ 1.0cm。97A 区、第 2 層出土。4032 も 4031 と同様に、角を丸めた角材の先端を尖らせたもので、先端から 7.1cm のところに柄が身から抜けるのを防ぐための木釘を差し込むための孔がある。握り部は折損している。遺存長 14.1cm、幅 1.4cm、厚さ 1.0cm。97B 区、第 3 層出土。

結桶（第 35 図 4029・4030、第 35 図 4033・4034） 4029 は、高さ 13.1cm・上幅 6.7cm・下幅 6.2cm・厚さ 1.1cm ほどの結桶の側板の一枚である。板目材で、内面下部に厚さ 1.5cm ほどの底板のあたり面が認められる。外面の箍痕は、表面の遺存状態が悪く判然としない。上端に幅 1.0cm・深さ 1.0cm 前後の半円形の抉り込みがある。口径 18.4cm・高さ 13.1cm の結桶を復元推定できる。97A 区、第 2 層出土。4030 は、高さ 8.5cm・上幅 9.5cm・下幅 9.2cm・厚さ 0.5cm ほどの結桶の側板の一枚である。柁目材で、内面には削り整形痕が明瞭にのこる。内面下部には、厚さ 1.1cm ほどの底板のあたり面が認められ、外面には、箍の痕跡（幅 2.0cm ほど）が二段認められる。また内面には、柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。口径 26.4cm・高さ 8.5cm の結桶を復元推定できる。97A 区、第 2 層出土。4033 は、長さ 14.1cm・幅 8.7cm・厚さ 1.2cm ほどの結桶の側板の一枚である。板目材で、内面下部には、厚さ 1.7cm ほどの底板のあたり面が、外面には、箍の痕跡が二段認められる。97B 区、第 1 層出土。4034 は、長さ 26.6cm・上幅 9.0cm・下幅 8.0cm・厚さ 0.7cm ほどの結桶の側板の一枚である。板目材で、内面下部には、厚さ 2.5cm ほどの底板のあたり面が認められ、外面には、箍の痕跡が二段認められる。97A 区、第 1 層出土。

木栓（第 36 図 4035・4036） 4035・4036 は、陶磁器の瓶類もしくは結桶に鏡板を付けた桶樽の木栓と考えられるものである。4035 は、角材の下三分の二ほどを丸く尖り気味に削ったもので、基部の断面形は隅丸方形を呈する。平坦な上面から先端方向へ 2.0cm のところに穿孔がある。長さ 9.6cm、基部の幅 2.0cm・厚さ 1.6cm。97A 区、第 2 層出土。4036 は、先端が丸みをもつ逆円錐形のもので、平坦な上面の縁は面取りされて、平坦面の平面形は六角形を呈する。そして上記 4035 と同様にその平坦面から先端方向へ 2.0cm のところに穿孔がある。長さ 8.5cm、基部径 3.3cm。96E 区、第 3 層出土。

折敷（第 36 図 4037・4038） 4037 は、角を斜めに切り落とした平面形が隅切方形の薄い柁目板である。側板を固定する紐孔は遺存部分に認められないが、その形状から折敷の底板と推定する。現長 9.3cm、同幅 5.3cm で、厚さは 0.3cm。97A 区、第 3 層出土。4038 は、その形状から隅丸方形の折敷の底板ではないかと推定するものである。板目材。現長 9.4cm・同幅 3.0cm で、厚さ 0.5cm。96E 区、第 3 層出土。

箱類（第 36 図 4039） 細長の長方形の板材で、破面には板を継ぐための釘孔が 5 箇所ある。上下面に側板・底板などを組み合わせ固定するための釘孔が認められないことから、箱類の蓋板と推定したが、周縁に側板のあたり面が確認できないなどの問題点もある。現長 2.4cm、幅 19.3cm、厚さ 0.5cm。96E 区、第 3 層出土。

台脚（第 36 図 4040～4042） 4040・4041 の平面形は、ともに両側が緩い円弧を描く台形を呈する板状品で、上辺の中央に浅く幅広な抉り入りその両端が突出する形状をなす。この突出部分を底板に差し込んで脚台としたものではないかと考えたが、突出部に底板のあたりが認められないなど問題点もある。4040 は、柁目材で、幅 10.9cm、高さ 4.6cm、厚さ 0.5cm。97B 区、第

3層出土。4041は、板目材で、幅11.1cm、高さ4.7cm、厚さ0.5cm。上辺の挟り部に紐状のものを巻いた圧痕が認められる。97A区、第3層出土。なお4041の側面に釘孔が1箇所認められること、あるいは全体の形状から、円形曲物容器の底板を半裁したものを再加工したものの可能性が高い。4042は、透かしの入った折敷の脚台と推定したものである。転用の際に垂直に切り落とされた端部には、縦位にケビキ線が2本みられる。おそらくは隅丸方形に曲げられていたものと推定する。なおこのケビキ線上に3箇所穿孔がみられるが、これは補修もしくは転用の際に穿たれたものと考えられる。また端部の外面に規則的に並んだ貫通していない小孔が4箇所確認できるが、その目的は不明である。現幅10.9cm、同高4.6cm、厚さ0.5cm。第2層出土。

箸（第36図4044～4046） 完形品はないが、比較的良好なものを図示した。いずれも小割りにした材を削って、細い棒状にしたもので、断面形は不定形な多角形を呈す。本と末の区別は判然としない。4044は、遺存長15.0cm・最大径0.7cmほどで、97A区、第2層出土。4045は、遺存長15.1cm、最大幅0.9cm・厚さ0.5cmほどで、いくぶん扁平なものである。原形を保つとみられる端部には、焦げ付きが認められる。97A区、第2層出土。4046は、遺存長9.6cm、径0.6cmほどのものである。97A区、第1層出土。

杓子形木器（第36図4043） 4043は、周縁を丸くした所謂「飯しゃもじ」形の杓子である。扁平な板目の板材からつくり出したもので、身と柄の区別は不明瞭である。長さ24.1cm、身幅6.0cm・柄幅3.3cm・厚さ1.0cm。97A区、第1層出土。

下駄（第37図4047～4051） 4047～4049は、台の平面形が長方形ないし隅丸方形を呈するものである。4047は、台と歯を一木からつくり出す連歯下駄で、歯幅と台幅とは同幅のものである。前歯に比べ後歯の磨耗が著しい。鼻緒孔は、前壺を前歯の前で台の中央に、後壺を後歯の前にあけている。長さ18.6cm、幅9.8cm、高さ2.5cm。97A区、第2層出土。4048・4049は、台と歯を別につくりホゾをもうけて結合させる差歯下駄である。ただともに歯は失われている。4048は、後半部は欠損するが、台の中央にある鼻緒孔の前壺周辺につく足指圧痕から右足用とみられるものである。前歯の結合のため、台の裏面に、幅1.6cm、深さ0.7cmほどの断面方形の溝をもうけ、溝の中央に1辺1.6cm前後の方孔を穿ってホゾ孔としている。現長14.0cm、幅7.8cm、現高2.0cm。96E区、第2層出土。4049は、4048に比べ隅丸の丸みが強いもので、差歯のホゾの作り方は4048と同様で、鼻緒孔の位置は上記4047等と同様の配置である。現長13.5cm、同幅4.4cm、現高1.7cm。97A区、第1層出土。

4050・4051は、両側が直線的で、前端と後端が半円形を呈す連歯下駄である。ともに木裏を台の上面とするもので、鼻緒孔は、前壺を前歯の前で台の中央に、後壺を後歯の前にあけている。台幅と歯幅とは、同幅。4050は、長さ20.7cm、幅10.7cm、高さ2.4cm。台の上面の後歯の位置に刃物傷がある。97A区、第2層出土。4051は、前端幅に比べ後端幅がいくぶん幅狭なもので、後歯の磨耗が著しい。長さ19.6cm、幅9.8cm、高さ4.3cm。97A区、第2層出土。

紡輪？（第38図4052） 4052は、中央に円孔（径1.0cm）をもつ円盤状品（径8.3cm・厚さ0.6cm）である。紡輪？としたが、薄手であること、中央の孔径が大きいことなど問題がある。96E区、第3層出土。

糸巻（第38図4053） 4053は、糸巻の枠木を固定する横木で、半分ほどが欠損している。柾目

の細長の板材の端部を両側から削って細め、梓木に差し込む枝部としており、先端部を鉤の手状にしている。中央部には、相欠き仕口をつくり、そのかみ合わせ部分の中央に軸棒を通す軸孔（径1.2cm）がある。現長10.8cmで、復元推定長19.2cm。97A区、第2層出土。

独楽（第38図4054） 4054は、いわゆる砲弾形の独楽であるが、先端部の形状は弾丸状というよりは半球形にちかい。平坦な上面の中央には、径2.1cm・深さ2.2cmの円錐（四角錐）状の刳形がはいる。柾目材。径4.4cm、高さ4.3cm。97A区、第2層出土。

用途不明品（第38図4055～4060） 4055は、細身の板材の一端を三角に尖らせた板状品である。横断面形は刀身状を呈す。現長11.3cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm。97B区、第3層出土。4056は、細身の板状品で、両端部は円弧を呈する。長さ12.3cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm。96E区、第2層出土。4057は、長さ11.9cm・幅3.5cm・厚さ0.8cmの板目材の板状品で、一方の端部（上端）が浅く半円形状に抉られている。横断面形は扁平な蒲鉾形を呈す。下端から2.5cm、7.3cmほどのところに2孔一対の穿孔がみられる。97B区第3層出土。4058は、現長6.1cm、幅5.7cm、厚さ0.2cmの薄い板目材の板である。穿孔等の格別な造作は認められない。96E区第3層出土。4059は、両端部および下半部を欠損する現長57.8cm、幅3.6cm、現厚1.1cmほどの棒状品である。一方の端部（上端）に穿孔が1箇所認められる。97A区、第2層出土。4060は、木製品の項で扱ったが、竹製品である。長さが、復元推定値で43.3cm、幅1.9cm、厚さ0.3～0.9cmの細身の板状品で、節をほぼ中央にもってきている。両端部に一辺0.5cm前後の方孔が2箇所ずつ穿たれている。97A区、第1層出土。

97B区SD01出土品

円形曲物容器（第39図4063～4066） いずれも円形曲物容器の底板で、大小様々なものがある。4065は、径17.0cm・厚さ0.7cmの柾目材の底板である。側面に側板をとめるための釘孔は認められない。第3層出土。4063は、径17.0cm・厚さ0.8cmの柾目材の底板である。側面に釘孔が2箇所みられるほか、両端部に樺皮紐の縫い込みがある。第3層出土。4064は、径11.4cm・厚さ0.6～0.8cmの柾目材の底板で、全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。側面に釘孔が2箇所みられ、端部に樺皮紐の縫い込みが1箇所ある。樺皮紐の縫い込みは、4063と同様に、破損箇所にもう1箇所存した可能性もある。第3層出土。4066は、径7.4cm・厚さ0.5cmの小型の底板片で、全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。側面に釘孔が1箇所みられる。第3層出土。

柄杓（第39図4067～4070、第39図4071・4072） 全形がうかがえるもの2点（4071・4072）、柄3点（4067～4069）、身である曲物内で柄の先端を受ける部品1点（4070）がある。4071は、身に円形曲物容器を用いる全長25.6cmほどの曲物柄杓で、底板を欠くがほぼ全形を窺うことのできるものである。径8.5cm・高さ7.0cmの円形曲物容器の側板の綴じ合せ部横の上寄りのところに横長の方孔をあけ、柄を通し、これに相対する側板の下よりの位置に円孔を穿って柄の先端を受けている。曲物の側板の下端部近くに釘孔が2箇所みられ、側板と底板は木釘により固定されていたことが知られる。柄（長さ26.6cm・最大幅2.3cm・厚さ1.0cm）は、断面が方形の棒状品の先端を両側から削って尖らせたもので、先端から9.4cmのところすなわち側板とあた

る部分で幅広となっている。先端から6.8cmのところは釘孔がみられるが、その位置は側板の内面に接する部分より幾分内側であり、仮に釘孔に長い木釘を差し込んだとしても、柄が抜けるのを防止する効果がなかったものと推定される。もっとも土圧による変形のために生じた実測誤差を考慮する必要があるが、誤差がなく推定が正しいとするならば、柄の先端部を強く固定することで柄が抜けるのを防止していたものとおもわれる。そうした場合、釘孔の位置からみてこの柄は転用されたものの可能性が生じることになる。第3層出土。4072も、曲物柄杓である。身である円形曲物容器は、下半部の一部が遺存するのみである。径9.0cm、現高4.4cmで、底板と側板の結合は木釘（3箇所）で行なっている。側板の綴じ合せ部近くの上寄りの位置に縦長の方孔をあけ、柄を通し（或いは嵌め込み）、これに相對する側板部分は遺存しないが底板端部に柄の先端部のあたりもしくは破損の際に先端部が当たつた凹みがあることから、底板近くに円孔を穿って柄の先端を受けたものと推定される。柄の先端から7.8cmの側板に内接する位置に釘孔があり、長い木釘を差し込んで柄が抜けるのを防止したものとみられる。柄は、細身の板状（棒状）のもの的一端を削って尖らせた長さ42.4cm・最大幅2.1cm・厚さ1.1cmのもので、身に比べ柄が大きいという印象を与えられる。なお、側板に穿った「縦長の方孔」については、通例では方孔の位置は綴じ合せ部の横（もっとも厚くなる箇所）であるが、本例は綴じ合せ部の近くではあるが、もっとも厚くなる箇所ではないこと、および縦長の方孔はあまり例をみないものであることさらに遺存状態が悪いことも合って、その位置および方孔と認知したものについて疑問がないわけではない。この点については今後の課題としておきたい。第3層出土。

4067～4069は、角を丸くした棒状の角材の一端を尖らせて柄としたものである。4067は、現長10.0cm・最大幅1.4cmで、柄頭は欠損する。先端より9.7cmのところは釘孔がある。第3層出土。4068は、現長27.7cm・最大幅1.1cmのものである。柄杓の柄としたが、柄としてはいくぶん細身であること、柄が身から抜けるのを防ぐために木釘（楔というべきか）を差し込む釘孔がみられないことから、柄とするには問題があるかもしれない。第3層出土。4069は、現長25.8cm・最大幅2.5cm・同厚さ2.1cmのものである。釘孔は先端から11.5cmのところであって、これからすると握り部は短めとなる。或いは柄頭が二次的に切断されている可能性もあるが判然としない。第3層出土。

4070は、身である曲物等の中で柄の先端を受ける部品と考えるものである。長さ11.2cm、最大幅3.5cm、厚さ1.6cm前後のもので、下端部には底板に嵌め込んで固定するための突起（長さ0.6cm）がある。上半部は両側および上面から削られ細身となり、一部くびれている。おそらくはこのくびれ部に樺皮紐を巻き付け側板等に固定したものと推定する。中央やや下寄りに柄の先端を受け止めたとみられる斜めに（柄の装着角度）穿孔された円孔がある。第3層出土。

蓋（第40図4073） 4073は、挽物の蓋である。頂部から緩い円弧を描いて縁部いたる扁平な円蓋状の蓋で、裏面に高さ0.4cmのかえりがつく。かえりの内側は浅く凹む。漆等の塗布は認められない、白木のままで使用されたものであろうか。径6.7cm、高さ1.2cm。第3層出土。

結桶（第41図4074～4077） 4074～4077は、いずれも結桶の側板の一枚である。4074～4076は、内面下部に底板のあたり面がみられ、外面には箍の痕跡が二段認められる。4077は、内面

下部に底板のあたり面がみられるものの、外面の依存状態が悪いためか箍の痕跡は認められない。4074は、高さ10.3cm、上幅5.5cm・下幅5.0cm、厚さ0.8cm前後の柾目材の側板で、口径20.8cm、高さ10.3cmの結桶を復元推定し得る。推定される底板の厚さは、1.2cm前後。第3層出土。4075は、長さ10.4cm、幅5.5cm、厚さ0.9cm前後の側板。板目材で、推定される底板の厚さは、1.1cm前後。第3層出土。4076は、長さ9.8cm、幅4.0cm、厚さ0.8cm前後の側板。柾目材で、推定される底板の厚さは、1.8cm前後。第3層出土。4077は、長さ8.6cm、厚さ0.8cmの柾目材の側板である。推定される底板の厚さは、1.3cm前後。第1層出土。

楔（第41図4078・4079） 4078は、長さ7.8cm・幅2.0cm・厚さ0.6cmの板材の一方の端部を削って薄く尖らせたものである。両端部の平面形が緩い円弧をなすことおよび柿洪様の黒色塗料の塗布が認められること等からみて円形曲物容器の底板の一部が材として転用されたものと推定される。第3層出土。4079は、厚さ2.0cmほどの長方形の板目材の板の上面を斜めに削り落して楔としたもので、全体的に整形は粗い。長さ8.2cm、幅4.7cm。第3層出土。

折敷（第41図4081～4083、第41図4084～4087） いずれも折敷の底板である。4081は、幅2cm長さ1.0cmほどの突起を小口の一端にもつ長方形の板材であるが、側辺の少し内側に2組みられる2孔一対の穿孔およびその位置関係からみて、もとは隅丸方形の折敷の底板の一部（隅丸部ちかく）と推定するものである。現長13.6cm・同幅4.1cm、厚さ0.6cm。柾目材。第3層出土。ただし再加工されたものの用途は不明で、本来は用途不明品として扱うべきものである。4082も長さ10.2cm、現幅4.5cm、厚さ0.6～0.9cmの長方形の板材である。側辺に対して斜めに並ぶ2孔一対の穿孔の存在から、もとは折敷の底板の一部ではないかと推定したものである。僅かに看取されるもう一つの孔の位置からみて、4081と同様に隅部ちかくの部位ではないかと推察する。第3層出土。これまた再加工されたものの用途は不明で、本来は用途不明品として扱うべきものである。4083は、隅丸方形の折敷の底板の一部である。縁端から少し内側に、側板を固定するための樺皮紐の縫い込みが2箇所認められる。現長25.2cm・同幅2.7cm、厚さ0.3cm。第4層出土。4084も、隅丸方形の折敷の底板の一部である。縁端部の少し内側に2孔一対のものを含む穿孔が7箇所みられる。現長21.8cm・同幅8.5cmで、厚さ0.5cm。裏面には、浅い刃物傷が無数認められる。俎類として転用されたことをが知られる。第4層出土。4085・4086は、穿孔の位置からみて長方形に近い隅丸方形に側板をめぐらしたとみられる、長方形を呈する折敷の底板である。4085は、長さ17.3cm、現幅5.6cmで、厚さ0.1cmと極めて薄いものである。あまりに薄いことから、底板とするのに疑問がないわけではない。三方の脚台の一部ではないかとする案もある。第3層出土。4086は、長さ31.2cm、現幅8.5cm、厚さ0.4cmのもので、おそらくは下面に相当するであろう面に、浅い刃物傷が数多く認められ、俎類に転用されたことがうかがわれる。柾目材。第3層出土。87は、端部の隅を切り落とした、平面形が隅切方形を呈する折敷の底板である。2孔一対の穿孔が端部（短辺）の中央に認められることからみて、楕円形の側板が上面にのるものと推定される。現長12.9cm、幅9.0cm、厚さ0.1～0.2cm。第2層出土。

箱（第41図4080、第41図4088・4089、第42図4090～9403） 組み合わせの箱類の部材（側板・底板・蓋板など）が6点ある。4080は、周縁を斜めに面取りした隅丸方形の板材の一部

で、縁端沿いに釘孔が一直線に並んで4箇所みられる。形状から、組み合わせの箱の底板と推定するが、明確な根拠があるわけではない。長さ19.6cm、現幅1.8cm、厚さ1.0cm。第3層出土。4088は、長方形の板材で、依存する2辺のうちの1辺の縁辺部に釘孔が3箇所みられるのに対して、もう1辺には釘孔は認められない。こうしたことから組み合わせの箱の側板の一部ではないかと推定する。現長15.8cm、同幅10.0cmで、厚さ0.4cm。第3層出土。4089は、隅が僅かに丸みをもつ長方形に近い隅丸方形の組み合わせの箱の底板である。側板の可能性もあるが、組み合わせの箱の側板の多くが、切欠きを入れて出ホゾをつくり出していることから、本例は底板とした。一枚板ではなく両端を尖らした木釘で継いでおり、内外面には柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。遺存する3辺の周縁部には側板を結合、固定するための釘孔がみられる。さらに周縁には、側板の痕跡（あたり面 幅1.0cm）が看取される。なお、底外面には、浅い刃物傷が数多くみられ、組類として転用された可能性がある。長さ31.0cm、現幅19.5cm、厚さ0.7cm。板目材。第2層出土。4090は、大きさ・形状とも89に酷似するが、直接接合はしない。長さ31.0cm、現幅8.0cm、厚さ0.6cmで、一方の側端面には、材を継ぐための釘孔が3箇所存する。両端には側板を固定する釘孔および側板の痕跡（あたり面 幅1.0cm）がみられる。底外面には、浅い刃物傷が数多くみられ、組類として転用された可能性がある。板目材。第3層出土。4091は、現長13.2cm、同幅4.3cm、厚さ0.6cmの板状品で、遺存する2辺に側板の痕跡（あたり面 幅1.0cm）および釘孔が認められる。89の例からみて底板と推定する。内面には、側板のあたり面を除き、柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。柾目材。第3層出土。4092も、4091と同様に柾目材で、側面に釘孔が2箇所ある。遺存する端部には、釘孔および側板のあたり面がみられるが、遺存する長辺に側板を固定するための釘孔がみられない。こうした点から側板と推定する。内外面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。また一部に浅い刃物傷がみられる。現長21.6cm、同幅6.1cmで、厚さ0.6cm。第3層出土。4093は、組み合わせの箱の側板である。一方の端部に「L」字形の切込みを入れてつくり出した出ホゾがみられ、側板を組み合わせた際に固定するために打たれた釘孔がみられる。もう一方の端部は、端面状況からみて転用などの時に切断されたものと推察する。現長14.5cm、同幅7.5cm、厚さ0.9cm。第3層出土。

剝物匙（第43図4098） 4098は、剝物匙で、柄は折損し基部をとどめるのみである。身の平面形は楕円形を呈し、上面を弧面に削りぬいている。整形は粗く、部分的にヤスリ掛け様の条線がみられるのみで、削り痕が内外面に顕著に残る。柄は基部でみる限り、断面が角を丸めた長方形のものである。全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。身の長径11.7cm、短径10.6cmで、柄の現長1.3cm。第3層出土。

箸（第43図4099・4100） 完形品はないが、比較的良好なものを2点図示した。いずれも小割りにした材を削って、細い棒状にしたもので、断面形は不定形な多角形を呈す。本と末の区別は判然としない。4099は、遺存長16.7cm・最大径0.6、ほどで、遺存端部はきわめて細い仕上がりとなっている。第3層出土。4100は、遺存長17.5cm、最大径0.6cmほどで、中央部の断面形は方形に近い。第3層出土。

下駄（第44図4101～4107） 4101・4102は、差歯下駄の差歯である。ともに下辺幅は、台幅

より幅広になるものと推定できる。4101は、出ホゾを2つもつ差歯である。歯幅は、下辺9.0cm・上辺7.5cmで、高さ7.3cm（歯高7.1cm）、厚さ2.0cm前後である。第3層出土。4102は、出ホゾが1つの差歯である。歯幅は、下辺9.5cm・上辺現長7.5cmで、高さ5.9cm（歯高4.9cm）、厚さ1.4cm前後である。第3層出土。

4103～4106は、台と歯を一木からつくりだす連歯下駄である。4103～4105は、両側が直線的で、前端と後端が半円形を呈するもので、歯幅は台幅と同幅となっている。いずれも鼻緒孔は、前壺を前歯の前で台の中央に、後ろ壺を後歯の前にあけている。4103および4104は、台の上面に残る足指圧痕から右足用のものと推定できる。4103は、長さ20.9cm、幅10.7cm、高さ3.4cmで、後歯の磨耗が著しい。第3層出土。4104は、長さ19.8cm、幅9.9cm、高さ2.5cmで、歯の磨耗が著しく、前歯がかろうじて遺存し、後歯はその痕跡を留めるに過ぎない。第3層出土。4105は、長さ18.9cm、幅9.5cm、高さ1.6cmで、これまた歯の磨耗が著しく、前歯がかろうじて遺存し、後歯はその痕跡を留めるに過ぎない。歯と歯の間に刃物傷が認められる。第3層出土。4106は、連歯下駄で、前端部が半円形というよりは、隅丸方形に近い形状をなし、後端部が半円形を呈するものである。歯幅は台幅と同じで、鼻緒孔は前壺を前歯の前で台の中央に、後ろ壺を後歯の前にあけている。長さ17.4cm、幅8.5cm、高さ3.2cmで、前歯にくらべ後歯の磨耗が著しい。第3層出土。4107は、平面形が隅丸方形を呈すと推定される連歯下駄である。歯幅は台幅と同じで、鼻緒孔は前壺を前歯の前で台の中央に、後ろ壺を後歯の前にあけている。現長12.6cm、同幅7.7cm、高さ5.0cm。第4層出土。

横櫛（第45図4108） 長さ9.8cm、高さ4.3cm、厚さ1.2cmの横櫛で、よく研磨されている。肩部には稜線が入り、断面形は圭頭形をなす。歯数は、80本。第3層出土。

独楽（第45図4117・4118） ともに砲弾形の独楽で、心持材を用い、下半部を円錐状に削り落としている。4117の上面は平坦に仕上げられている（刃物傷？がある）が、4118には断面「V」字形の切れ込みがある。4117は、径3.8cm、高さ5.2cmで、第3層出土。4118は、円錐部が一部欠損しているが、径3.0cm、高さ4.2cmで、第4層出土。

木錘（第45図4114） 4114は、短い棒状のもの中央部を抉り細めたもので、粗雑なつくりである。形状から、中央の抉り部に縄紐を巻いて錘ト史たものではないかと推定したが、確証はない。長さ14.1cm、幅4.0cm、厚さ3.8cm。第3層出土。

用途不明品（第38図4061・4062、第43図4094～4097、第45図4109～4113・4115・4116・4119）

4061は、鋸挽きによって切り落とされた丸太材の端部で、端部は手斧などによるハツリで整えられている。径14.7cm、長さ18.2cm。第4層出土。4062は、建築部材の切れ端かと思われるもので、ホゾ穴様の抉りなどがみられる。長さ20.2cm、幅10.8cm、厚さ4.5cm～3.4cm。第4層出土。4094は、長さ11.3cm、現幅4.0cm、厚さ0.3cmの板状品で、両端部は斜めに切り落とされ面取りされている。第3層出土。4095は、長さ10.6cm、現幅2.7cm、厚さ0.5cmの板状品で、中央やや端よりに2つの穿孔がみられ、そのうちの1孔には木釘の一部が遺存している。箱類の一部かとも思われるが判然としない。第3層出土。4096は、現長9.3cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmほどの細身の板状品である。穿孔が1箇所みられる。その形状から隅丸方形の折敷の隅部片を加工したものように見受けられるが判然としない。第2層出土。4097は、現長8.6cm、幅

1.4cm、厚さ 1.0cm ほどの断面方形の棒状品で、端部に幅 1.3cm・深さ 0.3cm の合わせ仕口様の挟りがあり、その中央に釘孔が 1 つ存する。何かの部材であろう。第 3 層出土。4109 は、平面形が隅丸方形を呈する板状品で、中央に径 0.8cm ほどの円孔がある。縁端部は角が丸く整形されている。紡車類かとも思われるが、判然としない。長さ 15.8cm、幅 10.6cm、厚さ 1.0cm。第 3 層出土。4110 は、長さ 19.8cm、幅 2.8cm、厚さ 1.1cm 前後の棒状品で、両側面は丸く仕上げられている。端部(上端)近くに釘孔が 1 箇所みられるが、貫通はしていない。第 3 層出土。4111・4112 は、大きさの相違はあるが、ともに長方形の一短辺(上端部)が「U」字形に挟られた形状をなし、下端部近くと「U」字形の挟りの下の位置に穿孔がある、という共通する特徴を持つものである。こうした特徴を有するものは、今回の調査ではかにも出土しており(57・171)、定型化した型であることを窺わせるものであるが、現段階では何の部品・部材であるのか詳らかにし得ない。111 は、長さ 15.8cm、幅 5.0cm、厚さ 0.6cm で、第 3 層出土。4112 は、長さ 20.5cm、幅 4.9cm、厚さ 0.8cm で、第 4 層出土。4113 は、断面形が歪な楕円形を呈す長さ 10.7cm、幅 2.5cm～1.5cm、厚さ 0.6～1.0cm ほどの棒状品である。幅狭な端部から 1.7cm の位置に穿孔がある。また広端部には、粗い切断痕があって、二次的に切断されているものとみられる。第 4 層出土。4115・4116 は、ともに平面形が台形をなし、断面が略(正)方形を呈すもので、中央に木釘が一本打たれている、という共通の特徴を持つものである。4115 は、上辺 4.0cm・下辺 8.6cm で、高さ 2.5cm、厚さ 2.5cm 前後。第 3 層出土。4116 は、上辺 5.3cm・下辺 8.6cm で、高さ 2.4cm、厚さ 2.4cm 前後。第 2 層出土。4119 は、長さ 7.4cm・幅 2.5cm・厚さ 1.3cm の板状品で、中央に一辺 0.8cm ほどの方孔が穿たれ、両端部には断面三角形の切れ込みがある。第 3 層出土。

97B 区 SD07 出土品

円形曲物容器(第 46 図 4122) 4122 は、円形曲物容器の底板である。径 7.6cm、厚さ 0.3cm で、周縁部近くに穿孔が 1 箇所みられる。第 2 層出土。

蓋?(第 46 図 4123) 4123 は、大形の円板状品で、その大きさ・厚さからみて円形曲物容器もしくは結桶の蓋板ではないかと思われるものである。現長 35.0cm・同幅 6.8cm(復元推定径 43.0cm 前後)、厚さ 0.6cm で、板目材。第 2 層出土。

柄杓(第 46 図 4120・4121・4124) 4120 は、曲物柄杓の身および柄の一部である。身である円形曲物容器は、径 7.5cm・厚さ 0.6cm の円形の底板に側板を一重に巻いて綴じ合せたもので、側板と底板の結合・固定は木釘(2 箇所確認)による。柄の装着は、側板の綴じ合せ部の横の上寄りの位置に横長の方孔をあけ、柄を通し、相対する側板の下寄りに小円孔をあけて柄の先端部を受け、さらに柄が側板に内接する位置に釘孔をあけ、長い木釘を差し込んで柄が抜けるのを防止するという方式をとっている。柄は断面方形の角材を削って尖らせたもので、身より外すなわち握り部を欠損している。全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。第 2 層出土。4121 は、径 9.0cm・高さ 8.6cm の曲物柄杓の身である。柄は失われている。側板の綴じ合せ部のすぐ横の上寄りの位置に柄を通す横長の方孔があき相対する側板の下寄りに柄の先端部を受けとめる小円孔がつけられている。側板と底板とは、3 箇所の木釘によって固定されている。底板の径 8.2cm、厚さ 0.7cm。第 2 層出土。4124 は、やや扁平な角材の角を丸く整形し、一方の端

部を削って尖らせた曲物柄杓の柄である。先端部から約12.5cmのところ径0.4cmほどの釘孔がある。長さ61.8cm、最大幅2.8cm・厚さ1.1cm。第2層出土。

結桶（第47図4125） 4125は、結桶の側板の一枚である。高さ10.3cm、上幅4.8cm、下幅4.4cm、厚さ0.7cm 前後の板目材もので、内面には削り整形痕が明瞭についている。内面底部には、底板のあたり面（厚さ1.2cmほど）が認められるが、外面の箍の痕跡は判然としない。口径24.2cmと推定復元される。第1層出土。

木栓（第47図4126・4127） 4126は、先端が鋸で水平に切り落とされた裁頭円錐形のもので、その形状から木栓と推定した。長さ4.8cm先端部幅3.4cm、基部径3.9cm。第1層出土。4127は、細身の裁頭円錐形のもので、側面のほぼ中央に貫通する穿孔がある。長さ7.1cm、先端部幅1.4cm、基部径1.8cm。第1層出土。

下駄（第47図4129・4130） 4129は、細身の差歯下駄で、前歯を欠損している。木裏を上面とするもので、細身の台の平面形は、両側が直線的で、前端部が半円形というよりは隅丸方形に近い形状をなし、後端部が半円形を呈する。台の下半部は、いわゆる舟底上を呈し、差歯の装着は、断面方形の溝を切り、その底部に方孔をあけホゾ孔としている。遺存する後歯でみ限り、歯の下辺幅は、台幅より幅広である。鼻緒孔は、前壺を前歯の前の台中央にあけ、後壺を後歯の前にあけている。長さ12.9cm、幅10.3cm、台幅7.5cm、高さ7.1cm。第1層出土。4130は、木裏を上面とする連歯下駄である。後端部を欠くが、前端部の形状からみて平面形は、隅丸方形を呈するものとみられる。鼻緒孔は、129と同じ配置をとる。台の上面には、しっかりと彫った「十」と刻まれているほか、斜行する刃物傷？がみられる。現長16.5cm、幅10.5cm、高さ6.6cm。第2層出土。

箸（第48図4131～4138） 多量に出土したが、完形品は少ない。いずれも小割りにした材を削って、細い棒状にしたもので、断面形は不定形な多角形を呈す。本と末の区別は判然としない。4131～4133は、それぞれ長さ25.7cm・最大径0.6cm、長さ25.5cm・最大径0.6cm、長さ25.6cm・最大径0.6cmで、ほぼ同形同大である。4134は、長さ24.5cm・最大径0.6cmで、上記4131～4133に比べいくぶん短い箸である。135は、長さ20.2cm・最大径0.5cmと小振りの箸である。4136～4138は、半分以上が折損したもので、断面形が、幾分扁平なものである。4136～4138は、それぞれ遺存長13.5cm・最大径0.6cm、遺存長12.5cm・最大径0.6cm、遺存長9.4cm・最大径0.6cmをはかる。

合子（第48図4139） 4139は、挽物の合子の身である。反り気味に直立する体部で、口縁部にはいわゆる印籠挟りをほどこしている。底部は、外縁部を僅かに突出（幅0.2cm、高さ0.1cm）させて上げ底風になっている。漆など塗布は認められない。径11.0cm、現高2.4cm（体部高2.1cm、口縁部現高0.3cm）。第1層出土。

用途不明品（第47図4128） 4128は、長さ8.8cm、幅2.0～2.8cm、厚さ1.5～1.8cmほどの棒状品である。長さの3分の1ほどが方柱状で、3分の2ほどが円（楕円）柱状を呈するものである。両端部は平らに切り落とされている。木栓類もしくは棒状品の切れ端かとおもわれる。第2層出土。

97B区SD12出土品

円形曲物容器（第48図4141） 4141は、円形曲物容器の底板である。小型品で側面は粗く削って整形している。釘孔は認められない。径5.6cm、厚さ0.3cm。第2層出土。

柄杓（第48図4140） 4140は、所謂曲物柄杓の身である。上半部を欠くが、側板の綴り合せ部近くに柄を差し込んだ方孔の一部と柄の先端を受け止めた小円孔が相対する側板に認められる。底板（径7.7cm・厚さ0.7cm）に側板を固定するために木釘が打ち込まれた形跡はない。径8.5cm、現高3.8cm。第3層出土。

下駄（第48図4143） 4143は、両側が直線をなし、前端と後端部が半円形を呈す連歯下駄である。木裏を上面としている。歯幅は、台幅と同じで、鼻緒孔は、前壺を前歯の前の台中央にあけ、後壺を後歯の前にあけている。前歯に比べ後歯の磨耗が進んでいる。台上面の後歯の位置に平行する2条の切り込み（刃物傷？）がみられる。長さ18.5cm、幅10.6cm、高さ5.9cm。第3層出土。

用途不明品（第48図4142） 4142は、細長の板状品で、端部の両隅は切り落とされて隅丸方形を呈する。穿孔等の格別な造作は認められない。現長27.9cm、幅7.1cm、厚さ0.5cm。第3層出土。

97B区SD04出土品

楔（第49図4144） 4144は、楔の断片である。板目材を粗く削って整形したものである。長さ6.8cm、現幅1.1cm、最大厚1.1cm。

96E区SD13出土品

錐柄（第49図4145） 4145は、一端の幅が狭まる細身の丸棒状品で、広端部に断面方形の錐身の茎孔とみられる四角錐状の削形がみられることから、錐の柄と推定した。ほぼ完存品で、長さ14.5cm、広端部の径1.0cm。第3層出土。

96E区SE01出土品

曲物柄杓の身である4146のほかに、底板を欠く径40cm・高さ5cm前後の円形曲物容器の側板が出土したが、遺存状態が悪く、現場での取り上げ後に実測し難い状況になってしまった。

柄杓（第49図4146） 4146は、常滑窯産の壺内から出土した所謂曲物柄杓の身である。底板（径6.7cm・厚さ0.7cm）に側板を固定するために木釘が打ち込まれた形跡はない。側板の綴り合せ部近くの上端部に柄を差し込むための縦1.1cm・幅1.4cmの断面方形の切り込みを入れ、柄相対する側板の下寄りの位置に先端を受け止めた小円孔が認められる。推定される柄の角度はかなり急なもので、側板の側面に方孔を穿って柄を差し込むという一般的なものではなく、上端部に切れ込みを入れ柄を差し込むという装着方法をとったのは、おそらくはこの角度を確保するための工夫でないかと推測する。径7.4cm、高6.1cm。

96E区 SE02 出土品

円形曲物容器（第49図4147） 4147は、円形曲物容器の底板である。中央付近に大・小2つの穿孔があるが、側面に釘孔は認められない。径7.5cm、厚さ0.5cm。第2層出土。

96E区 SE03 出土品

用途不明品（第49図4148） 4148は、現長43.8cm・幅7.7cm・厚さ0.7cmの細長の棒状品である。下面は断面となっており、欠損している。その大きさからみて建築部材の可能性はある。

96E区 SE04 出土品

円形曲物容器（第49図4149） 4149は、径18.5cmで側板が高さ2.3cmほど遺存する円形曲物容器である。側板と底板とは木釘によって固定されている。側板の上半部は、欠損しているものとみだが、遺存する側板の上端部は揃っており、もとよりこの高さであった可能性もある。底板は、径17.8cm・厚さ0.5cmで、三つに割れておりそれぞれ2本ずつの両端を尖らせた木釘で継いでいる。こうした底板を割って継ぐことは結桶の底板に一般的な技法であり、曲物の底板としては例数の少ないものである。

蓋?（第49図4150） 4150は、一辺が15.4cm・厚さ0.9cmほどの隅丸正方形の板状品で、上面の周縁を斜めに切り落とし廂状にしている。形状からみて蓋板ではないかとしたが、確証はない。裏面の一辺の縁辺には蓋としては不自然な段差が認められ、何かほかの部材の転用品である可能性がある。

97A区 SE02 出土品

結桶（第50図4152・4153） 4152は、結桶の側板の一枚である。長さ16.5cm、上幅7.6cm、厚さ1.1cmほどのもので、柾目材を用いている。内面の底板のあたり面は判然としないが、外面には箍の痕跡とみられる帯状の変色部分が二段認められる。4153は、径26.4cm・厚さ1.7cmと、厚手で大型なこと、さらに分割した底板を継ぐためとみられる釘孔が両側の断面にあることなどから結桶の底板と推定するものである。

折敷（第50図4154・4155） 4155は、隅丸方形の折敷の底板で、隅部のやや内側に2孔一対の穿孔がある。柾目材で、現長30.0cm、同幅3.5cm、厚さ0.3cm。4154は、折敷の側板である。曲物でなく組み合わせのもので、両端に「L」字形の切欠きを入れてホゾをつくり出している。端部は斜めに切り落とされており、組み合う側板は直交するのではなく、斜めに組み合うことが知られる。したがって側板の平面形は、四隅に面をもつ隅切方形を呈することが窺われる。下端部の縁辺に沿って4箇所釘孔があり、側板は底板の側面に木釘で固定されたものと推定される。長さ29.0cm、高さ2.8cm、厚さ0.8cm。

97A区 SE03 出土品

結桶（第50図4156） 4156は、結桶の側板の一枚である。長さ43.7cm、幅6.0cm、厚さ1.9cm前後の細身のものである。上端部、内外両面から削られ尖っている。こうした加工は、清洲城

下町遺跡（愛知県西春日井郡清洲町）等調査例からすれば、井戸側の最下段として用いられた結桶の口縁部（口縁部を下にして設置されるため）に特徴的にみられるものであり、4156も井戸側として用いられた結桶の残欠と推定する。

97B区 SE01 出土品

円形曲物容器（第51図4158～4160） 4158は、上半部を欠損する円形曲物容器である。木釘を3箇所打ち込んで底板と側板を結合・固定している。小型品（径7.3cm・現高3.0cm）であり、曲物柄杓の身の可能性もある。底板の径6.8cm、厚さ0.7cm。158・159は、円形曲物容器の底板である。4159は、径11.1cm・厚さ0.6cmの底板で、遺存状態が悪いためか側面の釘孔は認められない。4160は、径11.7cm・厚さ0.8cmの完形の底板である。側面に6箇所の釘孔がみられる。

柄杓（第51図4157） 4157は、曲物柄杓の身である。上半部を欠くが、側板に穿たれた円孔から身と推定する。径3.1cm、現高4.4cm。側板と底板の結合・固定に木釘が用いられた形跡はなく、底板の両端近くに縫い込まれた樺皮紐と側板との関係も判然としない。樺皮紐が縫い込まれた位置は、柄の装着位置の下に概ね合致することから、樺皮紐の縫い込みは柄の装着と関連するものかも知れない。底板の径11.4cm、厚さ0.7cm。

箱？（第51図4161） 4161は、長さ26.4cm・幅1.9cm・厚さ0.8cmの細長の板状品で、一方の端部に穿孔が1つみられる。用途不明なものであるが、一側面に釘孔が5箇所みられることから組合せの箱の側板もしくは底板の転用品ではないかと推定する。

用途不明品（第51図4162） 4162は、長さ5.8cm・厚さ2.8cmほどの鉤の手状のもので、何かの部材もしくは切れ端とみられる。

97B区 SE02 出土品

円形曲物容器（第52図4163） 4163は、円形曲物容器の底板である。径17.2cm・厚さ0.4cmで、周縁部に樺皮紐の縫い込みが2箇所あるが、相対する位置ではない。底板としたが薄手であり、蓋板の可能性も否定できない。

結桶（第52図4164） 4164は、井戸側の最下段（正位で設置されていたことから水溜めの可能性もある）に用いられていた結桶である。口径49.0cm、高さ41.3cmで、14枚の側板からなる。側板の一枚は、高さ41.7cm、上幅11.5cm・下幅10.3cm、厚さ1.1cmほどのもので、14枚中の5枚が板目材で、9枚が柾目材である。外面に箍が6段（下4段は2段2組とみるべきか）めぐらされているが、箍そのものは遺存状態が悪く現場からの取り上げが不能であった。底板は、井戸側として転用された際に取り外され廃棄されたとみられ、側板の内面に幅1.7cmほどのあたり面が確認され、径41.1cm・厚さ1.7cmほどの底板の存在が推定されるにとどまる。

97B区 SE03 出土品

円形曲物容器（第52図4165） 4165は、円形曲物容器の底板である。薄手で、側面に釘孔が1箇所みられる。径18.6cm・厚さ0.4cm。

97B 区 SE04 出土品

円形曲物容器（第53図4167・4168） 4167は、径8.5cm、高さ2.9cmほどの円形曲物容器で、側板の綴じ合せ部分が欠損している。側板と底板を結合・固定するための釘孔は認められない。底板の径7.8cm、厚さ0.7cm。168は、径4.8cm（内法径3.3cm）・現高3.6cmのきわめて小さなものである。下端部を欠損する。側板は、板材を裂いてほかの板材を差し込むなど複雑な巻き方をしている。綴じ合せ部には、4つの「円孔」がみられ、薄く平らな樺皮紐による通有な綴じ合せではないことが窺われる。円形曲物容器としたが、小型品であることおよび特異な側板の綴じ合せなどからみて、ほかの用途のものの可能性もある。

柄杓（第53図4166） 4166は、現長17.0cm、幅4.2cm、厚さ2.1cmの細長のもので、柄杓の身（円形曲物もしくは結桶など）の内側で柄の先端を受け止めるための部品とみられるものである。中央やや下寄りに斜め（柄の装着角度）に穿孔されたえの先端部を差し込む円孔がある。上端部は両側から削られたくびれ部があり、おそらくは樺皮紐を巻いて身の側板に固定したものと推定される。下端部の小口面は二次的に鋸で切断されたとみられ、底板に差し込む突起等の有無については不明である。

97B 区 SE05 出土品

用途不明品（第54図4171） 4171は、半分ほどが欠損しているが、上端部が「U」字形に挟まれる板状品である。推定される中心部あたり三段にわたって2孔一対などの穿孔があり、4057・4111・4112などと類似する形態のものである。長さ19.7cm、現幅5.6cm、厚さ0.6cm。

97B 区 SE06 出土品

円形曲物容器（第53図4169・4170） 4169は、円形曲物容器の底板である。中央で2つに割れており、両端を尖らせた木釘で継がれている。側面に釘孔は認められない。径17.0cm・厚さ0.6cm。4170は、径17.0cm・厚さ0.7cmほどの円形曲物容器の底板である。側面に釘孔は認められない。

97B 区 SE07 出土品

井戸側として転用された結桶および円形曲物とその周囲に配されていた板材類（箱物部材・用途不明品）がある。

円形曲物容器（第55図4178・4179） 4178・4179は、ともに底板を取り外して井戸側として用いられていたものである。第54図の結桶の上に4179が倒立して積まれ、その上に4178が正位で積まれていた。4178は、径36.4cm・高さ10.3cmの円形曲物容器で、口縁部に一重の籬がめぐり、側板は二重に巻かれたもので、ともに1箇所ずつの一行綴じで綴じ合せられている。底板を欠くが、底板の下端部外周に底板を固定するための釘孔が総計22箇所みられる。底板の推定径35.2cm。4179は、4178とほぼ同形同大の円形曲物容器（径36.0cm・高11.4cm）である。ただ二重の側板の綴じ合せは、外周が一行綴じで、内周が二行綴じとみられ、底板（推定径34.8cm）を固定した釘孔は総計で19箇所が確認できる。

結桶（第56図4181・4182） 4181は、井戸側の最下段（正位で設置されていたことから水溜めの可能性もある）に用いられていた口径38.2cm、高さ27.9cmの結桶である。14枚の側板からなるもので、側板の一枚は、高さ27.7cm、上幅8.4cm・下幅7.5cm、厚さ1.0cmほどのもので、14枚中の8枚が板目材、9枚が柾目材からなる。この内の側板の一枚（182）は、長さ21.0cmと短く、上端に側板もしくは何らかの部材を継ぐための釘孔が2孔みられる。外面に籬の痕跡が2段認められるが、ともに幅広なものである。底板は、井戸側として転用された際に取り外され廃棄されたとみられるが、側板の内面に残るあたり面から、径31.4cm・厚さ2.4cmほどの底板の存在が推定できる。

折敷（第54図4175） 4175は、長さ29.0cm、現幅6.8cm、厚さ0.2cmの薄い板状品である。旧状をとどめる側辺（上端）からすこし内側に2孔一対の穿孔があり、折敷の底板と推定した。

箱？（第54図4176） 4176は、両端部に「L」字形の切欠きを入れ出ホゾをつくり出しており、組み合わせの箱の側板もしくは木柵の側板と考えられるものである。長さ55.5cm・高さ6.9cm・厚さ1.4cm。両端の出ホゾは、2.3×2.5cmおよび3.0×3.1cmほどで、それぞれのかみ合わせ部の面に釘孔がみられる。なお、箱の側板とした場合、下辺に釘孔などがなく、底板の固定方法が問題となる。木柵の側板とするのが穏当であろうか。

用途不明品（第54図4172～4174・4177 第55図4180） これらは、すべて板状品である。4172は柾目材で、平滑に整形されているが、それ以外のものはいずれも板目材で、整形は粗雑である。4172は、現長16.3cm・幅7.0cm・厚さ0.2cmで、箱もしくは折敷類の側板・底板の可能性がある。4173は、現長30.3cm・幅4.7cm・厚さ0.3cm。4174は、現長37.3cm・幅9.5cm・厚さ0.6cm。4177は、現長65.6cm・幅6.7cm・厚さ0.6cm。4180は、現長79.4cm・幅11.8cm・厚さ0.6cm。

97A区SK09出土品

下駄（第57図4183） 4183は、平面形が長方形を呈する連歯下駄で、後半部の4分の1が遺存する。歯幅は台幅と同幅で、木裏を上面としている。現長11.0cm、同幅5.6cm、高さ2.4cm。

97A区SK10出土品

円形曲物容器（第57図4184～4186） いずれも円形曲物容器の底板である。4184は、径11.8cm・厚さ0.6cmほどの底板で、側面には釘孔が1箇所みられる。第2層出土。4185は、径7.8cm・厚さ0.8cmほどの底板で、全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。側面の釘孔は2箇所みられる。第2層出土。4186は、径7.6cm・厚さ0.7cmほどの底板で、全面に柿渋様の黒色塗料の塗布が認められる。側面に釘孔はみられないが、板面の中央付近に小孔の穿孔があるが、これは上記黒色塗料の塗布ごのものである。第2層出土。

結桶（第57図4189） 4189は、結桶の側板の一枚である。長さ21.4cm・現幅7.1cm・厚さ0.5cm前後のもので、板目材を用いている。外面に斜行する刃物傷がある。第3層出土。

柄杓（第57図4187・4190） 4187は、角を丸くした角材の一端を削って尖らせたもので、その形状から柄杓の柄の先端部と推定する。現長14.8cm、最大幅2.2cm、厚さ1.6cm。第2層出土。4190は、柄杓の身（大きさからみておそらくは円形曲物容器）の内側に設置されて、柄の先端

部を受け止めるぶひんとみられるものである。中央部には柄の縁端を差し込むための斜めに(柄の装着角度)穿孔された円孔があり、下端部には底板に固定するための小突起(長さ0.4cm)が、上端部には樺皮紐などを巻いて側板に固定するためのくびれ状の挟りがみられる。長さ7.8cm、幅2.8cm、厚さ1.4cm。第2層出土。

箸(第57図4188) 4188は、小割りにした材を削って、細い棒状にしたもので、断面形は不定形な多角形を呈す。両端を折損する。遺存長20.5cm、最大径0.9cm。第2層出土。

独楽(第57図4191) 4191は、砲弾形の独楽と推定するが、遺存状態が悪く、円錐部の形状が判然としないきらいがある。心持材を用いており、上面は平坦は平坦に仕上げられている。径2.8cm前後・高さ4.8cm。第2層出土。

97A区SK21出土品

円形曲物容器(第58図4194) 4194は、厚手で側財のあたり面が幅広なこと、および側を固定したとみられる釘孔が大きさからみて、円形刳物容器の底板ではないかと推定するものである。径18.9cm、高さ2.8cmで、内面の外縁部が断面L字形(幅1.6cm深さ1.6cm)に切り落とされ、側板の受け部となっている。木釘を底外面から打ち込み側板を固定している。底板は、三分割されており、それぞれ両端を尖らせた木釘で継いでいる。ただ何故か判然としないが、外周は、円形とはならず継ぎ面で食い違いをなしている。また底外面の仕上げはともかくとして、受け部は粗雑な仕上げとなっている。

97A区SK24出土品

円形曲物容器(第58図4195) 4195は、円形曲物容器の底板で、径12.0cm・厚さ0.4cm。遺存状態が悪く、側面の釘孔の有無は判然としない。

箱(第58図4196) 4196は、組み合わせの箱の側板である。両端に「L」字形の切欠きを入れ出ホゾをつくり出している。幅41.5cm、高さ15.9cm、厚さ1.5cm前後で、両端部には、側板を組み合わせた後に木釘で固定した際の釘孔がみられる。また下端部の端面には底板をとめた釘孔が8箇所みられる。

97A区SK25出土品

折敷(第57図4193) 4193は、現長15.5cm、同幅3.7cm、厚さ0.4cmの長方形に近い隅丸方形の板状品の一部である。側縁近くに穿孔が2箇所みられ、そのうちの短辺の穿孔が、縁から幾分内側に入っていることから、折敷の底板と推定した。

箸(第57図4192) 4192は、小割りにした材を削って、細い棒状にしたもので、断面形は不定形な多角形を呈す。両端を折損する。遺存長11.0cm、最大径0.5cm。第2層出土。

97A区SK376出土品

下駄(第58図4197) 4197は、両側が直線的で、前端・後端部が半円形をなす細みの連歯下駄である。歯幅は台幅と同大で、鼻緒孔は、前壺を前歯の前で台の中央に、後壺を後歯の前にあけている。長さ20.3cm、幅8.8cm、厚さ8.6cm。

柱根と礎板

柱根 14点以上出土した。一部しか図示し得ないが、いずれも柱穴と見られる土坑中より出土したもので、地中に埋め込まれた部分である。遺存状態が悪いものが多く、柱径・その仕上げ技法などについて明らかにし得るものはすくない。確認し得るものからすれば、いずれも下端の小口面は、手斧削りで整えられており、のこぎりで切断したものは見られない（第59図4198）。樹種について調査し得たのは14本で、アカマツ7本、クリ3本、アカガシ亜属1本、キハダ1本、カキ1本という結果であった（第3表）。アカマツそしてクリの順で比率が高いが、こうした用材のあり方が一般的であるのか否かは、近隣の調査例がなく、いましばらくは資料の蓄積を俟ちたい。個々の出土遺構、計測値、樹種、推定される年代などについては、表示するにとどめる。その際に柱穴個々の年代については決め難いものが殆どで、ここでは、伴出遺物の年代などから推定される年代を可能な限り示した。

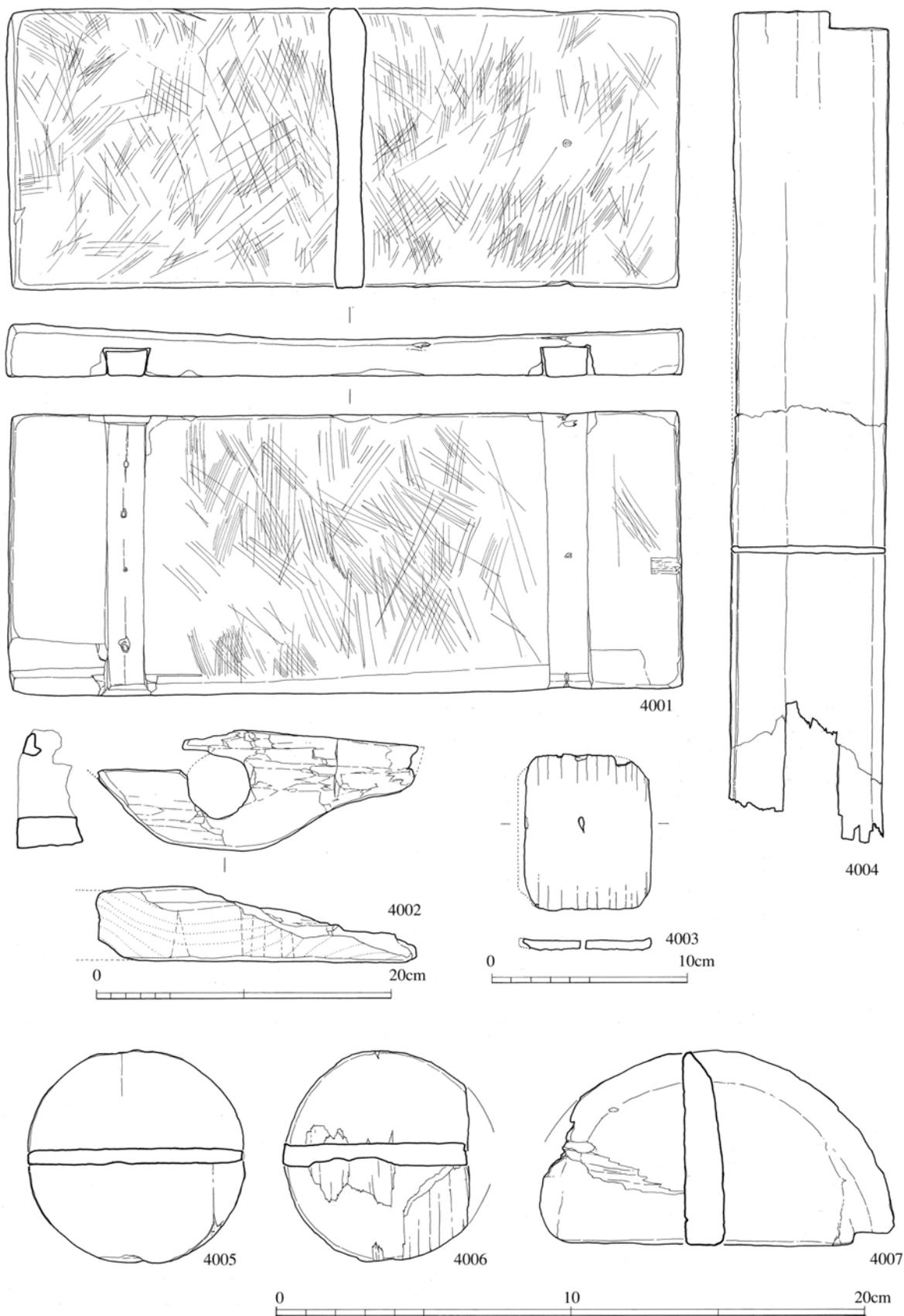
礎板 柱穴の底に敷かれた礎盤は4遺構から7点出土した。図示していないが、いずれも不整形な板状の割り材である。樹種は、調査した7本のうち、アカマツ2本、クリ2本という結果であった（第4表）。柱根と同様にアカマツ・クリの比率が高い。個々の出土遺構、計測値、樹種、推定される年代などについては、表示するにとどめる。

調査区	Gr.	遺構番号	部位	樹種	備考
北調査区	96D区 IXD 4 e	SK026	柱根	アカガシ亜属	
南調査区	96E区 IXB 10 t	SK254	柱根	アカマツ	
	IXC 16 f	SK263	柱根	クリ	
	IXC 17 e	SK264	柱根	アカマツ	
	97A区 IXC 17 f	SK036	柱根	マツ属複雑管束亜属	第59図4198
	IXC 17 f	SK077	柱根	アカマツ	
	IXC 17 g	SK112	柱根	アカマツ	
	IXC 15 j	SK220	柱根	アカマツ	
	IXC 13 j	SK297	柱根	アカマツ	
	IXC 13 j	SK299	柱根	クリ	
	IXC 16 f	SK320	柱根	クリ	
	IXC 17 g	SK332	柱根	キハダ	
	IXC 20 j	SK73	柱根	アカマツ	
	IXC 19 h	SK375	柱根	カキ	
	97B区 IXC 18 l	SD01第4層	柱根?	アカマツ	第38図4061

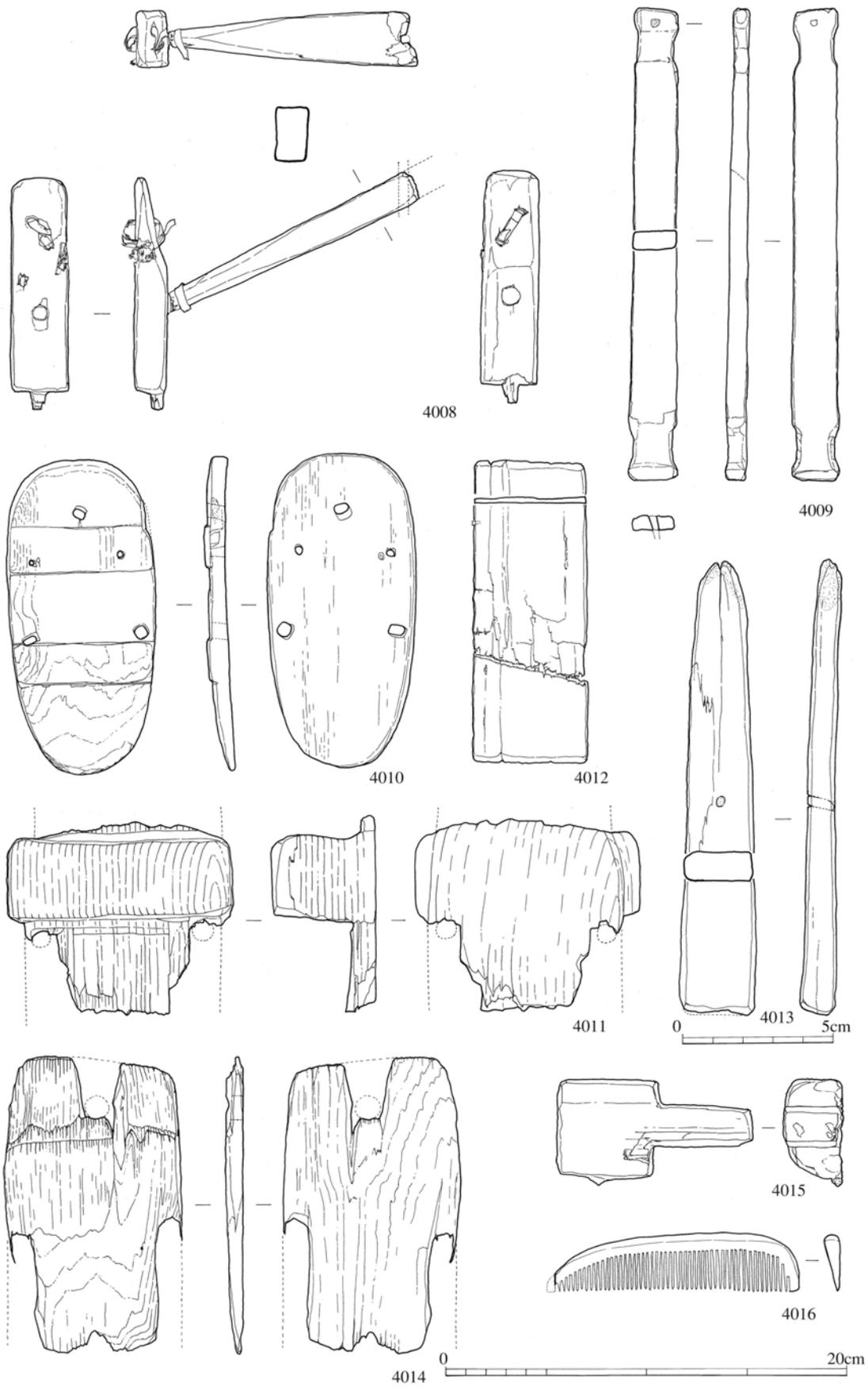
第3表 柱根一覧表

調査区	Gr.	遺構番号	部位	樹種	備考
南調査区	96E区 IXC 17 e	SK199	礎板	アカマツ	
	IXC 17 e	SK208	礎板	アカマツ	
	97A区 IXC 17 f	SK036	礎板1		
			礎板2		
			礎板3		
	IXC 18 e	SK039	礎板1	クリ	
礎板2			クリ		

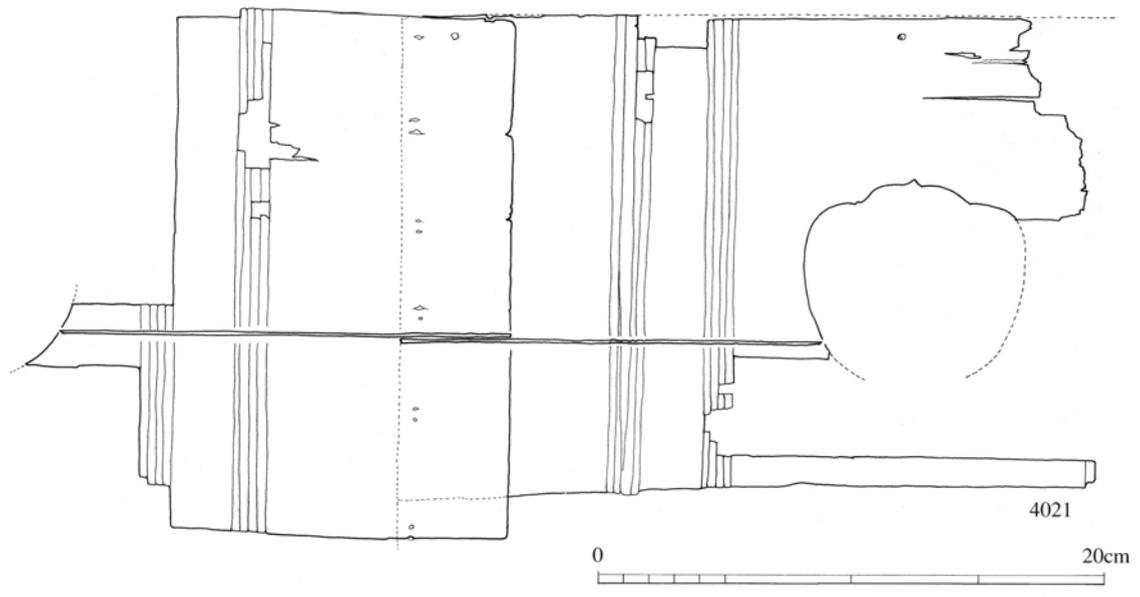
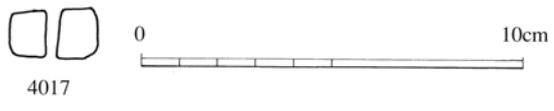
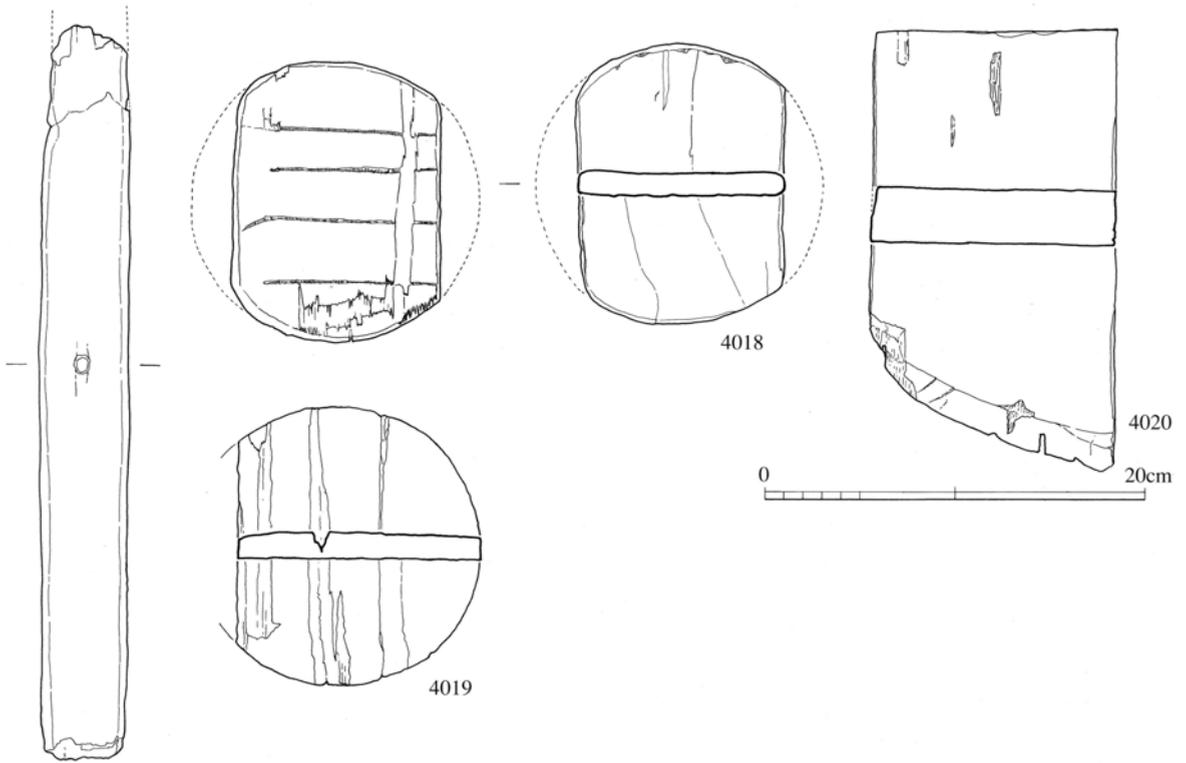
第4表 礎板一覧表



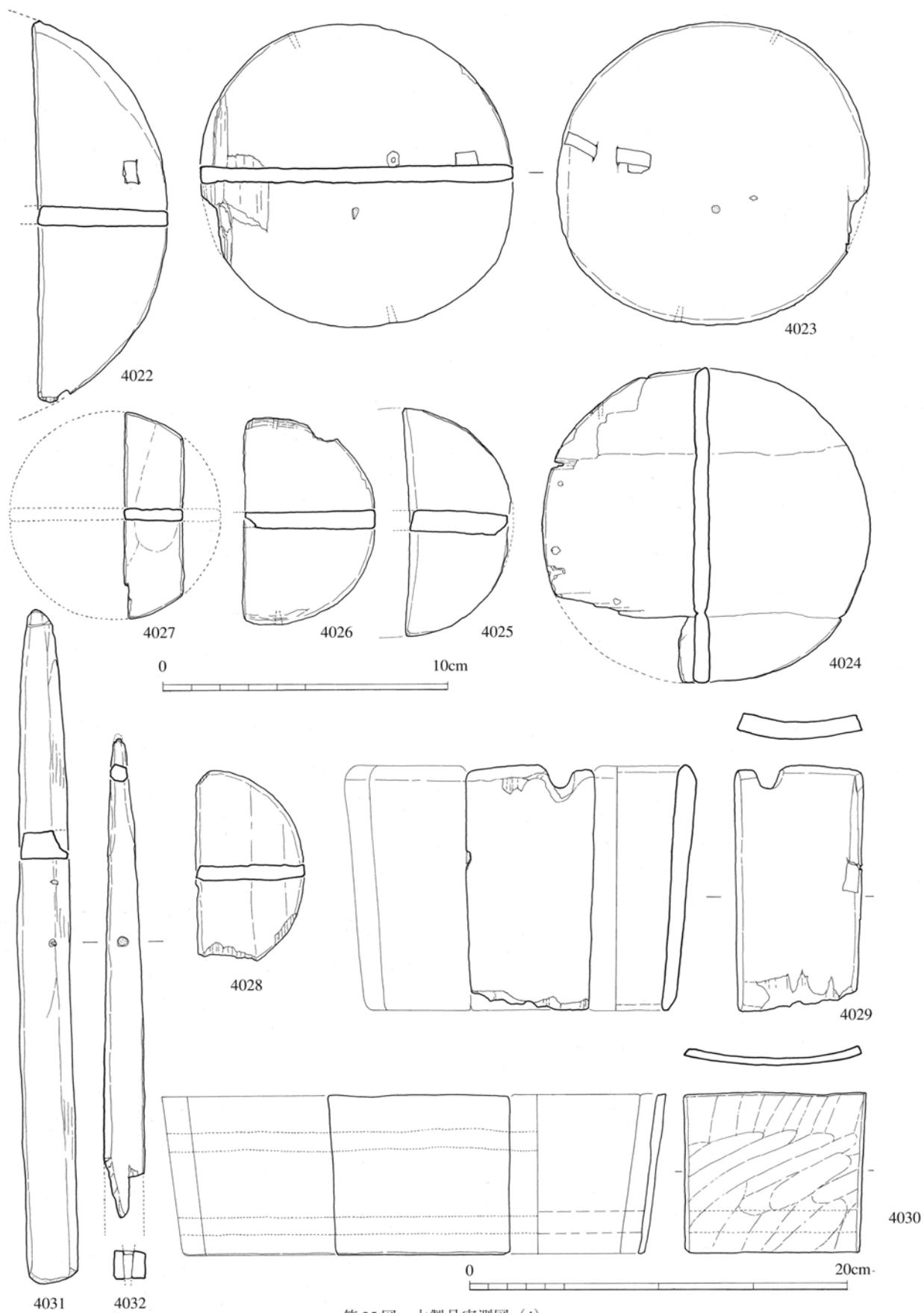
第32図 木製品実測図(1)



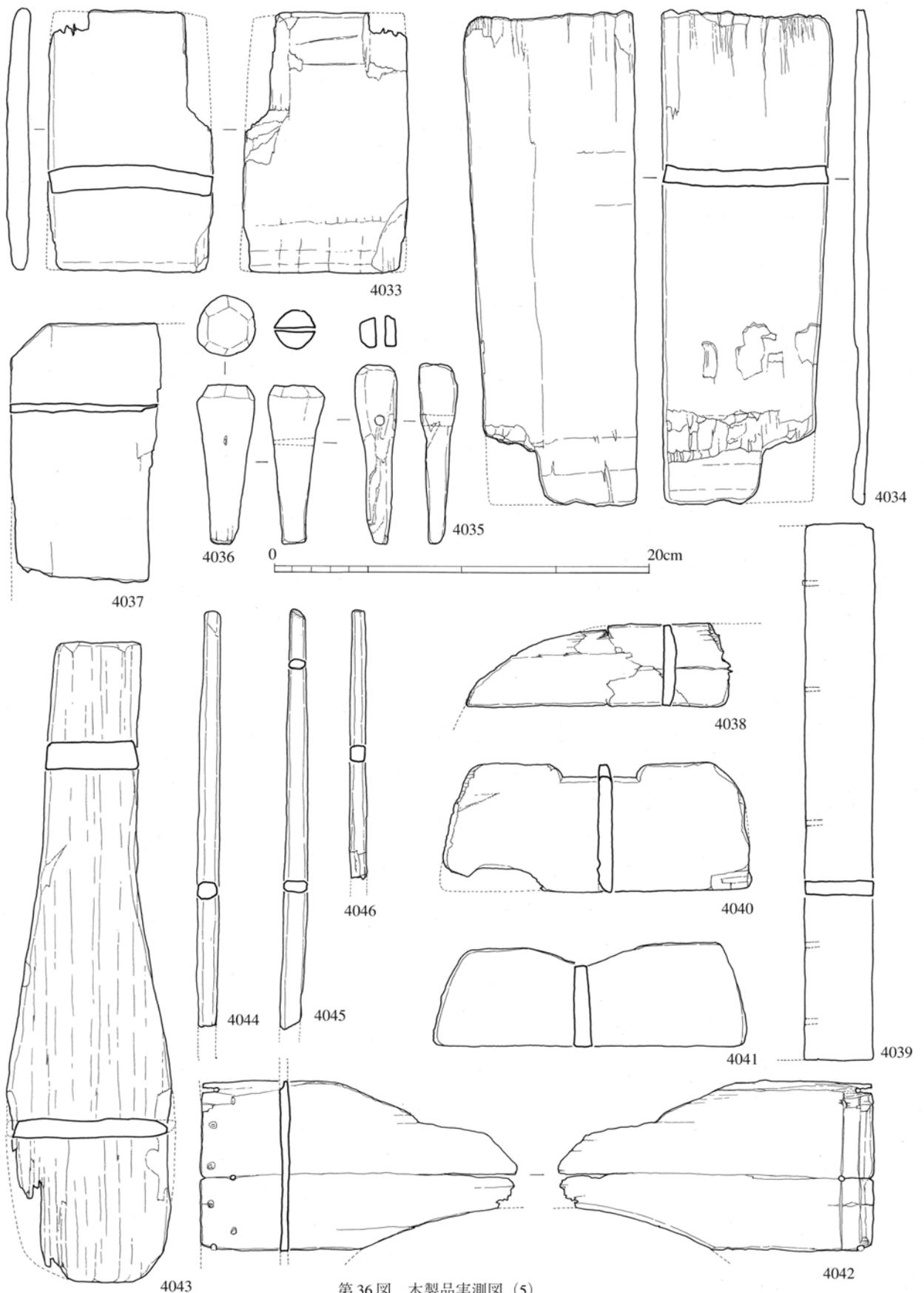
第33图 木製品実測図(2)



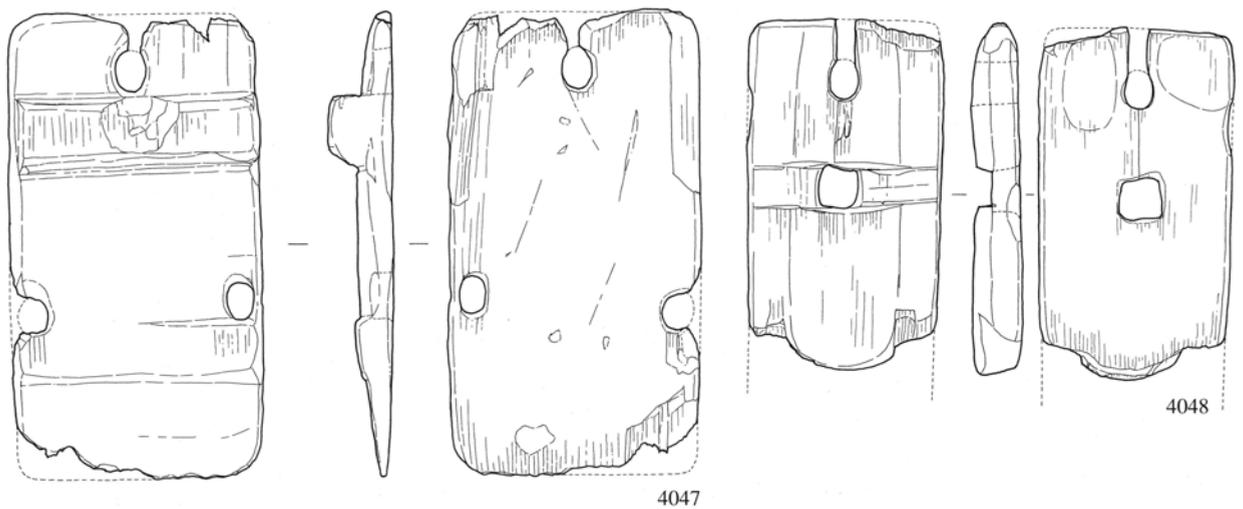
第34図 木製品実測図(3)



第 35 图 木製品実測図 (4)

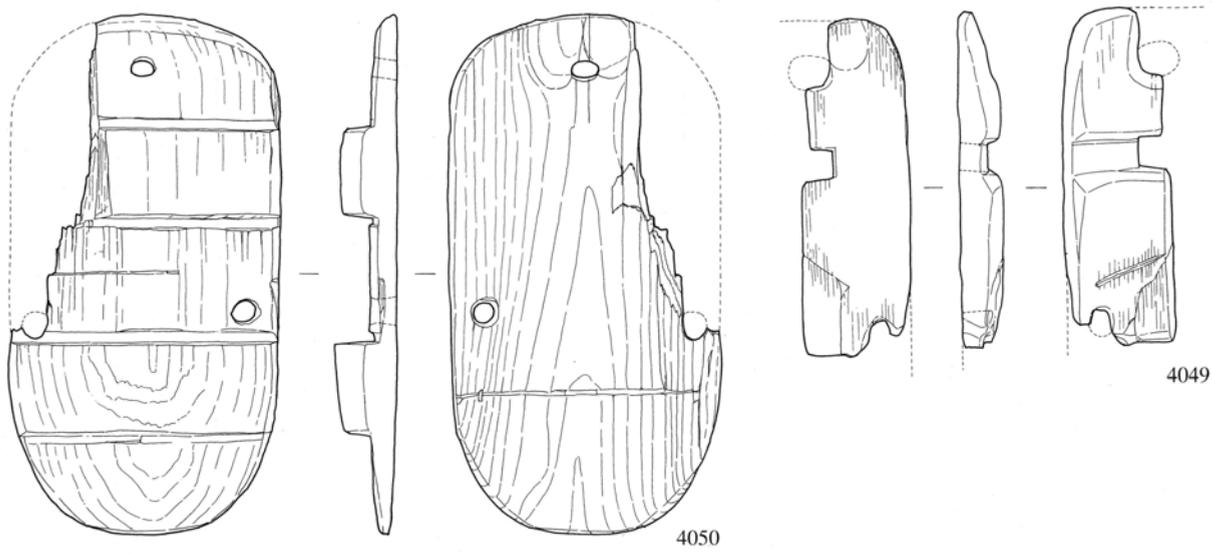


第36图 木製品実測图 (5)



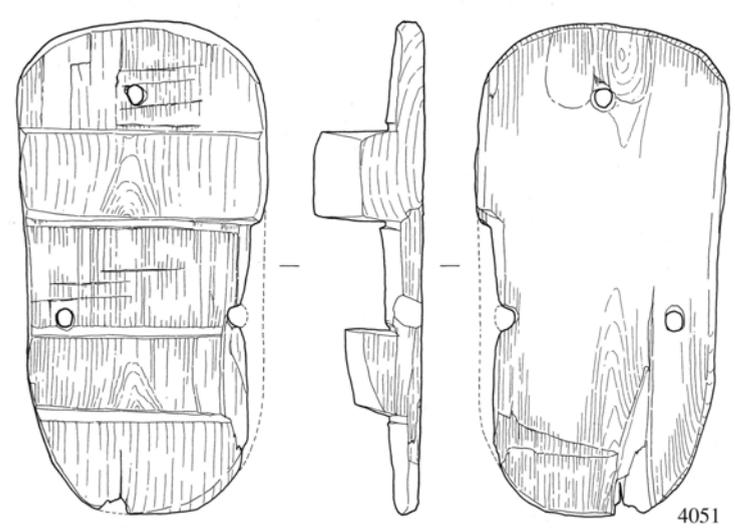
4047

4048



4050

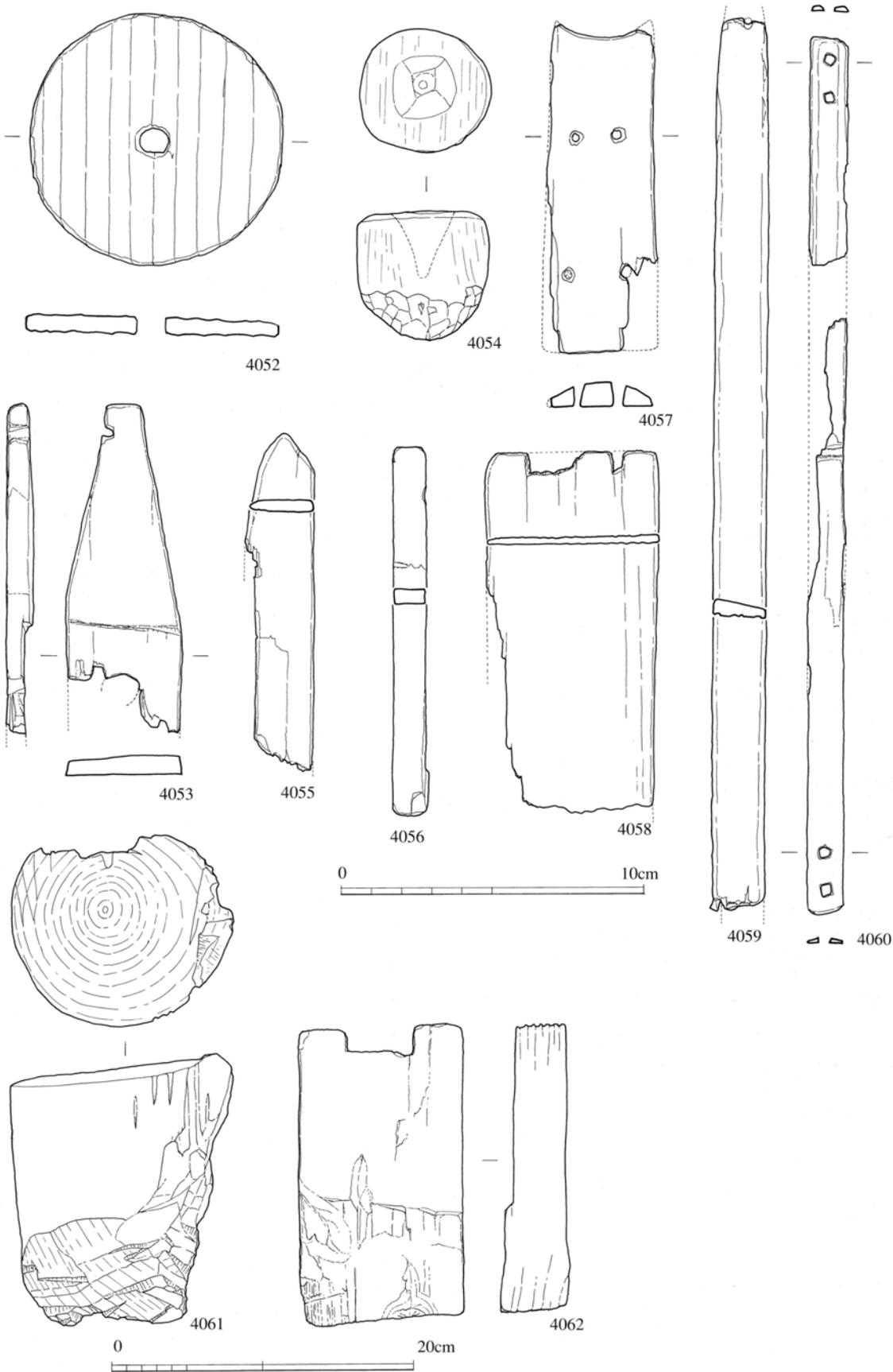
4049



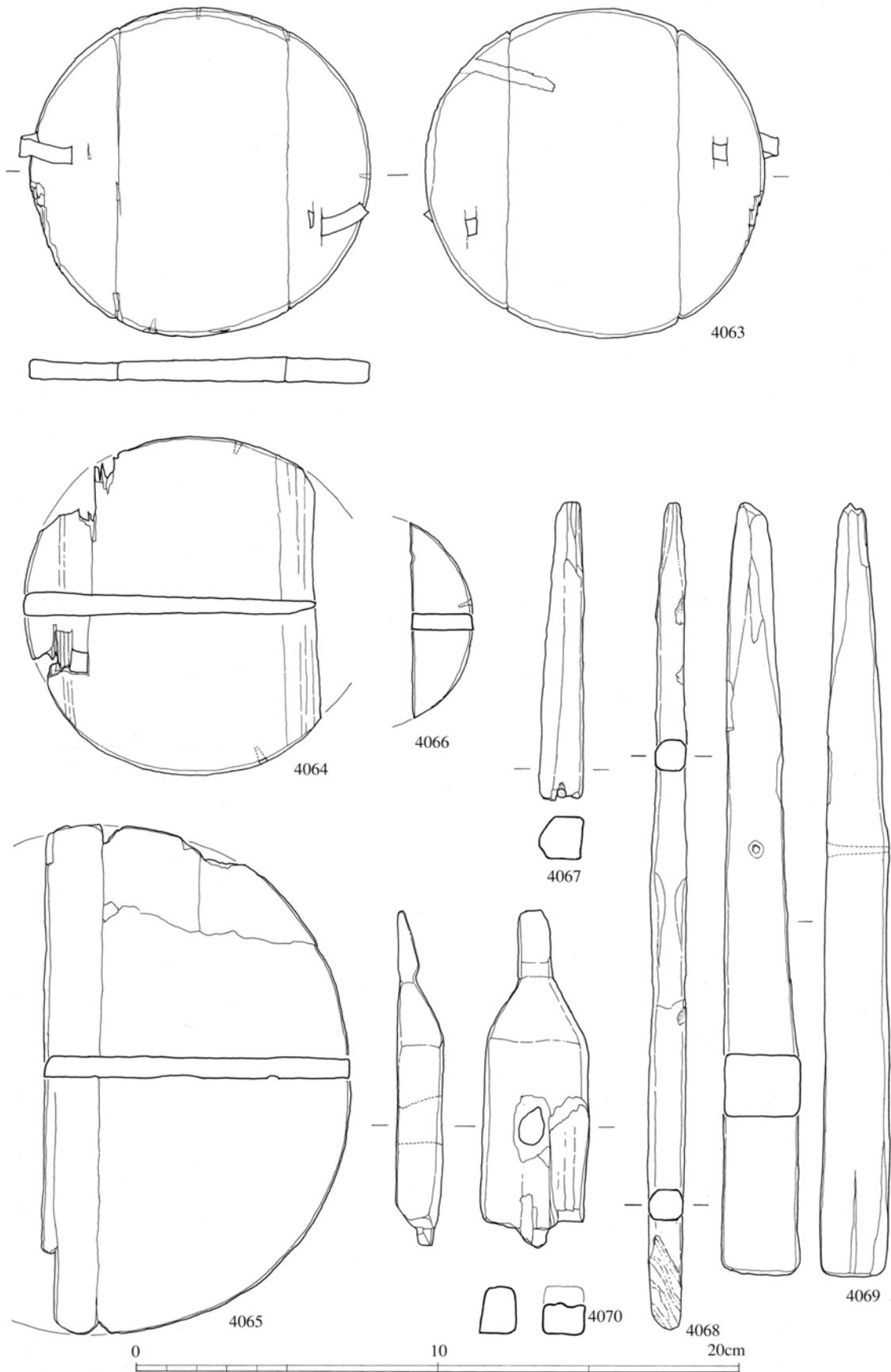
4051



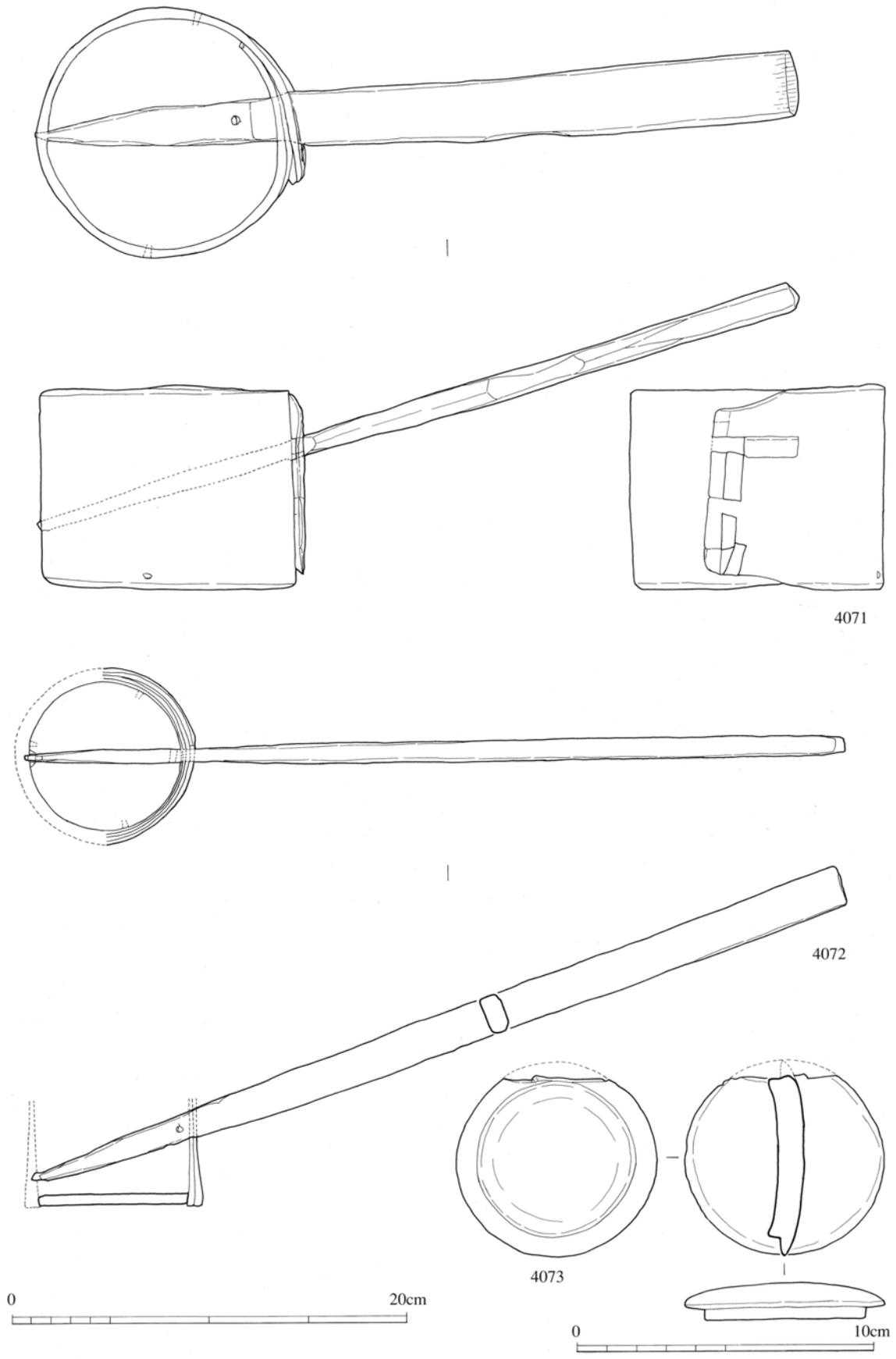
第37图 木製品実測图(6)



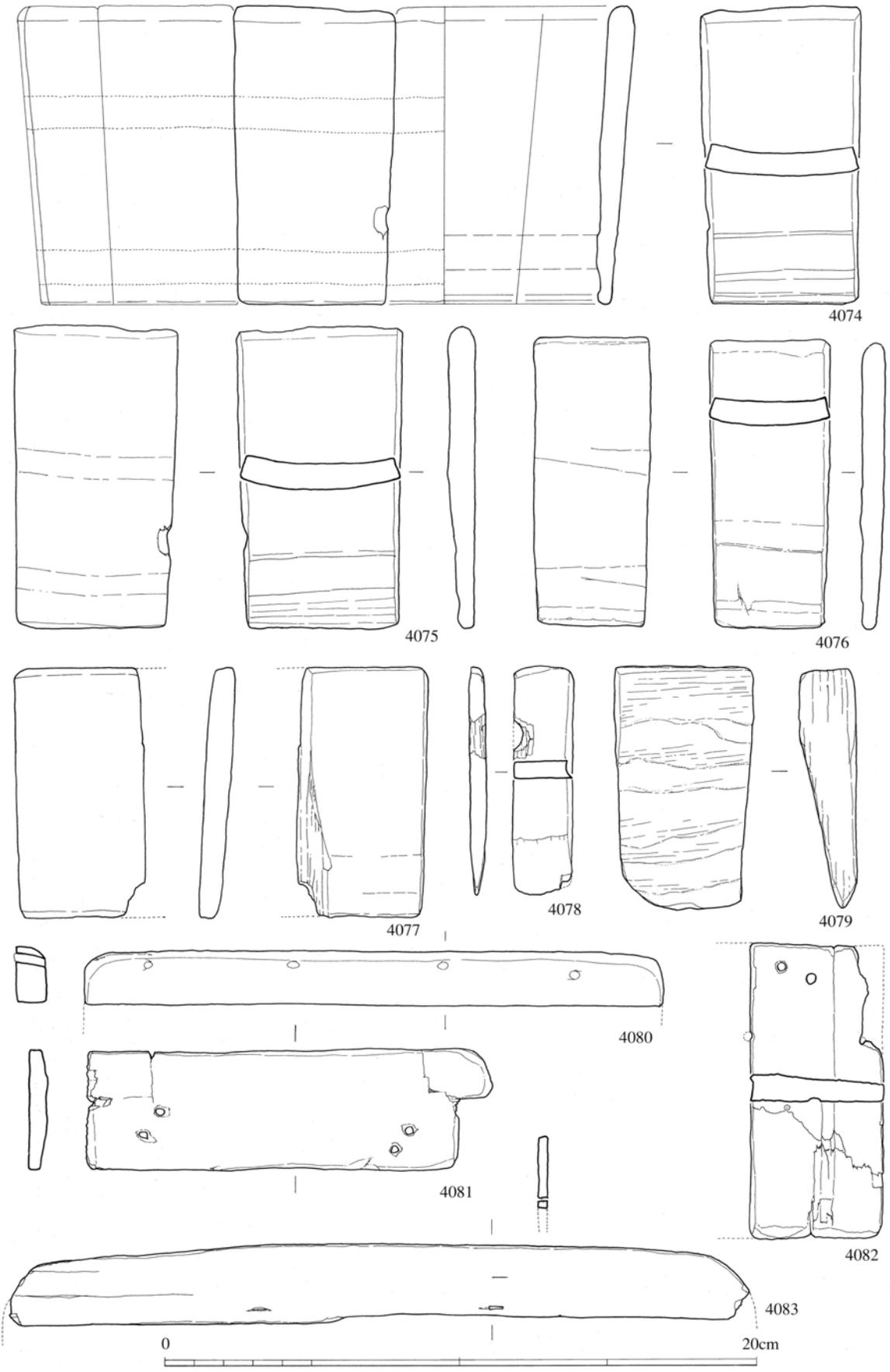
第38図 木製品実測図(7)



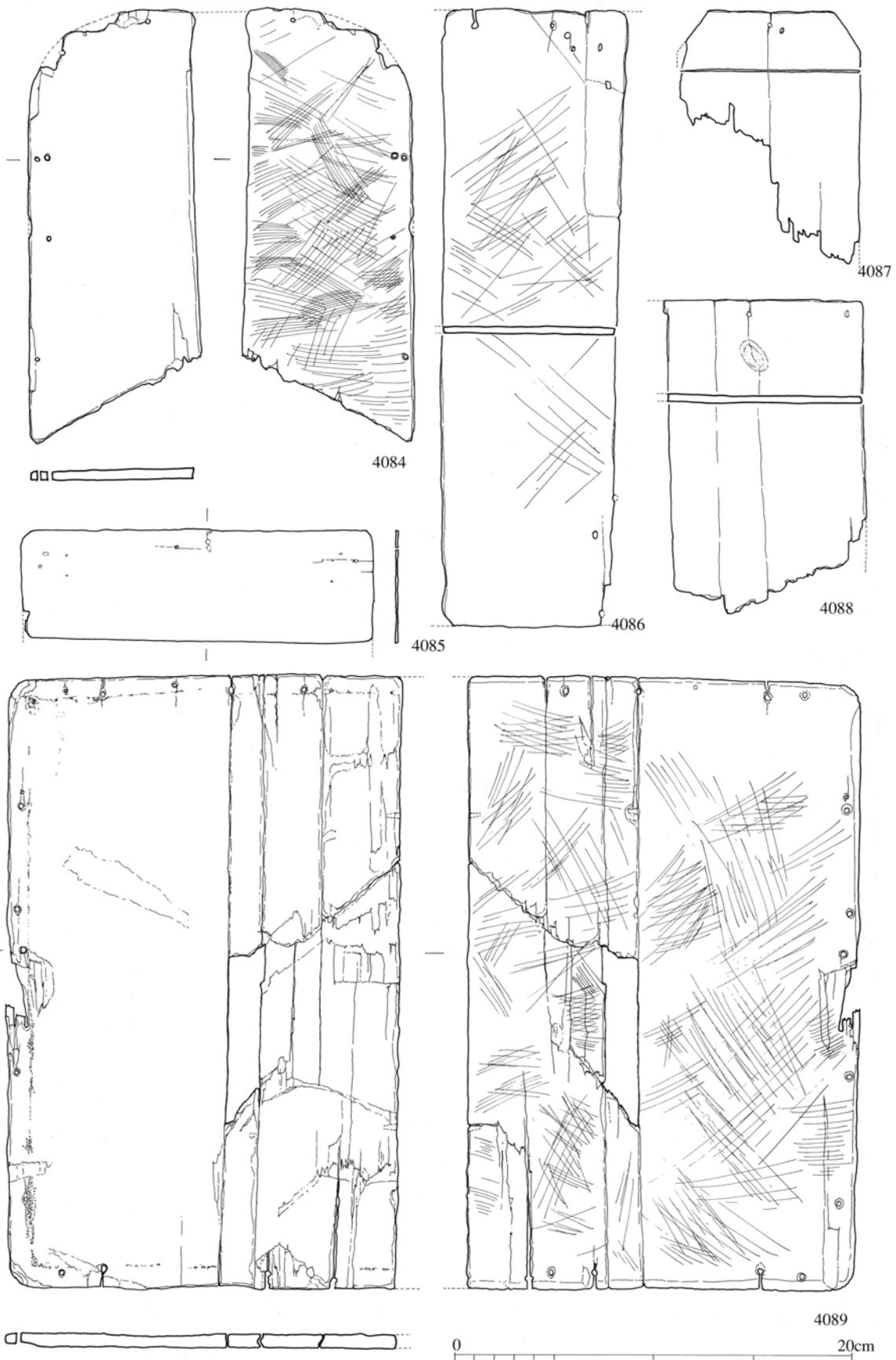
第39图 木製品実測图(8)



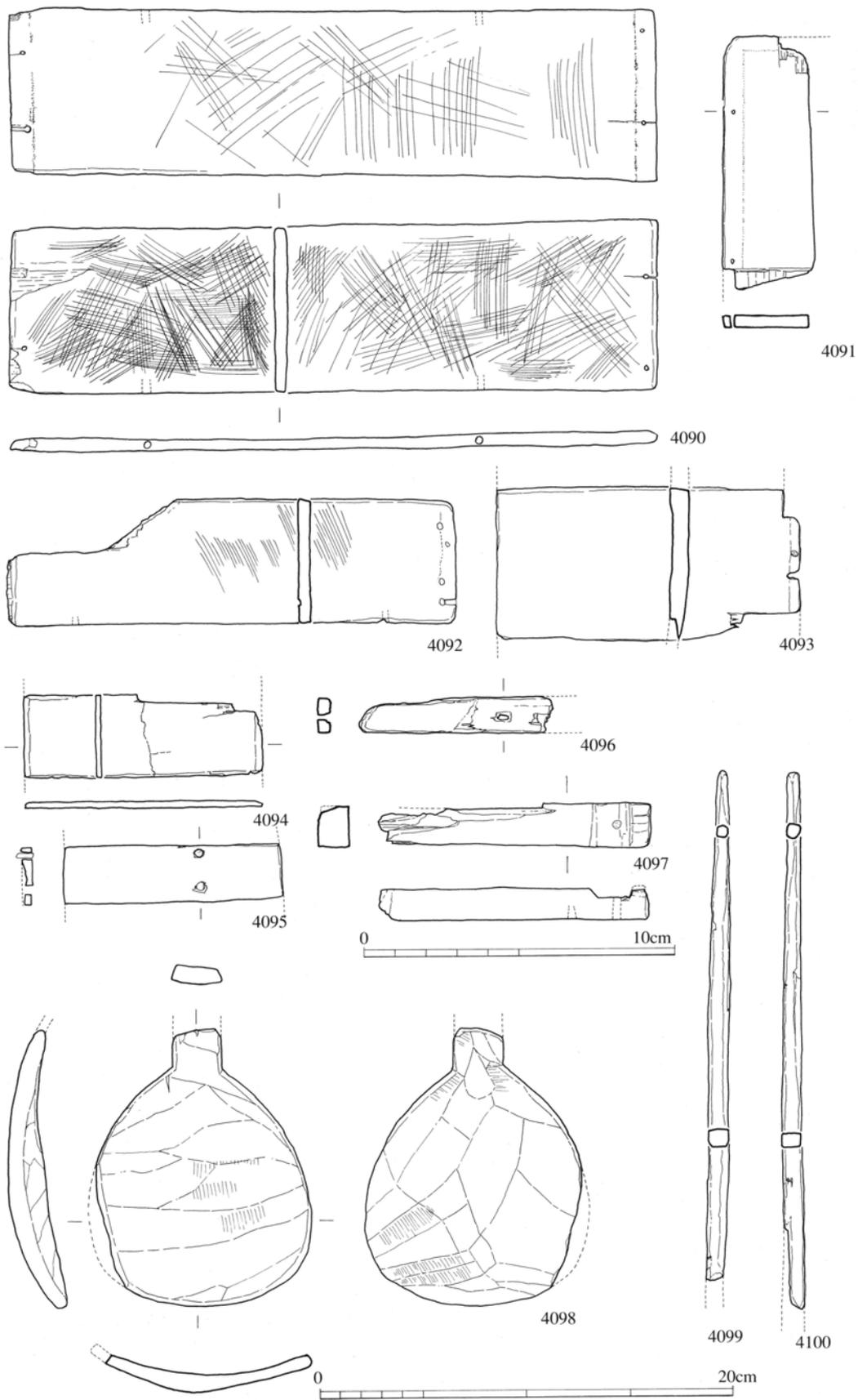
第40図 木製品実測図(9)



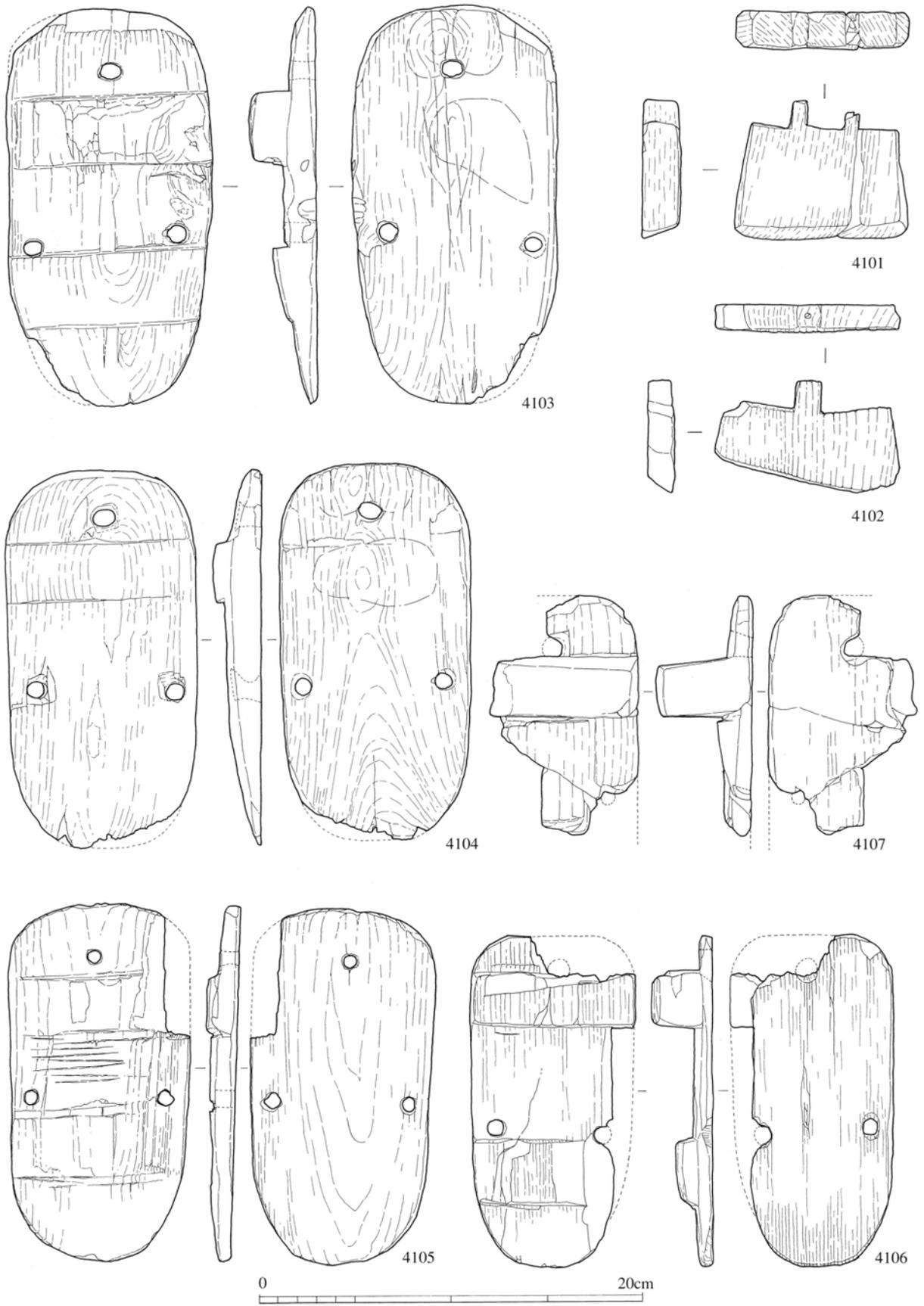
第41図 木製品実測図(10)



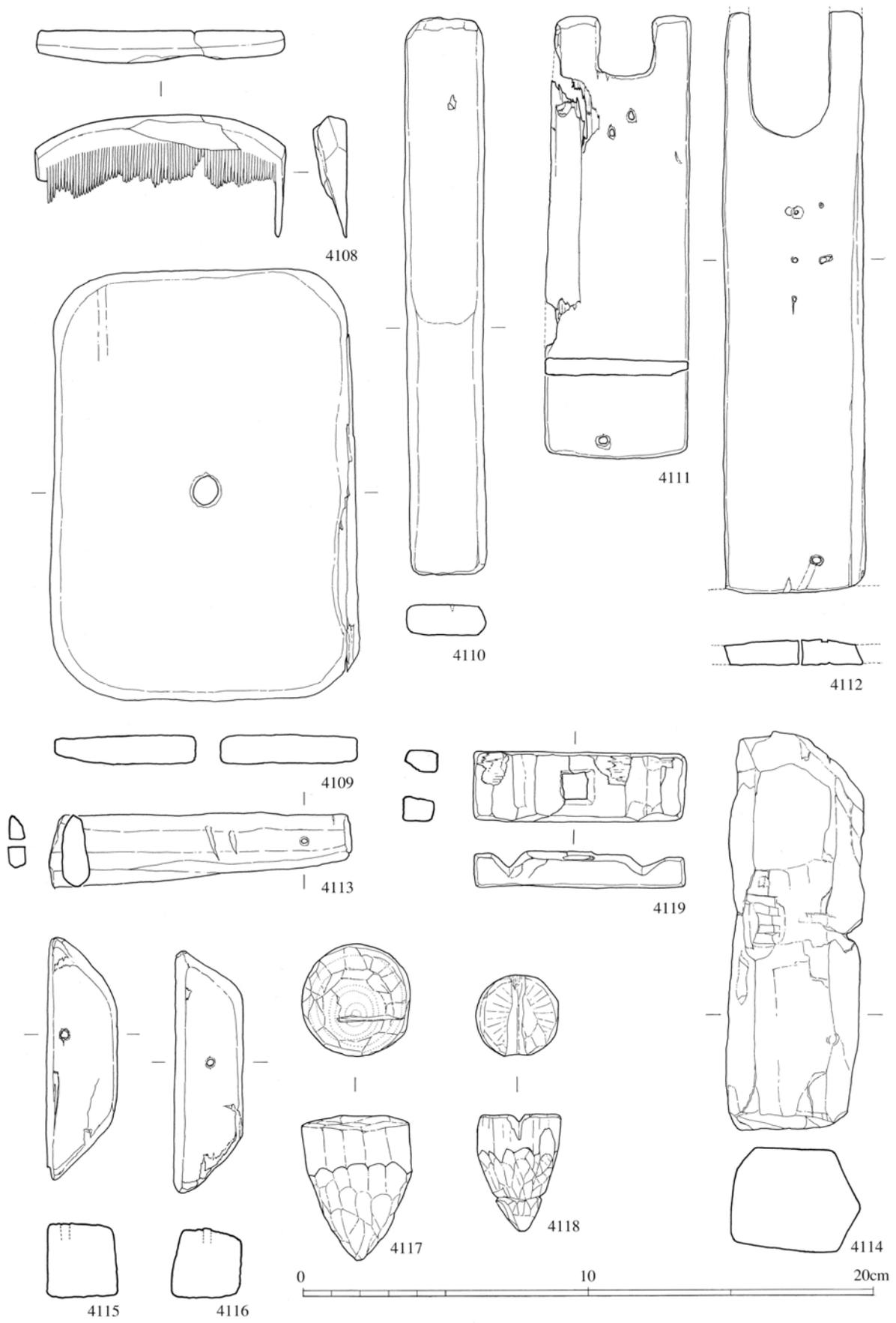
第42図 木製品実測図(11)



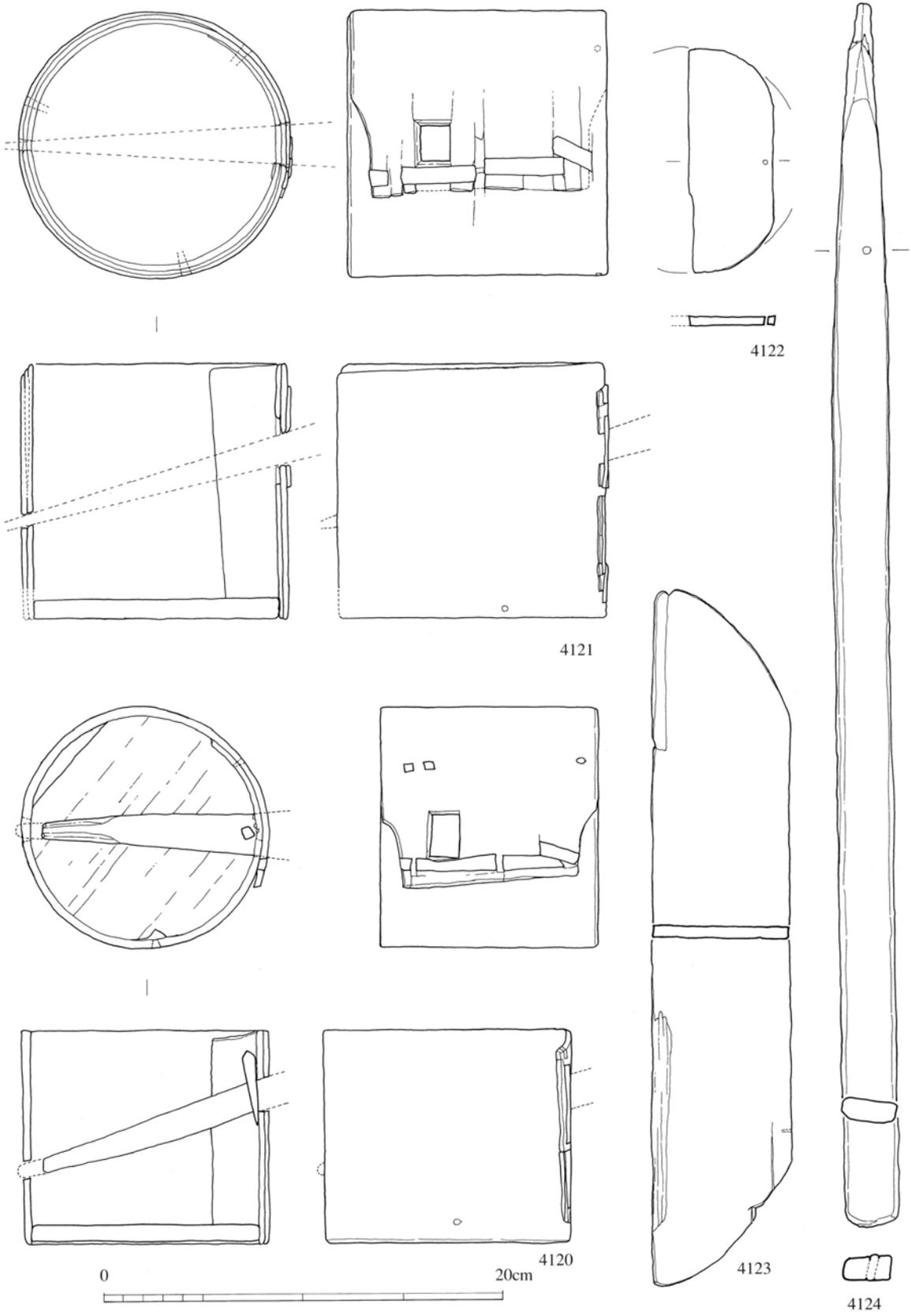
第43图 木製品実測図(12)



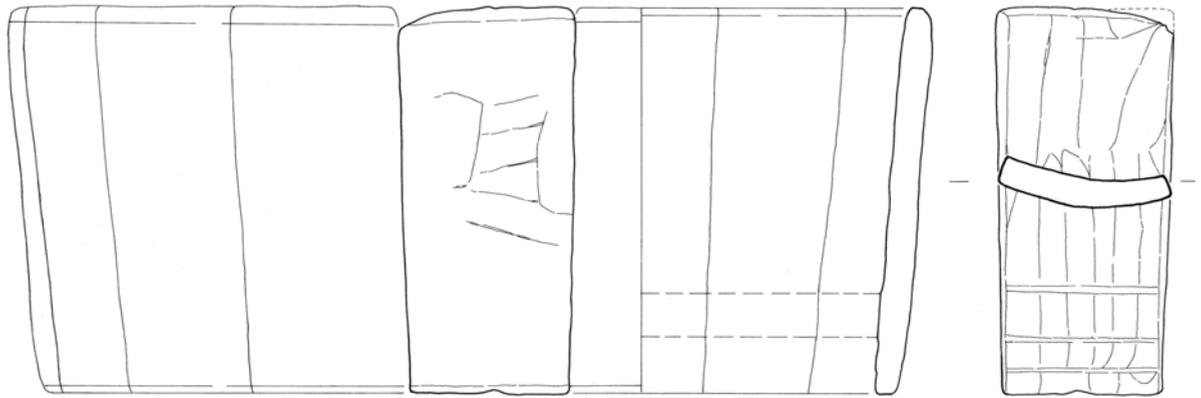
第44图 木製品実測図(13)



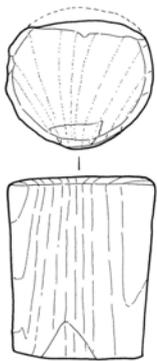
第45図 木製品実測図(14)



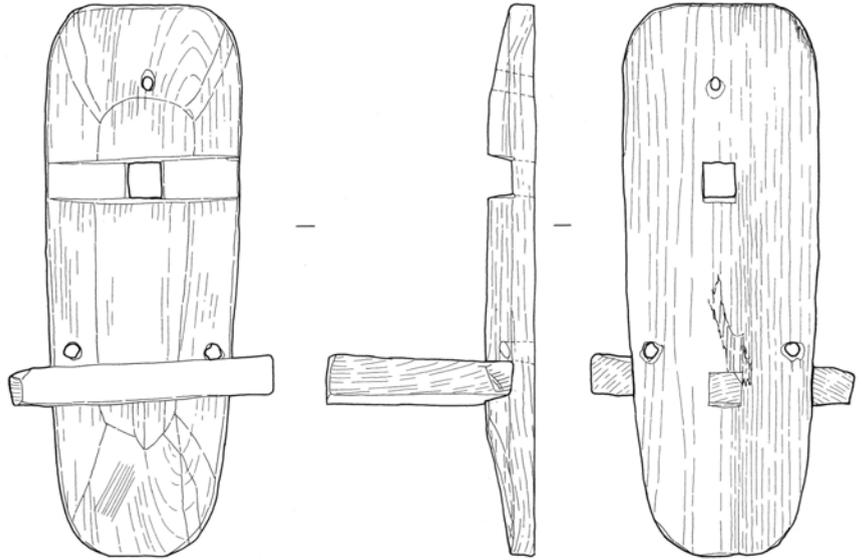
第46图 木製品実測图 (15)



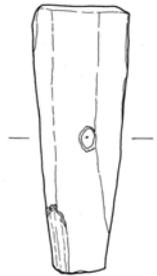
4125



4126



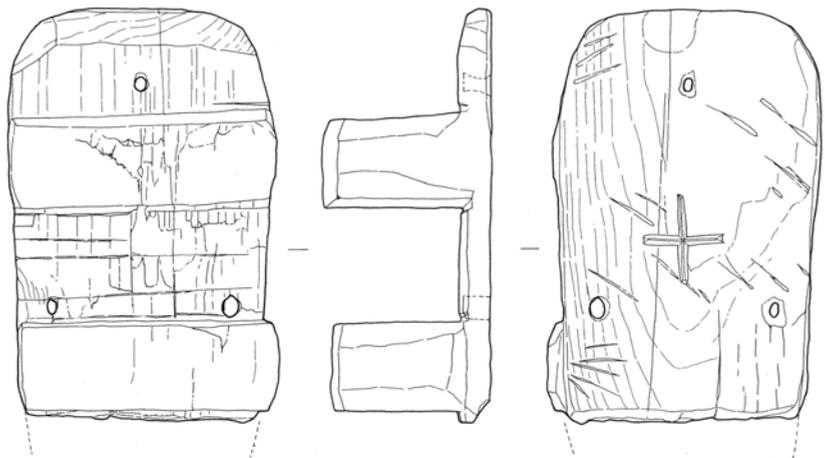
4129



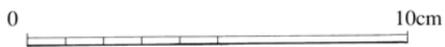
4127



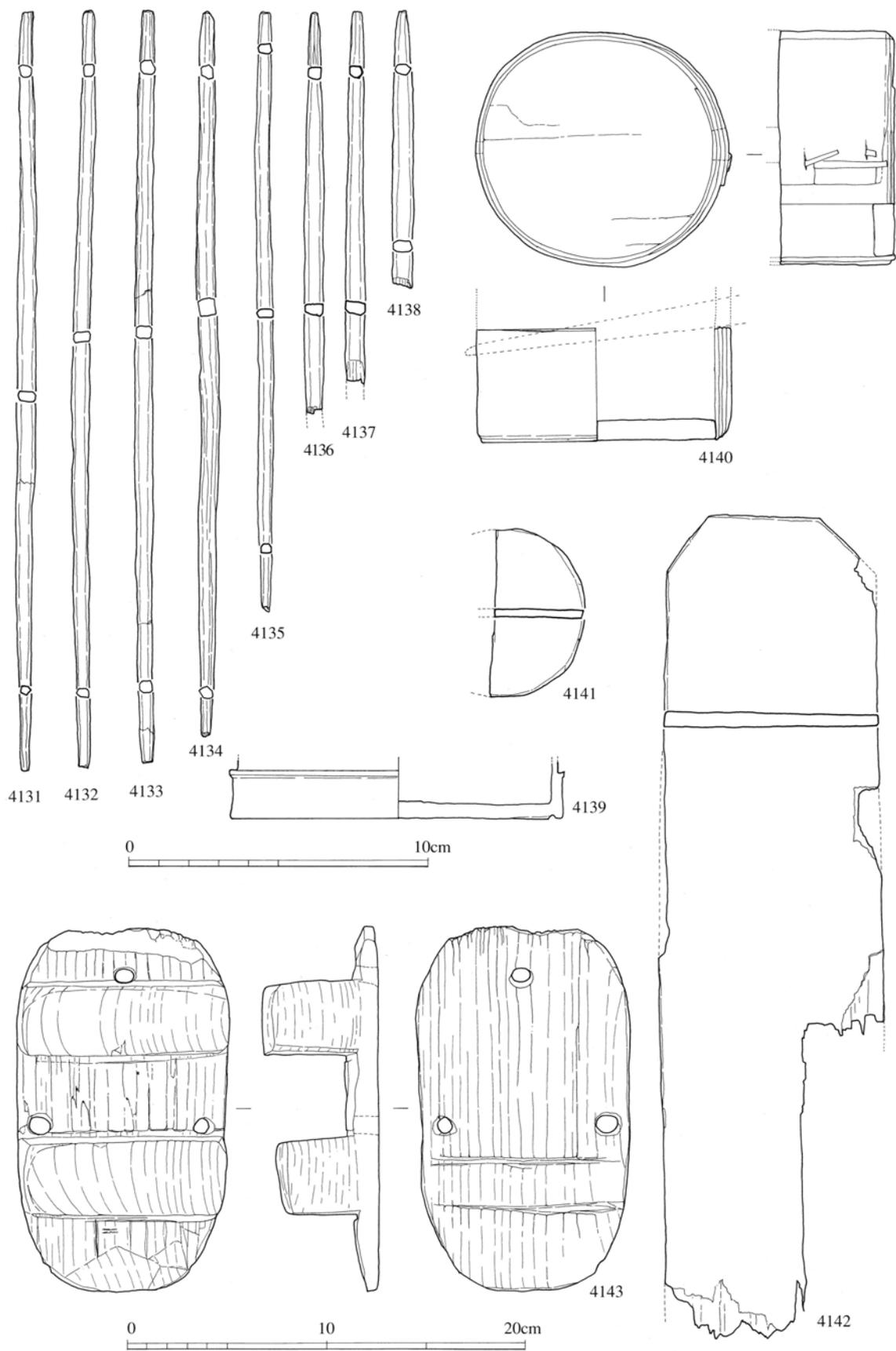
4128



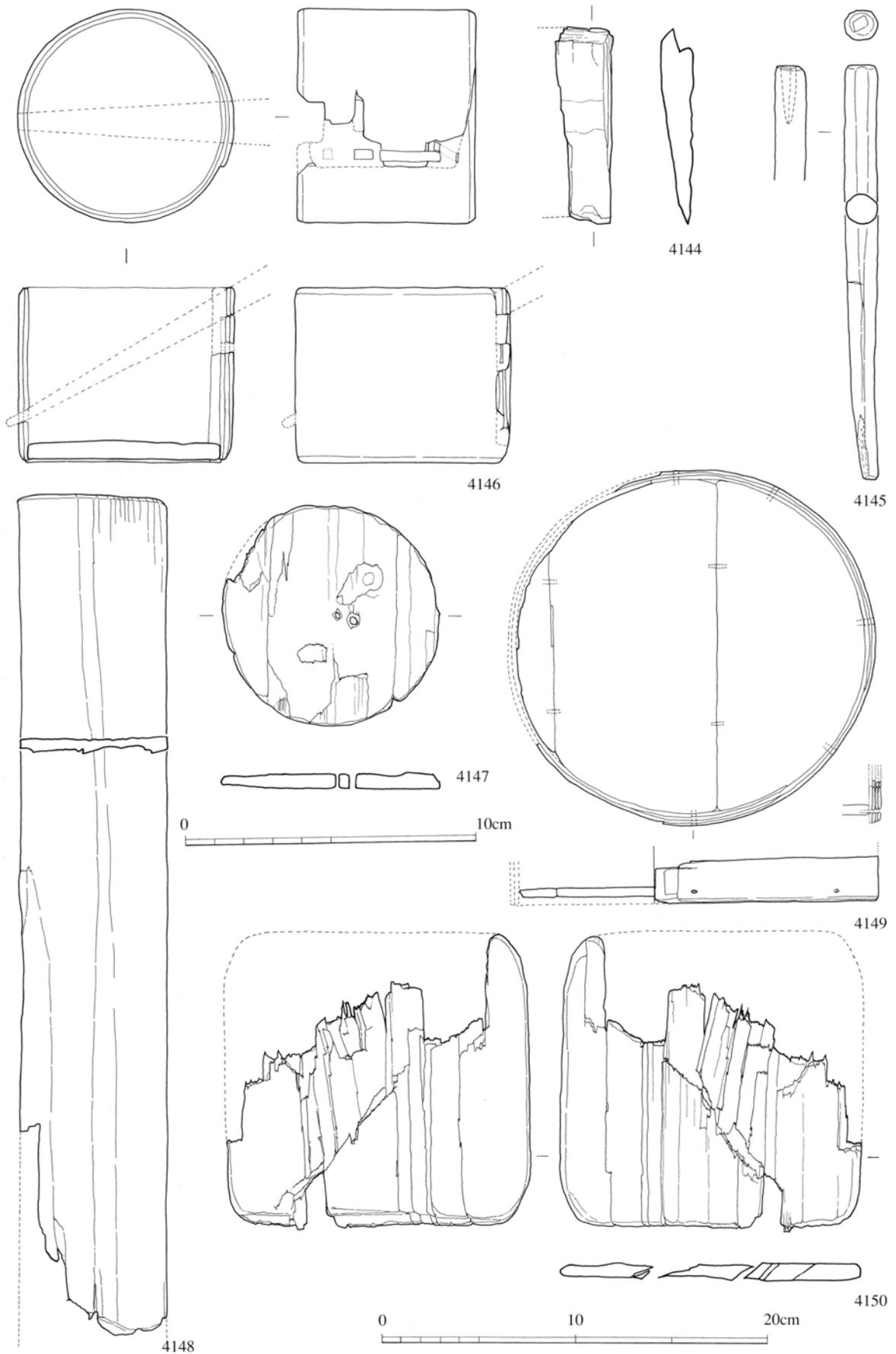
4130
10cm



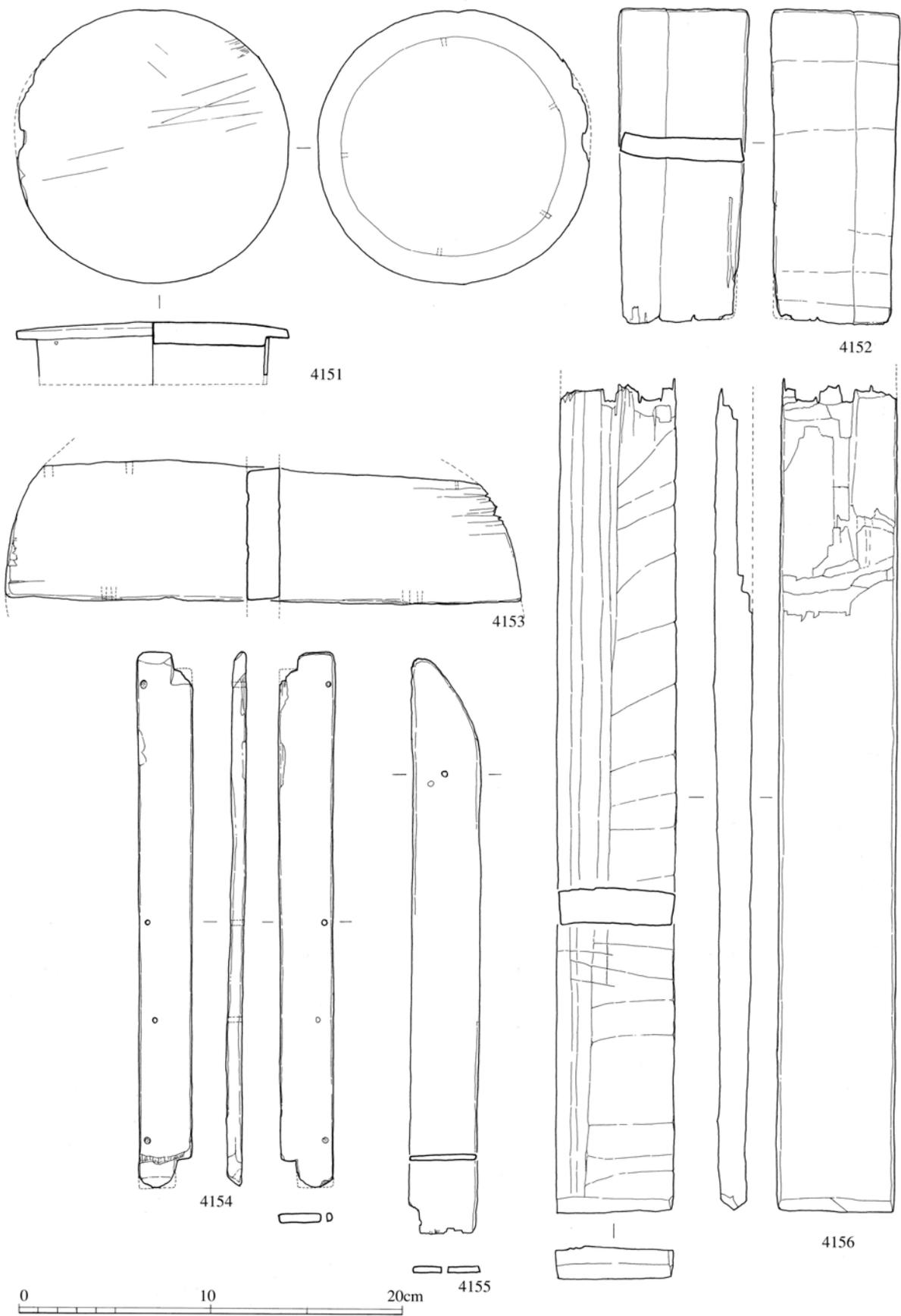
第47图 木製品実測图 (16)



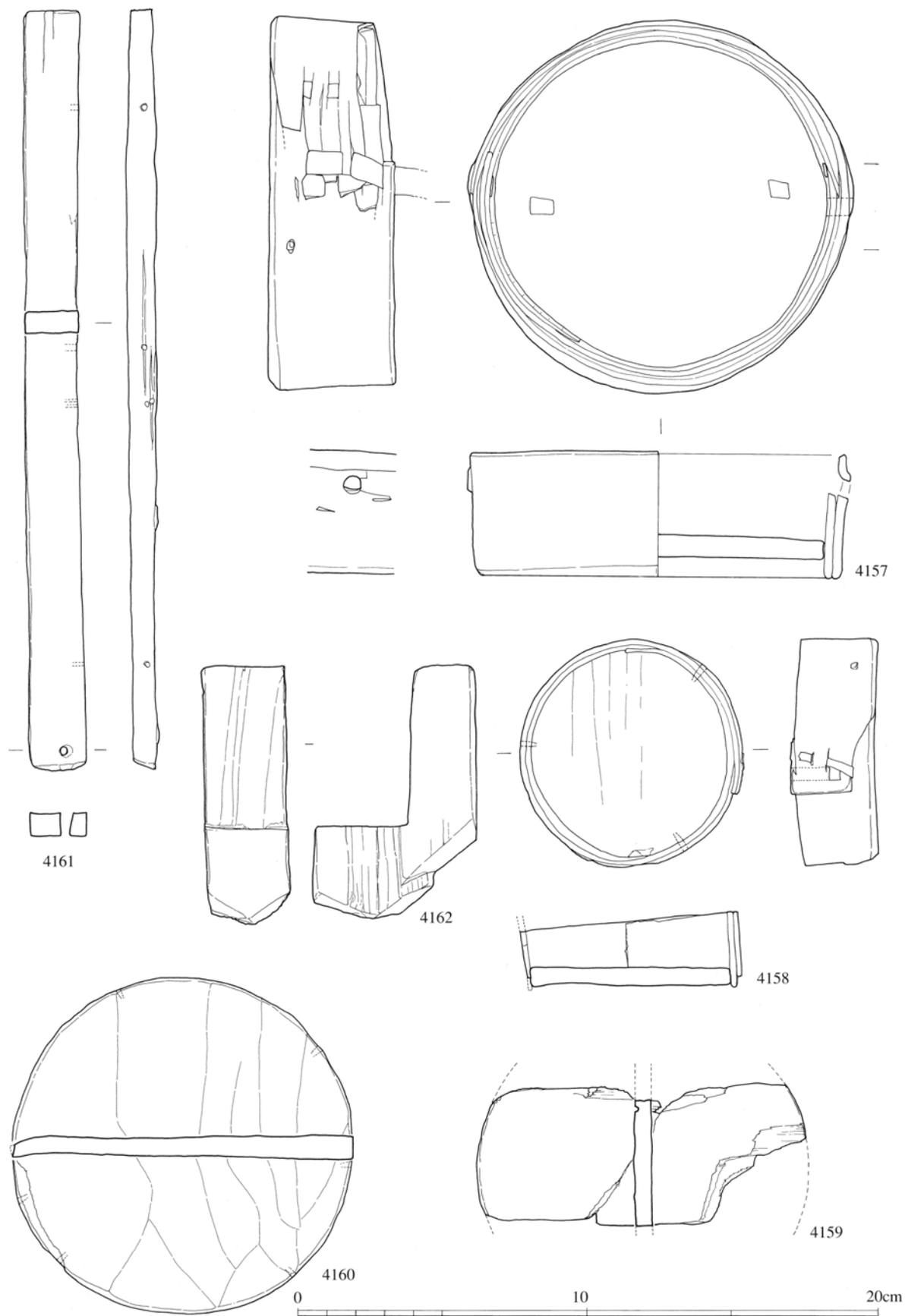
第48图 木製品実測図(17)



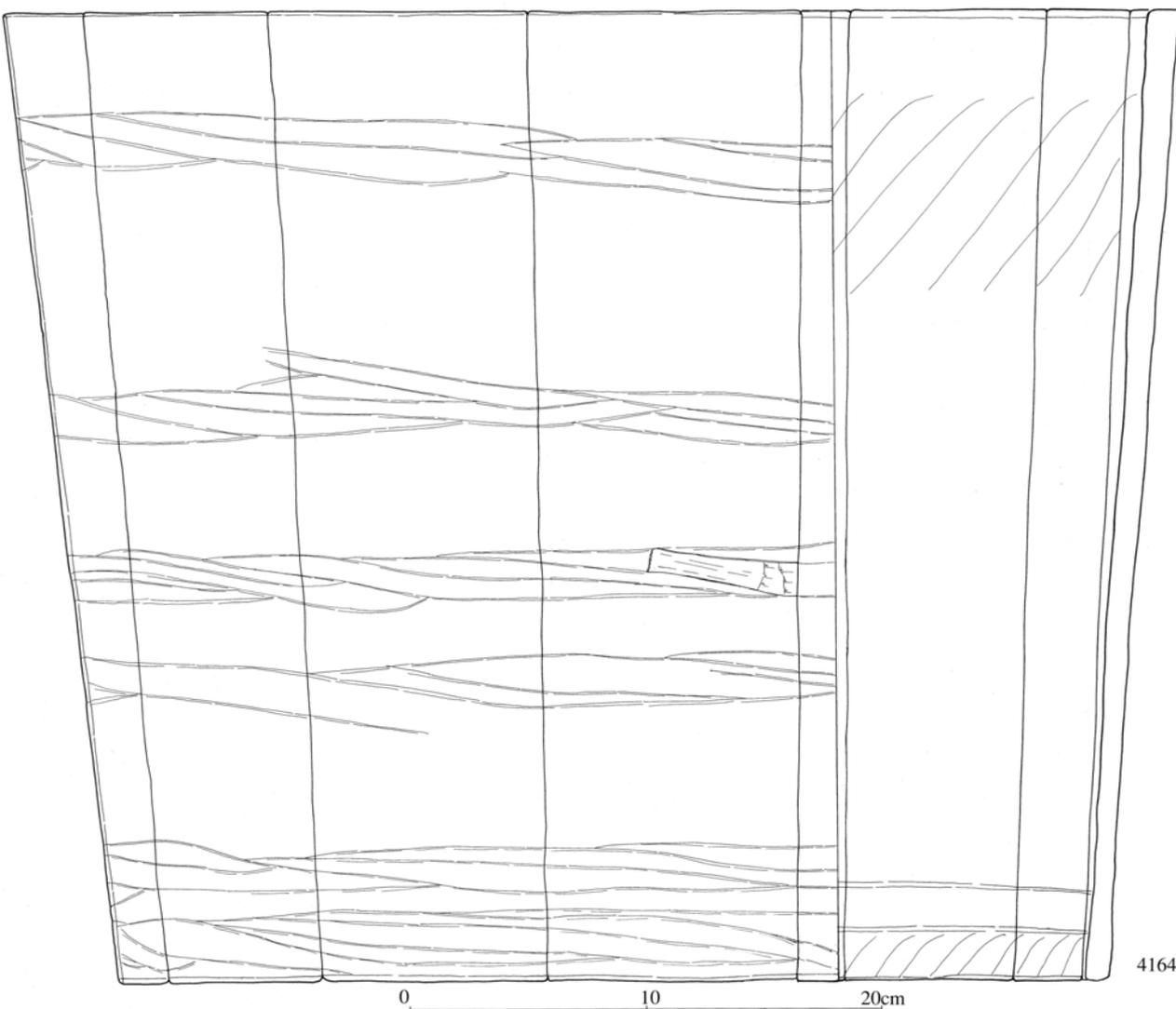
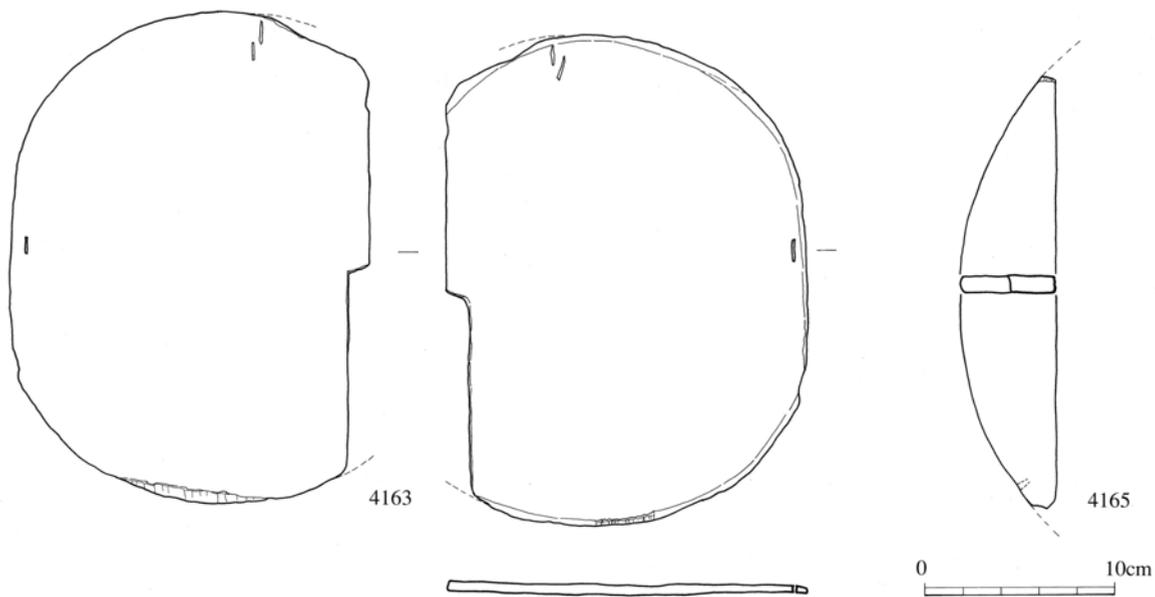
第49图 木製品実測図(18)



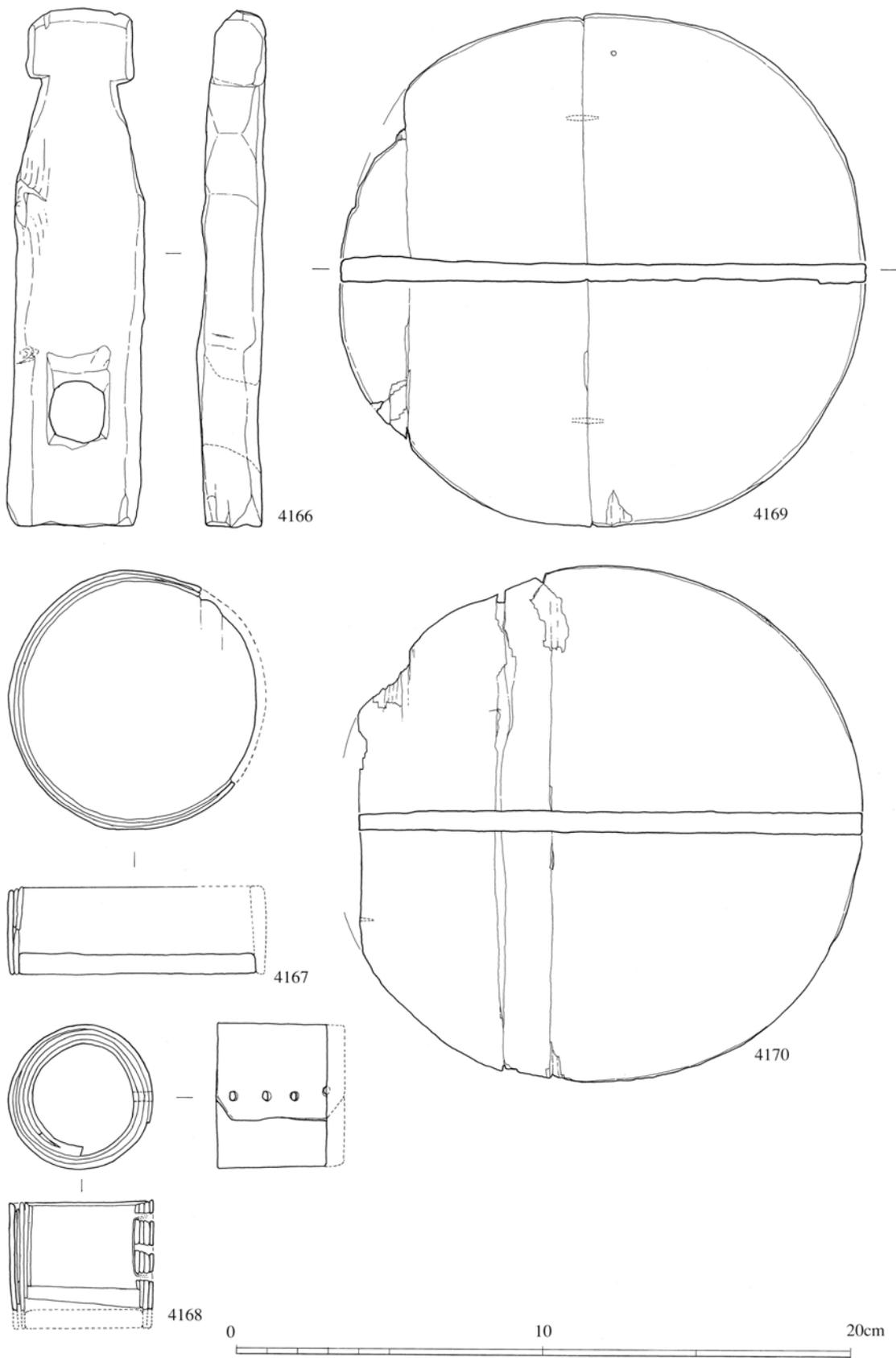
第50図 木製品実測図(19)



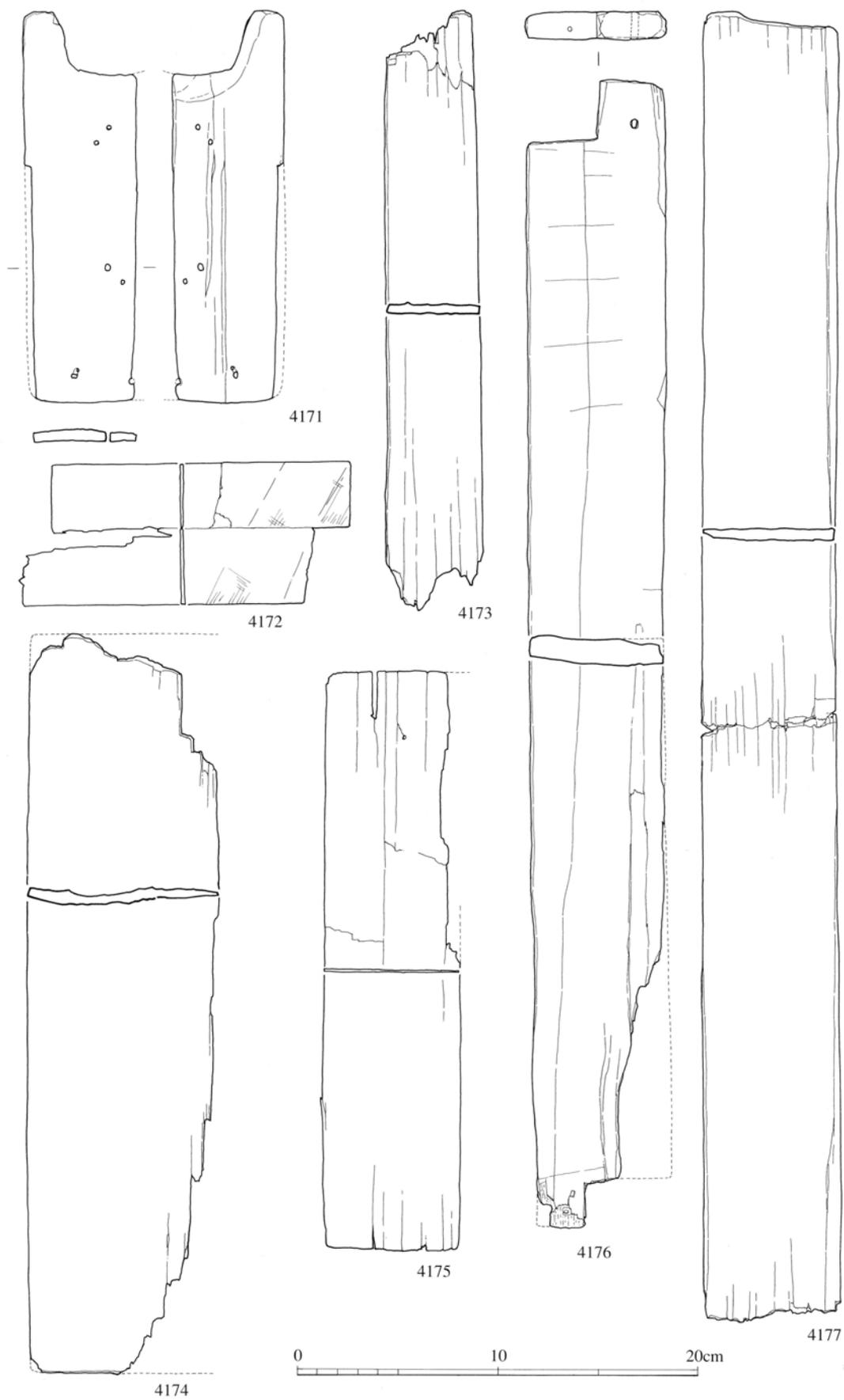
第51図 木製品実測図(20)



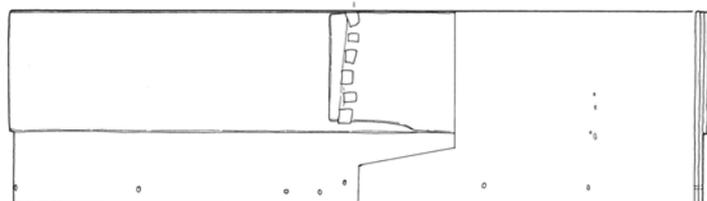
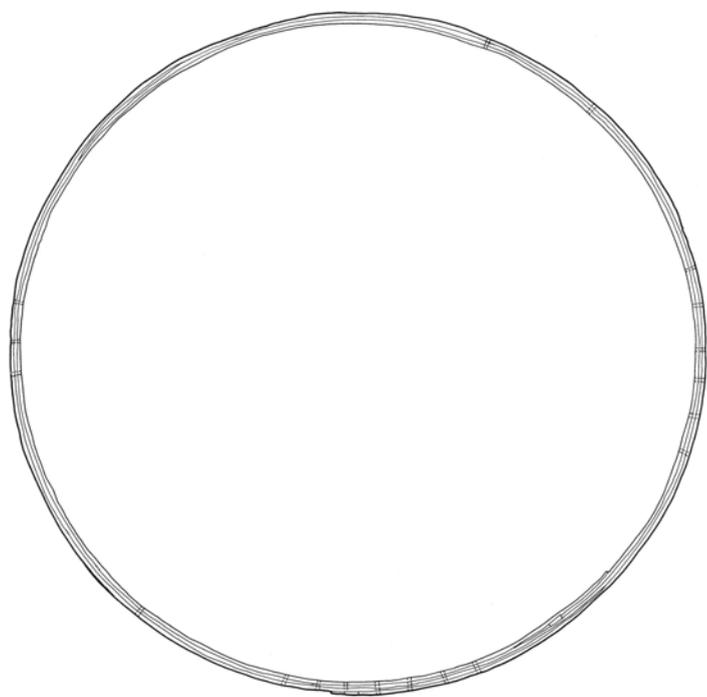
第 52 図 木製品実測図 (21)



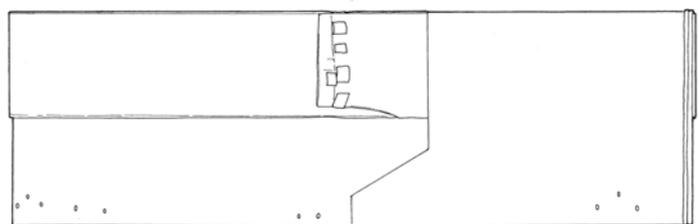
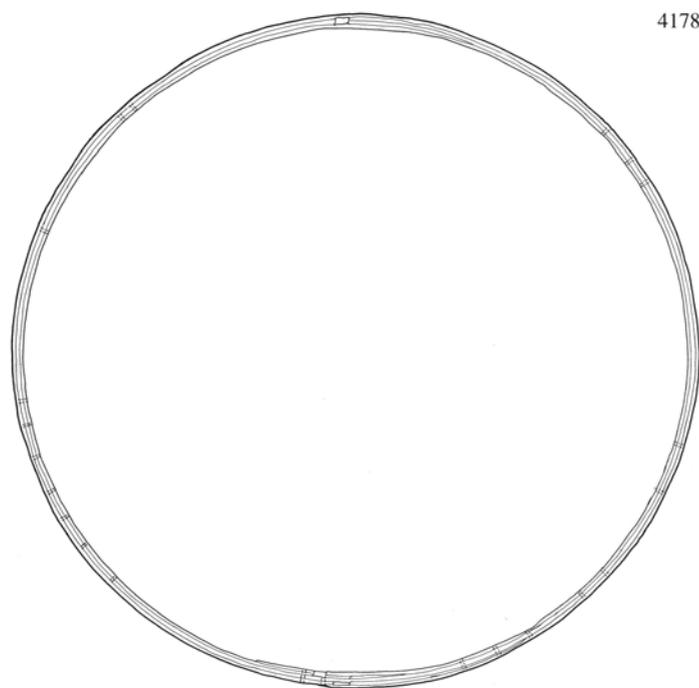
第53図 木製品実測図(22)



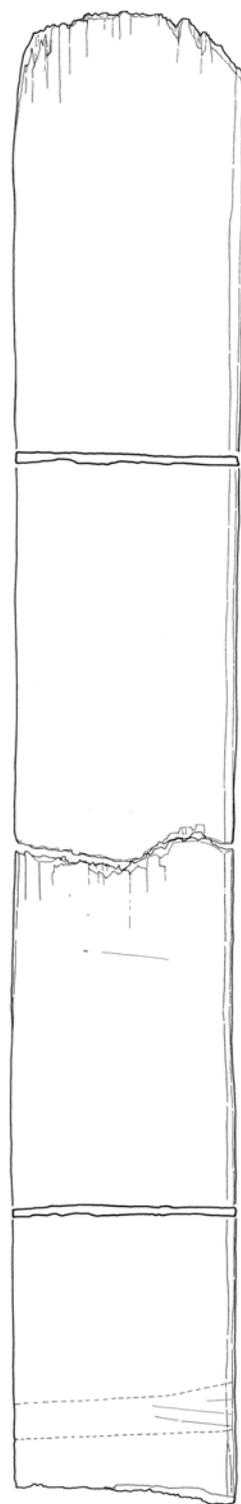
第54図 木製品実測図 (23)



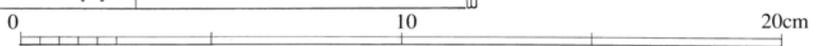
4178



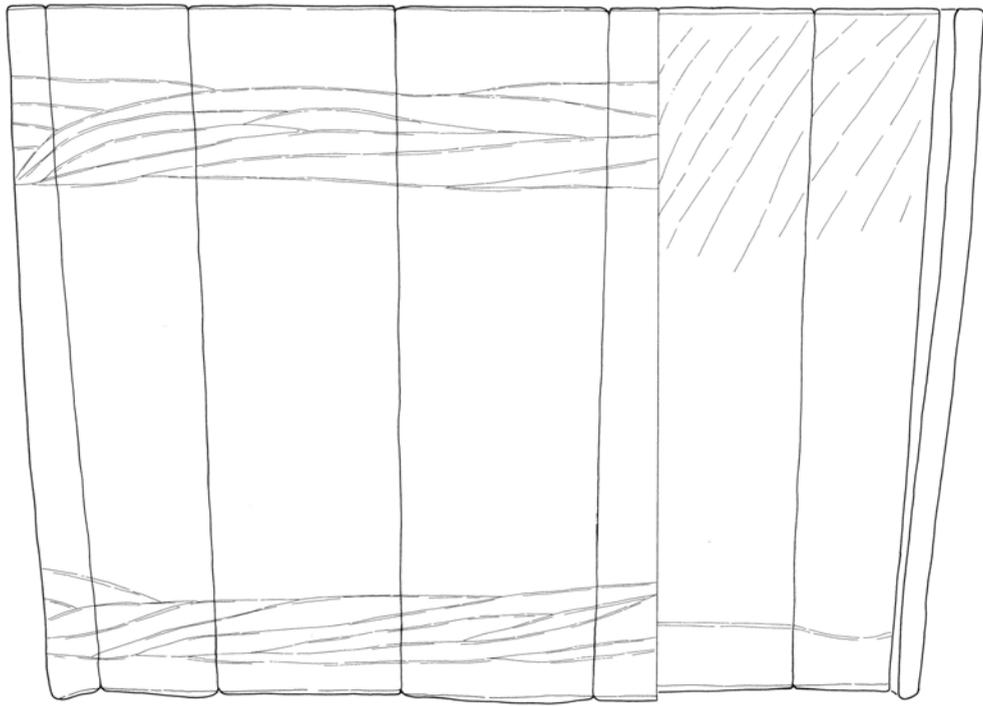
4179



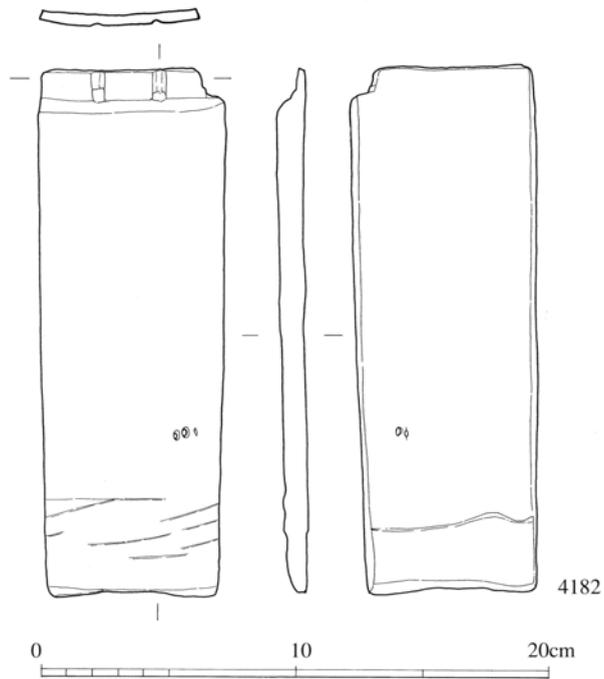
4180



第55図 木製品実測図(24)



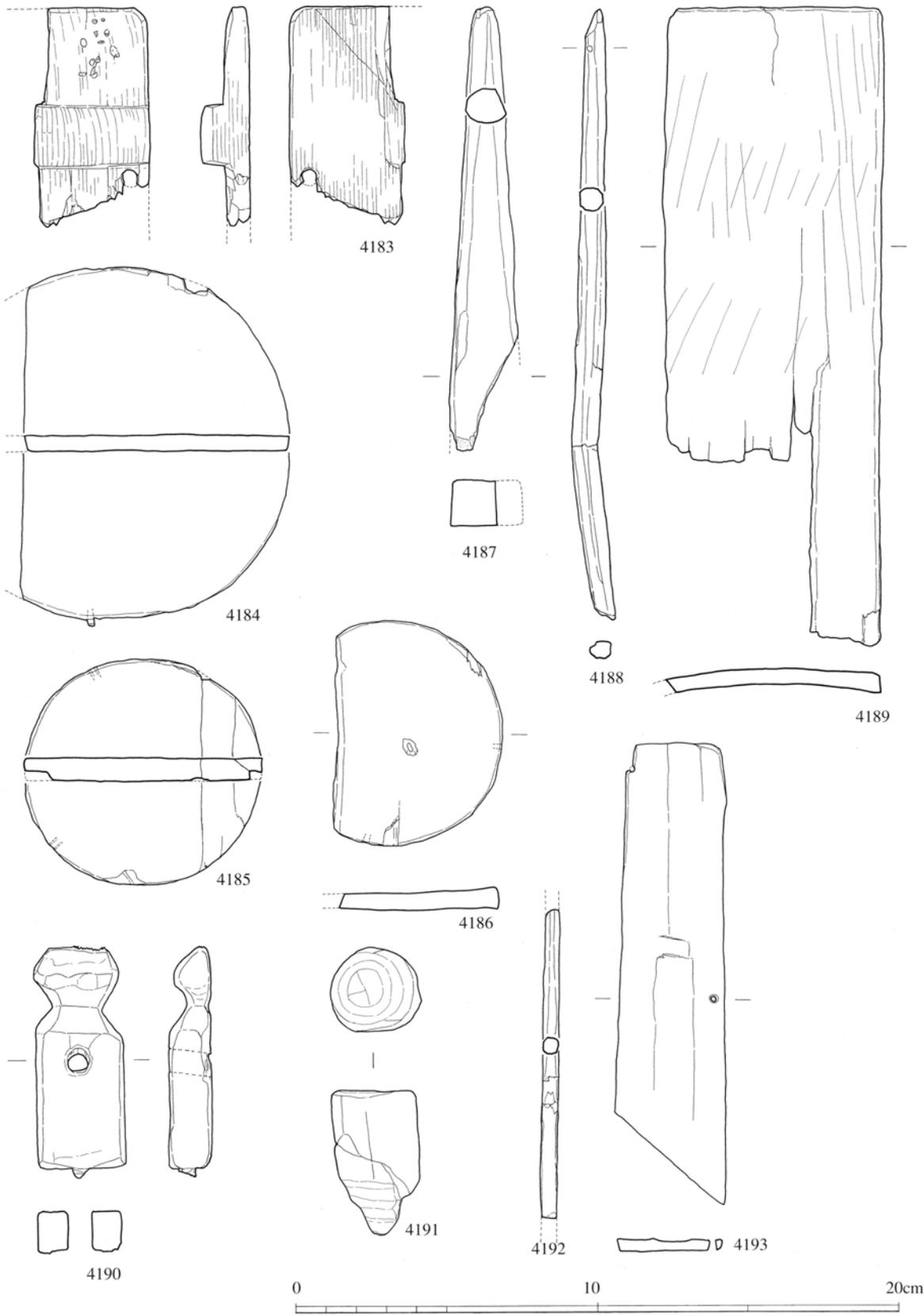
4181



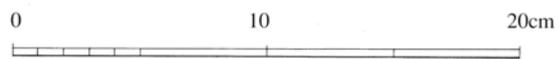
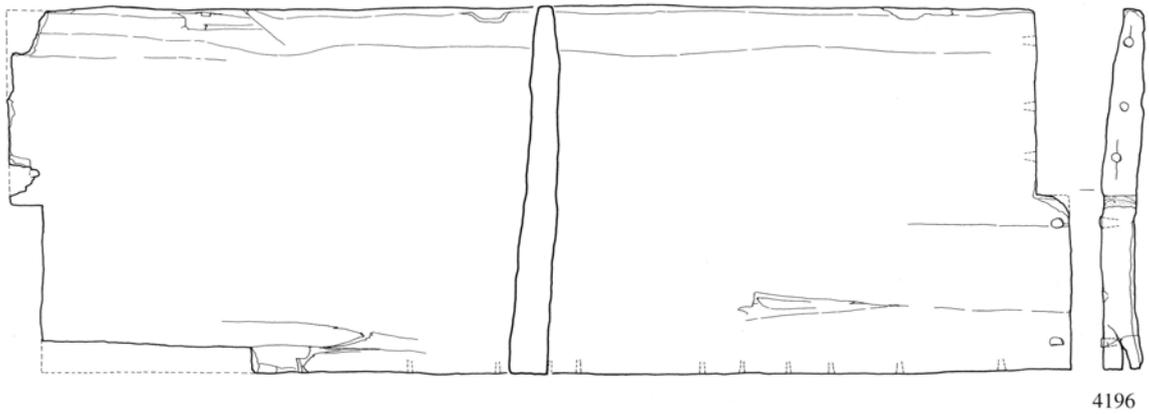
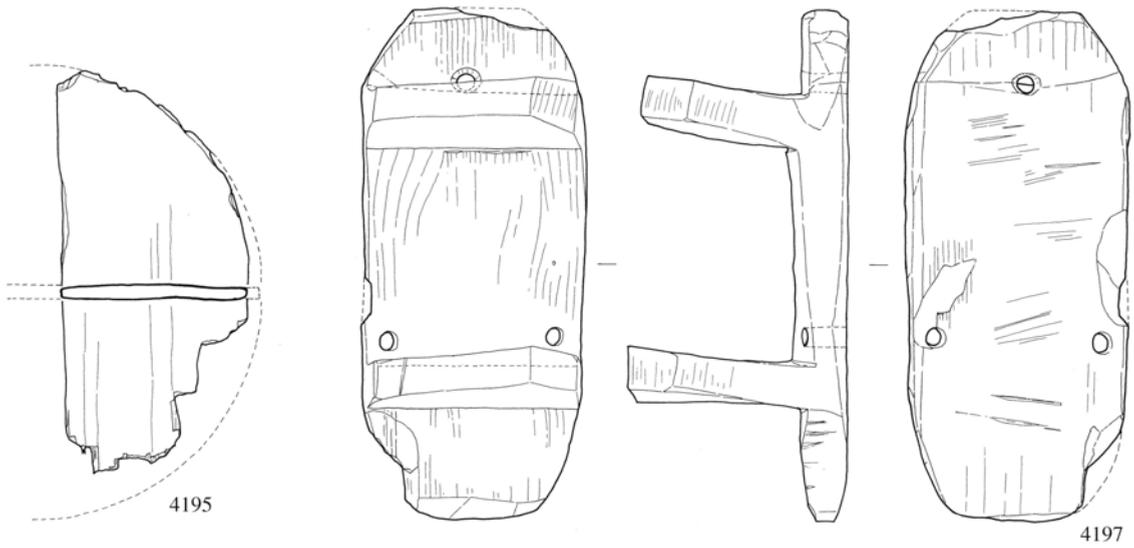
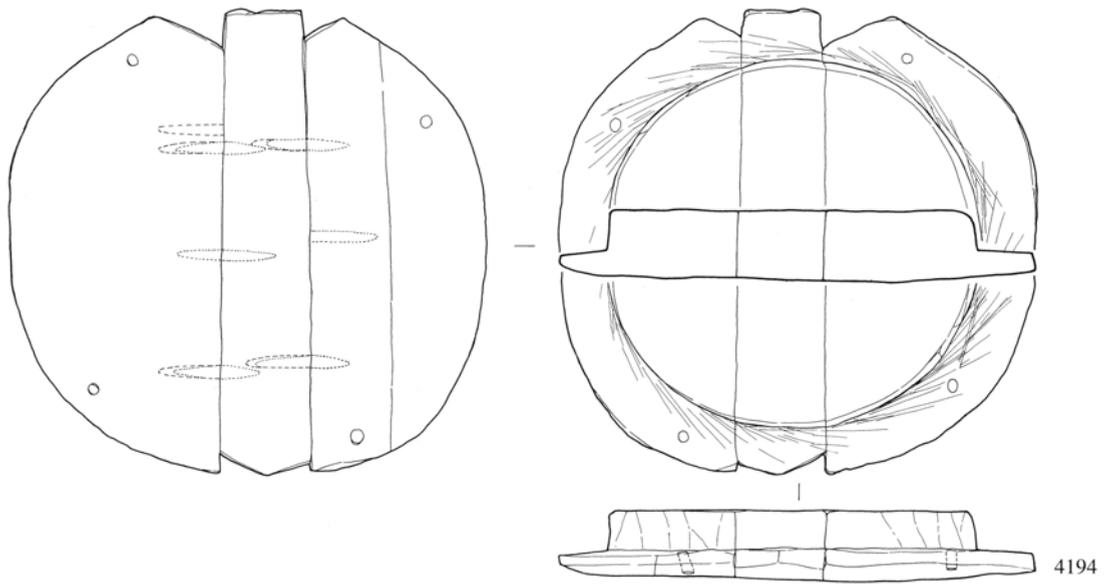
4182

0 10 20cm

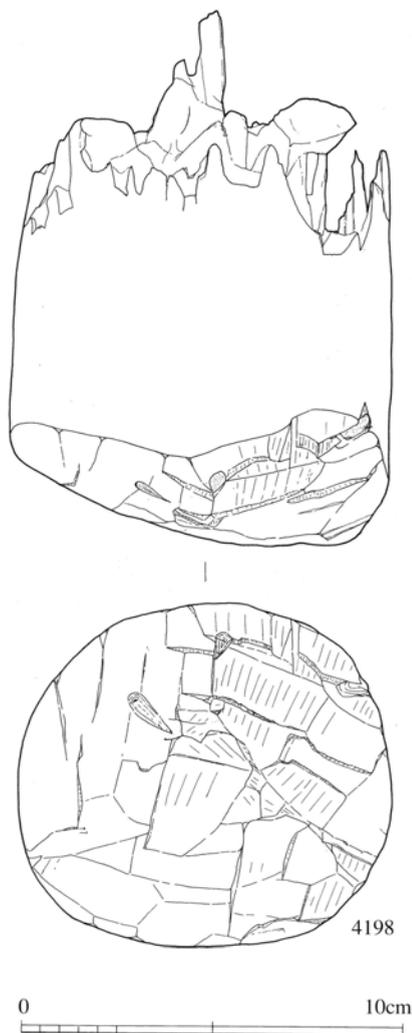
第 56 図 木製品実測図 (25)



第57図 木製品実測図(26)



第58図 木製品実測図(27)



第59図 木製品実測図(28)

樹種	実測番号					
ヒノキ	4005	4006	4009	4010	4029	4030
	4043	4050	4059	4070	4072の一部	
	4074	4077	4080	4081	4083~4074	
	4110	4112	4119	4123	4125	4129
	4130	4143	4151	4155~4157		4160
	4161	4163~4165		4167~4174		4176
	4177	4180	4181の一部		4182	4183
	4190	4194	4196			
ヒノキ科	4054	4159	4175	4181の一部		
アカガシ亜属	4126					
アカマツ	4002	4061	4062	4162		
マツ属複雑管束亜属	4191	4198				
アカメガシワ	4107					
イスノキ	4016	4108				
エノキ属	4113					
カキ?	4197					
クリ	4048	4101	4114	4166		
コウヤマキ	4011	4014				
トチノキ	4139					
トリネコ属	4048	4049	4102			
モチノキ属	4118					
モミ属	4003					
広葉樹	4072の一部					
針葉樹	4195					
散孔材	4098					

樹種同定は(株)パレオ・ラボ(松葉礼子氏)による。

第5表 木製品の樹種

第5節 金属製品

金属製品は、総計で29点出土した。その種類としては、刀および刀装具、鎌、鉞、釘、蓋、煙管、銅椀、燧金などがある。刀および刀装具の出土は、城館跡という遺跡の性格を傍証するものである。

刀子(第60図) 鉄製の刀子は3点出土した。5007は、ほぼ完形の平造り角棟の刀子。刃は切先へ向かって内側をえぐる緩い曲線をなし、切先は、ふくらをもつ。関は両関。茎の断面形は、クサビ形に近い逆台形で、茎尻にかけてより方形となる。なお、茎部に目釘穴とみられる穿孔は認められない。97B区SD12第3層出土。5008は、刃関あたりから茎の腹部の錆化が著しく、原形を留めないが、平造り角棟の刀子とみられる。刃は、5007同様に切先へ向かって内側をえぐる緩い曲線をなすものと推察される。切先は、ふくらをもつ。関は、背関が遺存するのみで、両関か否かは不明。茎は、表面の剥離が著しく、断面形は判然としない。97B区SD07第1層出土。5009は、刀子の刃部と考えたが、細長であり、刃巾が殆ど変わらないことから、これには

異論があるかも知れない。表裏面に厚く赤色顔料が付着している。赤色顔料の成分については、未検査。97B区SD01第2層出土。

小柄（第60図） 2点出土。5001は、土圧などにより幾分曲がっているが、ほぼ完存品。鉄製の刀身は、背闊と刃闊が明瞭な平造りの角棟である。茎部は、X線の透過により、目釘はなく、角尻をなすことが知られる。柄は、真鍮製で、真鍮の板を折り曲げ、背および尻で接着している。その断面形は、丸味をもったクサビ形の細長の逆台形で、切先を左に、背を上にして置いた場合、表面は直線的で、裏面となる側は膨らみをもつ。外面には、細かなヤスリ目がみられるが、特に彫刻等の装飾は認められない。97B区SD01第4層出土。5002は、刃部を欠くもので、鉄製の刀身の茎部が柄内に遺存している。X線の透過により、茎は角尻で、柄尻いっぱいまで入り、真鍮製の目釘で留められていることが知られる。柄は、真鍮製で、特に彫刻等の装飾は認められない。その断面形は、5001同様に、丸味をもったクサビ形の細長の逆台形で、切先を左に、背を上にして置いた場合、表面側は直線的で、裏面となる側は膨らみをもつ。97B区SD01第3層出土。

燧金（火打鎌 第60図） 鉄製。1点（5011）出土。山形の板状のもので、頂部に紐を通すための穿孔がある。横幅7.5cm、縦幅3.6cm、厚さ0.25cm。錆化がすすみ、遺存状態は悪い。97B区SD01第4層出土。

鉄釘（第60図） 鉄釘は2点出土した。ともに角錐形の折頭釘である。5017は、略完存品で、断面方形の脚の上端を叩き延ばした後折り曲げ釘頭としている。遺存長7.4cm。97B区トレンチ03出土。5016は、断面方形の脚の上端をそのまま折り曲げて釘頭としている。遺存長3.7cm。97B区SD01第1層出土。

大刀（第60図） 鉄製の大刀の残欠が1点（5003）出土した。刃闊の一部と茎が遺存する破片で、錆化が進み、遺存状態は悪く歪みがひどい。遺存長は14.2cm。茎の断面形は、長方形に近い逆台形を呈し、茎尻は、端部を短く折り返している。X線透過によっても目釘穴は認められない。97B区SD01第3層出土。

鉄製蓋（第60図） 1点（5015）出土。扁平な円板状の蓋の端部片で、復元推定径14.2cm。端部から0.8cmほど内側に高さ0.4cmほどの「かえり」が付く。97B区SD01第3層出土。なお、ここでは鉄製の蓋と考えたが、小片であり、異論があるかも知れない。

ハバキ（第60図） 1点（5005）出土。青銅製の板を折り曲げ、下端で接合したものである。上端は断面三角形をなす。縦2.35cm、幅0.8cmと小型で、大きさからみて、小刀のハバキではないかと推察する。96E区SK144出土。

鞆尻金具（第60図） 1点（5004）出土。細長い長方形の板を丸め、楕円形の板を接合した後、頂部を円蓋状にするなどの整形を加えたものである。頂部内面には、鞆尻に装着・固定するための突起が付けられている。長径3.15cm、短径1.7cm、高さ0.8cm。97B区SD01第4層出土。

銅椀（第59図） 1点（5018）出土。底部から体部にかけての小片で、底外面は細かな凹凸が顕著である。接地面での径4.0cmをはかる。97B区SD01第4層出土。

コウガイ（第60図） 1点（5006）出土した。赤銅色を呈し、遺存状態は良好であるが、竿が二重に折り曲げられ、二次的な加工がなされている。地板部は、所謂「七々子地」で、得に彫

刻はないが、地板（額の内）の中央に穿たれた径0.3cmほどの穴に嵌め込められた金具が依存しており、何らかの装飾品が装着されていたものと推察される。復元長19.3cm。97B区SD01第2層出土。

トビナタ（第60図） 1点（5012）出土。鉄製。全長23.4cm、刃渡り17.8cm前後のトビナタで、ほぼ完形で出土した。刃部先端に1.2cm前後の突起が付く。棟厚0.4cmで、刃幅は、4.5～5.0cm。着柄のための茎（長5.6cm）は刃部に対して幾分下方を向いて斜めに付く。96C区SD01第4層出土。

鉄鎌（第60図） 2点出土した。ともに鉄製の曲刃鎌で、着柄のための茎が斜め下方に付くものである。5013は、全長21.6cm、刃渡り19.3cmのほぼ完形品。刃部は使用による研ぎ減りのためか緩い波形の曲線をえがく。棟厚は0.25cm。茎部は、基部より徐々に幅を狭めて茎尻は尖るが、この茎尻は内側に曲げられている。おそらくは柄の装着をより強化するための工夫であろう。97B区SE01出土。5014は、全長13.5cm、刃渡り11.6cmのもので、略完形。X線透過によっても目釘穴など、着柄のための格別な造作は、茎部には認められない。96A区SE01出土。

飾金具（第60図） 1点（5010）出土。幅0.55cm（微妙に上端が幅狭）、厚さ0.1cmの銅板を曲げたもので、遺存長6.2cm。内外面に赤色顔料が付着している。飾金具としたが、いかなる器物の部品か不明。97B区SD01第2層出土。

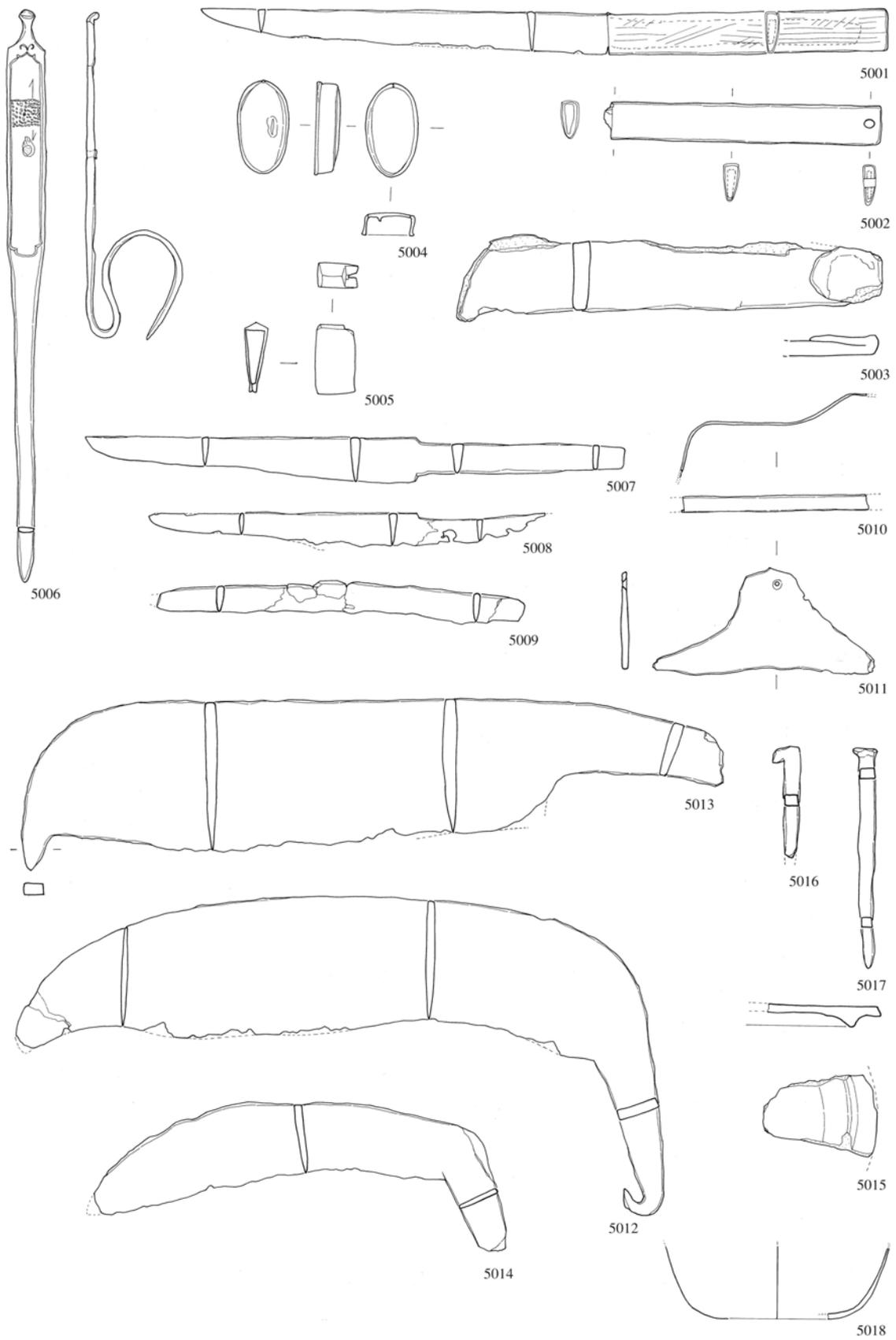
煙管（第61図 第6表） 雁首4点、吸口2点が出土した。いずれも真鍮製。雁首と吸口が同一遺構から出土したものはなく、その対応関係については不明である。個々の出土遺構、計測値等については表示するにとどめる。

雁首（5019～5022） いずれも火皿と脂返しの上に補強帯がめぐるものであるが、肩付のもの（5019）と肩付ではないもの（5020～5022）の二種がある。ただ5022は、火皿に比べ首部が短く、加えて羅字側端部は未調整で、切り離されたままの状態である。おそらくは何らかの事情で肩部もしくは首部の端部が切断されたものである可能性がある。なおこれらについては、首部の端部を垂直に、すなわち羅字が水平になるように置いた場合、5019・5022の火皿の口縁部は前方に傾き、5020はほぼ水平に、5021は手前（吸口側）に傾く、という相違点がある。また、火皿を上向きにして左側に置いて横から見た場合、5019・5020・5022は、首部の合せ目が手前に来るのに対して、5021は裏側となる、という相違点を指摘し得る。とくに合せ目の位置の相違は、生産者の相違を反映している可能性がある。

吸口（5023・5024） とともに口唇部にかけて徐々に窄まる肩の付かない形式のものである。5023に比べ、5024は細身のものである。5023・5024とも口唇部が折り曲がった状態で出土している点は注目される。単なる偶然とするよりは、意図的に折り曲げられて棄てられた可能性を考えたい。なお、口唇部が上方に折り曲げられたと仮定した場合、合せ目は、5023と5024では正反対の位置関係となる。

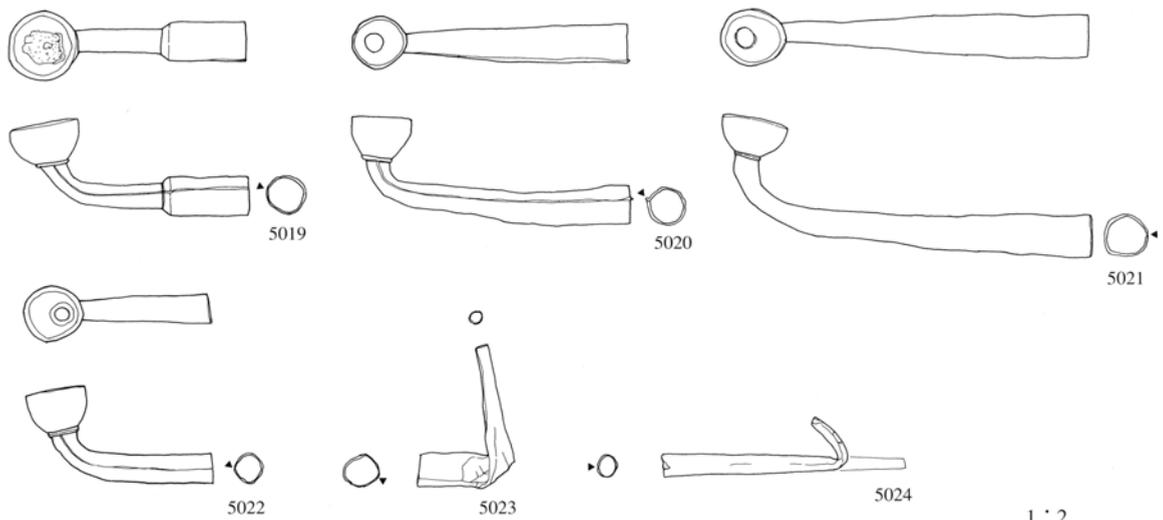
実測図番号	調査区	グリッド	遺構	層位など	種類（部位）	長さ	備考
5019	南調査区	97B	IXC 19k	SK61	雁首	6.15cm	
5020		96E	IXB 8t	検出 I	雁首	7.25cm	
5021		97B	IXC 15m	SD01	第2層 雁首	10.1cm	
5022		97B	IXC 19r	SK106	雁首	4.95cm（遺存）	
5023		97A	IXC 14g	SD02	第2層 吸口	5.9cm（復元長）	
5024		97A	IXC 16l	SK25	吸口	6.3cm（復元長）	

第6表 出土煙管一覧表



第 60 图 金属製品実測図

1 : 2



第61図 煙管実測図

1 : 2

第6節 銭貨

今回の調査では、中国銭12種17点、日本銭1種4点および銭文が判読できないもの3点の総計24点の銭貨が出土した。中国銭の内訳は、北宋銭9種13点、南宋銭1種1点、明銭1種3点である。日本銭は、いずれも江戸時代の寛永通寶で、1633年から1659年にかけて铸造された「古寛永」である。1688年初铸の「新寛永」の出土を見ない点は、後述のように遺跡の廃絶を17世紀後葉に求める土器・陶磁器類の編年観から導かれた所見を傍証するものとして注目しておきたい。

小規模な土坑である96A区SK01から錆着して重なって銭貨5点が出土したが、これは意図的に埋納されたものである可能性がある。

銭貨個々の計測値・出土遺構・特徴などについては、表示するにとどめる（第7表）。

番号	銭種	出土調査区・グリッド等	遺構・層位	国	初铸年等	書体	備考
5025	宣徳通寶	96A区	VIC 17 e	SK0	明 1433年		
5026	—	96A区	VIC 17 e	SK01			
5027	—	96A区	VIC 17 e	SK01			
5028	政和通寶	96A区	VIC 17 e	SK01	北宋 1111年	篆書	
5029	天聖通寶	96A区	VIC 17 e	SK01	北宋 1023年	篆書	
5030	元祐通寶	96A区	VIC 13g	SK01 中層	北宋 1086年	行書	
5031	天聖通寶	96A区	VIC 13g	SK01 中層	北宋 1023年	篆書	
5032	元豊通寶	96A区	VIC 13f	SK01 下層	北宋 1078年	行書	
5034	寛永通寶	96A区 表土剥き		日本	1636~1659年		古寛永
5035	—	96D区 IXD 2・3d	SE01東半上層		—		銭文判読不可
5036	寛永通寶	96E区 IXC 10 e	SD03 第2層	日本	1636~1659年		古寛永
5037	天禧通寶	97A区 IXC 20 j	SD02 第2層	北宋	1017年	篆書	
5038	寛永通寶	97A区 IXC 20 i	SD02 第2層	日本	1636~1659年		古寛永
5039	寛永通寶	97A区 IXC 20 i	SK10 第2層	日本	1636~1659年		古寛永
5040	政和通寶	97B区 IXC 20 j	SK01	北宋	1111年	分楷	
5041	元豊通寶	97B区 IXC 20 j	SK01	北宋	1078年	行書	
5042	皇宋通寶	97B区 IXC 20 j	SK01	北宋	1038年	真書	
5043	景祐元寶	97B区 IXC 20 j	SK01	北宋	1034年	真書	
5044	嘉祐通寶	97B区 IXC 20 j	SE04	北宋	1056年	篆書	
5045	永樂通寶	97B区 IXC 20 j	SE04	明	1408年		
5046	永樂通寶	97B区 IXC 18 l	SD01 第4層	明	1408年		
5047	淳熙元寶	97B区 IXC 18 l	SD01 第4層	南宋	1174年	真書	
5048	熙寧元寶	97B区 IXC 18 l	SD01 第4層	北宋	1068年	真書	
5049	元豊通寶	97B区 IXC 18m	SD01 第1層	北宋	1078年	行書	

第7表 出土銭貨一覧表

第7節 石製品

量的には少ないが、種類としては、石塔（五輪塔・宝篋印塔）、砥石、石臼・茶臼、硯の各種がある。石材質については、堀木真美子（当センター）の肉眼観察結果による。

茶臼（第62図）

茶臼は、総計5点が出土した。いずれも南調査区からの出土で、破損品である。

上臼 1点出土した。6001は、上臼の破片で、周縁は欠損し原形を留めない。白面は8分画（主溝8本副溝7本前後）と推定される。凝灰質砂岩製。96E区SD02第3層出土。

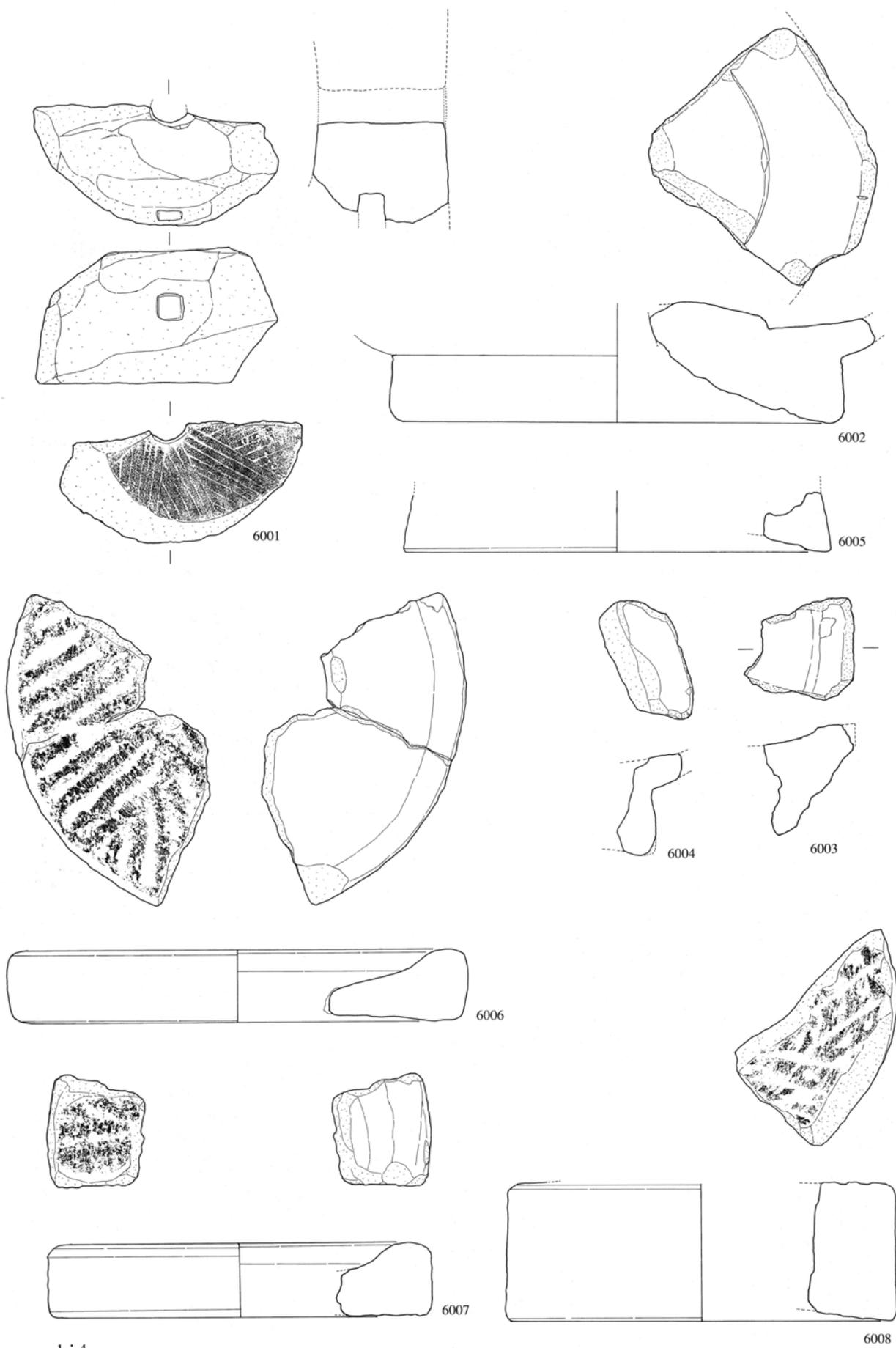
下臼 5点出土した。凝灰質砂岩製と輝緑岩製の2種類がある。6002は、下臼の6分の1ほどの破片である。底径32.4cm・高さ9.8cm・白面径20.8cmで、受皿径は口縁部を欠くため不明。白面は、目なしとなっている。受皿の口縁部の破面に縦位の溝状の「キズ」が1条認められる。口縁部が折損した際についたものであろう。凝灰質砂岩製。96E区SE07出土。6003は、下臼の受け皿の口縁部片で、輝緑岩製。97B区SD01第2層出土。6004は、下臼の台部から受け皿部にかけての破片である。受皿口縁部の破面に2と同様の溝状の「キズ」が2箇所認められる。このように「キズ」が2つの個体に認められたことから、この「キズ」は口縁部の折損にともない偶然に生じたものとみるよりは、たとえば下臼を何らかの理由で破砕した際についたものという可能性がある。凝灰質砂岩製。97B区SD01第3層出土。6005は、内傾して立ち上がる台部の形状から茶臼の下臼の台部片と推定したものである。外側面には、整形の際の敲打痕とみられる細かな凹凸が顕著にみられる。底径30.5cm。輝緑岩製。97B区SD01第2層出土。

石臼（第62図 第63図）

石臼（所謂「挽臼」）は、総計で13点出土した。完存品はなく、いずれも破損品である。上臼が2点、下臼が11点で、下臼の出土が目立つ。出土地点についてみると、2点が北調査区、11点が南調査区からの出土であり、南調査区に集中する傾向にある。

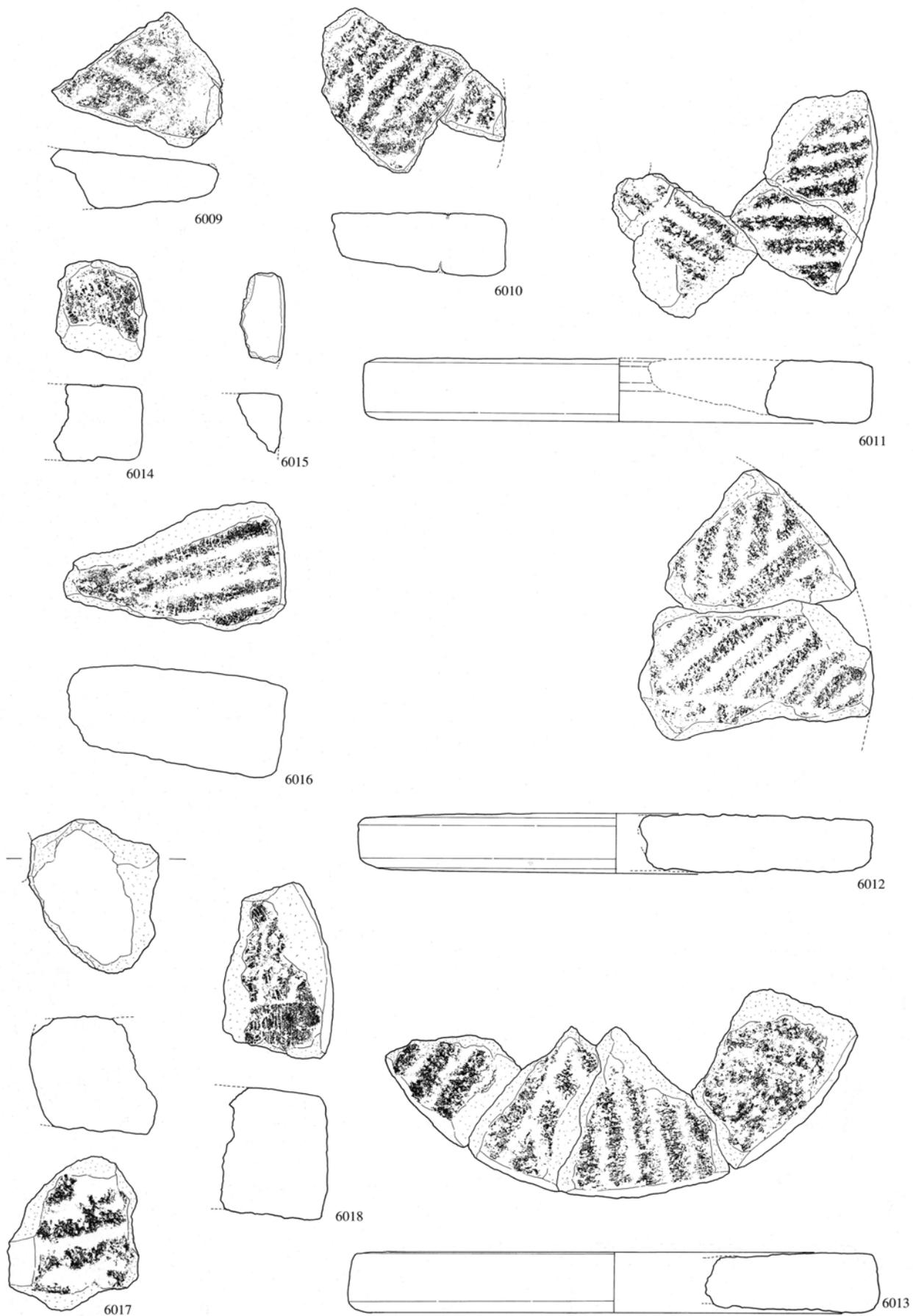
上臼 上臼は、2点出土した。ともに周縁が縁帯状に厚く、上面が皿状に凹む形態のもので、白面は使用による摩滅が著しい。6006は、白面に6分画（主溝6本副溝9?本）と推定される目をもつ上臼である。径33.0cm、周縁高5.3cm。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。97A区SE03出土。6007は、径27.5cm、周縁高5.3cmの6にくらべ幾分小ぶりの上臼である。ただ、小片であるため復元径に大きな誤差があるかも知れない。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。97A区SD02第2層出土。

下臼 下臼は11点出土した。白面は、6008を除き、いずれも使用による摩滅が著しく、目の溝は浅くなっているものばかりである。6008は、径28.2cm・周縁高10.1cmの厚手の下臼である。白面は凹凸（ノミの跡?）が著しく、使用による摩滅の形跡は認められない。白面の凹凸（ノミの跡?）からみて、何らかの事情で転用を意図して二次的加工が加えられたものかも知れない。凝灰岩製。97B区SD01第2層出土。6009・6010は、ともに97B区SE03から出土した黒雲



1:4

第62图 石製品実測図(茶臼・石臼)



1:4

第63図 石製品実測図 (石白)

母花崗岩（伊奈川花崗岩）製の扁平な下臼（6010の周縁高4.6cm）である。石材・形状からみて同一個体の可能性が高い。6011は、径36.5cm・周縁高4.6cmの扁平な下臼である。底は上げ底で、白面には推定6分画の目が刻まれている。4つの破片が接合したもので、3点が97B区SD01第2層から、1点が97A区SD02第2層からの出土品である。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。6012は、径36.8cm・周縁高4.3cmの扁平な下臼である。底面が平坦である点が6011と異なる。白面には8分画（主溝8本副溝6本）の目が刻まれている。97A区SE03と97A区SD01第3層出土品が接合したものである。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。6013は、径36.8cm・周縁高4.4cmの扁平な下臼である。底はわずかに上げ底となっている。白面には推定6分画の目が刻まれている。約34mほど離れた96ESK204と97B区SD01第3層からの出土品が接合したものである。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。6014は、径26.8cm・周縁高が5.6cmで、6010～6013に比べ幾分厚手で小型のものである。ただ小片であるため径の復元値には大きな誤差が含まれる可能性がある。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。97B区SD02第1層出土。6015は、下臼の周縁部片ではないかと推定する破片である。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。97B区SD01第2層出土。6016は、周縁高6.8cmの厚手の下臼である。周縁が僅かしか遺存しないが、復元される径は39.6cmで、今回の調査で出土した下臼のなかでは最大となる。底面は上げ底で白面のふくらみも大きく、遺存高は8.1cmをはかる。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。97B区SK106出土。6017は、厚さ8.6cmをはかる厚手の下臼片である。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。96D区SE01出土。6018は、径38.8cm・周縁高9.5cmの大型で厚手の下臼である。底は僅かに上げ底になるものと推定される。下面には製作時の調整痕とみられる浅い溝が中心部から放射状に延びる。黒雲母花崗岩（伊奈川花崗岩）製。96D区SE01出土。接合しないが、形状・石質からみて、6017と同一個体の可能性がある。

石塔

石塔は、いずれも破片で、総計10点出土した。すべて両輝花崗閃緑岩（武節花崗岩）製で、その種類としては、宝篋印塔（5点）、一石五輪塔（2点）、五輪塔（3点）がある。

宝篋印塔（第65図）

笠部片3、塔身？1、基礎1の総計5点が出土した。

笠部 6025は、笠部1/4ほどの破片である。隅飾の大半を欠くが、僅かに遺存する隅飾基部の形状から西三河式宝篋印塔d類（註）に比定されるものである。隅飾の欠損面（破面）から笠部下面にかけてが摩滅し平滑な面となっている。おそらくは裏返して砥石として転用されたものと推察される。96A区SK02北東部出土。あとの2点は、図示し得ないが、第8表1は、西三河式宝篋印塔の笠部片とみられるもので、隅飾基部の形状から第d類に比定される。全面が著しく摩耗し、全体の形状は円礫様をなす。花崗岩製ではあるが、軟らかく擦ると粉が採れるもので、あるいは人為的に擦られた結果、円礫様になった可能性もある。97B区SD02第3層出土。第8表3も、その形状から西三河式宝篋印塔d類の笠部片とみられるものである。破面にノミもしくはクサビの痕跡とみられるキズが看取でき、人為的に割られたものとみられる。97B区

SD12 第4層出土。

塔身 96A区SK02北東部より宝篋印塔の塔身片とみられるものが1点(6024)出土した。同一遺構より宝篋印塔の笠部片が出土していることを勘案して塔身片としたが、遺存状態が悪く、五輪塔の地輪もしくは宝篋印塔の基礎部片の可能性も否定し得ない。

基礎 97A区SK16より1点(6026)出土。上面の縁を反花でなく、二段の段で飾るもので、西三河式宝篋印塔の基礎部に通有の形状をなす。遺存状態は悪く、旧状を留める部分は少ない。下面の縁の一辺は、砥石として利用されたためか、斜めな平滑な面となっている。

一石五輪塔(第65図)

2点出土。6019は、一石五輪塔の火水地輪部片で、空風部を欠損する。水輪部の横断面形が隅丸方形を呈することから、方柱状の石材を加工して五輪塔としたことが推察される。なお火・水輪部が97B区SK117からの出土で、地輪部が近接する97B区SD01第3層からの出土である。6020は、一石五輪塔の火輪部片で、その形態・大きさは、6019によく類似する。97B区SD01第2層出土。

五輪塔(第65図)

いわゆる組合せ式の五輪塔は、水輪部1、地輪部2の総計3点の部材が出土した。

水輪部 96E区SD03第1層から、6023が1点出土した。遺存状態が悪く、旧状を留める部分は少ない。凹みを有する面を上にして図示したが、天地は逆かも知れない。

地輪部 97A区SD02第2層(6021)および96E区SK360(6022)から各1点出土した。ともに上面とした面は平滑で砥石等として利用された可能性がある。地輪部としたが、作業用の台石の可能性も否定できない。

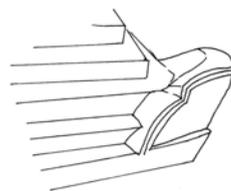
このほかに、部位を特定し得ないが石塔の可能性をもつ花崗岩製の角材片が2点ある。(第8表11・12)

出土分布等

これらの石塔の出土地点を見ると、北調査区(2点)に比べ、南調査区(8点)からの出土が多いことが注目される。その理由は定かではないが、展開する遺構の性格の差に起因すると見るべきであろう。出土した石塔の特徴としては、五輪塔の地輪部(認定に若干の問題あり)を除きいずれも破片とで、さらにその8点中の5点到砥石・摺石としての利用の痕跡が認められる、という点を指摘し得る。これは、遺跡内もしくはその周辺にあった石塔が何らかの理由で遺構内に転落、埋没したものではなく、人為的に破砕・転用されたのち廃棄されたという状況

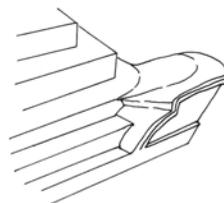
隅飾の履輪の比率 上段長 ≤ 下段長

a類



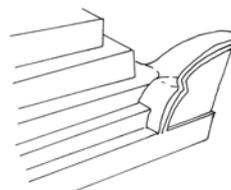
隅飾の履輪の比率 上段長 = 下段長

b類



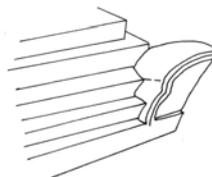
隅飾の履輪の比率 上段長 ≥ 下段長

c類

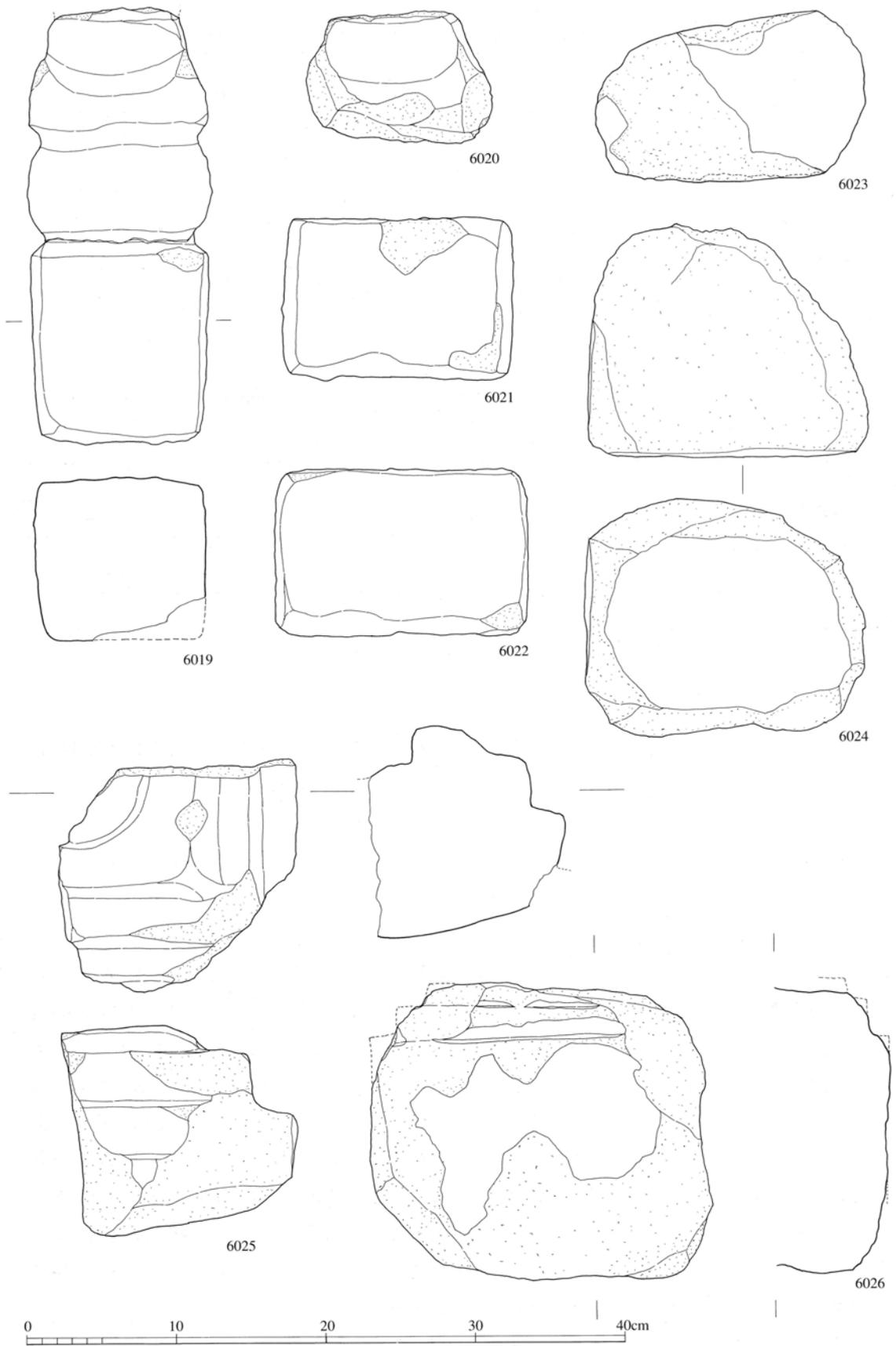


隅飾の履輪の比率 上段長 ≥ 下段長

d類



第64図
西三河式宝篋印塔 笠部の分類図



第 65 图 石製品実測図 (石塔)

1 : 4

宝篋印塔							
番号	実測図番号	部位	調査区	グリッド	遺構	石材	備考
1		笠部	97B区	KC 20j	SD02 第3層	細粒花崗岩	隅飾近くの破片
2	6025	笠部	96A区	ⅧC 16d	SK02 北東部	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	隅飾欠損
3		笠部	97B区	KC 17a	SD12 第4層	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	隅飾欠損 西三河式
4	6024	塔身?	96A区	ⅧC 16c	SK02 北西部	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	五輪塔の地輪の可能性あり
5	6026	基礎	97A区	KC 19g	SK16	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	上端部二段の段差あり 西三河式
一石五輪塔							
6	6019	火・水・地輪部	97B区	KC 18k	SK117	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	2つの遺構から出土したものが接合する
			97B区	KC 19l	SD01 第3層		
7	6020	火輪部	97B区	KC 15l	SD01 第2層	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	
五輪塔							
8	6023	水輪	96E区	KC 11e	SD03 第1層	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	遺存状態悪い 上面に凹みあり
9	6021	地輪	97A区	KC 16h	SD02 第2層	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	砥石として利用されている。
10	6022	地輪	96E区	KC 13e	SK360	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	砥石として利用されている。
石塔残欠?							
11		角材	97B区	KC 18l	SD01 第3層	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	
12		角材	97A区	KC 16k	SK01	両雲母花崗閃緑岩(武節花崗岩)	

第8表 種類別石塔一覧表

		宝篋印塔	一石五輪塔	五輪塔	その他
北調査区	96A区	笠 (2) SK02北東部			
	96B区	塔身? SK02北西部			
	96C区				
	96D区				
南調査区	96E区			水輪 (8) SD03第1層 地輪 (7) SK360	
	97A区	基礎 (5) SK16			SK01 1点
	97B区	笠 (1) SD02第3層	火・水・地輪 (6) SK117・SD01第3層	地輪 (9) SD02第2層	SD01第3層 1点
	97B区	笠 (3) SD12第4層	火輪 (7) SD01第2層		

第9表 出土地点別石塔一覧表 (番号は第1表に準じる)

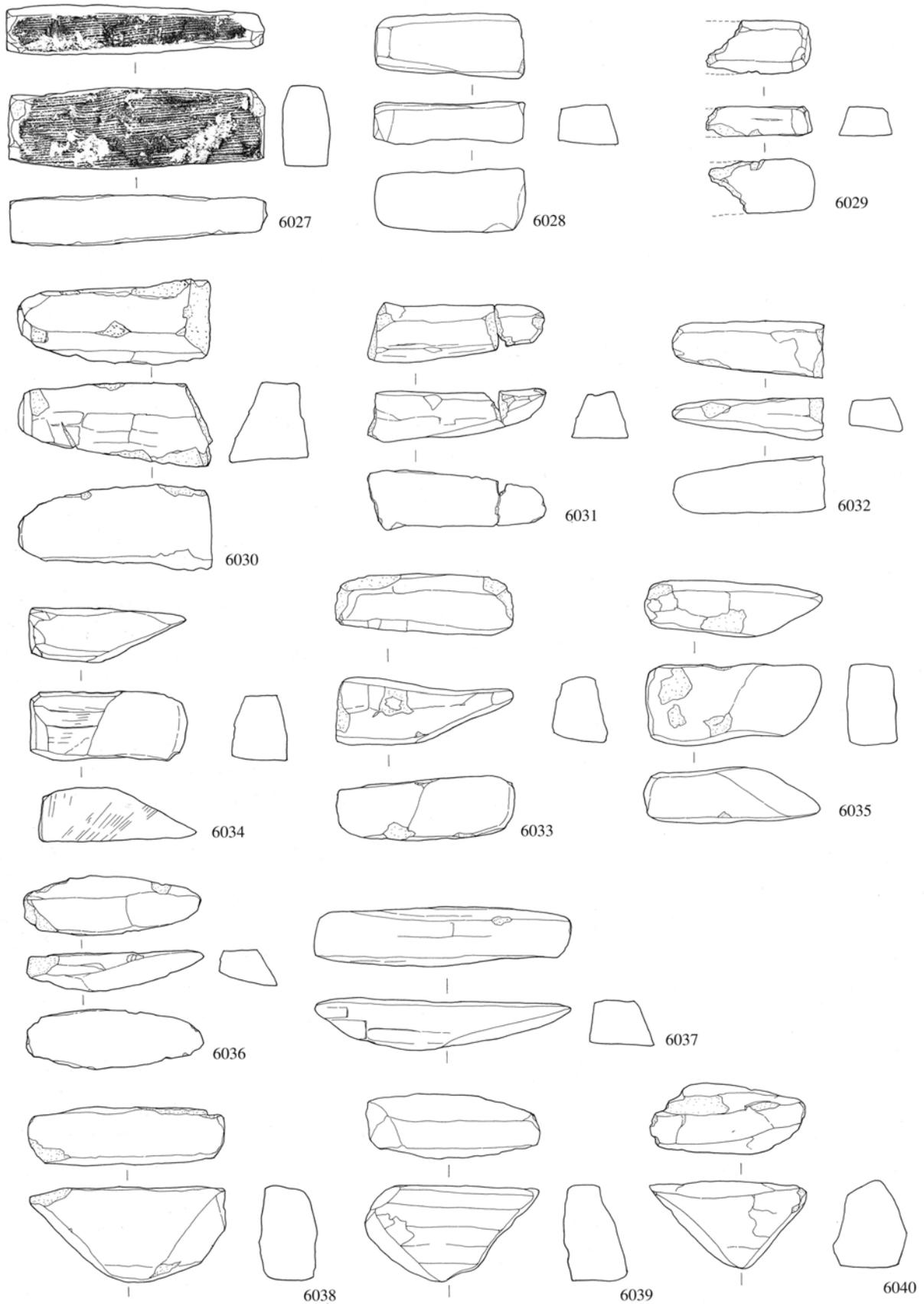
を示すものと解される。こうした石塔の扱いは、戦国時代の城郭の石垣中に数多くの石塔の部材が用いられているという状況と類似したものといえるかも知れない。

註 北村和宏1992「西三河式宝篋印塔」の再検討 愛知考古学談話会第97回定例会発表要旨

砥石

物を研ぎ磨くのに使ったとみられる砥石は、総計で53点出土した。調査区・出土遺構・石材別の内訳は第9表に示すとおりである。53点中の48点は、南調査区から出土したものである。出土点数が5点と少ない北調査区では、96D区SD06(4点)からの出土が目立つ。南調査区では、97A・B区SD02(22点)および97B区SD01(18点)から多く出土した。石質は緑色凝灰岩が圧倒的に多く(38点)、凝灰岩質砂岩・武節花崗岩(ともに3点)がこれにつぐ。これら砥石は、現段階ではそれ自身の特徴によって年代を特定することは出来ないが、出土遺構から見て、15世紀後半から17世紀後葉の年代幅におさまるものと考えられる。なおこれら砥石の個々の使用目的を明らかにすることは出来ないが、その多くが出土した96D区SD06、97A・B区SD02、97B区SD01といった遺構からは鍛冶・鑄造関連遺物が多く出土しており、鍛冶・鑄造関連に用いられたものが多く含まれている可能性がある。

以下、砥石について、素材となる石材の種類毎に報告する。(第66～68図)



第66图 石製品実測图 (砥石1)

1:3



第 67 图 石製品実測図 (砥石 2)

1 : 3



1 : 3

第 68 图 石製品実測図 (砥石 3)

緑色凝灰岩製砥石

総計38点出土した(第11表)。この内の29点を図示した。形態の上からA～C類の3類に分類する。

A類 直方体の一側面を下面とし、その下面を研ぎ面として使用するもので、横断面形が略長方形を呈するもの(6027・6034・6035)と縦長の台形を呈するもの(6028～6033・6036・6037)とに分けられる。ただこの区別は、6028・6029等のように判別しにくいものもある。幅狭な背面、幅広の両側面および小口面には鑿痕とみられる整形痕が認められるものがある。そしてその整形痕には、各面の長軸方向にほぼ平行して着く、という規則性がある。鑿(鑿?)の先端は平らなものが殆どであるが、一部に櫛歯状のものを用いたものがある(6027)。下面の研ぎ面には、背面に対して水平に研ぎ減るもの(6027～6029)と、使用時の力の加減からか斜めに研ぎ減る(6030～6032・6036・6037)ものがある。6033は、下面を水平にして使用した後、意識的にその半分を集中的に使用したためか、下面の半分が斜めに研ぎ減っている。6034・6035は下面を研ぎ面とした後、一側面の小口側半分ほどを研ぎ面として使用したため、側面から小口にかけてが斜めに研ぎ減ったものである。6036・6037は下面の研ぎ減りが著しいもので、一部上面(背面)にも研ぎ面とした形跡が認められる。A類としたが、後述のB類の使用が著しく進んだものの可能性も否定できない。

B類 縦断面形が三角形を呈し、三角形の一辺を背とした場合の腹の二辺が研ぎ面となるものである。横断面形はその殆どが台形を呈する(6038～6045・6047・6048)が、稀に長方形を呈するもの(6046)もある。ただ使用前の原形については、当初より三角形を呈していたのか、或いはもとは直方体をなしており使用によって、三角形になったのか定かではない。ただ背面および両側面には鑿痕とみられる整形痕が背と平行して認められるものがあり、これはA類の整形痕の在り方と酷似している点を指摘し得る。6038～6041は、典型的なものであるが、6040の背面には研ぎ面として少し用いられた痕跡がある。6042・6043・6046は、ほぼ中央で折損した破片である。6044・6045は、腹の研ぎ面の一辺からさらに側面方向にかけてをも研ぎ面として使用しているものである。6047は、6042などの破損品の破面を研ぎ面として使用したものである。6048は小型品で、これは使用が著しく、背面までも使用し小型になってしまったものと考えられるものである。

C類 縦断面形が菱形を呈し、上下各面二面づつの研ぎ面をもつものである。形状のばらつきが大きく、当初からこうした形態を為していたとは考え難いものである。幅狭な6049～6052は、上記B類の背面を二方向から研ぎ面として使用した結果と見なすこともでき、幅広な6053～6055については、例えばB類の6044・6045あるいはA類の6034・6035の両側面を研ぎ面とした結果とも、A類の6033の斜めの研ぎ面の面を背面を研ぎ面とした結果生じた形態ともみることができる。この点については、なお検討を要すが、ここでは指摘するに留めておきたい。

以上、緑色凝灰岩製の砥石について3類に分類して示してみた。使用の途上で何らかの理由によって廃棄された場合は、使用途上の形態を示し、使用の限界まで達したため廃棄されたもの場合は、使用の最終形態を示す、という砥石のもつ性格上、果たしてこうした形態分類が有効か否か問題はあろう。今後の課題としておきたい。

流紋岩質凝灰岩製砥石

2点出土した。石質は相違するが、6056（97A区SD02第2層出土品）は、緑色凝灰岩製砥石のB類に、6057（97B区SD01第2層出土品）はC類に相当する形状のものである。

凝灰岩製砥石

2点（6058・6059）出土した。ともに97A区SD02第2層出土品で、直方体の一側面を研ぎ面とするものである。6058は横断面形が長方形を呈し、6059は長台形を呈する。

泥岩製

1点（6060）出土した。板状で、扁平なもので、表裏両面を研ぎ面としている。表面は研ぎ減りが著しく凹んでいる。側面も平滑で、あるいは使用しているかも知れない。97A区SD02第2層出土。

砂岩製砥石砥石

図示していないが、1点出土した。97B区SD01第1層と第2層出土品が接合したもので、扁平で、断面形が扁平な楕円形を呈する。表裏面のみならず、全面が平滑で、おそらくは全面を研ぎ面としていた可能性がある。

凝灰岩質泥岩製

図示していないが、96C区SD05第2層から1点出土した。方柱状のもので、一側面を研ぎ面としている。

凝灰岩質砂岩製砥石

3点出土した。図示したのは1点（6061）である。6061は今回の出土品では大型の部類に属するものである。扁平な直方体で、剥離など破損が目立つが、表裏両面と側面の一面を研ぎ面としている。97B区SD01第3層出土。このほかに97B区SK106出土品（直方体の一面を研ぎ面とする）と97B区SD01第3層出土品（破損品）がある。

両輝花崗閃緑岩（武節花崗岩）製砥石

3点出土した。肉眼観察により中粒で黒雲母のほかに白雲母を多量に含むことなどから遺跡から近い三河の武節花崗岩としたが、厳密に産地を特定したわけではない。6062は角柱状のもので縦長の研ぎ面を六面もつ。各研ぎ面とも研ぎ減りで緩く凹んでいる。転用品とみられ、下面および側面の一部に原形の表面が一部みられる。石塔類からの転用であろうか。97B区SD01第3層出土。6063は、不定形の破損品で、表裏面および側面の一面が研ぎ面となっている。裏面と側面の研ぎ面は垂直となっている。角材の転用であろうか。97B区SE05出土。6064は、石臼類の周縁部片の転用品かと思われるもので、側平面は円弧を呈する。表裏面と側面の二面が研ぎ面となっている。97B区SD01第3層出土。なおこのほかに両輝花崗閃緑岩（武節花崗岩）製の石塔を砥石に転用したとみられるものがある（前述の石塔の項を参照）。

細粒花崗岩製砥石

図示していないが、2点出土した。97B区SE01出土品は不定形を呈す破損品である。97B区SD01第4層出土品は、断面略正方形の角柱状品で、四面を研ぎ面とするが、各面とも研ぎ減りして凹んでいる。

北調査区

調査区	96A	96B	96C	96D
遺構			SD05第2層	SD06第2層 SD06第3層
緑色凝灰岩				3 1
流紋岩質凝灰岩				
凝灰岩				
泥岩				
砂岩				
凝灰岩質泥岩			1	
凝灰岩質砂岩				
花崗岩(武節)				
細粒花崗岩				
遺構毎の小計	0	0	1	4
調査区毎の小計	0	0	1	4
北調査区			5	

南調査区

調査区	96E								97A										97B						
	SK09	SK76	SE03	SD03第1層	SD03第2層	SD02第1層	SD02第2層	SD02第3層	SD02第1層	SD02第2層	SD02第3層	SD01第1層	SD01第2層	SD01第3層	SD01第4層	SK01	SE05	SK106							
緑色凝灰岩	1	1	1		1	10	5		1	1	2	2	4	5											
流紋岩質凝灰岩								1																	
凝灰岩				1		1																			
泥岩				1																					
砂岩													1												
凝灰岩質泥岩																									
凝灰岩質砂岩														2			1								
花崗岩(武節)														2			1								
細粒花崗岩															1	1									
遺構毎の小計	0	1	1	1	2			18		3				18		1	1								
調査区毎の小計	0				23				21		3			25											
南調査区									48																

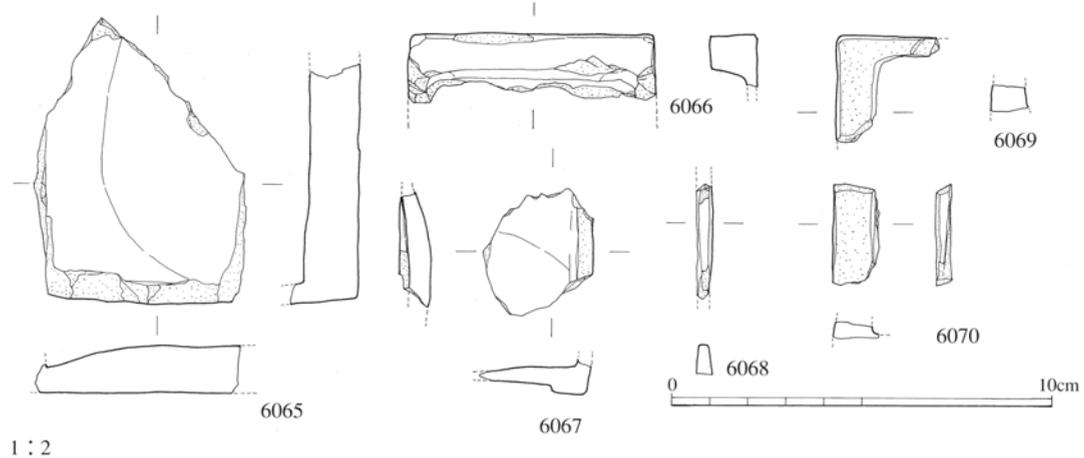
第10表 石材別砥石一覧表

調査区	96D区			97A区					97B区							小計
	SD06第2層	SD06第3層	SK09	SK76	SE03	SD03第2層	SD02第1層	SD02第2層	SD02第1層	SD02第2層	SD02第3層	SD01第1層	SD01第2層	SD01第3層	SD01第4層	
A類	6037	45	6034			6032	5028 5033	6027	6031		1点	1点	6029 6036	6030	ほか1点	16点
B類	6047			6043			6044 ほか2点	6042 6048		6041	6039	6046	6040		6045 ほか1点	13点
C類	6049				6055		6051 6052 ほか1点	6050 6053							6054 ほか1点	9点
遺構毎小計	3点	1点	1点	1点	1点	1点	15点	19点		4点			11点			
調査区小計	4点			19点					15点				11点			総数38点

第11表 緑色凝灰岩製砥石一覧表(番号は実測図番号)

硯

硯は、4点出土した(第69図)。6065は、陸部の破片で、周縁部の殆どは欠損している。底面は平らで、遺存長7.6cmと、他のものに比べ大型品である。明褐色を呈する赤色頁岩製。97B区SD01第3層出土。6066は、直線的な周縁部の形状からみて平面長方形の硯の海部片である。



第68図 石製品実測図(硯)

幅6.4cmで、比較的小振りのものである。海部には墨の付着が認められる。珪質頁岩製で、96E区SD13第3層出土。6067・6068は、ともに珪質頁岩製で、その大きさ・形状からみて同一個体と考えられるものである。6068は、遺存長3.0cm・上端幅0.2cm・現高0.8cmの周縁部片で、その高さからみて海部周辺のもの可能性が大である。墨の付着が認められる。6067は、海から陸部にかけての破片で、周縁の基部が僅かに遺存する。遺存長3.3cm。底面は側端部を残し、陸部の中央を削り上げ底としている。2点とも96E区SD13第1層出土。6069・6070は、ともに珪質頁岩製で、その大きさ・形状からみて同一個体と考えられるものである。6069は、海部の周縁部片で、遺存長2.8cm。6070は、海部から陸部への移行部の周縁部片で僅かに陸部が遺存する。遺存長2.7cm。直線的な周縁部の形状からみて平面長方形の硯が想定される。なおこのほかに図示しなかったが、同一個体とみられる周縁部片が1点出土している。いずれも96E区SE05出土。

第8節 鍛冶・鋳造関連遺物

明確な鍛冶・鋳造関連遺構は認められなかったが、鞆羽口・トリベ・埴塙・鉍滓などの鍛冶・鋳造関連遺物は、総数で27点出土した（第70図・第12表）。

鞆羽口

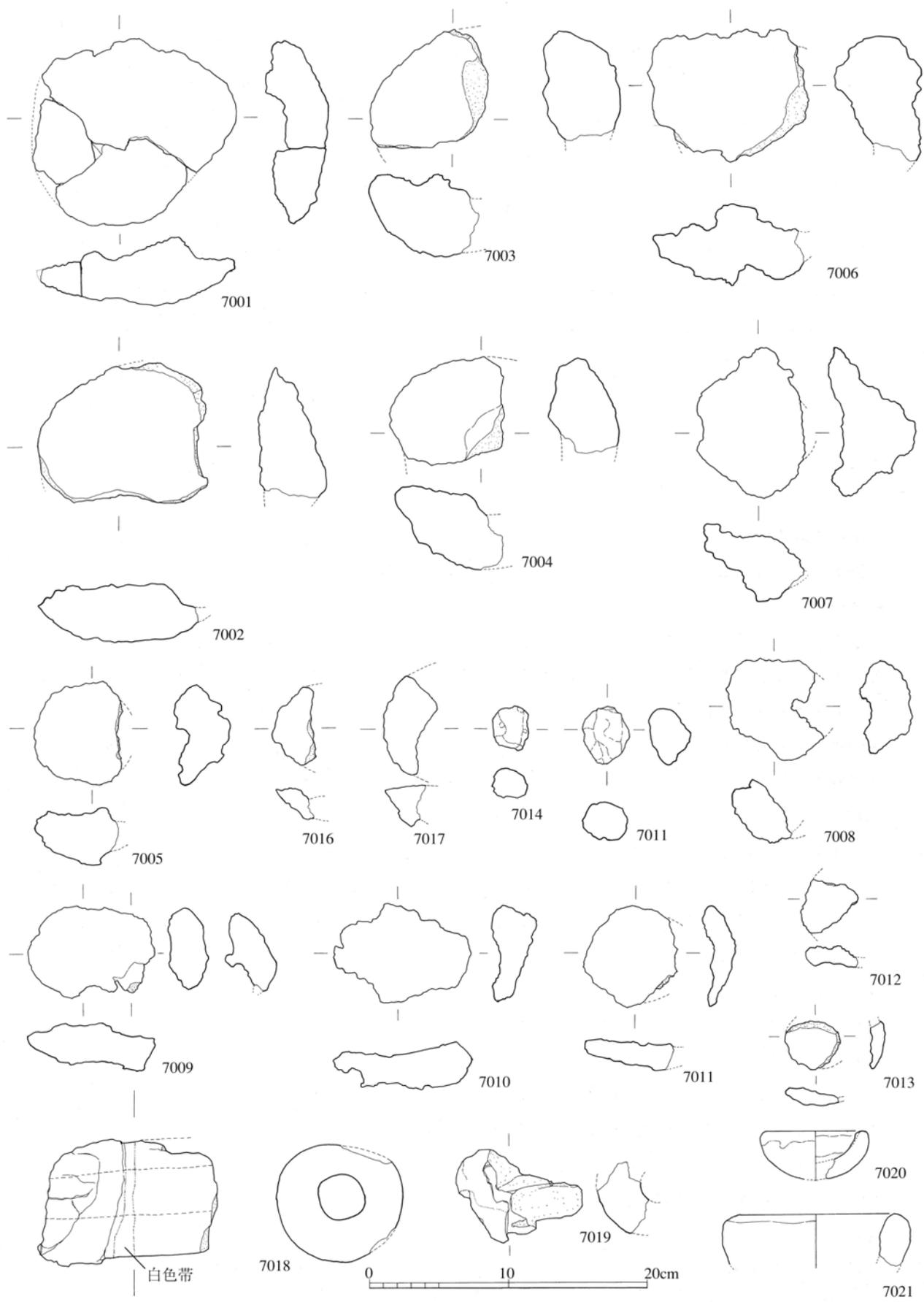
3点出土。いずれも砂粒を含むが精良な胎土である。7018は、鞆羽口の炉側の先端部片である。炉内に入る先端部分は火熱のため溶融し変形するとともに厚く鉍滓が付着している。この炉内の先端部分と薄茶褐色を呈する炉外の筒部との境は帯状に白色に変色している。この白色帯が炉壁に埋め込まれる部分と考えられるもので、これより炉内への挿入角度は85度前後と推定される。遺存長12.7cm、筒部外径8.9cm、通風孔径3.2cm。96E区SD13第2層出土。7019も鞆羽口の炉側の先端部の小片で、筒部の外表面の大半は剥離するなど遺存状態は悪い。炉内に入る先端部分には鉍滓が付着している。この付着した鉍滓の筒部側（鞆側）に炉壁の一部が付着しており、それより推定される炉壁の位置と先端との間は4cmほどで非常に短く、先端部分の火熱による溶融がかなり進行していたことを伺わせる。炉内への挿入角度は85度前後と推定される。遺存長9.0cm。97B区SD01第3層出土。このほかに図化し得ていないが鞆羽口の先端部片が1点ある（第11表23）。炉内に入る先端部分片で、鉍滓の付着が著しいものである。遺存長5.6cm。96D区SD06第3層出土。

トリベ

1点出土。7020は、厚手で底の丸い浅い椀形のものである。砂粒混じりの胎土で、器面は灰色を呈する。口縁部から内面にかけて緑色を帯びた赤褐色の鉍滓が付着している。緑色の発色（サビ）からみてその鉍滓には銅の成分が含まれているものと推察できる。口径7.4cm、器高3.6cm。97A区SK10第3層出土。

埴塙

埴塙ではないかと推察するものが1点出土した。7021で、その形状から埴塙ではないかとしたが、鉍滓の付着はなく、埴塙との推察が正しければ未使用品ということになる。口縁部片で、



第70図 鍛冶・鑄造関連遺物実測図

鉾 滓									
番 号	実測図番号	調査区	グリッド	出土遺構	種類	長径×短径×最大厚(cm)	磁石の反応の有無	備考	
1	7001	96D	ⅧD 16 c	SD06 第2層 第3層	鉾滓Ⅰ類	14.7×13.6×5.1	無	上面に炭化物の混入あり	
2	7002	97B	ⅨC 16m	SD01 第3層	鉾滓Ⅰ類	12.1×10.2×4.9	無		
3	7003	97A	ⅨC 18 i	SK28	鉾滓Ⅰ類	8.6×8.4×5.6	無	四分割滓	
4	7004	97A	ⅨC 16 l	SD09	鉾滓Ⅰ類	8.2×7.8×6.2	無	四分割滓 炭化物片混入	
5	7005	97A	ⅨC 18 i	SD02 第1層	鉾滓Ⅰ類	7.5×6.2×4.2	有		
6	7006	97B	ⅨC 19m	SD01 第4層	鉾滓Ⅱ類	11.2×9.6×5.9	有?	炭化物片混入	
7	7007	96D	ⅧD 16a·b	SD06 第1層	鉾滓Ⅱ類	11.0×7.8×5.5	有		
8	7008	97B	ⅨC 15m	SD01 第3層	鉾滓Ⅱ類	7.3×7.2×4.8	有	炭化物片の混入が著しい	
9	7009	96B	ⅨC 20 l	SD05	鉾滓Ⅲ類	9.2×6.7×3.7	有	錆化土の付着が著しい	
10	7010	96B	ⅨC 20 l	SD06	鉾滓Ⅲ類	9.9×7.2×3.2	有	錆化土の付着が著しい	
11	7011	97A	ⅨC 15 h	SD02 第1層	鉾滓Ⅳ類	7.4×6.7×2.4	有	炭化物片の混入あり	
12	7012	97B	ⅨC 19 l	SD01 第3層	鉾滓Ⅳ類	4.2×3.8×1.5	有	上面に炭化物の混入あり	
13	7013	96B	ⅨC 20 l・m	レンヂ(SD05・SD06)	鉾滓Ⅳ類	4.0×3.6×1.3	有		
14	7014	97B	ⅨC 14m	SD01 第1層	鉾滓Ⅴ類	3.1×2.6×2.2	無		
15	7015	97B	ⅨC 15 h	SD02 第1層	鉾滓Ⅴ類	4.2×3.4×3.0	無		
16	7016	97B	ⅨC 19 l	SD01 第3層	鉾滓Ⅰ類		有?		
17	7017	97B	ⅨC 20 t	SD07 第1層	鉾滓Ⅰ類		有?		
18	97A	ⅨC 17 i	SD02 第1層	鉾滓Ⅰ類			有		
19	97B	ⅨC 17 l	SD01 第3層	?			有		
20	97A	ⅨC 17 i	SD02 第1層	?			有		

輪羽口ほか									
実測図番号	調査区	グリッド	出土遺構	種類	長さ	径	通風孔径 (cm)	備考	
21	7018	96E	ⅨC 8 a	SD13 第2層	輪羽口	12.7	8.9 3.2	先端部片	
22	7019	97B	ⅨC 18 l	SD01 第3層	輪羽口	9.0	— —	先端部片	
23		96D	ⅧD 16 b	SD06 第3層	輪羽口	5.6	— —		
24	7020	97A	ⅨC 19 i	SK10 第2層	トリベ	口径7.4cm	推定高さ3.6cm	銅錆あり	
25	7021	96D	ⅧD 19・20 f	SD06 第3層	埴塼?	口径11.2cm	—		
26		97B	ⅨC 15m	SD01 第3層	炉壁?	現長 5.5cm			
27		97B	ⅨC 19 l	SD01 第3層	炉壁?	現長1.5cm			

第12表 鍛冶・铸造関連遺物一覧表

口径11.0cmの厚手の椀形のものである。胎土は砂粒・小礫が混じるが概して精良で、暗灰褐色を呈す。96D区SD06第3層出土。

炉壁片

図示し得ないが、炉壁片と推察できるものが2点出土した(第12表26・27)。ともに砂粒混じりの灰赤褐色を呈するもので、灰白色の鉾滓が付着する。ともに97B区SD01第3層出土。

鉾滓

鉾滓は、総数で20点が出土した。その成分分析については機会を得ていないが、大半が磁石に反応を示すことからみて、鉄滓ではないかと推察する。これらの鉾滓は、その形状・大きさなどからⅠ～Ⅴ群の5つに大別される。ただしこの大別が何を示唆しているのかという点については今後の課題である。

Ⅰ群 平面形が略円～楕円形を呈し、下面が大きな凹凸の少ない型から外した様な椀形をなすもの。大きさに、13cm前後のもの(7001～7004)と、7cm前後のもの(7005)の大小がある。7001の上面および7003には、炭化物片が混じる。7001は、同一の遺構から出土したものの3点が接合したものである。7003および7004は、約4分の1に分割された破片である。なお7001～7004は、磁石(普通の)に対して反応を示さない。7014・7017はⅠ群の周縁部片と考えられるものである。このほか小片が1点(第12表18)ある。

Ⅱ群 全体としては椀形をなすが、平面形はどちらかといえば不定形にちかい略円～楕円形を呈し、下面は凹凸が著しく、底頂部がどちらか一方の周縁に片寄りそれに対応する位置の上面が凹むもの。大きさに長径11cm前後のもの(7006・7007)、7cm前後のもの(7008)の大小がある。7006・7008には炭化物片が混じる。7006は磁石に対する反応をほとんど示さない。

Ⅲ群 平面形は略楕円形をなし、薄手で下面は凹凸が著しく椀形とならないもの。2点(7009・7010)出土し、ともに錆化土の付着が著しく、磁石への反応を示す。

Ⅳ群 平面形が略円形を呈し、下面が凹凸の少ない皿形をなすもの。大きさに、7 cm前後のもの(7011)と、4 cm前後のもの(7012・7013)の大小がある。7011および7012の上面に炭化物片の付着が認められる。いずれも磁石への反応を示す。

Ⅴ群 非常に軽量の小円盤状のものである。7014・7015の2点が出土した。ともに磁石への反応を示さない。

このほかに、碎片でその群別が不明で、図化し得ない鉍滓が2点ある(第12表19・20)。

以上、鍛冶・鑄造関連遺物について、種別に概要を記してきた。このほかに砥石類が、関連遺物としてあげられるが、これについては石製品の項に一括した。

最後に、その年代および出土地点等に関して簡単にまとめておきたい。まず遺物の年代については、遺物個々の型式学的特徴で年代を特定することは現段階では出来ないが、出土遺構から判断して概ね15世紀後半～17世紀後葉の年代幅におさまるものと考えられる。個々の遺構の時期については第7章考察を参照されたいが、97B区SD01第3層出土品がみられることからみて鍛冶・鑄造が16世紀代に遡ることは確実に考えられる。関連遺物の出土地点をみていくと97B区SD01の南西角周辺の遺構に出土分布が集中する傾向が看取され、付近に鍛冶・鑄造遺構の存在が想定されるが明確な関連遺構は検出されなかった。後世の開墾等により失われてしまったのであろうか。このほか96D区SD06の北西角付近に鉍滓の若干の集中をみる。

第9節 土製品

土器・陶磁器および瓦類以外の土製品としては、棒状土製品がある。

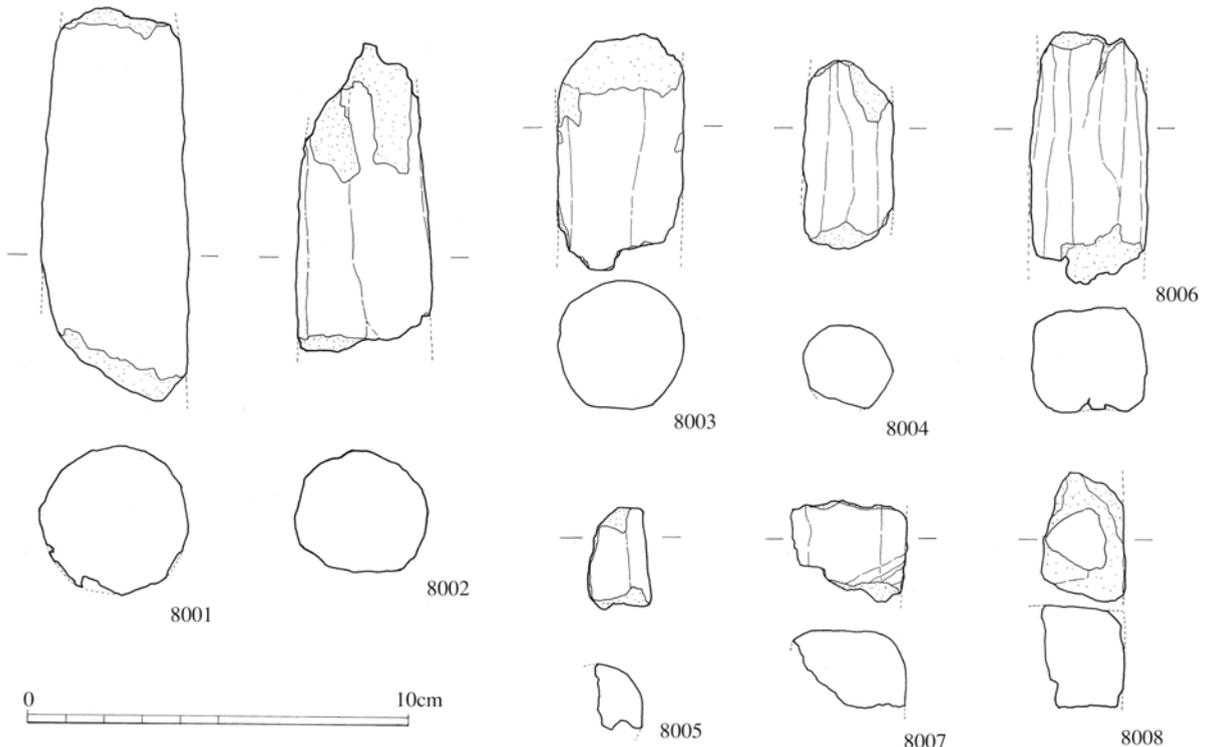
棒状土製品

棒状土製品としたものは、粘土板を巻いたり、粘土塊を転がして棒状に成形したもので、土器と同様の焼成がなされている。何に使用したものなのか判然としない用途不明品である。総計20点が出土した(第13表)。いずれも両端が欠損するもので全形を窺い知るものはないが、横断面形が隅丸方形ないし長方形を呈する方柱状品と円形ないし楕円形を呈する円柱状品の二種に大別できる。さらに胎土中に砂粒が多量に混じるものと僅かに混じるものとの二者に、また胎土の色調が縞状をなすものとなさないものとに細別される。なおこの胎土の色調が縞状を呈するのが粘土の特性に由来するものなのか、二次的な加熱等によるものなのか定かにし得ない。以下、主なものについて報告する。

円柱状品 総計で14点(推定1点含む)が出土した。図示した5点(第71図)は、いずれも両端部が欠損し、全形を窺い知ることはできないが、8001・8002から推察すると、一方が太くもう一方が細身になる様に見受けられる。8001は、径5.0cm、遺存長10.5cmほどのものである。外表面には、植物繊維(茎など)の圧痕が所々に認められる。胎土は精良で、砂粒の混入はほとんどみられない。外表面は灰白色～灰赤色～にぶい赤橙色を呈し、胎は赤褐色(～桃色)と灰白色の縞状を呈する。96E区SD03第3層出土。8002は、径3.5cm、遺存長8.2cmほどのものである。外表面には、8001と同様に、植物繊維(茎など)の圧痕が所々に認められるほか、砂

粒をあまり含まない胎土および外表面が灰白色～灰赤色を呈し胎が赤褐色（～桃色）と灰白色の縞状を呈することなど、1と同一個体の可能性が想起される。ただ8002は、96E区SD03の第1層出土で、出土層位が8001とは異なる。8003は、径3.2cm前後、遺存長6.2cmほどのものである。8001・8002に比べ整形（ナデ・オサエ調整）が丁寧で、断面形もより円形である。破面の観察から粘土板を巻いて成形したものと推定する。砂粒混じりの胎土で、灰黄褐色の外表面には、黒斑がみられる。胎は灰赤色～赤褐色を呈す。96E区SE01出土。8004は、径2.2cm、遺存長5.0cmほどの細身のものである。外面の整形は粗雑で、断面形は多角形状をなす。胎土は砂粒混じりで、淡赤橙色～灰白色の外表面には、黒斑がみられる。胎は灰白色を呈す。97A区SK21第3層出土。8005は、遺存長2.7cm、復元径2.7cm前後のものである。砂粒混じりの胎土で、外表面は灰赤色、胎は赤褐色（～桃色）と灰白色の縞状を呈する。97A区SD03第2層出土。

方柱状品 総計で7点出土した。いずれも小片で全形を窺い知り得るものはない。この内の3点を図示した（第71図）。8006は、両端が欠損するもので、遺存長6.7cm。断面形は一辺3.0cm前後の隅丸方形を呈する。外表面に、編物痕が認められることからみて、編物を敷いた上で粘土を転がすなどして成形したものと推測する。砂粒混じりの胎土で、淡黄～灰黄褐色を呈する。外表面には帯状に赤褐色に変色した箇所がある。97B区SD01第4層出土。8007は、97B区SD01第2層の出土の小片である。遺存長2.7cmで、一辺3.0cmほどの隅丸方形の断面形を呈する。外面には、板等の押圧痕が全体に認められるほか、紐状のものの圧痕2条みられる。砂粒混じりの胎土で、外表面は褐灰色、胎は赤褐色を呈する。8008は、96A区の南東部における遺構検出時に出土した小片である。遺存長3.5cmで、方形の断面形を呈する。砂粒混じりの胎土で、外表面はにぶい赤橙色を呈し、胎は赤褐色（～桃色）と灰白色の縞状を呈するほか、黒斑がみられる。



第71図 土製品実測図

1 : 2

番号	実測図番号	調査区	グリッド	遺構	層位など	種別	砂粒の有無	縞状構造の有無	備考
1	8001	南調査区	96E	IXC・12f	SD03	第3層	円柱状	無	有
2	8002	〃	96E	IXC・13g	SD03	第1層	円柱状	無	有
3	8003	〃	96E	IXC・14b	SE01		円柱状	有	無
4	8004	〃	97A	IXC・18k	SK21	第3層	円柱状	有	無
5	8005	〃	97A	IXC・16h	SD03	第2層	円柱状	有	有
6	8006	〃	97B	IXC・18l	SD01	第4層	方柱状	有	無
7	8007	〃	97B	IXC・20o	SD01	第2層	方柱状	有	無
8	8008	北調査区	96A	IXC・18g	検出I	茶褐色土	方柱状	有	無
9		南調査区	97B	IXC・18m	SD05		円柱状	有	有
10		〃	97B	IXC・18m	SD01	第1層	円柱状	無	有
11		〃	97B	IXC・15m	SD01	第2層	円柱状	有	有
12		〃	97B	IXC・15m	SD01	第2層	(円柱状?)	有	有
13		〃	97B	IXC・15m	SD01	第2層	方柱状	無	無
14		〃	97A	IXC・18k	SK21	第3層	円柱状	有	有
15		北調査区	96A	東トレンチ			方柱状	有	有
16		南調査区	97B	IXC・20q	SD01	第3層	方柱状	有	無
17		〃	97B	IXC・16s	SK86		円柱状	有	無
18		〃	97B	IXC・16s	SK87		円柱状	有	無
19		〃	97B	IXC・20o	SD01	第2層	円柱状	有	無
20		〃	97B	IXC・20o	SD01	第2層	円柱状	有	無

ほかに4点あり同一個体?

第13表 棒状土製品一覧表 (2cm角以下は省略)

年代等 これら土製品の年代については、それ自身の特徴(型式)で特定することは現状では困難であるが、遺構内で共伴する遺物からみて、ひとまずこれら棒状土製品は、最大限、15世紀後半から17世紀末(瀬戸・美濃窯産陶器編年の古瀬戸後期第4段階～連房式登窯第5小期)にかけてという年代幅におさまるものと推定する(註)。そして一応層位的裏付けのある資料の97B区SD01出土品についてみてみると、方柱状品が下層(第4～2層)から多く出土し、円柱状品が上層(第2～1層)から出土する、という傾向にあることが窺われる。こうした出土状況が一般的な在り方で、円柱状品が後出的なものとして推定するにはなお資料の蓄積を待つ必要がある。その用途を含め今後の課題である。

註 この種の遺物については、これまでいくつかの遺跡でその出土が報告されているが、その年代観は一致をみていないようである。例えば、当遺跡の南南東約3.3kmに所在する惣作遺跡(愛知県大府市)の発掘調査において出土した「土製支脚」は、図で見える限りここで云う棒状土製品と類似するものである。その「土製支脚」は、「第6トレンチ」において「角形土器(製塩土器 筆者註)」および「整形痕のある奈良朝須恵器が4例ほど」とともに出土(遺構出土ではなく同一層)し、報告者はこの「土製支脚」を奈良朝様式須恵器の時期のものとして報告されている(加藤岩蔵『惣作遺跡』愛知県大府市教育委員会1972年)。また名古屋市見晴台遺跡第12次発掘調査において、「東方の遺構」から棒状土製品(断面円形～楕円形状 報告者は「土棒」と呼称)が中世陶器とともに出土している(岡本俊朗ほか『見晴台遺跡第12次・第13次発掘調査の記録』名古屋市教育委員会ほか1978年)。あるいは相当長期間にわたって作られ続けたものなのであろうか。

第10節 漆製品

今回の調査で出土した漆製品は、腐蝕・土圧による変形など遺存状態が悪いものが多いが、総計で198点を数える。そのうちの大半は、南調査区で出土（182点）したもので、なかでも城館の濠と推定される97B区SD01からの出土が顕著で108点を数える。漆製品の種類としては、その殆どが椀類で、その他のものは容器の蓋・箸が極少量認められるに過ぎない。椀には、深手のもの浅手のもの、大きさの大小、高台の形状の相違など様々の形態のものがあり、総計で198点を数える。なお皿類との区別が不十分で、椀としたもののなかに皿類が含まれている可能性がある。容器の蓋としたものには、いずれも挽物で、円蓋状の頂部に垂下する体部（口縁部）がつく形態のものと円蓋状の形態のもので裏面にかえりがつくものがある。箸としたものは、両端を欠く円棒状のものでその外面に漆（黒・赤）が塗布されているもので、その形状から推定した。これら漆製品の年代については、個々の型式学的特徴にもとづいて特定することは現段階では出来ないが、共伴遺物からいずれも15世紀後半から17世紀末（瀬戸・美濃窯産陶器編年の古瀬戸後期第4段階～連房式登窯第5小期）にかけてという年代幅におさまるものと推定する。個々の年代観については、第7章考察で示す遺構の年代を参照されたいが、とりわけ96E区SE01および97B区SE05出土品は15世紀後葉から16世紀初頭（同編年の大窯第1段階）、96E区SE04および97A区SE02出土品は15世紀後葉から16世紀中葉（同編年の大窯第1段階～第3段階）、また97B区SE04出土品は15世紀後半から16世紀中葉（同編年の古瀬戸後期第4段階～大窯第3段階）という年代観が与えられるものである。溝出土品については、年代を特定し難いが、多量に出土した97B区SD01に関して云えば、第4層からは15世紀後半から16世紀中葉の時期の遺物がまとまって出土しており、同層位出土品は概ねその年代観が与えられるものとする。

以下、漆製品個々の出土地点、層位、種類（器種）、樹種については表示（第15表）するにとどめる（註）。

註 これら漆製品については、紙幅の都合で掲載できないが、北野信彦氏（くらしき作陽大学）により、塗り・木取り・樹種など詳細な分析・検討をいただいている。

調査区 遺構	北調査区				南調査区		
	96A	96B	96C	96D	96E	97A	97B
SD	SD01(1)	SD01(1)	SD01(1)		SD02(7)	SD02(16)	SD02(7)
			SD06(1)	SD06(6)	SD13(2)		SD01(108)
		SD05(2)	SD05(1)				SD07(10)
							SD12(3)
SK					SK271(5)	SK10(9)	SK111(3)
					SK272(1)	SK25(2)	SK87(1)
SE					SE01(1)	SE02(1)	SE04(1)
				SE01(2)	SE04(1)		SE05(2)
SX	SX02(1)						
トレンチ						T.03(1)	T.04(1)
調査区毎	2	3	3	8	17	29	136
小計(点)	16				182		
総計(点)					198		

()内の数字は出土点数

第14表 漆製品 調査区別出土点数一覧表

番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構	層位等	器種	材質	備考
1	南調査区	97A	IXC・19 i	SD02	第2層	椀	トチノキ	
2	〃	97A	IXC・18 i	SD02	第2層	椀	トチノキ	
3-1	〃	97A	IXC・19 i	SK10	第2層	椀	トチノキ	
3-2	〃	97A	IXC・19 i	SK10	第2層	椀	トチノキ	
4	〃	97A	IXC・19.20 i	SD02	第2層	椀		
5	〃	97A	IXC・19 h	SK10	第2層	椀	トチノキ	
6	〃	97A	IXC・19 i	SK10	第2層	椀	カツラ	
7-1	〃	97A	IXC・20 i	SK10		椀	トチノキ	
7-2	〃	97A	IXC・20 i	SK10		椀	ブナ	
8	〃	97A	IXC・16 l	SK25		椀	ブナ	
9	〃	97A	IXC・15 h	SD02	第2層	椀	トチノキ	
10-1	〃	97A	IXC・19 i	SD02	第2層	椀	トチノキ	
10-2	〃	97A	IXC・19 i	SD02	第2層	椀	不明広材	
11	〃	97A	IXC・19 i	SD02	第2層	椀	トチノキ	
12	〃	97A	IXC・20 i	SK10	第2層	椀	トチノキ	
13	〃	97A	IXC・16 g	SE02	炭化物層	椀	サクラ皿	
14	〃	97A	IXC・17 h	SD02	第1層	椀	トチノキ	
15-1	〃	97A	IXC・19 j	SD02	第2層	椀	カバノキ	
15-2	〃	97A	IXC・19 j	SD02	第2層	椀	カバノキ	
15-3	〃	97A	IXC・19 j	SD02	第2層	椀	カバノキ	
16	〃	97A	IXC・16 l	SK25	第2層	椀	ブナ	
17	〃	97B	IXC・20 t	SD07	第2層	椀	エゴノキ	
18	〃	97A	IXC・20 i	SK10	第2層	椀	トチノキ	
19	〃	97A	IXC・19 i	SD02	第2層	椀	トチノキ	
20	〃	97A	IXC・15 h	SD02	第2層	椀	トチノキ	
21	〃	97A	IXC・18 i	SD02	第1層	椀	ケヤキ	
22	〃	97A	IXC・19 i	SD02	第1層	椀	トチノキ	
23	〃	97A	IXC・19 h	SK10	第2層	椀	トチノキ	
24	〃	97A	IXC・17 i	SD02	第2層	椀	ブナ	
25	〃	97A		T. 03		椀	トチノキ	
26	〃	97B	IXC・16 m	SD01	第3層	椀	ブナ	
27	〃	97B	IXC・17 l	SD01	第3層	椀	クリ	
28	〃	97B	IXC・17 l	SD01	第2層	椀	クリ	
29	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第2層	椀	ブナ	
30	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第4層	椀	クリ	
31	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第2層	椀?	トチノキ	
32	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第3層	椀	ブナ	
33	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第3層	椀	ブナ	
34	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第3層	椀	シイノキ	
35	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第3層	椀	シオジ	
36	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第2層	椀	トチノキ	
37	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第3層	椀	ブナ	
38	〃	97B	IXC・20 n	SD01	第3層	椀	ブナ	
39	〃	97B	IXC・19 t	SD07	第2層	椀	クリ	
40	〃	97B	IXC・20 s	SD07		椀	ヒノキ	
41	〃	97B	IXC・20 t	SD07	第1層	椀	クリ	
42	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第3層	椀	クリ	
43	〃	97B	IXC・20 t	SD07	第2層	椀	クリ	
44	〃	97B	IXC・20 s	SD07	第1層	椀	ブナ	
45	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第3層	椀	ブナ	
46	〃	97B	IXC・14 n	SD01	第3層	椀	クリ	
47	〃	97B	IXC・20 n	SD01	第4層	椀	トチノキ	
48	〃	97B	IXC・20 s	SD07	第2層	椀	クリ	
49	〃	97B	IXC・20 j	SD02	第3層	椀	ヒノキ	
50	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第4層	椀	シオジ	
51	〃	97B	IXC・19 m	SD01	第3層	椀	トチノキ	
52	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第4層	椀	サクラ皿	
53	〃	97B	IXC・19 l	SD01	第4層	椀	ブナ	
54	〃	97B	IXC・18 m	SD01	第1層	椀	トチノキ	
55	〃	97B	IXC・15 m	SD01	第3層	椀	クリ	
56	〃	97B	IXC・15 m	SD01	第3層	椀	ブナ	
57	〃	97B	IXC・15 m	SD01	第3層	椀	トチノキ	
58-1	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第3層	椀	シオジ	
58-2	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第3層	椀	トチノキ	
59	〃	97B	IXC・17 m	SD01	第2層	椀	ブナ	
60	〃	97B	IXC・19 t	SD07	第2層	椀	バラ科	
61	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第3層	椀	ブナ	
62	〃	97B	IXC・20 p	SD01	第3層	椀	クリ	
63	〃	97B	IXC・15 m	SD01	第3層	椀	クリ	
64	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第3層	椀	ホオノキ	
65	〃	97B	IXC・15 n	SD01	第3層	蓋	ヒノキ	
66	〃	97B	IXC・19 m	SD01	第3層	椀	エゴノキ	
67-1	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第2層	椀	トチノキ	
67-2	〃	97B	IXC・20 o	SD01	第2層	椀	ブナ	
68	〃	97B	IXC・18 l	SD01	第3層	椀	クリ	
69	〃	97B	IXC・19 t	SD07	第3層	椀	クリ	
70	〃	97B	IXC・16 l	SD01	第3層	椀	トチノキ	

第15表 漆製品一覧表 (1)

番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構	層位等	器種	材質	備考
71-1	南調査区	97B	IXC・14n	SD01	第3層	椀	広散孔材	
71-2	〃	97B	IXC・14n	SD01	第3層	椀	ケヤキ	
72	〃	97B	IXC・20n	SD01	第4層	椀	クリ	
73	〃	97B	IXC・18l	SD01	第4層	椀	ケヤキ	
74	〃	97B	IXC・20q	SD01	第3層	椀	クリ	
75	〃	97B	IXC・20n	SD01	第4層	椀	クリ	
76	〃	97B	IXC・20n	SD01	第2層	椀	クリ	
77	〃	97B	IXC・18l	SD01	第3層	椀	ブナ	
78	〃	97B	IXC・20p	SD01	第3層	椀	クリ	
79	〃	97B	IXC・13n	SD01	第3層	椀	シイノキ	
80	〃	97B	IXC・20o	SD01	第3層	椀	ブナ	
81	〃	97B	IXC・20p	SD01	第3層	椀	シオジ	
82	〃	97B	IXC・13n	SD01	第3層	椀?	シイノキ	
83	〃	97B	IXC・14n	SD01	第3層	椀	ブナ	
84	〃	97B	IXC・20p	SD01	第3層	椀	トチノキ	
85	〃	97B	IXC・19m	SD01	第3層	椀	シイノキ	
86	〃	97B	IXC・20o	SD01	第3層	椀	ブナ	
87	〃	97B	IXC・14n	SD01	第3層	椀	広散孔材	
88	〃	97B	IXC・20p	SD01	第3層	椀	トチノキ	
89	〃	97B	IXC・19n	SD01	第2層	椀	ブナ	
90	〃	97B	IXC・20o	SD01	第3層	椀	クリ	
91	〃	97B	IXC・20n	SD01	第4層	椀	広散孔材	
92	〃	97B	IXC・19l	SD01	第3層	椀	クリ	
93	〃	97B	IXC・20q	SD01	第2層	椀	トチノキ	
94	〃	97B	IXD・16a	SD12	第2層	椀	シイノキ	
95	〃	97B	IXC・18l	SD01	第4層	椀	クリ	
96	〃	97B	IXD・16b	SD12	第2層	椀・皿	トチノキ	
97	〃	97B	IXC・15m	SD01	第3層	椀	ブナ	
98	〃	97B	XC・1s	SD01	第3層	椀	トチノキ	
99	〃	97B	IXC・20j	SD01	第3層	椀	ブナ	
100	〃	97B	IXC・20o	SD01	第3層	椀	クリ	
101	〃	97B	IXC・19l	SD01	第3層	椀	ケヤキ	
102	〃	97B	XC・1r	SD01	第3層	椀	ブナ	
103	〃	97B	IXC・20j	SD02	第3層	椀	トチノキ	
104	〃	97B	IXC・19l	SD01	第3層	椀	トチノキ	
105	〃	97B	IXC・20o	SD01	第3層	椀	ブナ	
106	〃	97B	IXC・19l	SD01	第4層	椀	ホオノキ	
107	〃	97B	XC・1s	SD01	第3層	椀	トチノキ	
108	〃	97B	IXC・19l	SD01	第2層	椀	シイノキ	
109	〃	97B	IXC・20s	SK111		椀	トチノキ	
110	〃	97B	IXD・16o	SD12	第2層	椀	クリ	
111	〃	97B	IXC・20s	SE05		椀類	クリ	
112	〃	97B		T. 04		椀	トチノキ	
113	〃	97B	IXC・20s	SK111		椀	トチノキ	
114	〃	97B	IXC・20j	SD02	第3層	椀	トチノキ	
115	〃	97B	IXC・20j	SD02	第3層	椀	トチノキ	
116	〃	97B	IXC・20s	SE05		椀	トチノキ	
117	〃	97B	IXC・18l	SD01	第3層	椀	シイノキ	
118	〃	97B	IXC・20s	SK111		椀	トチノキ	
119	〃	97B	IXC・18l	SD01	第4層	椀	サクラ亜	
120	〃	97B	IXC・20m	SD01	第3層	椀	シイノキ	
121	〃	97B	XC・1s	SD07	第1層	椀	トチノキ	
122	〃	97B	IXC・19l	SD01	第3層	椀	ブナ	
123	〃	97B	IXC・15s	SK87		椀	シイノキ	
124	〃	97B	IXC・20q	SD01	第3層	椀	トチノキ	
125	〃	97B	IXC・20o	SD01	第3層	椀	クリ	
126-1	〃	97B	IXC・20j	SD02	第3層	椀	トチノキ	
126-2	〃	97B	IXC・20j	SD02	第3層	椀	トチノキ	
127	〃	97B	IXC・20n	SD01	第4層	椀	クリ	
128	〃	97B	IXC・19m	SD01	第4層	椀	トチノキ	
129	〃	97B	IXC・20j	SE04		椀	トチノキ	
130 北調査区	96A	VII C・13 f	SD01			椀	トチノキ	
131	〃	96B	VII C・20l	SD05	下層	椀	ブナ	
132	〃	96B	VII C・19l	SD05		椀	ブナ	
133	〃	96B	VII C・14 i	SD01	下層	椀	トチノキ	
134	〃	96C	VII D・17 a	SD06	第4層	椀	クリ	
135	〃	96C	VII C・19 r	SD01	第4層	椀	ブナ	
136	〃	96C	VII C・19 o	SD05		椀	トチノキ	
137	〃	96D	VII D・18 l	SD06	第3層	椀	クリ	
138	〃	96D	VII D・18 l	SD06		椀	トチノキ	
139	〃	96D	VII D・18 e	SD06		椀	ブナ	
140	〃	96D	IX D・2.3 a	SE01	上層	椀	トチノキ	
141	〃	96D	IX D・2.3 b	SE01		椀	ブナ	
142	〃	96D	VII D・16 b	SD06	第3層	椀蓋	ケヤキ	
143	〃	96D	VII D・18 e	SD06	第2層	椀	トチノキ	
144	〃	96D	VII D・16 b	SD06	第3層	椀		
145-1 南調査区	96E	IX C・11 f	SD02	第3層	椀		トチノキ	

第15表 漆製品一覧表(2)

番号	図版番号	調査区	グリッド	遺構	層位等	器種	材質	備考
145-2	南調査区	96E	IXC・11f	SD02	第3層	椀	トチノキ	
146	〃	96E	IXC・11f	SD02	第3層	椀	トチノキ	
147	〃	96E	IXC・12f	SD02	第3層	椀	トチノキ	
148	〃	96E	IXC・15e	SK271	第2層	椀	トチノキ	
149	〃	96E	IXC・13g	SD02	第1層	椀	トチノキ	
150-1	〃	96E	IXC・15e	SK271	第2層	椀	トチノキ	
150-2	〃	96E	IXC・15e	SK271	第2層	椀	トチノキ	
151	〃	96E	IXB・8t	SD13	第3層	椀	トチノキ	
152	〃	96E	IXC・15e	SK272		椀	トチノキ	
153	〃	96E	IXC・11ef	SD02	第3層	椀	トチノキ	
154	〃	96E	IXC・12f	SD02	第3層	椀	カエデ属	
155	〃	96E	IXC・14b	SE01		椀	シイノキ	
156	〃	96E	IXC・14e	SK271	第2層	杓子?	カバノキ	
157	〃	96E	IXC・11d	SE04		椀	広散孔材	
201	〃	97B	IXC・19m	SD01	第3層	椀類		
202	〃	97B	IXC・19l	SD01	第3層	椀類		
203	〃	97B	XC・1r	SD01	第3層	椀類		
204	〃	97B	IXC・14m	SD01	第3層	椀類		
205	〃	97B	IXC・15m	SD01	第3層	椀類		
206	〃	97B	IXC・20p	SD01	第4層	椀類		
207	〃	97B	XC・1s	SD01	第3層	椀類		
208	〃	97B	IXC・20n	SD01	第3層	椀類		
209	〃	97B	IXC・20n	SD01		椀類		
210	〃	97B	IXC・17l	SD01	第3層	椀類		
211	〃	97B	IXC・18l	SD01	第3層	椀類		
212	〃	97B	IXC・17m	SD01	第3層	椀類		
213	〃	97B	IXC・20n	SD01	第4層	椀類		
214	〃	97B	IXC・19l	SD01	第4層	椀類		
215	〃	97B	IXC・20p	SD01	第3層	蓋?		
216	〃	97B	IXC・20q	SD01	第4層	椀		
217	〃	97B	IXC・16m	SD01	第3層	椀類		
218	〃	97B	IXC・14n	SD01	第3層	椀類		
219	〃	97B	IXC・19m	SD01	第3層	椀類		
220	〃	97B	IXC・19m	SD01	第4層	椀類		
221	〃	97B	IXC・20q	SD01	第3層	椀類		
222	〃	97B	IXC・18l	SD01	第3層	椀類		
223	〃	97B	IXC・18l	SD01	第3層	椀類		
224	〃	97B	IXC・19m	SD01	第3層	椀類		
225	〃	97B	IXC・20n	SD01	第2層	椀類		
226	〃	97B	IXC・20n	SD01	第2層	椀類		
227	〃	97B	IXC・1s	SD02	第1層	箸?		
228	北調査区	96A	VIC・17hi	SX02	上層	蓋(合子?)		
229	南調査区	96E	IXC・14e	SK271	第2層	椀		
230	〃	96E	IXB・8t	SD13	第3層	椀		

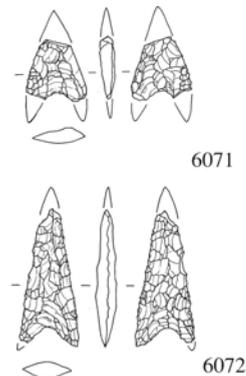
樹種同定は、北野信彦氏による。

第15表 漆製品一覧表(3)

第11節 その他の遺物

戦国時代から江戸時代にかけての遺構内あるいは遺構検出時に、明らかに時期を異にする石器、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、山茶椀類が出土した。灰釉陶器・山茶椀類が比較的量的にまとまって出土したほかは極少量の出土であるが、少量といえども看過できない資料を含むので、以下、順に報告する。

石器 頁岩を素材とする打製石鏃が北調査区の西部、96A区から所謂「凹基無茎式石鏃」が2点出土した(第72図 第16表)。ともに石材の風化が進行しており、芯部がわずかに暗(青)黒灰色を呈するほかは灰白色を呈す。6071は、先端部および基端部が欠損している。側辺は外彎



第72図 石鏃実測図 1:2

番号	調査区	グリッド	遺構など	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
6071	北調査区 96A	ⅧC・17e	検出Ⅰ茶褐色土	※1.2	1.6	0.4	※0.6	頁岩	
6072	北調査区 96A	ⅧC・16b	SD08	※3.6	※1.6	0.4	※2.0	頁岩	

※は現存値

第16表 石鏃一覧表

弧（外側に緩くふくらむ）を呈し、凹基は深めにU字状にくぼむ形状をなす。6072は、先端部および一方の基端がわずかに欠損する。側辺は略直線を呈し、凹基は開いたU字状にくぼむ形状をなす。これら2点は、決め手を欠くが縄文時代の石鏃との印象を強くもつものである。こうした推定が容認されるならば、境川右岸の本遺跡の近在に縄文時代の遺跡が存する公算が大となる（註1）。

弥生土器 南調査区の西部、96E区SD03第1層から、5×6cmほどの弥生土器片が1点出土した。図示し得ないが外表面が暗黒茶褐色を呈するもので、外表面には横方向の円弧状のヘラ描き沈線の下から縦位に幅広で浅い櫛描き波状文が施されている。文様・焼成等からみて弥生時代中期に編年される古井式土器の壺片で、古井式の壺に多くみられる所謂「懸垂文」の一部と考えられる。戦国時代～江戸時代の遺構からの出土とはいえ、本遺跡の周辺に弥生時代中期の遺跡の存在を示唆するものである。

須恵器 叩目を有する壺・甕類の胴部片が散見される。時期を特定し得ない。

灰釉陶器 図示していないが、各調査区から少量ながら出土しており、全体としてはコンテナ0.5箱ほどの出土量である。量的にみて灰釉陶器の時期の遺構の存在が考えられるが、今回の調査では明確な遺構は認められない。種類としては、椀皿類、長頸瓶など壺・瓶類などの各種があるが、量的には椀皿類が多い。いずれも折戸第53号窯式前後の時期のものである。椀類のなかに釉着した重ね焼きの失敗品が含まれることなどから、これらの遺物は、近在に所在した（する）窯跡から何らかの理由（自然流失・人為的搬入など）でもたらされたものである可能性がある。

製塩土器 図示していないが、総計で10数点の製塩土器の脚部片が出土した。いずれも下端に向かって円錐状に先細りする所謂「角」型のもので、松崎遺跡における分類の4類（註2）に比定できるものである。この4類は概ね8～9世紀のものとしてされている。とするならば年代的な一致という点で上記須恵器との関わりが注目されてくる。今後の課題としておきたい。

山茶碗類 図示していないが、山茶碗類は、各調査区から少量ながら出土し、全体としてコンテナ2箱ほどの出土量である。第4型式～第6型式（註3）のものがみられる。灰釉陶器同様に量的にみて当該期の遺構の存在が考えられるが、今回の調査では遺構は認められない。椀・皿類のなかに釉着した重ね焼きの失敗品、馬爪焼台、窯壁付着品などが含まれることから、これらの遺物は灰釉陶器同様に近在に所在した（する）窯跡から何らかの理由（自然流失・人為的搬入など）でもたらされた可能性がある。

註1 石鏃の実測・トレースは川添和暁（当センター調査研究員）による。

註2 福岡見彦編『松崎遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集）（財）愛知県埋蔵文化財センター 1991年

註3 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1』）瀬戸市歴史民俗資料館 1982

第6章 科学分析

第1節 微化石分析による大脇城跡の古環境解析

鬼頭 剛*・吉野道彦**・堀木真美子*・尾崎和美*
 *愛知県埋蔵文化財センター
 **名城大学理工学部

1 はじめに

大脇城跡は16世紀後半～17世紀中頃の城館跡と推定されている。寛文年間(1670年前後)の「寛文村々覚書」には「古城跡 先年梶川五左衛門居城之由 今ハ畑成」という記載があり、戦国時代の数十年間に開城、終焉を迎えたと思われる。遺跡からは16世紀後半から17世紀中頃の遺物・遺構が確認され、戦国期の城館跡特有の「薬研堀」状の溝や城館の外側を区画する外堀が検出されている(坂倉ほか,1997)。およそ400年前の城館およびその周辺域の古環境を推定するため微化石分析を行なったのでここに報告する。

2 試料と処理法

分析試料および分析者を第17表に模式柱状図と第73図に示す。また、放射性炭素年代測定を実施した試料は、大脇城跡96A区SD01から採取された2点(Gak-19685、Gak-19686)である。その測定値は15,760 ± 250y.B.P.(13,820B.C.)および10,580 ± 340y.B.P.(8,630B.C.)であった。

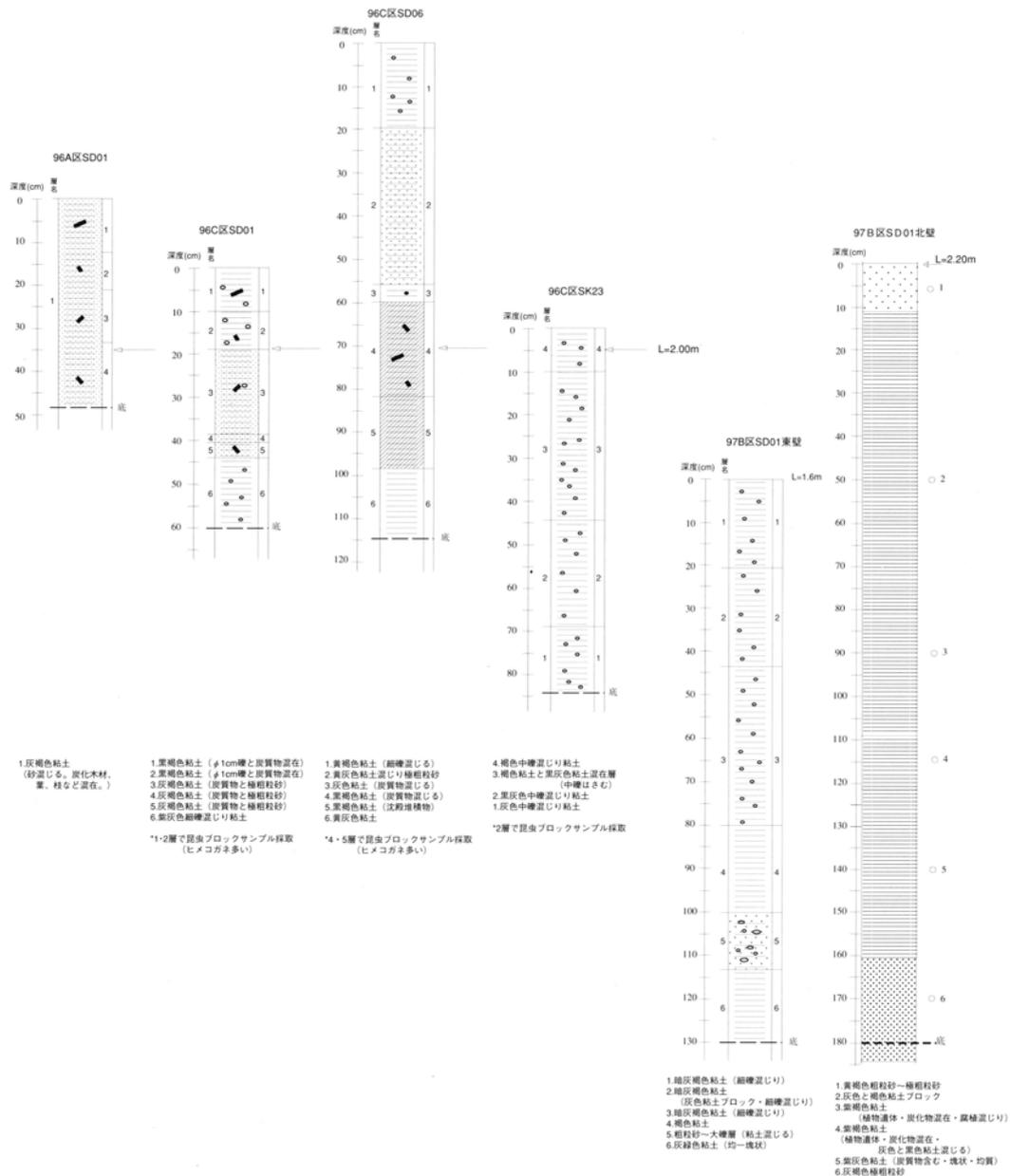
分析用に採取した試料は以下の手順により微化石を抽出した。花粉化石は試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.13)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集した。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡で出現する全ての種類について同定・計数した。出現率の産出において木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として用いた。

珪藻化石は試料1gを過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学的処理を施し、珪藻化石を濃集した。希釈後、カバーガラスに滴下し乾燥させ、プレウラックスで封入し、プレパラートを作製した。油浸600倍あるいは1000倍の光学顕微鏡で行ない、200個体以上を同定・計数した。種の同定にはK. Krammer and Lange-Bertalot(1986・1988・1991a・1991b)、K. Krammer(1992)などを用いた。堆積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁

耐性についてはAsai & Watanabe(1995)の環境指標種を参考とした。¹⁴C年代測定は(株)バリノ・サーヴェイを通じ、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお、年代値の算出には放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。

調査区	点数	分析者
96A区SD01	4	(株)バリノサーヴェイ
96C区SD01	6	(株)バリノサーヴェイ
96C区SD06	6	(株)バリノサーヴェイ
96C区SK23	4	(株)バリノサーヴェイ
96B区SD01東	6	(株)バリノサーヴェイ
97B区SD01北	6	珪藻:鬼頭・尾崎 花粉:吉野・堀木

第17表 試料および分析者一覧



第73図 試料採取地点柱状図

3 分析結果

96A区SD01

花粉化石は各試料ともに良好に検出され、保存状態も良い。いずれの試料においても木本花粉の割合は総花粉・胞子の50%を越える。木本花粉ではマツ属(ほとんどが複雑管束亜属)とコナラ属コナラ亜属が優占して出現する。ヤマモモ属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属、モチノキ属、ツツジ科、カキノキ属などを伴い、試料4ではカキノキ属、試料1ではモチノキ属の出現が目立つ。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ソバ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属などを伴う。また、スイレン属、オモダカ属などが低率で多産し、そのほかに試料4ではサジオモダカ属とタヌキモ

属、試料2ではコオホネ属などを出現する。

珪藻化石は保存状態も良好であり、完形殻の出現率は60～80%程度と高い傾向にある。塩分に対する適応性では、貧塩-嫌塩性種が優占しており、全体の80～90%を占めている。その他は、貧塩-不定性種であり、貧塩-好塩性種は認められない。pHに対する適応性は、好酸性種がおおむね90%を占めており、好アルカリ性種は極めて少ない傾向にある。流水に対する適応性は、流水不定性種が優占し、全体の60%前後を占めている。好流水性種等は極めて低率にしか認められない。本地点では水生珪藻が優占し、90%以上を占めており。陸生珪藻は極低率にしか認められない。多産あるいは優占した種は、好酸性・好止水性・底生・好塩性種の *Anomooneis gomphonemacea*、好酸性・付着生・嫌塩性種の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、好止水性種の *Eunotia bilunstris*、好酸性・付着生・嫌塩性種の *Eunotia flexuosa* である。

96C区 SD01

花粉化石は各試料ともに良好に検出され、保存状態も良い。試料1と6において木本花粉の割合が総花粉・胞子の50%を越えるが、試料2～5では50%に満たない。木本花粉では、マツ属（ほとんどが複雑管束亜属）とコナラ属コナラ亜属が優占する。試料1と2ではコナラ属コナラ亜属よりもマツ属が多産し、試料3～6ではマツ属よりもコナラ属コナラ亜属の方が多産する。ヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属、ブナ属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ツバキ属、ツツジ科、カキノキ属などを伴う。試料1ではコナラ属アカガシ亜属の出現が増加する。

草本花粉の中ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、ソバ属、スイレン属、バラ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属などを伴う。スイレン属は試料4と5において目立って出現する。また、ガマ属、ミズアオイ属、コオホネ属、モウセンゴケ属、キカシグサ属、タヌキモ属などが散見され、試料4と5ではゴマ属を出現する。

珪藻化石は保存状態も試料6を除いて良好であり、完形殻の出現率は大半が80%以上を示している。出現した群集の特徴について、塩分に対する適応性については60～80%を貧塩-嫌塩性種が占めており、その他は貧塩-不定性種が随伴している。貧塩-好塩性種は皆無である。pHについては、好酸性種が80%以上を占めており、好アルカリ性種は極めて低率にしか認められない。流水に対する適応性では、好止水性種が35～65%と優占しており、それ以外は流水不定性種で占められる。好流水性種は認められるものの、極めて低率である。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、いずれの試料でも水生珪藻が90%以上を占めており、陸生珪藻は極低率にしか認められない。多産あるいは優占した種は、試料によって異なり、試料4～6において好酸性・付着生・嫌塩性種の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、好酸性・好止水性・付着生・嫌塩性種の *Frustulia rhomboides*、試料1～3では *Eunotia pectinalis* var. *minor*、好止水性種の *Eunotia bilunstris* などである。

96C区 SD06

花粉化石は、木本花粉ではマツ属（ほとんどが複雑管束亜属）、コナラ属コナラ亜属、ツツジ科、カキノキ属が多産し、ヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、モチノキ属、イボタノキ属などを低率で伴う。中でも試料1と2ではツツジ科、試料3～6ではカキノキ属がそれぞれ特徴的に多産する。草本花粉の中ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ソバ属、アリノトウグサ属、ヨ

モギ属などを伴う。試料5ではスイレン属、試料4ではキカシグサ属、試料3ではゴマ属が出現する

珪藻分析を行った6試料のうち4試料からは珪藻化石が多産したが、他の2試料については極めて少ない傾向にある。出現した群集の特徴について、塩分に対する適応性については、多産した4試料についてみれば70%以上を貧塩-嫌塩性種が占めており、貧塩-好塩性種はほとんど皆無に等しい。pHについては、4試料いずれも好酸性種が90%程度出現しており、pH不定性種あるいは好アルカリ性種は低率にしか認められない。流水に対する適応性では好止水性種が65~90%を占めており、好流水性種は極低率にしか検出されない。多産あるいは優占した種としては好止水性種の *Eunotia bilunstris* である。

96C 区 SK23

花粉化石は試料1~3では良好に検出され、保存状態も良い。試料4では、外膜が薄くなった保存状態のやや悪い化石が少し含まれる。木本花粉の中では、マツ属（大半が複雑管束亜属）が卓越し、コナラ属コナラ亜属を伴う。そのほかにクマシデ属-アサダ属、モチノキ属、ブナ属、ツツジ科、イボタノキ属などを低率に出現する。また、試料1と2ではカキノキ属がわずかに出現する。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ソバ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属などを伴う。また、モウセンゴケ属、キカシグサ属などが散見される。

珪藻分析を行った3試料からは比較的多くの珪藻化石が認められたものの、試料4については皆無である。出現した群集の特徴について、塩分に対する適応性については、多産した3試料についてみれば90%以上が貧塩-不定性種であり、貧塩-好塩性種は皆無であり、貧塩-嫌塩性種も低率にしか認められない。pHについては、好アルカリ性種は50~65%と優占し、ついでpH不定性種が25~40%程度認められ、この両者で大半を占めている。好酸性種は15%以下であり少ない傾向にある。流水に対する適応性では、流水不定性種が85%以上を占めており、好流水性種あるいは好止水性種はいずれも10%以下である。水生珪藻と陸生珪藻の比率では、試料2および3では陸生珪藻が75~90%を占めているほか、試料1でも陸生珪藻が35%と全体に陸生珪藻が多産する傾向にある。多産する種としては、試料1では好アルカリ性・付着生種の *Achnanthes hungarica*、好アルカリ性・好流水性・付着生種の *Gomphonema parvulum*、試料2・3では好アルカリ性・底生種かつ陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、底生種かつ陸生珪藻の *Navicula mutica*、*Pinnularia borealis* などである。

97B 区 SD01 東壁

花粉化石は各試料共に良好に検出された。木本花粉の中では、マツ属（大半が複雑管束亜属）が卓越して出現する。中でも試料1~3ではその傾向が著しい。コナラ属コナラ亜属、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ツガ属などを伴う。試料5ではツガ属、マツ属単維管束亜属の出現がめだち、試料4ではイボタノキ属が多産し、センダン属の出現もめだち。草本花粉・シダ類胞子の中ではイネ科が卓越し、カヤツリグサ科、ソバ属、バラ科、アリノトウグサ属・ヨモギ属・キク亜科などを伴う。ガマ属、サジオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、スイレン属、モウセンゴケ属、キカシグサ属、ヒシ属、サンショウモ、アカウキクサ属などが散見される。ヒシ属は試料6においてこの種類 (taxa) としては多産する。また、試料4と6ではゴマ属を出現する。

いずれの試料からも比較的多くの珪藻化石が認められた。出現した群集の特徴について、塩分に対す

る適応性については、試料によって若干異なるが、全体に貧塩-不定性種が優占する傾向にあり、70～90%を占めている。その他、貧塩-嫌塩性種は10～25%程度認められるが、貧塩-好塩性種は5%以下と低率にしか認められない。pHについては、好アルカリ性種が15～65%、pH不定性種が10～40%、好酸性種が15～45%と、下位で好酸性種の出現率が高く、上位では好アルカリ性種の割合が高い傾向が認められる。流水に対する適応性では、流水不定性種が30～85%を占めており、最も優占する。ただし、好止水性種も10～50%で特に下位において優占する傾向が認められる。好流水性種については、いずれの試料でも5%以下と低率である。水生珪藻と陸生珪藻の比率では、特に試料3・2・1などの上位の試料に多産する傾向にある。ただし、本地点で認められた多くの珪藻は、陸生珪藻の中のB群に属する種群である。A群とされる種群は、試料1において20%認められたのが最高であり、他は極低率にしか検出されない。多産する種としては、試料によって異なり、試料4～6では付着生種の *Cymbella silesiaca*、好アルカリ性・好流水性・付着生種の *Gomphonema parvulum*、好酸性・底生種の *Pinnularia gibba*、試料1～3では底生種かつ陸生珪藻の *Navicula confervacea* などである。

97B区 SD01 北壁

試料5では、木本花粉が82.6%をしめる。木本花粉の中ではハンノキ属が41.1%ともっとも高い出現率を示す。ついでクマシデ属(10.5%)やハシバミ属(14.2%)が多く、カバノキ属(6.8%)やコナラ亜属(6.3%)も出現している。草本花粉では、特に高い出現率のものはないが、ヨモギ属が4.8%の出現率を示す。

試料3では、5とは木本花粉と草本花粉の割合が異なり、木本花粉の占める割合が57%となる。木本花粉ではマツ属が25.5%ともっとも多く、次いでアカガシ亜属が24.5%となる。試料5で優占していたハンノキ属は5.5%とかなり低い出現率となる。草本花粉ではイネ科が20.9%と高い出現率を示す。他にカヤツリグサ科(5.7%)やガマ属(4.0%)、アリノトウグサ属(2.6%)が出現している。

珪藻化石は試料1と試料2から合わせて22属51種の珪藻化石が確認された。生態性について、試料1および試料2とも類似した傾向をもち、水流性・塩分濃度ともに不定性種が優占した。ただ、pHに対する適応性では試料1では不定性種が42.0%と優占するものの、試料2では不定性種と同程度に好酸性種が42.5%を占める。また、試料1、2とも付着生種と底生種で97%を占め、浮遊性種を全く産しないのが特徴である。多産する種として、好酸性・付着性・嫌塩性種の *Eunotia lunaris* が13.3%、底生種の *Navicula pupula* が10.3%、好アルカリ性・好流水性・付着生種の *Gomphonema parvulum* が9.8%、好酸性・底生種の *Pinnularia gibba* が9.3%、好酸性・付着性・嫌塩性種の *Eunotia pectinalis* が8.8%を占める。

4 微化石群集による古環境

花粉化石群からみた古植生

微化石分析を行なった各試料は、考古学的に16世紀後半～17世紀中頃までと堆積期間の限定される遺構より採取されたものであり、その頃の城館周辺の古環境情報を含んでいる。

各遺構の花粉化石分析において、木本花粉ではマツ属とコナラ属コナラ亜属が優占した。マツ属花粉

は木本花粉の中でも飛散しやすく、他所からの影響を受けやすいもののひとつである。そのため、マツ属花粉が高い出現率を示す場合でも、近傍でのマツ林の存在に帰結させるのは乱暴である。周辺部でマツの陽樹が生えていた事実のみにとどめておきたい。また、コナラ亜属の多産も目を引く。各遺構からのコナラ亜属の多産は、コナラ亜属の優占する夏緑広葉樹が周辺に広がっていたと考えられる。また、アカガシ亜属を主とする常緑広葉樹も、量的には多くはないものの夏緑広葉樹に混生していたと考えられる。全ての試料で確認されるツツジ科およびカキノキ属の木本花粉が見つかる事実も興味深い。特に96C区SD06の下位層(3層~6層)から、カキノキ属が34.5%、上位層(1層および2層)からツツジ科が45.4%と高率で検出された。本遺構以外の溝および土坑からはカキノキ属が0.2~1.3%、ツツジ科が0.7~4.6%の範囲の出現率であり、それらと比較してSD06の出現率が高いことがわかる。SD06の周囲にはツツジ科やカキノキ属が植栽されていた可能性が指摘できる。また、種実分析からはカキノキの種子も確認される。植栽の可能性を高めるものと思われる。また、全ての試料で虫媒花をつけるツバキ属が見られる。虫媒花は1個あたりの花粉生産量が一般的に少ない分類群である。虫媒花の出現率が高いということは、その母樹が試料採取地点の近くに存在したことを示す。96C区SD01の3~5層で比較的まとまってみられるツバキ属はその可能性が高い。

一方、草本花粉ではイネ科が高い出現率を示す。イネ科花粉には栽培種のイネのほかに、アシ、ススキ、マダケ、カヤ、シバ、エノコログサなどの多様な種があり、残念ながら花粉化石からはその種を特定することはできない。しかし、イネ科植物に共通するのは、全てが日当たりの良い裸地的空間を好む種であることである。城館および周辺はかなり開けた場所であったことがわかる。また、ハンノキ属花粉化石が比較的高率で出現することと、コオホネ属、スイレン属、アリノトウグサ属、フサモ属、セリ科といった抽水植物や浮葉植物、陽の当たる湿地を好むタヌキモ科、モウセンゴケ属などの食虫植物の花粉化石が検出されることから、各溝の内部は湿生植物群落が繁茂していた可能性が高い。イネ科植物の高い出現率も、湿地に生育するイネ科抽水植物の存在に起因する可能性がある。また、畑作物であるソバ属、畑地雑草を含む分類群であるアカザ科・ナデシコ科、路傍雑草を含む分類群であるギンギシ属、路上雑草のヨモギ属花粉の出現率も高い。

溝内の水域環境

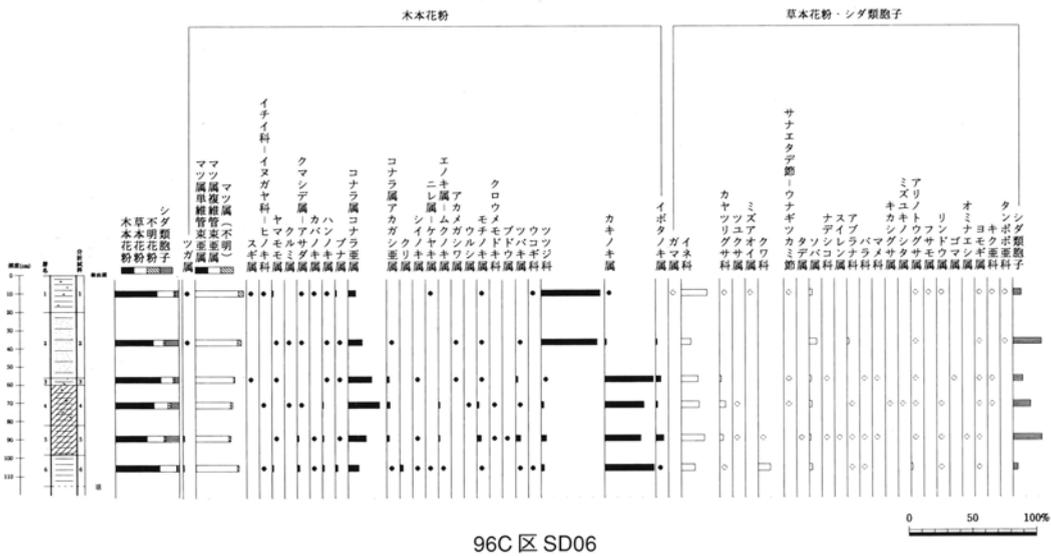
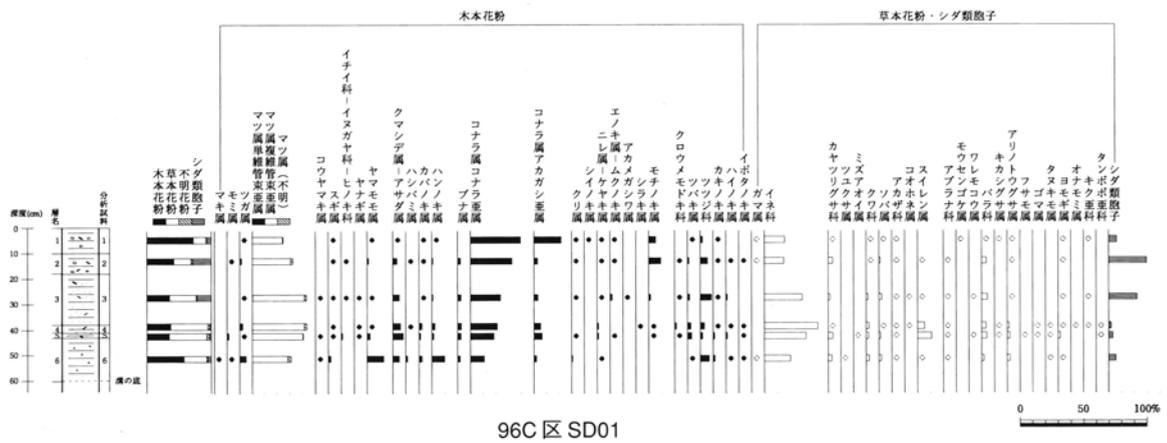
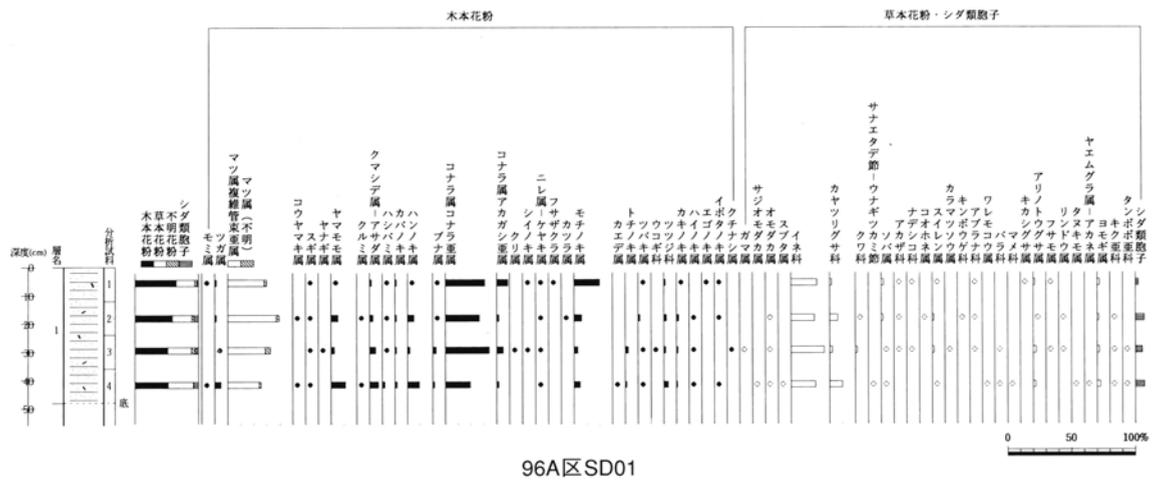
各溝からは *Eunotia bilunaris*、*E. flexuosa*、*Frustulia rhomboides*、*Pinnularia nodosa*、*P. braunii* といった止水性珪藻と、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*N. mutica*、*Pinnularia borealis* といった陸生珪藻が優占した。止水性珪藻は帯水環境を好む種である。本種が溝内から多く見つかる事実は、溝内には水が帯水していたことを示す。ただ、帯水し、かつある程度の水深があるならば、*Aulacoseira* 属や *Cyclotella* 属などの浮遊性種の存在が示唆されるが、本遺構群からは全く確認されなかった。このことから、城館を巡る溝内には水が帯水するものの、水深は浅かった可能性がある。また、陸生珪藻は陸域の乾いた環境でも生育する種群である。本種が溝内堆積物から多く確認されることから、帯水環境にあった溝は埋積の進行する途中で乾燥環境を経験したことを意味する。特に96C区SK23からは *Navicula mutica*、*N. confervacea*、*Pinnularia borealis* などの陸生珪藻が、他の溝の試料に比べ高率に検出される。本遺構の埋積時には水位がほとんど無かったか、帯水を経験することなく比較的短期間に埋積された可能性が考えられる。

文献

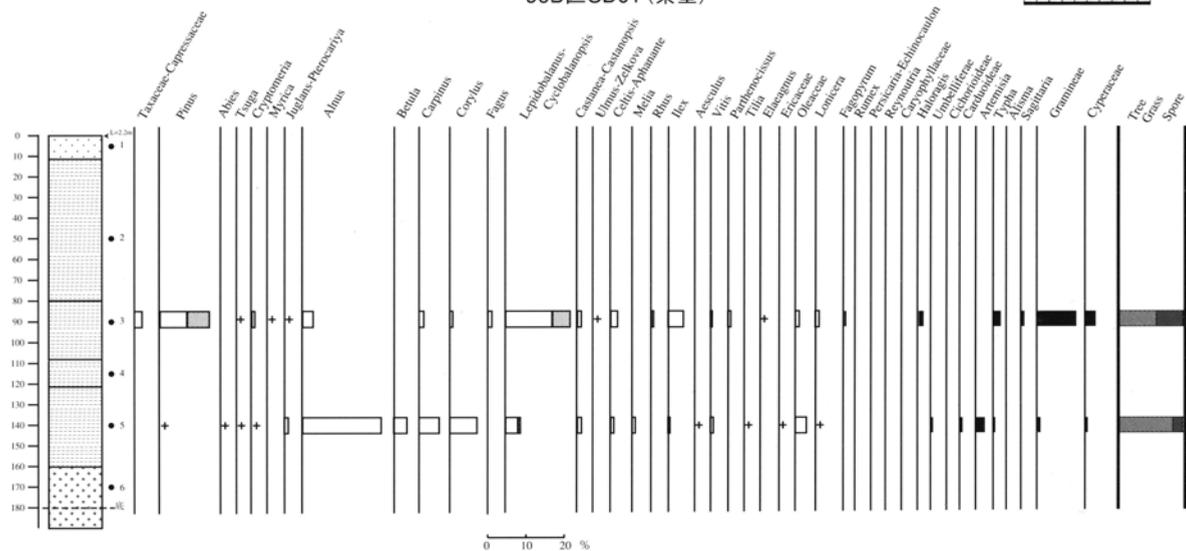
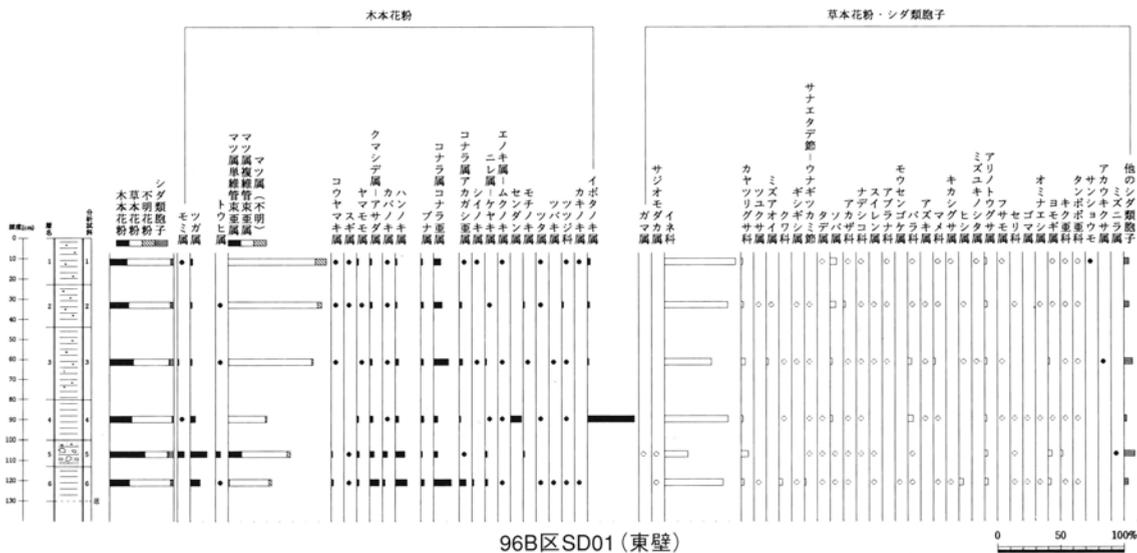
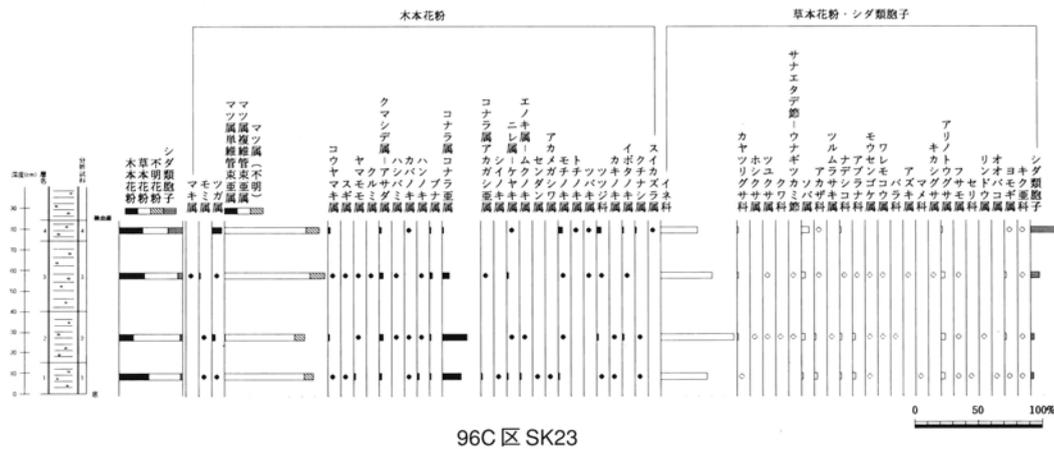
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa, *Diatom*, 10, 35- 47 .
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, *東北地理*, 2, 73- 88 .
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布古環境解析への応用, *珪藻学会誌*, , 23- 45 .
- Krammer, K. and LangeBertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil1, Naviculaceae. Band 2/ 1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, GustavFischer Verlag., 876p .
- Krammer, K. and LangeBertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil2, Epithemiaceae, .Bacillariaceae. Surillaceae. Band2/ 2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag., 536p .
- Krammer, K. and LangeBertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil3, Epithemiaceae, . Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band2/ 3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag., 230p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/ 4 von : Die Susswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 坂倉澄夫・藤井孝之・北村和宏・秋田幸純, 1997, 大脇城跡, 愛知県埋蔵文化財センター年報 平成8年度, 愛知県埋蔵文化財センター, 22-27

Palaeoenvironment around the house site of Owaki among 16th-17th century, Aichi Prefecture, central Japan,
Tsuyoshi Kito, Michihiko Yoshino, Mamiko Horiki and Kazumi Ozaki

The palynological and diatomological samples were taken from some ditches and earthen pit surrounding a house site of Owaki(Aichi prefecture, central Japan), Pre-modern period. The sediments of ditches and earthen pit were composed mainly of mud and silt beds with plant fragments and charcoal particles .The presence of high percentages of Ericaceae and Diospyros pollen has been considered to be a result of cultivation. The pollen of hygrophyte and submerged, emergent, floating-leaved plants(as Alnuns, Nuphar, Nymphaeae, Haloragis, Myriophyllum), indicates a comeatively wet condition around site. The limnobiontic, limnophilous and terrestrial diatoms account for at archaeological features. These results suggest that inside of ditches and earthen pit was thickly covered with macrophyte, and experienced frequently arid environment with shallow water depth.

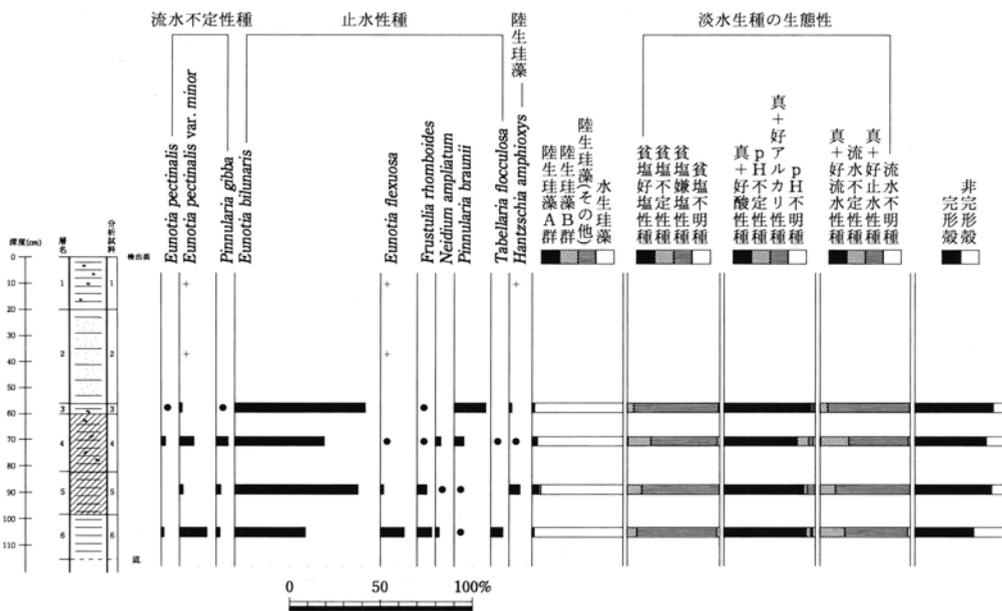
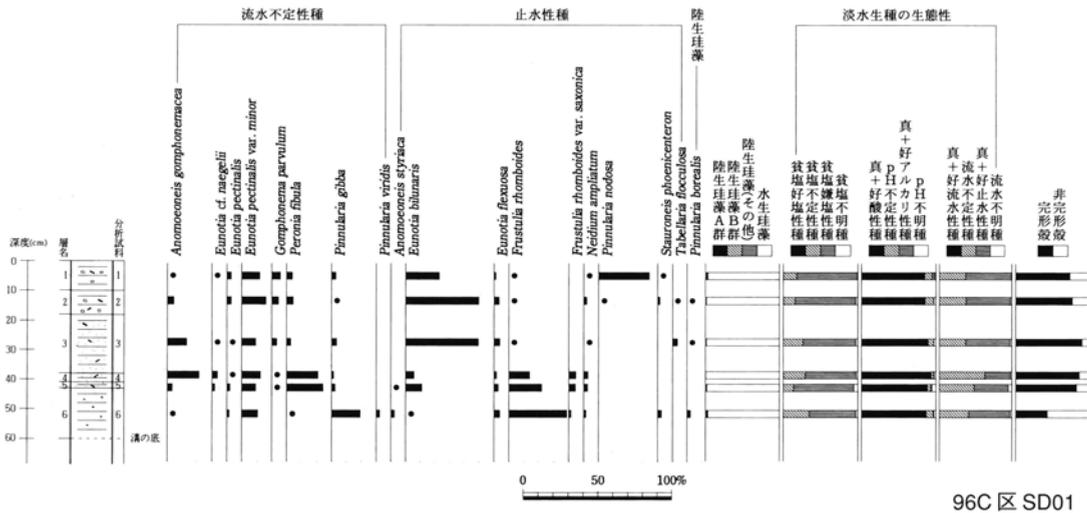
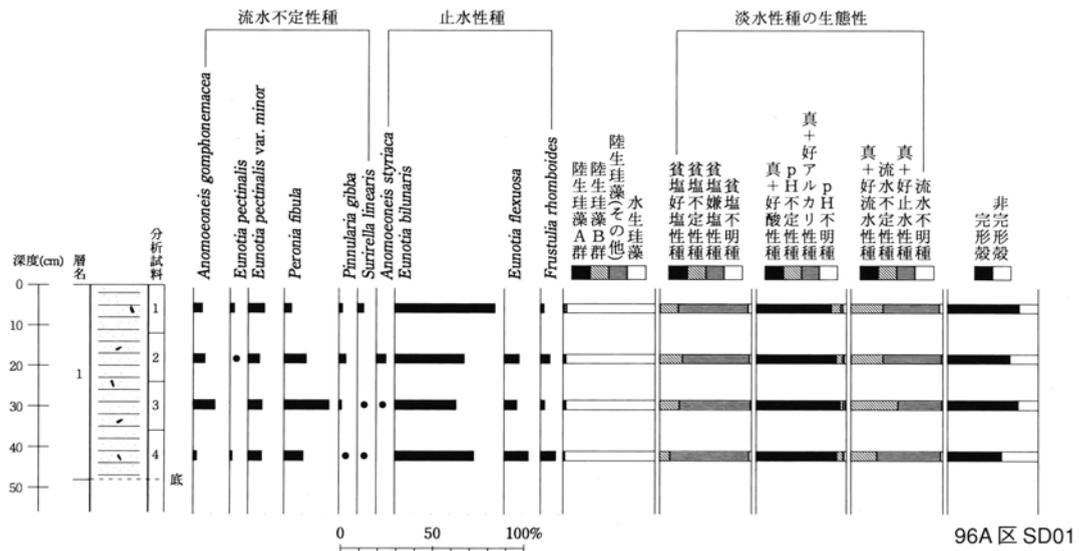


第74図 花粉分析結果 (その1)

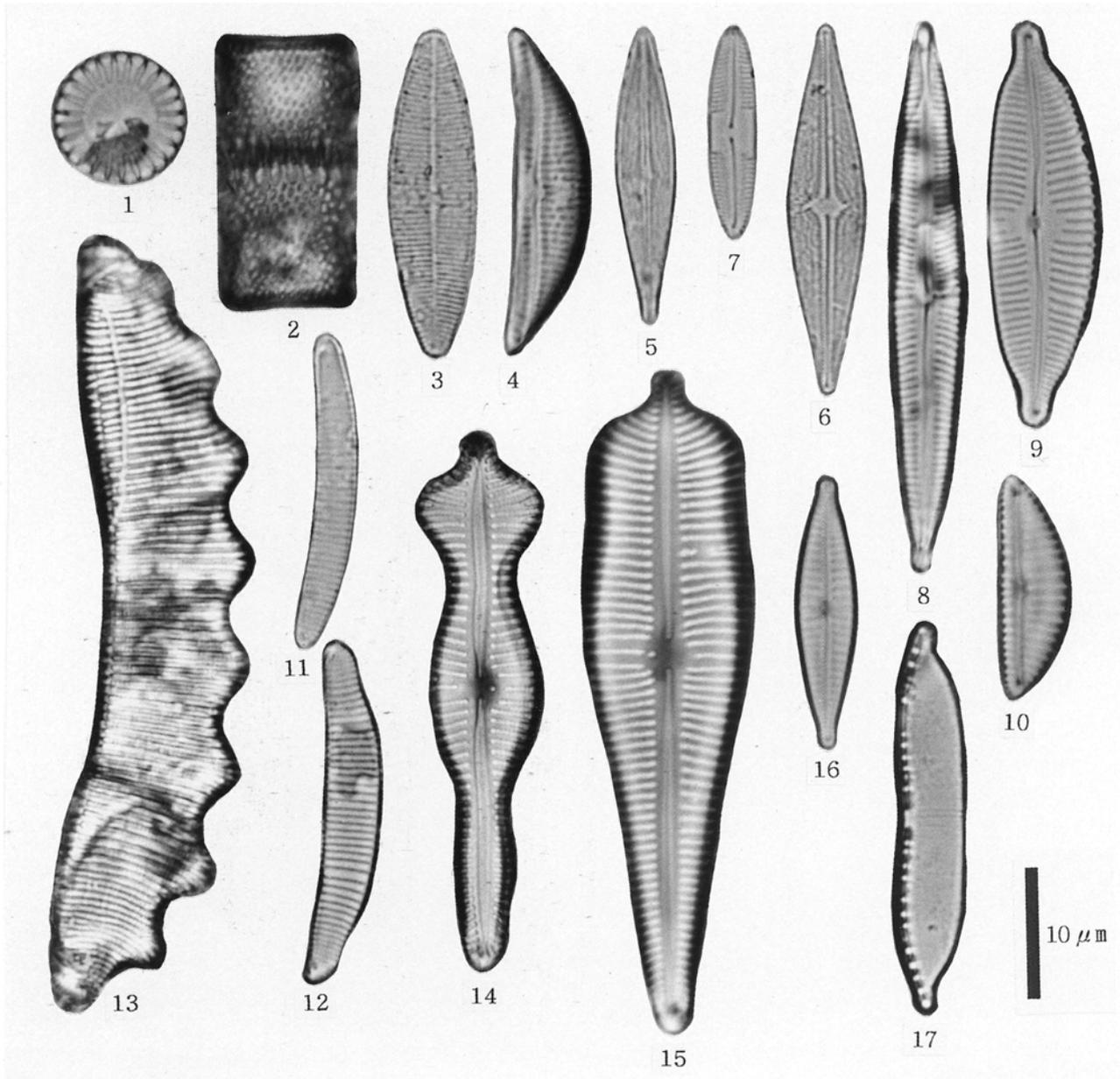


- 層別
 1. 灰褐色粘粒層・無粘粒砂
 2. 灰色と褐色粘土・プロット
 3. 黄褐色粘土 (植物遺体・炭化物混在・腐植層上層)
 4. 黄褐色粘土 (植物遺体・炭化物混在・灰色と黄色粘土混在)
 5. 黄褐色粘土 (炭化物混在・腐植層下層)
 6. 灰褐色粘粒層

第75図 花粉分析結果 (その2)

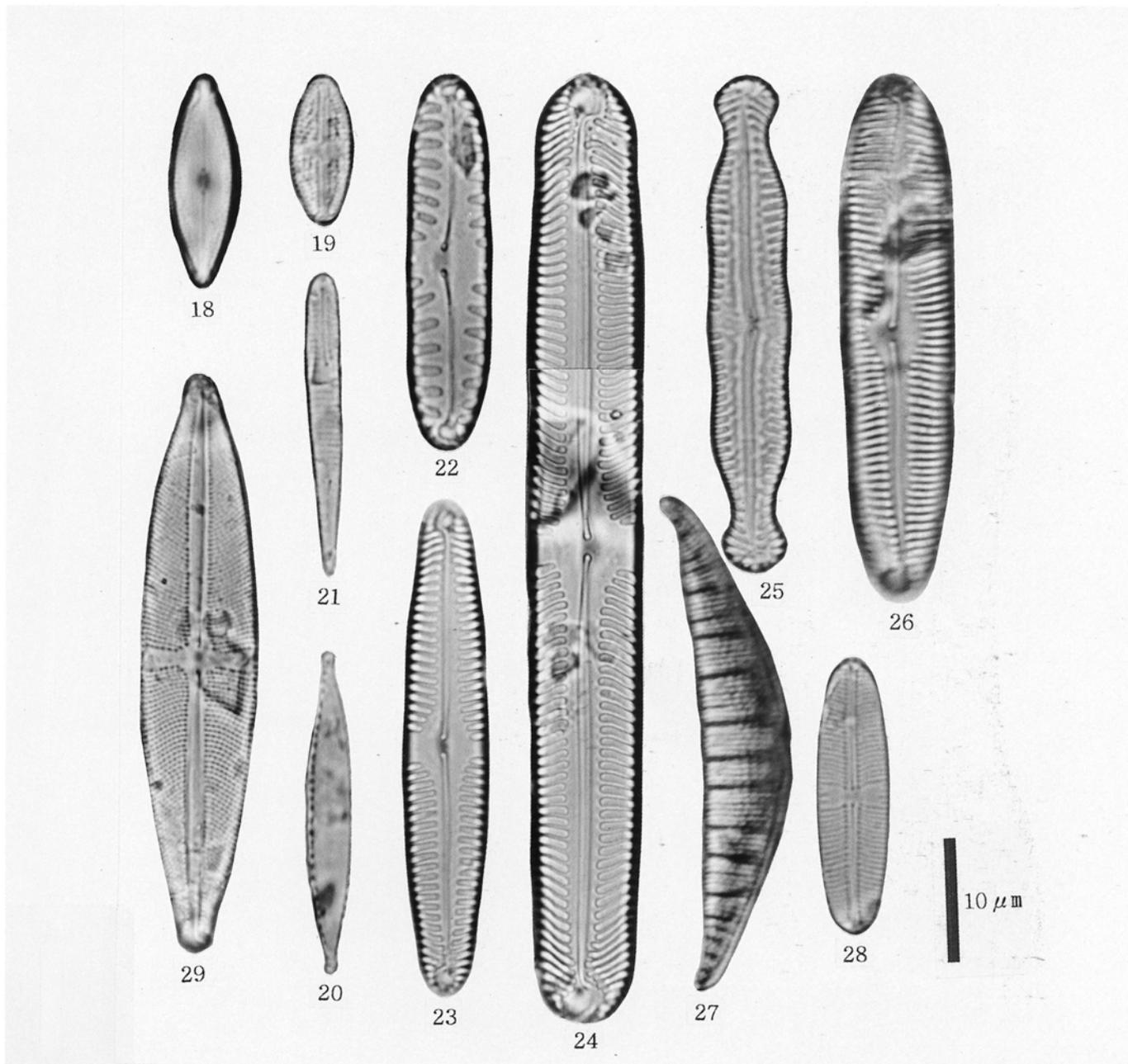


第76図 珪藻分析結果 (その1)



- | | |
|---|---|
| 1. <i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing | 10. <i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch |
| 2. <i>Aulacoseira italica</i> var. <i>valida</i> (Grun.) Simonsen | 11. <i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills |
| 3. <i>Achnanthes hungarica</i> Grunow | 12. <i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst |
| 4. <i>Amphora ovalis</i> (Kuetz.) Kuetzing | 13. <i>Eunotia serra</i> Ehrenberg |
| 5. <i>Anomoeneis gomphonemacea</i> (Grun.) H. Kobayasi | 14. <i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg |
| 6. <i>Anomoeneis styriaca</i> (Grun.) Hustedt | 15. <i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg |
| 7. <i>Caloneis aerophila</i> Bock | 16. <i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing |
| 8. <i>Cymbella amphioxys</i> (Kuetz.) Grunow | 17. <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow |
| 9. <i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald | |

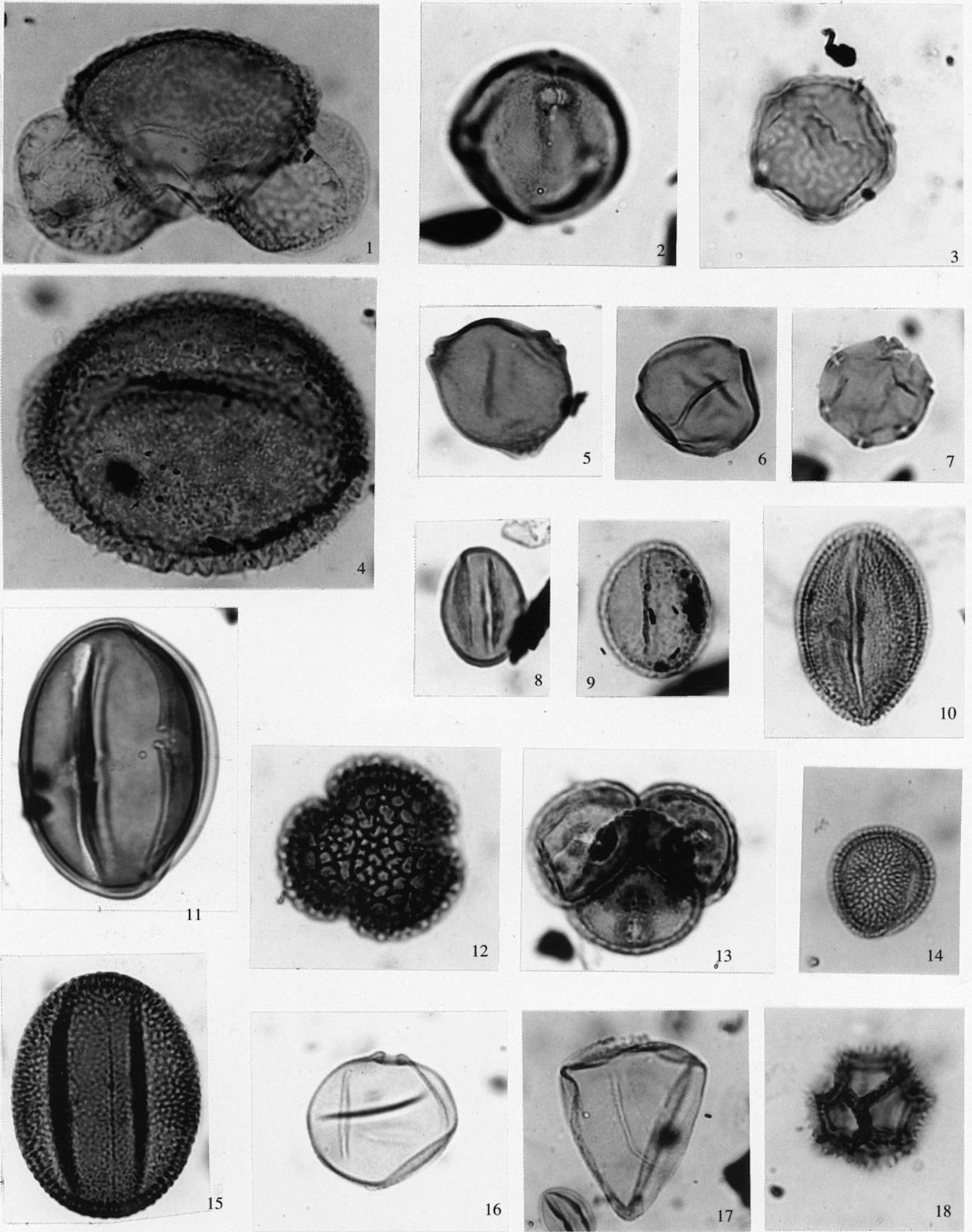
第78図 珪藻写真(その1)



- 18. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grounow
- 19. *Navicula mutica* Kuetzing
- 20. *Nitzshia palea* (Kuetz.) W. Smith
- 21. *Peronia fibula* (Breb.) Ross
- 22. *Pinnularia borealis* Ehrenberg
- 23. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
- 24. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt
- 25. *Pinnularia nodosa* Ehrenberg
- 26. *Pinnularia viridis* (Nits.) Ehrenberg

- 27. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Mullre
- 28. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky
- 29. *Stauroneis phoenicenteron* (Nits.) Ehrenberg

第 79 図 珪藻写真 (その 2)



1. *Pinus* 2. *Fagus* 3. *Ulmus-Zelkova* 4. *Tsuga* 5. *Betula* 6. *Corylus* 7. *Alnus*
 8. *Cyclobalanopsis* 9. *Lepidobalanus* 10. *Parthenocissus* 11. *Mellia* 12. *Oleaceae* 13. *Gardenia* 14. *Artemisia*
 15. *Fagopyrum* 16. *Gramineae* 17. *Cyperaceae* 18. *Cichorioideae*

第 80 图 花粉写真

第2節 愛知県大脇城跡から産出した昆虫群集と古環境

森 勇一（愛知県立明和高等学校）

1. はじめに

昆虫はすべての生物群のなかで最も種数が多く、水中（水生昆虫）、地表面上（地表性歩行虫）、植物上（樹上性昆虫）など、多様な生活空間に適応して生活している。食性も食植性から、食肉性・食糞性・食屍性など多岐にわたる。昆虫の外骨格はキチン質で構成されており、死後土中に埋もれてからも腐ることなく保存される。また、昆虫は移動・跳躍に適した3対の脚と飛翔用の2対のはねを有し、環境変化に対する応答性がきわめて鋭敏な生物化石（森，1994）の一つである。先史～歴史時代の古環境復元にあたり、昆虫化石が有効であるのはこのような理由による。

筆者は、これまで先史～歴史時代の地層中に含有される昆虫化石を抽出・分析することにより、植生や水域環境・農耕・人為による土地改変の様子・気候変動など、人々を取りまく古環境についての情報を多数蓄積してきた（森，1994,1997,1999）。本論では、愛知県豊明市栄町に所在する大脇城跡の中世後期から江戸時代初めの遺物包含層より発見された昆虫群集について述べる。

2. 試料および分析方法

大脇城跡は、中近世における尾張国と三河国の国境にあたる境川の支流・正戸川右岸に立地している。その標高は3.5m前後で、地形的には沖積面上に位置するものの、遺跡調査地点における地層断面の観察結果や「名古屋南部地域の地質図」などからすると、本遺跡の立地する基盤層は低位段丘（埋没段丘）堆積物に相当し、堀や遺構などは更新世の地層を直接掘削して形成されたものと考えられる。

分析試料は3層準3試料よりなり、それらは15世紀末から17世紀後葉（主に16世紀後半～17世紀中頃）にかけての時期に堆積したものとされる。歴史上では、室町時代後半から江戸時代初めのころと推定されている。試料1は96C区SD01とされる区画溝の1層および2層（灰褐色腐植質シルト層）、試料2は96C区SD06の4層および5層（暗灰褐色植物片混じりシルト層）、試料3は同じく96C区SK23とされる土坑内堆積物（暗灰色シルト層）中より産出したものである。

昆虫分析試料は、愛知県埋蔵文化財センターのスタッフにより採取され、主にブロック割り法により抽出されたものである。昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。なお、昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3. 昆虫群集

昆虫分析試料より抽出された昆虫化石は、計912点であった（第18表）。層準別では、区画溝の堆積物

である試料1より475点、試料2より338点、遺構内堆積物とされる試料3からは99点産出した。なお、産出昆虫の主なものについては、第81図に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、多様な地表面上に生息する地表性歩行虫で構成され、水生昆虫の出現率は全試料を通じ23点(2.5%)ときわめて低率であった。試料1、2および試料3では産出地点や遺構などの違いがあるものの、発見された昆虫群集に有意な差異が認められなかったことから、全体を一括し述べる。産出昆虫のうち、水生昆虫は前述したように計23点と少なく、地表性歩行虫は193点(21.1%)、うち食糞性昆虫は計20点(2.2%)であった。陸生の食植性昆虫は475点(52.1%)検出され、過半を占めた。これ以外に、主に地表性で雑食性のアリ科が計154点(16.9%)、また所属不明の甲虫目が61点発見された。

種組成では、食植性昆虫のヒメコガネ *Anomala rufocuprea* が全試料を通じ計266点(29.2%)と多産した。とくに試料2では、産出点数計338点の51.8%(175点)が本分類群で占められた。食植性昆虫では、これにマメコガネ *Popillia japonica* (試料1より12点、試料2より8点)やドウガネブイブイ *Anomala cuprea* (試料1より19点、試料2より26点、試料3より3点)、およびハムシ科 *Chrysomelidae*、ゾウムシ科 *Curculionidae*、クワガタムシ科 *Lucanidae* などが伴われた。なお、ハムシ科では、試料1よりクワハムシ *Fleutiauxia armata* (2点)、ルリハムシ *Linacidea aenea* (2点)、ドウガネサルハムシ *Scelodonta lewisii* (2点)などが確認されている。

地表性歩行虫では、属および種名が未同定のオサムシ科 *Carabidae* が計68点産出した。試料1では本分類群が計41点検出され、上翅・頭部・前胸背板・腹部腹板など、多数の部位が認められた。攪乱地表面の指標種(石谷, 1996)とされ畑作地に多い食肉性のセアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* が試料2より4点、試料3より3点見いだされた。また、主に水田地帯や湿地・水たまりなどの湿潤地表面上に生息するヒラタゴミムシ族 *Platynini*、ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.、トックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp.、ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. などが認められた。湿潤地表面上に多く、食肉性ないしときに食植性の地表性歩行虫であるハネカクシ科 *Staphylinidae* が全試料を通じて多産し、また食糞性甲虫の代表種であるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*、エンマコガネ属 *Onthophagus* sp.、マグソコガネ *Aphodius rectus*、コマグソコガネ *Aphodius pusillus* なども低率ながら産出した。

水生昆虫は、全体を通じ産出点数が少ないものの、キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* が試料2より1点、オオミズスマシ *Dineutus orientalis* が同じく試料2で1点、ミズスマシ *Gyrinus japonicus* が試料1で1点発見された。これらはいずれも水たまりや水深の浅い止水域を特徴づける水生昆虫である。このほか、湿地や水たまりなどにも認められるが、これまで日本各地の水田層中より多数確認され、水田指標昆虫として知られるセマルガムシ *Coelostoma stultum* (計11点)・ガムシ *Hydrophilus acuminatus* (1点)・コガムシ *Hydrochara affinis* (2点)などの食植性の水生昆虫が計17点検出された。

なお、本遺跡では、クロオオアリ *Camponotus japonicus* (計97点)、オオアリ属 *Camponotus* sp. (計14点)、ヤマアリ亜科 *Formicinae* (計14点)など、アリ科 *Formicidae* の体節片が計154点発見された。

4. 考察

A. 古環境復元の視点

先史～歴史時代の自然環境が、時代とともに移り変わってきたことは種々の分析結果により明らかになっている(森, 1994, 1999ほか)。植生においては、更新世および完新世の地層中より産出した花粉化石や材・種実化石などをもとに、日本各地で古環境復元が試みられている(安田・三好, 1998)。この結果、縄文時代には、日本の山野がアカガシ亜属を主体とした常緑広葉樹(照葉樹)林に覆われていたこと、弥生時代に開始された稲作農耕とこれに引き続く古墳時代には西南日本を中心に照葉樹林が破壊され、マツ属・スギ・ハンノキ属・イネ科などからなる植生に変化したことが花粉分析の結果より推定されている(松岡・三好, 1998)。そして、6世紀から7世紀にかけての時期を境に、日本各地でアカマツが急増したことが明らかになっている(只木, 1990)。これとともに、丘陵地では須恵器生産のためマツが燃料材として多用され、また海岸地帯では製塩の際の海水濃縮の過程でマツが用いられたことが知られる。

文化が進展するとマツが増えるという(只木, 1990)。湿潤モンスーン地帯に位置する日本列島の潜在自然植生はいうまでもなく森林であり、西南日本においては常緑広葉樹林、東北日本においては落葉広葉樹林に被覆されるのが自然の成り行きである。農耕文化が急速に進展した弥生～古墳時代では、水稻耕作地確保のため日本の国土のうち、まず沖積平野や河岸段丘上の平坦地が水田として、あるいは人々の居住空間として大規模に開発された。こうして森林植生に覆われた平地や台地の多くが、水稻耕作地に変えられたのである。水田はいわばイネを生産する化学工場ともいうべきものであるが、毎年の生産物をそこからとり出す過程で地力が衰え、生産性が劣化する。そのために注目されたのが、水稻耕作地に隣接した森林(里山林)であった。農地周辺の里山林から青草や落ち葉を採取して、直接農耕地にすき込む技術が生み出されたのである。時代が下って中世から近世にかけ、里山林から採取された薪や柴は燃料材や暖房用として農家のかまどやいろりなどになくはならないものとなり、燃え残った木灰は蓄えられて農地のカリ・リン酸肥料として役だったのである(只木, 1990)。こうした里山林における人為による著しい収奪が、森林植生に影響を与えないはずがなく、農耕地や人の居住空間に隣接した森林はやせ衰え、やがて、マツのみの生育する植生空間へと変貌したのである。

尾張名所図会に描かれた豊明市北方の名古屋市名東区蓮教寺付近の絵図を見ると、蓮教寺周辺にはアカマツと思われる低木がまばらに描かれており、右手の牧の大池背後の丘陵地付近は、ほとんどマツのみからなる疎林によって構成されていたことを読みとることができる。このように中世末から江戸期にかけ、大脇城跡付近は植生のうえではアカマツが優勢だったと考えられる。それでは昆虫組成からはどのような古環境を復元することができるのだろうか。

B. 大脇城跡周辺の古環境

全試料を通じ、最も多産したのはヒメコガネであった。本種は、元来林縁や二次林などの広葉樹の樹葉に依存して生活していた広食性の食葉性昆虫とされるが、人為による植生改変や畑作物などの出現に伴って食性転換し、多くの栽培植物を加害するようになったと考えられる。ヒメコガネは、ダイズやアズキをはじめとしたマメ科植物や、クリ・ブドウなどの果樹を食害する畑作有害昆虫として知られ(湯浅・河田, 1952; 日本応用動物昆虫学会編, 1987)、成虫が葉を、幼虫が主に根を食する。台地や扇状地

などに多く発生し、沖積低地では比較的少なくまた山間地でも生息密度が低いという(桑山, 1953)。ヒメコガネの多産は、ほぼ同様のニッチェに生息する随伴種のマメコガネ・ドウガネブイブイやサクラコガネ属、およびハムシ科のクワハムシ・ルリハムシなどととも、大脇城跡周辺に畑作地か人間の介在した二次林が存在したことを示している。中世から江戸時代にかけてのこのような昆虫分析結果は、愛知県松戸遺跡や同吉田城遺跡など多くの遺跡からも確認されている。

個体数は多くないものの、次に注目される昆虫はスジコガネ・クロコガネ・クロカミキリ・ノコギリカミキリの4分類群であろう。これらは、いずれもアカマツ林の存在を強く示唆している。スジコガネ・クロカミキリはアカマツの葉を食害し、クロコガネやノコギリカミキリはアカマツを加害しないもののアカマツが繁茂するような疎林中に生息する昆虫である。この結果、大脇城跡西方の丘陵地や境川付近および大脇城の区画溝の周りにアカマツが生えていたことは確実であり、よく時代性を反映しているといえる。

地表性歩行虫ではセアカヒラタゴミムシやヒラタゴミムシ族・ツヤヒラタゴミムシ属など多様な種群が認められ、コブマルエンマコガネ・マグソコガネなどの食糞性昆虫も低率ながら発見された。そのため、畑作地の存在とともに、周辺地域に水田かこれに類する止水域が存在した可能性が考えられる。食糞ないし食屍性昆虫などの出現率からすると、昆虫分析試料を産出した遺構付近では人為による汚染は軽微であったと推定される。区画溝の水深は浅く停滞し、ときに干上がったことだろう。

本群集にアリ科に分類される昆虫化石が多いことは、これらが水生昆虫や各種の食植性昆虫などを産出する土壤中に挟み込まれていたものでなく、アリの生息するような乾燥した地表環境(畑作地や土塁上など)から運搬された土により区画溝や土坑が埋め立てられたことを示していると考えられる。

文 献

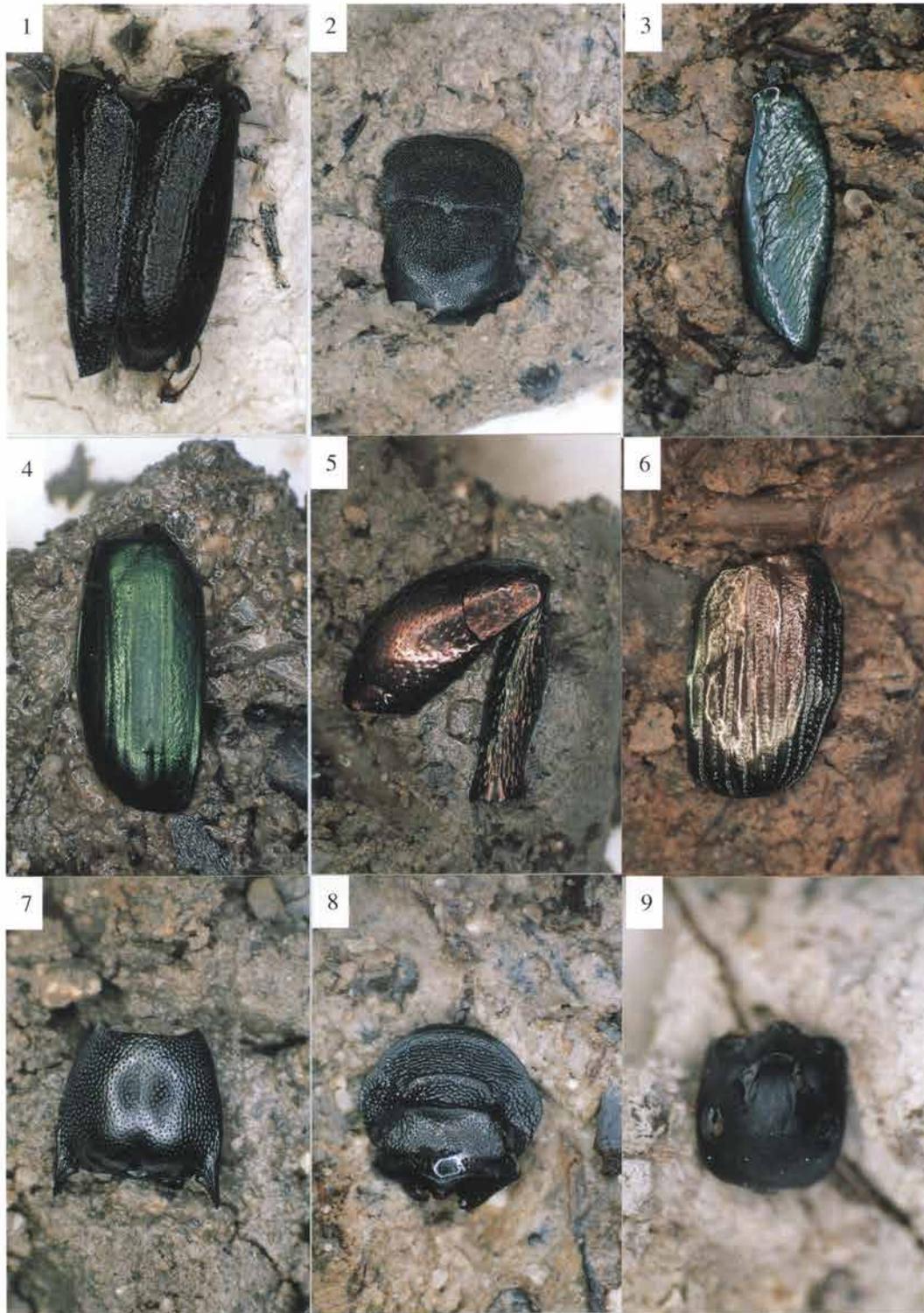
- 石谷正宇(1996) 環境指標としてのゴミムシ類(甲虫目:オサムシ科, ホソクビゴミムシ科)に関する生態学的研究. 比和科学博物館研究報告, 34, 1-110.
- 桑山 覚(1953) 日本における大豆害虫の分布と害相. 養賢堂, 129p.
- 松岡数充・三好教夫(1998) 最終氷期最盛期以降の照葉樹林の変遷—東シナ海東部から日本海沿岸を中心として. 図説日本列島植生史, 朝倉書店, 224-236.
- 森 勇一(1994) 昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元. 第四紀研究, 33(5), 331-349.
- 森 勇一(1997) 虫が語る日本史—昆虫考古学の現場から. インセクトリウム, 34(1)・34(2), 18-23, 10-17.
- 森 勇一(1999) 昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史. 国立歴史民俗博物館研究報告第81集「歴博国際シンポジウム論文特集号」, 311-342.
- 日本応用動物昆虫学会編(1987) 農林有害動物・昆虫名鑑. 日本植物防疫協会, 379p.
- 只木良也(1990) マツ林盛衰記—マツ林と人の不思議な関係. 樹の日本史(シリーズ自然と人間の日本史4), 新人物往来社, 102-112.
- 安田喜憲・三好教夫(1998) 図説日本列島植生史. 朝倉書店, 302p.
- 湯浅啓温・河田 薫(1952) 予察防除・農作害虫新説. 朝倉書店, 491p.

生態	和名	学名	試料1	試料2	試料3	計		
水	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae		E1.P1	2		
		ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae		E1	1		
		キベリクリヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp		E1	1		
		オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> Modeer		E1	1		
		ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	E1			1	
生	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae		P1	1		
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky			E1	1	
		コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	E2			2	
		セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	E3	E3.P2	E3	11	
		マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)	E2			2	
地	食糞性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	E4.P1.A1	E1.P1	E2	10	
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse	E1		E1	2	
		マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	E2	E1	E2	5	
		オオマグソコガネ	<i>Aphodius haroldianus</i> Balthasar			H1	1	
		コマグソコガネ	<i>Aphodius pusilus</i> (Herbst)			E2	2	
	食肉性	雑食性	オサムシ科	Carabidae	E20.P15.A3.O3	E11.P4.A1	E5.P4.H2	68
			ヒラタゴミムシ族	Platynini	E2	E1.P1	E1	5
			セアカヒラタゴミムシ	<i>Dolichus halensis</i> (Schaller)		E3.P1	E3	7
			ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	E3	E1		4
			トックリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.	P2	E1	E1	4
			ナガゴミムシ属	<i>Pterostichus</i> sp.	P1	P1		2
			マルガタゴミムシ属	<i>Amara</i> sp.	P1		P1	2
			ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.		E1		1
			ヨツボシケシミズギワゴミムシ	<i>Bembidion paediscum</i> Bates		E1		1
			ナガヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites terricola pacificus</i> Bates		E1		1
			オサムシ亜科	Carabinae	E1		E1	2
			ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae			E2	2
			キマワリ属	<i>Plesiophthalmus</i> sp.		L1	E3	4
			ハネカクシ科	Staphylinidae	P11.A9.E9.O17	E8.P5.A2	E3.P4	68
			エンマムシ科	Histeridae			E1	1
ハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i> T.	E1			1			
陸	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae	E7.P2.A3.L2	E2.P3	E2.L1	22	
		スジコガネ亜科	Rutelinae		A1.P1	E2	4	
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	E11.P5.A3.H4.L2	E8.P10.A2.L4	E5.H1	55	
		スジコガネ	<i>Mimela testaceipes</i> Motschulsky		E1		1	
		ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	E9.H2.P7.L1	E11.P8.H2.A4.L1	E2.P1	48	
		アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope		E2		2	
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	E30.P19.A8.H2.L4.O17	E111.P32.A3.H9.L10.O10	E8.P3	266	
		マメコガネ	<i>Popillia japonica</i> Newmann	E7.P3.A2	E5.P3		20	
		クロコガネ	<i>Holotrichia kiotoensis</i> Brenske	H1.E1			2	
		ハナムグリ亜科	Cetoniinae	E1.P1		E1	3	
		アオハナムグリ	<i>Eucetonia roelofsi</i> (Harold)	E1			1	
		カナブン	<i>Rhomborrhina japonica</i> Hope	E1.P1			2	
		アオカナブン	<i>Rhomborrhina unicolor</i> Motschulsky	E2.P1.L2			5	
		カミキリムシ科	Cerambycidae	E4	E1	E1.P1	7	
		クロカミキリ	<i>Spongyliis buprestoides</i> Linne		E1.P1.L1		3	
	ノギリカミキリ	<i>Prionus insularis</i> Motschulsky	E1.P1	E2.P1.H1	E1	7		
	クワガタムシ科	Lucanidae	E1			1		
	ノギリクワガタ	<i>Prosopocoilus inclinatus</i> (Motschulsky)	E1			1		
	コメツキムシ科	Elateridae	P3.E2	P3	P1	9		
	クシコメツキ	<i>Melanotus legatus</i> Candeze	E1			1		
ハムシ科	Chrysomelidae	E3	E2.P1	E2	8			
クワハムシ	<i>Feutiauxia armata</i> Baly	E2			2			
ルリハムシ	<i>Lineaidea aenea</i> (Linne)	E2			2			
ドウガネサルハムシ	<i>Scelodonta lewisii</i> Baly	E1.P1			2			
ゾウムシ科	Curculionidae	E1			1			
その他	不明甲虫	Coleoptera	E7.P4.O27	E5.A2.P5.O3	E5.P3	61		
	アリ科	Formicidae	H7.A2	A2	A3.H7	21		
	ヤマアリ亜科	Formicinae	H5.A8		H1	14		
	オオアリ属	<i>Camponotus</i> sp.	H3.A6	H2	H3	14		
	クロオオアリ	<i>Camponotus japonicus</i> Mayr	H59.A10.B15.M5.T2	H4	H2	97		
	ムネアカオオアリ	<i>Camponotus obscuripes</i> Mayr	T1			1		
	アミメアリ属	<i>Pristomyrmex</i> sp.	H4			4		
	アミメアリ	<i>Pristomyrmex pungens</i> Mayr	H3			3		
	カメムシ目	Hemiptera	W2			2		
	双翅目	Diptera	C3			3		
イェバエ科	Muscidae	C1			1			
計			475	338	98	911		

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大腮 S(Scutellum):小橋板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):囲蛹
E(Elytron):鞘翅 W(Wing):上翅 T(thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Other):その他

第18表 昆虫リスト



- | | |
|---|---|
| 1. ノコギリカミキリ <i>Prionus insularis</i> Motschulsky
左右上翅 長さ 14.2 mm (96C区 SD01; 標本 2) | 6. マメコガネ <i>Popillia japonica</i> Newmann
右上翅 長さ 5.5 mm (96C区 SD06; 標本 22) |
| 2. クロコガネ <i>Prionus insularis</i> Motschulsky
頭部 長さ 5.2 mm (96C区 SD01; 標本 9) | 7. コメツキムシ科 Elateridae genus et species indet.
前胸背板 長さ 5.0 mm (96C区 SK23; 標本 7) |
| 3. アオカナブン <i>Rhomborrhina unicolor</i> Motschulsky
脛節 長さ 6.4 mm (96C区 SD01; 標本 11) | 8. コブマルエンマコガネ
<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse
頭部 最大幅 3.3 mm (96C区 SD01; 標本 19) |
| 4. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky
左上翅 長さ 10.5 mm (96C区 SD01; 標本 48) | 9. クロオオアリ <i>Camponotus japonicus</i> Mayr
頭部 長さ 3.3 mm (96C区 SK23; 標本 66) |
| 5. ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> Hope
腿脛節 腿節の長さ 7.0 mm (96C区 SD01; 標本 21) | |

第 81 図 昆虫化石の顕微鏡写真

第3節 大脇城跡から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

大脇城跡は、愛知県豊明市栄町梶田及び元屋敷地内に所在する。本遺跡は、境川の支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に立地する城館跡を中心とした戦国期(16~17世紀)の遺跡である。ここでは、当時の遺跡付近の環境(植生)および栽培・利用状況(食生活)を推定する目的で大型植物化石の検討を行った。

2 出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を表1および表2にまとめた。試料番号の付いていない調査区96C区SD06(第4,5層)および調査区97B区SD01北から出土したものについては、分類群(部位、個数)を以下に示した(個数の()内は破片の数を示す)。また、出土した全ての分類群を木本・草本別に以下に記載した。

96C区SD06(第4,5層)

アラカシ(効果、1) コナラ(殻斗、1) クヌギ近似種(果実、(多数)…約1個分)
コナラ属コナラ亜属(効果、2) コナラ属(芽、10) アオツツラフジ(種子、1) フジ属(芽、1)
アカメガシワ(種子、1) ヒサカキ(種子、11) カキノキ(種子、3)
スゲ属(果実、3) ホタルイ属(果実、1) ミゾソバ(果実、3) タデ属(果実、1)
タデ属?(果実、1(1)) シロザ近似種(種子、1) コウホネ属(種子、2) ヒツジグサ(種子、9)
不明(芽、11)

97B区SD01北

マツ属複雑管束亜属(毬果、1) コナラ属コナラ亜属(効果、1)
コナラ属(果実、(1)・芽、5) サクラ属サクラ節(核、1) バラ科(刺、12)
フジ属(芽、5) センダン(核、1(1)) ヒサカキ(種子、1)
ヒルムシロ属(種子、1) イネ(炭化胚乳、1) スゲ属(果実、1)
ホタルイ属(果実、1) イボクサ(種子、1) ミゾソバ(果実、1(3)…計2) ポントクタデ(果実、61(約21)
…計約68個分) ヤナギタデ(果実、7(13)…計約13個分)
イヌタデ近似種(果実、1) タデ属(果実、1) ギシギシ属(果実、1)
エノキグサ(種子、1) スズメウリ(種子、1) 不明(芽、約28)

出土した全ての分類群

木本 (18分類群)

マツ属複雑管束亜属 アラカシ コナラ クヌギ近似種 コナラ属コナラ亜属 コナラ属 アオツツラフジ ウメ モモ サクラ属サクラ節 バラ科 フジ属 センダン アカメガシワ ヤブツバキ チャノキ ヒサカキ カキノキ

草本 (19分類群)

ヒルムシロ属 イネ スゲ属 ホタルイ属イボクサ ミゾソバ ポントクタデ ヤナギタデ イヌタデ近似種 タデ属 ギシギシ属 シロザ近似種 コウホネ属 ヒツジグサ エノキグサ ヒシ属 スズメウリ メロン仲間 ヒョウタン仲間

3 考察

遺跡付近の環境(植生)

大型植物化石を検討した結果、様々な分類群が出土しており、これらが大脇城付近に生育していたこ

調査区	遺構	層位	マツ属複雑管束亜属 種実	アラカシ 果実	クスギ近似種 果実	ウメ 核	モモ 核	センダン 核	ヤブツバキ 種子	チャノキ 種子	カキノキ 種子	メロン仲間 種子	ヒヨウタン仲間 果実	ヒツジグサ 種子	ヒシ属 果実
		SD01 北	1					1(1)							
		SD01 第1層	1												
		SD01 第2層	18		8		2	23	1						
		SD01 第3層	44	2	16	1	79	335	4						3
		SD01 第4層	5				3	70							(2)
97 B		SD02 第2層	5												
		SD02 第3層	5												
		SD05 下層					1								
		SD07 第2層	7												
		SD12 第2層									2				
		SE01					1								
		SE07	1												
		SK106					1								
		SK111	1				1								
		SD02					1								
		SD02 第1層	8	33	2								(1)		
		SD02 第2層	10	17(1)					1						
		SE01					6								
		SE02					31	1							
		SE02土器群の炭化物層					10								
		SE03						0.5							
		SK10 第2層	10												
97A		SK135					1								
		SK21 第3層					1	1							
		SK23										3			
		SK25 第1層					1								
		SK344		1											
		SK351					1								
		SK36					0.5								
		トレンチ3	1												
		SD02 第3層			(1)										
		SD03 第2層							7						
		SD03 第3層			(2)				4						
		SD12 第2層							4						
96E		SD13 第1層					1								
		SE04					2								
		SE08				1									
		検出1							1						
		SD01 第3層			1	1									
		SD01 第4層			2										
96C		SD03 第3層		1											
		SD05					2			3					
		SD06 第4, 5層			1						3			9	
		トレンチ					1				4				
		SE01									4				
		合計	117	54(1)	31(1)	3	146.5	432	22	3	9	3	(1)	9	3.5

第19表 主な大型植物化石の出土状況() 付きの数字は破片の数

とが予想されるが、比較的多産したマツ属複雑管束亜属（アカマツ、クロマツの類）、センダン、アラカシ、クスギ近似種、モモ、ヤブツバキが特に注目される。これらは、城館付近に普通に見られたと思われるが、出土状況からみて、城館の主郭を区画する外堀と考えられている大溝(SD01)付近に主に生育していたのではないと思われる。ただし、アラカシはSD02、ヤブツバキはSD03などの調査区96E区で多産しており、これらは外郭の屋敷地付近に主に生育していたことが予想される。モモについては、明らかな栽培植物であり、出土状況も様々な調査区・遺構から出土しており、特に井戸(SE02)からかなり多産している。これらのことから、生活の場で利用された後、投棄されたものが流入したか、あるいは井戸のような場所に直接投棄されたものである可能性が考えられる。

一方、城館の外側を区画する外堀的なものと推察されているSD01・06といった大溝には次のような植物が生育していたことが予想される。SD01には、ヒシ属、ヒルムシロ属が生育しており、水際にはホタルイ属、イボクサ、ミゾソバ、ボントクタデ、ヤナギタデ、スズメウリといった多種類の湿地性草本が生育していた。また、幾分乾き気味の所には、ギシギシ属、エノキグサが生育していた。SD06には、コウホネ属、ヒツジグサが生育しており、水際にはホタルイ属、ミゾソバが生育していた。また、幾分乾き気味の所には、シロザ近似種が生育していた。

栽培・利用状況（食生活）

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものは、ウメ、モモ、チャノキ、カキノキ、イネ、メロン仲間、ヒョウタン仲間であり、出土個数からみるとモモは比較的普通に利用されていたものと思われる。これらは、栽培植物であり、利用されていたことは間違いないであろうが、城館付近で栽培されていたということとは別問題であり、生活の場で投棄されたものが流入した可能性も考えられる。

4 主な大型植物化石の形態記載

アラカシ *Quercus glauca* Thunb. 果実、幼果

果実は、花柱は短く太く、柱頭は急に舌状に開く。果実上部の輪状紋は突出せず、薄く肩に広がる。幼果は、殻斗に輪状紋があり、花柱は太く短く、柱頭は急に舌状に開くことから、シラカシかアラカシであると考えられるが、果実でアラカシが出土していることからアラカシとした。

コナラ *Quercus serrata* Murray 殻斗

殻斗鱗片は覆瓦状に並び、殻斗上端はやや内側を向き、基部は鋭脚。殻斗径は10 mm前後。

クヌギ近似種 *Quercus cf. acutissima* Carruth. 果実

クヌギとアベマキは大変似通っているが、クヌギは球形に近く、アベマキは縦長の傾向がある。出土したものは、大半が球形に近いのでクヌギの可能性が高いと思われるが、アベマキも混じっている可能性もあるのでクヌギ近似種とした。なお、出土した果実は、長さ10-23 mm（平均約18.6 mm）、幅11-23 mm（平均約19.2 mm）で計測した19個体中、長さ≦幅のものが10個体見られた。

コナラ属 *Quercus* 果実、芽

果実は、アラカシ、コナラ、クヌギ近似種が出土しているので、これらのうちいずれかであろうが、破片でありこれ以上の同定には至らない。芽は側面観は卵形、上面観は五角形。

ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. 種子

淡黄褐色、広卵形。不規則な3稜があり、径15.5-22 mmで平均約19 mm。

チャノキ *Camellia sinensis* (Linn.) O.Kuntze 種子

ほぼ球形で出土した3個体の径はそれぞれ11、12、14 mm。

カキノキ *Diospyros kaki* Thumb. 種子

偏平な水滴形で表面には指紋状の模様があり、光沢がある。

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

97B区SD01の第4層からは炭化胚乳が塊状に出土した。表面には穎が張り付いているものも少し見られた。イネの穎の表面には規則的に並ぶ独特の顆粒状突起があるので破片であっても同定可能である。

コウホネ属 *Nuphar* 種子

黒褐色、広卵形。一端に臍があり、表面には細かい網目紋がある。長さ4.1-4.9 mm、幅3.6-3.9 mm。

ヒツジグサ *Nymphaea tetragona* Georgi 種子

茶褐色で種皮は薄い。長さ2 mm程度、幅1.5 mm程度。

ヒシ属 *Trapa* 果実

明瞭な角が2本あると思われるので、おそらくヒシであろうが、出土したものは全て破片であるためヒシ属に留めた。

メロン仲間 *Cucumis melo* Linn. 種子

側面観は長楕円形、上面観は薄い両凸レンズ形。長さ6.2-6.8mm、幅3.1-3.2mmで藤下(1982)による長さ6.1-8.0mmの中粒種子(マクワウリ・シロウリ型)にあたる。

参考文献

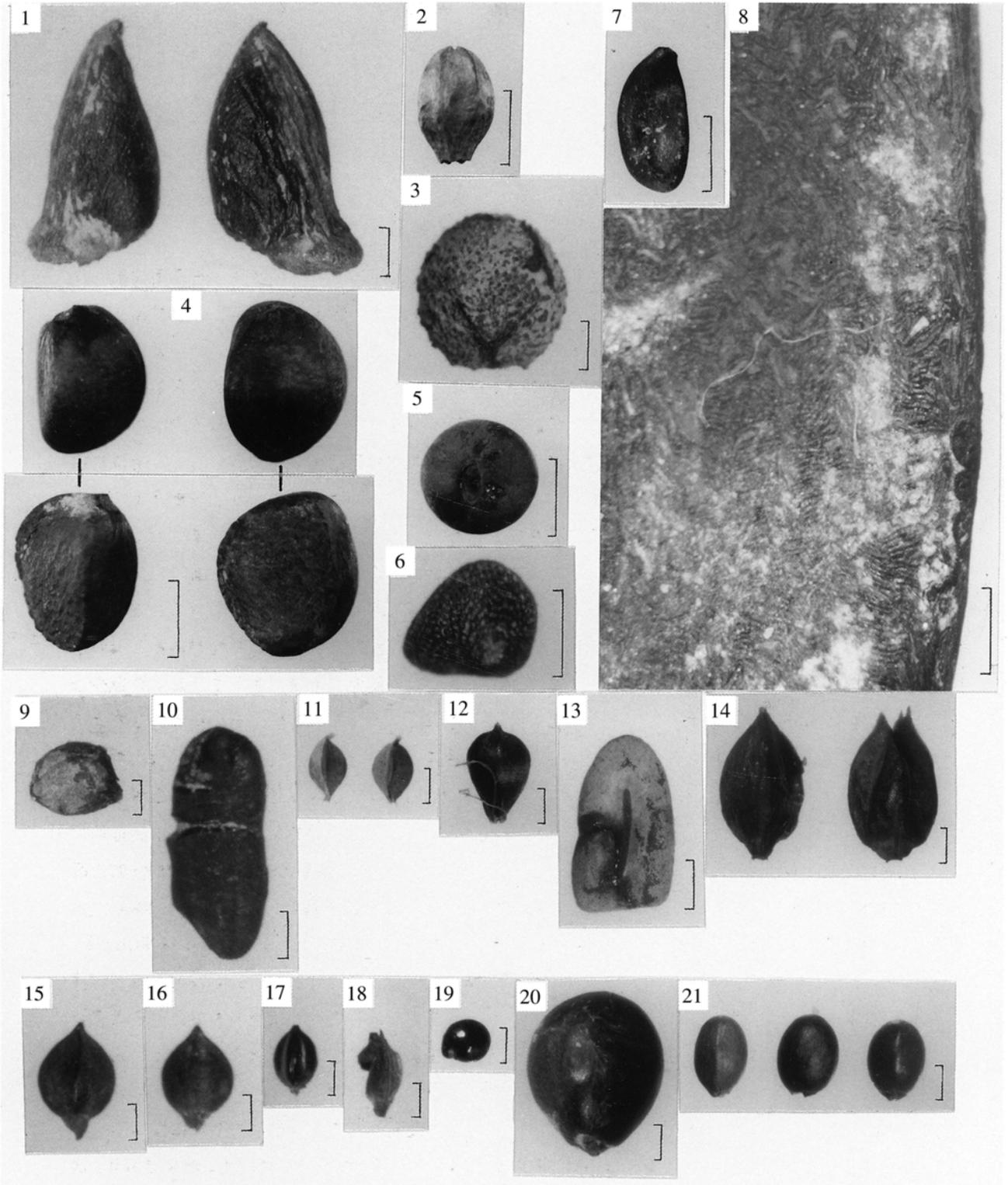
(財)愛知県埋蔵文化財センター(1997) 大脇城跡. 平成8年度年報, 22-27

(財)愛知県埋蔵文化財センター(1998) 大脇城跡. 平成9年度年報, 18-21

岡本素治(1973) どんぐりの話・Nature Study, 第19, 55-61, 77-78, 91-94.

藤下典之(1982) 菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について・唐津市文化財調査報告第5集菜畑遺跡, 455-463.

番号	調査区	グリッド	遺構	分類群	部位	個数	番号	調査区	グリッド	遺構	分類群	部位	個数	
Xs-001	97A	IXC 15h	SD02 第1層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-108	97B	IXC 18l	SD01 第3層	モモ	核	3	
Xs-002	97A	IXC 18i	SD02 第1層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-109	97B	IXC 20o	SD01 第3層	モモ	核	2	
Xs-003	97A	IXC 19h	SD02 第1層	マツ属複維管束亜属	結果	4	Xs-110	97B	IXC 16m	SD01 第3層	モモ	核	1/4	
Xs-004	97A	IXC 14d	SD02 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-111	97B	IXC 15m	SD01 第3層	モモ	核	13(2)	
Xs-005	97A	IXC 19i	SD02 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	5	Xs-112	97B 拡張区	XC 1q	SD01 第3層	No.722	モモ	核	1
Xs-006	97A	IXC 20j	SD02 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	4	Xs-113	97B	IXC 19l	SD01 第4層	モモ	核	2	
Xs-007	97A	IXC 19h	SK10 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-114	97B	IXC 18l	SD01 第4層	モモ	核	1	
Xs-008	97A	IXC 19i	SK10 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	8	Xs-115	97B 拡張区	VIIIIC 20l	SD05 下層	モモ	核	1	
Xs-009	97A	IXC 19h	TO3	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-116	97B	IXC 19h	SK106	モモ	核	1	
Xs-010	97B	IXC 18l	SD01 第1層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-117	97B	IXC 20h	SK111	モモ	核	1	
Xs-011	97B	IXC 16m	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-118	97B	IXC 20h	SE01	モモ	核	1	
Xs-012	97B	IXC 20o	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	5	Xs-119	97B	IXC 20o	SD01 第2層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-013	97B	IXC 20p	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-120	97B	IXC 20o	SD01 第2層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-014	97B	IXC 20o	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-121	97B	IXC 18l	SD01 第2層	クヌギ近似種	果実	6(3)	
Xs-015	97B	IXC 20p	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	4	Xs-122	97B	IXC 13n	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-016	97B	IXC 20o	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-123	97B	IXC 13n	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	5	
Xs-017	97B	IXC 19m	SD01 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-124	97B	IXC 13n	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	4	
Xs-018	97B	IXC 13n	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-125	97B	IXC 13n	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	2	
Xs-019	97B	IXC 20n	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-126	97B	IXC 18m	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	(1)	
Xs-020	97B	IXC 13n	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-127	97B	IXC 17l	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-021	97B	IXC 14d	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-128	97B	IXC 18l	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	2	
Xs-022	97B	IXC 16l	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-129	97B	IXC 13n	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-023	97B	IXC 15m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	4	Xs-130	97B	IXC 17l	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-024	97B	IXC 16m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-131	97B	IXC 18l	SD01 第3層	コナラ属	果実	(5)約1	
Xs-025	97B	IXC 19m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-132	97B	IXC 15m	SD01 第3層	コナラ	殻斗	1	
Xs-026	97B	IXC 14d	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-133	97B	IXC 15m	SD01 第2層	ヤブツバキ	種子	1	
Xs-027	97B	IXC 15m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-134	97B	IXC 13n	SD01 第3層	ヤブツバキ	種子	1	
Xs-028	97B	IXC 19l	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-135	97B	IXC 20j	SD01 第3層	ヤブツバキ	種子	3	
Xs-029	97B	IXC 17l	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-136	97B	IXC 18l	SD01 第2層	不明	?	1	
Xs-030	97B	IXC 18l	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-137	97B	IXC 20p	SD01 第3層	ウメ	核	1	
Xs-031	97B	IXC 20p	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-138	97B	IXC 18m	SD01 第3層	ヒシ属	果実	(6)約1	
Xs-032	97B	IXC 20p	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-139	97B	IXC 18l	SD01 第3層	ヒシ属	果実	(4)約1	
Xs-033	97B	IXC 20o	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-140	97B	IXC 19l	SD01 第3層	ヒシ属	果実	(多)約1	
Xs-034	97B	IXC 18l	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-141	97B	IXD 18l	SD01 第4層	ヒシ属	果実	(2)1未調	
Xs-035	97B	IXC 15m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-142	97B 拡張区	IXC 16a	SD12 第2層	カキノキ	種子	2	
Xs-036	97B 拡張区	IXC 1s	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-143	97B	IXC 20p	SD01 第3層	不明	果実?	1	
Xs-037	97B	IXC 19m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-144	97B	IXC 14m	SD01 第3層	不明	?	1	
Xs-038	97B	IXC 19m	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-145	97B	IXC 19l	SD01 第3層	不明	?	2	
Xs-039	97B	IXC 17l	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-146	97B	IXC 16m	SD01	不明	核?	(1)	
Xs-040	97B	IXC 20o	SD01 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-147	96C	HVC 19o	SD05	モモ	核	1	
Xs-041	97B	IXC 18p	SE07	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-148	96C	HVC 19o	SD05	モモ	核	1	
Xs-042	97B	IXC 20j	SD02 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-149	96C	IXD 3b	SE01 西半分	モモ	核	1	
Xs-043	97B	IXC 20j	SD02 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-150	96C	VIIIIC 14o	SD01 第3層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-044	97B	IXC 20j	SD02 第3層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-151	96C	VIIIIC 14o	SD01 第4層	クヌギ近似種	果実	2(3)	
Xs-045	97B	IXC 18l	SD01 第4層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-152	96C	VIIIIC 19y	SD03 第3層	No.64	アラカシ	果実	1
Xs-046	97B	IXC 19l	SD01 第4層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-153	96C	IXD 3b	SE01 トレンチ	カキノキ	種子	1(多)約4	
Xs-047	97B	IXC 20s	SD07 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-154	96C	VIIIIC 19o	SD05	チャノキ	種子	1	
Xs-048	97B	IXC 20s	SD07 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	1	Xs-155	96C	VIIIIC 19o	SD05	チャノキ	種子	2	
Xs-049	97B 拡張区	IXC 20t	SD07 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-156	96E	IXC 7a	SD13 第1層	モモ	核	1	
Xs-050	97B 拡張区	IXC 1s	SD07 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	3	Xs-157	96E	IXC 7a	SD13 第2層	モモ	核	1	
Xs-051	97B 拡張区	IXD 16a	SD02 第2層	マツ属複維管束亜属	結果	5	Xs-158	96E	IXB 9i	SD13 第2層	モモ	核	1	
Xs-052	97B 拡張区	IXC 20s	SK111	マツ属複維管束亜属	結果	2	Xs-159	96E	IXC 11d	SE04 No.519	ウメ	核	1	
Xs-053	97B	IXC 18l	SD01 第2層	センダン	核	22	Xs-160	96E	IXB 6t	SE08	ウメ	核	1	
Xs-054	97B	IXC 13n	SD01 第3層	センダン	核	4	Xs-161	96E	IXC 11e	SD03 第3層	クヌギ近似種	果実	(2)約1	
Xs-055	97B	IXC 13n	SD01 第3層	センダン	核	4	Xs-162	96E	IXC 11f	SD02 第3層	クヌギ近似種	果実	(1)	
Xs-056	97B	IXC 13n	SD01 第3層	センダン	核	17	Xs-163	96E	IXC 12f	SD03 第2層	ヤブツバキ	種子	3	
Xs-057	97B	IXC 13n	SD01 第3層	センダン	核	10	Xs-164	96E	IXC 12e	SD03 第2層	ヤブツバキ	種子	1	
Xs-058	97B	IXC 14d	SD01 第3層	センダン	核	7	Xs-165	96E	IXC 12e	SD03 第2層	ヤブツバキ	種子	1	
Xs-059	97B	IXC 16l	SD01 第3層	センダン	核	3	Xs-166	96E	IXC 13f	SD03 第2層	ヤブツバキ	種子	4	
Xs-060	97B	IXC 14m	SD01 第3層	センダン	核	15	Xs-167	96E	IXC 12f	SD12 第2層	ヤブツバキ	種子	4	
Xs-061	97B	IXC 16m	SD01 第3層	センダン	核	5(1)	Xs-168	96E	IXC 10e	検出1	ヤブツバキ	種子	1	
Xs-062	97B	IXC 14d	SD01 第3層	センダン	核	13	Xs-169	96E	IXC 15k	SE03	センダン	核	1	
Xs-063	97B	IXC 15m	SD01 第3層	センダン	核	4	Xs-170	97A	IXC 18j	SK21 第3層	センダン	核	(多)約1/2	
Xs-064	97B	IXC 16l	SD01 第3層	センダン	核	4	Xs-171	97A	IXC 4h	SE01	モモ	核	2	
Xs-065	97B	IXC 19m	SD01 第3層	センダン	核	7	Xs-172	97A	IXC 16g	SE01	モモ	核	3(2)計4	
Xs-066	97B	IXC 16m	SD01 第3層	センダン	核	4	Xs-173	97A	IXC 16h	SD02	モモ	核	1	
Xs-067	97B	IXC 17l	SD01 第3層	センダン	核	12	Xs-174	97A	IXC 19j	SE02	モモ	核	1	
Xs-068	97B	IXC 19m	SD01 第3層	センダン	核	2	Xs-175	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	半割1	
Xs-069	97B	IXC 19l	SD01 第3層	センダン	核	4	Xs-176	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	6(1)	
Xs-070	97B	IXC 17m	SD01 第3層	センダン	核	2	Xs-177	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	10	
Xs-071	97B	IXC 17m	SD01 第3層	センダン	核	1	Xs-178	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	12	
Xs-072	97B	IXC 18l	SD01 第3層	センダン	核	50	Xs-179	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	1	
Xs-073	97B	IXC 18l	SD01 第3層	センダン	核	1	Xs-180	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	10	
Xs-074	97B	IXC 20n	SD01 第3層	センダン	核	3	Xs-181	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	12	
Xs-075	97B	IXC 20o	SD01 第3層	センダン	核	7	Xs-182	97A	IXC 16g	SE02	モモ	核	1	
Xs-076	97B	IXC 20q	SD01 第3層	センダン	核	3					土器群の炭化物層	モモ	核	1
Xs-077	97B	IXC 18l	SD01 第3層	センダン	核	133(1)	Xs-183	97A	IXC 16g	SE02				
Xs-078	97B	IXC 18l	SD01 第3層	センダン	核	5					土器群の炭化物層	モモ	核	2
Xs-079	97B	IXC 15m	SD01 第3層	センダン	核	14	Xs-184	97A	IXC 16g	SE02				
Xs-080	97B 拡張区	XC 1r	SD01 第3層	センダン	核	1					土器群の炭化物層	モモ	核	4
Xs-081	97B	IXC 20m	SD01 第4層	センダン	核	6	Xs-185	97A	IXC 16g	SE02	センダン	核	1	
Xs-082	97B	IXC 19l	SD01 第4層	センダン	核	5	Xs-186	97A	IXC 16g	SE02				
Xs-083	97B	IXC 20m	SD01 第4層	センダン	核	2					土器群の炭化物層	モモ	核	3
Xs-084	97B	IXC 18l	SD01 第4層	センダン	核	28	Xs-187	97A	IXC 18j	SK21 第3層	No.318	モモ	核	1
Xs-085	97B	IXC 18l	SD01 第4層	センダン	核	1	Xs-188	97A	IXC 16k	SK25 第1層	モモ	核	1	
Xs-086	97B	IXC 19l	SD01 第4層	センダン	核	16	Xs-189	97A	IXC 17f	SK36	モモ	核	半割1	
Xs-087	97B	IXC 18l	SD01 第4層	センダン	核	7	Xs-190	97A	IXC 16g	SK135	モモ	核	1	
Xs-088	97B	IXC 20j	SD01 第4層	センダン	核	3	Xs-191	97A	IXC 17h	SK351	モモ	核	1	
Xs-089	97B	IXC 19l	SD01 第4層	センダン	核	2	Xs-192	97A	IXC 15h	SD02 第1層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-090	97B	IXC 14m	SD01	モモ	半割1		Xs-193	97A	IXC 19i	SD02 第1層	クヌギ近似種	果実	1	
Xs-091	97B	IXC 17l	SD01 第2層	モモ	半割1		Xs-194	97A	IXC 15h	SD02 第1層	アラカシ	果実	11	
Xs-092	97B	IXC 18l	SD01 第2層	モモ			Xs-195	97A	IXC 16h	SD02 第1層	アラカシ	果実	11	
Xs-093	97B	IXC 20o	SD01 第2層	モモ			Xs-196	97A	IXC 14g	SD02 第1層	アラカシ	果実	10	
Xs-094	97B	IXC 13n	SD01 第3層	モモ	核	6(1)	Xs-197	97A	IXC 18i	SD02 第1層	アラカシ	果実	1	
Xs-095	97B	IXC 13n	SD01 第3層	モモ	核	1	Xs-198	97A	IX					



- | | | |
|--------------------|----------------------|--------------------|
| 1. フジ属 芽 SD01 | 2. センダン 核 Xs-057 | 3. アカメガシワ 種子 SD06 |
| 4. ヤブツバキ 種子 Xs-135 | 5. チャノキ 種子 Xs-154 | 6. ヒサカキ 種子 SD06 |
| 7. カキノキ 種子 SD06 | 8. カキノキ 種子の表面模様 7の拡大 | 9. ヒルムシロ属 種子 SD01 |
| 10. イネ 炭化胚乳 SD01 | 11. スゲ属 果実 SD06 | 12. ホタルイ属 果実 SD06 |
| 13. イボクサ 種子 SD01 | 14. ミゾソバ 果実 SD06 | 15. ポントクタデ 果実 SD01 |
| 16. ヤナギタデ 果実 SD01 | 17. イヌタデ近似種 果実 SD01 | 18. ギシギシ属 果実 SD01 |
| 19. シロザ近似種 種子 SD06 | 20. コウホネ属 種子 SD06 | 21. ヒツジグザ 種子 SD06 |

第 82 図 大型植物遺体写真

(スケールは 1.3.6.8 ~ 21 が 1mm. 2.4.5.7 が 1cm)

第7章 考察

第1節 遺構の時期区分と変遷

1 時期区分

既述のように今回の調査では、15世紀後半から19世紀前半にかけての時期の遺構が検出された。遺構は、いずれも基本的には同一面上、すなわち耕作土・床土直下の地山面で検出されたもので、遺構掘削面を層位的に捉えることは不可能であった。そのため遺構の時期区分については、遺構の重複関係、配置、埋土の相違および埋土中から出土した遺物の型式を手掛かりにせざるを得ない。ただ既述のように遺構の重複関係は少なく、それを主体として遺構の時期区分をするのは困難である。そこで埋土中から出土した遺物の型式を手掛かりにして、遺構の重複関係を勘案しつつ遺構の消長について整理することにする。第21表は、出土量が多く、その編年研究が体系的に進められている藤澤良祐氏の瀬戸・美濃窯産陶器の編年に基づいて、その出土の有無を通して遺構の消長について整理したものである。周知のように、溝等の遺構はその開削時あるいは埋没過程において古い時期の遺物が混入する可能性が考えられるなど、出土遺物の年代をそのまま遺構の年代（開削、存続、廃棄・埋没）とするには問題があると云わざるを得ない。そこでこうした点をふまえつつ、ここでは遺物の出土量・まとまりおよび数少ない遺構の重複関係・遺構の配置などを考慮して無理のないところで遺構の年代を推定するようにつとめた。特に遺構の重複関係を重視して遺構の年代を推定した主要遺構としては次のものがある。一つは97B区SD01で、古瀬戸後期第4小期の播鉢が出土した97B区SE08を壊して開削されていることから、97B区SD01の上限年代について、古瀬戸後期第4小期以降、具体的には大窯第1段階を想定したことである。もう一つは、96E・97A・B区SD02および96E・97A区SD03の開削年代について、96E区SE04（大窯第1・2・3段階の遺物出土）・97A区SK18（古瀬戸後期第4小期、大窯第1・2段階の遺物出土）・97A区SK24（大窯第2段階の遺物出土）・97B区SE04（古瀬戸後期第4小期、大窯第1・2・3段階の遺物出土）97B区SE06（古瀬戸後期第4小期、大窯期の遺物出土）を壊して開削されていることから、遺構の上限年代を大窯第3段階以降、具体的には他の遺構との位置関係から連房式登窯第1小期に求めたことである。

表の示すところによれば、遺構の開削時期の上限は、古瀬戸後期第3小期頃に求められることになるが、量的にはきわめて少なくこの点で若干の問題がある。量的にあるいは器種的にまとまりをもって出土が認められるのは、古瀬戸後期第4小期（なかでも新段階）からであり、遺跡の形成は、この古瀬戸後期第4小期にはじまったものと推定する。その後の消長についてみると、三つの画期的段階を経て変遷していったものと推察する。すなわち、大窯第3段階までで廃絶する遺構あるいは大窯第4段階（とくに古段階）の遺物の出土を欠く遺構が多いことから、大窯第4段階（とくに古段階）の時期に遺跡の展開の上で第1の画期があったことを予想し得る。ついで遺構の消長をみると連房式登窯第4ないし5小期に殆どの遺構が廃絶する

北調査区

-後期：古瀬戸 0-1：大窯第1段階 N-1：連房式登窯第1小期を示す

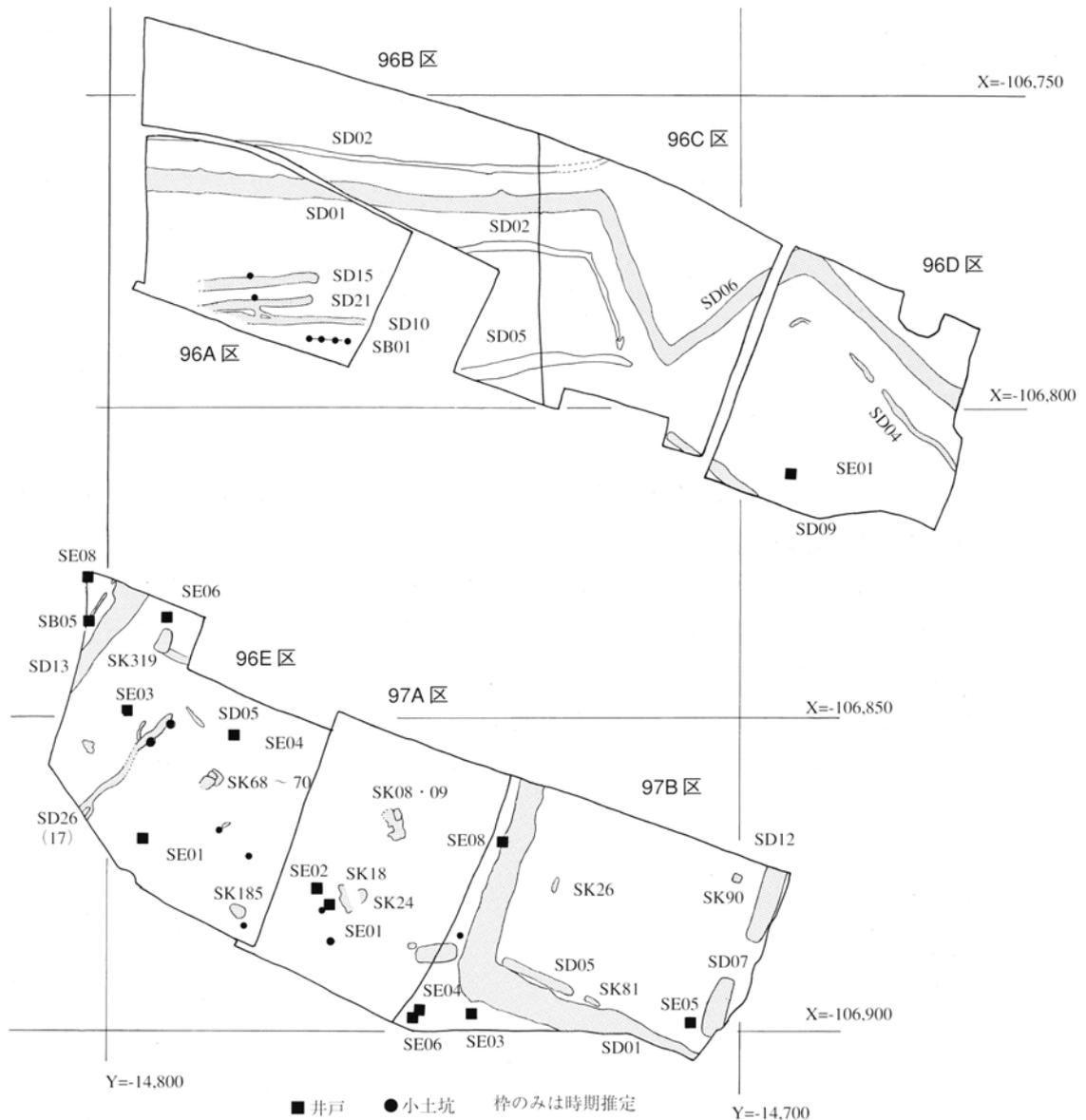
	-後期	後-3	後-4	0-1	0-2	0-3	0-4	N-1	N-2	N-3	N-4	N-5	N-6	N-7	N-8	N-9	N-10	N-11	時期区分
96ABC区SD01																			I・II期
96CD区SD06																			I・II・III期
96A区SD10																			I期
96A区SD21																			I期
96A区SD22																			I期
96A区SD15																			I期
96D区SD04																			I期
96C区SD09*																			I期
96BC区SD03																			I・II期
96A区SD02																			II期
96C区SD07																			II期
96BC区SD05																			I・II期
96B区SD06																			II期
96A区SD12・17																			II期
96A区SD11																			II期
96A区SD24																			II期
96A区SD19																			II期
96A区SD13・16																			II期
96A区SD04																			II期
96A区SD18																			III期
96D区SE01																			I・II期
96A区SE01																			III期
96C区SE04																			III期
96C区SE05																			III期
96A区SK08																			I期
96A区SK13																			I期
96C区SK23																			II期
96A区SK06																			II期
96A区SK02																			II期
96A区SX01																			II期
96A区SX02																			II期

*96C区SD09 (96D区SD05)

南調査区

-後期：古瀬戸 0-1：大窯第1段階 N-1：連房式登窯第1小期を示す

	-後期	後-3	後-4	0-1	0-2	0-3	0-4	N-1	N-2	N-3	N-4	N-5	N-6	N-7	N-8	N-9	N-10	N-11	時期区分
97B区SD01																			I・II期
96E区SD05																			I期
96E区SD23																			I期
96E区SD12																			I期
97B区SD05																			I期
96E区SD26*																			I期
96E区SD15																			I期
97B区SD11																			II期
96E97A区SD01																			II期
97B区SD12																			I・II期
96E区SD11																			II期
97A区SD08																			II期
96E区SD21																			II期
97B区SD08																			II期
96E区SD27※																			II期
96E区SD06																			II期
97B区SD06																			II期
97B区SD07																			I・II期
96E区SD13																			I・II期
96E区SD07																			II期
96E97A区SD03																			II期
96E97AB区SD02																			II・III期
96E区SD04																			II・III期
97A区SD09※																			III期
96E区SE01																			I期
97B区SE08																			I期



第83図 第I期の主な遺構の配置

にみて大脇城の時期に相当する。

南調査区では、その東部に、97B区SD01で囲まれた区画、すなわち大脇城（伝梶川五左衛門屋敷 以下、この区画を城館と呼称する）が造営され、その西方に数多くの井戸および数条の溝が開削される。これらの遺構の配置状況からみて城館の周辺に屋敷地が展開したものと考えられるが、具体的な単位を明確にすることは出来ない。なお97B区SD01は、97B区SE08を壊して開削されており、城館の造営に先立って人々の居住があったことが伺われる。この城館の様相については、後で詳述する。

北調査区では96A・B・C区SD01および96C・D区SD06が開削される。これらの溝を境に、以北には遺構が希薄で、これらの溝に平走する若干の溝を認めるのみである。これに対して以南は屋敷地、広場、溝群など数多くの遺構が展開する。96C・D区SD06および96C区SD09（96D区SD05）で囲まれた区画（96C・D区SD06の内側には97D区SD04が平走する）は、事前の地

籍図の検討で屋敷地の存在が予見されたものである。屋敷地としては、後世の削平が著しいためか屋敷内の遺構が希薄で僅かに井戸が1基(96D区SE01)存するが。期の掘削か否かについては判然としないものである(廃絶は連房式登窯第5小期)。また検出された掘立建物(96D区SB01)は、96D区SE01の廃絶後のものである。このほか検出された区画としては、96A・B・C区SD01に沿った位置で検出した96B・C区SD03および96C・D区SD05で囲まれた歪な方形区画(西側は調査区外)がある。この区画の内側には殆ど遺構が検出されないことから、「広場」であった可能性がある。また96A区においては、東西方向の溝群が存在するが、その配置が何を示すのか、開削意図は推定できない。ここで注意しておきたいのが96A・B・C区SD01および96C・D区SD06の形状で、その断面形が戦国時代特有の所謂「薬研堀」を呈するという点である。さらに96A・B・C区SD01および96C・D区SD06に関する各種自然科学分析の結果からみて、これらの溝は滞水性の強い溝であり、濠の可能性を指摘し得るという点である。こうしたことから96A・B・C区SD01および96C・D区SD06は城館関連遺構、具体的にはこれらの溝を境にその以北が遺構の希薄地帯となることから「外濠」的な性格を有するものと捉え得る可能性がある。この点については後で詳しく述べることとする。

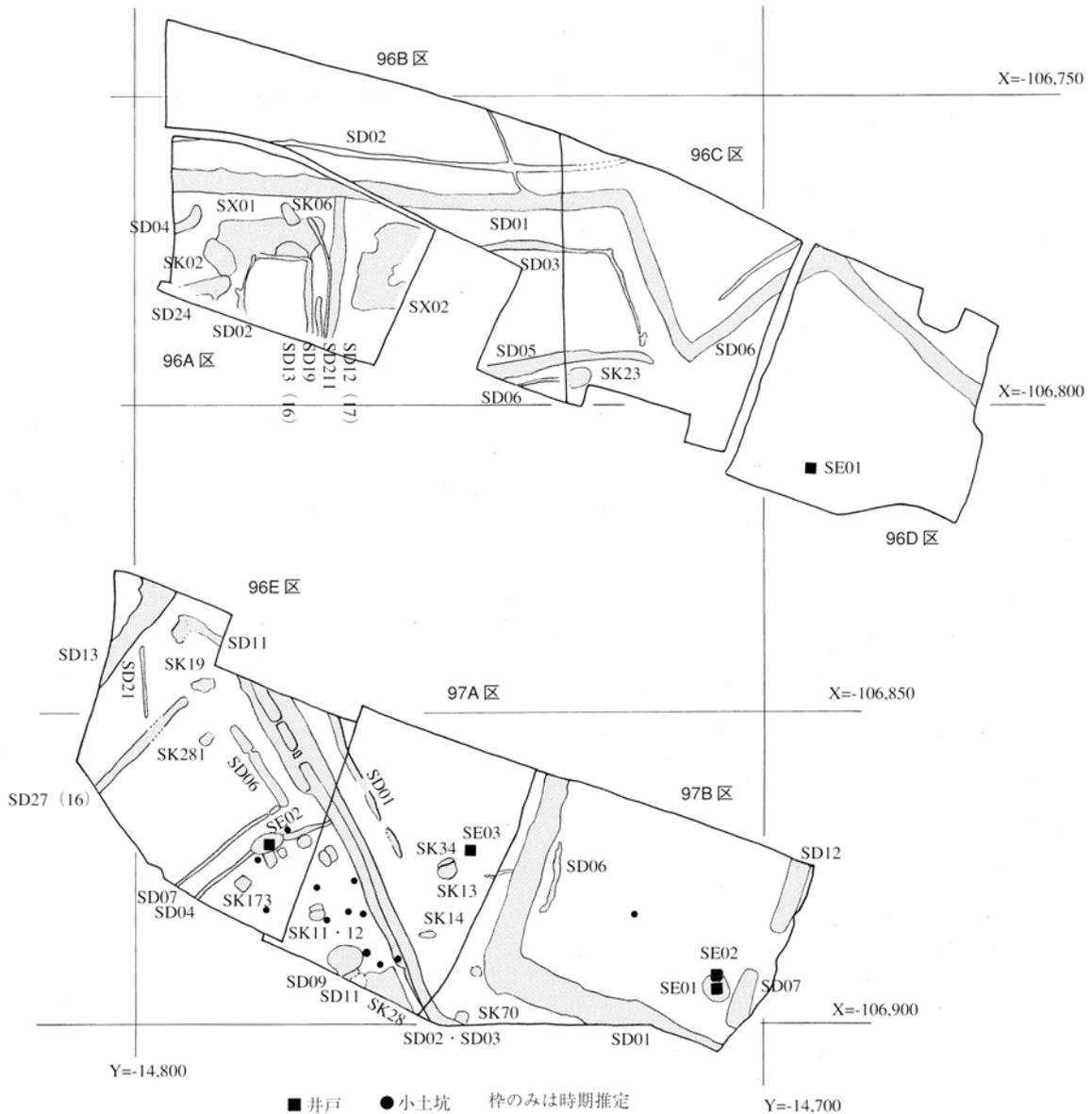
以上、I期の遺跡のイメージ・推定される景観としては、城館を中心とし、その周囲に屋敷地が展開し、それらを取り囲むように外濠的な濠が部分的?(現状では、北側で確認)にめぐる、という様相を想定し得る。

そしてこれらI期の遺構は、概ね大窯第3段階までで廃絶し、一時的な空白期間(大窯第4段階の時期の遺物の出土は僅少であることから推測する。)をむかえることになる。つまり1600年前後とされるこの大窯第4段階の時期に遺跡が一時急激に衰退したとみられるが、これがいったい何を意味するのか判然としない。ただ年代的にみて、城主と伝えられる梶川五左衛門秀盛が文禄・慶長の役で戦没する時期に呼応する点は、注目に値するものと考えられるが、このことについては今後の検討課題としておきたい。

II期(17世紀初頭～17世紀後葉)

II期は、瀬戸・美濃窯産の陶器編年の大窯第4段階(新段階)～連房式登窯第5小期に相当する時期である。

I期に中心的存在であった城館(97B区SD01に囲まれた区画)は、形状を大きく改変させることなく屋敷地として継続して利用されたとみられ、区画内に井戸(97B区SE01)が掘削、溝への遺物の投棄が認められる。大きな変化としては、97B区SD01の西から南側にかけて城館の区画と方向を異にし、北西から南西方向に走る96E・97A・B区SD02および96E・97A区SD03が開削され、その南側にSD02・03に直交する小溝で区画された屋敷地が設けられたことである。これら屋敷地は、地籍図で推定される移転前の旧大脇村の集落が存したとされる字「元屋敷」の北側に隣接する位置にあたる。こうしたことからみて、これら屋敷地は城館廃絶後に村落の一部が、城館周辺に押し寄せてきたことを示唆するものとも考えられる。ちなみにこのSD02・03は、明治時代に入って設定される「字」界(「家下」と「南石田」)の位置に相当するものである。北調査区でも96A・B・C区SD01および96C・D区SD06は継続して利用されたとみられ溝



第84図 第Ⅱ期の主な遺構の配置

への遺物の投棄が認められる。96A区においては、96A・B・C区SD01に直交する96A区SD17 (SD12)の西側に96A区SD02と同SD13に区切られた小区画が形成されるなどするが当該期の井戸が未検出で屋敷地と推定するに至らない。また96C・D区SD06で西～北側を画された屋敷地とみられる区画は引き続き屋敷地が営まれたようで、96D区SE01埋土中から当該期の遺物の出土をみる。ただ、期同様に後世の削平のためかほかに顕著な遺構をみない。検出された掘立建物(96D区SB01)は、96D区SE01の廃絶後のもので、SE01の上層から連房式登窯第8小期の小片が1点出土(混入と判断)したことを勘案するならばこの掘立建物はⅢ期の造営の可能性もある。以上のように、Ⅱ期に入って調査地は、移転前の旧大脇村の集落の一部を構成することとなったと推定される。

そして17世紀後葉の連房式登窯第4～5小期に、溝・井戸がのきなみ廃絶し、また大形の廃棄土坑とみられる土坑が形成されている。このことは、この時期に、調査地点における居館・屋

敷地が一斉に廃絶したことを示しているものとする。この17世紀後葉という廃絶年代は、「元屋敷」なる地名の初見史料等から推定される大脇村の集落の移転年代（既述）と、結果的に一致することとなったことが注目される。しかも主要な区画溝などの埋土上層が班土層となっているものが多々みられることは、人為的に埋められた可能性があることを示唆するものと解すことができ、既述の『寛文村々覚書』にみる大脇城に関する記述にある「今ハ畑成」という表現、すなわち居館・屋敷地が耕作地に転換されていく状況と符合するものといえる。こうした点を勘案するならば、居館・屋敷地の廃絶は、「大脇村」の移転に起因するものと推定して大過ないものとする。ただし、大脇村の移転については、しばしば洪水による被害が「移転」の転機になった旨の記述がみられるが、調査所見にもとづく限りでは、調査区内の溝など開放性をもつ遺構の埋土に洪水に起因する土層堆積を示すものはない。むしろ97B区においては、SD01・SD07・SD12が完全に埋まった（埋められた）後、これらの遺構を壊して洪水性の堆積状況を示す97B区NR01が形成されている。さらに97B区の東南部においては遺構検出面を覆う形で、耕作土直下に洪水性の厚い砂層が1ないし2層認められたが、砂層が2層認められる箇所においてはその間に耕作土層が部分的に遺存していることが確認された。こうした状況を勘案すると、顕著な洪水性の堆積を営まない水害については定かにし得ないが、少なくとも調査区に限っては、15世紀末～17世紀後葉にかけての時期に直接的な大規模洪水を受けることはなかったものと推察される。ただ何分にも標高の低い地点であり、河川の氾濫により水没の危険は絶えず付きまとったであろうことは容易に推察できる。

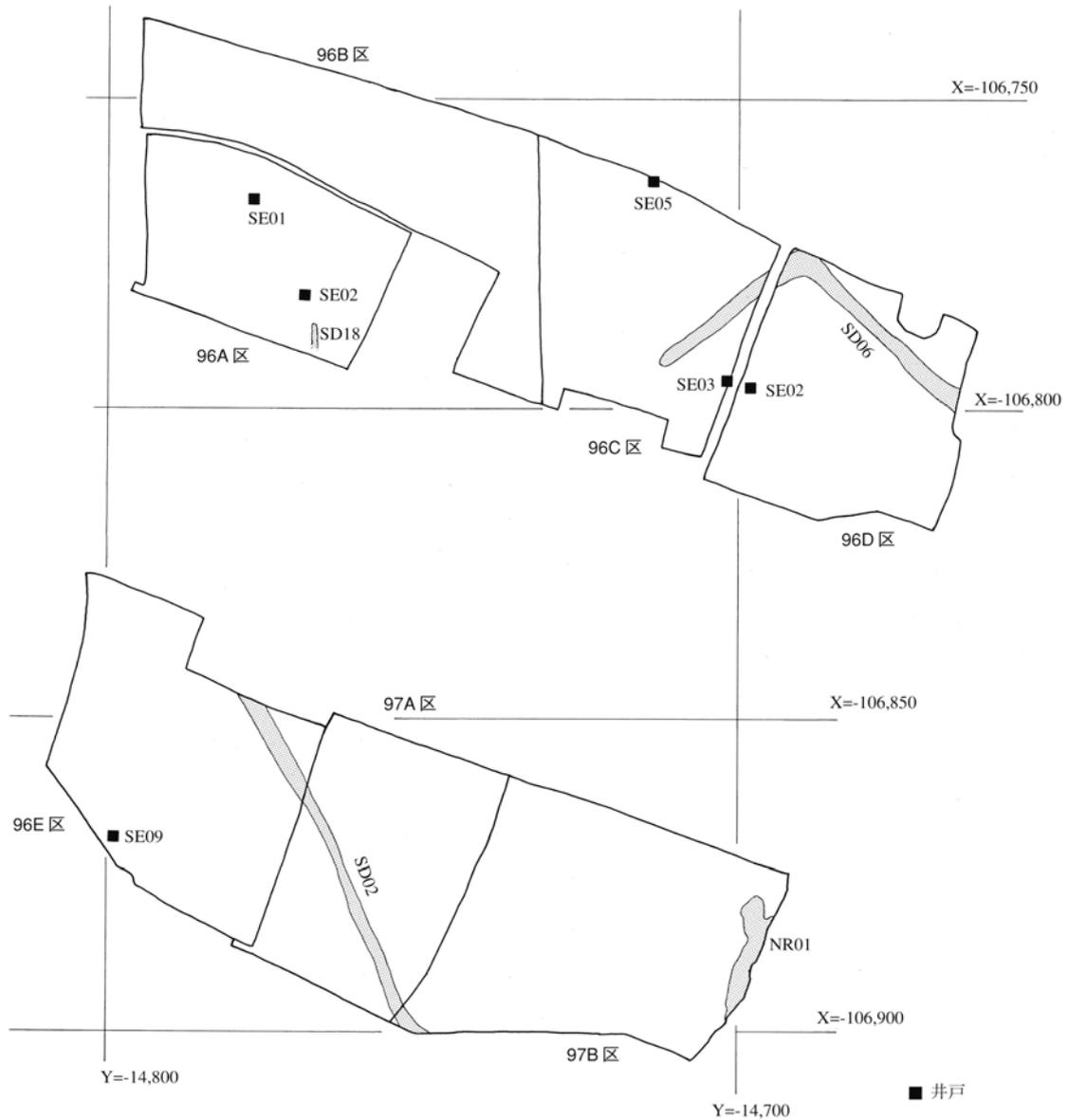
なおこの17世紀後葉という廃絶年代は、遺物の項でも記したが、出土銭貨に江戸時代のものとして寛永通宝がみられるものの、いずれも所謂「古寛永」で、1688年初鑄造の「新寛永」をみない点は、このことを傍証するものである。

これ以後、第Ⅲ期にいたる連房式登窯第6～7小期の時期、遺構としては96C・D区SD06（第1層）など一部の遺構が存続したようで当該期の遺物の出土をみる。

Ⅲ期（18世紀後葉～19世紀中葉）

第Ⅲ期は、瀬戸・美濃窯産の陶器編年の連房式登窯第8小期～第11小期に相当する時期である。

この時期の遺物を出土した遺構としては、北調査区で溝2条、井戸3基、南調査区では、溝2条、井戸1基があり、形状・埋土等から同時期と推定されるものに北調査区の井戸3基（96A区SE02、96C区SE03、96D区SE02）がある。このように遺構は少なく、しかも井戸（7基）が大半をしめる。遺構の配置を見ていくと、北調査区に多く、南調査区には僅少となる。また遺物量も少なく、屋敷地など居住を示すものとは考え難い。おそらくはこれら井戸群は屋敷用というよりは耕作地（畑）の水源として掘削された可能性が高いものと推測し、遺構の空白部分については、耕作地もしくは雑草地などではなかろうかと考える。ちなみに96C・D区SD06（第1層）の位置は、地籍図で水路として記されているものと一致することからみて、おそらくは耕地整理前の地割・土地利用は遅くともこの時期には形成されていたものと推察する。



第85図 第Ⅲ期の主な遺構の配置

第2節 「大脇城跡」（「伝梶川五左衛門屋敷跡」）について

今回の調査では、かねてから大脇城跡もしくは梶川五左衛門屋敷とされてきた地点、地籍図の判読から城館跡が推定される位置において、城館跡と考えられる遺構、具体的には97B区SD01で囲まれた区画の一部を確認し、これまでの伝承を裏付けることとなった。調査区の関係から城館の構造の全体像を明らかにするに至ったわけではないが、以下、今回の発掘調査で得られた「大脇城」の構造・規模・年代に関する知見についてまとめておきたい。

構造・規模 検出し得たのは、97B区SD01（濠）で囲まれた区画（城館内）の一部にとどまるが、地籍図の判読による推定した位置において遺構が検出されたことから見て、大脇城（伝梶川五左衛門屋敷）は周囲に濠を廻らした方形の城館と推定して大過ないものとする。濠の

内側の土塁の存在については確証を欠く。規模は以下の通りである。

区画内 東西 37.4 m + α (地籍図の地割が乱れており判然としない)

南北 30.8 m + α (地籍図による推定 60 m)

濠 西側 幅 4.3 m 深さ 1.1 m 前後

南側 幅 6.3 m 深さ 1.4～1.9 m 濠底に土坑列が並ぶ畝堀で、土橋状の高まり

を挟んで若干の「くいちがい」をみせる。

濠 (97B区SD01) 今回の調査で検出し得たのは城館の西側から南側にかけての部分に限られるが、地籍図の検討および愛知県教育委員会・豊明市教育委員会の立ち会い調査の所見からみて城館の北側に濠が廻ることは確実である。東側については、上記のように地割の乱れ(97B区NR01による破壊か)があり地籍図から濠の存在を判読することはできない。濠の南側部分には土橋状の高まり(掘り残し)がみられ、その西側および東側の溝底には長方形の土坑が一列にならび所謂「畝堀」となっている。また上記土橋状の高まりを挟んで僅かではあるが溝が「くいちがい」をみせていることにも注目しておきたい。これに対して濠の西側部分は、南側部分にくらべ幅狭で浅く、格別な造作は認められない。こうした点からみて、城館の正面は南側にあったのではないかと推察する。

土塁 濠の内側には遺構として明確な土塁は認められなかった。濠の内側に沿った位置に。期の顕著な遺構(97B区SD05、97B区SK81は、位置的にみて97B区SD01の一部もしくは関連遺構と考えられる)を認めないこと等から、土塁の存在した可能性は否定し得ない。その場合97B区SD01と97B区SD07南端との間隔からみて土塁の下端幅は3 mを越えないものと考えられる。

城館内の空間構成 今回の調査で検出し得たのは城館の南西部分に限られる。この部分は上記濠の南側部分にみられた土橋状の高まりを通過して城館内に入ったすぐのところ、遺構は、井戸のほかに小規模の土坑が散在して認められるにとどまる。これらの小規模の土坑は館建物の柱穴とは考え難く、検出した城館の南西部分は格別な施設を特に設けない「広場」であった可能性が高いものとする。この「広場」の東側は、南北に一列に並ぶ97B区SD12および97B区SD07によって区切られている。この97B区SD12および97B区SD07については、城館の東側の濠ではないかとする考え方もあろうが、97B区SD01が97B区SD07の南側を通りさらに東方へ延びていくことは確実視できることからこの考え方は採らない。97B区SD12南端と97B区SD07北端部の間隔は6.5 mで、東側の区画との通路となっていたものと推測する。これに対して97B区SD01と97B区SD07南端との間は土塁が存したとした場合は、通路として考えることは出来ない。なお97B区SD12および97B区SD07の東側の区画については、その殆どが97B区NR01により壊されていることから、城館内の空間構成上の性格・位置付けをなし得ない。

年代 城館の造営年代については、濠(97B区SD01)の西側部分が97B区SE08(古瀬戸後期第4小期)を壊して開削されていることからみて、古瀬戸後期第4小期には遡らず、大窯第1段階に求めるのが妥当ではないかと考える。この97B区SD01の第4層からは概ね古瀬戸後期第4小期～大窯第3段階の時期のものが出土し、第3層～第1層では大窯期のものに加えて連房式登窯第1小期～第5小期のものが出土することからみて、上述のようにI期に引き続き、城

館としての性格が失われたであろう「期に入っても大きな改変を加えられることなく、屋敷地として利用されたものと推測される。

課題・問題点など 既述のように、この「大脇城」なる名称は、江戸時代に入って尾張藩の官撰（官撰に準じるような）地誌として作成された各書に記載されたもので、地元の絵図などでは、「梶川五左衛門屋敷跡」などと記載されるなどしている。例えば最も古い『寛文村々覚書』では、『一 古城跡 先年梶川五左衛門居城之由 今ハ畑成』として「大脇城」なる呼称を用いていない。「大脇城」の初出は『張州府志』で、「【大脇城】在大脇村 梶川五左衛門居之 今為田圃 按梶川五左衛門者水野家人也」とある。また『張州雑誌』では「城跡 村民云元屋敷 古城志曰 知多郡大脇村梶川五左衛門城墟今為田圃」とあって「村民云元屋敷」と地元の住民の呼称を記している点は注目に値しよう。このように考えるならば、「大脇城」なる呼称は、江戸時代に入ってから識者による創作である可能性を考慮する必要がある、「大脇城」という言い方はあまり適切な表現ではないことになる。むしろ「伝梶川五左衛門屋敷跡」とするほうが遺跡の実情にあった表現といえよう。ただこのことに関連して注目されたのが、北調査区で検出した96A・B・C区SD01および96C・D区SD06である。とくに96A・B・C区SD01は96B区において戦国時代の城館に特徴的にみられる断面形が顕著な「薬研堀」状を呈し、城館関連遺構として捉えることが出来るものである。また、加えて96A・B・C区SD01および96C・D区SD06以北は、既述のように殆ど顕著な遺構が認められないという様相を呈し、恰も「外濠」的な景観を呈する。こうした点から、北調査区で検出した96A・B・C区SD01および96C・D区SD06を城館関連遺構として捉えた場合、97B区SD01で囲まれた区画（伝「梶川五左衛門屋敷跡」）を中心とし、その周辺の屋敷群を取り囲む形で外濠的な溝が（部分的に？）めぐり、という様相を想定し得る。ただその場合、当初から計画的にそうした配置が行われたのか、結果としてそうした配置になったのかという点が問題となる。前者については、区画溝の方位がまちまちであり、そこに計画性を感じない点で難がある。後者は97B区SD01で囲まれた区画（伝「梶川五左衛門屋敷跡」）を中心とし、その周辺に屋敷群が形成されたのと相前後して、何らかの必要性から外側の屋敷の溝を繋げる形で外濠的な溝を掘削した、とみる見解で、とくに96C・D区SD06が方形区画（屋敷地）の区画溝（濠）の一部を兼ねるという点を重視するものであるが、外濠的な溝が北調査区で検出されたにすぎないという調査区域の制約からいま一つ実証性に欠けるきらいがある。ちなみに前者の理解に立った場合は、上記の呼称の問題で云えば「大脇城」という呼称が、同様に後者の立場の場合には「梶川五左衛門屋敷」という呼称がより合致するように見受けられる。それはともかくとして、このように現段階で大脇城跡の範囲（全体の構造・構成）について確定することは困難であり、今後の課題と言わざるを得ない。ここではこうした点をふまえたうえで、暫定的に遺跡のイメージとして、伝梶川五左衛門屋敷（97B区SD01で囲まれた区画）を中心とし、その周辺に展開する屋敷地を取り囲むかたちで外濠的な溝がめぐり、という様相を想定しておきたい。

また、いずれにしても北調査区の北北東約200m地点に伝曹源寺跡が、南調査区の南西約500m地点に字「古神明」は、現大脇区の神明社の故地がある。さらに南調査区南側の字「元屋敷」は、旧大脇村集落跡とされるが、これらが大脇城と有機的関連をもっていたことは十分に想像し得るところである。

第3節 出土遺物に関する考察

1 97A区 SE01・97A区 SE02 出土の土師器煮沸具の検討

今回の調査では、97A区 SE01 および97A区 SE02 から土師器の煮沸具類が多量に出土した。既述のようにこれらは廃絶後に井戸側等が抜き取られたのち多量の土器と少量の陶磁器類が炭化物とともに投棄されたものと推定されるものである。第22表は、97A区 SE01 および97A区 SE02 の「炭化物・土器層」から出土した土器・陶磁器類についてその品目・数量（接合後の点数）を示したものである。編年研究が最も進んでいる瀬戸・美濃窯産陶器からするならば、ともに大窯第3段階のものが出土していることからみて、大窯第3段階の時期の遺構として捉えられるものである。しかしながら後述のように土師器の煮沸具類についてみると形態上の相違が看取される。ここでは、一括投棄されたとみられる両遺構出土の土師器の煮沸具類の比較検討を行ない、時間的推移を反映していると考えられる型式変化について若干の考察を試みることにする。なお、ホウロクについては、次項でふれることにする。

a 器種構成の検討

第22表からするならば、97A区 SE01 から出土したものとしては、内耳鍋（205片）、羽釜Ⅰ（49片）、羽釜Ⅱ（2片）、羽釜ⅠⅡ（26片）、茶釜A（6片）がある。ただし羽釜のⅠ、Ⅱ、ⅠⅡの区別は、羽の接合手法の相違に基づくものであり、したがって器種としては内耳鍋、羽釜、茶釜Aの3種ということになる。これに対して、97A区 SE02 からは、内耳鍋（120片）、羽釜Ⅰ（16片）、羽釜ⅠⅡ（10片）、茶釜A（16片）、茶釜B（1片）、茶釜AB（5）、ホウロク（4）、三足鉢（1）が出土した。上述のように羽釜の区別は器種の相違ではなく、茶釜ABは、茶釜A・茶釜Bのどちらに帰属するのか判然としないものの意である。また三足鉢は、火鉢（手あぶり）の可能性が指摘されるものである。したがって煮沸具の器種としては内耳鍋、羽釜、茶釜A、茶釜B、ホウロクの5種ということになる。ここで想起されるのは、尾張地域では、茶釜B、ホウロクが内耳鍋、羽釜、茶釜Aより後出するという指摘である（北村1996）。もとより偶然性が介在する余地が大きく単純に適應することはできないが、これよりするならば97A区 SE01 より97A区 SE02 が相対的に新しいという可能性が生じてくる。

b 内耳鍋について

今回の調査で出土した内耳鍋の中型品については、形態状の相違から大きく内耳鍋a～内耳鍋eの5種に細分した。この分類案に基づくならば、97A区 SE01 出土品は、形態が判別できるものについていえばほとんどが内耳鍋b類で、97A区 SE02 出土品では内耳鍋c類となっている。この内耳鍋b類と内耳鍋c類の相違は、前者が平丸底の底部外面のヘラ削り調整部と体部のナデ調整部との境が稜をもち、体部が緩く内弯気味にのびたのち、口縁部近くで垂直気味に立ち上がる、という特徴をもつものに対して、後者は、より丸みをもった底部底部外面のヘラ削り調整部と体部のナデ調整部との境に稜はなく、底部から口縁部に至るまで単一曲線をなすもので、口縁部近くが内弯（内傾）するという特徴をもつものである。この内耳鍋c類がより扁平化し、底部から体部下半がより丸みをもつ内耳鍋d・e類が本遺跡のⅡ期の遺構から出土す

97A区SE01出土品				97A区SE02出土品					
炭化物・土器層				炭化物・土器層					
瀬戸・美濃窯産陶器									
大窯第1段階 天目茶椀 (1) はさみ皿 (1)				古瀬戸窯後期第3・4小期 口広有耳壺 (1)					
大窯第2段階 灰釉丸皿Ⅰ (1)				大窯第1段階 搦鉢 (1)					
鉄釉丸皿Ⅱ (1)				大窯第1・2段階 灰釉 (丸) 皿 (1)					
大窯第3段階 灰釉内壳皿 (1)				大窯第2段階 天目茶椀 (2) 緑釉丸皿 (1) 鉄釉稜皿 (3) 鉄釉丸皿Ⅱ (1) 搦鉢 (1) 鉄釉皿 (1)					
鉄釉丸皿Ⅱ (2)				大窯第3段階 鉄釉丸皿Ⅱ (1) 鉄釉丸皿Ⅰ (2)					
大窯期 天目茶椀 (1) 搦鉢 (1)				灰釉丸皿Ⅰ (3) 鉄釉稜皿 (2) 灰釉皿 (1)					
時期を特定し得ないもの 茶入 (1)				灰 (丸) 皿 (4) 搦鉢 (1) 大窯期 天目茶椀 (1)					
				鉄釉椀類 (1) 瓶類 (1)					
				時期種類を特定し得ないもの (1)					
土師器									
内耳鍋	205			内耳鍋	120				
羽釜Ⅰ	49	77	288	羽釜Ⅰ	16	26	172		
羽釜Ⅱ	2			羽釜Ⅱ					
羽釜ⅠⅡ	26			羽釜ⅠⅡ	10				
茶釜A	6	6		茶釜A	16	22			
茶釜B				茶釜B	1				
茶釜A B				茶釜A B	5				
ホウロク					ホウロク	4			
三足鉢				0	三足鉢	1			1
胴部片	1850			1850	胴部片	829			829
その他	1			1	その他	6			6
土師皿A c		4	13	土師皿A c	2	4	19		
土師皿A	4			土師皿A	2				
土師皿B a	6	7		土師皿B a	10	13			
土師皿B	1			土師皿B	3				
土師皿 b		2		土師皿 b	1	2			
土師皿?	2			土師皿?	1				
2152				1026					
常滑窯産陶器									
				甕 (11型式) (1) 壺甕類 (1)					

第22表 97A区SE01・同SE02出土品 (炭化物・土器層) 一覧表

ることを勘案するならば、内耳鍋 d・e 類に形態状より近い内耳鍋 c 類が内耳鍋 b 類にくらべて型式上新しいものと見なすことができるものとする。また、本遺跡ではないが、ここでいう内耳鍋 a 類 (今後細分される公算大) 相当のものが大窯第1段階の瀬戸・美濃窯産陶器と共伴することが報告されている。こうしたことを勘案するならば内耳鍋は、おおむね、

内耳鍋 a 類 → 内耳鍋 b 類 → 内耳鍋 c 類 → 内耳鍋 d・e 類 (形態上から内耳鍋 d → e 類への型式変化を想定)

という型式変化を辿ったものと推定することができるものとする。ただ「より扁平化」「内傾」「より丸みをもつ」という表現で示されるこうした形態上の変化は、通常漸進的なものと推定されるものであり、個々体を取り上げた場合、その区分は主観的にならざる面がある。そしてこの97A区SE01および97A区SE02の検討から見通し的にみるならば、「内耳鍋 b 類 → 内耳鍋 c 類」という変化は大窯第3段階の時期内で生じたものと推定できるが、確定するにあたっては、今後の事例の蓄積を必要とするというふうないうまでもない。なおこのことは、先に検討した器種構成から97A区SE01より97A区SE02が相対的に新しいという見解に矛盾しない。

また97A区SE02出土の内耳鍋の小型品についていうならば、その形態は中型品の内耳鍋 d・e

類に近いものがある。中型品に先行して偏平化が進行していた可能性があり、小型品については別の型式変化を考える必要があると考える。

c 羽釜について

全形を復元し得るものが僅少であり、十分に型式上の特徴をつかみきれていない。97A区SE01出土品についていうならば、羽の接合位置周辺は垂直気味に立ち上がっており、羽の接合部を境に口縁部が緩く内傾する形状のものが殆どであるというのに対して、97A区SE02出土品では、羽の接合位置より幾分下方から内傾し、羽の接合部を境に口縁部がより内傾する形状をなすものが多くみられる、という相違点を指摘し得る。つまり羽部を除く体部についてみた場合、前者では、最大径の部位に羽が接合されるのに対して、後者では羽の接合部のやや下方に体部の最大径がくる（とはいうものの体部の最大径が羽端部の径を大きく上回るものはない）、という相違を指摘し得る。この区分が型式学的にみてどこまで有効か、現段階では体系的に捉えることは出来ない。ただ上記の内耳鍋の検討結果をふまえるならば、前者から後者へと変化を遂げた可能性を指摘し得る戸考えるが、今は断定をさけ指摘するにとどめておきたい。

d 茶釜Aについて

全形をうかがい知ることができる資料が少ないため、十分に比較検討するに至らない。茶釜Aの型式変化の傾向として、鐏の位置が、上方から中位へ移るということが指摘（北村1996）されているが、両遺構出土品とも体部における鐏（羽）の位置は中央やや上にあって、これまでの編年研究上大窯第3段階のものに位置付けることに何ら問題はない。強いて両遺構出土品の相違点を探すとすれば、97A区SE01にくらべ97A区SE02の口径が体部に比べ幅広になっているという点を指摘し得る。そして97A区SE01出土品の方がより鉄製茶釜に似ていると取れないこともないが、あくまでも印象である。

e 小結

以上、内耳鍋、羽釜、茶釜Aについて検討を加え、型式変化の方向についてふれるとともに、97A区SE01出土土器群が先行し、97A区SE02出土土器群が後出的であることを指摘した。ここで問題となるのが、大窯第3段階とされる瀬戸・美濃窯産陶器に新古が認められるか否かという点である。藤沢良祐氏にご教示いただいたところでは、現状では出土資料を新古に分けることは困難、とのことである。こうした点からすれば、上述の内耳鍋および羽釜の型式は大窯第3段階の時期を細分する指標となり得る可能性をもつことになる。このことに関しては、事例が僅少であるなど、なお検討を要す点も多く今後の検討に期すこととし、ここでは指摘するに留めておきたい。

北村和宏1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報 平成7年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

2 「ヘラ記号」を有する羽釜について

16世紀前後の時期の土製羽釜の口縁部に「ヘラ記号」を有するものが極稀に存することは、清洲城下町遺跡（愛知県西春日井郡清洲町^註）出土品から従前より知られていた。今回の調査で

は、口縁部に「ヘラ記号」を有するもの羽釜が量的には少ないものの一定量の出土がみられた。その一部を図示した(図版28)。基本的には、「ヘラ記号」は清洲城下町遺跡SD105出土品同様に口縁部外面に斜格子状(に描かれるが、一部に斜線のみのものも散見される。これら「ヘラ記号」の持つ意味については明確にし得ないが、特定の生産地においてあるいは工人集団によって施された可能性も考えられ、当該期の生産と流通を考える遺物として注目したいものである。管見の限りでは、上記清洲城下町遺跡と本遺跡で確認されるのみであり、今しばらく資料の蓄積を俟ちたい。

なおこのことに関連して注目しておきたいのが、羽釜の「羽」の貼付け方の相違である。すなわち本体を正位にしてヨコナデして「羽」を貼付したもの(羽釜Ⅰ)と本体を倒立させた状態で「羽」を貼付下とみられるもの(羽釜Ⅱ)の二種の手法が認められる。この手法の相違について、97B区SD01で見える限りでは上層に移るにつれて後者の手法が増加する傾向にあるように見受けられないこともないが、特定の生産地あるいは工人集団の製品の可能性も考えられるなど、判断としない。いまは指摘するにとどめ、今後の課題としておきたい。

註 鈴木正貴編『清洲城下町遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第17集)(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990 第53図 SD105出土品

3 尾張地方におけるハウロクの出現に関する覚書

今回の調査では、97A区SE02において、大窯第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器に伴いハウロクが出土した。このことは尾張地方におけるハウロクの出現時期が、大窯第3段階にさかのぼるという従来の知見(註1)を傍証するものであった。ただ今回の出土品で注目しておきたいのが、そのハウロクの形態と出土量である。

まずハウロクの形態についてである。これまでの調査・研究によれば、尾張地方の16世紀後半代に位置付けられるハウロクは、いずれも底の形態が緩い丸底を呈するもの(たとえば金子健一氏が設定したA・B類 註2)であった。これに対して今回97A区SE02出土品は、底部が平坦であり、この点で既知のものとその形態が異なる。大脇城遺跡周辺特有の形態なのか否か、判断する材料がない現段階では、今しばらく調査の進展を待ちたい。いずれにしても数少ない16世紀後半代のハウロクの新たな一資料として注目しておきたいと考える。

ついで出土量についてである。上記97A区SE02からは4個体が出土したが、同遺構出土品でいえばその1%にも満たない量である。これを本遺跡全体(～17世紀後葉)でみるならばこれ以外には97B区SD01から3個体分の出土が見られるのみで、土製の煮沸具全体からすればハウロクは殆ど問題にならない出土量である。このことは、すくなくとも16世紀後半～17世紀後葉にかけての時期のハウロクは、他の土製の煮沸具に比べ、本遺跡では希少な器種であったということを示している。何故に普及しなかったのか、という点についてはなお検討を要するので今後の課題とし、いまは指摘するに留めておきたい。ただその際には本遺跡についていえば遺跡の性格の変化、具体的には16世紀代の本遺跡は城館としての性格をもち、17世紀代に入って一

般？集落となったという経緯、および17世紀代の遺構からはホウロクの出土を確認していない点を踏まえておく必要がある。

- 註1 佐藤公保1988「尾張の土師器煮沸具 15～17世紀を中心に」『マージナル No 9』愛知考古学談話会
鈴木正貴1994「戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム 4』考古学フォーラム
北村和宏1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報 平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
金子健一1996「尾張出土のホウロクについて」『研究紀要 第4輯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センターほか
なお報告書による限りでは、小牧城下町の一部に相当する新町遺跡の「織田信長が小牧山城に居城した永禄期に限定できると考えられる」第Ⅰ期の出土品にホウロクが認められないことは、尾張地方におけるホウロクの出現・普及時期を考える上で注目される。
中島隆・坪井裕司・浅野友昭編『愛知県小牧市 小牧城下町発掘調査報告書 新町遺跡』小牧市教育委員会 1998

註2 上記金子健一1996

4 瓦の使用

今回の調査では、量的には少ないが瓦の出土をみた。明らかに18世紀後半以降の棧瓦を除けば、16世紀代(I期)に遡るものは1点で、あとは17世紀代(Ⅱ期)の遺構から出土である。後者のなかには焼成状態などからみて16世紀代に遡り得る可能性をもつものもある。いずれにしても16～17世紀代の瓦は量的に僅少である。このことから屋根に葺く目的以外で持ち込まれたのではないかとするかんがえかたのものあろうが、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の各種があること、さらに一部には漆喰様の付着が見られることからみて、例えば棟部分に葺くなど極めて限定的であるにせよ、使用されたものとも推察する(註)。こうした理解が容認されるならば、当地方の当該時期の瓦の普及状況を考える上での一資料を提供するものとする。また、出土瓦はいずれも燻瓦であるが、既述のように97A区SD01の出土品を見る限り、上層出土品ほど燻しが安定したものとなる傾向が看取される点も瓦の製作技術史の上で注目に値するものとする。

註 可能性としては、建物の廃棄の際に丁寧に瓦が剥がされ持ち去られた、という状況を想定できなくはないが、それにしては調査面積の割りに出土量が僅少過ぎるように見受けられる。

5 石塔と石臼の石材の相違について

今回の調査で出土した石塔は、いずれも両雲母花崗閃緑岩製で、大脇城遺跡に近接する地域で産出地域を探すと、矢作川左岸の丘陵地南部(岡崎市～額田郡幸田町)で産出される所謂「武節花崗岩」が相当する。これに対して石臼(茶臼を除く 挽き臼)は1点を除きいずれも黒雲母花崗岩製であった。同様に産出地域を探すと、矢作川左岸の丘陵地北部(岡崎市北部～豊田市南部)で産出される所謂「伊奈川花崗岩」がこれに相当する。これを単純化して示せば

石製品	花崗岩の種別	矢作川流域産出
花崗岩製の石塔	両雲母花崗閃緑岩製	「武節花崗岩」
花崗岩製の石臼	黒雲母花崗岩製	「伊奈川花崗岩」

となる。

つまり石塔と石臼では、同じ花崗岩製でありながらも花崗岩の種類が異なる。換言すれば、石材の産出地域が異なるということが知られたのである。ともに可搬性がある遺物であるため生産地の特定には慎重を期す必要があるが、石塔のうちの宝篋印塔については矢作川流域に分布の中心をおく所謂「西三河式宝篋印塔」であり、生産地は矢作川流域、具体的には現岡崎市周辺ではないかと推定されてきた。現在の石工団地で扱われる花崗岩である「岡崎みかけ」等は基本的には武節花崗岩とのことであり、今回の調査例もこうした推定と矛盾するものではない。石臼については、矢作川左岸の「伊奈川花崗岩」産出地周辺に求めることは、必ずしも生産遺跡が未確認で、型式学的研究が進んでいない現状では出来ない。その可能性は充分にあるものと推定するが、今後の課題である。さらにここで注意しておきたいのが、後述のように、石塔とくに西三河式宝篋印塔について云えば、16世紀中葉段階で造塔が終焉をむかえた可能性がある在来の製品であるのに対して、石臼の普及は愛知県下では概ね16世紀代（本遺跡では16世紀前葉に遡る可能性がある）であって、さらに17世紀代にかけて急激に増加していくという傾向が看取される製品である、という点である。すなわち石臼は新出の石製品で、なおかつ石材が従前のもの（石塔）と異なるということである。ただ単に他地方から石臼が搬入されたに過ぎないのか、従来からの石工集団が製品に応じて石材を使い分けたのか、あるいは新たな石工集団が移転してきたのか等が考えられるが、このことは現在の岡崎市を中心とする石工業の起原に大きく関わる問題でもあり、今後の課題としておきたい。

6 西三河式宝篋印塔の造塔年代について

今回の調査で出土した所謂「西三河式宝篋印塔」の造塔年代については、現在のところ充分に解明されるに至っていない。これは西三河式宝篋印塔に造塔年代を示す紀年銘を刻んだものが皆無に近い（紀年銘の見られるものも数例あるが、追刻の可能性を含めなお検討を要すのではないかと考える）ということに起因する。今回の調査では、溝・土坑などから転用・廃棄されたものが出土し、出土遺構の年代は、造塔年代の一端・下限を考定するための資料となり得るものとする。以下、この点について若干の考察を加えてみたい。

出土した両雲母花崗閃緑岩製（武節花崗岩）の西三河式宝篋印塔は、部位毎、ばらばらに出土し、同一個体と認識し得るものはない。加えていずれも一部が欠損し、なかには砥石？に転用されたものもみられるといった状態であった。こうしたことは、自然に遺構内に転落したのではなく、造塔の後に何らかの理由・目的をもって人為的に廃棄・転用されたことを示唆しているものと解される。とするならば、遺構の形成年代には造塔の目的・意図が尊重されることなく、廃棄・転用が容認される事態を向かえていたことになる。換言するならばこの時期の新たな造塔は考え難いと状況にあったものと解すことができよう。そこで西三河式宝篋印塔の

出土遺構の年代についてみると、

96A区SK02	笠(2)・塔身?(4)	Ⅱ期	17世紀後葉
97A区SK16	基礎(5)	Ⅱ期	17世紀初頭
97B区SD02第2層	笠(1)	Ⅱ期	17世紀代
97B区SD12第4層	笠(3)	I期	16世紀中葉(第4層の上の第3層が16世紀中葉)

という具合に整理できる。これよりするならば、造塔の目的・意図が尊重されることなく廃棄・転用が容認される事態の発生、換言するならば西三河式宝篋印塔造塔の終焉は16世紀中葉に遡ることが知られる。

この年代について若干の検証を試みてみたい。今回の調査で出土した花崗岩製の西三河式宝篋印塔とは異なるが、尾張平野に広く分布する硬質砂岩系の所謂関西系宝篋印塔には紀年銘が刻まれたものが多数みられる。この紀年銘により概略の造塔年代を捉えることができる。試みに細かな調査が行われている愛知県一宮市・同稲沢市・同海部郡甚目寺町に所在する紀年銘資料を、年代順(十年単位)に整理したのが第23表(註)である。表の示すところからみて、尾張平野の硬質砂岩系の所謂関西系宝篋印塔は、14世紀中葉から16世紀前葉(1349～1525年)

という造塔年代が知られる。もとより、紀年銘を有しないものも多く存し、また今後新たな紀年銘資料の発見があるかもしれない。こうした点をふまえるならば、これに前後する時期に造塔があった可能性はある。それはともかくとして、16世紀前葉(1525年)というの造塔の下限年代は、図らずも上記の大脇城遺跡における西三河式宝篋印塔の廃棄年代を少し遡る年代であり、今後の資料の発見の可能性を考慮するならば、両者は概ね符合するとみてよいと考える。こうしたことを勘案するならば、西三河式宝篋印塔の造塔年代の下限は16世紀中葉に求めて大過ないものと推察する。

西暦(年)	一宮市	稲沢市	甚目寺町	個体数
1331～1340				
1341～1350	○			1
1351～1360				
1361～1370	○○○			3
1371～1380	○	○		2
1381～1390	○○	○		3
1391～1400	○			1
1401～1410				
1411～1420		○		1
1421～1430		○		1
1431～1440			○○	2
1441～1450				
1451～1460	○		○	2
1461～1470	○○○	○		4
1471～1480				
1481～1490	○			1
1491～1500			○○○	3
1501～1510	○		○○○	4
1511～1520			○	1
1521～1530	○	○		2
1531～1540				
1541～1550				
1551～1560	●			
1561～1570				
計	14	7	10	31

●は銘文の年代と形態とが一致せず、銘文は追刻の可能性が高い

第23表 尾張平野における宝篋印塔の年代別在銘資料

註 下記の調査報告に基づき作表した。

- 一宮市教育委員会編『一宮の石造遺物』(一宮市文化財調査報告9)一宮市教育委員会 1985年
- 稲沢市教育委員会編『稲沢市の石造美術』(稲沢市文化財調査報告)稲沢市教育委員会 1976年
- 甚目寺町教育委員会編『甚目寺町の石造美術』愛知県海部郡甚目寺町教育委員会 1980年

第8章 結語

以上、数章に分かつて大脇城遺跡の発掘調査成果について報告した。最後に、事前の検討で調査課題とした点を中心に、今回の調査で知り得た成果と今後の課題を簡単に総括し結語としたい。

大脇城の様相について 大脇城に関しては、既述のように文献史料の伝えるところは極めて乏しく、その具体的様相については、発掘調査による知見に期待するところが大きいと言わざるを得ない。今回の調査では、地籍図に示される地割など事前の検討からかねてより大脇城跡もしくは梶川五左衛門屋敷跡とされてきた地点が97B区に相当するが知られ、当該地点において城館跡の遺構が確認されるか否かが調査課題一つとなった。調査の結果、想定された地点において城館跡と考えて特に問題のない遺構を確認し、これまでの伝承・地籍図の検討結果を裏付けることとなった。検出された箇所は城館の南西部であるが、周囲に濠(97B区SD01)をめぐらす方形の城館で、15世紀後葉から16世紀中葉すぎにかけて時期のものであることが判明した。城館を囲む濠の南側部分は畝堀となっており土橋・濠の食い違い(?)が見られるなど構造上の特色を指摘し得る。そして城館を中心とし、その周囲に屋敷地が展開し、それらを取り囲むように外濠的な濠(96A・B・C区SD01)が部分的?にめぐる(北側で確認)、という景観が想定された。城主についてこれを直接知り得る遺物は、残念ながら検出されなかった。1600年前後とされる大窯第4段階の時期に遺跡が一時急激に衰退したとみられるが、これは城主と伝えられる梶川五左衛門秀盛が文禄・慶長の役で戦没する時期に呼応する。その後、17世紀代に入って大きな改変を加えられることなく「城館」は、「屋敷地」(年代的にみて)として利用されるが、17世紀後葉には廃絶したことが知られた。

大脇村の移転について 調査地の南に隣接する旧字「元屋敷」は、17世紀後葉に現在地へ移転したとされる旧大脇村集落の故地であり、この村の移転が発掘調査で検証できるか否かという点も調査課題の一つであった。調査の結果、17世紀代(Ⅱ期)に入って、城館およびその周辺は旧大脇村の集落の一部を構成するようになったものとみられるが、17世紀後葉の連房式登窯第4～5小期に、溝・井戸がのきなみ廃絶し、また大形の廃棄土坑とみられる土坑が形成されるなど、この時期に、調査地点における居館・屋敷地が一斉に廃絶したことが知られた。この17世紀後葉という廃絶年代は、まさに「元屋敷」なる地名の初見史料等から推定される大脇村の集落の移転年代と、結果的に一致するものであり、しかも主要な区画溝などの埋土土層が斑土層となっているものが多々みられたことから人為的に埋められた可能性が考えられた。こうした居館・屋敷地の廃絶は、「大脇村」の移転に起因するものと推定して大過ないものと推察する。

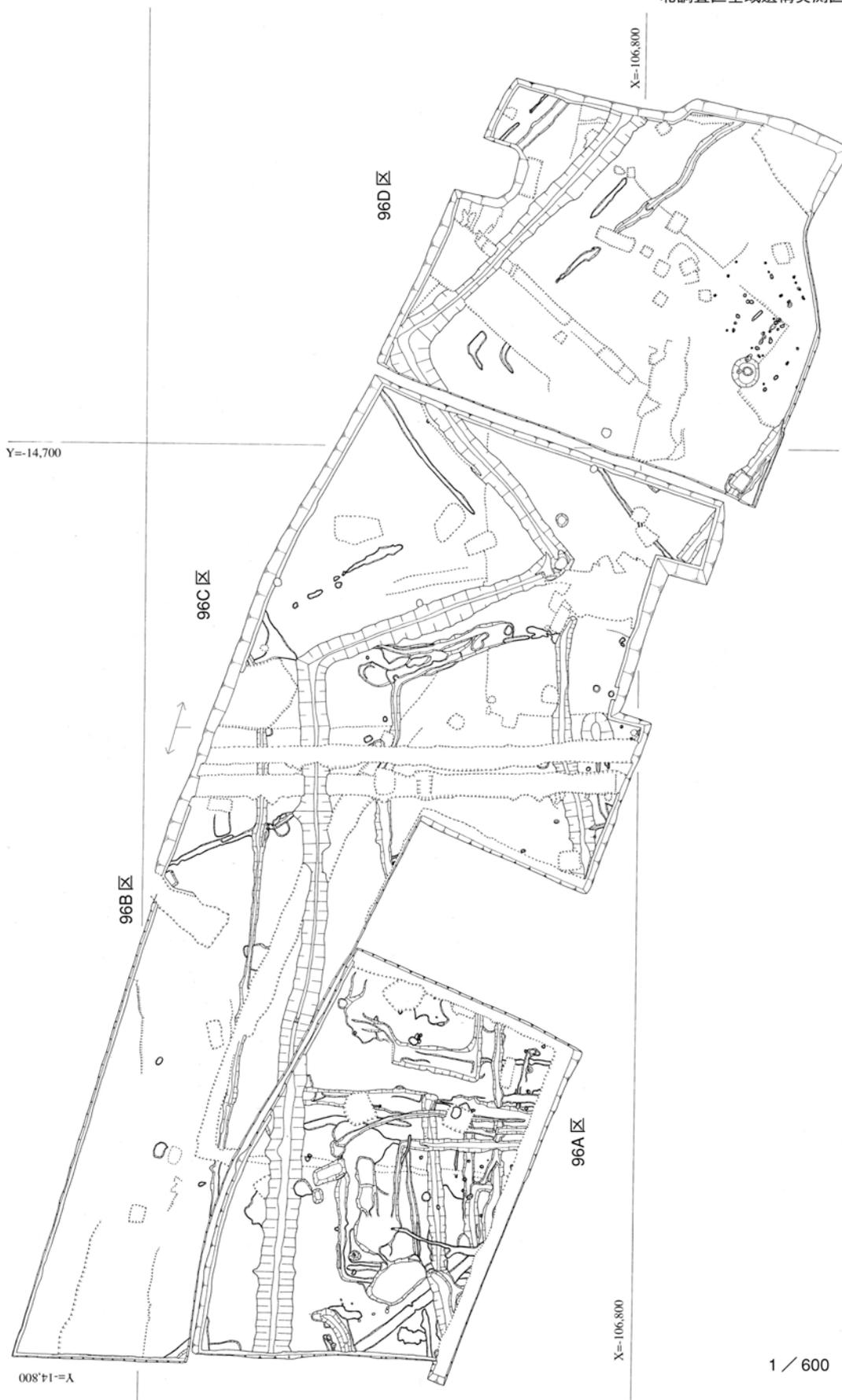
出土遺物について 今回の調査では、15世紀後半から17世紀後葉にかけての時期の遺物が各種出土し、豊明市域の当該期の城館・村に居住する人々の生活物資の一端が知られた。とくに97B区SD01からは、土器・陶器類のほかに豊富な木製品・漆製品が多量に出土した。また97A区SE01・同SE02からは大窯第3段階の多量の土製煮沸具類が出土し、16世紀代の土器編年の貴重な一括資料として注目された。

課題など 調査の結果からするならば、15世紀後半、具体的には古瀬戸窯後期第4小期もしくは大窯第1段階に城館が造営されるのと相前後して調査地点周辺に遺跡が形成されることが知られた。つまり遺跡の形成はほとんど城館の形成とともに進んだとみられるわけである。本書ではどのような変遷を辿ったかという点について報告してきたが、残された問題としては、何故に15世紀後半という時期に、この地点に城館が造営されるに至ったのか、といった点の解明があげられる。推測の域を出ないが、城館の立地について、既述のように周辺に小高い台地・丘陵地が存するのにもかわらず、平坦な沖積地上に占地している点を立地上の特徴として上げられること、東に正戸川（尾張と三河国の国境上を流れ衣浦湾を経て三河湾にそそぐ境川に調査地点の南東約0.6 kmほどのところで合流する）が隣接し、明治時代の地形図からするならば城館隣接する箇所南側に船だまりができそうな地点が存すること、旧大脇村の有力寺院である曹源寺（曹洞宗 清涼山 愛知県豊明市栄町）が開創されたのが1502年（永正2 梶川五左衛門秀盛の父の平九郎某の法名が「宗玄」であり、法名と寺名の一致は、単なる偶然とは考えにくく、なんらかの関係があるのかもしれない。）で、遺跡の形成時期と時期を同じくする、などを勘案するならば、尾張と三河国の国境沿いで、既存の川湊的な地点をおさえる、むしろ新たに川湊を営造し押えるという目的で新たに城館が造営され、その周囲に屋敷地が展開したとみるのも一考に値するものと考えられる。いずれにしても、今回の調査の結果、耕地整理事業などで大きく景観が変わってしまっているが、地下には遺跡が予想以上に良好な状態で遺存していることが知られた。今後の調査の進展に期待したい。

遺物	実測番号	遺物登録番号
土器・陶磁器	1001～1241	E-1～E-241
瓦類	3001～3008	E-242～E-249
土製品	8001～8008	E-250～E-257
石製品（石臼ほか）	6001～6072	S-1～S-72
金属製品・銭貨	5001～5049	M-1～M-49
鍛冶・鋳物関連	7001～7021	M-50～M-70
木製品	4001～4198	W-1～W-198
木簡	2001～2009	W-199～W-207
漆製品	第15表1～230	W-208～W-438

第24表 遺物登録番号

図 版



Y=14,700

X=106,800

96D 区

96C 区

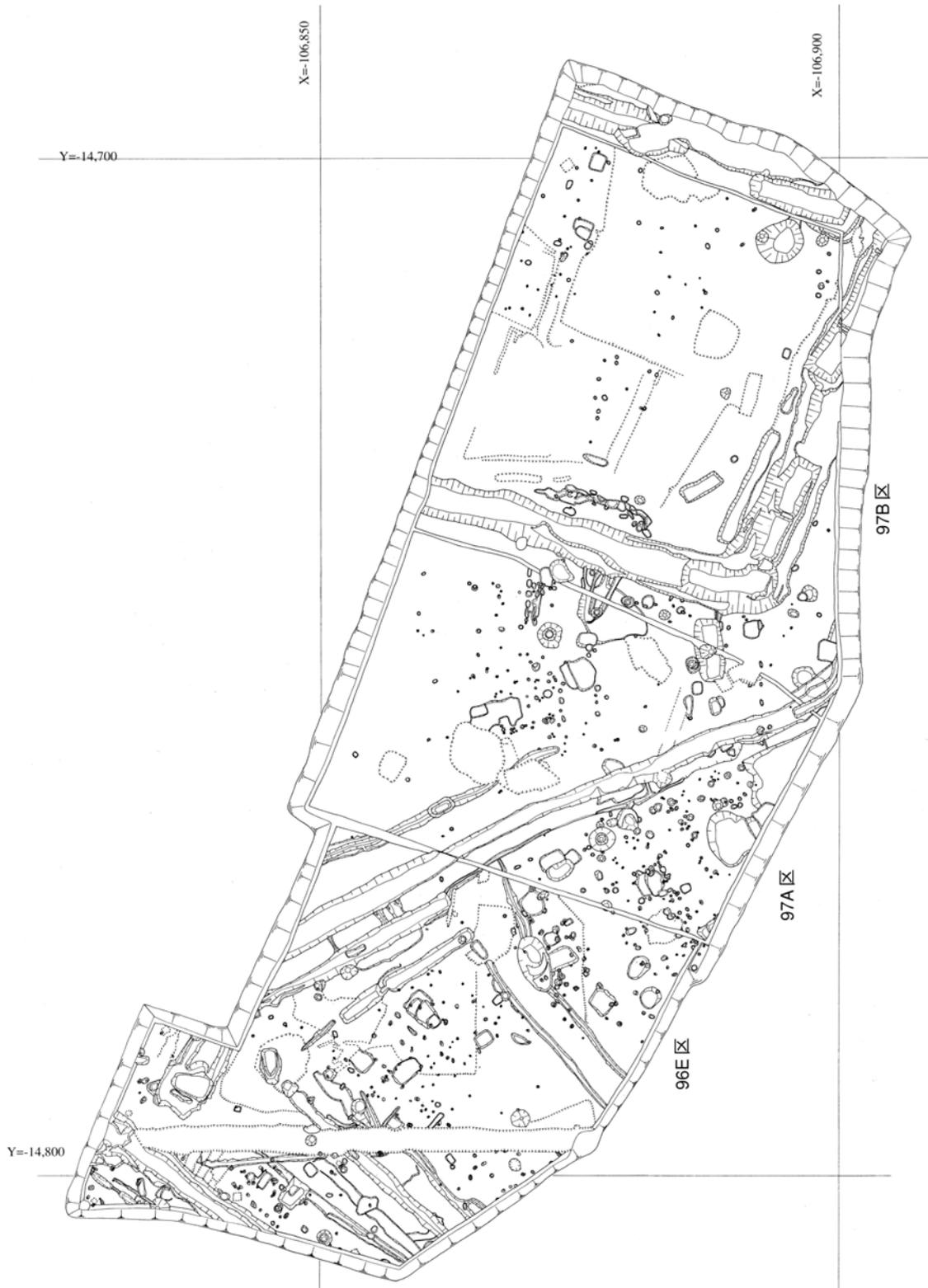
96B 区

96A 区

008+1=A

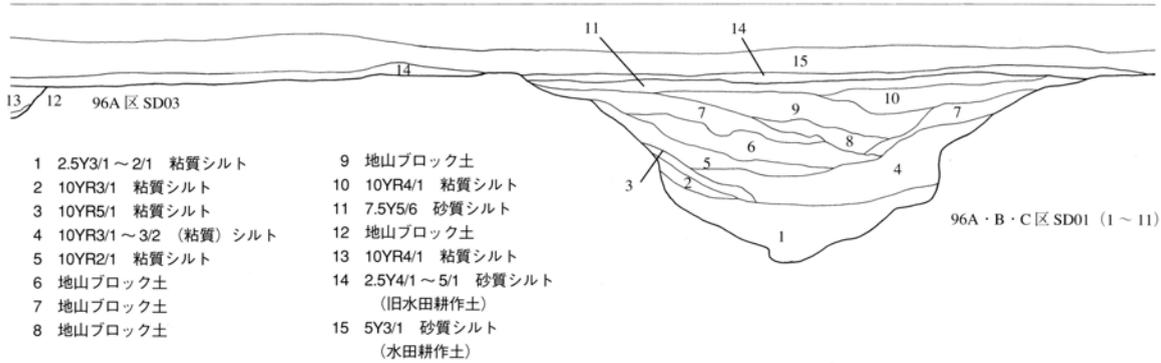
X=106,800

南調査区全域遺構実測図



96A区 西壁

L=4.00m



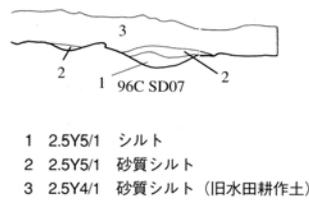
96B区 北壁

L=4.00m



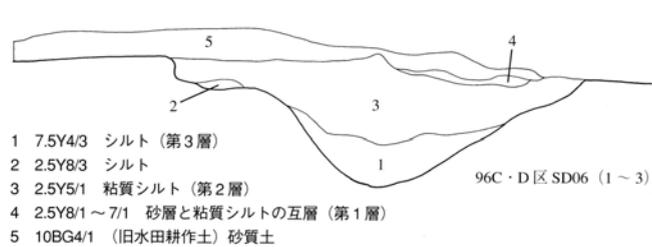
96C区 北壁

L=4.00m



96D区 北壁

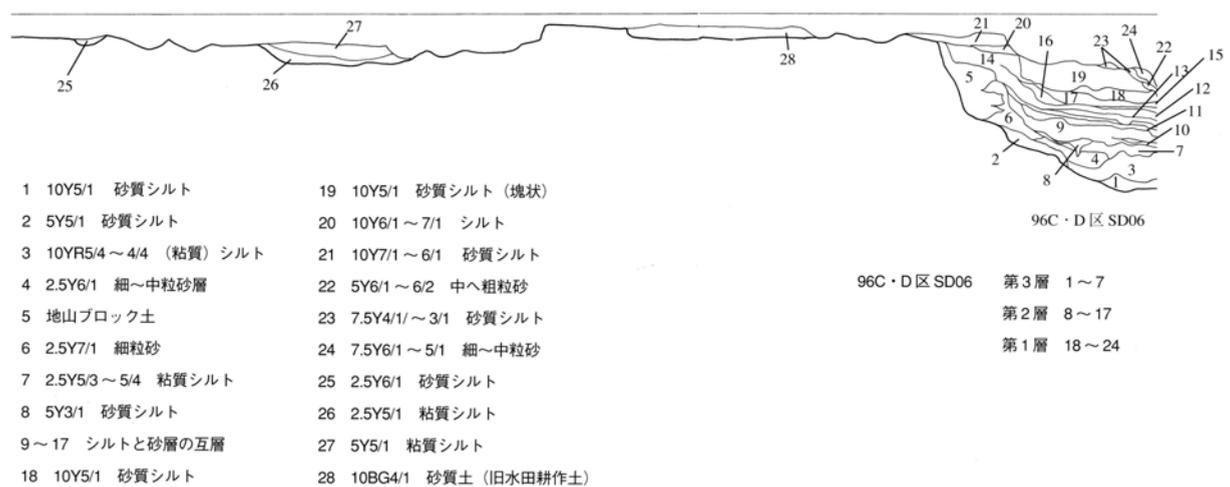
L=4.00m



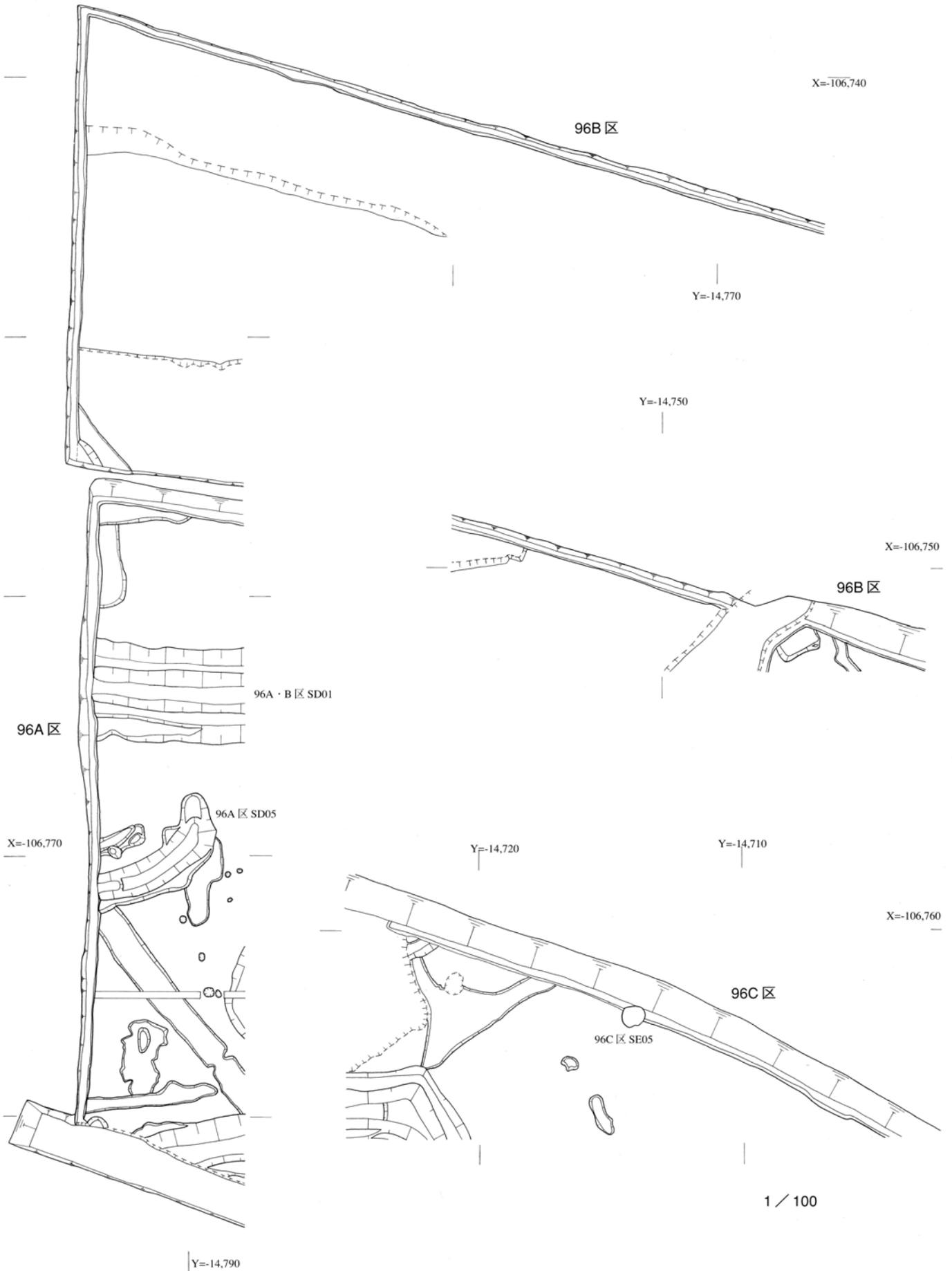
96D区 東壁

L=4.00m

L=3.00m



北調査区遺構実測図 (1)



図版 5

Y=-14,780

北調査区遺構実測図 (2)

96B区

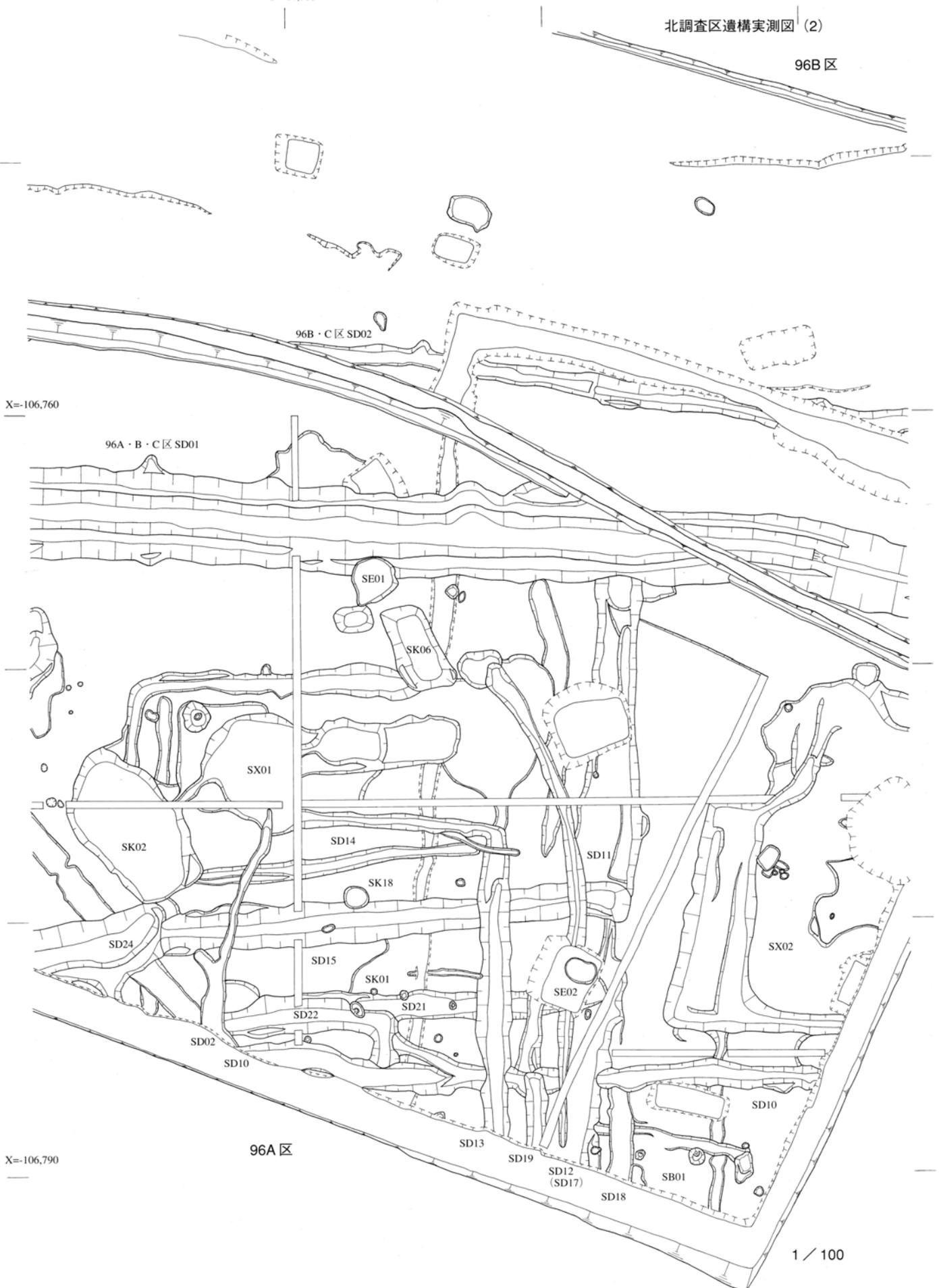
X=-106,760

96A・B・C区SD01

96B・C区SD02

X=-106,790

96A区

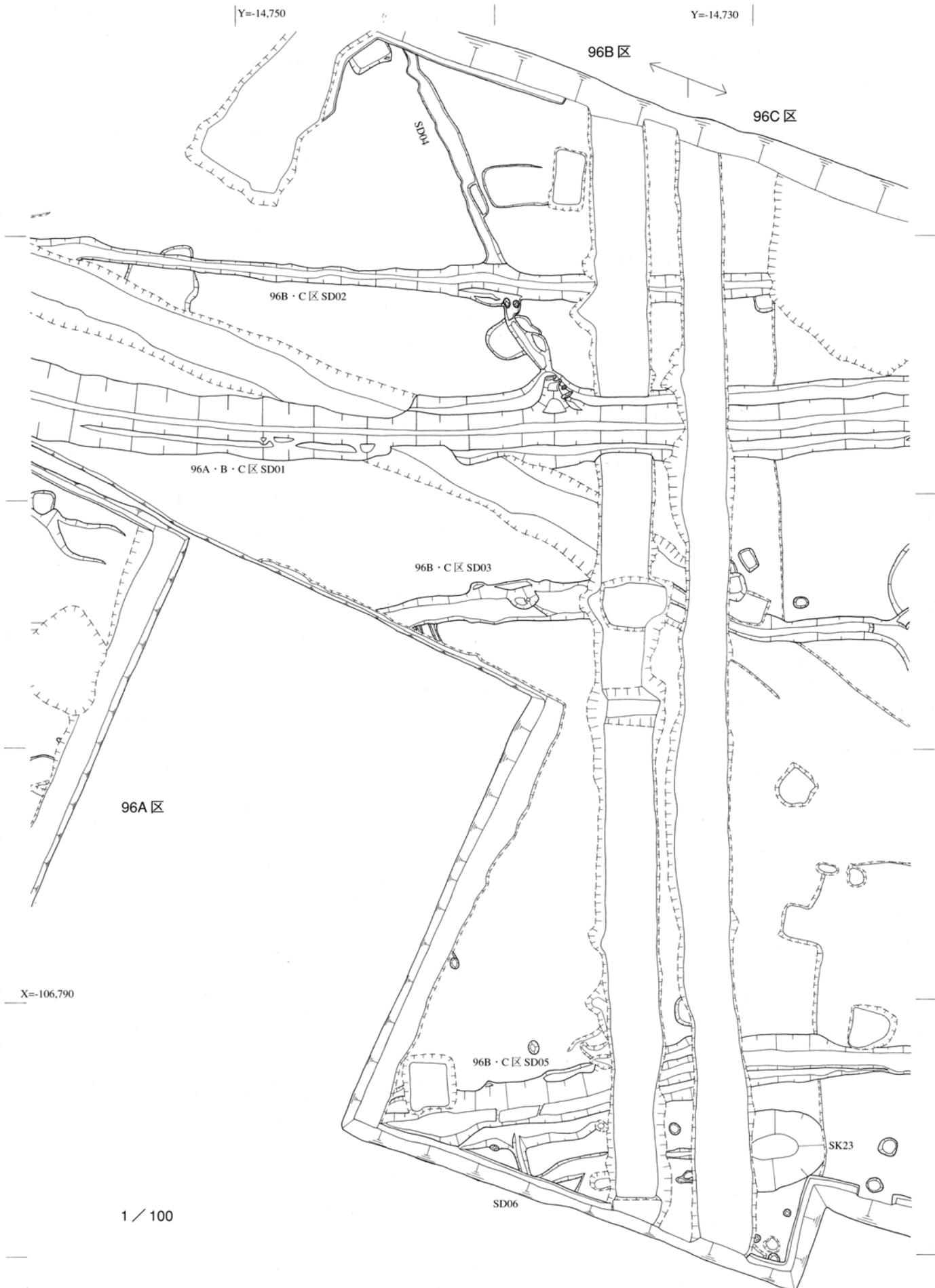


1 / 100

北調査区遺構実測図 (3)

Y=-14,750

Y=-14,730



96A区

96B区

96C区

SD04

96B・C区 SD02

96A・B・C区 SD01

96B・C区 SD03

96B・C区 SD05

SD06

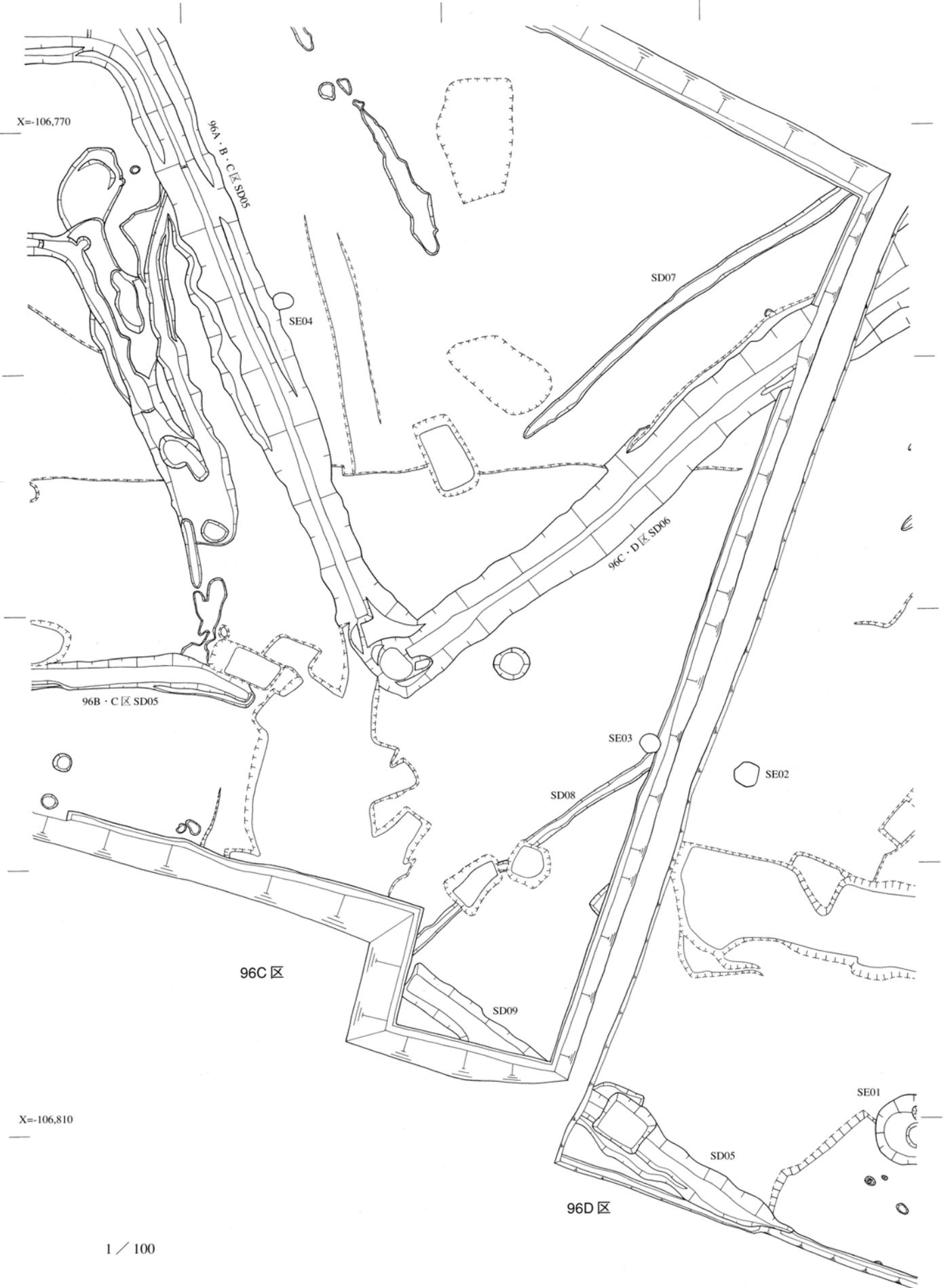
SK23

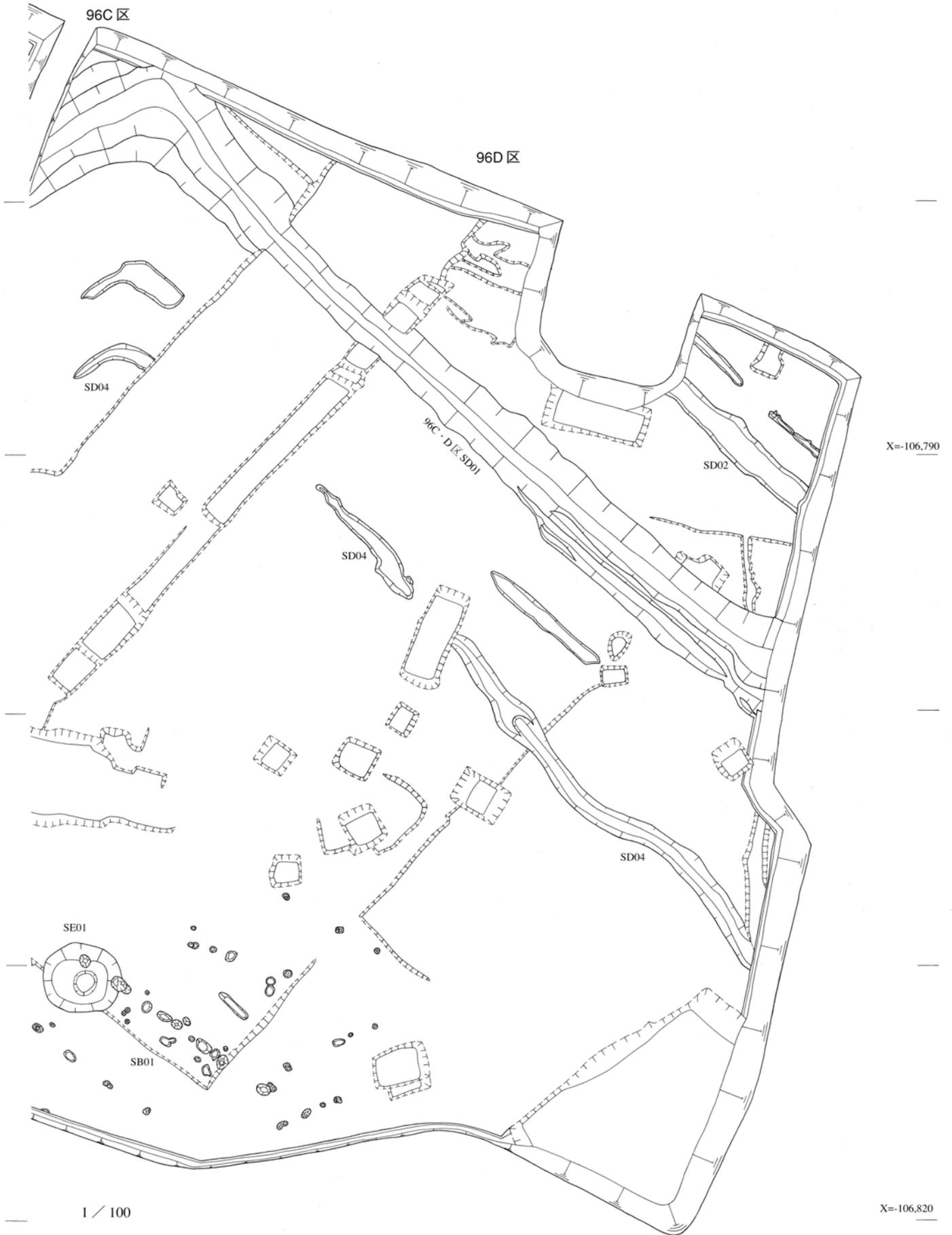
X=-106,790

1 / 100

Y=14,710

X=-106,770



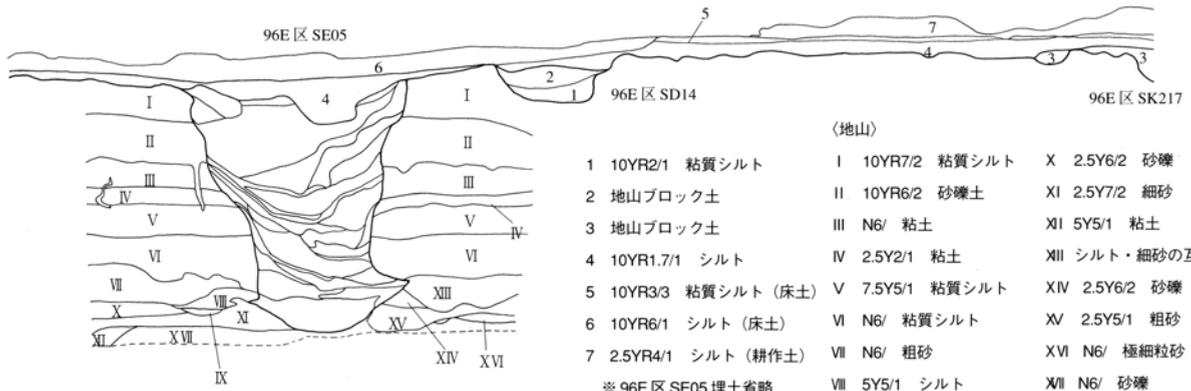


図版 9

南調査区土層図

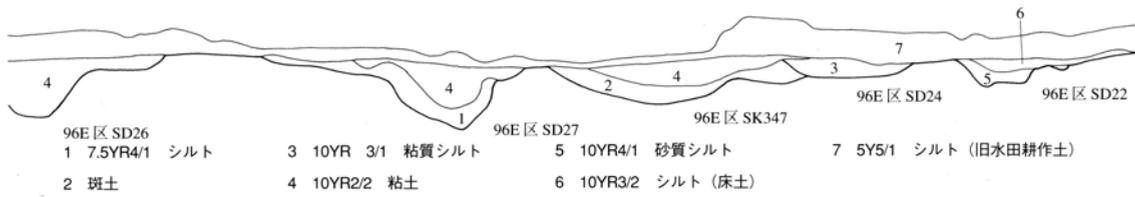
96E区 西壁

L=4.00m



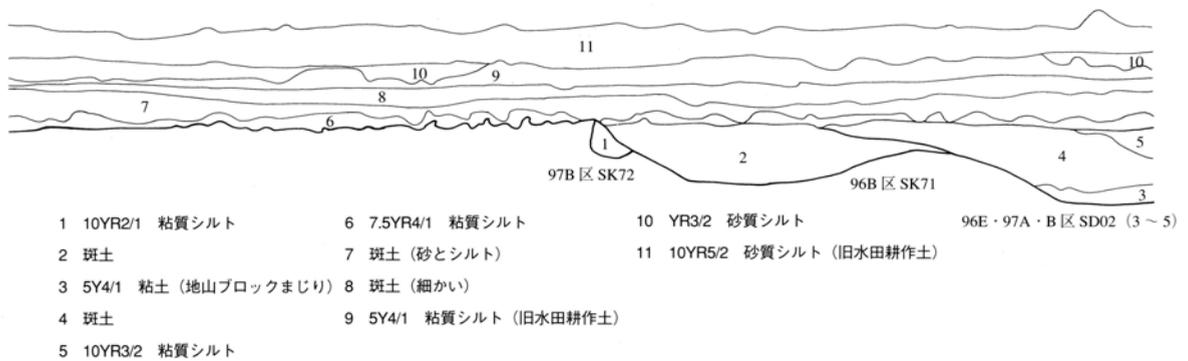
96E区 南壁

L=4.00m



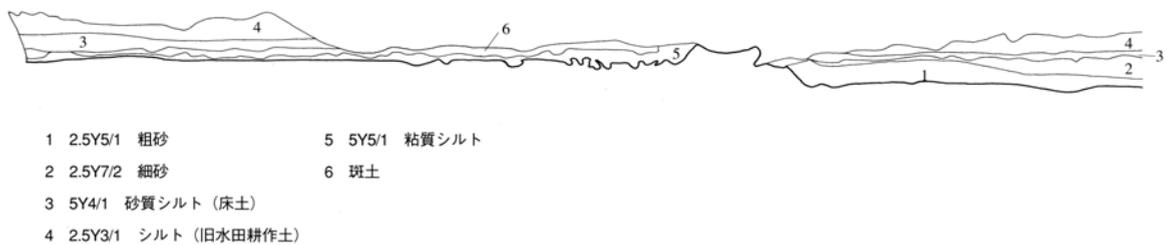
97B区 南壁

L=3.00m

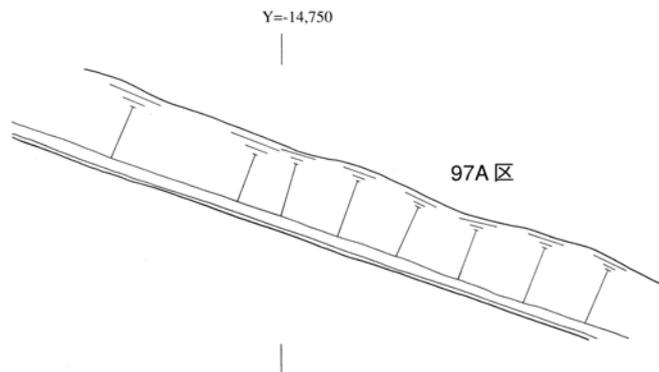
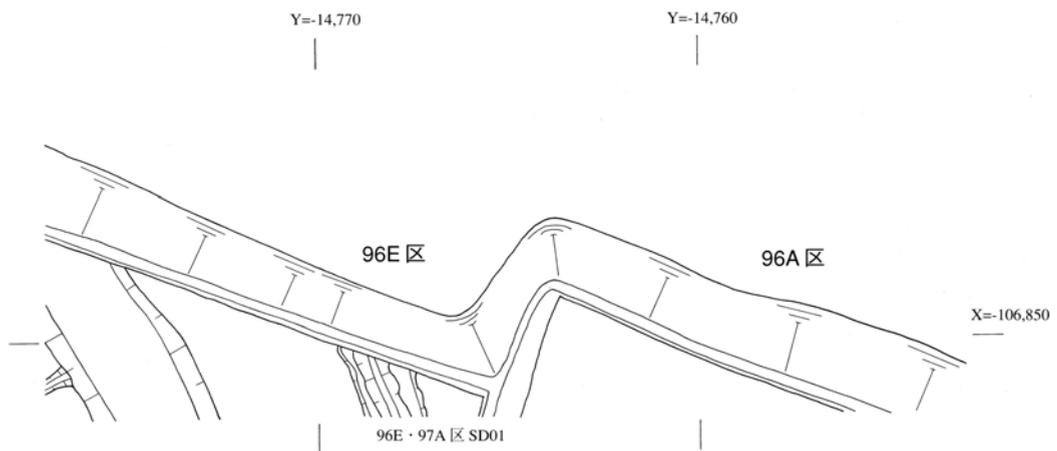
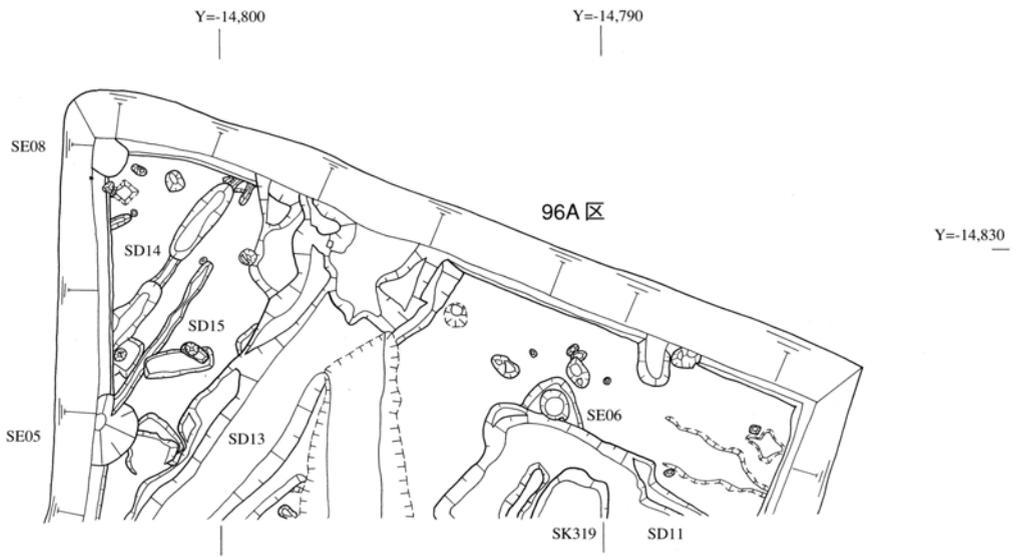


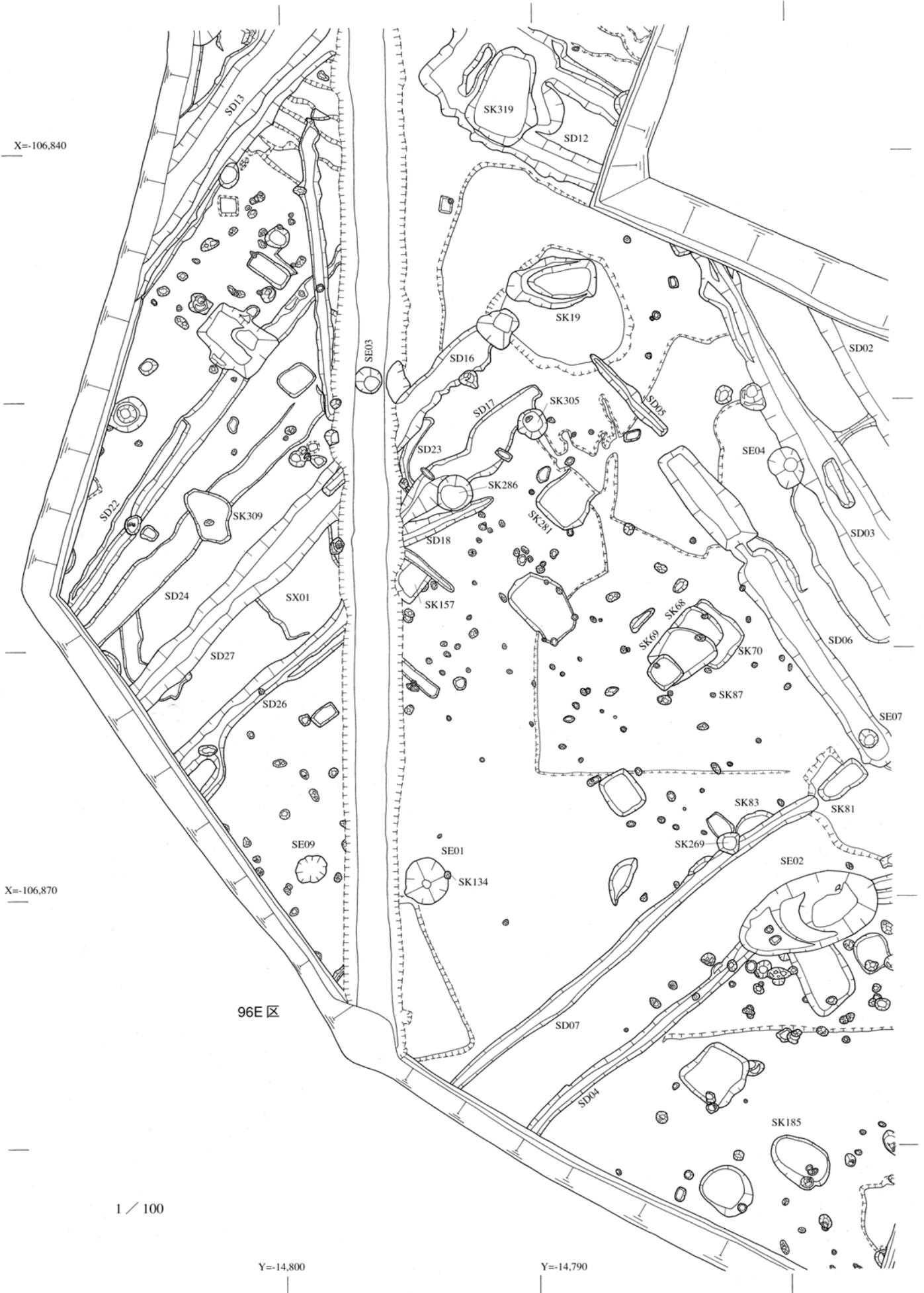
97B区 東壁 (拡張前)

L=3.00m

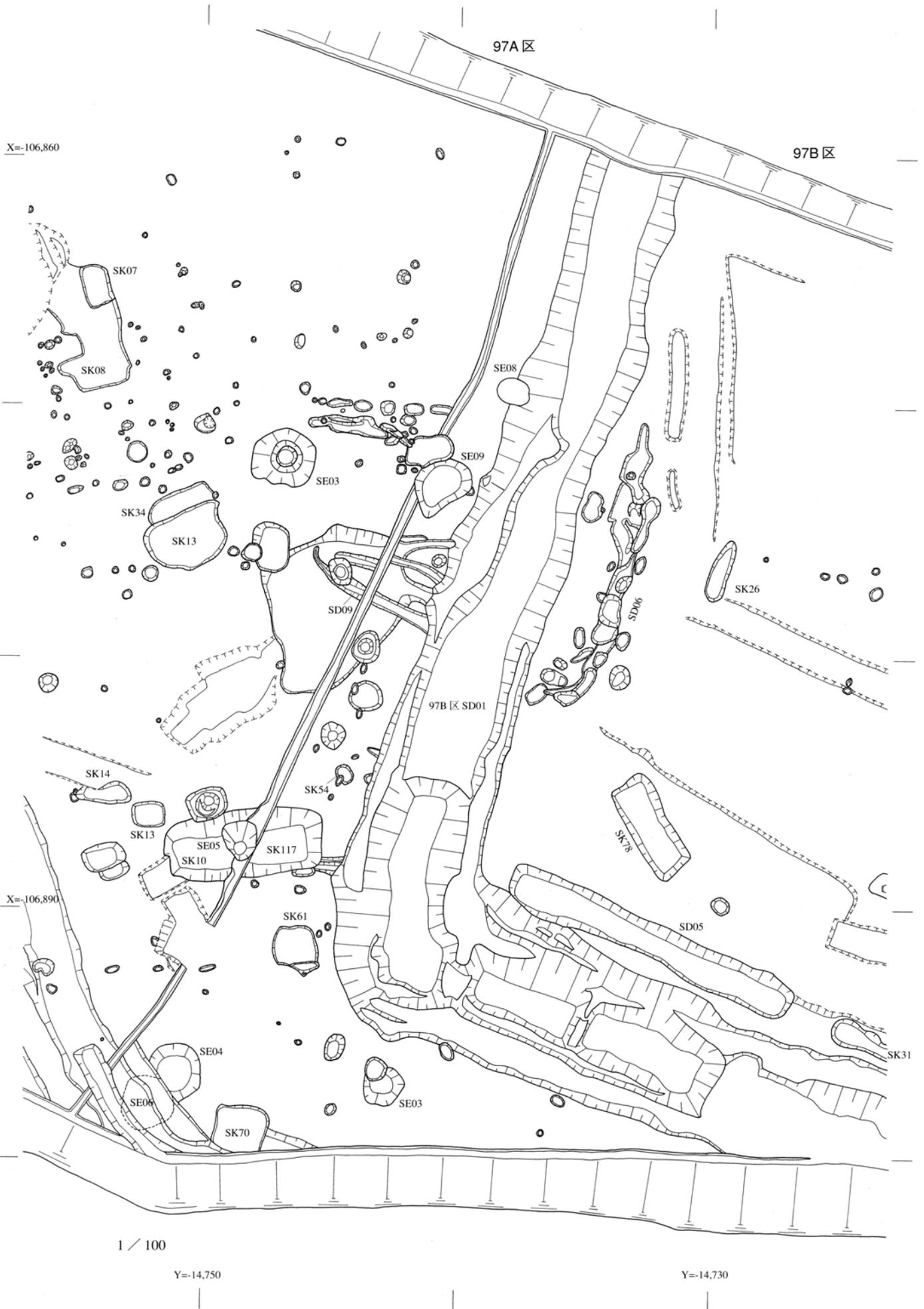


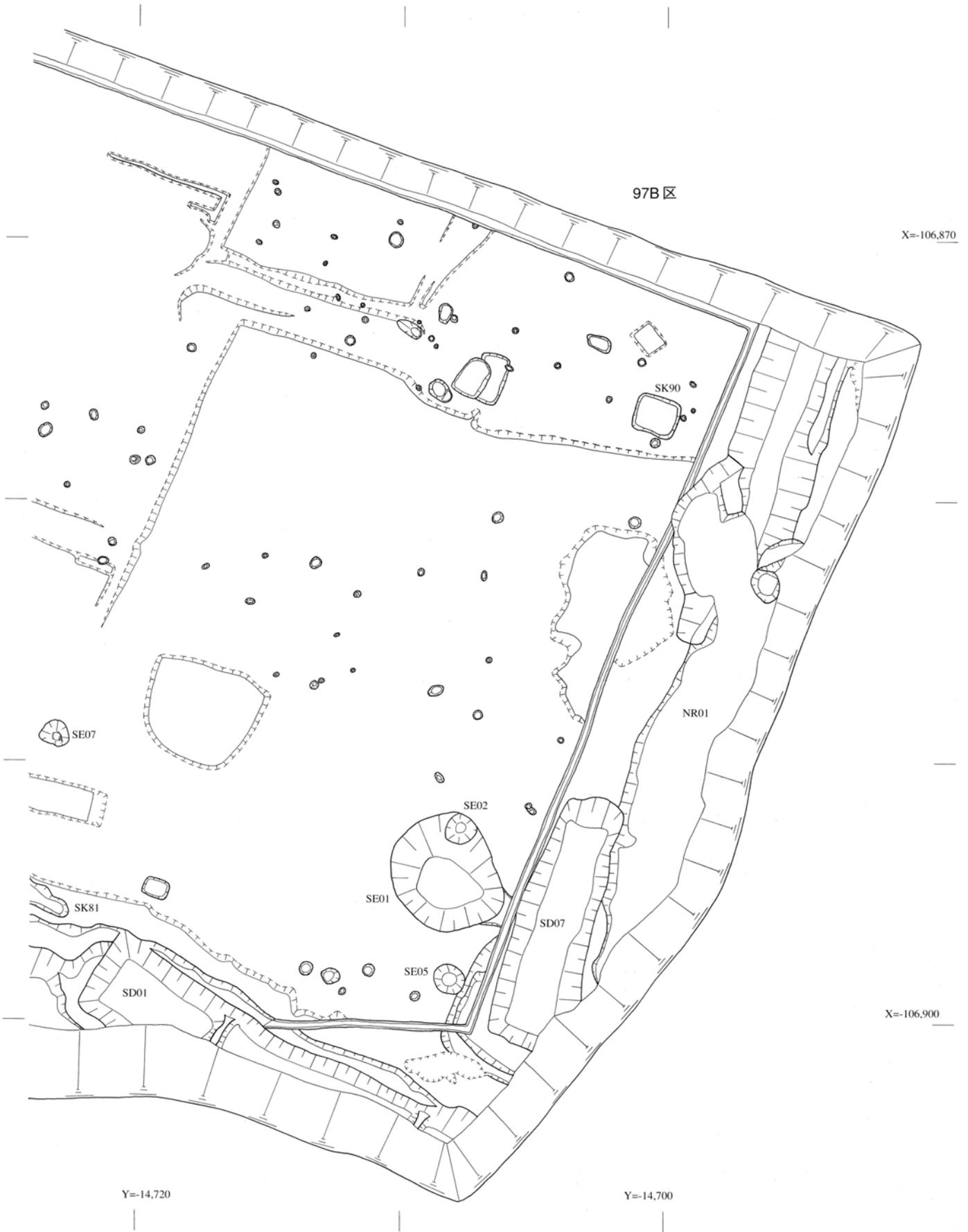
南調査区遺構実測図 (1)







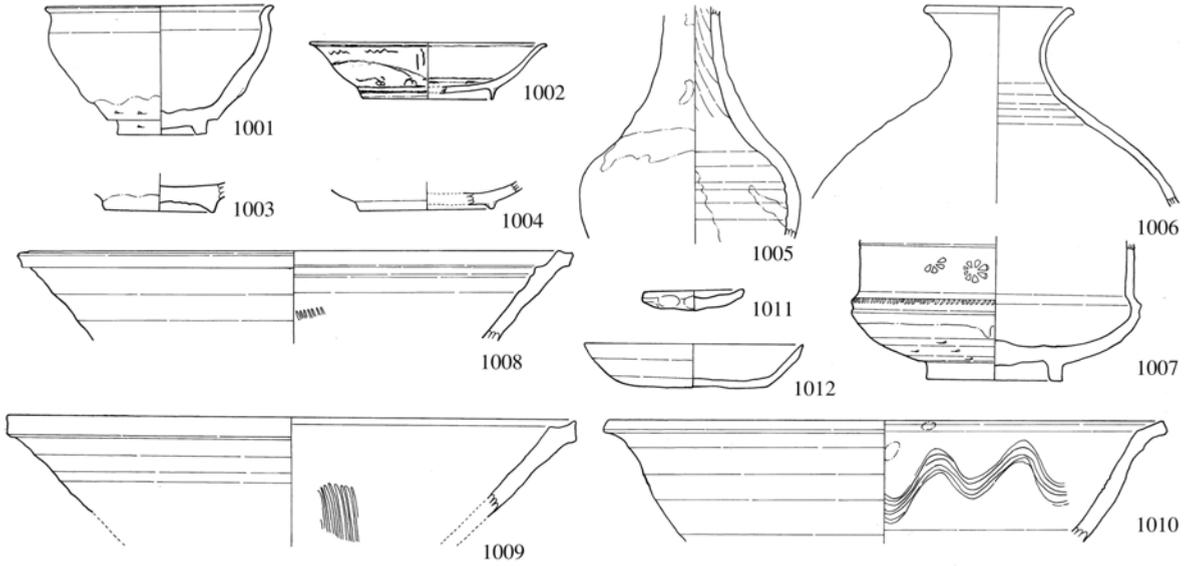




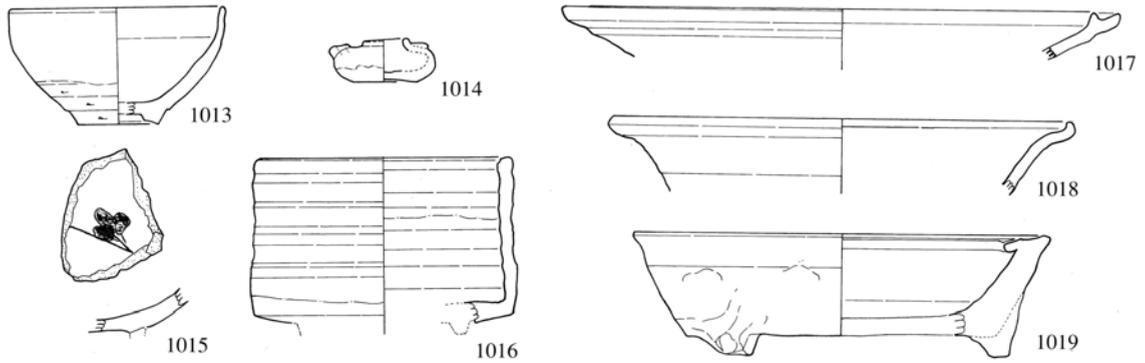
図版 15

96A・B・C区SD01出土品(1)

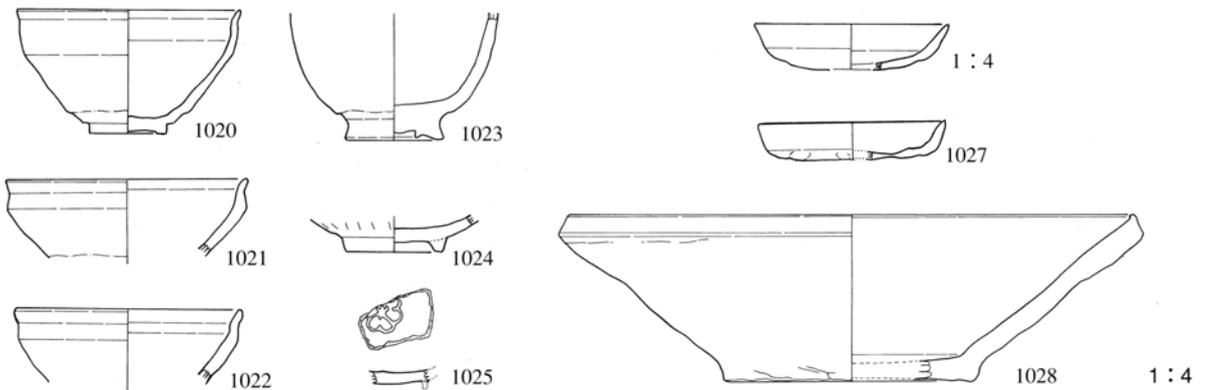
96A区SD01



96B区SD01

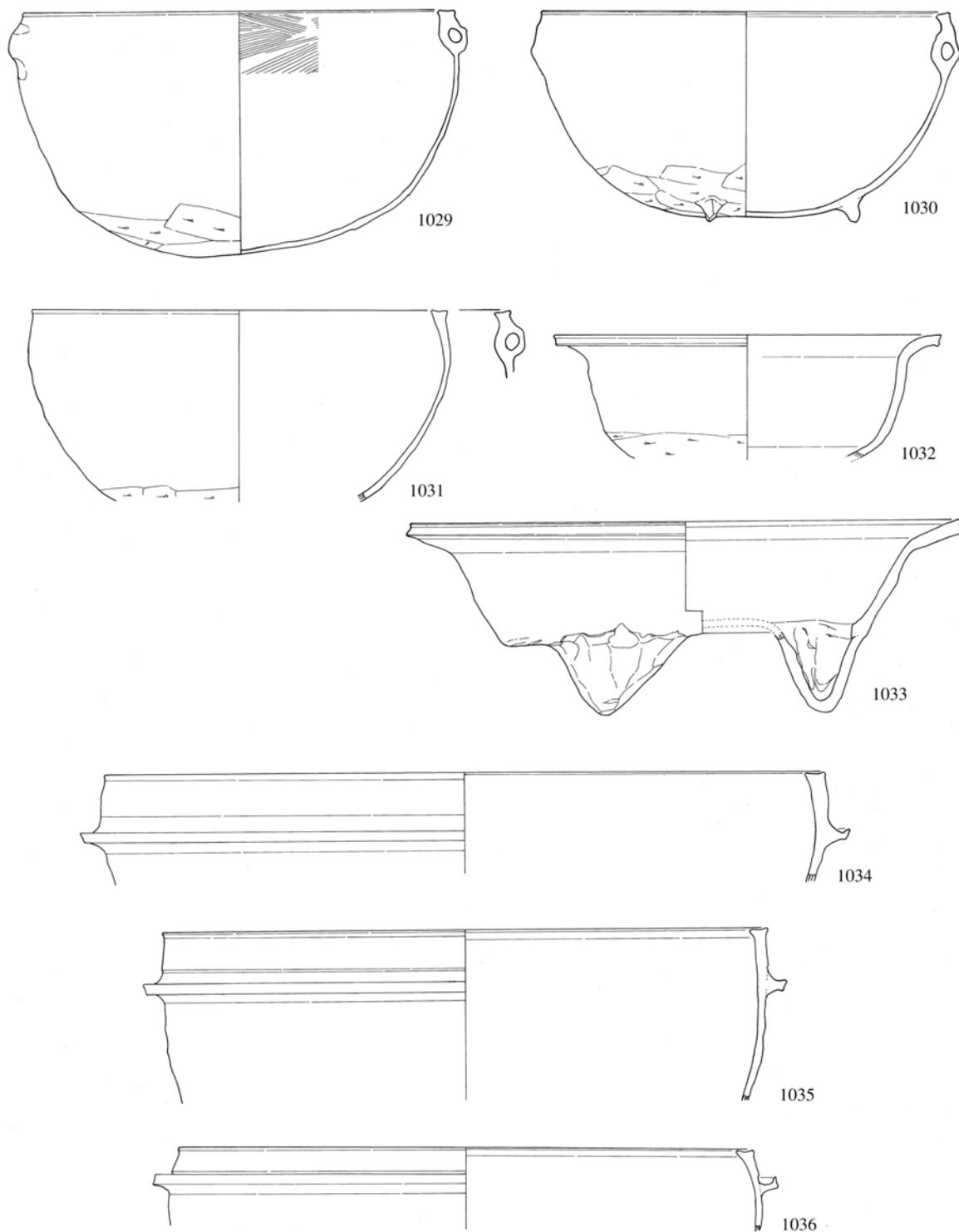


96C区SD01



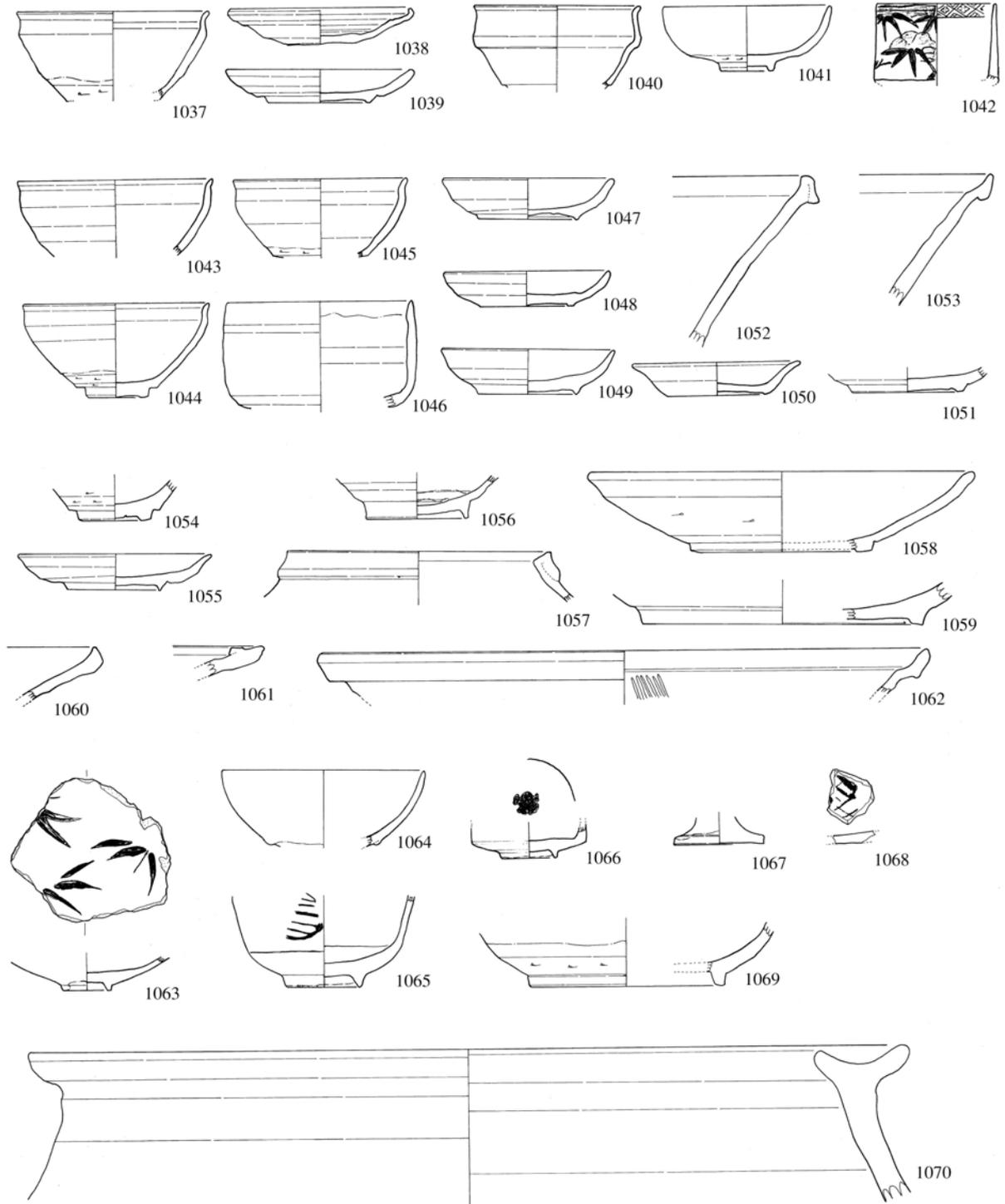
番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1001	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	連房式登窯第4小期	1015	瀬戸・美濃窯産	志野鉄絵皿	大窯第4段階
1002	中国磁器	青花端反皿		1016	瀬戸・美濃窯産	鉄釉片口	連房式登窯第3・4小期
1003	産地不詳	椀(軟陶)		1017	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	古瀬戸窯後期第4小期
1004	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿	大窯第1・2段階	1018	瀬戸・美濃窯産	灰釉鉢	連房式登窯第2小期
1005	瀬戸・美濃窯産	鉄釉德利	大窯第3段階	1019	常滑窯産	鉢C	
1006	備前窯?	德利		1020	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第1段階
1007	志戸呂窯?	香炉		1021	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第3段階 第1層(SD14)
1008	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	連房式登窯第1小期	1022	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第3段階
1009	瀬戸・美濃窯産	鉄釉椀	連房式登窯第2小期	1023	瀬戸・美濃窯産	鉄釉椀	連房式登窯第2小期
1010	瀬戸・美濃窯産	黄瀬戸鉢	連房式登窯第2小期	1024	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸椀	大窯第1段階
1011	土師器	皿B a		1025	瀬戸・美濃窯産	灰釉皿	大窯第1・2段階
1012	土師器	皿B c		1026	土師器	皿B a	
1013	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第3段階	1027	土師器	皿B a	
1014	瀬戸・美濃窯産	鉄釉水滴	大窯第3段階	1028	常滑窯産陶器	鉢A	

96A・B・C区SD01出土品(2)



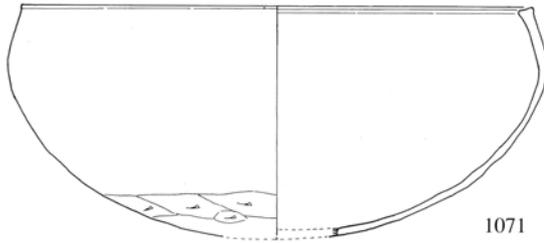
1:4

番号	産地・種類	器種等	年代
1029	土師器	内耳鍋	
1030	土師器	内耳鍋	
1031	土師器	内耳鍋	
1032	土師器	三足鉢	
1033	土師器	三足鉢	
1034	土師器	羽釜 I	
1035	土師器	羽釜 I	
1036	土師器	羽釜 I	

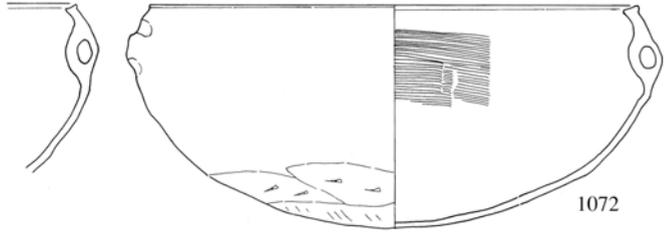


番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1037	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第3段階	1054	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	連房式登窯第3小期
1038	瀬戸・美濃窯産	北部系山茶椀	生田期	1055	瀬戸・美濃窯産	志野丸皿	連房式登窯第3小期
1039	瀬戸・美濃窯産	志野丸皿	連房式登窯第2小期	1056	美濃窯産	灰釉輪壳皿	連房式登窯第5小期
1040	瀬戸窯産	段付白天目茶椀	連房式登窯第3小期	1057	瀬戸・美濃窯産	鉄釉甕	大窯第3・4段階
1041	瀬戸窯産		連房式登窯第8小期	1058	瀬戸・美濃窯産	鉄釉大皿	大窯第3段階
1042	肥前系磁器	染付湯呑		1059	瀬戸・美濃窯産	鉄絵鉢	連房式登窯第5小期
1043	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	古瀬戸窯後期第4小期	1060	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	古瀬戸窯後期第4小期
1044	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第3段階	1061	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	大窯第4段階
1045	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第3段階	1062	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	連房式登窯第5小期
1046	瀬戸・美濃窯産	掛付筒形椀	大窯第4段階	1063	瀬戸窯産	上絵付皿	連房式登窯第8小期
1047	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿	大窯第3段階	1064	瀬戸窯産	灰釉椀	連房式登窯第8小期
1048	瀬戸・美濃窯産	灰釉内壳皿	大窯第3段階	1065	美濃窯産	陶器染付丸椀	連房式登窯第10小期
1049	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿	大窯第3段階	1066	肥前系磁器	染付箱形湯呑	
1050	瀬戸・美濃窯産	鉄釉棧皿	大窯第3段階	1067	瀬戸窯産陶器	灰釉花瓶	連房式登窯第10・11小期
1051	瀬戸・美濃窯産	志野丸皿	連房式登窯第1・2小期	1068	瀬戸・美濃窯産	志野鉄絵皿	大窯第4段階
1052	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	大窯第3段階	1069	瀬戸窯産	鉄釉甕	連房式登窯第8~11小期
1053	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	連房式登窯第4小期	1070	常滑窯産	甕	

96C・D区 SD06

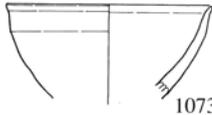


1071

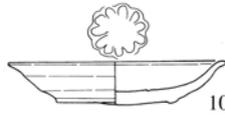


1072

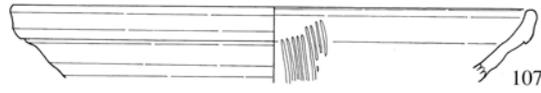
96A区 SD21



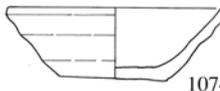
1073



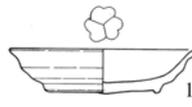
1075



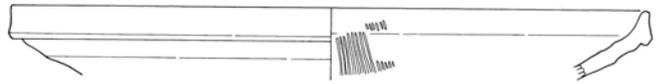
1078



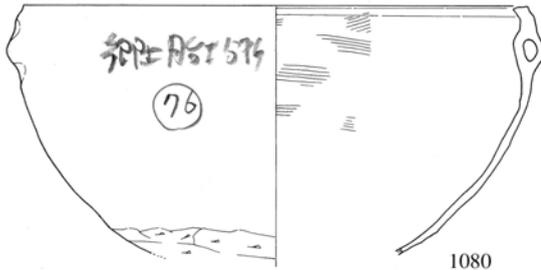
1074



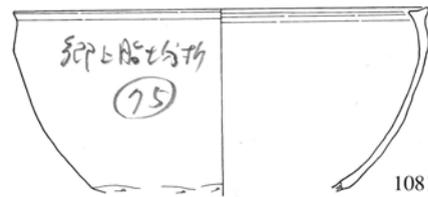
1076



1079



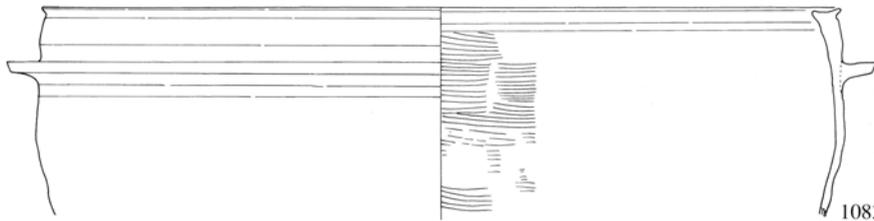
1080



1081



1082



1083

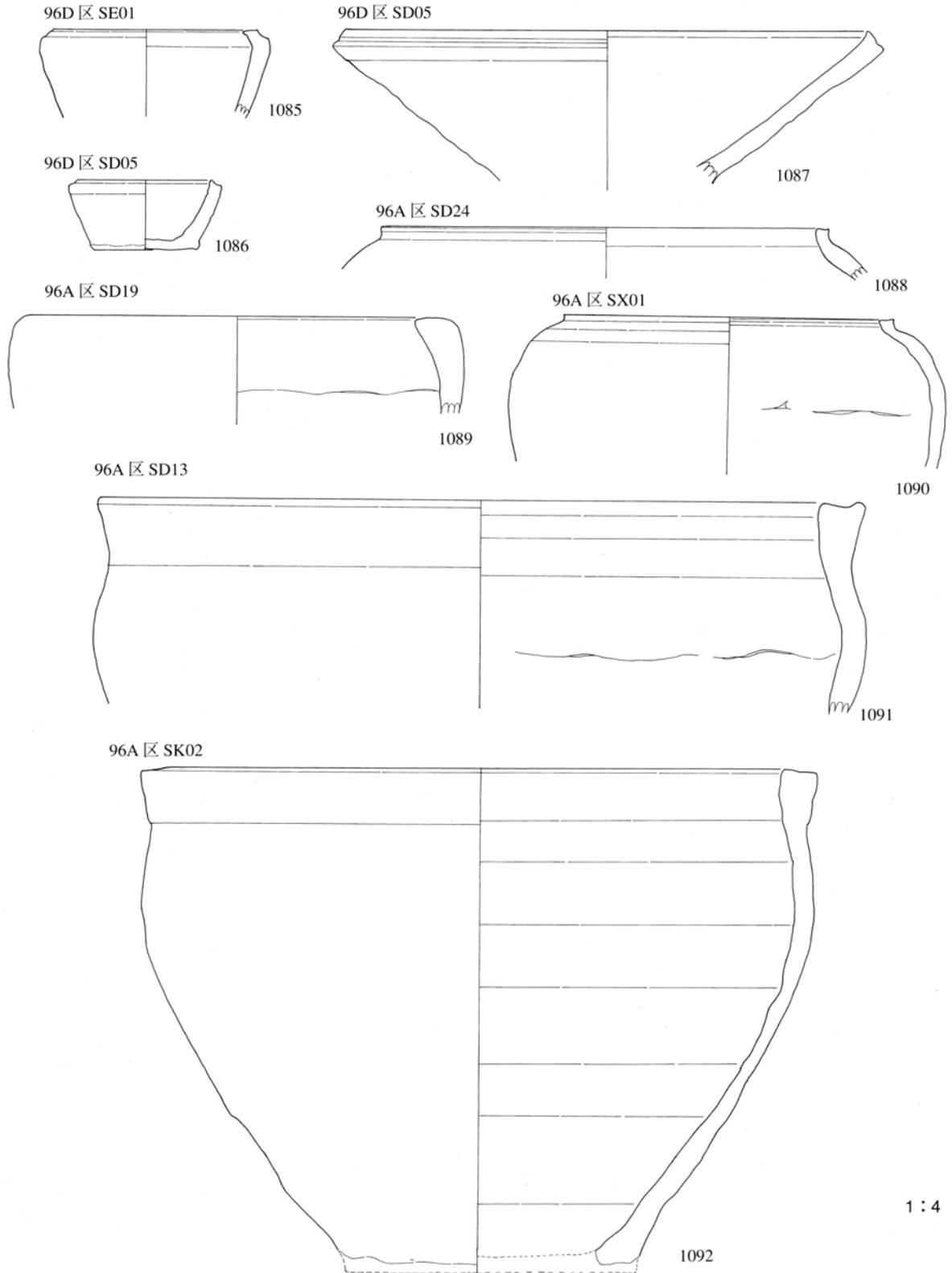


1084

1:4

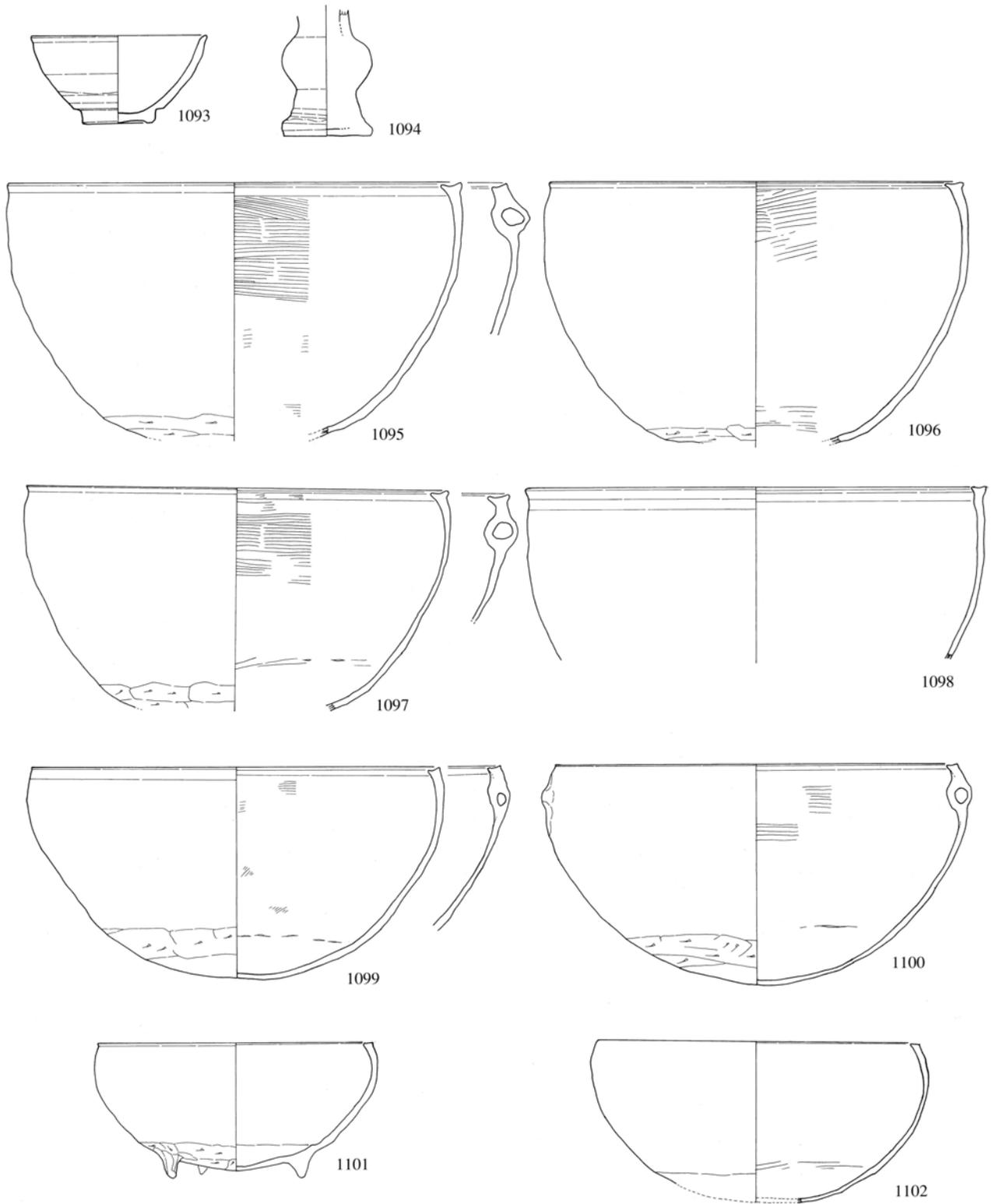
番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1071	土師器	内耳鍋		1078	瀬戸・美濃窯産	搦鉢	大窯第2段階
1072	土師器	内耳鍋		1079	瀬戸・美濃窯産	搦鉢	大窯第2段階
1073	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第1段階	1080	土師器	内耳鍋	
1074	瀬戸・美濃窯産	山茶椀	第11・12型式	1081	土師器	内耳鍋	
1075	瀬戸・美濃窯産	灰釉端反皿	大窯第1段階	1082	土師器	内耳鍋	
1076	瀬戸・美濃窯産	灰釉端反皿	大窯第1段階	1083	土師器	羽釜 I	
1077	欠番			1084	土師器	羽釜 I	

96A区 SD24・SD19・SD13・SK02・SX01 96D区 SE01・SD05 出土品



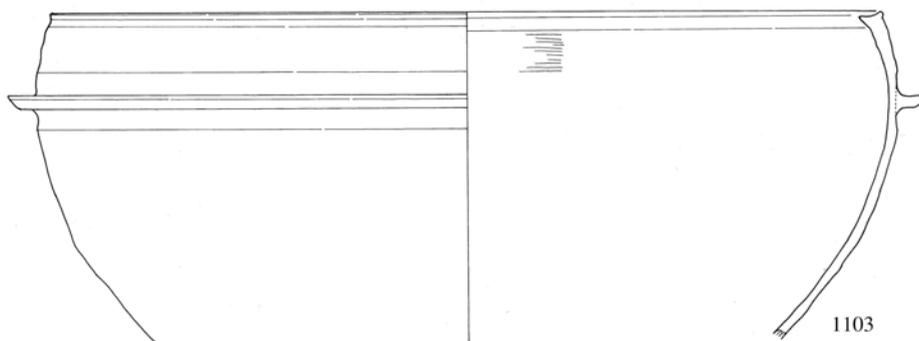
番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1085	常滑窯産	鉢D		1089	常滑窯産	鉢H (風呂)	
1086	常滑窯産	鉢E		1090	常滑窯産	短頸壺	
1087	常滑窯産	鉢A		1091	常滑窯産	甕	
1088	常滑窯産	短頸壺		1092	常滑窯産	甕	

97B区 SD01 第4層出土品 (1)

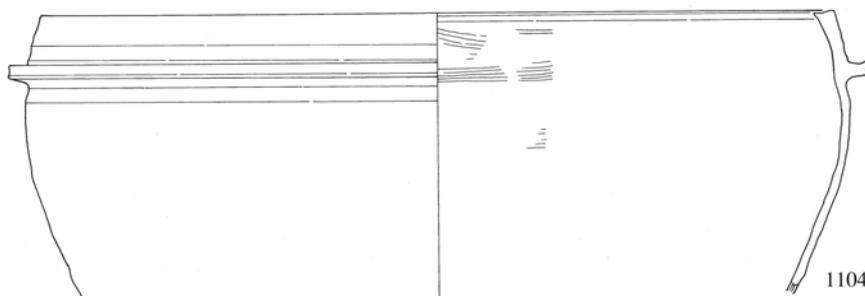


1 : 4

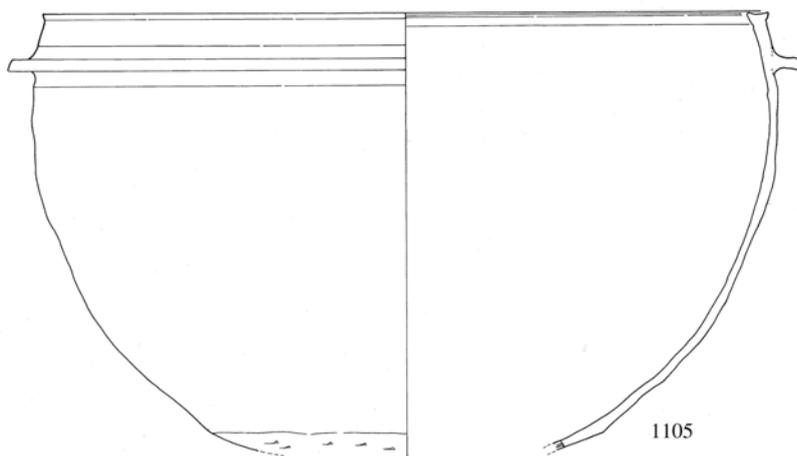
番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1093	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第1段階	1098	土師器	内耳鍋	
1094	瀬戸・美濃窯産	鉄釉花瓶	古瀬戸窯後期第3・4小期	1099	土師器	内耳鍋	
1095	土師器	内耳鍋		1100	土師器	内耳鍋	
1096	土師器	内耳鍋		1101	土師器	内耳鍋	
1097	土師器	内耳鍋		1102	土師器	内耳鍋	



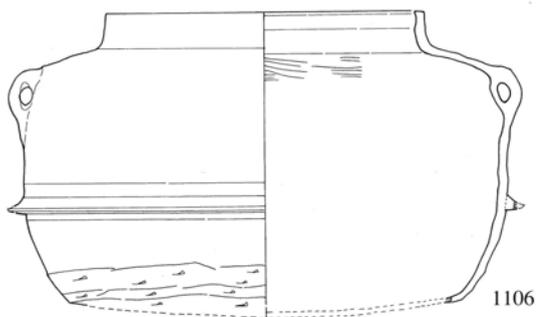
1103



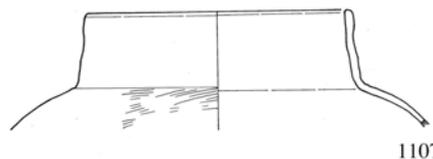
1104



1105



1106

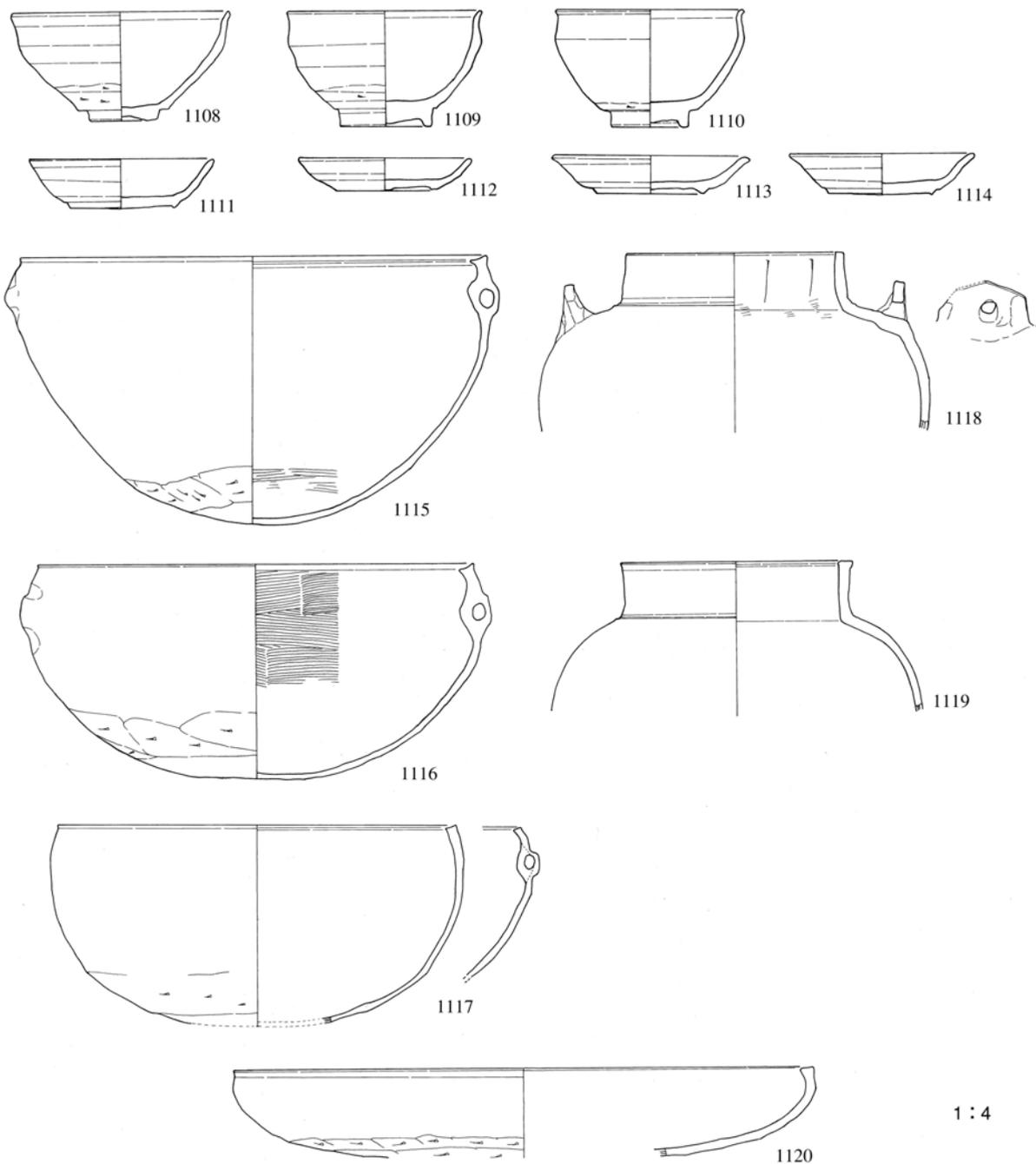


1107

1:4

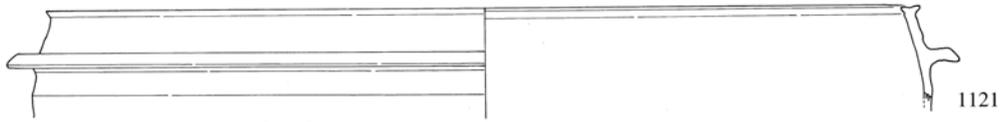
番号	産地・種類	器種等	年代
1103	土師器	羽釜 I	
1104	土師器	羽釜 I	
1105	土師器	羽釜 II	
1106	土師器	茶釜 A	
1107	土師器	茶釜 A B	

97B区 SD01 第3層出土品 (1)



1:4

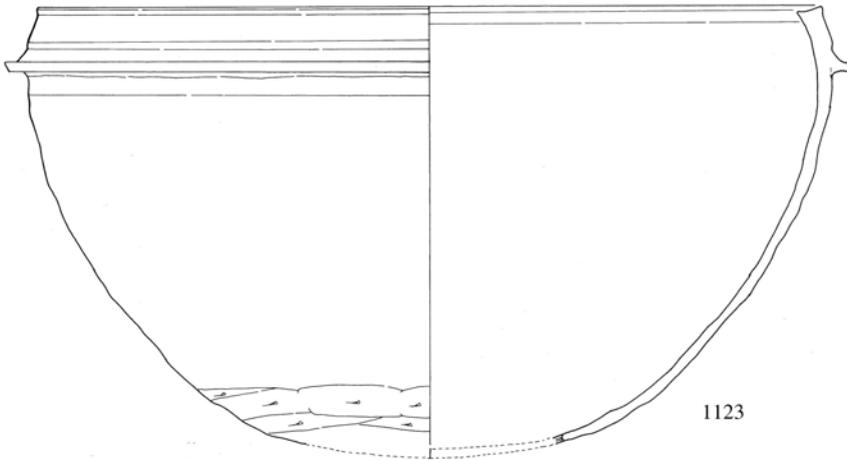
番号	産地・種類	器種等	年代
1108	瀬戸・美濃窯産	天目茶碗	大窯第3段階
1109	瀬戸・美濃窯産	天目茶碗	連房式登窯第3小期
1110	瀬戸・美濃窯産	天目茶碗	連房式登窯第4小期
1111	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿	大窯第2段階
1112	瀬戸・美濃窯産	灰釉内禿皿	大窯第3段階
1113	瀬戸・美濃窯産	志野反皿	大窯第4段階
1114	瀬戸・美濃窯産	志野反皿	連房式登窯第1小期
1115	土師器	内耳鍋	
1116	土師器	内耳鍋	
1117	土師器	内耳鍋	
1118	土師器	茶釜B	
1119	土師器	茶釜A B	
1120	土師器	ホウロク	



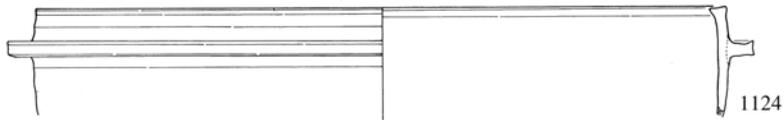
1121



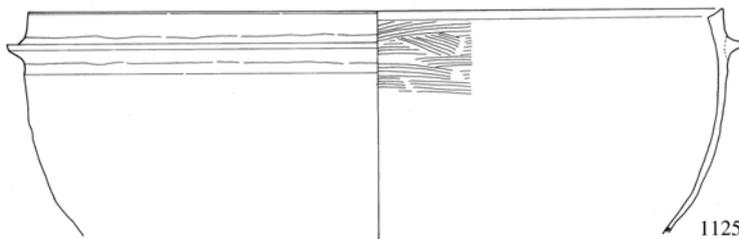
1122



1123



1124

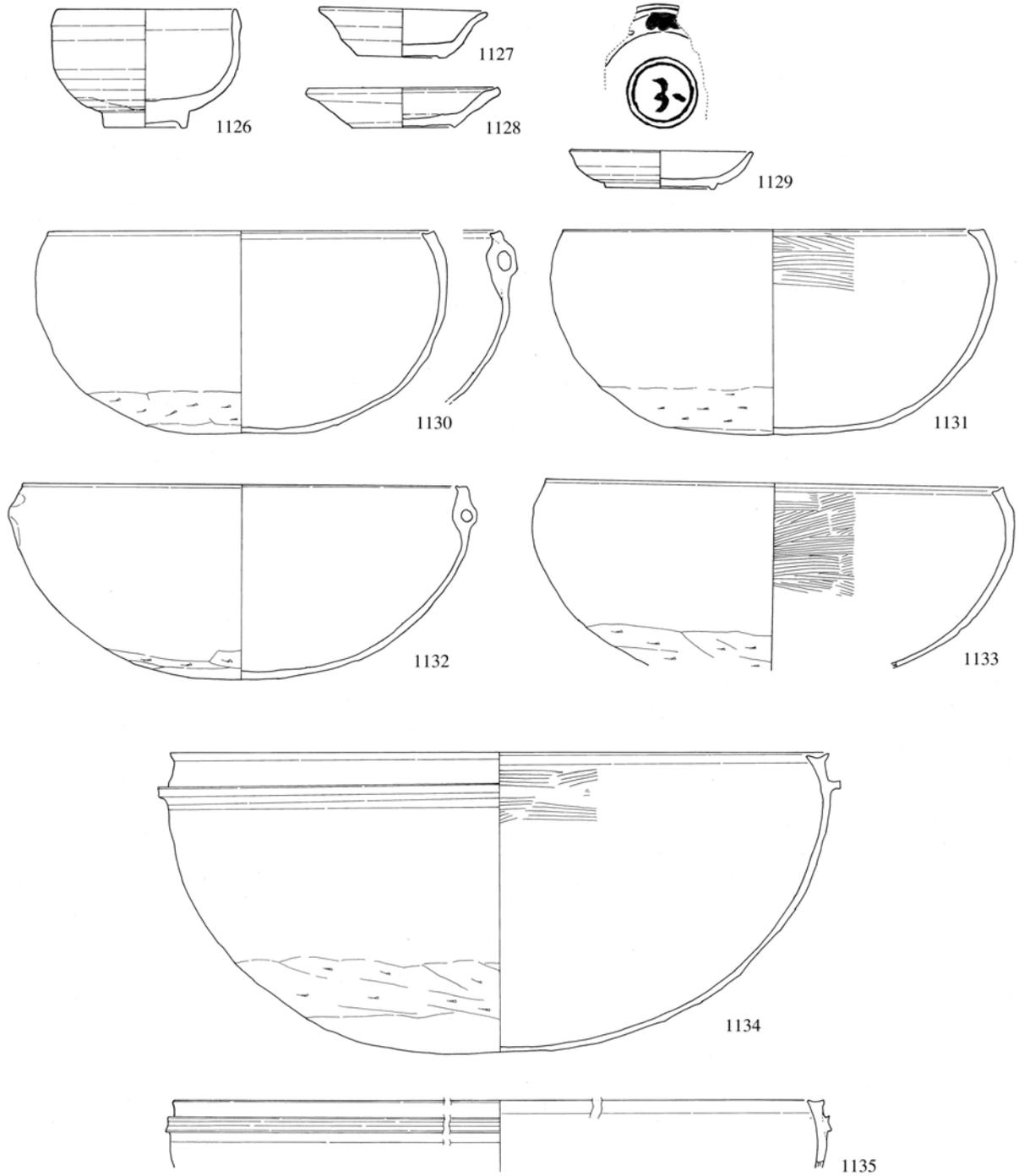


1125

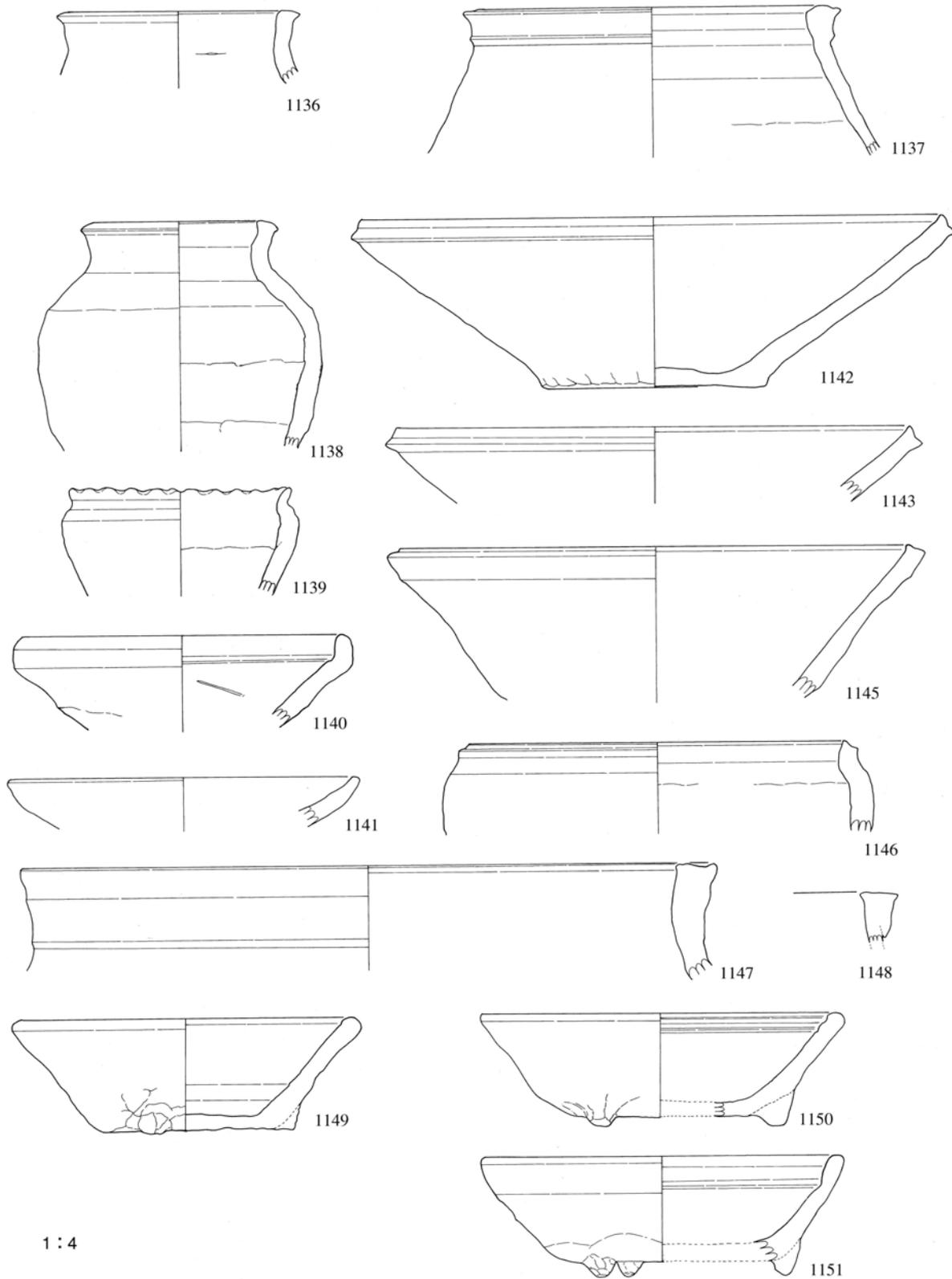
1:4

番号	産地・種類	器種等	年代
1121	土師器	羽釜Ⅱ	
1122	土師器	羽釜Ⅰ	
1123	土師器	羽釜Ⅰ	
1124	土師器	羽釜Ⅰ	
1125	土師器	羽釜Ⅰ	

97B区 SD01 第2層出土品



番号	産地・種類	器種等	年代
1126	瀬戸・美濃窯産	志野釉丸椀	連房式登窯第2小期
1127	瀬戸・美濃窯産	鉄釉稜皿	大窯第2段階
1128	瀬戸・美濃窯産	灰釉折縁皿	大窯第4段階
1129	瀬戸・美濃窯産	志野鉄絵皿	連房式登窯第1小期
1130	土師器	内耳鍋	
1131	土師器	内耳鍋	
1132	土師器	内耳鍋	
1133	土師器	内耳鍋	
1134	土師器	羽釜 I	
1135	土師器	羽釜 I	



番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1136	常滑窯産	壺A		1144	常滑窯産	鉢A	
1137	常滑窯産	甕		1145	常滑窯産	鉢A	
1138	常滑窯産	壺A		1146	常滑窯産	短頸壺	
1139	常滑窯産	鉢D		1147	常滑窯産	甕	
1140	常滑窯産	鉢B		1148	常滑窯産	甕	
1141	常滑窯産	鉢B		1149	常滑窯産	鉢B	
1142	常滑窯産	鉢A		1150	常滑窯産	鉢B	
1143	常滑窯産	鉢A		1151	常滑窯産	鉢B	

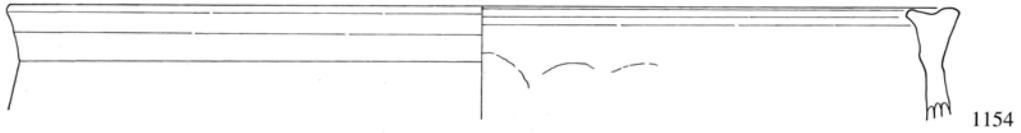
97B区SD01出土常滑窯産陶器(2)



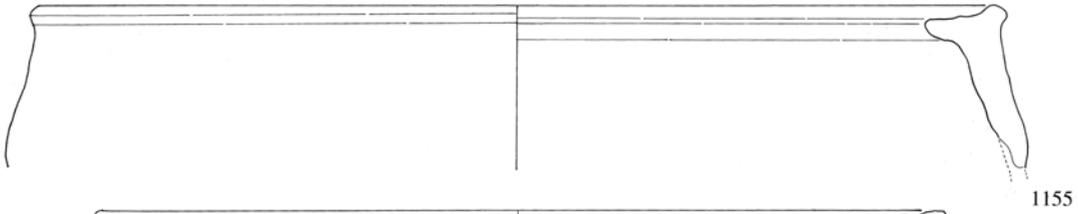
1152



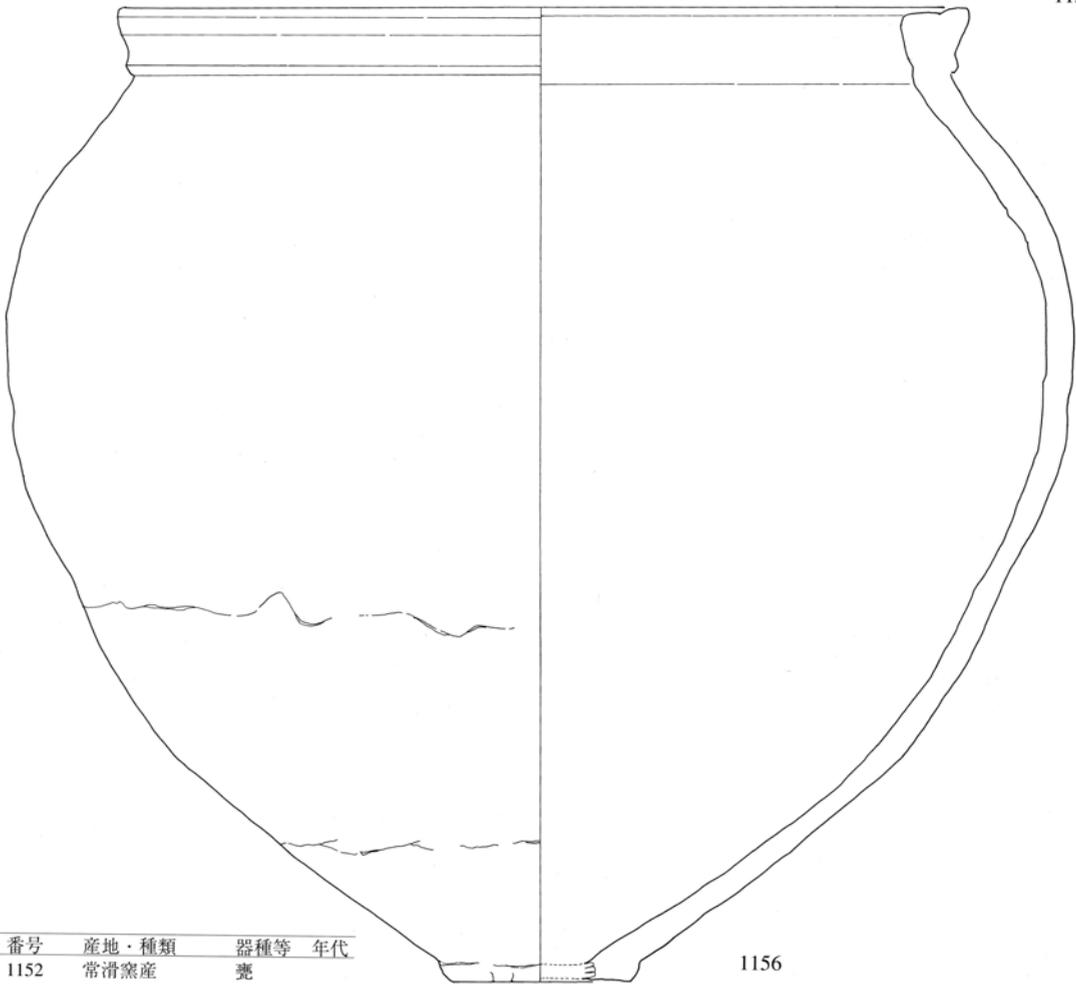
1153



1154



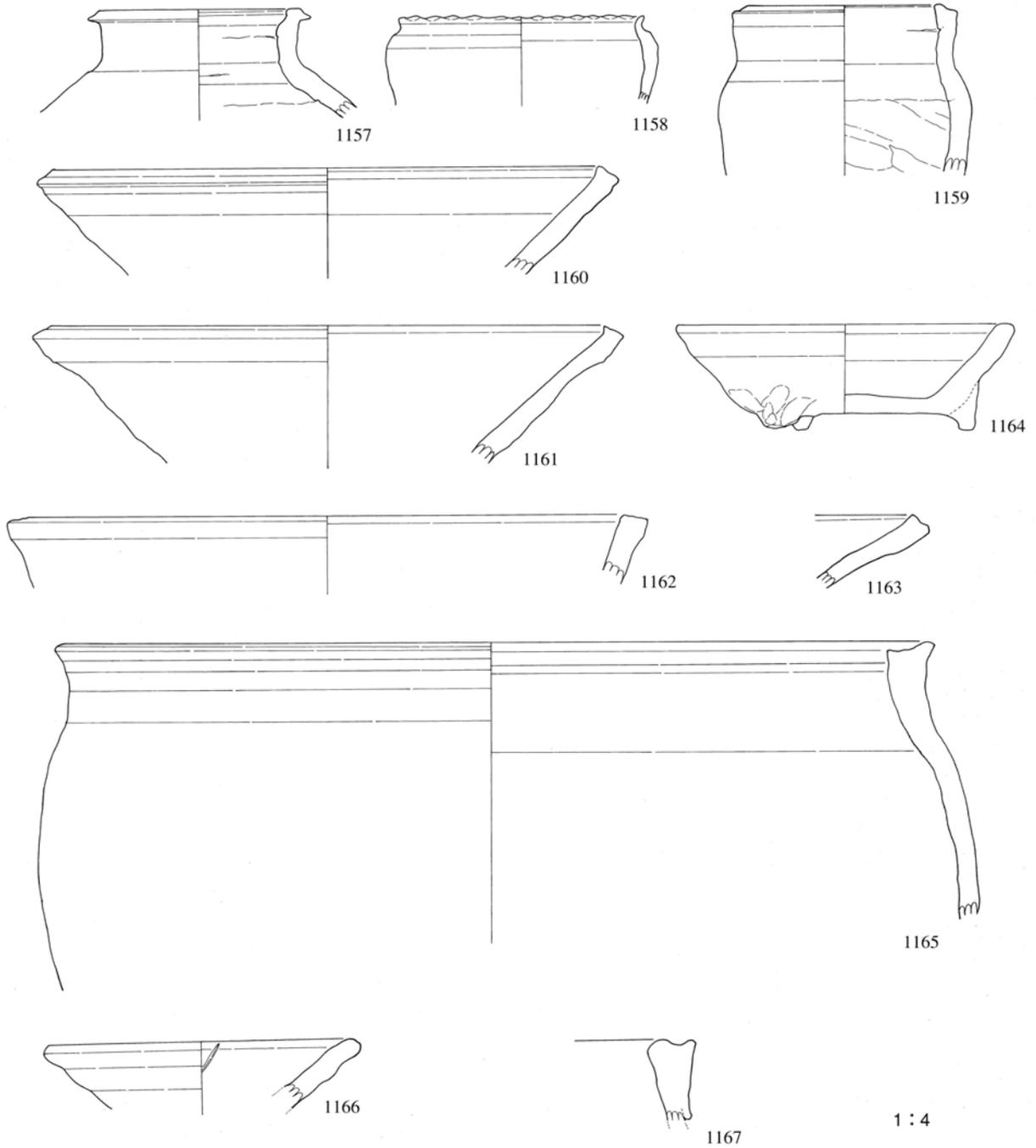
1155



1156

1:4

番号	産地・種類	器種等	年代
1152	常滑窯産	甕	
1153	常滑窯産	甕	
1154	常滑窯産	甕	
1155	常滑窯産	甕	
1156	常滑窯産	甕	

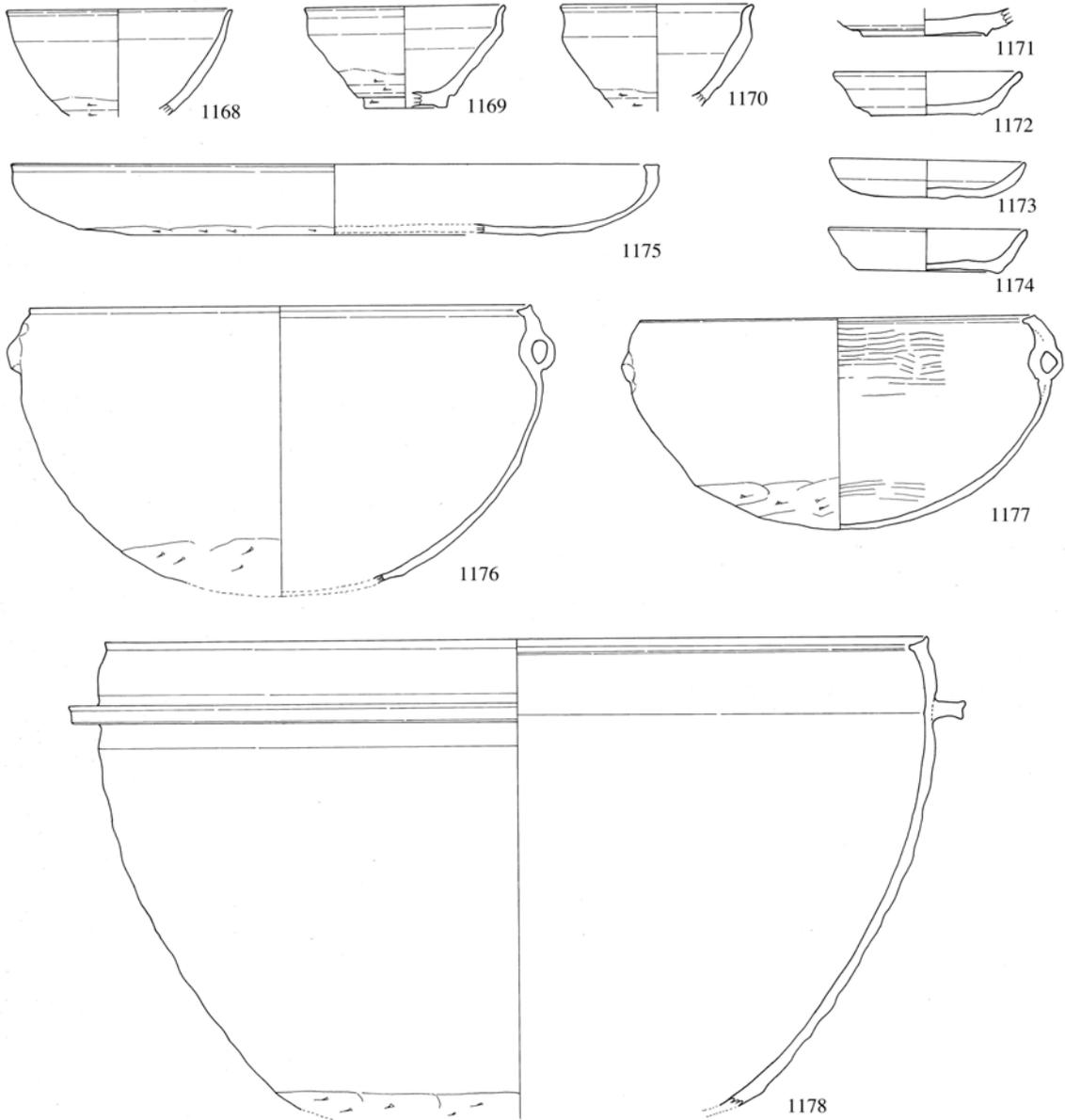


番号	産地・種類	器種等	年代
1157	常滑窯産	壺A	
1158	常滑窯産	鉢D	
1159	常滑窯産	壺B	
1160	常滑窯産	鉢A	
1161	常滑窯産	鉢A	
1162	常滑窯産	鉢A	
1163	常滑窯産	鉢A	
1164	常滑窯産	鉢B	
1165	常滑窯産	甕	
1166	常滑窯産	鉢B	
1167	常滑窯産	甕	

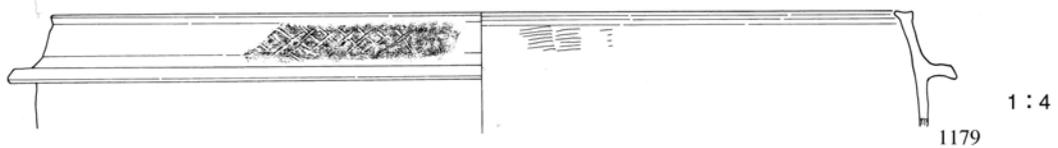
番号	産地・種類	器種等	年代
1168	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第1段階
1169	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	大窯第2段階
1170	瀬戸・美濃窯産	天目茶椀	連房式登窯第3・4小期
1171	瀬戸・美濃窯産	志野皿	連房式登窯第1・2小期
1172	土師器	皿A b	
1173	土師器	皿B a	
1174	土師器	皿A c	
1175	土師器	ホウロク	
1176	土師器	内耳鍋	
1177	土師器	内耳鍋	
1178	土師器	羽釜 I	

97B区 SD07・96E区 SD13 出土品

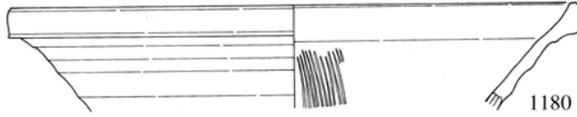
97B区 SD07



96E区 SD13



番号	産地・種類	器種等	年代	番号	産地・種類	器種等	年代
1179	土師器	羽釜Ⅱ		1190	土師器	皿?	
1180	瀬戸・美濃窯産	搦鉢	大窯第2段階	1191	土師器	羽釜Ⅰ	
1181	瀬戸・美濃窯産	搦鉢	大窯第2段階	1192	土師器	羽釜Ⅰ	
1182	瀬戸・美濃窯産	鉄釉丸皿Ⅱ	大窯第3段階	1193	常滑窯産	壺A	
1183	土師器	茶釜A		1194	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿Ⅰ	大窯第2段階
1184	土師器	内耳鍋		1195	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿Ⅰ	大窯第2段階
1185	土師器	内耳鍋		1196	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿Ⅰ	大窯第3段階
1186	土師器	内耳鍋		1197	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿Ⅰ	大窯第3段階
1187	土師器	内耳鍋		1198	瀬戸・美濃窯産	灰釉丸皿Ⅰ	大窯第3段階
1188	土師器	内耳鍋		1199	瀬戸・美濃窯産	鉄釉内禿皿	大窯第3段階
1189	土師器	皿B a		1200	瀬戸・美濃窯産	鉄釉折縁皿	大窯第3段階



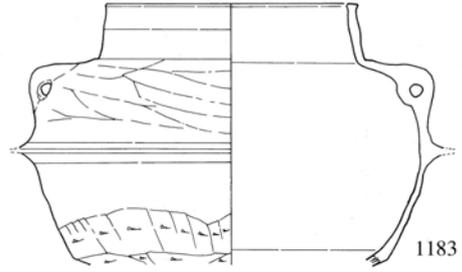
1180



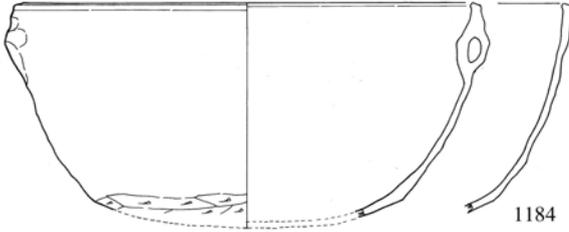
1181



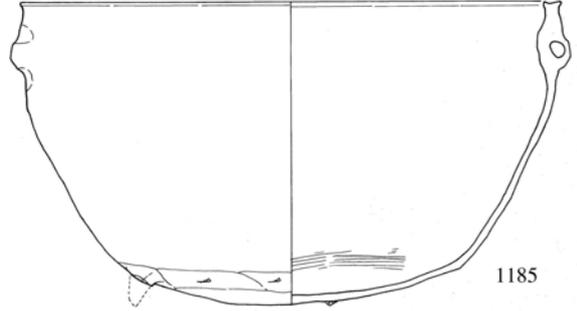
1182



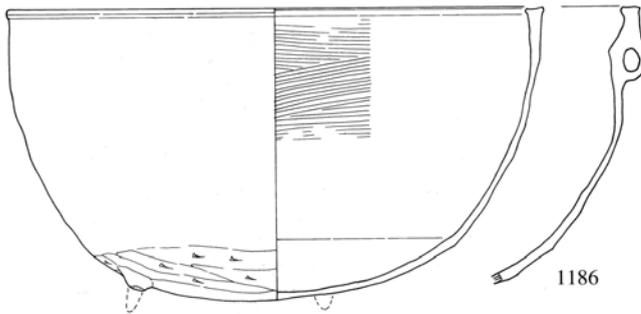
1183



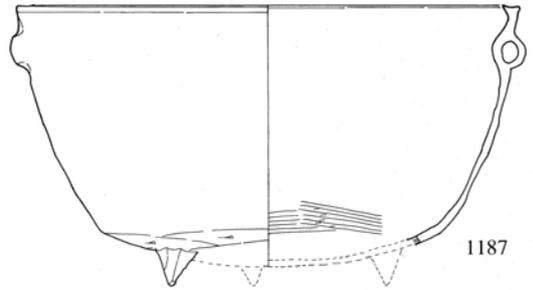
1184



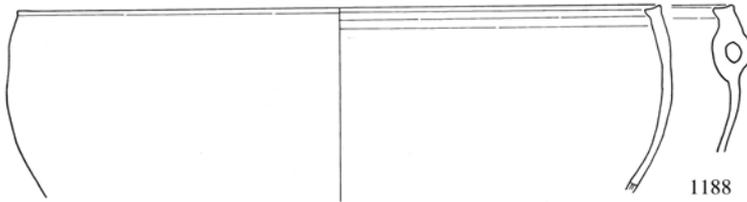
1185



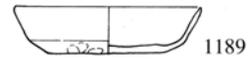
1186



1187



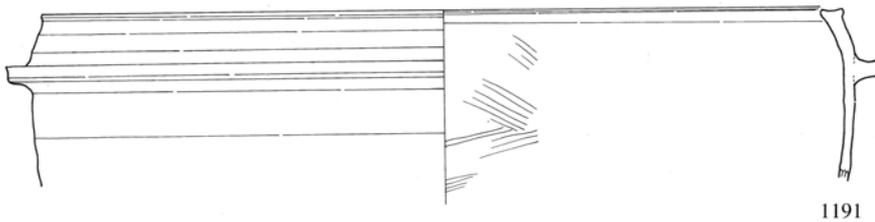
1188



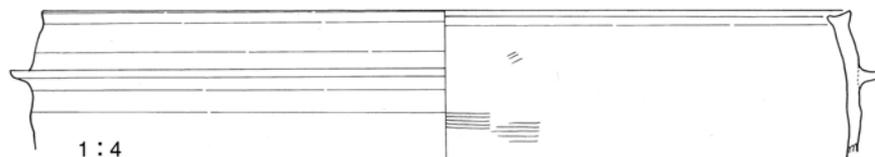
1189



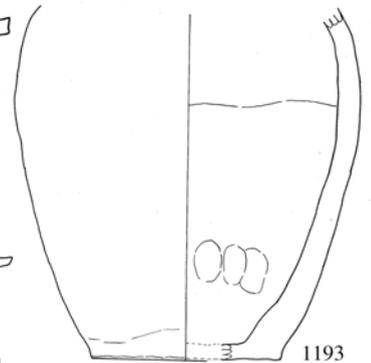
1190



1191



1192

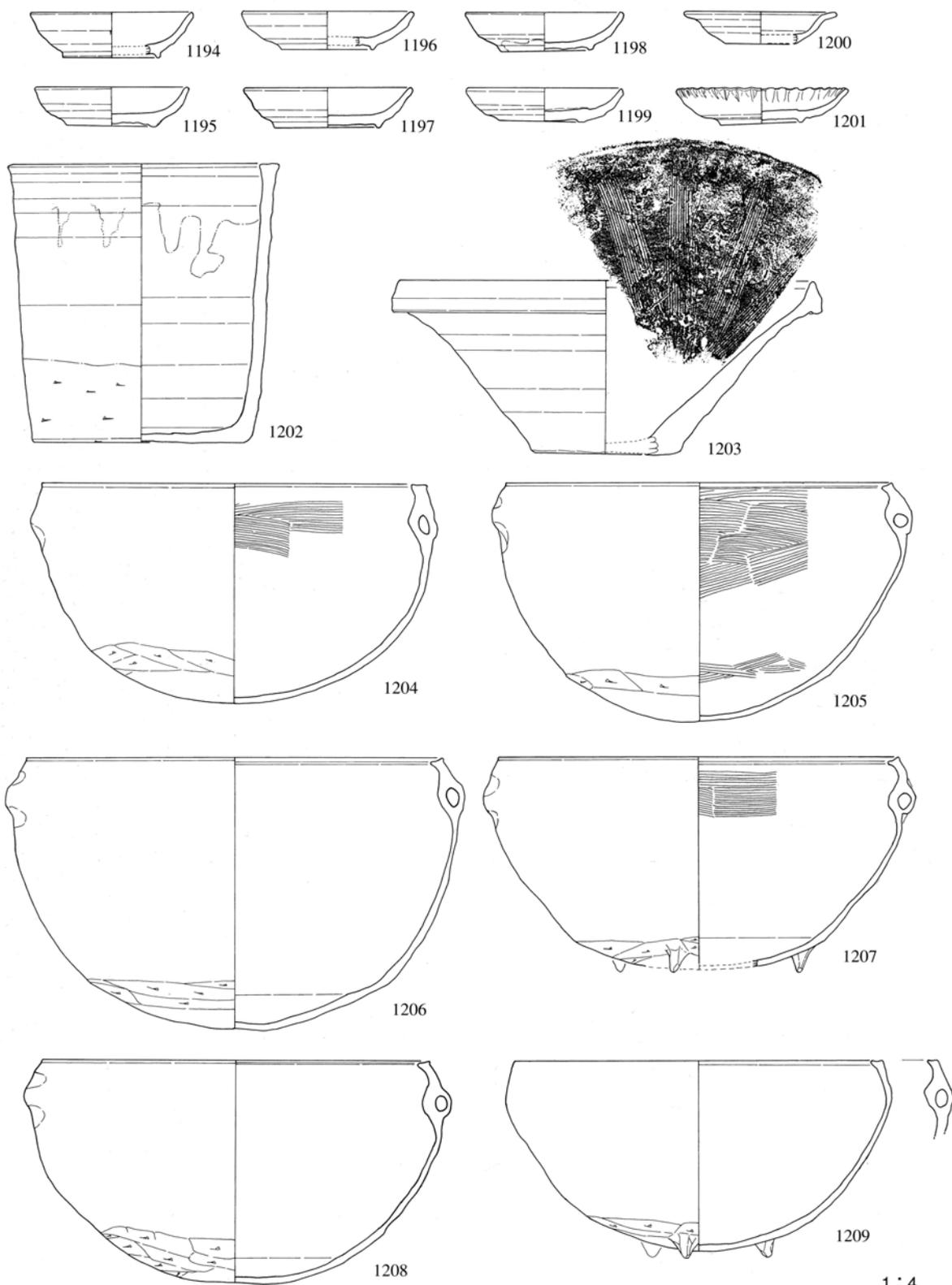


1193

1:4

番号	産地・種類	器種等	年代
1201	瀬戸・美濃窯産	鉄釉内禿ヒダ皿	大窯第3段階
1202	瀬戸・美濃窯産	鉄釉水指	大窯第3段階
1203	瀬戸・美濃窯産	掃鉢	大窯第3段階

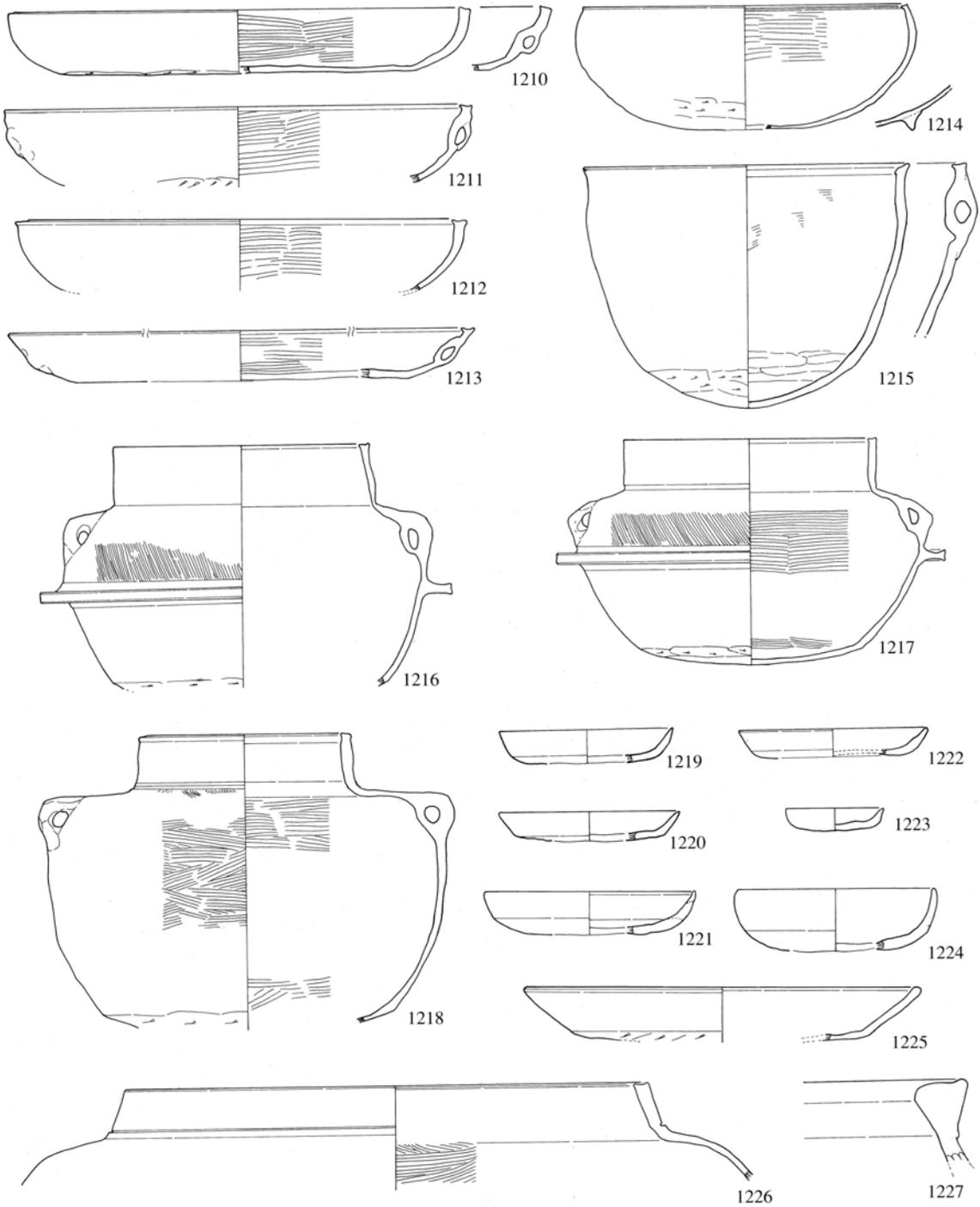
97A区 SE02 出土品 (1)



番号	産地・種類	器種等	年代
1204	土師器	内耳鍋	
1205	土師器	内耳鍋	
1206	土師器	内耳鍋	
1207	土師器	内耳鍋	
1208	土師器	内耳鍋	
1209	土師器	内耳鍋	
1210	土師器	ホウロク	

番号	産地・種類	器種等	年代
1211	土師器	ホウロク	
1212	土師器	ホウロク	
1213	土師器	ホウロク	
1214	土師器	内耳鍋	
1215	土師器	内耳鍋	
1216	土師器	茶釜A	
1217	土師器	茶釜A	

1:4



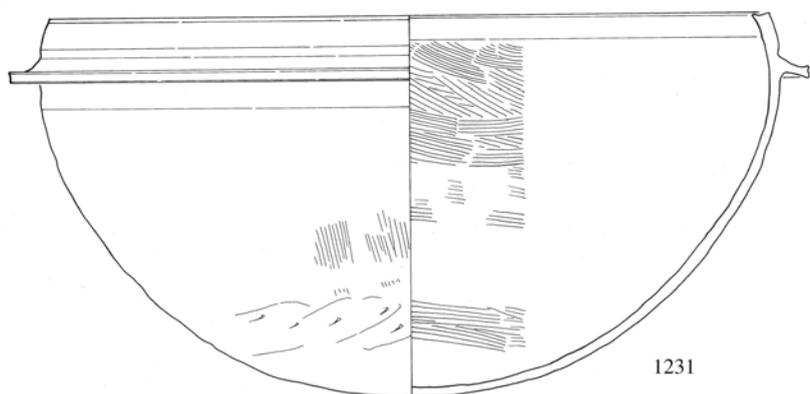
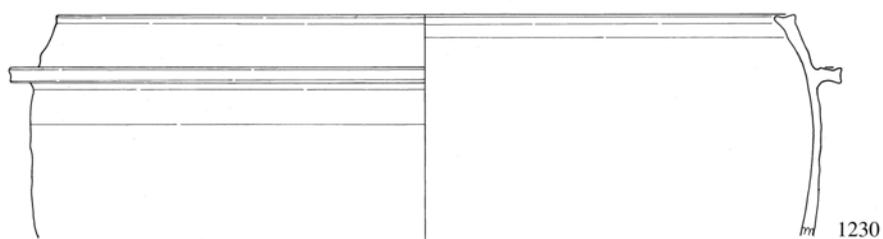
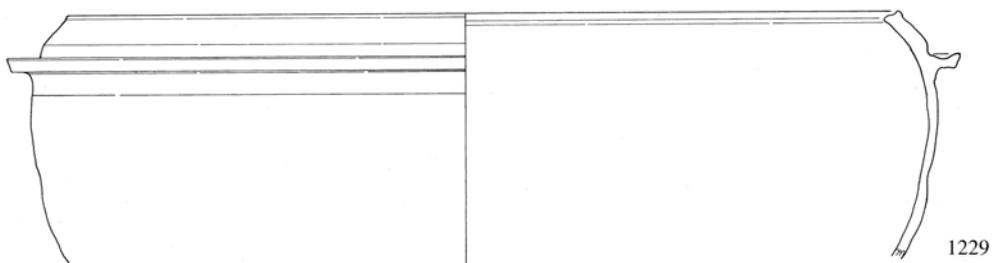
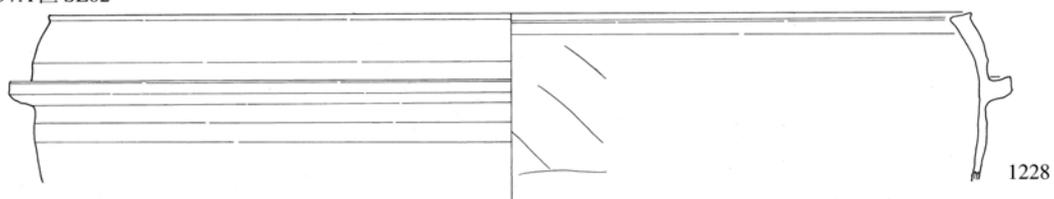
1 : 4

番号	産地・種類	器種等	年代
1218	土師器	茶釜B	
1219	土師器	皿Ba	
1220	土師器	皿Ba	
1221	土師器	皿Ba	
1222	土師器	皿Ba	
1223	土師器	皿Ba	
1224	土師器	皿Ba	
1225	土師器	その他(皿?)	
1226	土師器	茶釜AB	
1227	常滑窯産	甕	
1228	土師器	羽釜I	
1229	土師器	羽釜I	

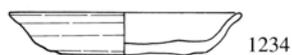
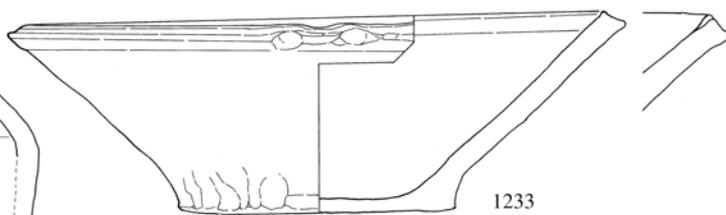
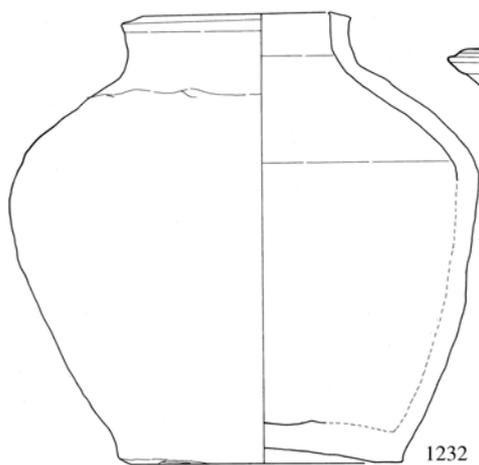
番号	産地・種類	器種等	年代
1230	土師器	羽釜I	
1231	土師器	羽釜II	
1232	常滑窯産	壺D	
1233	常滑窯産	鉢A	
1234	土師器	皿Ab	
1235	瀬戸・美濃窯産	山茶椀	第11型式
1236	常滑窯産	壺C	
1237	常滑窯産	鉢G	
1238	常滑窯産陶器	鉢F	
1239	常滑窯産	壺B	
1240	常滑窯産	鉢AB	
1241	常滑窯産	甕	

97A区 SE02 出土品 (2) · 96E区 SE01 出土品

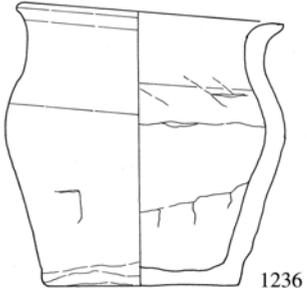
97A区 SE02



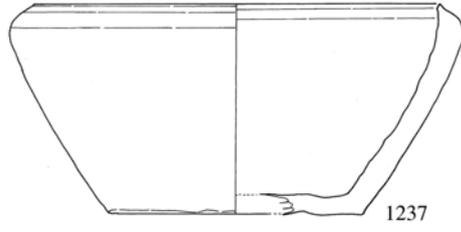
96E区 SE01



97A区 SK10



97A区 SK24



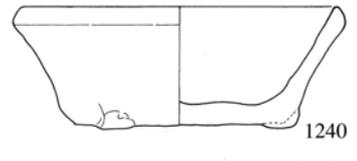
97A区 SD02



97A区 SE03

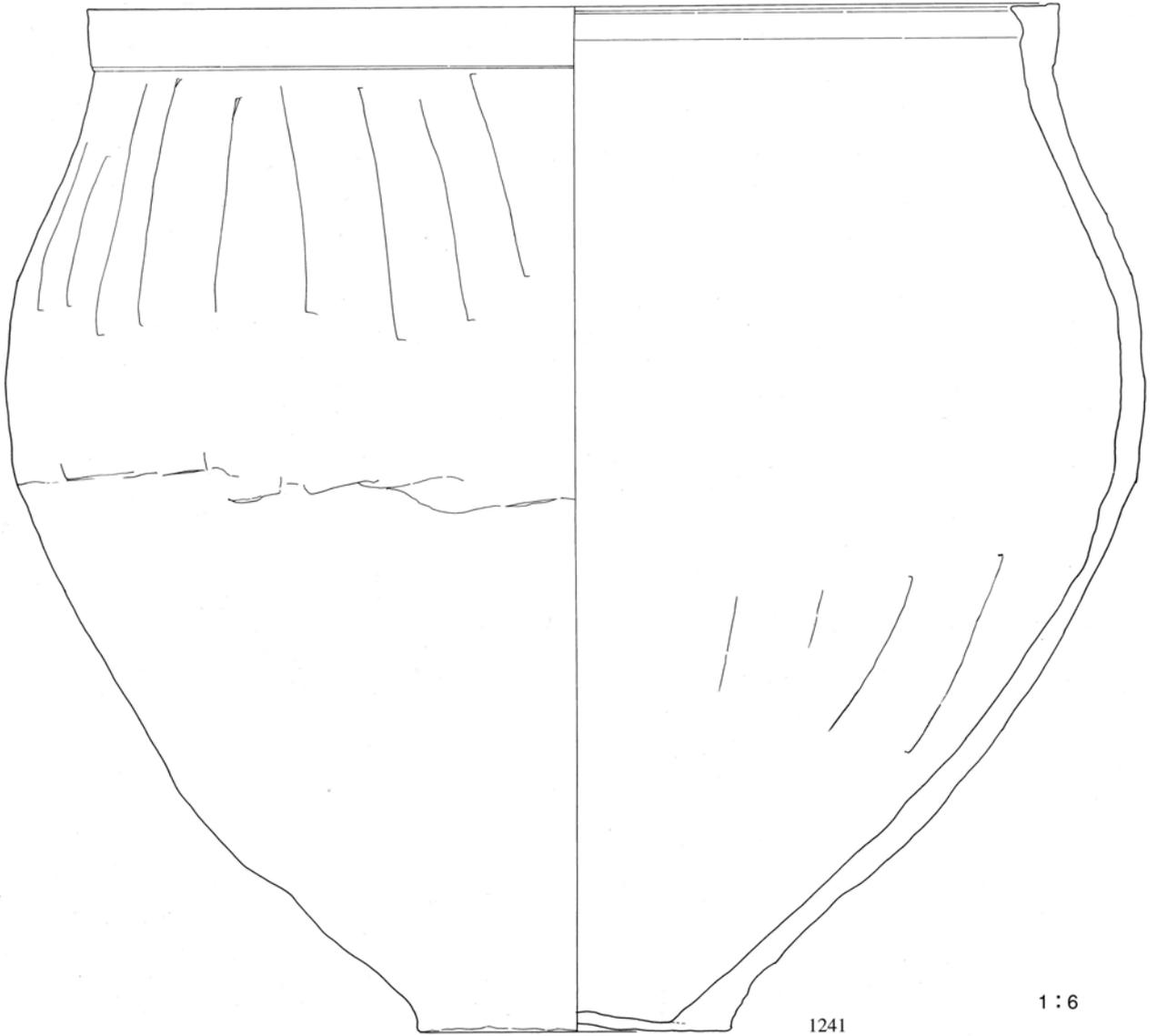


97A区 SD02



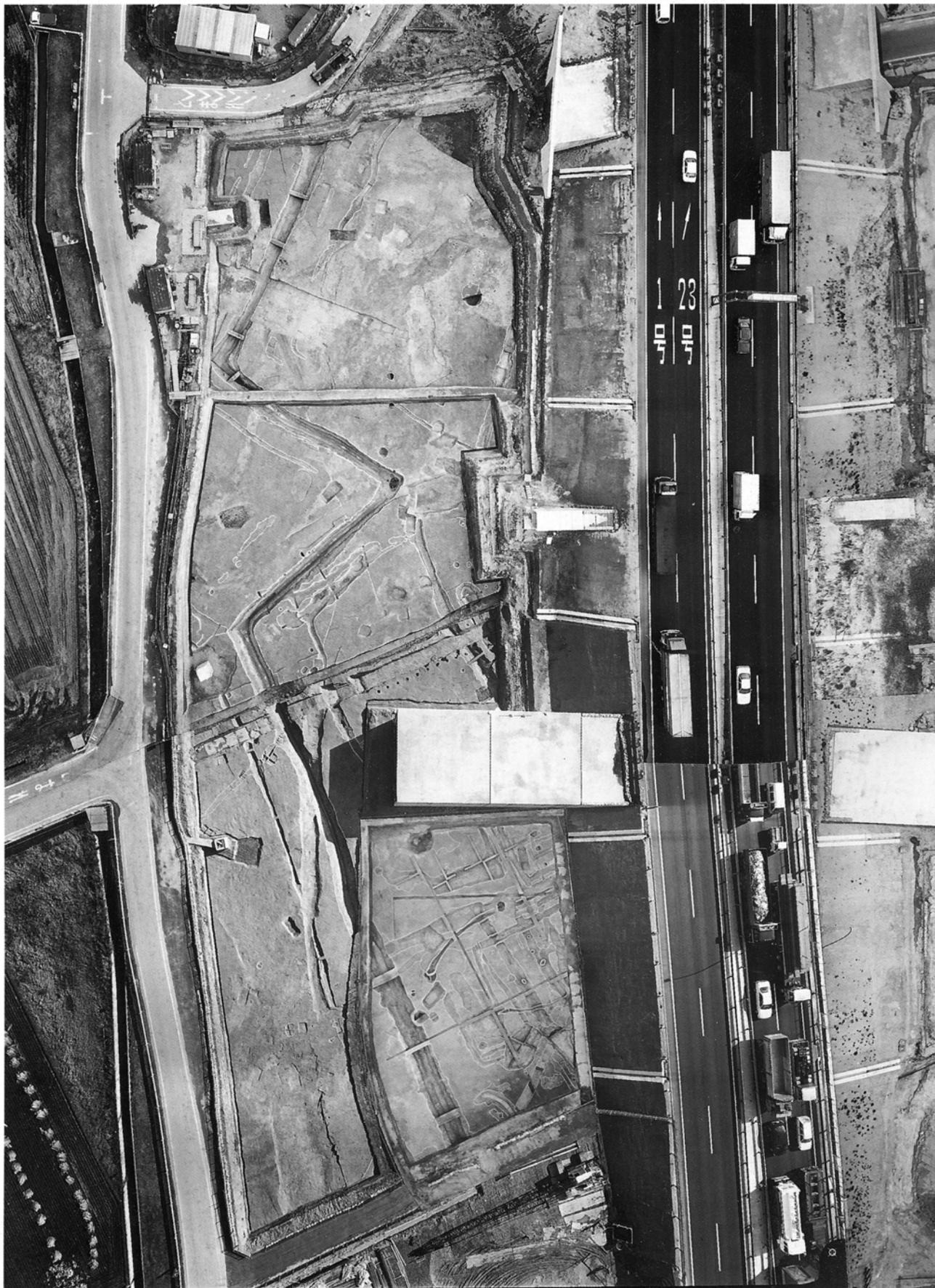
1:4

97A区 SK01



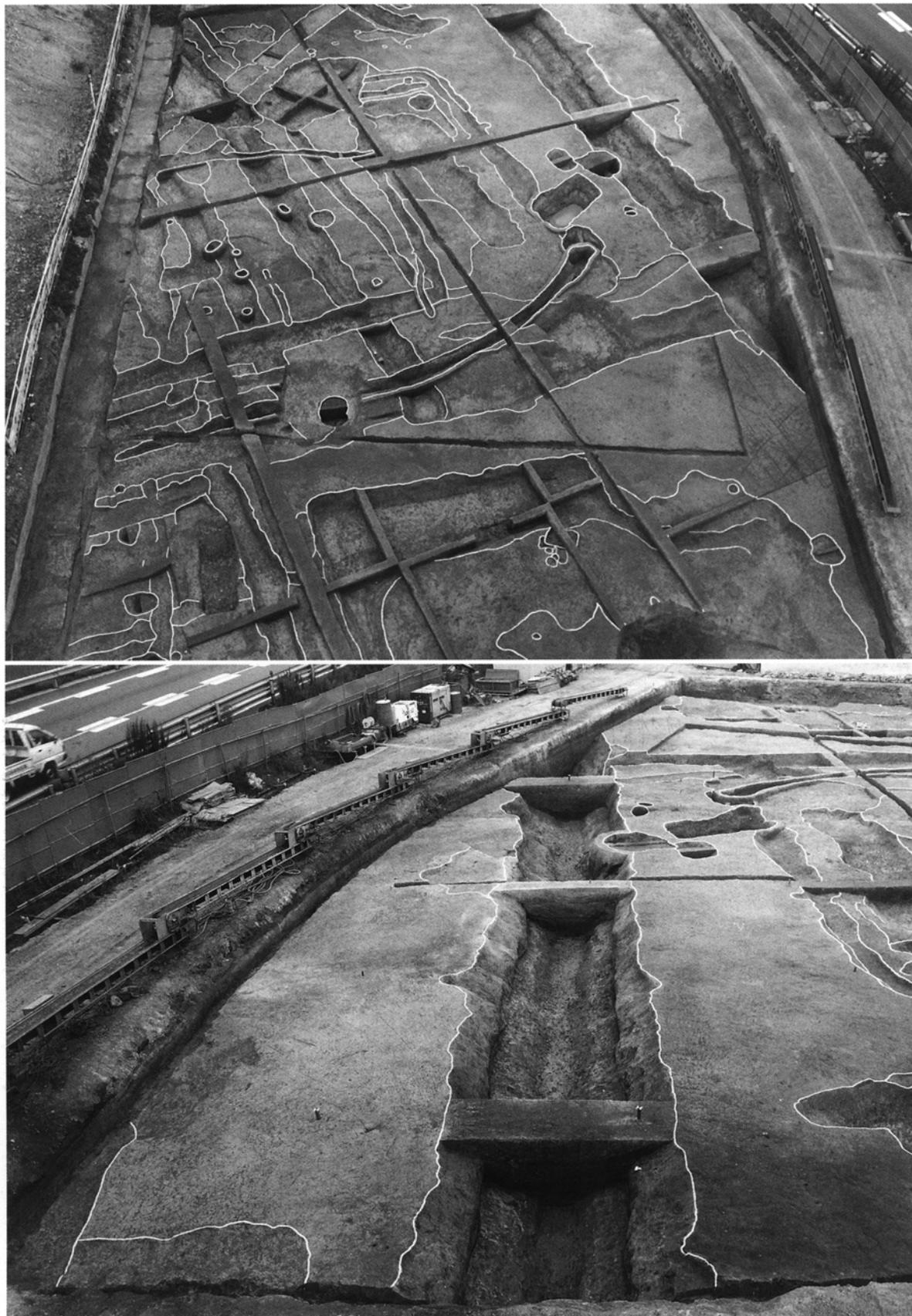
1:6

写真図版



南調査区全景

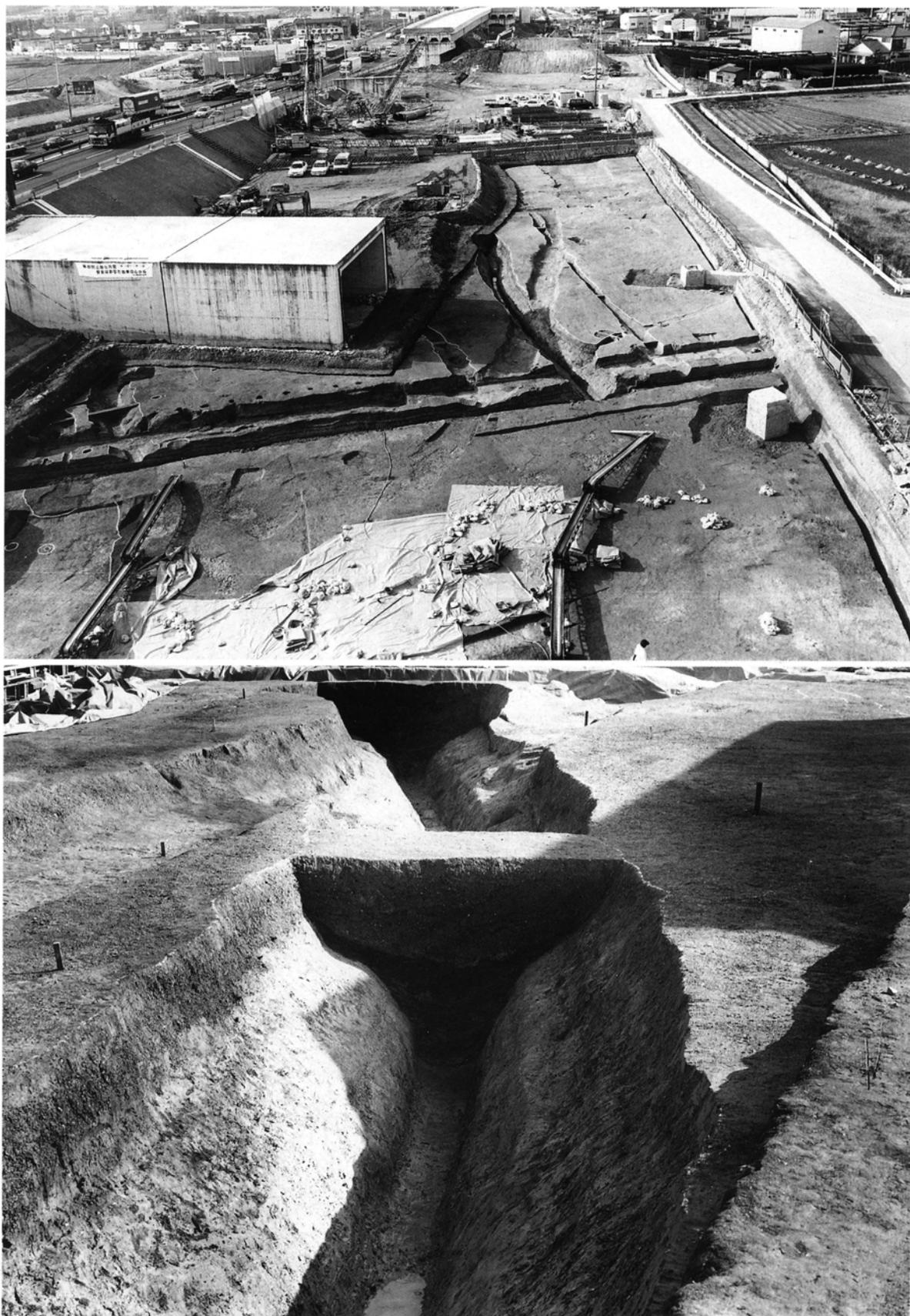




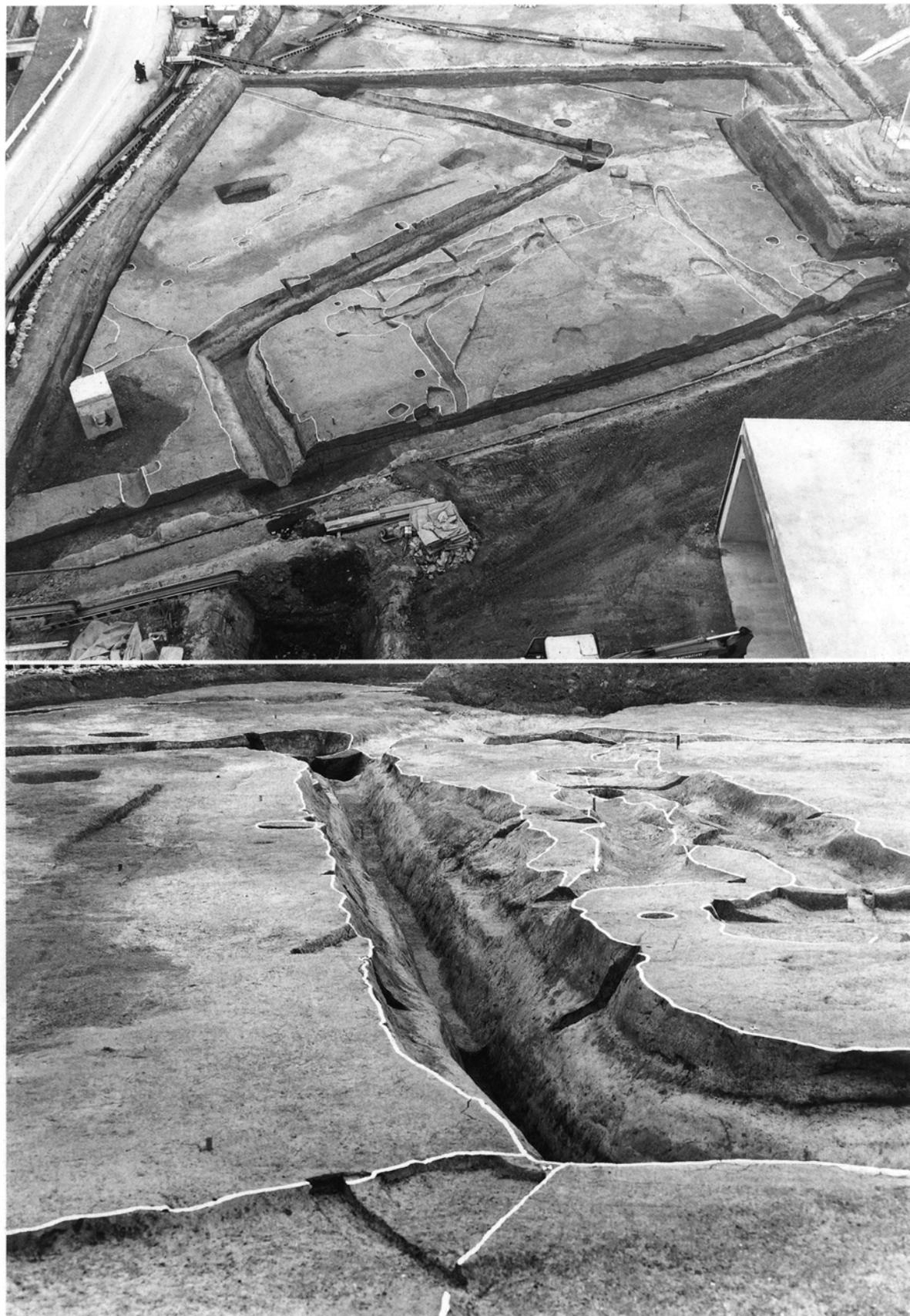
上：調査区全景 東より

下：96A 区 SD01 西より

96B区

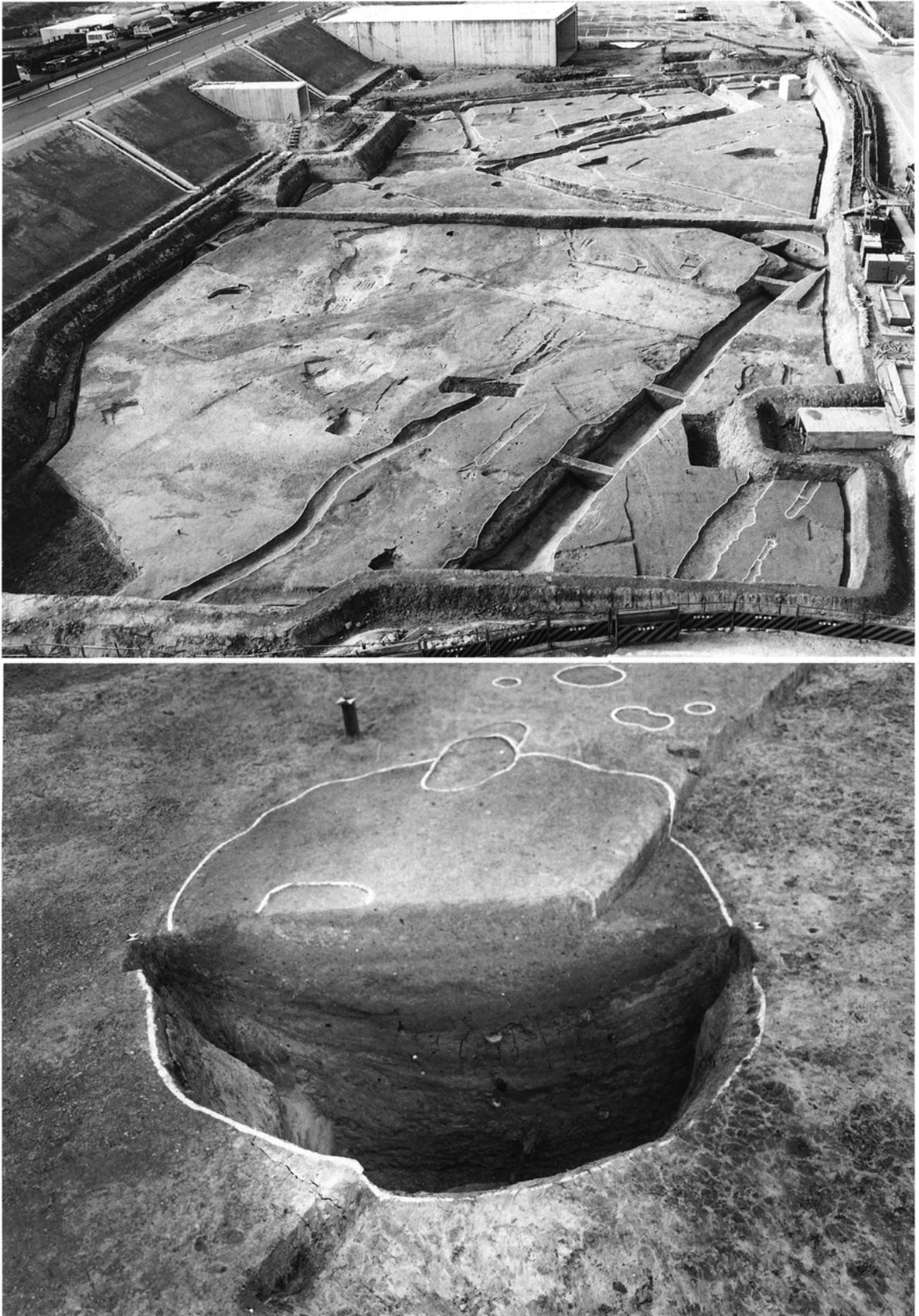


上：調査区全景 東より 下：96B区 SD01 西より



上：調査区全景 西より 下：96C区SD01 北より

96D区

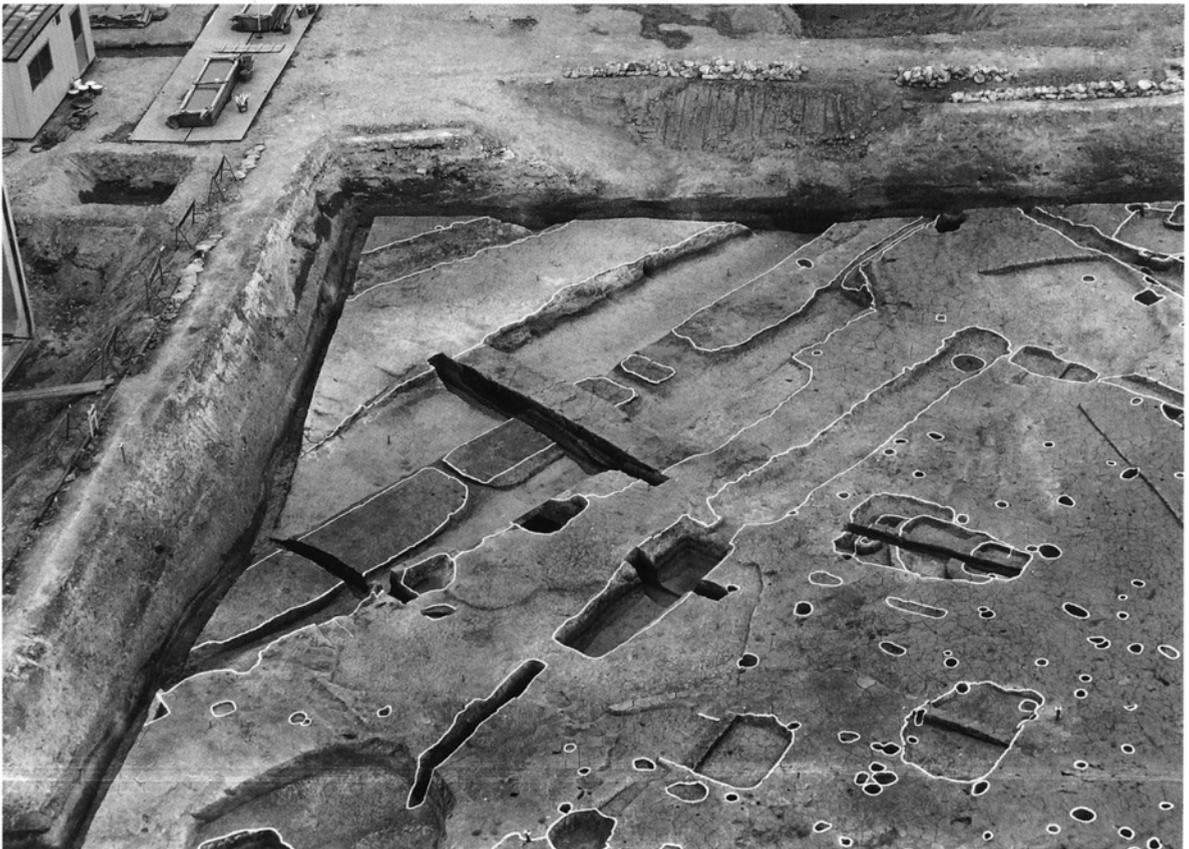


上：調査区全景 東より 下：96D区SE01 西より



上：調査区全景 南より 下：調査区全景 東より

96E区 (2)



上：調査区北西 南より 下：調査区北東部 西より



上：96E区 SE01 たち割り状況 北より 下：遺物出土状況 北より

97A区 (1)

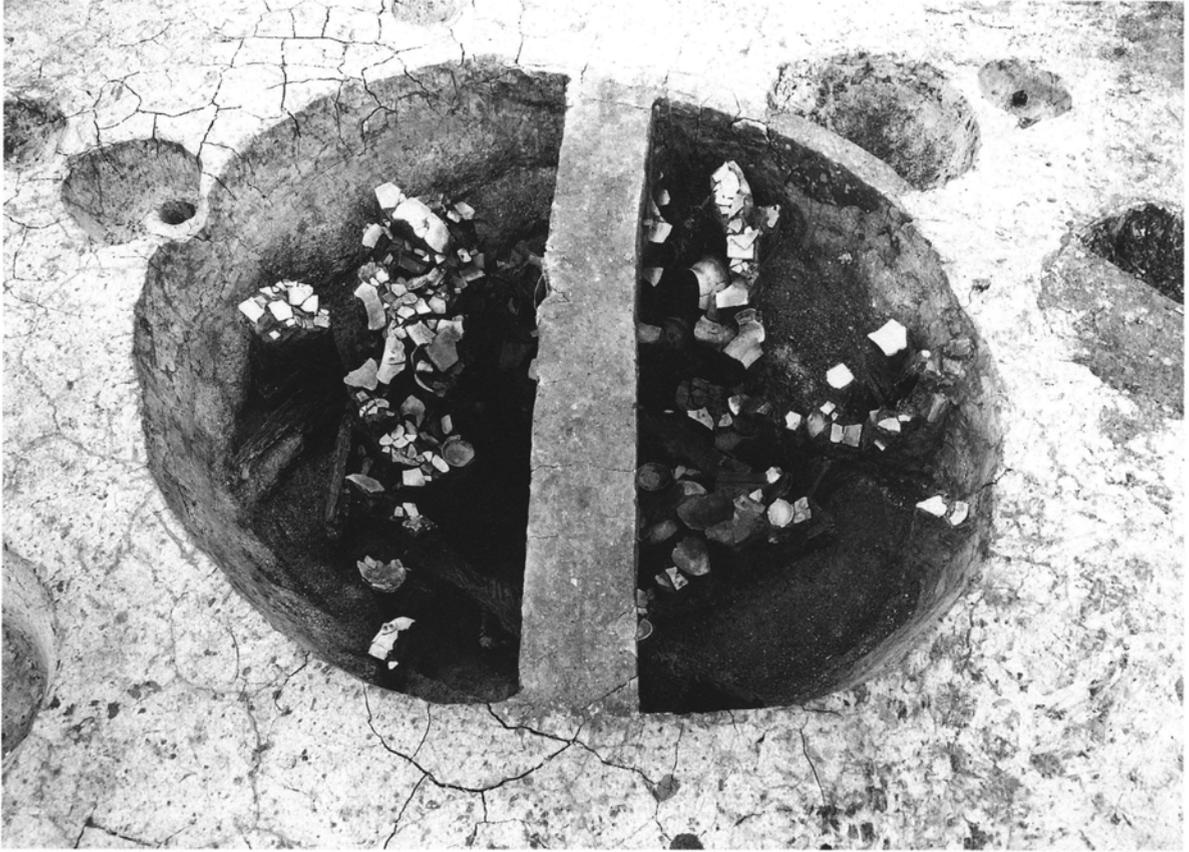


上：調査区南半部 東より 下：調査区北半部 東より

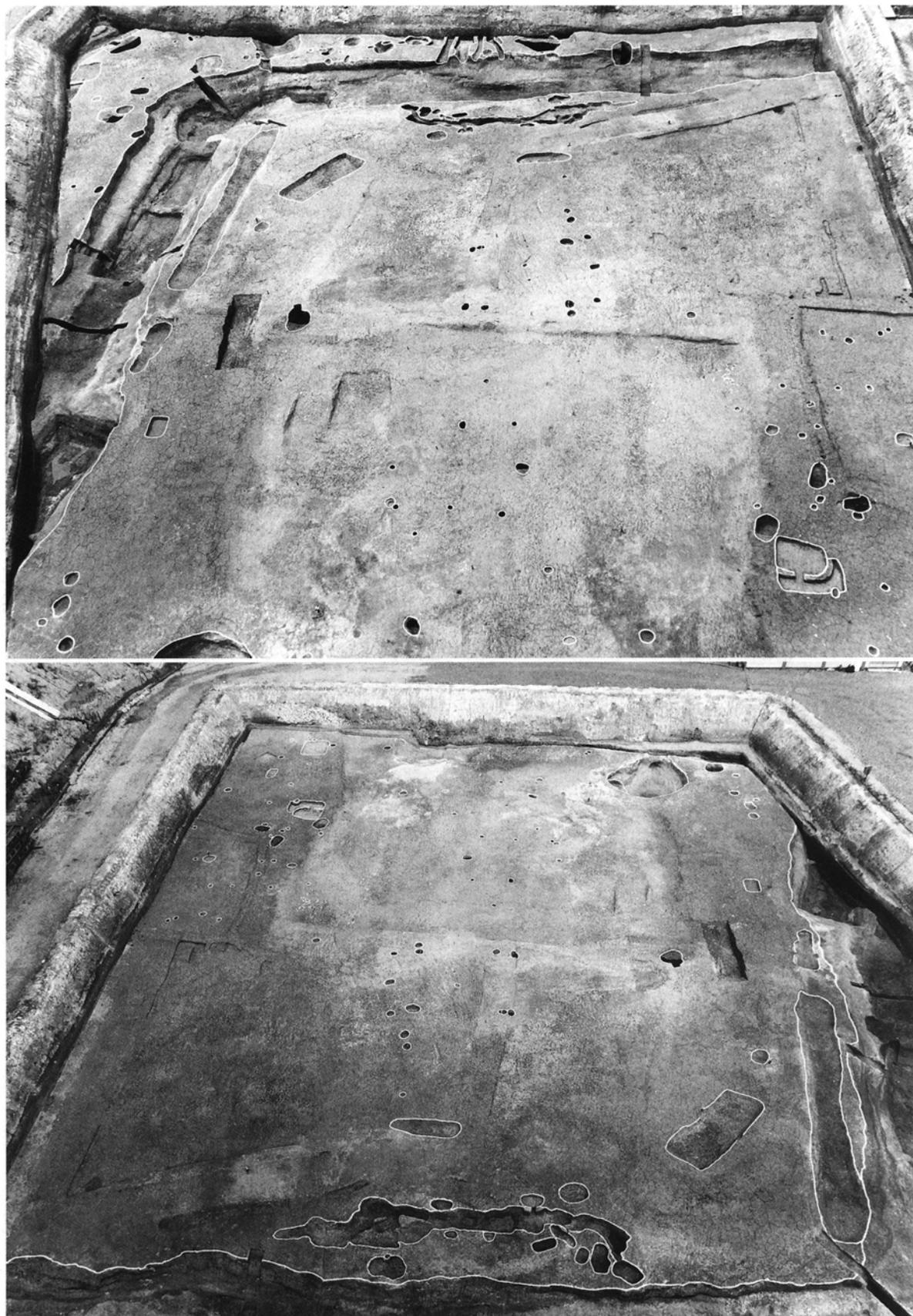


上：97A区 SE01 遺物出土状況 南より 下：同左 東より

97A区 (3)



上：97A区 SE02 遺物出土状況 西より 下：同左 北より



上：調査区全景 東より 下：同左 西より

97B区 (2)



上：97B区 SD01 南より 下：97B区



上：97B区 SD01 西より 下：97B区東端部 南より

97B区 (4)

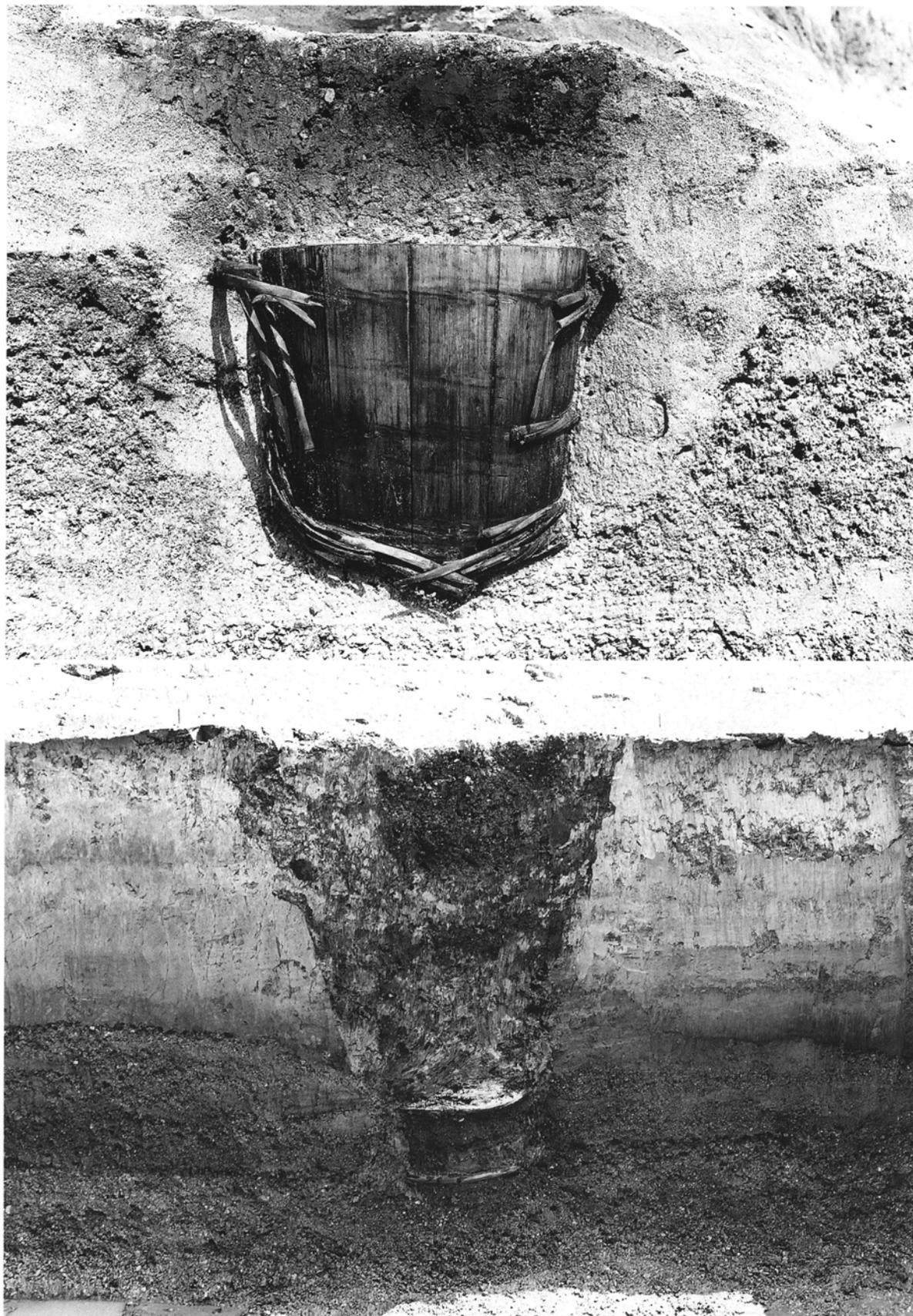


上：97B区 SD12 南より 下：97B区 SD07 天正4年銘護摩札出土状況 北より



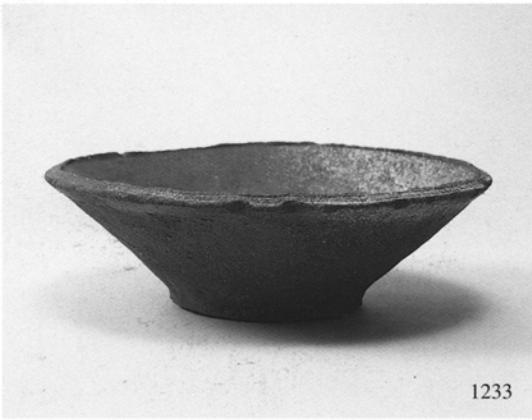
上：97B区 SE07 たち割り状況 西より 下：同左井側残存状況

97B区 (6)



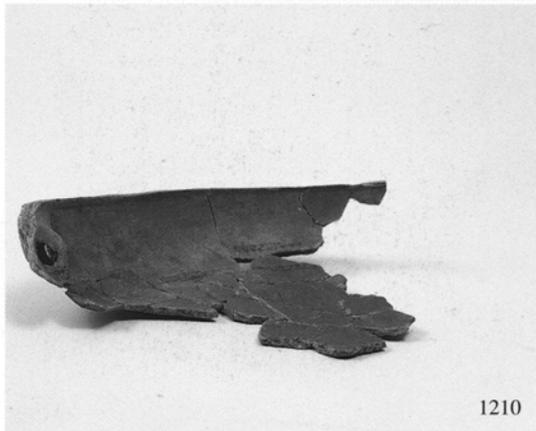
上：97B区 SE07 たち割り状況 西より 下：97B区 SE03 たち割り状況 北より

97A区 SE01 · 96E区 SE01 出土品



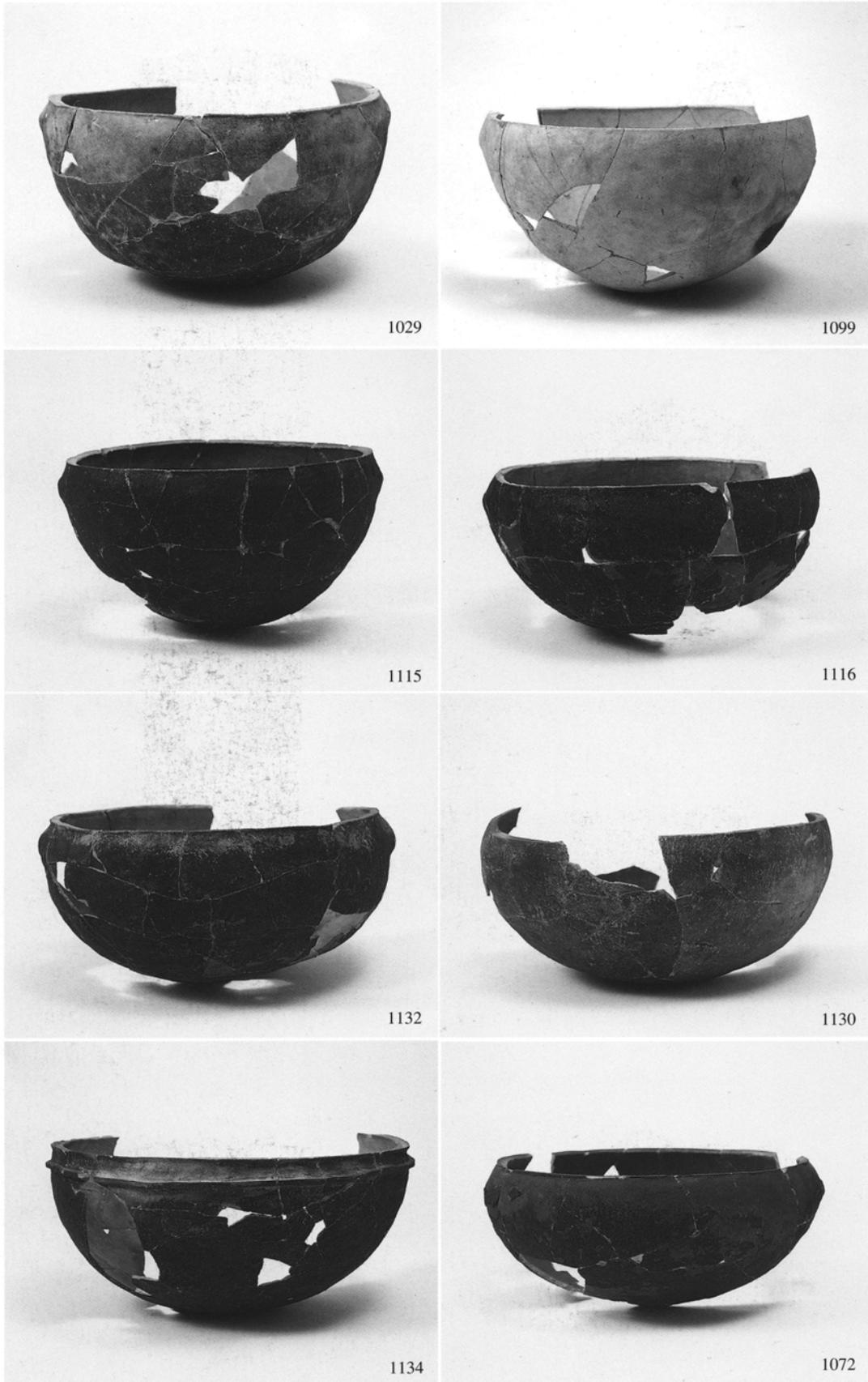
1183 ~ 1187 : 97A区 SE01 出土品 1232 · 1233 : 96E区 SE01 出土品

97A区 SE02 出土品



1204 ~ 1231 : 97A区 SE02 出土品

96C区 SD01 · 97B区 SD01 · 96D区 SD06 出土品

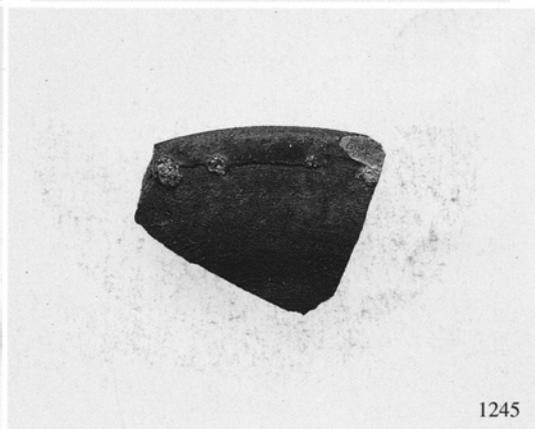
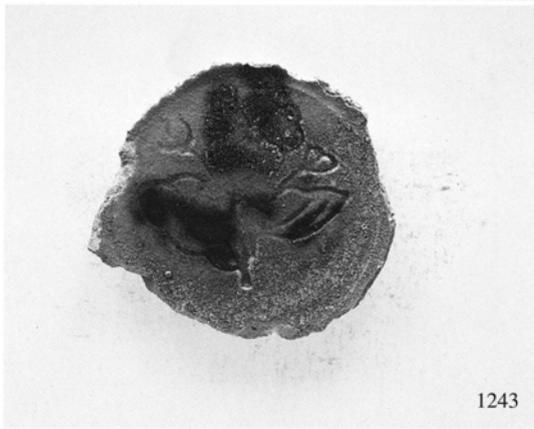
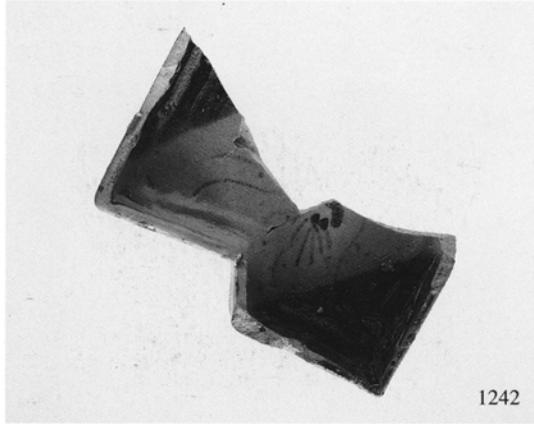


1029 : 96C区 SD01 出土品

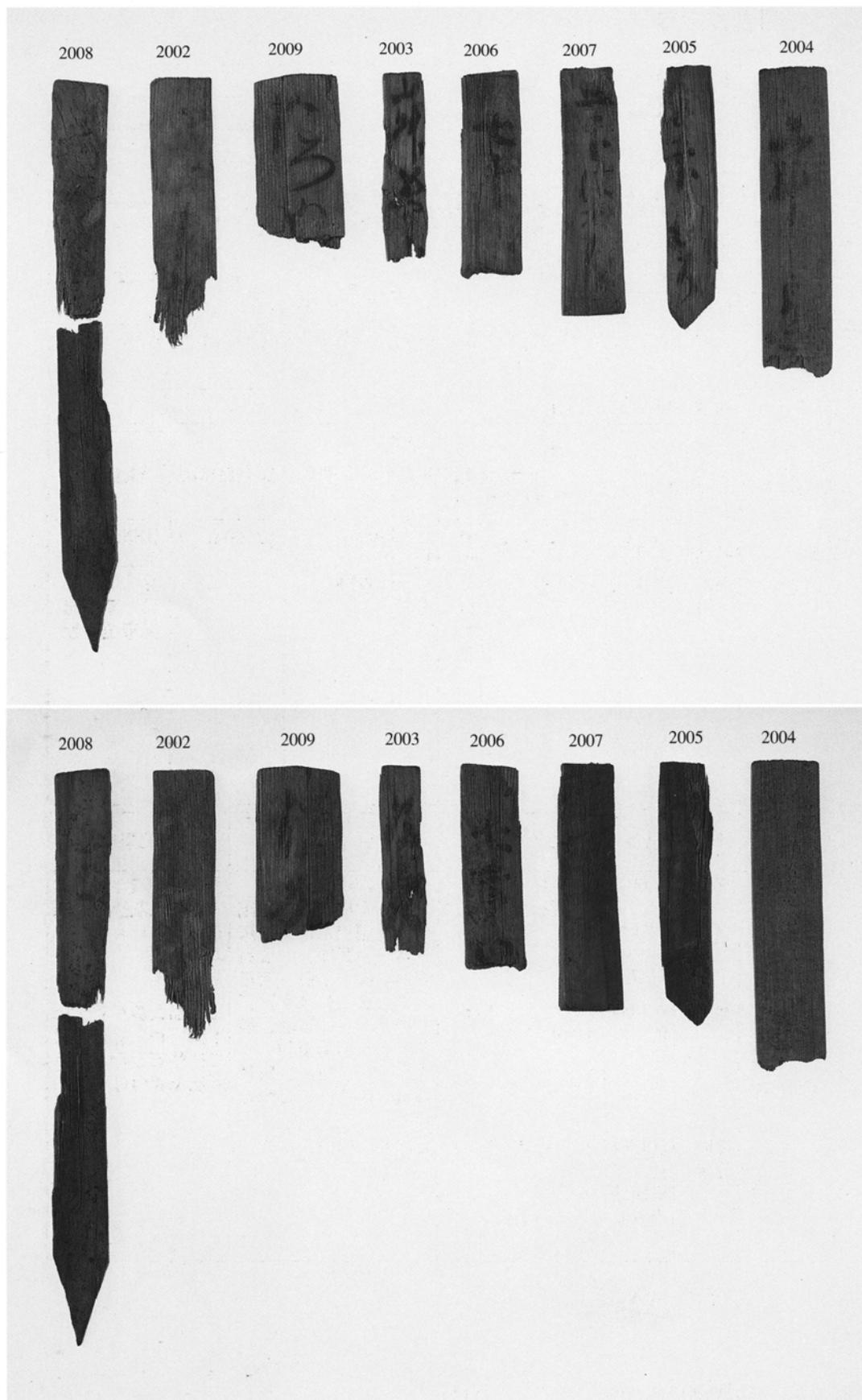
1099 ~ 1134 : 97B区 SD01 出土品

1072 : 96D区 SD06 出土品

木簡 (1)・その他



1242：96A区SD24上層出土織部鉢（連房式登窯第1小期） 1243：97B区SD01第3層出土黄瀬戸鉢（大窯第4段階） 1244：96C区SD05第2層出土志野鉄絵鉢（大窯第4段階） 1245：96E区SD13第2層出土緑釉皿（志戸呂窯？） 2001：97B区SD07第3層出土 護摩札



2002 ~ 2008 : 97B 区 SD01 出土 2009 : 96E 区 SD02 出土

報告書抄録

ふりがな	おおわきじょういせき
書名	大脇城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第86集
編集者名	北村和宏・鬼頭剛・堀木真美子・吉野道彦・尾崎和美・森勇一・新山雅広
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL0567-67-4161
発行年月日	西暦 1999年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 …	東経 …	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおわきじょう 大脇城	あいちけん とよあけし 愛知県豊明市 さかえちやう かした・ 栄町 梶田・ もとやしき 元屋敷		12068	35 度 2 分 13 秒	137 度 0 分 19 秒	1996.7 ～ 1997.8	10,000㎡	国道23号線 栄交差点立 体化事業・ 第二東海自 動車道建設

所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大脇城	城館	戦国 (15世 紀後半 ～16世 紀代)	溝・井戸・土抗・ 掘立柱建物	土器・陶磁器(瀬戸・ 美濃、常滑、備前、志 戸呂、肥前系、中国陶 磁器)、瓦類、木製品 漆器各種、木簡(天正 四年の護摩札ほか)、 石製品・金属製品、鍛 冶・鑄造関連遺物	大脇城跡(地元では 「梶川五左衛門屋敷 」という)を発掘に より確認 知多郡大脇村が元禄 年間(17世紀末)ま でに移転したという 所伝を裏付ける
	集落	江戸時 代(17 世紀 代)	溝・井戸・土抗・ 掘立柱建物	弥生土器、石鏃、灰釉 陶器・山茶碗の釉着資 料	
	耕地・ 集落?	江戸時 代(18 世紀後 半～)	溝・井戸	陶磁器(瀬戸・美濃、 肥前系)	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第86集

大脇城遺跡

1999年8月31日

編集発行 財団法人
愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社 名古屋大気堂